TCH 266-32
East Asian Library
JP
915
J2F85
v.8
No.10
(1931)

UNIVERSITY OF CALIFORNIA-LOS ANGELES
L 010 452 673 6

9-1259

富士

大正五年九月十五日第三種郵便物認可　昭和十年九月三日印刷納本
昭和十年十月一日發行（毎月一回一日發行）　富士　第八卷　第十號

十月號

戯曲　不如歸（ほととぎす）

眞山青果

保險の開祖

總資産　二億七千三百餘萬圓

契約高　十三億三千餘萬圓

昨年度新契約高　二億四千三百餘萬圓

創業以來支拂保險金　一億三千四百餘萬圓

（昭和十年七月末日現在）

明治生命

本社・東京・丸ノ内

本[illegible]

富士十月號目次

（本誌に掲載せるものは無斷にて轉載し、又は單行本に上梓し或は脚色・上演・映畫撮影等の複製行爲をなすことを禁ず。）

◇秋深し（表紙）……木島櫻谷筆
◇犬娘（折込口繪）
◇秋の映畫誌上封切（折込裏）……志村立美筆
◇不如歸（原色版）
◇笑顏禮讃（寫眞版）……山川秀峰筆

名士名流無遠慮問答 グラビヤ口繪……一
◇映畫女優 入江たか子さん
◇小說家 吉川英治氏
◇鶴見總持寺貫主 伊藤道海師
◇西洋舞踊家 宮操子さん、江口隆哉氏
◇聲樂家 關谷敏子孃
◇挿畫家 齋藤五百枝氏
◇レビュ１の花形 水ノ江瀧子孃
◇慶應大學水泳部 小池禮三君

波瀾萬丈、雨か風か？
虛無僧系圖（齋藤五百枝畫）……吉川英治……四二六

火花を散らす戀愛合戰
七色の太陽（富田千秋畫）……中村武羅夫……一四三

戀愛、ゴルフ道中双六！
晴曇（富永謙太郎畫）……久米正雄……[illegible]

輝く名作、昭和の戲曲定本
戲曲 不如歸（ほととぎす）……眞山青果……九〇

評判漫畫
▽傑作漫畫集……一六四
▽荒馬凄衞門……田河水泡……二五八
▽新家庭エピソード……前川千帆……二一四
▽浮世川柳漫畫……谷脇素文……三四八

アイヌ美人の情炎哀史
メノコの唄（布施長春畫）……佐山英太郎……一一〇

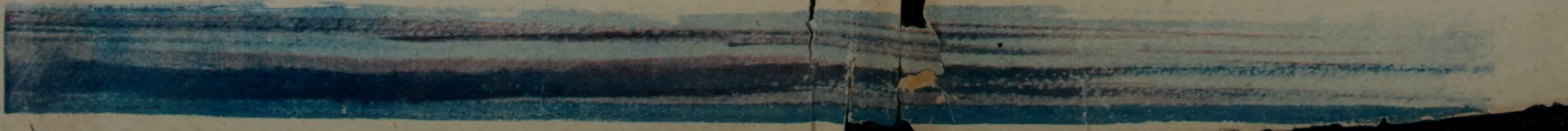
七轉八起石炭屋の小僧から此の成功
望鄉目黑御殿（伊藤幾久造畫）……竹田敏彥……二四〇

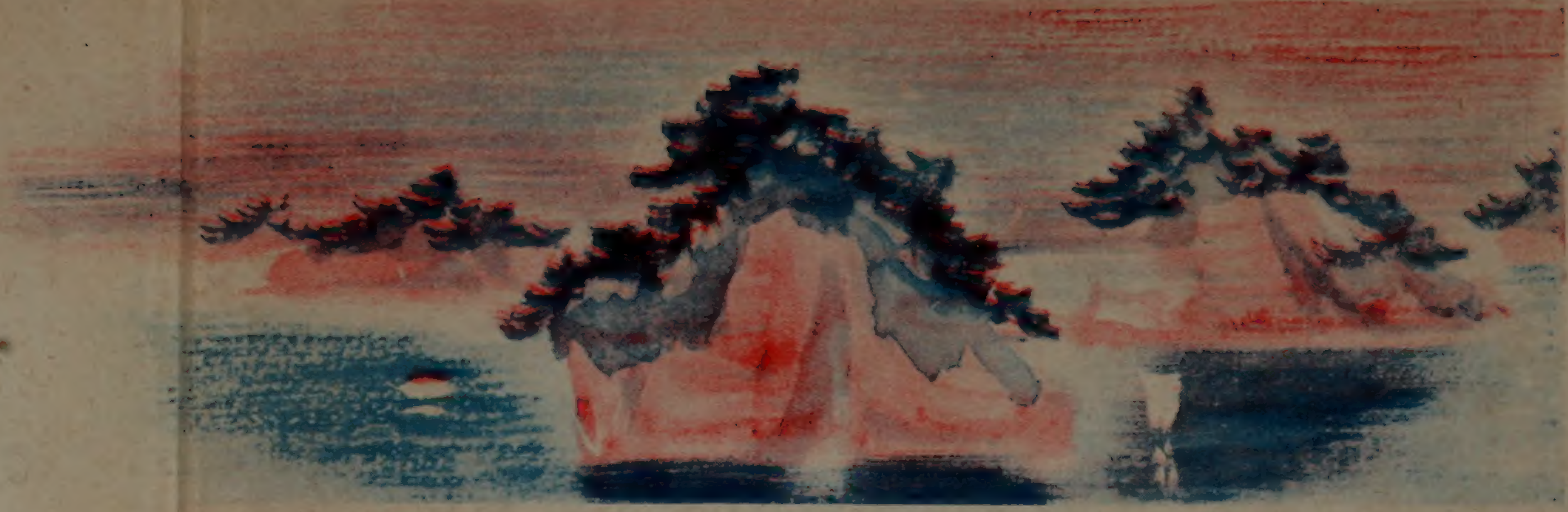
勇俠無類の快男兒！
鶉權兵衞（井川洗厓畫）……西尾麟慶……一七〇

◎湯街の秋（詩）……西條八十……四六
◎秋の夜長（詩）……佐藤惣之助……一一八
◎實りの秋（扉）……時雨音羽……一一七

讀者慰安 九誌聯合大懸賞募集……八六

敵討極樂手形（小田とみや畫）……三上於菟吉……七〇
奇人群像（田中比左良畫）……佐々木邦……一九二
鐵火の久助（鴨下晁湖畫）……村上浪六……四一〇





犬娘（志村立美画）……林不忘……二一八

碁將棋讀本
◎圍碁上達の急所……七段 瀬越憲作……二三六
◇圍碁のことなら何でも來い……二三六
◎上達必勝將棋の急所……八段 金子金五郎……二九八
◇將棋のことなら何でも來い……二九八

東京メヅラシある記……二

落語講談
遺品の時計……桃川若燕……四〇〇
有馬のふじ……春風亭柳枝……三一八
馬術の妙……神田愛山……四四一
三の字問答（漫才）……ラッキー・セブン……三八〇

坊樣羅五郎（齋藤五百枝畫）……白井喬二……三二六
恐怖の口笛（嶺田弘畫）……海野十三……三五二
火星戰隊（村上松次郎畫）……平田晋策……二七〇

坂東好太郎 飯塚敏子 打明け話の會……三八四

◇講談社ニュース……四七〇
◇演藝面白帖……四二四
◇傑作笑話選……三九六
◇家庭物知り帖……三九八
◇讀者倶樂部……四七二
◇雜誌禮讃……帝國圖書館長 松本喜一……四八

映画とレビュー裏表面白百話……四四七
☆寶塚結ぶ緣づる物語……岩田英文
☆映畫レビュー話の種……鶴見退助
☆レビュー豪華物語……平尾郁次
☆馴れっ子の男役……水ノ江瀧子
☆「腹藝」のこと……岡讓二
☆松竹東寶レビュー合戰……中代富士男
☆映畫人の借金戰術……早船萬造
☆ガルボの晩餐 ☆中田弘二の負け
☆映畫繪讀本☆飛んだお牛長右衞門☆松竹少女歌劇スターに斯んな綽名がある☆スターの貰った珍レター☆名優女を釣る☆せりふに就て☆恐ろしい久松☆閉口したジンヂヤー・ロヂヤース

漫画大笑館……一九
役者の五郎藏（小田とみや画）……子母澤寛……二八
大富豪、謎の怪死事件
春潮（小林秀恒畫）……佐藤紅綠……三〇二
邦坊藝道修業……和田邦坊……二六二

本誌臨時增刊豫告……折込

思ひ當りませんか
神經衰弱の最大原因!!
性的缺陷者は一日も早く自覺せよ

現代醫學界の劃期的斬新なる物理療法の代表的發明品と云はれて海外にまでも名聲日に高き**專賣特許『ホリツク眞空水治器』**は、形は小さく輕便であるが効力は非常に大きい、患部へ直接に、自分で輕便安全に秘密に使用すると、物理的眞空引力により局部へ血液を滿潮的に流集せしめ、血肉細胞の活躍により理學的**エントチュンデュング**作用を發生して發育を促がし、同時に各種の原因に依る生殖器障害及び精力減退を回復して、生殖器の短小を健全發育せしめ、生殖腺**ホルモン**の內分泌を旺盛にして實驗界に好評湧くが如し、本器は五十餘名の醫學博士が實驗證明並に推奬せられ日・獨・佛の專賣特許を受けし權威あるものです、一生涯に青年時代は再び來らず直ぐ實行せられよ。

(**ニセ**物あり必ず**ホリツク**の商標あるものをお求めあれ)

東京新療法研究所外景

リン病にはゴルセン

尿道へ挿し込めば淋菌を殺滅する。

實用新案『治淋バンド』無代添付

尿道挿入坐藥 **ゴルセン** 半月分金三圓 一ケ月分金五圓五十錢

送料 內地十五錢 植民地四十二錢

包莖は切らずに成形する

包莖は從來手術して切取るより外に治療の仕方がなかつたが、**特許ホリツク包莖安全器**で無血無痛安全に整形となる、包莖は淋病梅毒に感染し易く不潔で大害あれば速かに本器で治療せられよ。

專賣特許、登錄商標

◇**ホリツク眞空水治器** 金五圓

送料內地二十五錢、臺、樺、鮮、滿五十五錢

代金引換十五錢增し

◇**ホリツク包莖安全器** 金四圓

送料內地十五錢、臺、樺、鮮、滿、四十二錢

無代進呈 圖入說明書(性の新知識)

實驗例告白文付ハガキで申込次第個人名義で秘密に送る

東京市芝區神谷町西の十八
東京 **新療法研究所**
電話芝 三一三一 三一三二
振替東京七七三九

皆さんは子供達への贈物に何をお選びになりますか？

鳩山春子先生

前文部大臣一郎氏母堂
共立女子專門學校長　鳩山　春子

私の孫達への贈り物の中で最も喜ばれるものは『幼年倶樂部』です。知識慾の旺んな、そして物に感じ易い年頃の子供の心に、ピッタリ適つた多方面の材料をそれ〴〵専門大家の手によつて、文章に、繪畫に、面白く巧に描き出されてありますので、幼少の子供までが、假名によつて、ひとりでずん〳〵讀んでゆきます。そしてその間に、知らず識らず知識を廣め、道義心を養ひ、又麗しい感情も培はれてゆくのです。――かやうにして幼少の純眞な腦裡に、最初に刻まれた印象がその一生を支配する力強いものとなるのであるといふことを思ひますと、一册の幼年倶樂部が非常に貴い價値を持つてゐる

ことがわかりました……………。

●幼年俱樂部は、理想的子供雜誌として諸名家、諸先生方から推奬されてゐる模範的子供雜誌です。毎月これを讀むと讀まぬとては學校の成績は勿論、お子樣の將來にも大變な違ひが出來ます。

●編輯におきましても、學校教育と連絡を保ち苦心に苦心を重ねて月々よりよきものを作りたいと、日夜努力してをります。毎月添付する附録の如きも、子供の爲になるもの、面白いもの、參考になるものと嚴選に嚴選を重ねて、全國の小學校の先生方からも常に賞讃を頂いてをります。

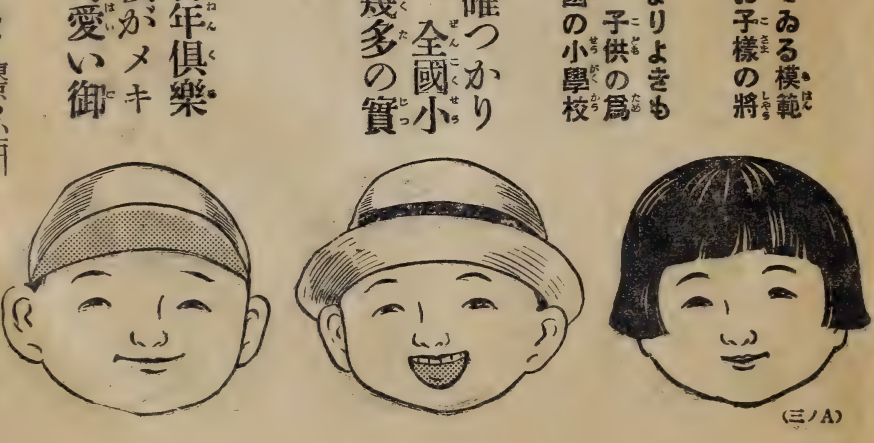
お陰樣で級長になつた、優等生になつた、氣持が大變確つかりしてきた、といふ父兄方の感謝の手紙が續々參ります。全國小學校の先生方からも教育効果の絶大なるを證明される幾多の實例を寄せられてをります。

特に新學期のこの際——

學科に興味を持たせて導く樣工夫してあるこの幼年俱樂部十月號からゼヒ〳〵お與へ下さい。學校の成績がメキメキ上ります。良習慣が目に見えてつきます。可愛い御子弟方の將來のため切にお奬めいたします。

●『幼年俱樂部』十月特大號は三つの大附録つき特價 五十錢

東京・小石川
大日本雄辯會講談社發行



(三ノA)

益々大評判！一家一冊、和樂の源泉、福の神！！

落語全集

◎定價一冊一圓五十錢（送料各十六錢）

ご覽のとほりの新舊落語の粹、評判の大名篇滿載！家庭の團欒に旅の徒然に、絶好無二の快讀物と非常な人氣です。一人で讀んで笑ふには惜しい。家中に讀んで聞かせたい。笑の中に人情の機微、奇智頓才の妙諦、社交の秘訣を知る大寶典！

（上巻）

天災、錦の袈裟、花見酒、正札つき、長襦袢、洒落小町、無筆の女房

寢床、碁どろ、藪醫者、藥罐なめ、きやいのう、松竹梅、嘘つき彌次郎

厩火事、小言幸兵衛、お產目出度、ポン引、たらちね、黑木屋、粗忽の使者

蒟蒻問答、のめる、ホームラン、しわいや、穴どろ、法華長屋、五月幟

戀愛探し、非常線、萬金丹、けんつく床、一目上り、兵隊さん（その他）

（中巻）

堀の内、源平盛衰記、女優志願、夢の瀬川、初雪、夏どろ、鍬潟

締込み、田能久、初夢、藪入り、無い物ねだり、野晒し、蚤の活惚

七度狐、道具屋、うどんや、かつぎや、おかめ團子、狂歌の餅、成田小僧

三千兩、二十四孝、長屋の客、火車の引越、士族の商法、もと犬、佐々木政談

親賣り、大山詣で、百年目、ふられ與三、緣切榎、石返し（その他）

（下巻）

強情くらべ、身投屋、化物屋敷、一等當籤、東男、伊勢詣、三人無筆

死神、長屋の花見、猫久、大工調べ、富八、轉宅、羽團扇

將棋の殿樣、狸の釜、負惜み、目付役、代り目、出世豆腐、花見の仇討

金の大黑、九官鳥、嘘つき村、芝濱、心眼、清正公酒屋、赤にしや

三方一兩損、粗忽の釘、松山鏡、お猿旦那、女房孝行、唐茄子屋（その他）

評判落語全集

◎定價一冊一圓二十錢（送料各十四錢）

落語全集以外の評判名作悉く大網羅！一讀笑の大爆發

（上巻）

松引き、二番煎じ、サービス時代、妻の酒、目黒のさんま、お血脈、王子の狐

反對車、不動坊火焔、地見屋、文七元結、敵討屋、蜀山人、啞の釣

牛分垢、萬病圓、犬の眼、ライオン、釜どろ、初音の鼓、鼻ねぢ

黄金、素人芝居、茗荷屋、紙屑屋、女天下、滿點女房（その他）

（中巻）

宿屋の仇討、お見立、眼鏡屋泥棒、三軒長屋、武助馬、代脈、早桶屋

だくだく、釣落し、巖流島、位牌屋、井戸の茶碗、京見物、つゞら泥

湯屋番、尖端料理、壺算用、笑茸、駱駝、夢金、小言念佛

移動喫茶店、花見小僧、御神酒德利、火事息子、女中奉公、百川（その他）

（下巻）

花色木綿、角力放送、經濟會議、茶金、助言、山崎屋、人依

三國誌、凱旋、盃の殿樣、トンカツ、顔の醫者、夜店、水中の黃金

開帳、蚊いくさ、支那そば、夢屋、猪退治、船德、熊の皮

宿屋の富、納豆屋、今戸燒、佛師屋盜人、太陽、變り種（その他）

◎全國の書店にあり　東京市小石川　大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

（御申越次第圖書目錄進呈）

不如歸

樂しい伊香保の新婚旅行から歸つた川島家新夫人浪子の初の里歸りだ。待ちかねた片岡將軍は、我が子ながらも見違へるやうな浪子の立派な花嫁姿に、嬉し涙を浮べながら、『夫婦仲はどうだ』、などとやさしく問へば、浪子は『お父樣、私幸福でございます』と答へるのだが、子煩惱の將軍は『然う抽象的ではいかん、もう少し具體的に聞かしてくれ、何か、その、武男さんは、優しくその、お前の肩ぐらゐ……叩くやうな時があるか』と疊みかけての問に、恥しや浪子はもう眞赤になつて、『お父樣、もう許して』應接間を逃れる會話こそは、父將軍の滿足、浪子の幸福ともに今絶頂にある。(圖は本號より連載の巨匠眞山先生脚色の名作『不如歸』の主人公浪子の里歸りの姿、詳細本文御覽下さい。

山川秀峰畫

笑顔禮讃

最近の松岡洋右氏

ぽつかりと第一線に現れた滿鐵新總裁松岡洋右先生の得意の笑だ。先生は、ジュネーブの花の舞臺で、天晴れ男をあげて以來、新時代の英雄兒として、到るところで、やんや〳〵の持て方だ。つい此間までは、丸腰になつて、政黨解消運動の眞只中に躍りこみ、あの氣骨と、あの氣構へと、あの燃え上るやうな熱情と、あの速射砲のやうな大辯舌とをもつて、縱横無碍の働き。一日も早く昭和維新を建設しようといふ大抱負を持つて、津々浦々を說いてまはつた。頭髮にも、口ひげにも、やゝ白いものは交つてゐるが、青年そこのけの元氣と大膽さとをもつて、『松岡は、いつでも、お國の御用とあれば、人柱となる用意が出來て居ります』と、大見得をきるあたりは、先生の身上であつた。

客ありて、『どうですか、今度の滿洲行は？』と、おたづねすると、『滿洲は、僕の魂の古巣だ、そこへ戻るのが、何で不快なものか、………まア、見て居らう』と、舌端早くも、抱負のひらめきを見せた。成る程、滿鐵には、緣故のふかい先生だ、且又、此處を生命線として、ジユネーブで戰つて來た先生だ、今度は、そこで思ふ存分腕を揮はうといふ矢先、この心から愉快さうな笑が、滿面に浮上るのも無理はあるまい。

報知新聞社社長
大日本雄辯會講談社社長

野間清治氏の六名著

體驗を語る

過去二十數年間に於ける血の出るやうな苦鬪の體驗を、赤裸々に披瀝したもの、幾度か死活の境地をさまよひ、而もよく難關を突破して今日を築き上げた血と涙の成功談で、人を使ふ人、人に使はるゝ人、又職を求むる人の是非熟讀すべき名著です。（定價二十錢　送料四錢）

處世の道

實力の涵養と、巧妙なる處世法は成功の二大要素です。然しそれを體得することは一朝一夕に爲し得るものではありません。本書は著者が永き體驗を基とし、生きた處世法の眞髓を懇切に述べたもので、不知不識の裡に處世の妙諦を體得することが出來ます。（定價二十錢送料四錢）

出世の礎

年を追うて益々深刻化して行く現代の社會狀態に於いて、最後の榮冠を得んには果してどうすればよいか。出世成功は果して難しいものか、その捷徑は何處にあるか、著者が自己の體驗より現下の活社會を凝視して、その大道を述べたものが本書です。（定價二十錢　送料四錢）

修養雜話

日常の些細な事柄も之をとつて修養の資となし、人物を修練することは最も緊要な事です。書中の話は決して固苦しい修養談や机上の空論でありません。皆誰もが日常體驗する事柄に就いて、極めて興味深くやさしく說いた萬人必讀の修養讀本。（定價二十錢　送料四錢）

榮えゆく道

事業經營、難局打開の大道、立志成功の眞髓はこれだと、著者の確固たる大信念を極めて平易に、且つ興味深い例を引いて述べ、個人生活の向上と、國家社會の融和發展に迄論及したもので、如何なる階級の人も又如何なる職にある人も是非味讀すべき名著。（定價五十錢送料八錢）

野間清治短話集

親子、夫婦、兄弟の仲、近所の交際、一村一町の和合發展は是非斯うありたいものだと、世間相、人間相の表裏、日常生活について、特に子供にもよく解るやうに澤山挿繪を入れ、極く平易に面白く述べたもの。親も子も、男も女も、是非讀むべき新家庭讀本。（定價二十錢送料四錢）

全國書店にあり ◇ 東京小石川 大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九〇三）

（御申越次第圖書目錄進呈）

人氣沸騰！到る處大評判!!

人生初年兵

佐々木邦氏著

斷然

見よ！青年新聞記者、身の上相談係の珍談奇談を通して描かれた現代世相の大解剖!!

才氣煥發、奇智縱橫、何事も尖端でなければ氣のすまぬ代表的青年が、やうやく就職戰線を苦鬪突破して新聞記者になり、しかも獨身の身をもつて美人揃ひの婦人家庭部に――夢にも思はなかつた身の上相談係として人生のスタートを切る！　一に就職試驗にはねられた好敵二大新聞に對する敵愾心と、一は麗人に對する純情熱烈なる戀愛に燃えての獅子奮迅！　惡友良友、變人

面白い

奇人の間に伍して大脱線！　この著者ならではと絶讃されるとつておきの好題材を縦横に描破し現代世相の表裏を遠慮なくあばいた、興味の絶頂をゆく大名作！　眞にこれ

笑の急所に百發百中！

ユーモア文學界の最高峰傑作！　或は朗らかな學生氣質、或は奇談頓才の特種大手柄、或は手に汗にぎる突發危難、或は胸も高鳴る戀愛競爭、或は天下無類のデパート美人引率旅行、或は抱腹絶倒の家庭悲喜劇、或は古今未曾有の珍妙奇妙等に、痛快場面次々展開！

輕妙洒脱の名文は社會の表裏、人情の機微を深刻に描いて警句の中に教訓あり、諷刺の中に眞理あり、大笑の中に人生哲學がある空前の傑作だ!!

本當か嘘か？！

笑は健康長壽
立身出世の素

太閤秀吉が頓智諷刺の天才曾呂利新左衛門を熱愛したことは有名な話だ。秀吉の頭の疲れと凝りを揉みほぐすのに、曾呂利の笑は唯一の良藥であつたのだ。ある醫學者は説をたてゝ『笑はオスフオニンといふ人體血液中の活動素を增加させるこれが增加するほど健康になる』と笑の德をつひに科學的に發見證明したさうである。だが併し、現代的明朗の健康美は男女によらず、高尚上品なユーモアによる笑からでなければならぬは當然だ。傑作『人生初年兵』の人氣はこゝに生まる。**秀吉も笑ひながら**曾呂利には色々とよいことを知らされた。笑つて聞きながら後でもう一度それを思ひ出して眞面目に考へたといふが、恰度『人生初年兵』も笑つて讀みながら、笑ひ話でないことにびつくりさせられる素晴しい小説だ。笑こそ立志出世のもと也を知る名作だ。

笑ふにも泣くにも顏は一つといひ、笑は人生の花といふ。周圍と圓滿に暮らしたり、人に賞められ好かれながら成功したい人はぜひお讀み下さい

定價一圓五十錢
（送料十四錢）

東京市小石川音羽（振替東京三九三〇）
大日本雄辯會講談社發行

ヒットラー傳

定價一圓五十錢（送料十六錢）

この書の人氣と評判は、宛も獨逸のヒットラー運動の如く瞬く間に全國に燃え廣がつた!!

氣狂だ命知らずだと嘲られながら血みどろの苦鬪を續けて遂に歐洲のまん中に、彗星の如く彼が出現した時、全世界は驚異、疑惑、恐怖の眼を瞠つた。爆彈の如き彼を包む獨逸をめぐつて、今や全歐洲の風雲は微妙に動きつゝあるのだ。卽ち

小説以上の大波瀾

に富む彼の半生を知ることは、直ちに二十世紀の獨逸を知り、歐洲を知り、世界を知ることである。

この書一巻は、日本人の胸深く打込んで、そこに潜む英雄心を強く劇しく揺り動かさずにはおかない。我等の人生に、吾々はヒットラーの何を學び、何を攫むべきか? 興味津々、熱血たぎるこの大快著、ぜひ何人も來り讀め!

澤田謙氏

四大名著

ムッソリニ傳

浮浪兒、歐洲大戰の一兵士から蹶起して苦鬪奮迅、遂に伊國首相となつた彼の波瀾の半生

定價一圓二十錢 送料 十二錢

エヂソン傳

低能兒と笑はれた彼が刻苦勉學、遂に歴史始つて以來の大發明王となる迄の血と汗の奮鬪

定價一圓三十錢 送料 十二錢

世界十傑傳

二十世紀の生んだ世界的十八英傑を拉し來つて、その活躍眞面目を活寫せる痛快の名讀物

定價一圓三十錢 送料 十二錢

東京市小石川區音羽町三丁目（振替東京三九三〇）

大日本雄辯會講談社發行

（御申越次第圖書目錄進呈）

名士名流無遠慮問答（めいしめいりうぶゑんりよもんだふ）

（○印は問、×印は答）

映畫女優　入江たか子女史

○口を利かぬので有名ですが、御不便はありませんか？
×別に……。
○入江プロの所員は何人ですか？
×四十人位です。
○一番きらひなものは何ですか？
×毛蟲。
○一番樂しい時間はどんな時間ですか？
×仕事をした後の休息時です。
○誰が一番美人だと思ひますか。
×芦田均氏夫人すみ子樣など美しいお方と存じます。
○日本一の月給とりと聞きますが、月いくらですか？
×申し上げられません。
○何時まで映畫人生活をなさいますか？
×さあ……。
○特別の健康法をなさいますか。
×別にやつては居りません。
○好きな外國俳優は……。
×男でコンラット・ネーゲル、レスリー・ハアワード、女ではトウルーテン・フオン・モロー、ブリギッテ・ヘルムです。
○さて御年は？
×……（無言）
○結婚前と、後の御感想は……。
×……（無言）
口利かぬ麗人は飽くまで言葉尠なでした。

聲樂家　關屋敏子孃

○隨分肥つて居られますが、體重は？

×この位外國へ行けば何でもないわ、十五貫よ、私は着肥りと言つて着物を着ると肥つて見える性なんですの……。

○何故結婚なさらないんです。

×忙しくつて結婚の事など考へる暇ありませんもの、今年は十年振りでやつと暑中休暇をとつた位です。

○御年は？

×いつも十二三歳の氣持で居ります。

○戀愛をした事はありませんか？

×學生の頃は試驗ぜめで日を送り、その後はずーつと忙しくて……。そんな暇があるなら結婚の事も考へますわ……。

○音樂界への希望は……。

×皆さんが、もつと團結して力強く外國に當りたいと思ひます。それがよい人を作る意味でもあり勉強の便にもなる事です。それから外國人が見ても恥しくないオペラをやることです。

○ステーヂへ出る前の緣起話と言つたものはありませんか？

×何時もお祈をします。心を淸くして、淸いものを聞いて貰ふと言ふ氣持で……。

○一年中で一番好きな氣候は？

×さ、夏でせうか、日光に惠まれますから……。何時も忙しくて日光に親しむ間がありません。だから私が一番戀しいものは日光なんですの……。

小説家　吉川英治氏

○餘り大きくありませんが、身長、體重は。
×五尺一寸、十二貫きつかり。
○素晴らしい家ですが、家賃はいくらですか。
×それは答へる必要ない。家賃の高に依つて人間の價値は判斷出來ぬから……。
○道樂は。
×若い時は女が好きだつた。
○では現在は……。
×さ、今もやつぱり好きだね、ハツハツ……。
○有名人だけに、女の人に持てませうね？
×まあね、僕は弱い者に同情がありますからふふ……。持てますよ。
○作家生活に入るまで、どの位商賣替をなすつたか……。
×十以上ですね、カンカン蟲、蒔繪工、ブローカー、圖案工等々と來て最後が新聞記者でした。カンカン蟲の時奈落へ墜落して危ふく一命をとり止めました。今生きてゐるのはむしろ不思議な位です。新聞記者の時代と私は二回死にそこねて居ます。
○名前を騙られた話はありませんか？
×ありますね、中でも面白かつたのは、臺灣のある人から、澤山果物を送つて來ました。感謝狀つきで……、どうしたのかと調べて見たら、吉川英治と名乘つて、誰かゞ講演をして歩いたのださうです。それが素晴らしく評判がよかつたとか……。こんな話はいゝが、カフエーなどで騙られるのは嬉しくないですね。

挿畫家　齋藤五百枝氏

〇愛酒家として有名ですが、量はどの位ですか。

×晩酌は二合位だが、呑み出すと二升でも三升でもやる。昔は『くだ卷蟲』今は『ごて齋』の異名を頂いて居る。

〇酒の上の失敗はありませんか。

×大分前の話だが、引越した日に外出して酒を呑み、とうとう家が分らなくなつて『今日この邊に越して來た家は有りませんか』と聞いて廻つた事もあります。

〇初戀の思出は。

×二十三歳。相手は今友人の細君になつてゐる。以來僕が描く女の顔は、みんなそれに似てしまふ。何時かその友人が『君は僕の女房をモデルにしたんだらう』と怒つた事がある。

〇お仕事の上での間違ひ話でもありませんか。

×丹下左膳の新聞さしゑを書いて居る時、最初に刀の鞘を右にさゝせた。處が翌日一杯機嫌で普通に左へ描いてしまつた。と早速ある酒場の親爺が『齋藤五百枝如何に器用なりとも戰爭中右の鞘は左に廻せまい』と手紙でなぢつて來た。僕も負けずに『松井源水は手を縛られて尚六尺の大刀を拔く。左膳ともある者鞘の藝當位朝飯前だ。君の家は酒屋で、酒を右手で呑んでも左利きとすまして居るではないか』と言つてやつた。はッは……。

（寫眞は丹下左膳を眞似る齋藤氏）

シットり お肌に
沁みついて
あるか あらぬ の
白粉氣
而も見た目の
美は 品位は
花瓣の地肌
そのまゝです
アイデアル水白粉
化粧下なしでよくつき
汗に崩れず 肌を傷めぬ
IDEAL
水白粉の初秋が來た！ お肌にヒタヽ
眞珠の觸れ心地！ 白・肌・濃肌各三十錢
東京 高橋東洋堂

鶴見總持寺貫主　伊藤道海師

○何等の罪障あつて佛門に入られましたか。
×亡き父の冥福を祈る爲、一切衆生の迷を解く爲ぢや。その時に母が一首の歌をくれた。

たらちねのなでし黒髪剃りがひに
けふより開け人の迷を

○今日迄、幾百の經文を習はれました。
×八萬四千の法文、五千餘巻の經文、悉く己のものぢや。そもく坊主に幾つお經を習つたかと聞くのは野暮の骨頂、古人も萬巻の書を讀んで、しかも我一身を修むる能はずと嘆じたといふ、經文の數よりも、如何によく讀んだかと聞かねば可かん。
○酒を飲まれますか、肉類を食べますが。
×酒も煙草も飲む、肉類は嫌ひぢやから食はん。飲みたければ酒を飲むも宜し、好きなら肉を食ふも宜しい。
○女の子に惚れたことがありますか。
×あるとも〱。綺麗な娘を見れば、わしとて木石ぢやござらぬ、惚れるに何の不思議があるものか。唯迷はぬだけぢや。
○今まで一番嬉しかつたこと、悲しかつたこと。
×悲喜なし。わしや悲喜を超越しとる。
○一山の貫主としての收入は。
○總理大臣以上ぢやよ。三度のメシの心配はござらぬ、無一物にして無盡藏。
○夏涼しく冬暖く暮す法はありませんか。
×寒の時は闍梨を寒殺せよ、熱の時は闍梨を熱殺せよ。仕事に熱中することぢや。寒熱を忘れて仕事三昧。

松竹少女歌劇　水ノ江瀧子孃

○結婚の相手にはどんな男性を選びますか？

×男らしい男で生活の安定を得た方、年は五ッから十位違つてほしい……。

○何時何歳位で結婚しますか？

×さ、困つたわ、いゝ人が見付かれば何時でも……。今は好きな人ありません。

○世間に對して何か言ひ分は有りませんか？

×私達は眞面目な職業婦人です。レビュー・ガールと言へば、如何にも、だらしない者のやうに思はれて居るのが一番癪に觸ります。

○娘役をやりたいと思ひませんか？

×舞臺で女になりたいんです。でもやらしてくれないんですもの……。

○男裝の麗人、時に女に戀は感じませんか。

×失禮しちやふわ、だつて私女なんですもの。

○ファンからの手紙は毎日何通位來ますか。

×日に平均八十通、讀むのが一苦勞です、返事は出しません、みんな出すわけに行きませんし、一人二人に出せば不公平になりますから。

○月給はいくら貰ひますか？

×それは申しません、御想像に任せます。

○水ノ江會の會員はどの位ありますか？

×全國で一萬五千人です。

○うどんが好きと聞きますが、毎日喰べますか？

×え、毎日よ、でも此の頃脚氣でパンだけなんです。つまんないわ。

西洋舞踊家　宮　操子、江口隆哉氏

○日本の男性について何か言ひ分は。
宮—世界で一番良いと思ひますが、少し威張る傾向があるのはどうかと思ひます。
○江口さんもやつぱりさうですか？
宮—（江口さんと顔見合せて）あなた何て御答へしたらいゝでせう、一寸困りますわね。
○足の皮は隨分厚いでせうね？
宮—どの位厚いか分りませんが、兎に角何百枚もむけました。固くなつてゐます。
○踊り疲れて按摩の御用は有りませんか。
宮—踊らなければ要ります。踊りそのものが按摩になります。肩の凝る人は踊りをやるべしです。
○お金は儲かりますか？　今度素晴らしい稽古場を新築なさるさうですね。
江口—儲かるどころですか！　お金を出して與れる人があつたものですから……。
○では借金は……。
江口—相當あります。
○今一萬圓貰つたらどうします。
江口—まづ借金を返しますね。
○舞踊界へ何か一言。
江口—眞似を避けて、創作をもつとやるべきです。
○あなた方の誇り得る點は何ですか？
×別にありませんが、强ひて申せば、踊りを他の人のに眞似ないつて言ふ事位です。

私が安眠出來るのは是で丈夫になつてからです

浪曲家　吉田奈良千代

私達の樣な人氣商賣ですと一度の出演が人氣に關係する樣な場合が御座いますので人知れず苦勞致します。それだけに絶えず健康には注意致して居りますが、生活の不規則や無理から、良く旅行先などで健康を害して出演に支障を來たして困る事がありますので、その都度色々な藥や滋養劑を試み手當も致しますが皆一時的のものばかりで、眞から身體の丈夫になる樣なものが見當らないので困つて居りました。

それがお知合の方から奨められて、養命酒を飮み始めてから、胃腸の工合が大變良くなり、何を喰べても美味しく、頭が重いの痛むのと云ふ事がなくなり、夜分なども氣持よく安眠出來る樣になり、旅行などで無理をしたり、夜更しなど致しましてもそれ程疲れぬ樣になりました。

それ以來私は引續き養命酒を愛飮して居りますが、身體が丈夫になつた爲めか、根氣が強くなつて酵量が增し、どんなに疲れた時でも寢る前飮んで床に就くとグッスリ安眠出來、翌朝頭や身體がサッパリして迚も氣持良いのが何よりも嬉しい。尚養命酒御試飮なさるのでしたら東京市澁谷區上通り四丁目五〇番地養命酒本舗出張所へハガキで御申込みになると誰人へも見本小瓶を無代で送つて下さいます。

慶應大學水泳部　小池禮三君

○幾歳の時から泳ぎました。
×六歳。海で覺えました。
○許嫁、又は戀人はありませんか。
×そんなものはない。
○妻として理想の女性はどんな風の女ですか。
×考へませんね、そんなことは困ります。強ひて言へば漠然と、洋風の女より日本風の女。
○あなたが勝つた時一番喜んでくれるのは誰でせう。
×僕を一番理解してゐる人。サア兄かな……エヽ、母はもう亡くなりました。
○ファンなどに捉つて困るとか、猛烈な手紙が來るといつた話はありませんか。
×ありませんね、サインを頼まれても逃げてきますから。
○學科の成績を聞かして下さい。たしか豫科三年政治科でしたね。
×政治科です。サア點數は……困つたね。良いとも言へんし、マア落第しない程度。
○オリンピックに出場して、勝利の確信がありますか。
×キット勝つとは言明できないでせう。しかし、負けようとは思ひません。
○趣味、娯樂は。
×碁、但しザルです。映畫、音樂。
○きらひなものは。
×蜘蛛ですね。アイツを見ると、身ぶるひが出る。

東京メヅラシある記

サトウ・ハチロー記

小さい泉岳寺

二十五年前に、思ひ立つて、泉岳寺に通ひつめて、ノミ一つで、コツコツときざみあげて、とうとうこしらへてしまつたのが、この箱庭泉岳寺だ、大石父子の墓をはじめ四十七士の墓をすツかりきざんだのさへ、えらい努力なのに（ハカバカしく行かなかつたでせうなんて、シヤレは、この場合は失禮にあたる。）首洗ひの池と天野屋利兵衞の墓までも『男でござる。』と力んで、つくりあげてしまつた。十分の一にちゞまつてゐるだけで、ほんものとちつとも違はない、しかも、これをこしらへたのは七十三のお爺さんだ。

『なアに、義士が好きなんでね。』

と、けんそんして語つたが、えらい爺さんだ、近所では義士爺さんで通つてゐる。そこで僕も浪花節で、

フシ「東京名物又ひとつ、ところは早稲田の南町、その名は古田巳之助と、いうて、當年七十三、ノミを片手にコツコツと、きざみきざんで、二十と五年、四十七士のその墓を、こゝにめでたァくウ、きざみましたアアアア——

と、つたへておく。（寫眞は古田氏と小泉岳寺）

オシメ會社

〜およそ會社は數々あれど、こんな會社は他にはないよ、年中乾いた消毒オシメ、毎日配達いたしまする。

八木節で唄つてみるとかういふことになる、外國にあるかどうか知らないが、めづらしい會社だ。毎日三十枚のオシメを、とどけてよごれたのを、持つてかへるといふんだ。職業などを持つてゐるお母さん達には、この上もない、ありがたいものだらう。雨が降つたつて風が吹いたつて、子供はオシツコを我慢なんかしてゐない。オシメ會社は、カンサウ室が唯一の寶だ。カンサウ室には社長みづからがガンバツてござる、菊池寛先生も贊助員なら山田わか先生もさうだ。

『冬になると、ことに、ありがたがられます。』

と、社長の金子晴吉氏は言ふ。

それかあらぬか、電話の番號が三九四五。こいつをサンキウシツコとよませてゐる。オシツコに感謝。こじつけたにしても一寸うまい。

（寫眞上は社長自らオシメを吊してゐるところ、下は配達夫）

人形病院

『こゝへくる方は一番外傷を受けた方が多いやうです。』

と院長である山田德兵衞先生がおツしやる。德兵衞先生は、大日本人形研究會の會長だ。入院證があつて、何月何日頃退院の見込などと、ちやんと書いて下さる。帝國小學校で始めたのだが、だんだんに大きくなつて遂に山田さんが引受けるやうになつたのださうだ。

『おなかを惡くしたなんて方はありません。』

と院長はいふ。それはさうだらう、人形に食ひすぎや二日醉はないから。

『人間はせいぜい百歳位までですが、人形は何百歳でも生きます。』

と、おツしやる。東京中の一流の人形屋さんが、みんなお醫者様なのだから、安心して入院させられる。アメリカ人形でもフランス人形でも、エチオピア人形でもエスキモー人形でもどなたでもござれだ。人種の如何、年齡の如何を問はず、一旦入院したら必ず直すと言ふ。

『人間は首がなくなると死んでしまひますが、この病院では首のすげかへも自由です。』あゝ、首の心配あるサラリーマンよ、人形になりたくはござらぬか。（寫眞は診察中の院長）

セト物會社

セト物、セト物、セト物、又セト物、さうしてセト物……セト物のカン兵式だ。セト物のお祭りだ。品數は二千萬個（こいつは日本の人口の五分の一强ですぞ、小生算術も割合に出來るでせう。）貨車に二百臺、と聞いて、尻もちをついては困る。セト物はこはれやすい。

もとは東京驛の前にあつたのだが、この頃白木屋の前に移轉した。セト物軍の進出といふ形だ。

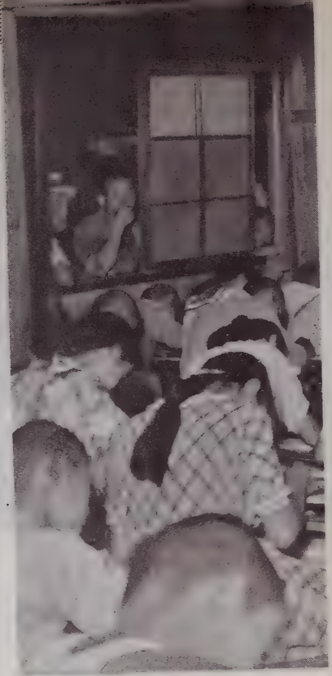
『五厘から二十圓位までのものを、ならべてあるのです。』

と、セト物賣合名會社（會社ですぞ。）の社員はおツしやる。感心しながら、ずらりとながめる。セト物は行儀がいゝ、僕みたいに煙草なんてふかしてゐない（腹が立つ時、この中へ大岩を投げこんだら、さぞなんてことを、こゝへ來て思つてはいけない）。

昭和の寺小屋

袖なし一枚のもゐれば、アッパッパもゐる。おふくろの着物を仕立直した改良服もゐれば、つめ襟にサルマタといふ、いでたちのもゐる――これが生徒だ。

先生は、イガ栗頭で、チヂミのシヤツにズボンだ。先生が、カンタンなら、生徒もカンタンだ。黒く



板にソロバンが、ぶらさがつてゐて、その前に、ハダカの電球が、ぶらんこをしてゐる。

『さアやりますぞ。』

と、シヤツ一つの先生がいふ、パチパチパチとソロバンが動き始める。これがいま東京で名高い王子の昭和の寺小屋だ。子供好きの先生の名を石井茂惠君と言つて三十二歳だ。月謝もとらず出席もとらず、自由にどしどしと教へてゐるのだ。(それぢや、どうして、暮すのだらうなんて、さういふつまらんソロバンをはじくものは、こゝへはたうていはいれない。)

桶の家

城東區は龜戸の木村彌助さんが、持つてゐる家だ。彌助と言へば、昔はすし屋にきまツてゐたが、この彌助さんは桶屋だ。お手のものの、桶の家をもくろんで、見事に、おツたてたのが、この家だ。窓なんか廻轉式になつてゐて、どうしてなか〳〵乙なものだ。下は洋間で二階は六疊の日本間になつてゐるといふから、こつたものだ。高さは十九尺五寸、直徑が十五尺ださうだ。おまけに値段がおどろくなかれ三百圓といふから安いぢやないですか。この調子で、どうでせうブリキ屋さんはバケツの家(雨の日はうるさいだらうが。)酒のみはビール樽の家。われ〳〵文筆業者はインキ壺の家といふ具合にたてたら、たづねて行くのにわかりがよくてよからうと、僕が言つたら、友達が、その後をうけてから言つた。『そんなら、いつそのこと、われ〳〵プロレタリアはゴハンのおひつ型の家がよからう。』
――まんなかへ梅干を入れとけば夏場もくさらないとくるか。

料亭治作の大どびん

少年が、どびんの口につかまツてゐるが、口吞みをしようとしてゐるのではない。『すげえどびんだらう。』と背くらべをしてゐるのだ。このどびんおやぢ（彼は絶對に男性ですぞ。）目方が百二十五貫あるといふのだから、一寸おどろく。かく申す小生は二十五貫だが、僕の五倍だと思ふと、ダアとならざるを得ない。丈は六尺、値段のことをいふのはさもしいが運賃共五百圓ださうだ。

場所は築地明石町。料亭治作の庭にある。明石町と言へば、僕の母校立敎中學のあつたところだ。それよりも、淸方畫伯の築地明石町なる題の畫によつて有名なる明石町だ。あの畫を知るもの、このどびんを見ていかなる感に打たるゝや。それは、このどびんおやぢの知らざるところ。どびんだけに、空に口をつんむけて人を茶にしてゐる。

二階のある交番

日活の多摩川の撮影所へ行つてのかへりに幡ケ谷を通つたらこれが目についた。

『おやツ。』

と思ふ間に僕の乘つてゐた自動車は通りすぎた。あわてて運ちや*

*んにたのんで引きかへして拜見した。實にいゝ交番といふとたいてい形がきまつてゐたが、これは型破りだ。二階のあるのが氣に入つた。つとめの時間を終つた警官が二階で一休みといふのは、思つても心たのしい、親しみがもてる。後ろに立つてゐる大きな木も、この交番にやさしく影をおとしてゐるやうな氣がする。
——交番のカーテン白く秋近し——てな句も、浮かんでくる。

←

↑

汽車の家

こいつは、ちよツといけますなアと誰でも、思ふだらう。僕もさう思つた。藥鑵の古手はせんじ藥の用を足し、どびんのフタの古は子供にヨウヨウまがひの遊びを敎へる、ウヰスキイの瓶は、一輪ざしとなり、洗面器の古は、植木鉢となる。この位までは、昔からあるからおどろかないが、汽車の古が家になるとは知らなかツた。窓の外に棚をつくつて、ちよいと植木を置いたりして、結構、モダーンに生活出來さうだ。中はベツド兼ソフアー兼椅子といふ便利なものがついてゐるし、W・Cも、洗面所もみんなある。しかも、これが飯田町の驛に近い崖の上にあるんだから愉快だ。技工長室と嚴めしい標札が、かけてあるのが氣に入つた。雨が降つても、窓が多いから、明るいだらう。一臺くれゝば住んでみてもいゝ氣がする。

お菓子の學校

お菓子の學校と言つたつて、ドロツプやキヤラメルが通ふ學校ぢやない。お菓子屋さんになる人が行く學校だ。むづかしい名を東京製菓學校といふ。場所は神田のスルガ臺、校長は、僕などは子供の時に知つてゐる、四高の駒井で鳴らした、柔道をやつた駒井重次現代議士氏だ。

——教はるも、教へる人もコツク帽——

川柳にするとかういふ形だ。みんなコツク帽をかぶつてゐる、これが作業の時の制帽だ。生徒は最年少者が十四で、年長者が五十三ださうだ。

『本校の生徒は、甘いものをこしらへてゐるにかゝはらず齒はわるくありません。』

と、のたまうた。そりやさうだらう。お菓子の學校へ通つてゐるのは、たべるためぢやないんですぞ。

——出來上るクリームに秋の陽が落ちる——

(陽が落ちないうちに、くひたいなんていふのは誰だ。)

天體・地上兼用望遠鏡

アースゲルボン

鏡筒四〇五粍、倍率四十八倍、六枚のレンズは特に優秀な獨逸製高級品を用ひてありますから、視界鮮明にして海上十哩の沖合にある軍艦月面の噴火口、太陽の黒點の觀測にはその能率に於て數十圓の高價品と何等異る處がありません。

定價 五圓五十錢（送料内地三五錢 其他六十五錢）

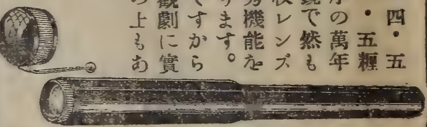
七圓（三脚付）（送料内地六十錢 其他一圓）

携帶萬年筆型望遠鏡

アースマネスコープ

全長僅か一四・五糎、直徑一・五糎の世界最小の萬年筆型望遠鏡で然も高級な六枚レンズ使用の優秀機能を持つて居ります。携帶便利ですから旅行に、觀劇に實に重寶此の上もありません。

特價 二圓五十錢



（送料内地二十錢 其他四十九錢）

優良双眼鏡

この双眼鏡はレンズが優秀鮮明で視野廣く、機體堅牢にして優美な點等如何なる高級品にも劣らぬ能力を持つて居りますので到る處大歡迎をうけてゐます。

＝定價＝

三圓五十錢、四圓五十錢（送料内地十五錢其他四十九錢）

精巧品十圓、十圓二十錢（送料内地三十錢 其他六十錢）

東京・小石川・音羽（振替東京六六二九番）

大日本雄辯會講談社代理部

醫學博士 長濱繁先生著

性鑑

◇四六判三五〇頁函入

附『必ず治る生殖器障害・神經衰弱の最新療法』

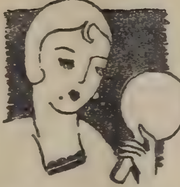
男子生殖器短小、性器の異常、障害等及び神經衰弱に惱む青年へ大福音!!

本書は斯界の權威長濱博士が多年の實地經驗と最新學理に基き絶對根治法及び自宅で簡單に然も秘密に、最も安價に治療出來得る大秘法をも公開したものである。特に本社はこれ等疾病に惱む青少年の爲、壹千部限り大奉仕特價壹圓五十錢にて頒布することゝした。

—大特典……無料相談券洩れなく添附—

申込所 東明堂書店 東京市本郷區眞砂町三八 振替東京二八〇三八番

（内容見本進呈）



いぼ・ほくろ

少しも痛みなく、傷跡を殘さず、氣持よく、手輕に除れるので評判の珍しい藥

お顔の感じを惡くするほくろや、手足にできる醜いいぼ、魚目など、除らうとしてもなかなか除れず、無理をしてやつと除つても、そのあとに餘計醜い傷跡を殘したりして全く始末に負へないものですが、かやうな頑固ないぼ、ほくろも苦もなく除れる珍しい藥を御紹介致します。

それはヒドロアミーンと申しますが小量づつ局部に塗りますと、少しの刺戟や痛痒を感ぜず、極めて手輕にいぼやほくろ魚目が除れ、しかも傷跡を殘す心配なく、易々と惱みを解決できます。たこ、あざ等でお困りの方もぜひお試しになつてご覧なさい。

ヒドロアミーンは定價一圓（送料内地十錢其他四十二錢）東京小石川音羽大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）へ御注文下さい。

ステキな雑誌だ面白い雑誌だ!!

比喩例話警句名言集

別冊附録

雄辯ならでは出來ぬ名附録

千萬言を費すよりもピタリと來る例話警句は相手を感動させる。雄辯に志す人は勿論、作文に手紙に座談に、交渉に社交に、これ一冊は非常な値打を發揮する。雄辯が數ヶ月を費して完成した、絶好無二の大寶典です。大いに活躍成功せんとする人はゼヒこの一本を座右に備へられよ。（三六判二百八十頁美本）

●大隈侯の座談ぶり…永井柳太郎

●早稲田出身の雄辯家　旦月

●スポーツ界十人男評判記

●美術界巨匠花形ロマンス

日米水泳大會大試合

ミ鈴木彦次郎

遥々海を渡つて水の王者日本に挑戰して來た米國水上軍中の花形と日本の若武者との大試合物語

沈黙は金・雄辯は銀

ミ鶴見祐輔

雄辯界の麒麟兒か熱筆を振ふ面白い新雄辯道講座！

劇界三巨人物語

菊五郎！

左團次

吉右衛門

（本山荻舟）

左、菊、吉の三巨人こそ今日の歌舞伎を支配する存在だ、問題の多い近頃の劇界を中心にして興味深い記事

雄辯

十月特大號
特選讀物

爲になる雜誌だ讀めば讀む

現代名士を語る新聞記者座談會

此に出て來る名士は裸のまゝの姿だ、こんな名士にも斯んな事が有るかと吃驚させられる。

恐怖の人類 世界はもがく　永戸政治

伊エの紛爭を契機として第二世界大戰勃發の危機は迫る！藻掻く世界の悲壯な姿を見よ！

落語漫談の夕べ

讀み出したら笑ひが止まらなくて困ります。

怪奇探偵小說集

一流探偵小說家數氏が腕にヨリをかけた名作

- 雄辯軌範…加藤咄堂
- 各界名士演說集
- 選擧演說模範例　三名士

彼が今日を築く迄

血と汗に塗れつゝ成功の凱歌をあげた青年の奮鬪物語

青年愛誦詩歌集

秋です。讀めば心を洗はれる名歌名詩にお親しみあれ

萬人熱狂の小說陣

- 社會小說 その流域…賀川豐彦
- 軍事小說 東の先驅者…山中峯太郎
- 立志小說 前垂將軍…竹田敏彦
- 現代小說 都會の虹…濱本浩

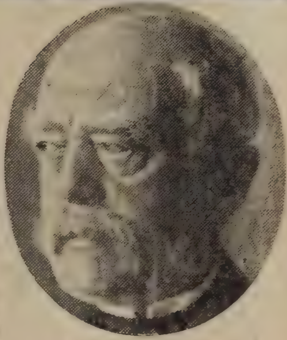
程味の出る雜誌だと大評判!!

特價六十錢　送料六錢五厘

東京小石川・振替東京三九三〇
大日本雄辯會講談社

(三ノC)

英雄天才史傳 ビス


ビスマーク

萬人の胸にピッタリ來る英雄傳！

英雄傳とは架空の小說ではない。力強く一日々々と現實を歩んだ巨人の實錄だ。逆境と憂鬱と懷疑と戀と涙との中に鬪ひ拔いたビスマークの波瀾の生涯こそ正に小說以上だ。

英雄傳を描いて本邦隨一の稱ある鶴見祐輔先生が、その名著『膨脹の日本』に次いで世に送られたのがこの一卷だ。從來の英雄傳と異り、何時、如何なる人の胸にも必ずピーンと來るのがこの英雄傳だ。

（御申越次第圖書目錄進呈）

マーク

ビスマークはあなた方に百倍する程の心配と失敗と行詰りと憂鬱と失望とを經驗してゐる。さうしてそれに打ち勝つてゐるのだ。ビスマークはどうしてそれ等の困難に打ち勝つたかをよく御覽下さい。

世渡りの先生、人間學の教科書が之だ！

思案に餘つたら英雄傳！失敗したら英雄傳！氣が弱つたら英雄傳！氣が塞いだら英雄傳！心配事が起つたら英雄傳！

尾崎行雄先生曰く——

ナポレオン一世以後の人物にして、ビスマークほど其事業性行の超凡異常なものはなからう。從つて其傳記評論は汗牛充棟數限りもないが、鶴見祐輔君の『ビスマーク』ほど、簡明に且つ面白く、其人物性行及び其事業を描寫したものはなからう。明治以後の我が國はビスマーク時代の普國に類似する點が頗る多い。讀者若し深く此等の點に留意せば此の書は世人に無限の興趣を與へると同時に濟世救民の警策たらん哉。

膨脹の日本（新英雄論）益々大好評

出版界空前の大盛況を示し、文字通り讀書界の人氣を獨占した大名著！
萬一お讀みにならない方は今直ぐ御覽下さい（定價五十錢送料六錢）

鶴見祐輔先生大熱著！

定價一圓五十錢（送料十二錢）

大日本雄辯會講談社　振替東京三九三〇

婦人倶樂部 雑誌週間記念

第一計画 破天荒の大附錄！
（婦人倶樂部十月號に洩れなく添付！）

昭和十年新型

毛糸編物大全集

大確信！ 申上げます。
全く今迄にない大豪華版
日本一の編物大全集です
これ以上の編物附錄はどこでも決して出來ません。

是れ一冊あれば、赤ちゃんから
お年寄まで、御一家全体の編物か
一切合財お間に合ひます。而も最新型中の最新型が
材料費丈で誰方にも手軽に作れます。

部十月號の三大計画

●一目見ればスグ出來る!! 實物通りの着色寫眞の大全集!!

●一目見ればスグ出來る!! 圖解本位の編み方の大全集!!

●一目見ればスグ出來る!! 新考案の模樣編數百種の大全集!!

●一目見ればスグ出來る!! 昭和十年の新型編物一切の大全集!!

一見びっくり！実に非常な値打のある大附録！

素人も玄人もなく、一目見れば誰でもスラスラ立派に編める新工夫の大附録です。今迄編物をなさらなかつた方も、この機會にぜひお初め下さい。こんな素晴しい編物の本は二度と再びお手に入りません。

●今スグ御近所の書店へ豫約なさるのが一番御安全！ 呉々もお急ぎお申込おき下さい。

第一計画 堂々数十頁 花嫁大画報

美麗優艶思はず見とれる、天下評判の花嫁と花形美人の花嫁姿大畫報、婚禮衣裳の新流行も分る素的な計畫

第二計画 五万人大當り 驚嘆の大懸賞

訪問着、糸錦丸帯、大姿見鏡臺、片側帯、化粧料詰合函を初め賞品合計五萬一千三百五十點、空前の大奮發

此の外

漫畫繪本『凸凹黒兵衛』つき、更に本誌は大増頁の厖大の大册、大計畫、新案、名案を續々發表。未曾有の壯觀！

大奮發・大附録つき七十錢!!

●十六日(東京)發賣す 日本一安いこの十月號、お手に入れねば御損で

發行所 東京・小石川 大日本雄辯會講談社 (振替東京一三九三〇)

一家和樂の源泉

演者	演題	内容
松林伯知	鼠小僧治郎吉	大名旗本の邸を片ッ端から脅し貧者弱者に恵む、痛快無比一代の俠盗史
旭堂南陵	猿飛佐助	眞田十勇士の頭目猿飛佐助が、得意の忍術を以て神出鬼沒の諸國漫遊記
一龍齋貞山	寛永御前試合	家光公の御前、天下の勇士豪傑が手に汗握る決死の大試合。一讀感激奮起
錦城齋典山	天保六花撰	河内山宗俊を盟主に大江戸を荒すギヤング團、之に配するに濃艶戀物語
神田伯山	野狐三次	江戸の華町火消の俠骨兒三次が痛快な大活躍。義あり戀あり興味無限!
旭堂南陵	怪傑兒雷也	何れ劣らぬ忍術の達人が、變幻出沒の大妙境!奇々怪々の白熱的術合戰
桃川若燕	浪華女俠傳	男も及ばぬ度胸骨、艶麗花を欺く浪華一番の美人お登喜が一代の任俠傳
田邊南龍	八百八狸	松山奇譚、一讀ゾッとする人獸鬪爭場面の大展開。何とも言へぬ面白さ

演者	演題	内容
大島伯鶴	關口武勇傳	柔劍二道の達人關口彌太郎が明朗闊達の武勇傳と哀切悽艶を極むる人情噺の代表作、共に寄席藝術の最高峯
三遊亭小圓朝	怪談牡丹燈籠	
神田伯龍	祐天吉松	男の中の男と謳はれた美男吉松、劍難女難仇討綺談。波瀾萬丈の俠客傳
西尾麟慶	一心太助	江戸ッ子の元祖太助が大久保彦左衞門を大親分と仰ぎ仁と情との大活躍
太田貞水	黑田騷動	忠臣栗山大膳がお家を救はんと惡人輩を相手に大苦心。息づまる大興味
一流家總出演	赤穗義士外傳	義あり勇あり哀戀あり、赤穗義士をめぐる涙ぐましき美談佳話の大集成
寶井琴凌	大岡政談 村井長庵 雲霧五人男	稀代の惡黨長庵の罪惡史と、江戸暴力團の頭目雲霧配下五人男の銘々傳
神田伯治	大岡政談 鰻のお千代 正直淸兵衞	本朝毒婦傳中の大立者鰻のお千代と名奉行大岡との腕くらべと、夢と寢言の仇討でその名も高き孝女の物語

矢つ張り物が良い。素晴しく面白い

讀むなら斷然 講談社の 評判講談に限る!!

全國の書店にあります。ぜひ一度御覽下さい

何れも非常な大人氣

人物を作りたい人の讀む講談!

講談の好きな人、講談の本當の好さが分る人はスグ分るね。義理も人情もわきまへて、世間の表裏に通じて仕事も出來るし人柄も床しいと、昔からよく言はれます。本社の評判講談は、演者は悉く一流の名人、演題は十八番中の十八番、泣かせ笑はせ血を躍らせながら感動させる、飛切り面白い名講談揃ひです。どなたも早くお讀み下さい。

定價一冊一圓 送料各十二錢

東京市小石川區音羽町 (振替東京三九三〇)

發行 大日本雄辯會講談社

(御申越次第圖書目錄進呈)

富士漫畫大笑館
天高く――。
物がたい畫家が秋の風景を描いてゐます。
井崎かずを

或る展覧會場風景

金子久子

愛らしき留任運動

芳賀まさを

先生が隣村へ轉任するのが嫌だと云ふので、生徒が先生の帽子と靴をかくしました。

耳の遠い教授

杉柾夫

學生がアクビしたのを見て、『ハイ何か質問ですか？』

努力家

佐次たかし

泥棒の妻君『あんたさう無理して勉強しちや、體に毒よ。』

へちま面の利益

野口彌市

『シメ〱、借金取りのいんごふ爺めとうとう俺がこゝに居るのを氣付かないで行つてしまやがつた。』

子澤山の旅行です

サアサ早くしないとおくれますよ

志村つね平

侮辱以上

杉浦幸雄

新案

石川進介

厳しい三太夫の前でお鍋が若様に堂々ツケブミをしました。

日焼け 百合三郎

出迎への家令が弱りました『ハーテ、どれが坊ちやまちやらう—』

菊薫る 良知於莵三

島のお父つあんが菊作りに凝りました『アンコや、ちよつくら観賞させてくんろや。』

赤とんぼ

西塔子郎

『坊やヂットしてらつしやい。マヽが捕つて上げるから……。』

營業妨害

小泉紫郎

芋屋のおやぢ『やい〳〵。そんな所へ貼るない――』

虚榮

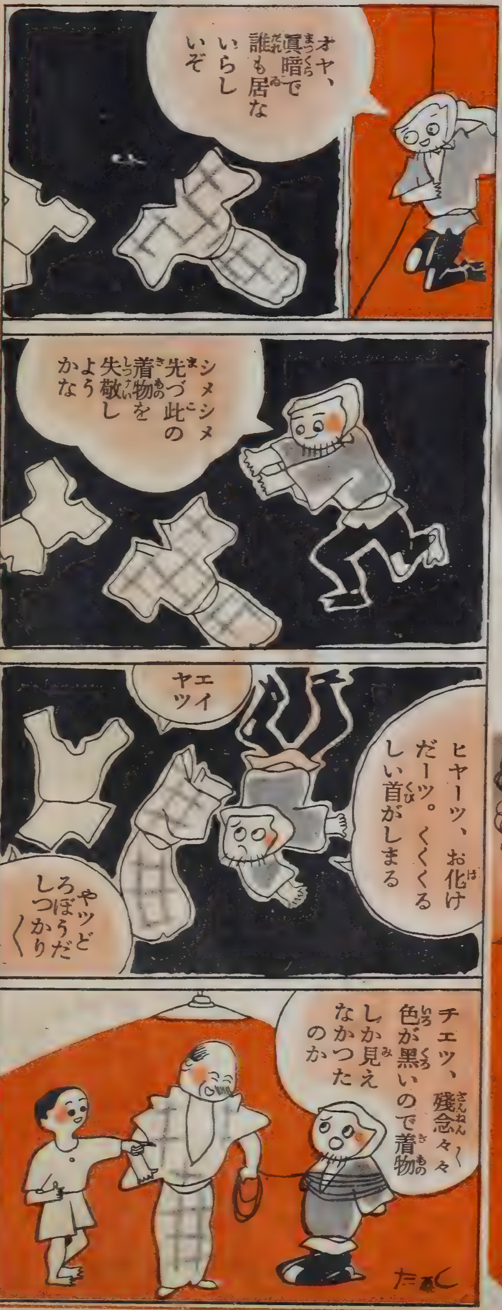
森比呂志

地主の奥さん『これ〳〵、うちの田圃の案山子にはそんな汚いものを着せておくのではありませんよ、もつといゝものと取換へておきなさい。』

海水浴綺譚

日焦けの手柄

佐次たかし



↑○益子善六
土人鋸鮫釣りの圖とございー。

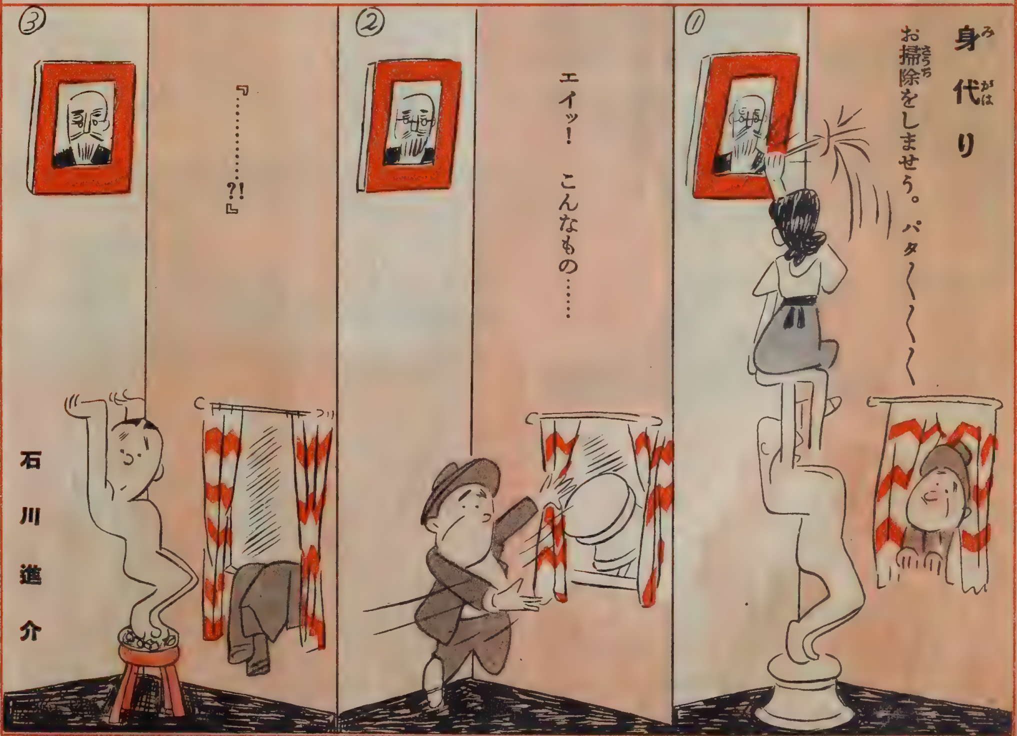
サンマ・シーズン
百合三郎
『トホッ!!俺んところの今晩のオカズは又サンマだ。』

新知識

大羽比羅夫

身代り

石川進介



みのりの秋

時雨音羽

稲田千段
みのりの秋よ
赤い襷は
となりの娘
案山子見とれりや
鴉も騒ぐ
嫁に貰をか
養子にやろか
さアさ刈らしやれ
豊年唄で
俺が在所は
猫の手もほしい。

田中比左良畫

この邊が汚れた足の洗ひ處かも知れねえ

『あゝ、俺アふつ〳〵忌やンなつた。』

『うむ。』

『ここいらが、すつぱりと、汚れた足の洗ひ時かも知れねえなア。』

『うむ。

處は中仙道のかゝりッ鼻、板橋宿の緣切榎の根ッ方へ腰を下ろした若い男の二人づれ。云ひかけてゐる五郎藏は、すつかり考へ込んでゐるが、相手の吉五郎は、本心は合槌をうつてゐるだけのやうであつた。

ごつ〳〵した縞の木綿の袷を裾取つて、草鞋ばき、黑の小倉の前掛を三つに折つて前帶を挾んだ。手拭を米屋かぶりに、うこんの風呂敷包みの小さな荷を背に、何處から見ても、旅から旅へ、江戸の小間物髮飾袋物を賣り歩るく男たちのやうであつた。

『本當だ。おい、本當だぜ、吉。』

『うむ。本當にさうだなア。』

五郎藏二十二三、鼻は少しツンとしてるが、苦味走つたいゝ男であつた。吉五郎は、二つ三つ年下かも知れない、色の白い少し肥り加減な穩やかさうに見える面付であつた。

その吉五郎の仰いだ青々とした秋の空、流れるやうに白い雲が、ふんわりと浮んで、すぐ足許から、街道一つへだてて、果てしもなく續く武藏野の薄ッ原、ところ〴〵に、こんもりと、雜木林を見せてゐる。

五郎藏は、ふと、氣がついたやうに、ぢッと吉五郎の橫顏を見て、

『おい、お前、本當に足を洗ふ氣があるか。本當によ。』

『うむ、俺だつて、こんな渡世の終りの果てを、たつた今、眼の前に見せつけられたんだ。考げえずにやアゐられねえよ。』

『さうだ――考げえるどころか。』

と五郎藏は、

『ばッさりやられた揚句の果が、三尺高けえ木の上で、今夜のお月樣ア眺めようッてんだ。俺ア、あの首斬の、刀がぴかつとして、あの男の首ンところから、しゆッと吹き出した血の色と、どつたりと前の首穴へつンのめつたあの態がどうにも、眼について、眼について堪らねえ。な、おい、吉、この界隈を荒し廻つた盜ッ人だと、あゝして處成敗になつたんだが、それを見た俺ッちが、ここで、ぷつつり惡事をやめれア、處で御成敗をなされる御上の

OCT 3 0

御趣意にも叶つて、萬に一つ、舊惡露見の時にや、お情けもあらうといふもんだ。な、吉、今日これ限り、足を洗はう。』

『え？』

『斬られた奴ア他人だが、云ふ迄もねえ己が姿。俺アふつ〳〵恐くなつた。大切にすれア五十年六十年、疊の上で往生の出來るものが、餘り樂でもねえ罪業の深けえ渡世をつゞけ、その上、あゝして野ッ原で、大勢さんの見てゐる前で打首だ、何百何千、人はゐたが、いゝ氣味だとこそア云ふけれど、誰一人、可哀さうにといふものもねえ。な、吉。見も知らねえ人間が、野垂れ死をしてゐても、みんな、可哀さうにと云つてくれるに、情けねえぢやアねえか。』

吉五郎は、少し、ふンとして、

『ふッふッ、兄貴ア、すつかり考げえ込んで終つたねえ。』

『さうだとも——。處も板橋縁切榎、お負けに、今夜ア中秋明月、月の鏡に心をうつして、ぷつりとも曇のねえやうに、え、おい、吉五郎、今日から堅氣だ。』

『うむ。天狗小僧の二人づれも、それぢやアこれで。』

『何處から來て何處へ行くのか、姿を見た事はねえど、誰いふとなく天狗小僧、綽名にとつた俺ッちだが。』

『だが——』

と吉五郎は、眉を寄せて、

『堅氣もいゝが、兄貴ア、これから先きどうする氣だえ。』

『いや、俺よりア、そッちの事だ。お前は一體何處へ行く。』

『うむ。』

と吉五郎、一寸、考へたが、

『俺アいつも話す通り、千住の掃部宿に、伯父がゐる。それをたよつてやつて行けア、何んとか成るといふものだ。して、又兄貴は。』

『俺ア。』

と、五郎藏は、ふと、言葉に詰まつた。

『ふッふッ。天涯孤獨、この世の中の一人ぼッち——だが、死んだおやぢが面倒を見た奴ア、五人や三人、今ぢやアいゝ顔でゐるやうだ。所詮、御判行の裏街道で飯を喰つてばくち打ちだが、その邊を足がかりに、一文商ひでもはじめる氣だ。』

『さうか。それぢやア、兄貴は、これから何處をさして行くと、はつきり定まつちやアゐねえのか。』

『はッはッ。いゝやな。俺の事ア、どうにでもなるよ。』

『ぢやア、いつそ、俺の方へ來たらどうだ。』

『はッはッはッ。そ奴アいけねえ。お前と俺が一緒ぢやア、苦しい事のある度に、また遂ひふら〳〵と惡事を働く。』

『へッへッ。それも然樣だが、これッきり、ここで兄貴に別れて終つて、互に、何處へ行つたか生きたか死んだか——』

『わからねえのも氣がかりだ。よし、それならこゝアこのまゝ、ぱッと別れて』
『來年か一來年か。』
『いゝや、どッち道、目鼻がつくにやア三年五年――、よし、五年經つた今月今日。八月十五日だぜ。雨が降らうが、槍が降らうが、互の身の末がどうなつてゐるか。』
『何處で出逢はう?』
『うむ。』
と、五郎藏は、首をかしげたが、
『お前の引ッかゝりに近けえやう、千住大橋の上にしよう。』
『よし、五年目の八月十五日千住大橋だなア。して、刻限は?』
『矢ッ張り、今日と同じやうに、もう、間もなく日が暮れさうな――さうよなア、七ッ半刻。』
やがて二人は、別れてゐた。二人とも、何んとなく涙が出た。
五郎藏は、暫く行つてから、薄の中に、突立つて、街道を、ちらほらと姿を見せながら去つて行く吉五郎の後をぢッと見送つてゐた。
『ヘン、畜生、だらしがねえ涙が出やがる。』
ぐッと拳で拭つて、
『あ奴とも同じ盗みの悪どい渡世、長げえお馴染だつたが――はッはッ、これで天狗小僧の五郎藏も、一ッ丁場幕が降りたか。』
赤いとんぼが、輪をかいて大空をすい／＼と飛んだ。薄の穗に、夕風がそよいで、板橋の宿場には、もうそろ／＼灯が入る。

人の情ア紙よりうすい
矢ッ張り來ねえや

猿若町の芝居へ出てゐた上州生れの出方のせがれ。それに持つて生れたいゝ男が綽名になつて、今では、誰云ふとなく役者の五郎藏。
五郎藏は、あれ以來、矢ッ張り、本當に足は洗へなかつた。訪ねて行く先き先きが、出方はしてゐても、ばくちを打つて、殊に若かいものゝ世話好きからいつとも知れずいゝ顔になつてゐたおやぢの緣故で、堅氣のかの字も無い人達の間に立交つて、旅から旅の渡り鴉、一本刀のやくざでこの世の中をすッ飛んでゐた。
『こんな姿を、吉五郎に見られちやア恥しいが、どうにも堅氣ア俺の板にやアつかねえや

美味しいエネルギーの瓶詰

人間の身體の活動力の根源は葡萄糖です。これが血管内へ吸收されて元氣を出し、精力を增進させるのです。『どりこの』はこの葡萄糖と、果糖が主成分ですから、人體エネルギーの瓶詰といふ事が出來ます。非常に美味しくて身體の爲になるのです。

うだ。一天地六のばくち打ち、骰の目一つに命をかけちやアゐるけれど、昔と違つて、他人様の物ア塵一つ默つちやア頂かねえ今の渡世、ヘン、俺ア盗ッ人天狗小僧だと名乘つちやア天下の大道は通れねえが、無職のもンだと云つたとて、何處の番所も御用神妙とア云ひやしねえ。それだけが、まづまづ、こッちのめッけものだ。』

ひとり言を云ひながら、五郎藏は、さッきから、千住大橋に立つてゐる。荒川の光つた流れ、上り下りの帆を張る舟も、そろ〳〵苫につかうといふ、どうやら黄昏が、川の底から湧いて來る。

『とんぼが、すい〳〵と――丁度、あの日も眼の前を、かすめるやうに飛んでゐたッけ。』

もう半刻、待つた。

『いゝ堅氣になつたらう。俺のかうした一本刀、廻し合羽に手甲脚絆のやくざの旅人姿に引けえて、あ奴ア、俺ッちがあの當時、世間誤魔化しの堅氣姿を、今度こそア本當に素で行つて、前垂姿を見せるだらうなア、早やえもんだ、もう五年よ。俺もことしやア二十七、あ奴も二十五な筈だ。』

青い空。やがて、十五夜の月が出よう。吉五郎はまだ來なかつた。

『伯父さんの家が掃部宿、たゞ、それだけだが、尋ねて知れねえ事もなからうけれど、こッちの姿がこの態ぢやア、そ奴も出來ねえ。それにしてもどうしやがつたのかなア。あの頃ア、腹痛一つした事のねえ丈夫な奴だつたが、病つてでもゐるのか。それとも、何にか、他人の手前、出られねえことでもあつてか。』

遂々、月が上つて終つた。鏡のやうな明月。川沿ひの家から、笛の音が聞こえたり、月へ供へた飾り物が、蠟燭の灯に見えてゐる。

『來ねえ――ふッふッ、人の情なんてのアこんなものか、あ奴ア、矢ッ張り來ねえんだな。ヘン、笑はしやアがる、頓馬の五郎藏奴、こッちは思つてやつてゐても、向ふさ、それ程に思はねえとやう。ふッふッふッ。』

淋しさうに、片頰に笑つて、

『さ、あン時が、吉五郎とも一生のお別れだ。それもよからう。俺ア、あれッきり、盗ッ人ぢやアねえんだから。』

と五郎藏。

『だが、達者で暮らしな。』

見えない吉五郎へ言葉を殘して、とッとッと橋を渡つて、小橋から掃部宿へ。水戸街道を常州へ入つて、それからまた足の向くまゝ氣の向く儘に、上州から信濃路へでも出て見よう氣持であつた。

掃部宿の家々は灯が入つて、月見の夜だけに、往來は、人の氣配が何んとなく騷がしかつた。

五郎藏、輕ろい足取。笠も合羽も横抱きに、刀の鐺に月を流して――。

『おや？』

ふと、足が停まつて、振返つた。

『お〻、あれア吉だッ？』

その吉五郎は、息を切るやうにして、たつた今迄、五郎藏の待つてゐた橋の方から、急ぎ足で、後を追つて、

『五郎兄ィさん、五郎兄ィさん。』

堅氣らしく呼んでゐた。

五郎藏は、身を飜して引つ返した。がつちりと握り合つた二人の手。

『どうしたえ、吉ッ。』

『兄貴、お達者で。』

『うむ、よく來てくれた。おうお、すつかり、堅氣になつて呉れたな。お前の本當のその姿を、俺ア幾夜夢に見た事か。』

『すみません。お約束の時刻に遲くれたが、それにしても逢へて何よりだつた。』

『さうだつて事よ。はツはツはツ、俺アまだ御覧の通りで、堅氣さんにやア成り切れずにゐるよ。お前のその縞の着物に白足袋がけ、襦袢の襟をきちんと合せた姿を見て、俺アすつかり安心した。一體、何にを渡世にしてゐるんだ。』

『へえ、日本橋、馬喰町で、大丸といふ呉服、太物の問屋、あれが今では、あッしの店。』

『え？　大丸が？』

『あれから、伯父の世話で、あのお店へ奉公に出たが、幸ひ心を入かへて、蔭日向なく働いたのが主人の氣に入り、二年前に一人娘のお福といふのと祝言し、孫の無いのが舅の歎きといふだけで、まア、兄貴にも、心から喜んでいたゞきてえ身の仕合せだ。』

『さうか。』

と、五郎藏は、うれしさを崩れるやうな笑顔に見せて、

『そ奴ア、よかつた――思へば、板橋の宿はづれ、處成敗で首を斬られたあの盜ッ人奴、お前の爲めには、仕合せの産みの親だ。』

『うむ。』

『それをきいて俺も、安心、心の底迄晴れ晴れした。俺ア久しぶりでお前とゆつくり話をして、その後の事の何にやかや、一夜を語り明かさうとも思つてゐたが、さうなれアお前も歷とした大店の若旦那、俺のやうなやくざな奴と立話をしてゐるのも人眼にどうかと思はれる。さ、別れよう。達者でな。舅に孝行、女房を可愛がつて、早くせがれでも拵れえろ――おい、逢はね

えが、お神さんによろしく。』
五郎藏、ぱッと離れて、夕靄の地を這ふ中を、小走るうしろから、
『おい、兄貴、待つてくれ、待つて下さいよ。』
『え？』
『實ア話があるんだ。あッしの時刻に遲くれた譯も話してえし、それについて、今、この身にふりかゝる災難、是非、兄貴におすがりしてえのだ。』
『え、何んだと？』
『どッか、その邊で、一ぺえやりながら、ゆつくりお話が、したいのですよ。』
それから間もなく、二人は、大橋際の小料理屋の奥にゐた。
うなぎもうまかつたし、自慢の鮒の雀燒を肴に、月の光のきらきらと流れる涼しい川を見下ろして、二人は盃を手にしてゐた。五郎藏は元より嘗める程度の酒。
『五年の間に、お前は、まア、ひどく手が上つたぢやアねえか。』
『え、何しろお交際でねえ。やくざの渡世とはあべこべに、堅氣の商賣といふものは、酒と女が資本の一つさ。』
『さうかなア。』
吉五郎は、五郎藏の酌が間に合はぬ位に、早く盃を乾して、それで、びくともしなかつた。
『ところで――』
と五郎藏は、
『さつき氣になる事をきいたが、え、吉、身に振りかゝる災難とア何んだ？』
『うむ、兄貴、よく訊いてくれた。實ア斯うなんだ。』
五郎藏は、盃を置いて、ぢッとして聞いてゐた。吉五郎は、半分、涙聲で、細々と語つて行く。
『太てえ畜生だッ。』
と、五郎藏は、きッとして、
『よし、吉五郎、安心しろ。』
『え、それぢやア兄貴が。』
『うむ、俺に任せろ、あン畜生なら、この俺も滿更名前を知らねえ譯でもねえ。これ迄、そんなに惡るい奴とアきかなかつたが、堅氣のお前へ難題を吹かけて、千兩の二千兩のと

治りにくい頭痛やかぜ引きに副作用なくトテモよく効く！
頭痛・かぜに…トランシン
・醫學博士田口勝太先生創製の感冒頭痛藥・
藥價 二五錢、五〇錢（全國著名藥店にあり）

ア太てえ畜生。きつぱり俺が引受けた。え、おい、吉、お前のやうな盗ッ人が今ぢやア正しくいゝ道を、傍目もふらずに歩るいてるといふのに、世の中にやア惡るい野郎も絶えねえものだ。』

『して又、あ奴をどう云ふ事に。』

『はッはッ。まア默つて任せて置け。白壁町の貸元は、人によつちやア山のやうな度胸だとも云ふし、いゝや案外だともいふ噂がまち〳〵だ。俺も名前だけで、一度も面ア合はねえが、ここらで一つ、あ奴の度胸だめし――はッはッ、それから、それと手があらアな。』

『だが、それだけぢやア。』

『どゝの詰まりア、あの野郎を、お前の側へ立寄らせなけれアいゝんだらう。』

『いゝや、それだけぢやア心元ないよ。しつこい野郎だから、兄貴の眼が離れゝアまた直ぐにこの俺をおどしにかゝるに定まつてゐる。後の祟のねえやうに、一ツそ、あ奴を。』

『殺せといふか。』

『うむ。』

『それアお前の仕合せの爲め、お前の堅氣の明るい道を眞ッ直ぐに、踏ませる爲めなら、あの野郎、眠らせるにやア手間暇もかゝらねえが。』

『賴む。』

『だが――まア任せろ、任せて置け、お前の仕合せの爲めにやア所詮やくざのこの俺だ。どんな捨石にもなるつもりだ。』

『た、た、賴むよ――まア、兄貴、さ、一ぺえぐッと乾してくれ。』

突出す盃へ、ほんのりと、月の光が漂つて來てゐる。

この樣子ぢやア俺の寢首を搔くかも知れねえ

神田多町、やッちや場の勇みの衆を繩張りに、白壁町のお貸元惣五十郎の親分は、少し緊張した顏をしてゐた。どッかりと胡坐をかいてにや〳〵虚勢は張つてゐるが、矢ッ張り噂の一面通り、この人、意氣地が無かつたのかも知れない。

『高塀といふ高塀には、忍び返しがついて、蟻一つへえれねえ俺の家だ。そこへ、一體、何處からへえりやがつたか、盜ッ人も盜ッ人、しかも、俺のねてゐる座敷へへえつて、俺の枕元にあつた脇差から、枕の下へおしておいた匕首までかッさらつて行つたんだ。その上若い者部屋にゐた七人の野郎には、御丁寧に墨で黑々と眼の縁へ輪をかいたり、繪草紙の八幡太郎を見たやうな髭を生やしたり、さんざ、いたづらをして行きやがつた。こ奴ア、錢金の欲しい奴ぢやアねえ、錢金を欲しい奴でねえだけに、俺ア恐ろしいんだ。飛んだ野郎が現れやがつた。』

ぶつ／＼半分ひとり言のやうに云つてゐる父の顏を、心配さうに見上げてゐる娘のお露。

『本當にねえ。どういふ譯で、一體まアどんな奴がこのやうな惡戯をしたのでござりませう。』

寄せてゐる眉を、ちらりと見た惣五十郎が、

『はッはッはッ。』

と俄かに大聲で笑つて、

『お露、心配はねえやな。床の間にあつた五十兩、手をつけねえやうな頓馬な盜ッ人、今度へえつて來やがたつら、只ぢやア置かねえや。』

『だつて、おとッさん、脇差を。』

『うむ。あ奴を奪られたのア、惣五十郎、生々世々のしくじりだが。』

心の中では――あれア脇差をほしいんぢやアねえ、かうしてうぬの脇差でも奪れるんだ、命なんざア直ぐに奪れるぞと、かういふ俺へのおどかしなんだ、誰だらう――心當りといふ當りを考えて見たが――やくざなら、いきなり刄物を持つてやつて來て、俺の寢首をかく譯だが、そ奴をしねえからには、やくざぢやアねえ、ひよッとしたら腕のいゝ巾着切か盜ッ人が、誰かに頼まれてやつた仕業か――まるで、見當はつかなかつた。

お露は、

『別に、他人様に恨みを受けるやうなおとッさんでは無し――ね。』

『親子二代の白壁町、俺アばくちの若いもンに慕はれこそすれ、心にくれえ覺えはねえが。』

『本當に、おとッさんの心は、このあたしがよく知つてます。』

『ふッふッ、どッちにしても、こんなおッかねえ野郎が出て來た上は、俺の寢首を何時搔かねえもんでもねえ、寸分油斷はならねえや。』

『どッちにしても、用心だけはねえ。』

『さうだとも。』

お露は、美しい瞼を、一寸、怖それと、心配にうるませて、矢張り顏色は只事ではなかつた。

『親分え、親分え。』

裏口から、誰やら若いものが、飛込んで來た樣子。

『何んだ。しづかにしろッ！』

親分に怒鳴られて、

『へえ。』

『何んなのさ。』

お露の聲。敷居の向ふに、ぴつたりと坐つて、膝小坊師を出した三ン下。

『親、親分の脇差が、裏の、ど、ど、溝ン中に投り込んでござえます。い、い、今、芳兄ィが、井戸端で洗つてますんで、ひひ、ひどえ臭せえ溝泥で――へえ。』

『馬鹿ッ！』
と、惣五十郎は、怒鳴りつけて、すぐに立ち上つた。
脇差も匕首も溝ン中から出た。
『怖ろしい奴だ。』
親分は、しみじみ、然う云つてから、
『俺を蹴込まうといふ昌平橋の權九あたりの仕業かな？』
惣五十郎は、その夜から、兄ィ手合の申出で十人の若いもンを交代に寢ずの番をさせる事にした。
多町一帶では、
『カンベ親分ところへ盜ッ人がへえつたさうだ。親分ところア今夜から當分寢ずの番ださうだ。』
そんな噂で持切つた。
次の朝――。
一家は、全身の血が凍るやうに驚ろいて終つた。子分たちが、眠む氣ざましに、骰子いぢりはしてゐたが、まんじりともしなかつたのに、親分の枕元から、また、新しい脇差が盜み出されて、今度は、その刄が、入口の戸の上へ張つた成田山のお札の横へ、ずばりと突差されてゐた。
大變な騷ぎであつた。下女がたつた一人、
『その男らしいのが、豆絞りの手拭で頰かぶりをして、闇の夜のやうな眞ッ黒い着物で、する／＼と天窓から出て行つたやうな夢を見ましたが。』
そんな事を云つた。
それから三日ばかり、白壁町には何事もなかつた。その代り、寢ずの番は十五人に增えて、娘のお露も、まんじりとはしなかつた。それよりも當の惣五十郎は、勘が興ぶつてどんなに眠むらうとしても、眠る事は出來なかつた。とろ／＼ッとしては、直ぐに、眼が醒めた。その眼が眞ッ赤に充血して、顏色は、いくらか蒼くなつて行つた。
その一夜。
月の光の蔭になる黑板塀、内には白壁の土藏がくッきりと見えたが、その下に立つて、ひそ／＼話をしてゐるのが、五郎藏と吉五郎。
『多町の噂ぢやア、白壁町も耄碌して、もう手も足も出なさうだ。多寡が盜ッ人一人、どうにもならず、あんな風ぢやア賴りにならねえと、いや、處が處だけにそれア意外の不評

奇術材料お頒ちします
不思議な手品が誰方にも出來る！
奇術の大家大宮大洋先生御考案の種明し付新案奇術の材料を各種お頒ちします。
（定價五十錢、六十錢、一圓、二圓の各種送料内地十錢其他四十二錢を添へ本社代理部宛（振替東京六六二九）お注文下さい（カタログ進呈）

判、このまゝ、うッちやらかしておいても、あ奴ア、江戸にやアゐられなくなるよ。それで、いゝんだらうなア。』

『――――』

吉五郎は默つてゐた。

『天狗小僧奴、いくら盗みはしなくとも久しぶりの仕事で、脚下がふらついたぜ。はッはッは。』

『ね、兄貴。』

と吉五郎は、

『俺ア、あ奴が、困り出せア出すだけに、後の祟が恐ろしいんだ。矢ッ張り、ずばりとやつて下さい。』

『え？ どうしてもか。』

『え。兄貴に、あんな眼に合はされてゐながらも、相變らず、晝の間に自分でのそ〳〵やつて來たり、若いもンを使ひによこしてゐるんですよ。』

『さうか、そ奴ア、思つたより太てえなア。』

『さうなんですよ。』

と、吉五郎は、ふところから、びらうどの紙入を出して、紙へ包んだ小判、ざッくりと、

『兄貴、堅氣の俺の心ばかりの草鞋錢です。受取つておいておくンねえな。』

『何？』

と、五郎藏は、それを見て、

『おい、吉ッ！ 馬鹿にするねえ。俺アお前のやうな商人ぢやアねえ。ばくち打ちだ、やくざだぜ。商法らしく錢金で眞心は賣らねえよ――安心しろ、あの野郎、叩ッ斬つたつて、百里二百里風に乘つて飛ぶ位の路金は、いつでも持つてゐるよ。』

ぽん〳〵と懷中を叩いて、そのまゝ、さッと走り出した。

姿は月に見え、蔭にかくれて、素早やい鼠のやうに――。

まア待つて――お前さん
きツと後悔する時がありますよ

『まア、待つて。』

お露は、五郎藏の脚へしがみついてゐた。如何にも、下女が夢うつゝに見たか、豆絞りの手拭を、鼻ッ先きに結んで、黒づくめの扮裝。鐵輪のついた長脇差に、足ごしらへを固くして、右の手に、たつた今、三ン下一人を斬り落とした血生臭い刄を下げてゐた。

『うるせえ。白壁町の親分などと、表看板だけは人らしいが、内實ア、御大家荒しの、強請詐欺、親分づらがきいてあきれる。』

五郎藏の顏を見上げた惣五十郎は、自分の刄をぴつたりとつけて、

『強請詐欺とア腑に落ちねえ、白壁町はばくち打ちだ、そんな

外道は働かねえぞ。何處から飛んで來た兄ィか知らねえが、それならそれと、はつきりと云つて見な。』

『ヘン、笑はせるねえ、日本橋馬喰町太物問屋の大丸と、聞いても白ア切りやがるか。』

『あッ！　矢張り、あの盗ッ人の吉五郎の仕業か。して見れア、うぬも盗ッ人だな。』

『べら棒奴、何んでこの俺が盗ッ人か。盗ッ人ならア最初の夜に、うぬの枕元の床の間に置いてあつた五十兩、奪つて行かずアなるめえが、俺ア盗ッ人ぢやアねえ。ふッぷッ。何んでもい、んだ。やくざ渡世の親分が、堅氣を脅かして金を奪る、俺アそいつが氣に喰はねえ。』

『嘘だ、嘘だ。そ奴ア狐のやうな吉五郎が、みんな拵えた事なんだ。俺アあ奴から、一文だつて錢ア取らねえ。畜生ッ、そんな事を云つてやがるか。』

『ふン。』

五郎藏は、もう、一人を斬つて氣負ひ立つてゐる。

『老ぼれ奴、世迷ひ言をいふな。さ、その刀をどうする氣だ。斬れねえか、動けねえか。俺が最初の夜に來た時以來、ぷつつり、强請を止めせえすれア、うぬの命は無事だつたんだ。』

『違ふ、違ふ。』

江戸文學便り

第四回配本

俳諧名作集

京都帝大助教授　潁原退藏著

本書は發句篇、連句篇、俳文篇の三つに別れ、發句篇では、俳聖芭蕉を中心とする江戸時代の巨匠約六十人を擧げ、嚴選に嚴選を重ねた代表的な名句、數句乃至數十句について縱横に之を解き明かしてある。

著者一流の明快な筆は讀み易く判り易く、何の苦なしに俳諧の眞の味はひを悟り、各俳人の呼吸した時代の流れを窺ひ、俳諧の三昧境を滿喫することが出來る。

連句篇では、先づ解題によつて連句の文藝的價値や、連句の作法を述べ、歷史的展開にまで及んで連句の概念を明かにし、更にその具體的な例として三卷の作品に對して懇切な評釋を施してある。今迄難解と言はれてゐた連句は、これによつて初めてハッキリと解示されたのである。

第三の俳文篇では、俳味の滿ち溢れた流麗簡勁な名文章三十余篇を蒐め、その文中の難かしい語句や特殊な言葉を引出して、之に明快な註釋を施してある。嚴密な校訂、正確な評釋、さすがに當代無比の權威である。

第五回配本は

『讀本傑作集』

文學博士　和田萬吉著

であるが、讀本研究の權威として世に知られた故和田博士が、生前に於て文字通り鏤骨彫心、苦心に苦心を重ねて執筆された遺稿で『南總里見八犬傳』と『雨月物語』とより成り、博士の歿後は、特に樋口慶千代教授の御盡力を乞ひ、支那文學研究の大家長澤規矩也先生の解説を得て、錦上花を添へることが出來た。本書こそ讀本研究の白眉と言ふ可きものである。

『糞ッ！』
ずばりと斬り下ろした刀。惣五十郎の刀を持つた右の手が、
手首から、ぽろッと疊へ――。

『あッ！』
親分、腑伏した。お露は死物狂ひで、しがみついてゐる。
『違ひます、違ひます。』
叫びながら、ぢッと見上げた燃ゆるやうな瞳と、ふと見下ろした五郎藏の瞳が、ぴつたり合つた。五郎藏は、射られるやうな心地がした。
『違ふ、違ひます。吉五郎は惡人です。おとッさんは、あ、あ、あんな者から、何んでお金などを。』
『うるせえ。』
『いゝえ、違ふんです。どうぞ、どうぞ、命だけは、助けて下さい――きつと、後になつて、何にもかもわかつた時に、お前さん、お前さん、きツと、きツと後悔しますよ。』
『ヘン、笑はせるねえ。』
子分たちが、八方を取巻いて終つてゐた。銘々の刄が、行燈の灯にうつつて、五十本にも百本にも見えるやうであつた。

五郎藏は、ぐるりと、これを見廻した。

『ようし、さうしてゐろ。斬られてえ奴は斬つてやるぞ。』

俺にやア板についた幕切れかも知れねえ

あれから三年經つて終つた。

五郎藏は、あの時から、何の邊をどう廻つてゐたものか、不思議に十手の網にも苦しまず、相變らず、いゝ男の顏を晴晴として、中仙道から、江戸へ入らうとしてゐた。

丁度、八月十五日。

戸田の渡しの船頭の小ばくちに、こッちの懐中が溫かゝつただけにいたづらをして、面白がつてさんざ、からかつた爲めに時刻を喰つて、板橋の宿へ入つたらもう五つ刻。

宿場の女どもには宵の口だが、五郎藏流石に、疲れてもゐるし、ちよつぴり浮いた心も出て、

『江戸迄、二里八丁。さて、江戸へへえつて、何用がある譯でもなし、何處をたづねる譯でもなし——ヘッヘッ、と云つても、氣に懸るのアあの二人さ。』

『おい誰だえ。』
と、心の内できくものがあつた。
『一人ア云はずと馬喰町。後の一人ア、あの奴の眞ン中で、この俺の脚へしがみついたあの娘さ。』
『惚れたのか。』
『冗談ぢやアねえよ。たゞ、親の惡事が子に酬いあれから先きどうしたらうなアと思ふだけよ。』
『とか何んとか。』
『いや、そ奴ア本心だが――逢つたら仇といつて斬りかゝるだらうな。』
一人でをかしくなつて、にや／＼して、通りかゝつたのが玉川屋の格子前。
『へえ親分さん、へえ、親分さん。』
妓夫太郎が、抱いてゐた合羽を引いた。
『あン通り、綺麗な奴が、みんな、ぽかんとして居りやすんで――一つ何んとか、一晩御面倒を見てやつていたゞけやせんでござんせうか。』
『ふむ。』
五郎藏、何氣なく暖簾から、ずッと眼を、女たちの並んでゐる格子の方へ――。
ずらりと並んで、間々に、裸蠟燭の灯が瞬いて、宿場女郎には、また不思議な魅力が溢ふれてゐた。
『おや？』
五郎藏の眼が、眞ン中頃の女の顏へ、ぴつたりと吸ひついて、
『お、お、若い衆。』
狼狽た口調であつた。
『へ、へえ。』
『あの、眞ン中の女ア、何處のもんだ。』
『へえ、へえ、親分、流石にお目が高うござんすよ。あれア江戸ッ兒のちやき／＼で。』
『江戸は何處だ。』
『ヘッヘッヘッ。こ、これア、きつい御執心、江戸は、何處でござんすか。一つまアお上んなすつて、寢物語にゆつくりと、どうぞ訊いてやつておくンなさいましよ。』
『うむ――』
五郎藏は――確かにさうだ。確かにさうだ。俺が、たつた今

わきが
『わきが』でお困りの方は專門家も口を揃へておすゝめしてゐる評判の專門藥『蘊香』でお治し下さい。用法簡單輕いものは僅か數回の塗布で治療出來る効果藥です。價二圓 送料内地十錢其他四十二錢 東京小石川音羽大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一）

までも、心の底に思ひ出してゐたあの娘だ。不思議だ、が、きッとさうだ――うなづいて、

『名前は？』

『見世名はお鯉つてんですが、本名は――ヘッヘッヘッ親分、それもこれも、寢物語に――ヘッヘッ、どうやらお心をお引かれなすつた御様子。それとも、とッくの昔、何處ぞで、譯ありのお仲でござんすか。』

女達が、格子のところへ立つて來て、がや／＼と何にか云つてゐる。

『ヘン、馬鹿にするな。』

と、五郎藏鼻の先きで云ひ乍ら、

『俺の故だ。何事も血肉の親の身から出た酬いとア云ひながら、娘に迄ア罪はねえ筈――とにかく、上つて訊いてやらうか。』

五郎藏、妓夫へ、

『よし、上つてやるぜ。』

『へえ、有難う存じます。』

妓夫は、樓の內へ、

『へえ、お上りだよう――』

叫ぶ大きなその聲の內で五郎藏は、

『時と次第で、役者の五郎藏、親の敵と討たれてやるぞ。俺も二十九、やくざア少々芯が立つた。はッはッ、旅から旅の渡り鳥、ばくち打ちが、宿場女郎に親の敵と、女郎の部屋で討たれるのも、この俺にしちやア板についた幕切れと云ふもんだ。はッはッはッ。』

足は輕く土間へ――。妓夫は、もう一ぱい水をたゝへた洗足の盥を運んで來た。

――次號完結――

編者附記――變り果てた宿場女郎、それが意外にもお露の後身であらうとは?! 人生の妙、輪廻の不思議は、こゝに一大波紋を描かうとして居る。その後の惣五十郎は？ 吉五郎は？ やくざ渡世の織りなす恩讐二筋道の展開は、哀れにも痛ましい女性を交へて、ここに惜しくも筆を止めた。

作者子母澤先生曰く『この一篇こそ兼々の秘材であり、近來の快作である。それだけに前後二篇に分けて、一層の愼重さと、最大の努力を傾け、充分に讀者諸彥の期待に添ひたい』と――。待たるるは次號の完結篇である。

雜誌週間と富士の大壯擧

別項掲載の如く、新秋讀書の絕好季を期して、又々全國的文化運動である『雜誌週間』は、各地とも華々しく催されますが、宛もよし『富士』の臨時增刊はその眞唯中に、その颯爽たる偉容を店頭に現す筈です。

空前の大壯擧として今から大評判、出るとすぐ賣切れになることは確實です。本誌御愛讀の諸賢は是非とも今から書店へ御註文御買洩れのない樣お願ひいたします。

湯街の秋

西條八十

櫨の葉のくれなゐ燃えて
雲遠く、ゆく渡鳥、
のぼるともなくてのぼりし
湯の宿の裏の崖山。

國原を眺め、浴衣の
草の實を拂ひつ居れば
夕風の林の中に
ひそかなる人の私語。

すすり泣く若き女の
背を撫でつ慰むる男、

切れ〳〵の言葉を聴けば
別れをば嘆くがごとし。

想ひいづ、今朝も仲よく
ピンポンを遊びてありぬ、
美しき戀人たちと
女中等の噂せる客。

天地に涼風立ちて
湯の里に霧深むころ、
若人の夢の華虹、
消えゆくや、夏と儚なく。

行きずりの旅人なれど
ふとわれも寂しくなりて、
若き日を想ひ、眺めし
國原の涯の落日。

加藤まさを畫

雜誌週間に際して

雜誌禮讚

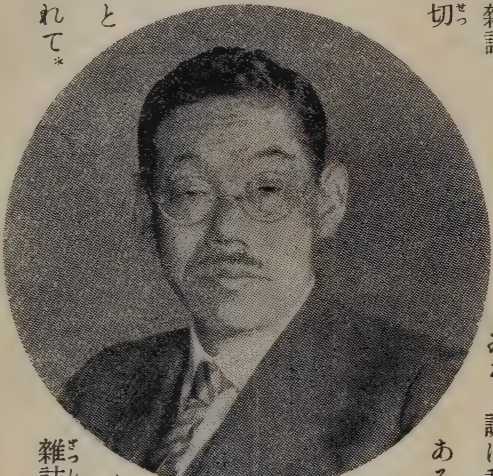
帝國圖書館長　松本喜一

讀書は現代人に欠くべからざる要素であるが、仲々落ついて書見する餘裕は何人も持たないのが實際である、たゞ雜誌だけが、緑蔭に、書齋に、車中に、船中に、休憩に、食後にと手輕に親しみ得られるので、これに依て讀書の習慣と讀書趣味とを培養されてゐる。恐らく大衆再教育の立場に於て、老幼男女の文化を高め、教育のレベルを高めてゐることは雜誌の右に出づるものはあるまい。

今日の雜誌は實に廉價である、そして尤も平明率直に新鮮な知識を供給してくれるし、趣味、娯樂、修養を與へて、我等の生活に光明、慰安を提供してくれるのである。近時の雜誌の內容は著しい進步で、雜誌のニュース化と共に、社會常識も、交際場裡の話題も、時事、政治、經濟、軍事、外交、文藝、宗教、科學、趣味、娯樂、流行、其他ありとあらゆる部門を包含し、筆者演者は、大臣、大將、學者、政治家、宗教家、實業家、文藝家等々各界の最高メムバーを總登

場し、恐らく學校でも講演會でも到底企圖し得ぬ、綜合大衆講座、大衆娯樂場として、或は課外讀本となり、或は社會讀本となり、成人講座、國民再教育の任を擔當して、隨時隨所に一般大衆を迎へてゐるのである。從つて今日の雜誌は時代の斷層として、あらゆる社會事象、國民の動向が記錄されてをるので、雜誌の保存は文化の保存上大切なものとされてゐるのである。

現在日本の雜誌は五百餘種、凡ゆる階級、凡ゆる分野、男女老幼の娯樂、修養、研究の友として驚くべき數が發行されて*ゐる、誠に我國民は文運に惠まれてゐるのであるから、私は一般大衆が一人殘らず、良き雜誌に親しまれんことを切に希ふのである。



松本圖書館長

今や爽かな秋が訪れ、所謂讀書シーズンである、晩餐後、明るい燈火の下で、一家の者がそれ〴〵、むき〳〵の雜誌を繙くなどは誠に家庭の和樂を象徴してゐる。

本年も亦、雜誌週間が催されるのであるが、今まで雜誌を讀まぬ人々の間にも、速かに雜誌が普及されて、眞に此の文化運動の達成されんことを念じて止まないのである。

（記者より）雜誌週間は九月七日より二十日迄全國的に擧行されます。本誌に於てはこれが記念の爲別項の如く本社九誌聯合大懸賞募集を發表いたしました、本誌八十六頁御らんの上奮つて御應募下さい。

長篇小說
晴曇
せいどん
久米正雄
宮本謙太郎畫

姉房子を薄命に死なせ、義兄辻村を失意に陥れた黒田欣哉に、悲壯な復讐を決意した貞子は、辻村へ覺え初めた戀も拋擲し、又澤野醫學士の切なる求愛も拒絕して、巧に黒田の女祕書となつたが、いざ此怨敵に側近した時、不思議な男性的魅力が彼女の胸を打つ。と其中、果して黒田は、彼女に戀の戯れを試み初めたので、玆に愈ヽ危險な彼女の戀の陰謀は開始されたが、さうした或日の事、遠く川奈のゴルフ場に出向いた黒田は、思ひがけずも同じグラウンドに、輕快なスーツ姿の或女性の姿を見かけてハッとなる。（前號までの梗概）

賭けたるもの

その婦人ゴルフアーの一人は、薄綠の上衣に、白いスカーツの裾を、清々しげに捌いて、既に球をティーの上に据ゑ乍ら、自分の順の來るのを待ち兼ねたやうに、試みのクラブを、振つて見てゐた。そしてもう一人は、少し年增らしく、茶色の薄いスェーターを、同じやうな服裝の上へ、形よく纒つてゐた。――二人とも、なか〳〵美しげな形の上に、婦人ばかりの一組なので、物見高くない他のゴルフアーたちだが、それが打つ番に近づくと見ると、ひとりでに注目を拂つた。

殊に黒田は、その、先に立つた若い方の、薄綠のスポーツ服と、其肩のあたりの特徵を、直ぐ遠くから認めて、目を瞠つて立佇つたのだつた。――それは、餘りにも先刻噂した貞子に似てゐたからだ。

『おや？……彼女ぢやないか？』

連れの岡も、續いて立佇つたが、彼も亦彼女らしいと認めたと見えて、其方を凝視した。

打つていゝと言ふ許しは、まだ出てゐなかつた。其處に立つてゐる番人は、まだ赤い旗を立てゝ、下のずつと遠くに見える、皿のやうな綠芝の上を、ぢつと見やつてゐた。その芝の上では、先に打つて下りた最後の四人組が、まだホールの廻りを、行つたり來たりして、轉球に手間取つてゐた。

『――もういゝわよ。私たちでは、彼方まで屆きやしないから。お打ちなさいよ。』

もう一人の、年上の方が、促すやうに言つた。組が溜つて來て、見物が多くなつたので、彼女たちは明に上氣してゐるやうだつた。

『だつて。――』

打つ方は、番人の顔と、それから初めて、後を振り向いて、澤山溜つて並んでゐる、他の組の人々を見廻した。そして、黒田の方を見た途端、

『――あら！』

と云つて、眞つ紅になつたまゝ、クラブを振らうとする動作を、やめて了つた。――もう、明に貞子だつた。鳥渡輕快なスポーツ帽を、眉深に被つてゐるので、彼女の顏を更にスマートらしく、頰が輝いて見えた。

『やア、今日は。――貴女も來ていらしたんですか？』

黒田も、鳥渡胸がときめくのを覺え乍ら、さう叮嚀に挨拶した。會社では、社長と祕書でも、芝生の上では、立派なレディーだつた。若さと健康に輝いて、其人との近付きがあるのは、他人を羨ましむるに足る、美しい婦人ゴルファーだつた。

『あら、貴方も？……後に來てゐらつしやるの、少しも存じませんでしたわ。』

彼女は、やつと眞つ紅になつた血を收めて、さう耻しげに云つた。

『淸川さん。今日は！……どうです、當りは？』

岡も、進み出て云つた。

『あら、まア岡さん。貴方も？――私、耻しいわ。……後で打たして頂きたいわ。ねえ、小野田さん。さうして下さらない？』

『さうね。――』

丁度、其時番人が、白い旗を立て代へて叫んだ。

『さア、もうようござんすよ。』

彼女は、困惑して、自分の件と、次の組の人々を、顧みて又云つた。

『ほんとに、私、後から打たして頂きますから、どうぞお先に。……失禮ですけれど。――』

さう云つて、彼女は自分の球を置いた、ティー・グラウンドを、急いで降りて了つた。

『さうですか。――では、さうして頂きませうか。大分、後が支へてゐるやうですから。』

次の三人組の、日に焦けた熱心らしい若者が、さう答へて、代りにティーを立てた。そして、相當確實らしいドライヴを、下の谷に眞つ直に放つた。續いて他の三人も、順次に球を置いて、それ〴〵相當なショットを、打ち下ろして行つた。なかなか手揃ひの一組だと見えて、一人の打つた球などは、實に適度な彈道を描いて、正しい道筋の眞ん中に落ち、そして轉々として、綠芝の端まで走つて止つた。

その組が打ち終つて、左りの松林の中の道を、通つて行く途中に、もう一組が打つ事になつてゐた。

『――さア、もう一組の方。』

番人が、さう云つて、彼女たちを促すやうに振り向いた。——後には、もう、婦人連れの外人の、四人組が詰めかけてゐた。

『いえ、私たちは、此の方々の後にお願ひしますわ。どうぞ、斯波さんの方からお先へ。ねえ。』

貞子が、連を顧みて、同意を求めた。

『え〻、どうぞ御遠慮無く。私たちはゆつくりで宜しいんでございますから。』

『でも、どうせ先が支へてゐるんですし、此方もゆつくり、樂しんでやつて行く方ですから。』

一應、黒田が辭退した。

『けれど、貴方がたに後から、追ひかけて來られると思ひますと、私たち、打てないんですもの。皆さまの後から、御手並を拜見し乍ら、從いて參りたうございますわ。』

『ぢやア、かうしようぢやありませんか。』岡が、進み出て云つた。『どうせ、二人づつでは何ですから、前も後も遲さうな四人組だし、此處で吾らも一組になつて、仲よく打つて行かうぢやありませんか。其方が、順序の運行もい〻し、お互に助かりますから。——ねえ君、それでい〻だらう？』

岡は、番人に許可を求めた。

『はア、關はないでせう。』

番人が、うつそりと答へた。

『ぢやア、貴女がたさへ、お宜しかつたら、さうして頂きませう、丁度それがい〻。僕たちも、何となく色彩に乏しいのを、嘆じてゐた際だから。——お差支無いんでせう？』

斯波は、寧ろ、貞子の伴れの三十歳位の、未亡人とも見え、美容師か何か、さうした職業婦人とも見える、もう一人の賢げな婦人の方を窺つた。

『でも、私たちは關ひませんけれど、却つてお手足纏ひでせうから。』

『こんなパブリック・コースへ來て、そんな事を、云つてる場合ぢやありません。さア、どうぞ先にお打ち下さい。御婦人がたから。』

岡が促した。

『さうですか。では、此方も丁度い〻機會ですから、御迷惑でも、一つ、お教へして頂きますわ。——それならお先に。』

貞子が、遂に胆を決めたと見えて、さう云つて微笑し乍ら、

「ニキビの方に急告！」
ニキビ吹出物には何と言つても
にきびとり美顔水
蚤蚊南京虫等でカユイ時にも不思議な位よく効きます

又、前のティー・グラウンドに立つた。そして、一度、假り振りをして見た後、心を落着けて、再びクラブを緩り振り上げると、優美なスヰングで、それを振り下ろした。球は、軟いが心に當つた快音を發して、白く、スーッと飛んだ。

『お丶、ビューティ！』

後の西洋人が、さう叫んだ程だつた。婦人は、總じていゝ姿態で、美しい振り終りをするものだが、彼女のは殊に、本格的なスヰングだつた。

續いて、もう一人の女史も、さう大きくは無いが、眞面な當りの一打を、左りの丘の中頃迄持つて行つた。

『やア、どうして、なか〳〵いゝショットぢやアありませんか。是ぢやア此方の斯波なぞの方が、ずつと打ち越されるかも知れませんよ。』

次に岡が、球を置き乍らそんな事を云つた。

『いゝから、早く打てよ。そんな事を云つて、お前こそ埒外球をしないやうに。』

岡は、全力を傾けて、クラブを振り上げ、打ち下ろした。途端に、球にはピシーッと云ふ音があつて、それは勢ひよく飛んだが、其まゝグーッと右方へ外れて、どうやらやつと、草の上に一バウンドはしたが、その第二バウンドで、右方の叢を越え、杉と雑木の木立の中の、懸崖へ落ちて了つた。

『そーら、云はない事ぢやア無いぢやないか。』

斯波が云つた。

『お前が、變な事を云ふのと清川さんに會つて、あんまり嬉しかつたんで、上つたんだ。』岡が答へた。

『まア、濟みません。』

『なアに、一つ位、洗禮を受けた氣で、却つていいですよ。其中に、向うもやりますから。』

『どうだか。まア、見てゐて呉れ。』

今度は、黒田が立つて、愼重に振つた。と、球は、そんなにいゝ當りでなかつたが、兎も角も、眞つ直に飛んで、下の草上へ落ちたらしかつた。

『ふん。ドップして、やつと、清川さんのと並んだか。男の癖に、見つともないぞ。』

『でもアウ・バンよりいゝさ。』

そして、岡が打ち直した。今度は岡の一打は、左方の松林の方を越えて、少し高くなつて

ゐる丘の中腹の、砂穴のあたりへ轉んだ。

『お待ちどう。』

さうして四人は、笑ひ興じ乍ら、左りの道を下つて行つた。

松の間の小道を、前後して下つて行つたが、その徑が緩やかになると、思ひ出したやうに貞子が云つた。

『あ、さう〳〵。御紹介申しますわ。』と、後ろの女史の方を、微笑して振り返り乍ら、『此方は洋裁をやつてゐらして、銀座にお店を持つてゐらつしやるから、御存じでせうけれど、米國歸りの小野田けい子夫人。』

『どうぞ宜しく。』

『此方は、うちの社長さん。』

『あら、矢つ張り、さうでしたの。まア。――』

『矢つ張りとは、何ですか？』

黒田が、微苦笑した。

『いいえ、どうもお話の様子で、さうぢやないかと存じ上げてゐたんですけれど。……清川さんから、毎度お話を伺つてますので、ひとりでに分りましたわ。』

『それから、此方が社長さんの棒組で岡さん。東洋海上の專務さんですのよ。』

『あら、岡さまなら、外處乍ら、存じて居りますわ。あの、蒲田の木曾路さんから度々、御贔屓になつて居りますので。――お噂は、それこそ伺ひ過ぎる位、お伺ひして居りますわ。』

『いや、どうも。……』

『おい〳〵。いゝ所で、アロプーチ・ショットを、ピン側に寄せられたぢやないか。』

斯波が冷かした。

『餘計な事を云ふな。――それより、小野田さんこそ、旦那さまを置いてき堀にして、こんな所へ來てゐるのは、どうなすつたんです？』

『あら、私への逆襲？　うちの主人は、今朝、私よりも早く起きて、下田の方へ、釣に行つて了ひましたのよ。で、私の方も、此の可愛いゝ貞子さんを呼び寄せて、瘦せ藥を兼ねたゴルフ道に、精進して居りますの。――でもようござんしたわね、貞子さん。私が呼んで上げた爲に、偶然、此處で皆さまにお目にかかれて。』

『でも、あんまり下手なんで、私、もつと後でお目にかゝりたうございましたわ。』

『いや、さうでもありませんよ。あのドライヴの具合ぢやア。斯波と丁度同じハンディキャップ位ですよ。』

『小野田さんは、婦人のハンディで、二十五でいらつしやいますのよ。』

『ぢやア結局、お互にいゝ仲間ですよ。――さ、それぢやア此處で、仲よく、左右に分れますかね。』

岡がさう云つて、左りの自分の球の方へ、歩いて行つた。

それで黑田と貞子とは、自然、右の方の自分たちの球の方へ、一緒に近づいた。

『――いつ、此方へ來たの？』

二人になると、黑田の言葉は、自ら親しみを帶びた。

『昨夜參りましたの。可なり晩く。』

『あの人たちと御一緒に？』

『いゝえ、一人で、後から參りましたのよ。淋しうございましたわ。』

『そして、何處へ、泊つたの？』

『矢つ張り、あの人たちと一緒のお宿へ。――村上とか、何とか云ふ家でしたわ。社長さんたちは、何方に居らしたんですか？』

『僕らは山藤。……』

『さうですか。私、結局、一人つきりにされて、詰りませんでしたわ。』

『ふうむ。さうと分つてゐたら、僕たちの宿屋へでも、招待するんだつたのに。』

『でも、さうも行きませんわ。』

丁度その時、前の貞子の球の所へ着いたので、二人は默つた。

貞子は、如何にも非力な婦人ゴルファーらしく、百碼ばかり

愈々大好評の姉妹篇！

久米正雄先生著

とりぐに咲く戀の花。心躍る青春の喜び、白百合の如き純潔な戀に甦るもの、涯しもなき愛慾の無軌道をゆくもの、戀の種々相を描き盡した二大傑作。

――全國各書店にあり――

東京小石川　大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

月よりの使者

可憐純情な看護婦野々口道子を繞ぐる愛慾の闘爭。凡ゆる嫉視、迫害、誘惑と戰ひつゝ堅く身を護る悲戀限りなき名小說。

定價一圓五十錢（送料十二錢）

白夜は明くる

湘南由比ケ濱海水浴場を舞臺に眉目秀麗の一青年と純情な一處女とブルジョア令嬢とが縺れ絡つて織出せる戀のロマンス。

定價一圓六十錢（送料十二錢）

の距離に、木のクラブを取り出して、それで打つた。打つた球は、少し上を打ち氣味だつたが、眞つ直に走つて、やつと綠芝の端近く行つた。

續いて、黒田も愼重に、七番位の金で打つて、高く球を上げて、其近くへ落した。

向うの岡と、小野田女史も打つて、球はいづれも旗の周圍へ乘つた。

『どうして、婦人たち、なか／＼正確だね。』

再び近づき合ふと、岡がさう云つた。

『其中に、馬脚をあらはしますわ。』

女史が答へた。

が、芝の上では、貞子は少し上つたと見えて、三パットを費し、黒田もうつかり三尺位のを、沈め損なつた。

『おい／＼。あんまり仲好く、眞似をし合ふもんぢやないぜ。』

『水心あれば、魚心さ。』

そして、彼等は更に笑ひ交し乍ら、次のホールに向つた。

次はショート・コースだつた。

そして其次の、第七番目のコースでは、又黒田の打つたスライス氣味の球は、右の傾斜を轉げ落ち、貞子のそれは手前だつたが、矢つ張り同じく轉げて、右方の平地へ出た。

『淸川さん。わざと打つたんぢやないでせうね。』

岡が冷かした。

『あら、その通りですわ。お手本通りに、眞似しましたのよ。』

貞子は、わざと惡びれずに、さう云つてやつた。そして二人は、再び一緒に其方へ赴いた。

今度は、黒田の方が、轉げて旗に遠かつたので、先に打つた。打つて、右へ外した。續いて貞子も打つたが、それも距離が足りなくて、下の低みに落ちた。

『――で、どうするんです、今日は是から？　其宿へ、矢つ張り歸るの？』

『えゝ。そして、一人で、東京へ歸らうと思ひますの。――貴方は？』

『僕も、今夜はどうしようかと思つてるんですが、何だつたら、一緒に歸りませうかな。』

『でも、岡さん、御一緒なんでせう。』

『いゝえ、彼奴とは、此のゴルフ場限り、お互に單獨行動で、自由と云ふ事になつてるんです。彼奴も僕も、自家への手前、まだ此の伊東に居ても、差支無いんですがね。彼奴は熱海へ行つて、誰かと會ふ積りらしいんです。』

『まア、さうなんですか？……不可せんわね。』

『貴方も、小野田さんと、行動を共にしなくてもいゝんですか？』

『えゝ、彼方も、旦那樣が下田から、お歸りになつて了へば、私はもうどうでもいゝんですわ。』

『そんなら、兎に角、一旦、僕の宿へ來ませんか。』

『はア、難有うございます。』

ちらと眞面目な顔に、彼女の表情は硬張つた。頬の血が、嬉しさのためか、却つて少し引いたやうだつた。

『そして、それから先の事は、此から此のホールの、成績で定めませう。』

黒田が、少し色氣を含んだ眼で、冗談らしくさう提議した。

『あら、それはおずるいわ。私の方の球は、あんな雜草へ、入つてゐるんですもの。』

『僕の方だつて、恐ろしい引懸つた位置ですよ。』

『ぢやア、ようござんすわ。運は天にお任せしますから。』

ところが、お互に打つて見ると、黒田のそれは、頭を上げたためか、完全に打ち損なはれて、二三間チョロ〳〵と走つたきり、貞子のが、思ひ切つて打つたために、僥倖にも穴の傍一間ばかりの所へ止つた。

『まだ分りませんよ。貴女の方が、二パットかゝつて、僕が一パットの所へ、寄せるつて手がありますからね。』

そして黒田のは、一生懸命に狙はれて、見事に穴から一二尺の所へ止つた。

『どうです。地力と云ふものは、恐ろしいもんでせう。』

胃腸の強化！

健康増進の基礎工作です！

▲食慾進まず、むかつき、吐氣をもよほす人…▲腹がはり、ゴロゴロブツブツ鳴つたり…▲ゲップが出て、空腹になると腹が痛む人…▲下痢し易く、便軟かく液狀で、時に粘液や血の混る人…▲胸やけゲップ、便秘を伴ひ段々やせる人…等々

…こんな症狀があつたら早速『イノール』をお服み下さい！

醫學博士

田口勝太先生創製

『イノール』は以上の症狀に對し當面の苦痛を除くのみでなく、胃腸を強くし、その機能を昂めるものであるから、之を服用すれば、食慾を進め、榮養の吸收をよくし、衰弱を回復して全身體の健康を增進します。眞に合理的新配劑の胃腸藥として好評です。

イノール

〔効能〕

▲慢性胃弱…▲消化不良
▲胃酸過多…▲胃腸カタル
▲胃擴張…▲過食過飲
▲胃下垂…▲二日醉

〔定價〕小…五十錢　大…一圓

全國有名藥店にあります

大日本雄辯會講談社商事部

ところが、貞子のパットは、さう一生懸命とも見えなかつたのに、スル／＼と草の上を滑つて、ポトリとホールの壺へ入つて了つた。……

灯取虫

黒田は、溫泉から上つた身體を、快い夕風に任せたまゝ、ヴェランダめいた緣側の籐椅子に、深く凭りかかつてゐた。二日間に亙るゴルフ疲れは、相當兩方のふくら脛に、重く殘つてはゐるが、溫泉に充分浸つて、揉みほぐした筋肉は、寧ろぐつたりと快く緩んで、湯上りの一杯のビールに、もう少し蕩然としてゐた。

連れの岡は、歸るより早く、湯に入つて了ふと、直ぐ歸り仕度をして、熱海の方へ行つて了つた。留守の間に、電話があつて、向うはもう熱海の宿へ來て、彼の來るのを待つてゐると云ふので、取るもの

も取りあへず、自動車を命じて、行つて了つたのだつた。——尤も、岡にどんな行動をされても、黒田の方には、何の云ひやうも無かつた。結局今日のゴルフで、彼は岡に二ダウンで敗けて了つたのだから。そして又、岡が一刻でも早く、行つて了ふ事は、彼に取つても都合が好かつた。黒田は去り行く岡に、わざと白ばくれて、

「——君がそんなにいそ／＼と、會ひに行くのを見ちやア、俺も堪らんから、清川君でも招んでやらうかな。」

と、冗談らしく云つた。

だが、その當の貞子は、どうしたのだらう？　もう六時は過ぎて、漫ろに人戀しい夕闇が、湯靄と共に罩めて來て、灯影さへ艶めいて點いたのに、やつて來ない。……あれから、殆んど同時に、彼女たちも伊東の宿へ歸つた筈だから、もう充分湯にも入つたらうし、仕度も出來た筈だ。さては、念入りに化粧を凝らしてゐるのかな。それとも何か故障を、あの小野田女史が云ひ立てゝ、彼女が出憎くなつたのではなからうか……。

ゴルフの後の、しかも湯上りの、一杯のビールの醉は、彼女を待つ氣持に伴奏して、何となく胸も漫ろだつた。彼は久しぶりで、何か青春時代の、夢を見てゐるやうに胸をときめかした。

こんな筈では無かつたが、時と所に依つて、其の拍子と云ふものは恐ろしいものだ。――彼は内に豐麗孔雀のやうな幸子を有し、外には新柳一流の美妓からちやほやされ乍ら、しかも彼れの配下の、一タイピストとも稱すべき小娘を、こんなに待ち焦れるとは。――

黒田は、少し焦燥を感じて來た。彼は、呼鈴を押して、女中を呼んだ。

『――あの、おビールでございますか？』

夕方になると、女中さへ化粧するのか、白々と見えた。

『いや、あの、夕飯の支度は、もう出來てるんだね？』

『えゝ。お二人前。――もう、お出ししても、宜しいんでございますか？』

『いや、それはお客さまが來てからだ、だから、一つ、電話を掛けて見て呉れ。村上へ。そして、小野田さんと仰有る方の所に、淸川さんと云ふ人が居る筈だから、其方が、此方へお出でになつたかどうか、聞いて見て呉れ。そしてね、何かお都合で、いらつしやれなければ、此方は此方で、歸つて了ふからつて、さう云つて呉れ。』

『はい。淸川さんでいらつしやいますね？』

『うむ、さう云ふ女の人だ。』

『畏りました。』

女中の去つた後、黒田は、飲み殘しのビールを、もう一杯ぐつと煽つた。――日に焦けて、健康さうに色づくと共に、少し贅肉を加へて、却つて若やいで圓く見える彼の頰は、更に美しく染まつた。

直ぐ、女中は、笑顏を湛へて、歸つて來た。

『あの、お電話申し上げましたら、淸川さんでしたら、もう此方へ、お出かけになりましたから、お着きになる時分ですつて。――だから、もう直ぐですわ。』

『あゝ、さうか。――』

『斯波さんのやうな方でも、お待ち兼ねになる事が、おありになるのね。』

『馬鹿云へ。』

そこへ、果して別な女中が、廊下を急ぎ足に來て、

『――あの斯波さん。お客さまですわ。』

と云つた。

『あゝ、さうか。では、どうぞ此方へお通しして呉れ。』

『では私が御案内申上げますわ。』

前の女中が、ニヤリと笑つて、一緒に去つた。

『松柏キネマの、鳥渡したスターだからな。失禮の無いやうにするんだぞ。』

追ひかけて、黒田は何か照れ臭く、そんな風に云つた。

やがて、さすがに愼しやかな足音がして、貞子が入口に姿を現した。

『――やア、いらつしやい。』
黒田は、わざと無邪氣に、さう云つて出迎へた。
『今晩は。――どうも遲くなりまして、御免なさい。』
貞子は、鳥渡膝をついて、少女のやうに御辭儀をした。
彼女は、濃藍色の粋な午後服を着てゐた。そのためか、顔や頸筋などが、いつもよりも白く、くつきりと艶いて見えた。唇の紅も、濡れたやうに濃かつた。そして睫毛さへ彩つたやうに、深々と黒瞳を睜つて、黒田の馴れぬ洋風の妖麗さが四邊を拂つてゐた。
『どうかしてゐたの、小野田さんで？』
少し、待ち兼ねた餘憤を含んで、黒田が云つた。
『いゝえ、たゞ、あの方が、私の髪を、御自分で直して下すつたの。――今日のゴルフで、少し亂れたもんですから、其儘では貴方にお目にかゝるのに、失禮だと仰有るのよ。御親切は、ほんとに難有かつたんですけれど、遲くなるんで、氣が氣ではありませんでしたわ。』
『ぢやア、君が此處へ來たの、あの人は知つてるんだね？』
『えゝ、勿論ですわ。そして私の氣持も。……あの人、それやア親切なのよ。』
ちらりと、窺ふやうに、彼女は黒田を見上げた。
『君の氣持つて？』
『私が誰方かに、嫌はれちや不可いつて、彼の人、一生懸命、御化粧を手傳つて下さいましたわ。』
『それで、そんなに綺麗なんだね。』
『あら。存じませんわ。』
貞子は、厭味でなく身をくねらせた。
『ところで、どうだい。折角の着物だが、それを一旦脱つて、もつと寛いぢやア。お湯には入つたらうが、浴衣の方が、氣持がゆつくりするぜ。洋服つて奴は、なか〳〵いゝが、どうも情合が映らなくて不可い。』
『あら、そんな情合なんて、映つてはお困りなんぢやないの？』
『さア。――兎に角、まだ歸るにしても、大分時間はあるんだから、着換へ給へよ。さうでないと、僕の方も均衡が取れない。』
『さうですか。では、さうさせて頂きますわ。』
『次の間に、もう君の浴衣は、來てゐる筈だ。何だつたら、着換へさせて上げようか。』
『御冗談を。――ほんとに、いらしちや駄目よ。』
彼女は、再び惡びれずに、次の間へ行つて、着換へ初めた。
其間に、此方には、食べ物や飲み物が、運ばれた。いつ、命ぜられたともなく、酒も一、二本付いてゐた。
『お待ちどほさま。――では、御用がございましたら、どうぞ呼鈴を。』

さう云つて、女中は去つた。

『さア、貞子さん。着換へが濟んだら、早く此方へおいでよ。僕は、お腹がキユウ〳〵云つてる。』

再び無邪氣に、黒田は呼んだ。

『鳥渡お待ちになつて。折角の伊達卷が、キウとよく締まらないのよ。――それに、伊達卷だけでは、失禮ぢやない？』

そして、ほんとにキウとしごく音がした。

『いや、關はないさ。今更そんな事を云つてゐては、一緒に飯を食ふ事も出來やしない。』

やがて、少し突つぱらかつたやうな姿で、彼女は袖を引つ張り乍ら出て來た。その妙に素人めいた姿が、黒田には又、堪へ難い魅力だつた。

『さア、此處へ來給へ。』

黒田は、自分の傍の、――向ひ合ひで無しに、――床の間の前を指した。

『あら、そんな上座？　いけませんわ。』

『上座も下座も無いさ。僕の此處は、一番いゝ席で、其次が此處だから、此處へ來給へ。それに今夜は、君が客だよ。』

『さう。ぢやア遠慮無しに、おとなしく坐るわ。――でも、鳥渡變ね。』

『變な事があるものか――。まア一つ。一杯、思ひがけない所で、會つた紀念に。――』

『難有う。ほんとにさうね。』

彼女は盃に酒を受けて、それを黒田とカチ合せ乍ら、一口飲んだ。

『岡さんは？　もう行らしたの？』

急に氣付いた如く、彼女は四邊を見廻した。

『あゝ、もう疾うに。今時分はもう熱海で、あの何とか云ふ女優さんと、是と同じやうな事をしてゐるだらう。』

『社長さんも誰方かと、そんな御約束が、おありだつたんぢやなかつたんですか？』

『それやア在つたかも知れんさ。が、君と此處で會つちやア、もう仕方が無い。僕は凡ゆるものを犧牲にして、交際ふ事に定めたんだよ。だつて、あの賭には敗けて、君の言ふ通りに、どうにでも成る約束だからね。』

『あら、さうですか。それはお氣の毒さまでしたわね。』

『だから今夜は、君もその積りで、覺悟を定め給へ。』

『えゝ、私もその覺悟ですわ。』

『だが、君のその覺悟つて、どの程度の覺悟だい？』

『私の？　ですから私は、御一緒に御飯を頂いて、御一緒に東京へ歸る覺悟ですわ。』

彼女は、わざとズバリと云つて、黒田の顏を見てやつた。

『ふうむ、さうかい。それだけかい？』

『それ以上の事は、私があのホールで勝つたんですから、私か

ら改めて要求しますわ。それに對して、貴方は拒絶を許しませんから、ようござんすね。』

『仕方が無いさ。それは。――まア、併し、物事には色々、妥協つて事もあるからね。どうだい、まア一杯。僕の杯も受けて呉れ給へ、少しは君も飲けるらしいね。』

『えゝ、少しは。味なんか、まるで分らないんですけれど、辻村さん所で、澤野さんや何かのお相手をして、時々飲まされましたから。』

『ふうむ、辻村の所で。……だが、そんな昔の話は、もう廢さうぢやないか。面白くないから。』

黒田は、少し苦り切つて、正直にさう云つた。

『あら、でも私、何だか今夜は、すつかりそんな、昔の話をしたいやうな氣がするのよ。ね、黒田さん、いや、黒田のお兄さま。久しぶりで、さう云はしてね。私、何だか先刻から、さう呼びたくて、堪らなかつたのよ。』

『さうかい。……そんなら、さう呼んでもいゝがね。』

黒田は、苦笑はしたが、黒田の兄さまと呼ばれて、何か甘酸つぱい思ひ出と、一種の色彩を感じて、悪い氣持はしなかつた。

『ではね、黒田の兄さま。私、今夜こそ、久しぶりで、本當にたつた二人きりになつて、こんな嬉しい事はありませんわ。そして、今夜こそほんとに、何もかもお兄さまに打明けて、又お兄さまの方からも、すつかりお心持を伺つて、そして、……』

彼女は、思はず口籠つた。

『そして？　どうするんだい？』

『そして、私の氣持と、お兄さまのお氣持とが分つたら、それで私、どうなつてもいゝのよ。私なんかどうなつても。……』

『それは又、非常に興奮してるんだね。』

『えゝ、だつて、私に取つては、ほんとに待つてゐた機會なんですもの。』

『ふうむ。』

黒田は、貞子の眞意を解し兼ねて、何か同じ激情の渦に、巻き込まれて了ひ乍ら、その輝く處女の頬を見凝めた。

『ね、お兄さま。私、何より伺ひたいのは、お兄さまは、ほんとにお姉さまを、愛してゐらしたの？』

『うむ、それかい。』さすがに黒田は、鳥渡暗い顔をしたが、やがて胆を定めたと見えて、強い男性的な低音で、腹の底から云つた。『それやア僕は、眞實の事を云へば、君の姉さんを、一番愛してゐたさ。―何と云つても、一番最初の人だし、又、本質的に、優しいいゝ人だつたからね。あんな人を捨てたのは、全く僕の、男としての野心のためだ。そして其點は、全くあの人に對しては、濟まない事をしたと思つてゐる。――尤も、併しあの時の事情は、一方の方が急を告げてゐたし、人情の當然で、仕方が無かつたと自分では思つてゐる。さうだ。仕方が無かつたのだ。』

『では、今でも姉さんの事を、時々、思ひ出す事がおありになる？』
少し沁々と、貞子は躙り寄つた。
『うむ、それは時々、ね。併し此間中は、ずつと忘れようと、强ひて努めてゐたからね。だが、君が僕の傍で、働いて呉れるやうになつてから、ふいと、時々君の姿の何處かに、姉さんを思ひ出して、妙に感傷的にさへなる事があるよ。』
『それやア、私なんぞ、姉さんに比べたら、十分の一も綺麗でないでせうけれど。……』
『いや、併し其點だけを云へば、寧ろ反對かも知れん。そして、僕は何だか、君を警戒し乍ら、いつの間にか、房子さんの複合寫眞でも見るやうな氣持で、君を愛しかゝつて來てゐるんだ。――貞子さん。君にその氣持、幾らか分るかしら？』
『黑田さん。貴方がさう仰有るんなら、私も私の本心を、今こそ申し上げますけれど、私は、實は初めは、矢つ張り姉さんの仇を打つつもりで、貴方ん所へ來たのよ。ところが、矢つ張り女つて、弱いものね。――貴方のお側で、仕事をしてゐる間に、私の方が、どうやら昔の姉さんが、貴方に對したと同じ氣持になつて了ひさうで、困りましたの。』
『貞子さん。君も矢つ張りさうだつたのかい？』
『ね、黑田さん。』
『何だい。』
『私、もう何だか、そんな事をすつかり申し上げて了つたら、身も世も要らないやうな氣持に、成つて了ひましたわ。』
『僕も、もう何だか、君が房子さんの妹だと云ふやうな、妙な警戒心を棄てゝ、君を明けつ放しに好きになつた。君になら、どんな目に會つて、どんな仇を討たれたつて、關はないやうな氣持になつた。――貞子さん。どうともう君の好きなやうにしてお呉れ。』
『黑田さん。私もですわ。』
兩人は、いつか寄り添つて、横に手と手を取り合つてゐた。
『さ、もうかうなつては、僕は君の意志に、凡てを任せます。――歸れと仰有るんなら、歸ります。厭だと云ふんなら、諦めます。……』
けれども、その言葉と反對に、彼の手は固く、彼女のそれを押へて、離さじとばかりに續けた。
『だが、……だが若し、貴女が許すならば、僕は、家庭を破壞しろとか、妻を捨てろとか、そんな無理を云はない限り、どんな事でも、貴女の爲になら、して上げます。』
『黑田さん、私、もう、……』彼女は、とう／＼彼の膝に、身を投げかけて、熱情の波に流され去つて了つた。『私、もう、……どんな目に在つても、ようござんすわ。……たゞ、姉さんのやうに、いえ、姉さんよりも、愛して下さい。……』
『それは云ふ迄もありません。――ね、貞子さん。今夜はもう、

歸らなくてもいゝんでせう？』

『だつて、貴方こそ、お歸りにならなければ、お家の方がお困りになるんでせう。』

『いや、それは僕、關はないです。』

『では、貴方のお好きなやうに。……私の賭の權利は、それだけですわ。』

彼女はさすがに、眞つ紅に染まつた頸筋を、彼の膝の上へ伏せて、くねらせた。……

其時だつた。廊下の方に、足音が聞えて、呼びもしないのに、女中が入つて來た。ギョッとして、黒田は手を離し、居ずまひを直して、睨むやうに其方を窺つた。

『何だ？……』

彼は訊いた。

『あら、此方で、お呼びになりはしませんでしたか。あの呼鈴の番號が、確に此方のが、出てゐたやうに思ふんですけれど。……』

『ふうむ。呼びやしないよ。』

黒田は、四邊を見廻した。が、黒い蛾は居なかつた。

『では、又階下の十二番と、間違へたんですわ。』

『では、序だから、御酒をもう一本持つて來て呉れ。』

女中は、再び銚子を持つて來て、云つた。

『あの、どうも濟みませんでした。矢つ張り間違ひでしたわ。でも、呼鈴まで、妬いてゐるのかも知れませんわね。』

黒田は、嘗つての新婚の夜の事を、まざ／＼と思ひ起し乍ら、その時にも增して、後暗さを振り拂つて、再び貞子に身を寄せた。

（つづく）

忍び寄つた惡魔は、又もや罪を作らうとしてゐる。美しい女性の身邊には、誘惑の魔手が絶間なく動くものだ。理智に冴えた貞子も、遂にその斷崖に追ひつめられてしまつた。晴れると見れば曇り、曇ると見れば又晴れる『晴曇』後篇は、今こそ本格的に筋を辿つて、歩一歩最高潮場面へと漕ぎ寄せて行く。更に面白い次號に一層の御期待を乞ふ！

臨時增刊を飾る諸先生の大傑作

江戸情話　大盗女傳……邦枝完二

現代小說　綠衣の女……加藤武雄

現代小說　凱歌無情……竹田敏彦

時代小說　澤の勘八月の森……長谷川伸

現代小說　こほろぎ橋小春物語……小島政二郎

大快報急告!!

親愛なる『富士』御愛讀の皆々樣!

愈々大壯擧斷行!!

臨時大增刊が發行されます。

何を措いても面白いこと第一の
破天荒極まる素晴らしい大內容、

總頁六百數十頁、全部讀切

本文、口繪未曾有の大盛觀!!
卷を開いてアッと驚く素晴らしさ!

勇俠、恋愛、痛快、滑稽、探偵、怪奇
面白傑作滿載号

ともかく息もつかず、次から次と面白くて堪らず讀んでしまふのが此増刊です。血が躍る、胸が騒ぐ、溜飲がさがる、可笑しくて堪らぬ、ぞつとする、讀み出したら最後、自分を忘れ、疲れも、苦勞も一度にすつ飛んでしまはうと云ふ **娯樂讀物の粋を網羅した傑作揃ひ、詳しくは折込みの豫告を御覧下さい。**

何分、出ないうちからどんなものが出來るかと大變な評判になつてゐますから、忽ち賣切れてしまひさうです。 **今すぐ御近所の本屋さんに御注文しておいて下さい。** 是を見逃しては『富士』愛讀者の不覺になりませう。

又とない絶好の機會です。

發賣は　九月十九日 是非々々御忘れなきやう！

敵討極樂手形（かたきうちごくらくてがた）

三上於菟吉
小田とみや畫

惡代官手代靑山權平の爲、無辜の貧農久助は、新妻お小夜を奪はれ老父久作を水牢の責苦に遭はされたが、其時現れたのは一代の怪俠左文字左門、一髮の間に權平の手から老久作を救出した許りか、別に奇骨の浪人松枝一平の加勢を得て、哀れなお小夜をも虎口を脫しさせ、遠く江戶に落してやつた。だが惡代官の魔手は何處までも延び、配下の一味は粕壁在で、山橋兄弟と名乘る不逞の浪人二人を手なづけ、目差す江戶へ今一歩の所で、あはれ松枝浪人お小夜の兩人を、網の中に入れようとする。

（前號までの梗概）

一平斬死

どうせ、田舍親分の用心棒として、而も兄弟二人で、のらくらな日を送り、錢と暇とがあれば、酒色に身を持ち崩してゐるやうな山橋兄弟、性格の下品は云ふまでもないのだが、この者ども、劍を取つては相當技倆が立つ上、喧嘩ずれがしてゐるから、修羅場の達引は、なか〳〵上手だとの評判を得てゐる。

　さうした二人を、偶然味方につけることが出來た本井役人、すつかり心丈夫になつて、今はもう、松枝浪人と、お小夜とを、わが手に捕つてしまつたやうに安心してしまつてゐる。

『あれに見えるのが、大澤の、宿の灯、相手は女連れ、あの邊で、宿を取つてゐないまでも、追ひついて、捕ることが出來ると思ひますが、何分、大物捕りには、足りぬ人數、何分とも、お力添を――。』

と、役人、しきりに、辭を低くして賴みを入れる。

『そのかはり、事、成就の曉には、かならずともに、お禮は充分いたしますゆゑ――。』

『いや、御念には及ばぬこと。』

と、山橋の兄の方が、

『高の知れた、浪人一人、どれ程の勇氣があらうと、拙者並びに弟、二人揃つてゐることでムるゆゑ、決して退け目を取ることはムらぬ。御安心を――。』

『その代り、何だな、本井うぢ。』

と、兄に輪をかけた、面皮の厚さうな弟、

『うまく仕すました上は、代官お手代とやらに、誓つて、われわれ仕官のお口入をお頼みしてほしいな。』

『それはもう、お言葉までもない。』

と、本井役人が、

『われ／＼のお手代は、お代官よりも、まさつてすぢ／＼に勢力のある御仁、必らず、諸侯方へなり、お役向へなり御推擧申すでムらう。』

『さうお願ひいたしたいよ。』

と、弟が、

『浪々の身も、はじめは暢氣ぢやが、長うつゞくと、宿無し犬のやうな、心寒い氣持も起つて來るでな――どうぞして、わが屋敷と云ふものを、持つて見たくもなつて來るで――。』

この連中、正直は正直なのに相違ない。が、利益の方向に依つて、風向き次第、どつちへでもへう／＼と、流れ移る生き方をしては、ゞからないらしく、つまりは典型的な漂浪主義者だ。

『御尤、御尤、今宵の御助力、相すみませば、それ等の邊は、いかやうとも。』

本井役人は、相手に言質を與へることが、あとで、とかく面倒を引き起すたねだとは考へたが、どこまでも機嫌を取りながら、差しかかつた大澤町――。

裏は、細長い宿で、その中ほどに橋があり、橋の北詰に、宿屋の、明るい灯が見えてゐた。

足を早めて、タツ、タツ、タツ――と追ひ込んで來た一行、ふと、前を見ると、恰度その明るい障子の前手を、南へいそいで行く男女連れ――女は旅裝束の女房風で、男は、背の高い浪人すがた――。

『おツ！　あれは、たしかに！』

と、本井役人が、叫けぶやうに言つて、手下一同に、

『拔かるな、みんな！』

と、命じて、兄弟に、

『あれでムる――捕り物の相手は。』

さすがに、一同、ちよいと緊張して、かたまつたが、兄弟が

『すぐ掛りますか？』
『町中ゆゑ――宿をはづれましたら――。』

一方、南にいそぐ男女の旅人――これは間違ひなく、左文字左門から、お小夜江戸送りを依頼された松枝浪人と、あの哀れな百姓女房とで、霜白い朝まだき、踏み出したばかりで、重なる心痛、不安と、身を切るやうな寒氣とのためにか、粕壁宿の入口で癪氣を起したお小夜を、やつと一日がかりで快復させて、さて、先きをいそぐ身、今夜の中に、一足も江戸に近づいて置かうと、この宿までは來かかつてゐたのだ。

　とは言へ、お小夜は、まだどうも、いつもの通りの健康になつてはゐない。夜道の、小石なぞにも、とかくつまづき勝ちでいそがうとしても、趾先が輕く運びかねるのが、松枝一平にもよくわかる。

　松枝が、例の明るい障子の宿屋の前を通りながら、
『どうぢや、行歩がすすまねば、この宿に休息いたしてまゐらうか？』

喘息
發作頻發の秋！ゼヒ『喘息エキス』を服用あれ
『喘息エキス』は發作を未然に防止する評判の喘息藥で、發作の起りかけに本藥を服用すれば烈しいせきが止まり、たんが切れ、苦しい呼吸が樂になつて發作の苦しみから免れます。習慣性や副作用がなく、慢性の難症によく効くのが特長です。（藥價 一・三〇 二・五〇 四・八〇 七・〇〇）―全國の藥店にあり― 東京・小石川・音羽 大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）發賣。

『いゝえ、わたし、もう大丈夫でござんす――旦那さまさへ、おかまひになりませんでしたら、江戸までは、八里とか聽いてをります――このままずッと――。』
と、お小夜の答はけなげだ。
一平は、
『左樣か、その覺悟なら、夜道を、ゆるゆると、江戸を樂しんで歩くのもおもしろいが、しかし無理はするな――戀しい人を萬に一つ、すぐにたづねあてても、病氣でも踏み出してゐては何にもならぬ。』

　そんなことを言ひながらも、宿屋の前を通り拔け、暗い橋を渡つて、
『何にしても、左文字先生の御鴻恩を、わすれてはならぬぞ。世の中に、ああいふお方はない。善惡正邪を見ること、淨玻璃の鏡のやうで、佛心とも何とも申しやうのない朗らかさで、打つものは打ち、許すものは許される――神さまだな、とんと。

　此の世の中で、あれまで立派な方を見ることが出來たのは、この一平の大幸ぢや。全く、二人とないな、ああいふお方は――そのお方が、御浪人をしておいでで、それなのに、あの青山權平のやうなものが、代官手代――公方の御慈悲を代つて行

ふ役人の一人とは!』

『わたしを、かうして、江戸へ出して下されて、あとで、左文字の殿さまに、何か、御危難でも? 相手が、あの通りのお代官ゆゑ——。』

と、お小夜、ついうしろに、自分達をつけ狙ふ、黒い魔物の一群が、追ひ迫つてゐるとは知らずに、恩人の身の上を心配してゐる。

浪人は笑つて、

『ハ、ハ、ハ、先生のおからだに向ける銃口は、まづ、青山輩には持ち合せが無いな。刃も、銃も、差し向けた當人の方へ、却つて仇をするであらうよ。』

話をしてゐると、かへつて道がはかどるやうで、寒夜の間の宿、道ゆく人もない町をいつか通り越すと、次ぎの、越ケ谷町との間の僅かな人家の途切れ——しいんとひそまつてゐた夜が、さあ〳〵と北の方から吹き立つて來たこがらしに、いくらか擾されて、ゾーッと、肌に粟立たせる冷たさが、背すぢに觸つて來る。

その中を、南へ志ざしながら、松枝浪人、フッと、何を感じたか

足を止めた。

『や！』

『え？』

と、お小夜。

『いや、何でもない。』

と、浪人、歩き出して、

『小夜。若し、あのダニのやうな手代の部下が、二人を追つて來るやうなことがあれば、拙者、ぐつと押へてゐるゆゑ、貴さまは、かまはず、江戸を差して、驅けつゞけろ。死ぬ氣で、驅けろ。この暗夜、何ともして、敵の目を、しのべぬことはあるまい。そのために、さきほど、粕壁の宿で、左文字先生からお預りの黄金を、貴さまに渡して置いたのぢや。な。拙者が、防いでゐるうちに逃げろ――拙者は、捕り方斬りつくして、あとから、追ひつく。わけはない。』

と、いく分、早口でをしへる。

『でも、まさか、お手代が、あとを追つて？』

『萬一を言ふのだ――さあ、先きに立つて歩め。そして、いつ、どんなことがはじまつても、おどろくでないぞ。闇から闇をしたつて、貴さまは江戸へ逃げ込むのぢや。』

いぶかしみつゝ、怖氣が立つて來たやうなお小夜を、先きに立てて、少し行くと、浪人、小聲で、

『小夜、少し不思議な氣配がする。わしは、うしろを調べるゆゑ、貴さま、かまはず、大いそぎでいそげ――何かはじまつたなら、なほのこと、あとをも見ずに、驅けるのだぞ――言ひつけを、守らねばならぬ。』

『はい――あい。』

『さ、行け！』

背中を、突くやうにして、お小夜を、先きに出して置いて、松枝一平、はじめて、ぐつと立ち止つて、大刀の鯉口を、鍔裏へ親指の腹を押し當てて、ブツリと切ると、ぐるりと振り返へつた。

うしろで、お小夜の、遠のく足音――。

キツと、闇を見透すと、昨夜あのやうに冴えてゐた月が、今夜は、すつかり掻き曇つた空に蔽はれて、沈して、灯もない田舍往還、ほとんど、鼻をつままれてもわからない、その墨いろの中に、何となく、生きものが、動く樣子がして、それが、妙にねつちりと、足音もさせず、近づいて來るのだ。

――ふうむ、やつぱし、何か跟けて來たな？――何者か？

身を屈めるやうにして、呼吸をととのへると、五六人の人間が、ひつそりと、足音を忍ばせて、押し詰めて來てゐるのだが、妙に殺氣がたゞよつて、そのしづけさといふものは、薄氣味がわるい程だ。

――とにかく待たう。小夜を、行かせたで、心にかゝることもない。

松枝一平は、いつ何どきでも、左文字左門のために、死なねばならぬと思ひ切ッてゐるのだ。左門にあづけたいのち、その人にかゝり合ひのあることで、要になれば、どんな風に召し上げられても、否やは言はないつもりなのだ。

だから、彼は、左門から頼まれた、小夜江戸送りといふ一事のためにも、一所懸命に働かねばならぬ。

詰めて來るのが、追落し、野伏りのたぐひならばよし、さもなくば――少くとも、木崎代官の息のかかつたものならば、一人一匹、生けてはここを通すまい。

一平は、道ばたに、いくらか、身をそばめるやうにした。

相手はどうしたか、なか／＼全貌をあらはさない。と、思ふと暢氣らしい武家言葉が、向ふで、聽えて、

『兄者、今夜は、沁みるなう。』

『うむ、拙者も、さづきの酒がさめて來て、どうにも、胴震へが來てならぬ。』

『越ヶ谷までまゐつて、あたたかい宿屋で、一酌、かたむけませう。』

――さては、思ひちがひか？

と、一平、歩み出さうとしたが、

――待てしばし。

あの奸黠な、代官の一統、どのやうな詐略を用ゐるかも知れぬ。

ぐつと、こたへて、そのまま、たゝずんでゐると、いよ／＼近よつて來た、二つの黒い影――。

向ふで、闇を透して、必らず、こちらの影が、目にはいつたらうに、怪しんだ容子も、驚いた模樣もないのを見て取つて、一平、案の定だ――と、さとつた。

――ふうむ、拙者のかはりに頼まれた、どこかの痩浪人だな――妙なものだ、昨日は青山から、左文字先生を斬つてほしいと頼み込まれたこの身が、今宵は、同じ青山から、拙者を斬つて貰ひたいと、談じられた浪人を引きうけることにならうとは――。

平然と、通り蒐るのを、向ふから、今一息で、何とか聲がかからうといふ、その出鼻を折つて、こちらから、松枝一平、

『あいや、御兩氏。』

タツと、踏みとまつて、

『う、何、何でムる？』

と、いふやうなことを、二人侍のどちらかが、もぐ／＼と言つたやうであつたが、二人の、足の踏み開きが、キツときまつて、おのづと、刀柄に手が――。

『お寒うござるな？』

と、一平、のんびり言つて、

『江戸へ行かるるなら、御一緒願はうか？』

この二人侍、もとより、山橋兄弟、から先きから出られて、その瞬間、迷ひが生じて、

――妙だな？　女がゐたはずなのに――。

と、ためらつたとき、松枝一平、のがさぬ氣で、待ちうけてゐた身で、突然、拔きはなつた一刀を、ぐつと、片手正眼に、

『よう揃つて、斬りにまゐつたな――うしろの方に、うじ／＼

薙ぎ伏せ、

腹に突ッ込み、

つの目が、側で、物

傷を負つた、山橋弟、片手突きに

平浪人の脇腹に、充分にはひつたのだ。

『む、やつたな！』

特選優秀　空氣銃

素敵に面白い雜誌が出來ます。

九月十九日發賣、詳細は本誌折込參照

いづれも……
彈力強く
命中正確
永久無税
の素晴しい優秀品ですから、安心して[illegible]し意氣込みです。

活動開始

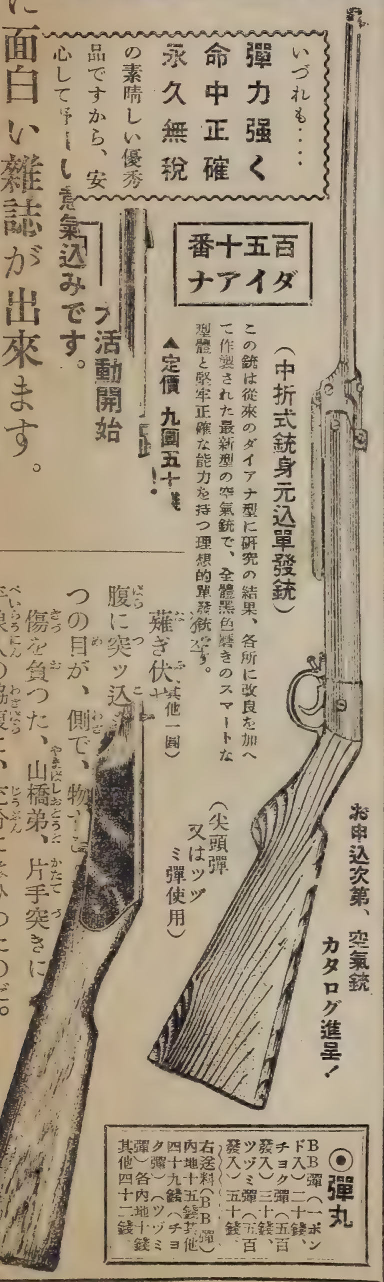
百五十番　ダイアナ

（中折式銃身元込單發銃）

この銃は從來のダイアナ型に研究の結果、各所に改良を加へて作製された最新型の空氣銃で、全體黑色磨きのスマートな型體と堅牢正確な能力を持つ理想的單發銃です。

▲定價　九圓五十錢（其他一圓）

（尖頭彈又はツヅミ彈使用）



お申込次第、空氣銃カタログ進呈！

◎彈丸
B B彈（一ポンド入）二十錢
チヨク彈（五百發入）三十錢
ツヅミ彈（五百發入）五十錢
右送料（B B彈其他）内地十五錢
四十九錢（チヨク彈）（ツヅミ彈）各内地十錢
其他四十二錢

背中を、突くやうにして、お小夜を、先きに出して置いて、松枝一平、はじめて、ぐつと立ち止つて、大刀の鯉口を、鍔裏二人とも中腹を押し當てて、プツリと切ると、ぐるりと振り返へ

『さすがに、よう見て取つた。山橋、今征討にまゐつたぞ！ 亂暴浪人、失せろ。』

と、兄の方。

『亂暴浪人――とは、おのれの方――恐らく、青山手代一味の甘言にたぶらかされたのであらうが、何も言はぬぞ――討ち取る。かかれ。』

『何を！』

と、皺枯れた調子で、弟が――これは、兄よりも、喧嘩には自信があるので、リ、リ、リ――と、寒い音がするやうに、切ツ先きを動かしながら、初太刀を志して、迫つて來る。

――ふうむ、殊勝な――！

松枝が、片手正眼の劍尖を、ジリ、と、少しまはして、山橋弟を迎へて、

『とう！』

と、かすかに、身を右に開くやうにすると、それに誘はれて、弟が、

『やあッ！』

と、飛び込んで來るのを、タツとかはして、

『えい！』

のためにも、一所懸命に働かねばならぬ。もつて、

詰めて來るのが、追落し、野伏りのこともせず、兄に備へてなくば――少くとも、木崎代官なしづけさで構へた一平に人一匹、生けておきたい。

一平は、この、月光の下で、左文字にかかつたときの、狙てた相手、別人の風格――恐らく、左文字左門から、微妙に感得した。何物かゞあるのであらう。

山橋弟は、物陰に、夜のけもののやうにひそんだ、本井侍、折作等の方へ逃げのびて、

『し、しばつてくれ、ここを――何を、あの瘦浪人！ 今、かたきを打つが――。』

と、言つて、腹立たしげに、

『が、貴公たち、何をしてゐるか――兄が、一人で、蒐つてゐるに――。』

本井侍、山橋弟の傷を、白布で、ぐい〳〵と巻いてやりながら、

『かゝれ！』

と、折作等に下知をする。

折作、多助、三作、揃つて、怖さながら、上役、浪人どもが見てゐる前、躊躇が出來ないので、

『やツ！』

『御用！』

と、上釣つた聲で叫んで、十手を振る。
山橋弟、本井役人、並んで戻つて來て、側をかためて、のがさず圍む。
松枝一平、例に依つての正眼を、ぐうつと、わざと引き上げて、
『來い！　うぢ虫！』
『何を！　とう！』
兄の方が、中段の刀を、心持ち下げて、ダアッと、突ッ込んで來ようとするとき、松枝、突嗟に、下げた刀で、擦り上げて錣責りの形にした途端、ぐつと突つぱなして、
『えい！』
全身の力が、切先三寸にこもつたやうに、充分に、相手の首すぢから、なゝめに胸を割りつけたので、
『わあッ！』
と、いふやうな悲叫と一緒に、山橋兄、ううんとのけ反つてだあんと仆れる。
力一ぱいの斬り下しで、いくらか隙が出來た松枝の左右から多助、三作が、ためらひもならず、
『御用！』
『取つた！』
と、組みつくのを、ツツ！　ツツ！　と、振りはなすやうにして、
『えい！　とう！』
と、二段に分けた氣合、所きらはず、斬り伏せて、折作の投げ繩を、身を沈めてかはして、飛び込んで、
『獄卒！』
薙ぎ伏せたが、その瞬間、チカリ――と、熱い、鐵棒を、横腹に突ッ込まれたやうな氣がしたが、見かへると、爛々たる二つの目が、側で、物すごくきらめいてゐる。
傷を負つた、山橋弟、片手突きに、横合から突いたのが、一平浪人の脇腹に、充分にはひつたのだ。
『む、やつたな！』

緊　告

遂にやつたか、と
誌界の大評判となつた『富士』の臨時增刊！
空前の大壯擧、未曾有の大飛躍！
印刷所も編輯も愈々緊張、大活動開始
然かも素晴らしい意氣込みです。
素敵に面白い雜誌が出來ます。
九月十九日發賣、詳細は本誌折込參照

——よう、やつた——。

と、いふやうに、一平、ニタリと笑つて、相手に、存分に、横腹をゑぐらせながら、たつた今、折作を、斬つた刀を、氣づかせず、下げて、ぐうつと肘を引いて、切ッ先きの狙ひは、山橋弟の、胸元——。

『うおッ！』

と、いふやうな叫けびで、突つ込む。

劍尖が、肋の隙を潜つてはいつたのは、心臟であつたか、

『あ、むうむ。』

と、詰つたうめき、刀を、一平の横腹に突き入れたまま、刀柄から手をはなして、グタ／＼と、居崩れる。

松枝一平、山橋弟の刀に、脇腹を縫はせたまま、ジーッと立つて、あたりを見まはしたが、もう、近づく敵もない。

『これで、みんなか？』

と、呟やいたが、急に、激しい沮喪が襲つて來て

『こゝらで、仕末をつけるか？』

氣絶でもして、空しく、もだえをつゞけて、他人に、醜状を見られまいとした松枝一平、よろ／＼と、道のべの、枯草の上へ來て、ドカリと坐つて、

——この世はおもしろくないこともなかつたな——さまざまの暮しをして來た拙者、よくまあ、斬り死にといふ奴が出來たものだ。

と、心に言つて、南を見入つて、

——小夜は、どこまで行つたか——さぞ安否を氣づかつてゐるだらうが、これで江戸までは、無事にはいれる。先生のおたのみは——

頭が茫として來た。

——いかん、いそがぬと——腹は、あやつが、切つて置いてくれたから——。

と、笑はうとしながら、大刀の切ッ先を、われと、咽喉もとに突ッ込んで、笛を刎ねて、その場に、うつぶしてしまつた。

闇の奥州街道を、習々たる夜の風が、冷たく／＼吹きすぎてゐる。

小夜ぎぬた

お小夜は、うしろ髪を引かれる思ひでひた走しりに南へ、南へ——。

——松枝さまは、どうあそばされたらう？　もしも萬一、お縄にでも、かゝるやうなことがなければよいが——。

と、心は、たえず引ッかかつてゐるのだが、どうにもならぬ女の身だ。

——おつしやつていらしつた。どこまでも、いそぎにいそい

で、江戸へはいつてしまへ――と。うしろはふさいで、下さると。みなさんが、案じて下さるのも、わたしを江戸へ入れて、戀しい良人にあはせて下さらうとするため――いそぎませう！いそぎませう！

彼女の、かよわい、女の足とは言へ、一所懸命、必死の想ひ――長い冬の夜があけるころには、いつぞや、良人久助が、危急に迫つて、左文字左門に救はれた、草加の松原もとうに通り越して、西新井の、み寺の屋根を、朝がすみの中にふしをがみ、いつか、千住大橋も越えようとするのだつた。

やつと、江戸！

お小夜は、たつた八九里のところながら、江戸のにぎはひを見るのが、生れて二度目、まだ、世の中が良かつたころ、見物に、祖父、祖母に連れられて來たことがあつたが、その時分はみんな樂しかつた――すべて樂しかつた。

お小夜はそのころ十三で、いい丈長の髪かざりや、半襟の紅いのや、錦繪を澤山買つて貰つたのを覺えてゐる。その錦繪を親るゐや、近所の子供に分けてやつて、よろこばしたこともあつたが――。

あの時分は、戀もなかつた。だから、苦しみも、煩ひもなかつた。

――久助さんは、どうしておいでなさるだらう！

江戸にも、いくらか、知り人、遠緣のものがないではないが逃散百姓といふものは、一度、司直の手に捕はれると、一族姻者にまで、迷惑がかゝるものゆゑ、あの用心深い人が、そんなところへ立寄るはずがないと、彼女には思はれるのであつた。

千住大橋を、通り越して、宿場にかかると、さすがに、ぐつたり疲れてしまつた、もう、一足もうごけなくなつた。

見れば、よし簀張りに、午前の陽光を、ほのあかく、あたゝかさうに浴びた、一軒の掛茶屋――。

その前を行きすぎかけたが、

――ああ、もう歩けない。

お小夜はつぶやいて、その掛茶屋にはひつて、緣臺にバタリと、腰を落して、そのまま、うつむいてしまふ。

『何を差し上げますえ？　おかみさん？』、

婆さんが、奧の、茶釜の蔭から、迎へる。

『あい、少しやすませて――お茶か何か？』

『はい〳〵、お疲れさま。』

昨日、癪を起して、苦しみもだえつゞけたお小夜には、一夜に、九里近い道は、少し難儀すぎた。ともすると、またしても胸の間へ、ぐうつと、上つて來さうなのを、片手を帶の間にやつと押へて、熱い茶をすすつたが、なに程か、身うちが暖まつて來て、人心地がつくと、又しても、悲しい、切ない想ひばかり――。

『どうか、なされましたか？　おかみさん――。』

と、婆さんが、駄菓子を盆に載せて持つて來る。

『はい――いゝえ、どうもいたしませんが、少し、くたびれたものですから――。』

『まあ、大そう、顔いろが悪い――それにお一人たびで――。』

『はい。連れはあとからまゐりますが――。』

『では、ゆつくり、やすんでおいでなすつた方が――。』

婆さんとの、かうした問答を、別の縁臺で、きりするめに何かを肴に、ちびり／＼と、呑んで、聽いてゐたのが、この大江戸の、入口の宿場々々に、日ごとのやうに姿を變へて、出張しては、何がな、儲け口を探してゐるやうな、ぜげん、人入れ、ぽん引き稼業の四十男。

八十八留と言へば、二ッ名を持つて、なか／＼通つた男なのだが、結城木綿を、カッチリと着て、足ごしらへも尋常に、ごく堅氣にいで立つたところを見ると、どこから見ても、さうした渡世の人間とは思はれない。ごく手堅い、小商人風――。

それが、お小夜を一瞥すると、キラリと、目を輝やかしたが、しかし、急には手を出して來ない。肉食獸が、生き餌を狙つたときのやうに、じつと、ためつ、すかしつ、飽くこともなく眺めて、相手の、性分、容貌、現在の心の中まで、すつかり見拔かうとしてゐるのだ。

お小夜は、うつむいてばかりゐる。

縁臺の下の、足のところを、冬の蟻が一匹たど／＼しく匍つてゐる。

彼女は、その小さい蟻が、何となく可哀さうになるのである。

――この蟻も、御亭主にも、お連れにも、はぐれてしまつたものかも知れない。かあいさうに――。

ふみつぶさないやうに、足を退けて、ホーッと、ため息を吐く。

そのため息が、例の、物堅さうな、八十八留の耳にひゞくと――

――ああ、ためいきが、あれで、三度目だ。他人の前でため息が出るのは、よく／＼のことだ。やつこさん、何か、よつぽど、苦勞があるぞ――。

その苦勞が、八十八留に取つては、この上なく好もしい。

彼は、しづかに、聲をかけた。

さも、實直らしく、

『若し、あねさんえ――おかみさんえ。』

雜誌週間記念として本社の九大雜誌が聯合して、別項の如く特別大懸賞の募集をいたしました。應募者は葉書の裏面に次のやうに書いてお出し下さい。
尚詳しい規定は八六頁にあります。

答（一、二、三、）
特賞の希望賞品名（　）
住所
氏名

お小夜は、ふりかへつて、八十八留と目が逢ふと、靑ざめた頰へ、いくらか血を上らせて、

『はい――わたしでござんすかえ?』

『いかにも、あなたのこと――。』

と、物堅さうな商人は言つて、

『何氣なく、聽いてゐると、何だか、どこか、苦しさうな、ためいき――もしや、からだの工合が惡いなら、さいはひ、わしが、持藥を持つてをりますが――。』

その調子が、馬鹿に、深切さうなので、引き入れられて、

『いゝえ、どこも惡うはござりませねど、つい、ためいきが出たのでござんせう――お耳にはいつて、すみませんでござりました。』

『何のすまないことが――。』

と、八十八留は、親しげに、

『とは申せ、ためいきといふものは、よほどのことでなければ出ないもの――何か、御苦勞でも、ござりますのかえ?』

訊かれて、返事の出來る苦しみとは、性が違ふ。

しかし、つい、答へてしまつたのが――。

『いゝえ、さほどの苦勞も、ござんせんけれど――。』

と、舌が澁つて、

『た、たづね人に、うまく行き逢へますかどうかと、それが氣にかかつてゐるものでござんすから――。』

ああ、お小夜――これほどの苦痛の中に生きながら、やはり女だつた、淺墓だつた――。

これだけ聽けば、相手はすぐに、からみついて來ずにはゐない。

『ほう、お尋ね人な?』と、舌なめづりをして、

『して、その方は、どこにおいでなさるのか? 江戸のことならくはしいゆゑ、道順もおをしへいたしませう。』

『ところが、それが――。』

『えツ、では、どこにゐるか、たしかに見當がないと、お言ひなので?』

もし、茶店の婆さんが、この八十八留の本性を知つてゐてくれたなら、その邊で、何とか、口をはさんで、怖ろしい毒牙から、お小夜を救つてくれたに相違ない。それが、この婆さん、この人間を、二三度、見世で見かけはしたが、くはしいことを何も知らぬのだ。

只、お茶代を、よくはずむ、客人だとしか思つてゐない。

K四九七
東海林太郎愛唱名曲集
聽くべし、唄ふべし、我らが東海林の愛唱名曲集!!
一枚のレコードで彼の愛唱流行歌が六曲きく事が出來る、これこそキングのみ企て及ぶ獨特自慢盤です。お早く御試聽下さい。
キングレコード

『ねえ、その尋ね人の、居どころが、わからないと、お言ひなので？』

と、八十八留は、乘り出して來る。

お小夜は無言――うつむいて、またしても、例のためいきをついてしまふ。

八十八留は、いよいよ鋒鋩をあらはして來た。

『それに、まア、この大江戸で、雲をつかむやうなはなしで、ございますねえ。して、そのお尋ねのお人といふのは、男のお人でそれとも女のお方？』

『はい、實は、わたしの連れ合ひ――。』

言ひさして、唇を噛むお小夜――。

『ほほう、お連れ合ひをな？』

ニヤリと、人知れず笑つた相手、

『では、お連れ合ひが、家出でもなされて、お探しになるのでございますかえ？』

『いえいえ。』

と、お小夜、自分が、良人に捨てられた女と、思はれたくなかつたので、

『家出と申しましても、恥も何も忘れてしまつて、好んで、捨てた家ではなく、しかたなく立ち退きましたこと、――どうしても、あはねばならぬことが、出來ましたゆゑ、たづねてまゐるところでござります。』

八十八留は、事情通だ……時勢通だ。

これまで、お小夜の話を聽くと、

――は、はん、わかつた――この奥州街道は、年々の凶作つづき、土地の百姓が、年貢ををさむることがならず、お上に責められるので、逃散して他國に走しるものも多いとのこと――では、これも、さうした者の女房か？ それならば、ためいきも無理ではない――が、鄙には稀れな――と、言うては、月並になるが、まあ、これで磨いたら、吉原にも少ないしろもの――

――どうあつても、これは物してしまはねば。

舌なめづりをせんばかりの、八十八留、いつかわが席を離れてお小夜の縁臺に來た。

（つづく）

前門の虎、後門の狼!! 一難去つて又一難、いかなればかくまで痛恨を極はむる美女お小夜が運命ぞや？ あはれ侠勇松枝浪人も恨みの邪劍に仆れ、今は纖手單身大江戸の舞臺に夫を探ね出さうとするお小夜の悲しい運命!! 乞ふ次號を御期待下さい。

三上於菟吉先生の大力作

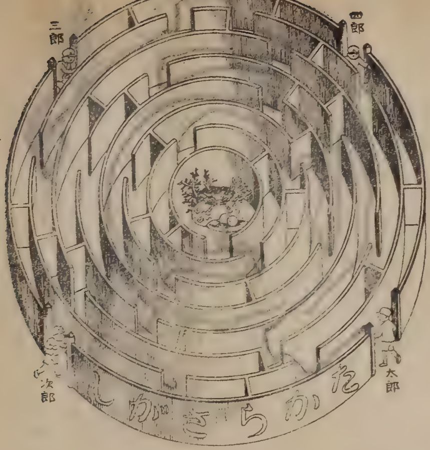
時代小說 雲に鳥無常劍

本誌の臨時増刊に發表！

愛讀者慰安

雑誌週間記念
九誌聯合 大懸賞募集

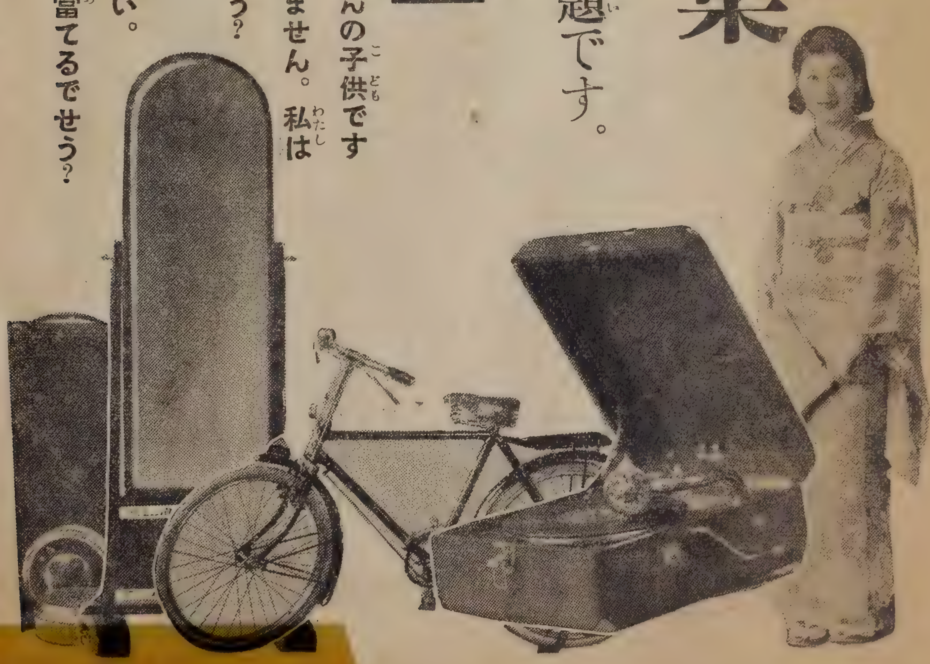
どなたにも出來る面白い問題です。奮つて御應募下さい。



問題

一、私は私のお父さんの子供ですが、息子ではありません。私はお父さんの何でせう?

二、寶さがし
上の圖を御覧下さい。
どの子が寶を探し當てるでせう?



51350名當選

三、レコードの表面には音の出る細い線がありますが、一體片面に何本ありますか？レコードを見なくても考へれば判ります。

大賞品

△特賞＝三百名

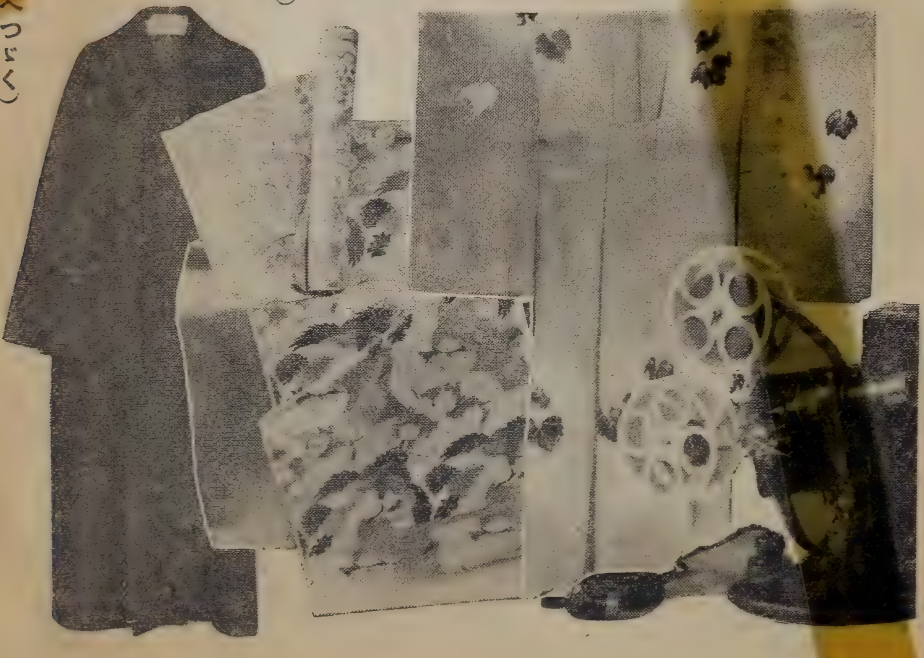
一、山葉オルガン（一臺づつ三十名）

二、新春用婦人訪問着（一枚づつ三十名）

三、スメラ映寫機（フイルム二巻附）（一臺づつ三十名）

四、キングポータブル蓄音機（レコード二枚附）（一臺づつ三十名）

五、西陣糸錦丸帯（一本づつ三十名）（次頁へつゞく）



六、子供用高級冨士自轉車（一臺づつ三十名）

七、大型姿見鏡臺（一臺づつ三十名）

八、軟式野球道具一揃（一揃づつ三十名）

九、紺無地三ツ揃背廣服（御寸法を頂いて調製いたします）（一着づつ三十名）

十、和服用二重廻し（一着づつ三十名）

△一等＝一千五十名

一、レート化粧料詰合せ函（一函づつ　百名）

二、アース双眼鏡（サック入）（一箇づつ五十名）

三、片側帶（一本づつ百　名）

四、クローム腕時計（一箇づつ五十名）

五、トンボ手風琴（アコーデオン）（一箇づつ　百名）

六、野球ゲーム（一臺づつ百名）

七、ハンドバツグ（一箇づつ五十名）

八、象牙認印付二色シャープ鉛筆（認印は彫つて差上げます）（一本づつ百名）

九、オリンパス刺繡糸組合せ函（一函づつ百名）

一〇、葉書用謄寫版（一臺づつ五十名）

一一、上等萬年筆（一本づつ五十名）

一二、ミヤタバンドハーモニカ（一箇づつ百名）

一三、手品種明し（一組づつ百名）

△二等＝一萬名

三十錢圖書券（一枚づつ一萬名）

△三等＝四萬名

キング文庫（一部づつ四萬名）

應募規定

▲用紙は、官製ハガキでも差支ありませんが、整理上なるべくこの應募用紙をお使ひ下さると便利です、この應募用紙を正しく切取りこれと同じ大きさの厚紙(畫用紙程度)に貼りつけ、二錢切手を貼つて御投函下さい。

▲裏面の書方は、八三頁にも示してありますが、答と、特賞の希望賞品名と、住所氏名をハッキリお書き下さい。

▲解答＝三問題のうち二題以上出來た方は正解者といたします

▲〆切
昭和十年九月三十日までに本社着のこと。

▲發表
『富士』昭和十年十二月號誌上

▲當選
正解者多數の場合は嚴正公平なる抽籤により各賞品の當選者を決定いたします。

▲賞品
賞品は發表後一ヶ月以内にお送り致します。

(規定に反したものは沒書とす)

(切取線)

東京市小石川區
大日本雄辯會講談社
九誌聯合大懸賞 富士係行

二錢切手をはる事

(第四種郵便)

(切取線)

戯曲　不如歸（ほとゝぎす）

原作　德富蘆花

脚色　眞山青果

戯曲『不如歸』の完成に就て

『富士』九月號の豫告に報ぜられましたやうに、蘆花著小說『不如歸』が今度、眞山靑果樣により新に脚色され、長い年月、劇に映畫に、さまぐ\に厚化粧させられて來ましたのが、さつぱりと洗ひ淸められて、瑞々しい姿で皆樣に見ゆる事になりました。戯曲に於ける此復活を私は老いも忘れて欣喜雀躍するを禁じ得ません。

不如歸の脚色に就ては蘆花在世中より眞山樣のお心にしめられてあつた默契があり、不如歸百版の序にも『久しぶり讀むで見た。お坊ちやん小說』云々と不滿をのべ、『どうにかしたい』と述懷して居り、紅いストーブの前の夜話などでも『戯曲が簡潔で、實感がつよくてよい、俺も書いてみようかなあ。』など申しては、彼の心は眞山さんの方へすうと走るのを私は知つて居ります。そんな次第で私も希くは私の存生中に實現して頂きたいものとの念願を持つて居りました。が時到らず、年は移り、蘆花逝いて九星霜をかさねてしまひました。今日の眞山樣は今更申上るまでもなく劇作の巨匠、御研究に御創作に惟日も足らぬお忙しさ。最近は御健康さへ勝れずおいでになるといふ中に、お願ひするなどは心ならぬ事でございます。然も單にお書き下ろしとちがひ、全く義俠的な御努力で、亡夫が『寄生木』を書きました際、もう愈々と申しましたことも思合はされて、私にはお骨折がよく分ります。それはお氣の毒とも何とも恐れ入るばかりでございますが、因緣事とでも諦めて頂く外ございません。

抑々眞山樣が初めて故鄕仙臺から御上京になりましたは、たしか明治三十六年、不如歸が出て三年、思出之記が出て二年目、思へば三十二年前の事になります。私共の著小說『富士』の第三卷『來訪帳から』の章に左の一節がございます。

『――此靑年を熊次は好きであつた。――此可愛氣な若者を如何したものであらう？　折角の其志を無にしたくない。然し――到頭師たる事を辭した。』

右は其頃丁年になるかならずの眞山靑果樣を記錄した一節でございます。それから後お目にかゝりましたも十指をさうくりかへす程には到りませず、外眼には無緣のやうにさへ見えましたでございませう。然し最初の一瞥の好感は生涯消ゆる事なく、心の目を離した事はありませんでした。

蘆花が亡くなりまして眞山樣が粕谷に墓參にお出になり、落涙滂沱寫眞の前に默坐久うしたまうた時の事を私は忘るゝ事が出來ません。今日この事の成る決して偶然ではございません。そして日頃の念を晴らして頂きました事を衷心からあり難く感謝して居ります。

茲に　眞山靑果先生脚色『戯曲不如歸』の完成のうれしさを靈前にのべ、聲なき聲と語りあひます喜びを、悅んでいたゞきたうございます。これで肩の荷が下り、ほんとうに安心致しました。そして後日の爲にこれを、

戯曲『不如歸』の定本と銘打たして頂きます。

昭和十年初秋　　徳富愛子

第一幕

その一

所は赤坂氷川町なる片岡中將の邸宅、階下の廣間、應接間をかねて、家族室ともなる洋室。

中將は永らく海外に留學生活を送りたる人、夫人も亦、長くロンドンに留學せし事があるため、自然その家庭生活も、規律ある英國紳士の生活體面に近きものがある。家屋建築のごときも、當時御傭の某外人技師の設計監督に成りたるため、その構造がよく統一整合して、亂雜なる明治期洋式建築のうちにては、異彩あるものと稱されてゐた。(式樣はルネサンス式に似たり)從つて、今この舞臺にあらはるゝ室內裝飾の如きも、概して質素であるとは云へ、その施設に於て間然する所なく、殊に將軍は外國人に知友多く、その來訪者も多きため、室內裝飾の隅々までその注意ゆきとゞきて、ぶこつなる一介の武弁の居宅としては、寧ろその趣きの深きに驚かせられるほどである。左右に通路あり、正面出入口の上手下手に大窓二つありて、その窓外には青葉及び栗の花の咲き盛りたるが見ゆる。書棚、卓子、椅子等の調度——。

室の內外の情景については、原作者德富蘆花先生は——『卓子には青地交趾の鉢に植ゑたる武者立の細竹を置けり。頭上には高く兩陛下の御影を揭げつ。下りて彼方の一面には「成仁」の額あり、落款は南洲なり。架上に書あり。煖爐緣の上、隅なる三角棚の上には、內外人の寫眞七八枚、軍服あり平裝のもあり。草色の帷を絞りて、東南二方の窓は六つとも朗かに明け放ちたり。東の方は眼下に人家蠢き家累れる谷町を見越して、靑々とした靈南臺の上より、愛宕塔の尖、尺ばかり露はれたるを望む。鳶ありて其上を盤りつ。南は栗の花咲きこぼれたる庭なり。其の絕間より氷川社の銀杏の梢靑鉾を樹てし樣に見ゆ』と記してゐる。

時は明治二十七年五月の下旬、時恰も朝鮮には東學黨の蜂起があり、暴動は曳いて、同國に全國的動亂を起さんとなし、且つは國際間の事情をも刺戟して、まさに風雲の急を告げつゝあるの頃。即ち淸國は、既に三營一千五百餘名の兵を韓國に出兵せしめたとの風聞があり、日本も是に對して、大島混成旅團を派遣するとの噂を傳へ、爲に日本國內の輿論は、開戰、平和の兩論に分れて、議會も亦、今や其の激論に沸騰してゐる最中であつた。——

——さうした慌しい空氣にある五月下旬、某日の午後——

時頃。

小間使きよ、西洋室の掃除を終り、來客用の煙草盆、吸殼落しなどを卓上に整理してゐるところ。一杯に開きたる窓より五月の薫風は爽かに吹き入り、二女駒子の稽古するオルガンの音、靜かに階上より流れ來る。

稍々暫らくありて、陸軍中將子爵片岡毅、副官難波中尉を伴ひて陸軍省より歸り來る。きよは其の突然の歸宅に駭き、慌てゝ出で迎へる。

片岡中將は、當時豫備にこそ居れ驍名天下に隱れなく、畏きあたりの御覺えもめでたく、誠に國家の柱石とも云ひつ可き將軍にて、原作者は其の風貌を描いて『五十に間はなかる可し、額のあたり少し禿げ、兩鬢霜漸く繁からむとす。兩の肩怒りて頸を沒し、二重の頤直ちに胸につゞき、安祿山風の腹便々として、牛にも似たる太腿は行くに相擦れつ可し、頬の色は思ひ切つて赭黑く、鼻太く、唇厚く、鬚薄く、眉も薄し。唯此の體に似げなき兩眼細うして光り和らかに、宛ながら象の眼に似たると、今にも笑まむずる氣はひの斷えず口邊にさまよへるとは、云ふ可からざる愛嬌と滑稽の嗜味をば著しく描き出しぬ』と表現してゐる。

きよ　あ、お歸りでございますか。（副官に向つて）奧樣は御存じなのでございませうか……。（獨言ちつゝ勝手の方に走り去る）

將軍は無言。大股に窓際に歩み寄り、兩手を腰に當て、さながら深呼吸をでもなす如く、暫らくは凝ッと窓外の青葉を見つめゐる。

其の間に副官は、いつもの如く手提鞄より書類、老眼鏡、擴大鏡、鉛筆の如き類を取出し、順序よく卓上に置き並べる。

將軍　（ふりかへりて）難波君、二階の方が可い。

副官　は？

將軍　大地圖を二階のテーブルにひろげて。

副官　はい。

副官、卓上のものを元の如く取りまとめ、二階々上の書齋に去らんとする。

將軍　あ、些ッと。さつき丸善から屆いた『クリミヤ戰爭史』があつた筈ぢや。少し讀みませう。

副官　はい。

副官は鞄より其の書を取り出し、象牙の紙切ナイフと眼鏡を添へて、手近かの卓子の上に置き、默禮して去る。

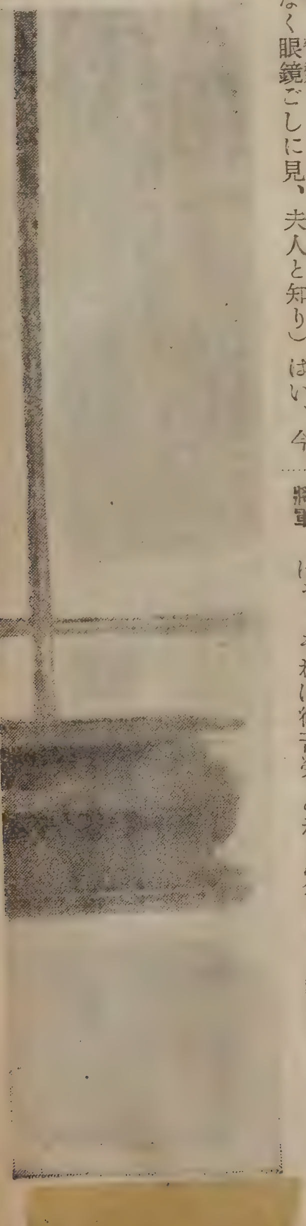
やがて將軍は椅子を引寄せ、老眼鏡をかけて、讀半しの中途よりその書を讀まんとする時、夫人繁子、正面の大

扉より入り來る。

夫人は歴としたる長州士族の出なれど、早くより英國に留學して西洋風に染みたるためと、四十前の年齡の割にはや〻派手好みの風あるため、一見したるところにては、何んとなく理窟めき、高慢さうに見ゆるところがある。原作者は夫人の風貌を描きて「三十八九丈高き婦人なり、束髮の前髮をきりて縮らしたるを、隆き額の上にて二つに分けたり。や〻大きなる眼少しく釣りて、何處やら些險なる所あり。地色の黑きに薄すり刷きて、唇を稀に漏る〻齒は眩ゆきまで皓く磨きぬ。パッとした御召の單衣に黑繻子の丸帶、左右の指に寶石入りの金環價高かるべきをさしたり」といふ。

夫人　お歸り遊ばせ。今日は大層お早うございました。

將軍　あ〻ん。（何心なく眼鏡ごしに見、夫人と知り）はい、今日は、案外早く濟ンました。



夫人　毎日の御會議續きで、御苦勞のこと〻存じます。

將軍　暫く豫備にゐて、久しぶりに現職に復したので、ちよッと勝手が分りませんでのう……、ははは〻。

夫人　先き程も號外など出ましたやうですが……、お役所の方も定めて大變でございませう。

將軍　はい、世間は大分騷いどるやうです。（間）が、世間が騷ぎ出した時分に、我々も一緒に忙しいやうぢや困ります。我々の忙しいのは、その前ですわい。時に――浪さんは？（と、夫人の顏を見上げる）

夫人　は、昨日の手紙には、慥か、三時とか申して居りましたが……。（煖爐臺の置時計など見る）

將軍　もう用意は出來てますか。

夫人　はい。今日はもう、朝から私が自分で、臺所も、何も彼も、一人で致して居ります。

將軍　ほう、それは御苦勞。あれも定めし、感謝しませう。（間。

何か思出し）先刻、風月堂の者に云ひつけて置きましたが……。

夫人　あ、飾り菓子でございますか、先き程届いて居ります。

將軍　御苦勞です御苦勞です。今日はウンと、わしも御馳走になりませう。はゝはゝゝ。（と、本を讀む）

夫人　（少しく眉の根を曇らしたが、やがて）そして御召更へは？

將軍　は、直ぐ。（讀書）

夫人　では、お茶な

と入れさせませう。

夫人は五六歩、部屋を去らんとして、將軍を見返り、立ちどまる。

夫人 あの、これは……。

將軍 (顏を上げ)は、何んでごわす。

夫人 いゝえ、これは只今申し上げねばならぬと云ふほどの事でもありませんけれど……。

將軍 (少し不安さうに夫人の顏を見て)何んですか。

夫人 いえ、家庭の小事でございます。いつも申上げる通り……子供達の教育のことや、家庭の細かな事は、なるべく母親にお委せ願へれば……。

將軍 浪子の事ですか、何んですか?(やゝ狼狽の色を表はして夫人を見る)

夫人 いゝえ、特に浪さんの事と云ふ譯ではありませんが……(一種の笑みを含みつゝ)女の子は女の親とも申しますから、なるべく、こま〴〵した家事上の問題は……。

將軍 (明かに狼狽の色を見せて)いや、お委せしてゐます。家事上のことは萬事貴女にお任かせしてあります。今日は土曜日で、役所の會議が早う濟んだから歸つて來たので、決して浪子のために早歸りしたのぢやありません。

夫人 いえ、それはよく分つて居りますが、たゞ……。

將軍 そりや、親として、浪子に早う逢ひたいとは思ひましたが、お勤めを粗略にして中途から歸るやうな――。

夫人 いえ、そんなに仰しやつては困ります。たゞ、浪さんとわたくしとは生さぬ仲――それだけに、母親としての責任を重く感じ、是でも、わたくしは、十二分に注意致してゐる心算でございます。

將軍 是れや可かん、是れや可かん。はゝはゝゝ。(紛らかすやうに大聲で笑ふ)その事なら、不斷深く貴女の親切に感謝してゐます、感謝してゐます。ま、ま、はゝはゝゝ。(幾分か話頭を轉づる氣味もあつて)では、今日は貴女の手料理でウンと飲みます。御馳走を頼みます。はゝはゝゝ。(と、又書を讀む)

夫人、何か云はんとしたが、思ひ返して勝手の方へ去る。微風おもむろに吹き來りて、窓外の栗の花、蒸せるが如くに甘く匂ひ、オルガンの音、靜かに續く。やゝ暫くありて、將軍の長男毅一と三女道子、忍びやかに扉を開けて入り來る。原作によれば、毅一は八歳位にて、膝きりの水兵服を着し、編上げの靴をはく。道子は五六歳にて、紫矢絣の單衣に紅の帶をし、髮は振分けになすといふ。二人は、いたづらさうな目を見合はせ、何か首肯き合つて、讀書せる中將の左右より矢庭に飛び付く。

毅一 お父樣。

道子　お父様只今ア。

將軍　おう、歸つたか。（と、本を置きて笑顏となり、毅一の肩を拍き、道子の髮を撫でながら）何うだ、小試験は濟んだか……結果は何うぢや。

毅一　僕アね、僕アね、お父様、僕ア算術は甲で……。

道子　私ね、お父さま、今日は縫取がよく出來たつて、先生お譽めになつてよ。（と、懐から幼稚園の製作品を出して父の膝の上に置く）

將軍　おう、こら立派に出來たぞ。

毅一　それからね、僕アね、習字に讀書が乙で、あとは皆丙なの……。水上の奴に負けて口惜しいや。

將軍　口惜しかつたら勉強するさ。

毅一　うん。僕、ウンと勉強して、この次ぎには屹度水上を負かしてやる。

將軍　さうしろ、さうしろ。勉強する者が偉くなれるんだぞ。――今日は修身の話は何んぢやつたか。

毅一　今日はね、お父様、楠正行のお話よ。僕正行大好きだ。けど、お父様、正行とナポレオン、何方が偉いの？

將軍　さう。何方も偉いさ。

毅一　僕アね、正行も大好きだけど、海軍が猶ほ好きだよ。お父様が陸軍だから、僕ア海軍になるんだ。

將軍　はゝはゝゝ、川島の兄さんの弟子に成るのか？

毅一　でも川島のお兄さん少尉だらう。僕ア中將になるんだ。

將軍　何故大將にや成らんか。

毅一　だつて、お父様が中將だからさ。お父様より偉くなつたら惡いからなア。

將軍　はゝはゝゝ。そんな事はないさ。お父様より偉くなつて、お國の爲めになるやうでなくちや駄目だ。

道子　（父の膝を揺り動かして）お父様、お父様……お父様てば……。

將軍　うん、うん、うん。

道子　お父様、毅一ちやんとばかり話してあたしとお話して下さらないんだもの、酷いわ。（拗ねる）

將軍　きくよ、きくよ。どんなお話だ？

道子　今日幼稚園でね、きいて來たお話よ。兎と龜のお話。――或るところに兎と龜とが居りました……。

毅一　そんな話、面白くも何んともないよ。僕、桃太郎のお話を致しませう。

道子　いや、いや、毅一ちやん、人の話を邪魔するんですもの。ようお父様、あたしのお話をきいて頂戴てば……。

毅一　駄目だい、僕が先きだい。

道子　あたしよ、あたしよ。

將軍　待つた〳〵。さう兩方から一緒に責め立てられては、お父さん、何方を聞いて可いかわからんぢやないか。仲好く交

ろ〳〵話してくれんでは困る。（微笑みながら双方をなだめる）

副官　副官難波、一葉の名刺を持ちて入り來る。
閣下、御來客でありますが……。

將軍　ほう、誰方……。（名刺を見て）山木兵造——、聞いたやうな名ぢや。

副官　陸軍省出入りの、御用商人でございます。

將軍　さう〳〵、川島の老母から聞いた人ぢや。通して下さい。

副官　（やゝ意外なる表情にて）お會ひになりますか。

將軍　何故——？

副官　御用商人としても、少しく風聞のある人物ですが……。

將軍　通して下さい。會うてみませう。

副官　はい。

副官、去る。

將軍　さ、お客様ぢや。あんた達は次へ行て……、今の話は後に聞きませう。今日は浪子姉さんも來る、面白う遊びませう。

毅一　川島の兄さんもいらつしやるんですかお父様。

將軍　お里歸りというての、新郎新婦、今日は、結婚以後、初めて當家に足入れをなさるのぢや。はゝはゝ。（心から快然と笑つて）御儀式の日ぢや、あんた達も御行儀にしませう。はゝはゝ。

毅一　いゝなア僕、川島の兄さんに、海軍の話を聞くんだ。

道子　あたしお姉さまに、御約束のお雛様をつくつて頂くわ。

毅一、道子、うれしさうにわが部屋に走り去る、將軍は二人の子供の後姿を見送りたる後、再び又、何か思ひ出したるやうに、快然として一笑する時、難波副官は來客山木兵造を案内して下手廊下より入り來る。

山木兵造の風采について、原作者は次の如く記す。『五十あまりの男の、一樂の上下揃ひ白縮緬の兵兒帶に岩丈な金鎖を晃めかせ、右手の指に分厚な金の指輪を挿し、赭顏の眼尻著しく垂れて、左の眼下にしたゝかなる赤黒子あるが……云々。』その本宅は芝櫻川町にあり、別宅は淺草區橋場の邊にあり、昔は高利の金なども貸していかゞはしき風評もあつたが、今は當路の顯官にとりいり、陸軍省その他の官省の請負を業となし、現代政商の一人として知らるゝ男である。

山木　（廊下を副官と話しつゝ入り來り、將軍を見て、直立の姿勢にて）おゝ、閣下——。

將軍　あんた、山木さんでごわすか。お初めて——。

副官、默禮して去る。

山木　いや、私の方では、度々宴會の席上などで……、はゝははゝ。（馴々しく笑つて）時に、世間の噂には承つて居りましたが、全く、どうして、恐れ入りました。はゝはゝ。

將軍　（突然の言葉に意味を解せず）何んで、ごわすか。

山木　いえ、この、御建築の御好みぶりでございます。閣下は、武邊一遍の御方と推測いたして居りましたが……、いや、なかく何うして、恐れ入りました。西洋庭園なども、斯う趣味が行き屆いて、隅々まで御主人の御心配りが見えまするとこ、なかく何うして、雅致があるものでございます。

将軍　はゝあ、はゝあ――。（時々、素氣なく答へてゐる）

山木　たゞ――、閣下。山木に無作法なる批評をお許し下さるなら、御玄關の見附でございますなあ、あの正面御車寄の邊ですが、あすこは何か、些つと――欲しいところでございますな。折角の御建築が淺間に見えて、損を致します。

将軍　はゝあ。はゝあ……。（同じ姿勢のまゝ時々答ふ）

山木　然やうでございますなあ……、普通の植込では新しうございませんから、やッぱり……岩石ですかねえ。あすこは、鞍馬の青石でもあしらつて、一見その、閣下の御邸宅らしく、巍々堂々とありたいところでございますなあ、はゝはゝ。（目はさかしく動き、用もなきに笑つて）あゝ、丁度恰好な大石がございます。この奥多摩で發見しました大石でございますがね、年代もあり、形ちもあり……、あれなれば、慥かに、いや獻上いたしませう。早速獻上――。（言掛けつゝ、将軍の默然として動かぬに心づき）いや、これは何うも……、はゝはゝ。私は、つい自分が、普請好きな性質から致して……、いや何うも、初對面同樣の閣下に對して……、はゝはゝ。

将軍　山木さん、御訪問の用件は――？

山木　はい、いや、今日は別に、これと申して……、閣下が今回豫備役より現役に御復活遊ばしました御悦びをかねまして、ちよッと御挨拶ながら……、へい、はい。

将軍　はゝあ。

山木　斯う申しては、些と、おベッかのやうでございますが、今回閣下の現役御復職については、全國々民等の輿望は、實に熱烈なるものがございます。故南洲先生の遺志をつがれて、東洋平和百年の大計を定めらるゝ方は、閣下をおいて他にその人がない。閣下の再起は、故西郷先生の再來を見るにひとしなど――國家に志ある徒は、みな張目して閣下の御身邊に注意の視線を送つて居ります。

将軍　（迷惑さうなる語調）はゝあ……、朝鮮の問題でごわすか。

山木　慥か、西郷先生と閣下とは、御親戚の間でございまするな。

将軍　いや、親戚ちふ程ぢやありません。加治屋町の同じ方限に生れて、家がすぐ近かつたゞけでごわす。

山木　何んにせ、故西郷先生の大志を完成し、國民數百年來の熱望を遂ぐるの大人格は、閣下以外には斷じて求むべからずと、みな希望し、期待し、渇仰してゐるのでございます。いや、われく國民ばかりではない、既に御上の御思召に於か

せられましても……。

將軍　（手を擧げて制し）山木さん、御訪問の御用は――。

山木　（話の腰を折られて少しヘドモドしつゝ）は、御用？　御用と申して……、はゝはゝ。が、いよ／＼今度こそ、朝鮮問題も、金玉均暗殺が導火線となつて、大事件になりさうでございますな。何んなさうぢやございませんか、全羅道に蜂起した東學黨の勢力は意外に猖獗を極め、その餘炎をうけて内亂は忠清慶尙諸地にも及びさうな情勢だと申すことぢやございませんか。

將軍　はい。一昨日あたりの時事新報に、そんな通信が出とりますさうです。はい。

山木　淸國はいよ／＼、朝鮮國をわが屬國視いたして、更に陸兵二千を袁世凱に附し、洪州とか牙山とかを上陸地となし、しきりに兵を京城に增援しつゝあると申しますが……。

將軍　はあ、それも昨日の報知新聞、第二欄かに出とりました。

山木　わが國に於ても、風雲急迫せりと見て、大鳥公使を京城に急派して、いよ／＼淸國公使に向つて嚴重なる抗議を申込み、場合によつては最後の手段をもつても……。

將軍　（泰然。同じ語調）はい、朝日新聞は然う書いてゐます。

山木　朝日新聞――？（つい釣込まれて將軍の顏を見、多少の苦笑ひを口邊に漂はしつゝ）私が今日御訪問いたしたのは、閣下に、新聞記事のお話を承りたいためではなく……、まあ、その見通しでございますな、親しく當路にあたらるゝ方の大方針と申しませうか、國家百年のその……。はゝはゝ。

將軍　山木さん。

山木　はい。

將軍　わしは軍人ぢや。見通しの見込みのと、そんな大政に關する算盤をおく役目ぢやありません。大命によつて、生死の間を行く、たゞ一介の武人に過ぎません。

山木　いや御尤も、それは御尤もです。（幾分狼狽しつゝ）私の御質問致すのは、決して國家大政の機微に觸れようためではございません、たゞ商人と致して、閣下等の御方針のあるところを承つて、商人は商人なりに、些か國家の大事に奉仕いたさんとする微志に過ぎません。これがいよ／＼日淸兩國の戰爭とでもなる場合には……、私なども、國民の一員として、分相應人相應の御奉公を盡くしたいと、深く念願して居る次第なので、はい。

將軍　山木さん。

山木　はい？

將軍　要するにあんたは政商、わしは軍人。國家のために盡くすと云はれても、あんたの聞きたい事は、わしの話したくない話なのぢや。そいでわしは、聞いても話しても差支へのない、新聞記事の噂話をして居つた次第でごわす。はゝははゝ。

山木 閣下。然う仰しやれば何んです……、それぢや私が、今日わざ〳〵閣下を御訪問致した必要がなくなると申すもので……。

将軍 然うです。全く必要はなかつたのです。

将軍、傍の腕椅子にもたれて、讀かけのクリミヤ戰爭史をとる時、さきの小間使入り來る。

きよ 御前様、千

千岩様が御約束の覇王樹をお持ちになりました。御庭のどの邊に植ゑて置きませうか、伺つてくれと……。

将軍 千々岩中尉が來た？　覇王樹とは何んか。

きよ いつぞや、御約束の品なさうでございます。

将軍 約束とは……。（不審さうに考へたが、山木を見て何か考へる事あり）兎に角、こちらへお通しなさい。

きよ はい。

小間使、去る。山木、立端を失うて手持不沙汰に立つ。

将軍 山木さん。（戰史を六七行讀みたる後）あんた慥か、参謀本部の千々岩中尉を知つとる筈ですな。

山木 はい、へえ——。御懇意といふほどではございませんが、私は、御先代以來川島家に御出入をいたして居りますので、自然、千々岩様にも……。（と言掛けて氣がつき）いや、先程から、手前用にかまけて御祝ひも申上げずに居りましたが、この度は又御孃様が、川島様へ御輿入れなさるさうで、お目出度う存じます。

将軍 はい、有難う。

山木 私どもより申上げるもいかゞですが……、誠にこの上もなき御良縁で、御兩家のため萬々歳に存じます。

将軍 いま千々岩中尉が來ます。お會ひなさい。（意味ありげに云うて、讀書）

山木 はい……。

参謀本部附陸軍中尉千々岩安彦、入り來り戸口閾際に立つ。原作には『二十六七にや。陸軍中尉の服を着たり。軍人には珍らしき色白の好男子、惜しきことには、口のあたり何處となく鄙し氣なる處ありて、黑水晶の如き眼の光鋭く、見つめらるゝ人に不快の感を起さすが、疵なるべし』とある。

千々岩 閣下！（最敬禮を送りたる後）御約束の覇王樹でありますが、あの山羊小屋の横あたりに移植して置きたいのであります。

将軍 その覇王樹ぢやが……。（顏を上げ）約束——？

千々岩 いえ、御約束といふ譯ではありません。閣下が、いつぞやのお話に、覇王樹のあの磊々として世に侫らはぬところが面白いと仰しやりましたので……、早速郷里の培養者に書面を差出しまして……。

将軍 それは御きんたうに——好く氣がつかれますな。はゝはは。まあ、入るがいゝ。山木さんぢや。

千々岩 はい、失禮します。（室内に入りつゝ、初めて山木に心づきたる如く）ようこれは、山木さん——。

山木 暫くでございましたな。時節柄、御多忙のことゝ存じます。

千々岩 そして君は……何んぞ閣下に？

山木 いえ、ほんの御喜びながら、その、些ッと……。

千々岩　可かんぞ、おい。

山木　へえ？

千々岩　へえぢやないよ。閣下が現役に復されたと聞き、急に胡麻すりを初めるなんか……、あゝ、君、閣下の脈をひきに來たんだな。朝鮮問題で國論が沸騰してゐる場合なので、閣下の顔色次第で、賣買の大勝負をする心なんだらう。

山木　えゝ滅相な、飛んでもない……。（面をふくらす）

　將軍は兩人の論爭を耳にも入らぬ如く、晏然として戰史に讀み耽る。

千々岩　讀めたかね、讀めたかよ。はゝはゝゝ。君等の口占にかかつて、大事の機鋒を露出される片岡將軍と思つとるのかね、え、はゝはゝゝ。君も飛んだ、好人物だつたねえ。はゝはゝゝ。

山木　千々岩さん。そりや些と……、言葉が過ぎませう。

千々岩　言葉の過ぎるのはまだ好いがね、御用商人の、辣腕の過ぎるのは、國家のために困るからねえ……、はゝはゝゝ。

山木　怪しからんことをいふ人だ。

千々岩　はゝゝ、はゝはゝゝ。

將軍　（默然として立ち、平常の語調）山木さん、御ゆつくり。

山木　は？

將軍　今日は、來客などあるので……失禮します。

　將軍、戰史を持ちたるまゝ、着換室の方へ去る。兩人、その後姿を暫く見送りゐる。

山木　（小聲、睨めて）千々岩君、君もひどいぜ。いきなりわしに、目を白黒にさせることもあるまい。

千々岩　いや失敬々々。あの場合、あゝ行くより外に手がなかつたんだ。はゝはゝゝ。

山木　何がはゝゝだ。初對面のわしに恥をかゝせるといふことが……。

千々岩　それだから人間はね、日頃の行狀が大事なんだよ。はゝはゝゝ。

大快報!!

菊池寛氏が富士臨時增刊に執筆
面白くて堪らぬ近來の大傑作!

現代小說　禍福　菊池寛

運不運、吉凶禍福等人生の二筋道の分岐點を喝破した大傑作長篇讀切!
是非とも、御期待の上お知人にも御吹聽下さい。

山木　何──。

千々岩　玄關に、副官がゐたらう。あの輩は、君が今日不意の訪問をなしたといふだけで、躍起となつて憤激してゐるのだ。山木の奴の訪問は只事ぢやない、今に牛肉罐詰に石コロでもまぜて兵隊に食はす氣だらうと、もう卓子を叩いてカンカンだ。

山木　然し、自分一人が好い子になつて、口から出放題な……。

千々岩　おれまで同類と思はれて何うするか。將軍の炯眼は、あれで恐るべきものだ。覇王樹一件で塗りくるめようとしたが、或はもう薄々、われ／＼が申し合せて來てゐることを、氣がついてゐるかも知れないぞ。濛々漠々たる顏はしてゐるが、あれで、油斷がならない程、細かな神經が動いてゐる人物なのだ。

山木　それも然うだね。今日は少し……わしも突然過ぎた。

千々岩　大體君は……、僕を疑つてゐるから可けないんだ。膳立ては萬事僕に委せて、さあいよ／＼と云ふ時に、君は將軍の前に顯はれてくれゝばいゝのだ。それを無斷で……飛込んだりするから困る。今日君が、急に將軍を訪問するといふ電話が役所にあつたので、實ンとこは、馬鹿野郎！　──と思つたよ。それから植木商會へ行つて覇王樹を買ふやら、荷車ではこばせるやら、大汗みづくにされたぜ。はゝはゝ。

山木　（苦い顏）その邊で又、金一封と來るんだらう。

千々岩　出さん氣かい。

山木　結果がこの通りだからなあ……。ま、兎に角、今晩あたり橋場へ來たまへ。（と歸り足に歩みかけて、立戻り）あゝ、然う／＼、君に注意しようと思つてゐたがね、あの丸八の一件ね、ありや可かんよ。早速手を引いた方がいゝ。

千々岩　（少し驚き）君は……、何處から聞いたのだ。

山木　兜町邊の消息なら、わしは鵜だよ。はゝはゝ。惡いことは云はんから、あすこだけは止めた方がいゝね。千軍萬馬を往來した古狸ですら、怪我をするのは兜町だ。ましてあんたなんか素人だ、いゝ鴨雜炊にされるだけだ。

千々岩　はゝはゝ。（自信をもつて笑ふ）まあ、見てもらはう。

山木　店も惡いよ。あの丸八といふのは、現物屋のうちでも評判のインチキ屋だ。あんな相手に引掛つて、今に大變な目を見ますよ。用心々々、今のうちに氣をつけなさるがいゝ。

千々岩　まあ、見てゐるんだね。素人だつて三年たてば三つだ。はゝはゝ。

山木　それから……、例の川島の坊ちやんの方の一件だ。あれもあの儘には置かれませんよ。相手が相手だから、酷い目にあひますよ。

千々岩　君は川島に、餘計なことなぞ云ふまいね。

山木　わしが、何をいふもんで。たゞ、とうに期限が切れてゐるのだから、今のうち何んとかまじくなつて置かないと、今

に飛んだ……、あんたの名譽に關するやうな事があつて
は……。

千々岩　大丈夫々々。そこは僕だつて、それ程の馬鹿ぢやないよ。はゝはゝ。

山木　何うだかね、何うも……。素人はこれだから恐い。

千々岩　おれだつてそんな……、はゝはゝ。今に金的の圖星をあてゝ見せるよ。今にその口で、わしに一口のせてなぞと云ふな。はゝはゝ。

山木　はゝはゝ。然うだねえ、是非然う云はしてもらひたいもんだ。

この時玄關の方に人聲聞え、又走り集まる人の足音など聞え來る。里歸りする浪子の人力車が到着したのであらう。

千々岩　(玄關の方に耳を立て)兎に角君……、歸りたまへ。新婚夫婦の訪問らしい。見られちやまづいよ。

山木　然う／＼、こつちも今日は都合が惡い。では、今晩あたり……待つて居ますよ。

千々岩　(玄關の方を睨み、怒れるやうな聲)早く歸りたまへ！

山木　(急に變れる態度を不審さうに)千々岩さん、何うしたんです。

千々岩　えゝ、早く歸つたら好いぢやないか……。(舌打)

その時玄關の人聲近づく。山木は千々岩の態度をあやしみつゝも、下手の戸口よりやゝ狼狽の氣味にて歸り去る。

千々岩安彦、屹と直立して、唇を嚙んで暫く玄關の方に耳を立てしが、やがてニヤリと陰險なる冷笑を口邊に漂はし、奥庭の方に歩み去る。

毅一　(聲)お姉さま／＼、川島の兄さんは何うしたの。

道子　(聲)お姉さま／＼、お父樣がお待ちかねよ、お姉さま。

毅一道子の甲高き聲に促がし立てられつゝ、母夫人繁子、妹駒子に取卷かれつゝ、川島家新夫人浪子(將軍の長女にて、母夫人は浪子幼年の時死去)、四方より話掛けられるを、嬉しげにそれに答へこれに答へつゝ廣間に入り來る。

浪子、その日は初めての里歸りとて、儀式めかしき正裝、髮は初々しき高島田。德富先生は浪子の容貌性格を描いて『色白の細面、眉の間やゝ蹙りて、頰のあたりの肉寒げなるが、疵と云はゞ疵なれど、瘠形のすらりと靜淑らしき人品』といふ。妹駒子はやはり前夫人の子にて、浪子とは同腹の妹なれど、姉よりは氣性も開濶にして、よく繁子夫人になじみて、その秘藏をうける。原作に『紅のリボンかけたる垂髮の——十五許りの少女』『姉に比してやゝ俠なる妹』といふ。

道子　お父さま、お父さま、お姉さまがお歸りです、お父さま！

毅一　お姉さま、お姉さま、早く、お姉さまッてば！（姉の袂を引張りて、室内に入り來る）

繁子　これ〳〵、毅一。何うしたんです、お姉さまの袂が切れます。

毅一　だつて、女ばかり話してゐて、僕詰ンないんだもの。

道子　（室外階段の下に立つて、二階に呼ぶ）お父さま、お父さま。

駒子　然う煩さくすると、姉さまはもう被來しやらなくなることよ。こッちへ被來いよ、毅一さん。

毅一　なま云つてらあ。自分だつて、話してゐるぢやないか。

駒子　わたしは大人よ。

毅一　ちえッ！　へんてこな大人。夜になると、一人で何處へ行けない大人、ちえッ！　ちえッ！

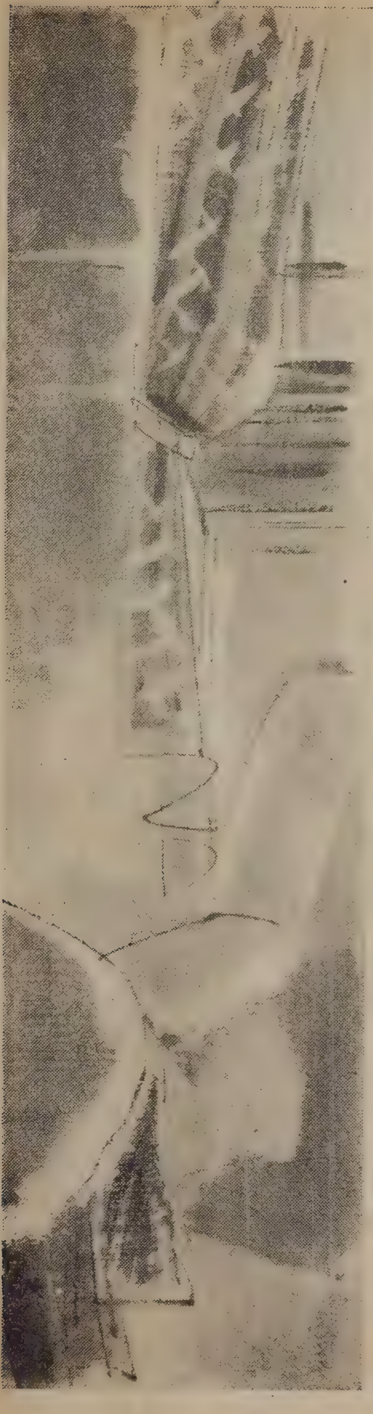
駒子　（ムキになつて）これ毅一さん！

毅一　やアい、本當云はれて眞ッ赤になつてらア。はゝはゝ。

繁子　これ毅一さん。何うしたんです、お父さまへ申上げますよ。（浪子に向つて）でも手紙には三時とあつたもんだからね、わたしは又その積りでゐましたのよ。

浪子　えゝ、あたしも然う云つたんですけれど……、最う思ひ立つと、今が今で、子供のやうに性急なもんですから……。

繁子　（心よく笑つて）いゝえ、それが何う斯うと云ふんぢやないけれど、料理人が不馴れなもんですから、ツイ狼狽してるところなのよ。ほゝほゝ。



浪子　あら、お母さまがおぢきにお臺所へ？　まあ……。

繁子　片岡家から出た大事な浪さんの、初の御訪問ですもの、わたしも久しぶりに英吉利で習つた伎倆をお目にかけたいと思ひましてね、ほゝほゝゝ。（母らしき眞實の笑聲。繼母の皮肉と聞えざるやう演出者の注意を乞ふ）

浪子　まあ、恐れ入ります……。

片岡中將、娘道子に手を引張られながら入り來る。大柄なる英吉利ネル（或は袷にて）に、白縮緬の帯をグル〳〵と卷いて、素足、極めて無造作なる服裝。

將軍　おゝ、浪さん……！

浪子　おゝ、お父さま！…（思はず走り寄る。但し、父の前二三歩のところにつゝましく立止り、握手などは決してせぬこと）

將軍　いよう、立派ぢや、立派ぢや。立派な、花嫁さんでごわんすわい。はゝはゝゝ。

浪子　（羞らうて）まあお父さま……。

將軍　そりや何んちふ髪でごわすか。立派ですなあ。（繁子夫人を顧みて）立派になるもんでごわすのう。はゝはゝゝ。

繁子　ほんに、わたくしも……然う思つて居りました。（微笑）

毅一　お父さま。川島の兄さん、まだ見えないんです。

將軍　（初めて氣がつき）ほんにな、武男さん、何うなさつた。

浪子　いゝえ、あの直ぐ後かり……參りますの。

毅一　お父さま、僕御門に立つて、衞兵しませうか。

將軍　然うぢや。お前達がそこにゐては、姉さんの花嫁ぶりがくづれる。毅一、お前は門に行つて、注意して、立ッとるんぢや。

毅一　はいッ！（軍隊式敬禮）

道子　毅一さん、あたしも行くのよ、毅一さん――。

毅一　ちえッ！　女の兵隊なんか、ないやアい。

毅一、鼻先を擦つて見せ、走り去る。道子も續いて走り去る。

將軍、愉快さうにたゞカラ〳〵と笑ふ。

駒子　（氣が付き）お母さま。あたし臺所を見て來ませうか。

繁子　あ、然う〳〵……。燒竈の蓋をその儘にして來ましたから、いゝ加減な時にお作に閉めさして下さい。

駒子　はい。畏りました。姉さま、御免遊ばせ。

駒子、臺所へ去る。

將軍　そして御隱居は何うぢや。相變らず、御機嫌か。

浪子　はい。誠に優しく……御親切にして下さいます。

將軍　然うか、そりや有難いこッちや。（腹より出づるやうな安堵の聲）好く、氣をつけてお仕へせんぢやならんぞ。姑に仕へかねる嫁は、良人にも仕へかねるものぢや。（繁子夫人を顧みて）お母さんはな、御隱居の御機嫌が何うかと、蔭での、大層心配しとるので、わしは云うたのぢや。舅姑をよう扱ふといふは、人生修業の一つぢや、古參兵が無うては、新兵

教練がならんと同じ理窟ぢや。好う仕へて、お氣に入るやうにするのぢやよ。

浪子　はい――。

繁子　(目を拭ひつゝ)それにしても私、さつき玄關で初めて、浪さんのこの姿を見て、思はず……涙が出ました。先のお母様が御達者で、一目このお姿を御覧なさいましたら……。

將軍　いや、それは……、飛んだこと〱。はゝはゝ。浪子が斯うなつたも……、みなあんたの養育ぢや。のう浪さん、死んだ人を忘れるぢやないが……生きてうけた恩は、深う……感じてゐるのう。

浪子　はい、もう私さつきから、心の中でお母さまに……。

將軍　こりや可かんぜ。二人ともそれぢや……わしが困る。ははゝゝ。武男さんは何うした。何故一緒に來んのぢや。お母さまの、お言付なのか。

浪子　いえ、お母さまは、揃つて行くやうにと、俥も二臺仰しやつて下さいましたのですが。……僕ア、歩いて行く、一人で行くと、然う……仰しやいまして……。

將軍　僕ア歩いて行く、一人で行く――？　そりや些と……武男さん、冷淡ぢやないか。初めて里歸りする者を先によこして、自分は一人で、後から來る……。(やゝ心配さうに夫人を顧みて)ね、あんた何う思ふ、冷淡ぢやないか。

繁子　武男さんは若いから、お二人俥を揃へては極りが悪いのでせう。ねえ、浪さんは……。

浪子　は、あの……。

將軍　些つと可笑しいよ。極りが悪いちうて、新婚の夫婦ぢや。それに婿舅初めて挨拶の儀式の日ぢやから……、何うもわしや、こりや……冷淡ぢやないかと思ふ。

繁子　(クス〱笑ひながら、浪子と目を合はせ)冷淡ぢやありませんわ、ねえ……！

浪子　(これも母にうなづき、クス〱笑つて)えゝ、冷淡なて……。

將軍　然うか。浪さんも然う思ふか……、しかし今日は儀式の日ぢや。若夫婦別々に來ると云ふのは……。

繁子　あなたなれば、何うなさいます。(少し揶揄の氣味にて)やはり御紋服の人力を揃へて、白晝大通りを……お歩きになりますか。

將軍　いや、わしの問題なぞ論じてゐるのぢやないが……。

浪子　ねえ、お母さま……。ほゝほゝ。

繁子　ねえ……、ほゝほゝ。

將軍　然うかのう……、はゝはゝ。然うかの、そんな極りのわるいもんかなあ。はゝはゝ。でも、わしや矢張り、若夫婦ふたり揃つて、睦しいところを見たかつたな――。(平手で頭を一つ打つて、突如の大聲)はゝはゝ。

妹駒子、大扉より顔を出す。

駒子　お母さま、やッぱり彼來しやつて見ていたゞかなくては……。

繁子　あゝ然う〳〵。では、浪さん、ちよッと失禮しますよ。

浪子　(椅子より立つて)お母さま、恐れ入ります。

繁子夫人、駒子、出で去る。室内には將軍と浪子、二人殘る。將軍はニコヤカに浪子の新夫人ぶりを偸見し、浪子はたゞ羞らうてモヂ〳〵して暫くの間は兩者無言。

將軍　(眞面目さうな語調にて)伊香保からは何日歸つたかのう。

浪子　は、あの……昨日の午後。(俯向きつゝ)

將軍　何日間滯在した譯かの。

浪子　あの、往復ともに……八日でございます……。

將軍　八日間武男さんと一緒にゐたわけぢやの。それで……。(口籠りたる後、突然)それで何んですか、少しは互に、冗談ぐらゐ云ひますか。

浪子　あら、お父さん……。

將軍　あらぢやないよ。心配ぢやから聞くのだ。(顔の汗を拭ふ心持にて)その、何んぢや、御夫婦なかは……圓滿ですか。

浪子　まあ私……。

將軍　おい〳〵、立つちや可かんよ。大事なことぢや。

浪子　でも……。

將軍　恥ぢることぢやないぜ。(自分も立ち、娘の後を追ひながら)お父さんは、心配しとるのぢや。何うぢや、食事の時なぞ、互に冗談の一つも云つて、笑ふやうなことあるか。有るか、有るか。

浪子　お父さま、私……實に幸福な身と思ひます。

將軍　然う……抽象的の説明はいかん。もう少し、もう少し具體的に聞かしてくれ。何んか、その……、武男さんは、優しくその、お前の肩ぐらゐ……、叩くやうな時があるか。

浪子　お父さま。もう……許して下さい。

將軍　わしも辛いのぢやよ。汗を流して聞いてゐるのぢや。

浪子　武男さんは……。

將軍　武男さん？　國風に旦那樣とは云はんのか。

浪子　お父さま、まだそんな……。

將軍　武男さん、結構。うん、親しみがある、結構〳〵。で、武男さんが？

浪子　武男さんは、あの……誠に……御親切にして下さいます。

將軍　誠に親切に……？　親切というて、何んな風ぢや。

浪子　あら、そんな事を……。

將軍　具體的に話せよう。そんな概括的な報告ぢや、わしに實地が、想像出來んぢやないか。

浪子　いやなお父さま。もう……存じません。

將軍　はゝ、はゝはゝゝ。(將軍目に一杯の涙を溜めて大笑

する)

この時玄關の方に川島武男の快濶なる笑聲、道子毅一の歡聲とまじりて聞えて、三人室内に入り來る。毅一は土產ものとして外國製玩具の大軍艦を持ち、道子は京人形の愛らしきを抱く。

武男は川島家の嫡男にて、二十四五歳、海軍に奉職して少尉なり。(今日の服裝は蕭洒たる背廣服)名譽ありて富みたる家に生れて、四圍の環境も不滿なく育ち、學業等も極めて順當に進みたる故に、その性質明朗にして屈托なく、純情無垢の好青年ともいふべきである。原作にはその風彩を描いて『栗蟲の樣に肥えし五分刈頭の、日にやけし顏は宛ながら熟せる桃の如く、眉濃く眼いき〳〵と、鼻下に薄すり毛蟲程の髭は見えながら、まだ何處やらに幼な顏の殘りて、含笑まる可き男なり』といふが、たゞその一缺點と思はるゝところは、自分の潔白純正なる性格と世間見ず生一本の青年氣質より、他者の惡をゆるさざる事あり、そのため意外なる邊に敵をうくることがある。

毅一 (軍艦の玩具を見せ)お父さん、川島の兄さんから、おみやげに頂きました。

道子 あたしはお人形さんよ、お父さま……。

將軍 おゝ、そりや好いものを頂いた。お母さまにお目にかけい。

『はい』と答へて、小兒等二人は母夫人のゐる方へ走る。

將軍 (手を差延べつゝ)おゝこれは、武男さん……。

武男 閣下!(將軍の前、數步の距離に直立、姿勢をとり軍隊式の語調)閣下、以後、好しく願ひます。(無造作に、ピョコンと頭を下げる)

將軍 はい。當方よりも好しく……。はゝはゝ。

武男 (踵にてクルリと廻り)お母さまに、御挨拶して參ります。

將軍 いや待て……、いま料理室ぢや。すぐ來ます。(青年の緊張ぶりを嬉しく眺めて、微笑をたゝへつゝ)武男さん、挨拶ぶりを、お母さんに教つて來たな。

武男 は。これが實に――難關だつたのであります。

將軍 もう好か、もう好か……、はゝはゝ。さあ、お掛け。御儀式は濟ンました。然う固うならんでもいゝ。(浪子を見て、小聲に注意を加ふる)これ。これ、これよ。

浪子 は――?

將軍 はぢやない。お婿さんに椅子を差上げんかい。

浪子 でも……。(羞らふ)

將軍 然ういふ氣のきかんお嫁さんぢや困るぞ。體ばかり大きうなつても……根ッから小兒ぢや。はゝはゝ。

浪子、羞らひながら椅子を進めんとする。

武男 (これも狼狽しつゝ)結構々々、僕自分でかけます。何う

か、それ、下さい。

浪子 いゝえ、あの私が……。(椅子を進める)

武男 重いです。僕、自分で、掛けます。

將軍 (二人の態度を見て、心から嬉しげに) はゝゝ、はゝははゝ。

武男 では、頂きます。(禮を送つて、椅子に掛ける)

將軍 さアさア……。(わが椅子を近く對向に寄せ、葉卷烟草の箱などすゝめつゝ) 今もな、これと話して居つたところぢやが、伊香保は天氣合がよろしうて、結構でした。

武男 は、目下山躑躅の滿開で、實に奇麗でありました。丁度蕨の盛りでしたので、少し、おみやげに持つて參りました。

將軍 蕨――? 大好きですよ。おみやげとは、あんた達が摘つたのか。

この時、浪子、思はずクスリと笑ひ出す。

武男 は、多少……ヘゴとかいふ植物がまじつてゐますが、それは僕の收穫で、その何の……(浪さんとは云ひかねて)摘んだ分は、全部蕨だけで、ヘゴなぞ一本もありません。(手持不沙汰を紛らすため、葉卷などを一本とる)

將軍 おゝ、そりや愉快ぢやつたらう。晩春の山遊びは、年中行樂の第一事ぢや。浪さん、蕨とりに連れてもろたか、好かつたのう。

武男 (葉卷を弄びながら)何しろその、草履に赤い紐を結んで青竹の杖をつくといふ御姿でありますから、急な坂路なぞへ來ると、强力が骨が折れますよ。

將軍 (娘を見て)浪さん、腰でも押してもらうたのか。

浪子 (眞赤になりて)あらお父さん……!

武男 後を押すぐらゐなら輕いことですが、今におんぶをせにやならんかと内々ヒヤ〳〵しました。

浪子 まあ私いつそんな……。(思はず武男に向つて)誇張過ぎますわ。

武男 誇張ですか、誇張――? 横曾根澤の邊に來て、僅か一米突に足らぬ崖下にハンカチを落して、それを僕に拾はせた人は、一體誰でしたかなあ。

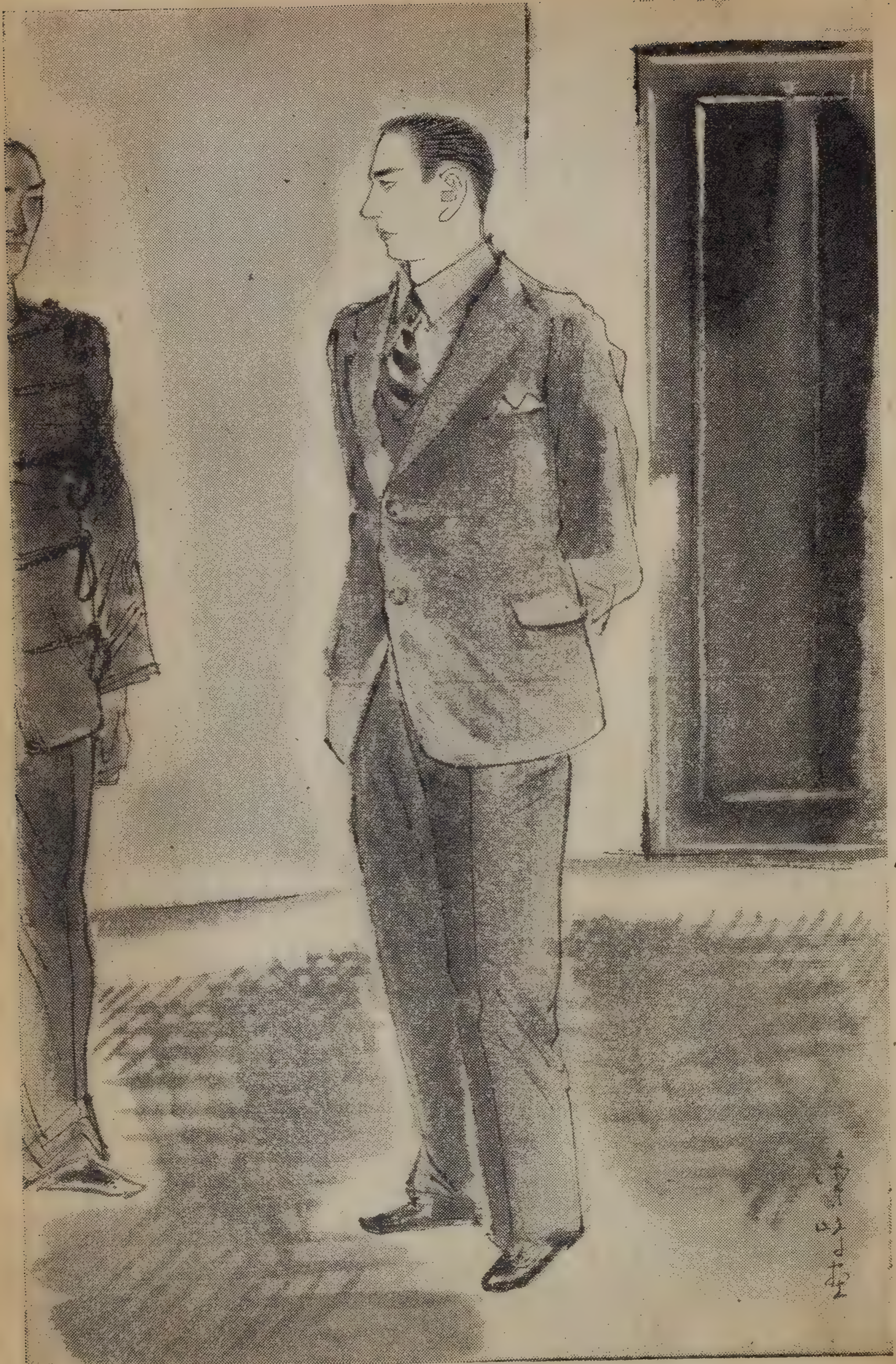
浪子 あら、あれは御自身で進んで拾つて下すつたのですわ。それに、一米突なんて……あの崖は一間近くございますわ。

この間に、將軍は切りにマツチを浪子の方に押やりて、武男の烟草に火を點じてやれと目くばせすれど、浪子はそれに氣がつかない。

武男 一間と云へば六尺ですよ。(兩手をひろげて)これ以上ですよ。あの片足かけて下りられる崖が一間……。はゝはゝ。

浪子 あら。(優しく睨めて、將軍に)では、お父さま、今の蕨でございますがねえ……。

武男 (火のなき葉卷を口にあてながら)ヘゴの一件はもう自白してゐますよ。



浪子　いゝえ、武男さんがお摘りになつたのはへゴばッかり、蕨なんか一本もありません。

武男　好うし、檢査しますよ。一本でも本物があつたら何うします。

浪子　それは貴方一本ぐらゐ……。

將軍　はゝゝ、はゝはゝゝ。とんだ難しい蕨ぢやのう。こりやうッかり食へなくなつた。はゝはゝゝ。

武男、浪子、聲を合はせて樂しげに一笑する。

武男　はゝはゝゝ。

浪子　ほゝほゝゝ。

將軍　ほんにそりや樂しかつたの。話を聞くと、お父さんも一緒に連れて行つて欲しかつたよ。（マッチをポンと浪子の前に置き）浪さん、ほら。

浪子　（まだ心付かず、マッチと將軍を見較べて）え、何？

將軍　婿さんが、それ、火を待つてゐられる。氣がきかんお嫁さんぢやねえ。はゝはゝゝ。

浪子　あ——。

浪子、初めて氣がつきマッチを擦る。武男、窮屈さうにその火をもらふ、將軍は二人のさまを見て、たゞ快然として笑ふ。

將軍　（やゝ暫くして、肅然たる聲にて）武男さん。

武男　はい。

將軍　（浪子をいふ）これはのう、早う母親にわかれて、暫くはわし一人の……男の手にそだち、可哀さうな者です。あんた一人が賴みぢや、至らぬ者ぢやが……可愛がつてやつて下さい。

武男　（低頭、嚴肅に）はい——！

將軍　何うも、わしは……子に甘うてなりません。はゝはゝゝ。

妹駒子、二階より下り來る。手に書狀數通を持つ。

駒子　（父將軍に）お父さま、お二階の應接間に——。

將軍　あ、然うか。お母さまは？

駒子　今、お手がすきました。

將軍　武男さん、二階へ行かう。母親も御挨拶するさうです。

（と椅子を立つ）

武男　はい。（烟草を消して立つ）

將軍と武男、階上の應接間に去る。浪子もこれにつゞかんとす。

駒子　（手に持てる書狀一束を出し）お姉さま、お手紙がこんなに參つてゐますわ。

浪子　有難う。まあこんなに……。

駒子　學校のお友達は、今度のお喜びを後で聞いたのでせう。みんなお祝狀らしいのよ。

浪子　（書狀を見て）然うね。黑田さん、樺山さん、野村さん、……、後でゆつくり拜見しませう。（と云ひつゝ、次の一通

を見て、不快さうに顔色をサッと變ずる）

駒子　直ぐ被來いよ。お姉さま。

駒子、姉の表情に心付かず、二階應接間へ走り去る。その時、下手入口の邊に千々岩安彥の姿顯はる。凝つと浪子の様子に注意する。

それとは知らず、浪子、口惜しさうにその一通の書狀を引裂き、一度は牀の上に投付ける。

千々岩　（室内に進み入り、黒水晶の如き眸に浪子を凝視しつつ、冷々たる聲）浪子さん、お目出度うございます。

浪子　お、、千々岩さん……。（ギョッとして石の如く立つ）

千々岩　男爵に富――。いや、お目出度う存じます。

浪子　（强ひて心を立てゝ）何か私に……御用でございますか。

千々岩　華族で金があれば、馬鹿でも嫁に行く――。金がなければ、いかに切實なる心あつても……、それが當世淑女の氣風といふものかも知れません。

浪子　何を仰しやいます。今一度、武男の前で……云つて御覧なさい。父あり、良人ある者に向つて、あのやうな艶書を送つて……、恥をお知りなさるがいゝ。（さすがは將軍の娘、凛としていふ）

千々岩　（苦笑と共に）御迷惑なれば、お返し下されば好かつた。

浪子　燒捨てました。（脚下を見て）最後の一通はこれにございます。

腹をこわした時絶好の主食物

腹具合、体の具合が忽ち良くなる稀有の食物　粉末テルニ

食傷り、水傷り、寢冷えなど腹を壞してソレお粥ソレ重湯と騷いでみても、食慾がないとてパンや牛乳と工夫なすつてもそんなものはたゞ一時お腹を膨らますだけ體には何の足しにもなりません。その時こそ森田博士の食物テルニです。テルニは胃腸にどんな故障があらうともどれ程食慾が無くつても易々と食用されるのです。そして人體に缺かしてならぬ重要な各榮養素を穀類牛肉魚類野菜果實等數十種の動植物から完全豐富に集め、それが少しも胃腸を働かさずにすつかり吸收されて身に附きますので、驚く程旺盛活潑な體力が出來、衰弱なども造作なく回復しますし、その上胃腸を緩くり休養させて損傷を取戻し、衰へた機能を甦み返らせ根本的に改造强化しますから下痢や腹痛食慾不振なんてケロリ嘘みたい！　衰弱甚しい人、胃腸病者にさへピツタリ適します。採用の大病醫院で、胃腸を休めつゝ完全な榮養を補給する理想的の食物だと擧つて折紙付けられたテルニ！これさへあればいくらお腹が壞れましても大丈夫です

固形もあり粉末テルニと指定願ふ明細は本舖へ試食品說明書送呈す十食分一圓廿錢五十食分五圓送料內地十錢其他四十二錢藥店食料品店有り品切の節本舖へ大阪市西區京町堀笹屋振替大阪一二一七番か講談社代理部振替東京六六二一九番

千々岩 （突と進み寄り、威嚇的なる聲）將軍にも、武男君にもこの事は必ず洩してありませんな。

浪子 口にするさへ、穢らはしう思ひます。

千々岩 屹度――、屹度洩してはありませんな。

浪子、答へず。千々岩、牀上に捨てたる艶書を拾つて、ポケットに納めつゝ、云ふ。

千々岩 馬鹿者は、兩家の間に緣談の進行してゐる事すら知らず、先月から參謀演習に出て、やつと一昨日歸京したのです。歸つて見ればこの事實、光りなきところに生れたやつは、始終ともに斯の如き有樣です。

浪子 （嫌惡に身を顫はしつゝ）千々岩さん。お歸り下さい。

千々岩 そんな御指圖は受けない。が、この秘密――、この秘密、これは永久の秘密になさらんと、後悔しますぞ。

この時武男、この室に置忘れたる袱紗包（中に新婚夫婦の寫眞あり）をとりに二階より駈降り來る。

武男 浪さん。袱紗々々、そこに二人の寫眞をつゝんだ袱紗があつた筈です……。（と室内に入り、安彥を見て意外に驚く）・おゝ、千々岩君か、何うしたんだ、何うした。

千々岩 片岡家に出入するのは、僕の常だよ。君等に關係あることぢやない。（不快さうに呟く）

武男 演習中と聞いて、當日の招待狀も出さなかつたが、いつ歸つて來たのだ。

千々岩 一昨夜歸つた。お目出度う。

武男 （袱紗を浪子に渡し）浪さん、これをお父さまに――。二人の寫眞が、さつきあんたが出てから屆いたんです。

浪子 はい。

浪子、千々岩を氣遣ひつゝも、去る。

武男 ひどくプン／＼してゐるやうだが、何か起つたのか。

千々岩 僕等だつて……たまには面白くない日もあるよ。

武男 何か閣下に――、叱責でも受けたんぢやないか。

千々岩 僕等輩下役に、將軍自身の御小言を聞くほど……、そんな惠まれた地位にゐる僕ぢやないよ。閣下の方ぢや、僕の來てゐることも忘れてゐるよ。

武男 そんな家なら、出入りせんがいゝぢやないか。

千々岩 そこが系圖持たずの悲しいところでねえ……。はゝははゝ。

武男 安彥君、從兄弟同志のなかだから、僕露骨に云ふが……、それが君の卑しいところだ、いやなところだぞ。

千々岩 へえ、然うですかねえ……。

武男 （生一本の性格よりむッとして）嚴肅な問題だ。眞面目に聞け。

千々岩 はい／＼。

武男 （嚇として）千々岩！

千々岩 （これも思はず對抗して）何んだ！

武男 何んにも云はん。歸れ！

千々岩 何――。

武男　歸れ、恥知らず！

千々岩　何――。

武男　貴樣は元來、然ういふ卑しい根性のやつだ。俺あ從兄弟として貴樣のために恥ぢる。歸れ〳〵、卑劣漢め。

千々岩　何が卑劣だ。（相手が激するにつれ、次第に冷靜となる）

武男　貴樣は、今まで出入もしなかつた片岡家に、急に出入するやうになつた、その性根を卑しいといふのだ。閣下が再び要路に立たれたのを見て、急にその態度、恥ぢろ！

千々岩　僕は、閣下に、求めるところあつて來てゐるのぢやない。（顎をしやくつて）將軍に用事あるんぢやないよ。

武男　それ、それ、その用事なくして出入するところに、貴樣の性格の卑劣さがあるのだ。

千々岩　何――。

武男　用事あつて出入するのは當然のことだ。然し、用事はなくとも、出入りする方が得だ、用事がなくとも出入りして置かなきアならんと考へるところに君の下劣さが見えるんだ。貴樣は、用事なきところに將來の約束をつくつて置く、佞姦邪智な惡根性を持つてゐる男なんだ。

千々岩　武男君僕は貧乏士族の伜でね、君等のやうに幸運が先方より膳立てをして來るといふやうな譯には行かんのでねえ……。はゝはゝ。

武男　何故君は然う、立身を急ぎ、榮譽を急ぐんだ。今日陸軍將校として一家をなせば、もはや人を搔分けてまで、出世のために焦らんでもいゝぢやないか。

千々岩　然うは行かんよ。出世するとしないとぢや、第一、來てくれるお嫁さんから違ふからなあ……、はゝはゝ。

武男　（思はず相手の胸を衝く）千々岩君！

千々岩　何をする。

兩人思はず屹として相對する時、將軍家特有の習慣にて、食堂開始の大鐘がガラン〳〵と鳴りひゞき、道子毅一の小兒等は階段をバタ〳〵と走り來りて武男を誘ふ。

毅一　川島の兄さん。食堂の時間よ、兄さん〳〵。

道子　さ、行きませう、お兄さま、お兄さま。

階段には浪子等がゾロ〳〵と食堂に降り來る足音聞え、子供等二人はしきりに武男を引張りて……。（幕）

――以下次號――

さしゑ――山川秀峰

本誌獨占の大問題篇、戲曲定本「不如歸」は果然天下の大評判です。浪子と武男の悲しき物語に再び滿天下の涙をしぼる新不如歸、原作に味へぬ面白さ、次號を御期待下さい。

秋の夜長

佐藤惣之助

……肩させ、裾させ、襤褸刺せ……
こほろぎの鳴く秋の夜を
針を運びつ母アさまに
聴くや我が家の物語り。

(槍一筋の曾祖父さまは
勤王方の志士として
錦旗を奉じて東上し
維新に盡せし勲功者。)

(また祖父さまは日清の
役に從軍、渡韓して
乙密臺や玄武門

戰ひ破りし一勇士。」
「その家に生れし父さまは
又海軍の人となり
遂に戰死をなされしが
三代つゞくこの名譽。」
「おまへも銃後の人として
小さい弟をいつくしみ
女ながらも日の本の
花となれよ」とお母アさま。
話はつきず、夜は長し
傍に寢てゐる弟の
顏をのぞいた母アさまの
笑顏にほろり窓の月。

笠松紫浪畫

メノコの唄

佐山英太郎
布施長春畫

山葡萄

安政五年の秋風が、虎杖の枯れた林に啾々と鳴つてゐた。遠い、樽前岳の肩あたりに、噴火の煙。

仙臺藩の若い武士村田靜馬が、夕張の山の中から、勇拂川下流の沼澤地方――沼の端といふアイヌ部落へ着いたのは、暮れ近い七ツ下りの刻限だつた。

靜馬は、膽振の國白老コタンに、安政二年の春から置かれた、仙臺陣屋詰めの山奉行格を務める役目だつた。

靜馬がその役目で管領巡視の旅に出

てからもう二十日以上の日數が經つてゐた。

十里も、二十里も歩いて、やつと二戸か三戸のアィヌ部落が、あつたり、なかつたりするほどの蕃地だつた。

静馬は、野宿をしたり、木の實や草の根を食つたりしながら、むしろさうした環境を樂しむやうに、獨りで、悠々と歩きつゞけて來たのであつた。

静馬は、とあるアィヌの家で、干鱈と昆布と、毛皮とを買つて、脊に負つてゐる袋の中に入れた。

アィヌの老爺は、異様の風態をしたこの山男のやうなシャモの武家を、不思議な表情で凝視てゐたが、

『旦那様は、いまごろからどこへ行かつしやるので――。』

と訊いた。

『どこと云つて、あてもないが、まづ苫小牧の奥の方へでもね。』

と云ひすてゝ、静馬は川のふちを歩き出した。

まつたく静馬の風態は異様なものだつた。頭は、總髪にして、木の皮で括つてゐたし、陣羽織も、野袴も、引つ掻き裂きで、ぼろぼろになつてゐた。腰には麻繩と、狐の毛皮を捲いて、水心子の銘刀を差し、手に一間半の槍を杖のやうに衝いてゐた。

勇拂川の右岸に沿つて、雑木林の下の小徑を、どこまでも、――と、急がぬ歩調で遡つて行つた。無人の天地にたゞ騒々しく鵲が啼き交はして、斜陽が秋の山の中腹を燃えるやうな赤さに染めてゐた。

静馬は、しかし、さうした『時』の移ろひに一向無關心だつた。たゞ世間を遠く隔絶したこの北海道の山から山を、獨り默默として渉りつゞけてさへゐればいゝのであつた。

静馬は人間の生活を捨て切つたやうな氣持になつてゐた。夏も冬も、晝も夜も、食ふことも、眠ることも、浮世に生活

してゐた頃ほどの問題ではなかつた。現に、けふも、夜明け前の頃に、夕張川のほとりの、アイヌの小舍で、稗飯と鮭を食つただけで、それから終日、飲まず食はずにこゝまで來てゐる彼であつた。

ゆくてに、赤い、黃色い、まるで襤褸の錦を投げかけたやうな、山葡萄の紅葉が、低い林の上に擴がつてゐた。そのまゝ下へ行つて仰向いて見ると誰れか？　先客が、木の上にゐて、パシリ、パシリと梢を踏み折る音をさせながら、さかんに葡萄を食つてゐる――ほう！　こんなところまで里からやつてくるのかなあ――靜馬は心中大いに感心した。

『どうだ、よく熟れてゐるか。』

同じ木に攀ぢて、上の人間の股の下あたりで聲をかけて見たが、內地語を知らぬと見えて、返辭がなかつたので、今度はアイヌ語で、

『今晩は、どうだい大將。』

と大きな聲を出した。

と！　頭の上で『うゝッ。』と唸つた奴が、次の枝へ、ひらりと飛び移つて、體を逆さまに烱々たる眼光で、靜馬を睨めつけた。

遉の靜馬も、呀ッ！　と呼吸が塞がつた。

熊だ。木の上の先客樣は、牛のやうな大熊だつたのだ。――が、すぐに靜馬は平靜を取り戾した。

――どうせどこかで一度は死ぬんだ。嫌な娑婆へ歸つて死ぬよりか、こんなところで熊に喰はれて一生を葬ることのはうが、よつぽど有難い――

さう思つて、熊の顏を見上げると、熊はよほど驚かされたと見えて、木の股のところで固くなつて靜馬を睨みおろしてゐる。何だか熊に氣の毒なやうな氣がして來たので、

『どうも失禮したね。』

と輕く笑ひながら、靜馬は悠つくりと樹を降りて、そのまゝ急がず慌てず、川岸の方へ步いて行つたが、熊は、どうしたのか、あとを追つては來なかつた。

馬と裸女

その翌る日の午後、靜馬は、苫小牧から五里ばかり奥へ、勇拂の流れを遡つた、アッペナイ近くの川ぶちを、天地自然の、悠久な姿に打たれながら、石のやうに默つて、急がぬ步調を進めてゐた。

――時勢に無智な、わざと、時勢の動きに眼を閉ぢて、自分たちの生活に都合のいゝ封建の傳統を固守して、我慾と、安逸を貪るためには、勤王の大義をすらも、抹殺し去らうとしてゐる藩の先輩、その中での有力者である父や兄、妻の實家――こ

とに、この妻といふ女性の、權高な、お姫樣氣取りの、さうして享樂的な我儘な性格――嫌だ、嫌だ！

だれが再び、仙臺なぞへ歸るものか――

靜馬の心は、故郷を想ふたびに、すべてを唾棄したくなるのであつた。

蒼い夕ぐれが、また淋しい天地に近づいて來た。

濃い紫紺色の水が、淡い夕霧の奥から、脈打つやうに蜒り曲つて流れてくる。

雪を頂いて聳り立つ山の嶺には、血を塗つたやうな殘照が燃えてゐた。

と――水上のあたりから悲しい調子に澄んだ女の肉聲が――アイヌの特徴的な、追分けの唄聲が聞こえて來た。

足を止めて、靜馬は、打たれたやうにその唄聲に耳を傾けた。

へ鳥になりたや有珠の鳥に、有珠戀しや荒磯のをとこ、中にも目立つわしがシャモ、嘴にくはへて抱きあげて、空を矢のよに飛んで來て、刺繍の羽織を着せたいよ。

若い娘らしい二人の合唱――靜馬は思はず樹の茂みへ體を隱した。

聲の主は、逞ましい裸馬に跨がつた、二人のメノコだつた。

濃く長いくろかみ、深い色に冴えた、湖のやうな眼、刺青の可愛らしい口もと、刺繍のアッシの裾から露き出しになつて見える白い圓い膝――年ごろ十七八と二十ばかりと、どう見てもこの二人は姉妹らしかつた。

水煙りをあげて、水に馬を乘り入れると、二人のメノコは嬉々として馬を洗ひだしたが、いつの間にか、どちらも蒼然たる水の中で、一糸も纏はぬ素裸體になつてゐた。

河岸の、朴の樹の茂みに、脚を投げ出して、ぢつと、息を呑むやうに見惚れてゐる靜馬に氣の付かう筈もなく、人馬もろとも、この原始的な大自然の懷に――まるで四人の友だちの如くに――日の暮れるのも忘れて、遊び戯れてゐるのであつた。

靜馬の心に、なんとなく、大きな『聖恩』と云つたやうな感激が雲のやうに湧いて來た。

この全日本を支配する大きな力――つまりは、朝廷の鴻恩、――天も地も、人も獸も、一視同仁の大御心――このメノコも自分も皆、禁廷さまの赤子である――あゝ有難いことだ――。

――一天四海、王土にあらざるなし――

靜馬の兩眼は泪で一ぱいになつた。

メノコは、いつか水を上つて、着物を被てゐた。靜馬は、樹蔭から彼女たちの前に立ち現はれた。

『おい、メノコ、このあたりにや熊がゐるぞよ。わしは、昨日出遭つたぞ。』

二人の娘は、驚愕の叫びをあげた。

アイヌたちは、一番の財産である馬を熊の脅威から防ぐためには、本能的な昂奮をするものだといふことを、靜馬は知つてゐた。

『あなたは、白老のお役人さまか。』

姉らしい方が、何度もお辭儀しながら、おそる〳〵寄つて來た。

『うむ、白老から來た山巡りのものだが、この五六里下流で、大きな熊を見たぞ。』

『まア、今頃熊が何をしてゐましたか。』

『山葡萄を食うて居つた。』

さういふうちに、妹らしい娘は、二頭の馬を川から追ひあげて來た。

熊の子

濶葉樹林の大溪谷の對岸に、四五町歩ばかりとおぼしき山畑が開けてゐて、そこに五六戸のアイヌ部落が點在してゐた。

午近い秋の陽が、茅葺きの土人の小舍を、溫く溫くと濡らしてゐる。

谷川の流れは、一めんの黄葉を浮かべて、まるで繪更紗のやうだつた。

部落のアイヌたちは、物の一刻も前から、物凄い唸り聲を聞いて脅え切つてゐた。

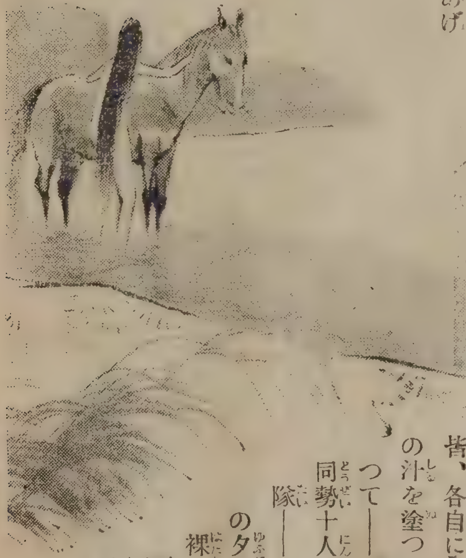
その唸り聲といふものは、どうしても負傷した大熊の聲に違ひなかつた。

溪の向ひ側の、深い澤の奧の方から、峽谷の空氣を引き裂くやうに震るはして、鳴り渡つてくる咆吼だつた。

——これアたゞごとでねえぞよ——

鬚の白い老人が、家から家へと說き廻つて漸く決心した男たちを狩り出すと、勢揃ひして、溪を渉つて押し出した。

皆、各自に、ブシといふ毒草の汁を塗つた槍や、弓矢を持つて——。



同勢十人ばかりの男女の一隊——その中には前の日の夕方、川下で靜馬に裸を見られた姉妹の娘も交つて——魔除けの火繩や、炬火などを振り廻して——戰々

競々と、澤深く分け入つた。

熊の唸り聲は、轟々たる溪流の響きを壓し破つて、だんだん近くなつて來た。

——呀ツ

——先頭の一人が、棒立になつた。

漲り落ちる奔湍の、白い泡を噛むやうに覗いた巨岩の上の、點々たる血の痕――おそろしい爪の力で、掘り返した木の根、崩された岩の角――。

――あれッ――

今度は皆が一度に叫んだ。

その眼の下の、泡立ち沸騰する深い淵の、底の方から水のおもてへと、ぽつかり浮かび上つた一團の黒い塊り――それは、人間と熊との、必死に取つ組み合つた、惡戰苦鬪の凝結した姿であつた。

アイヌたちは心膽を寒くした。

正視するに忍びなかつたか、また、どう手出しをしていゝかも判らなかつた。皆、自然に、顔を伏せて、怖ろしい運命の終幕を待つてゐた。

『あれ旦那様だッ。シャモの旦那だ！昨日の旦那様だアよッ。』

シャマンペといふ娘が、狂亂して、男たちの腕を掴んで喚いた。

なるほど、そこに大熊と格鬪したまゝ、深淵に落ち込んでゐる男は、靜馬だつた。

靜馬は前の日、この、シャマンペといふ姉娘と、ピヤパといふ妹娘とが、自分たちの家へ泊まつて行つたら――と勸めてくれたのを辭退して、日が暮れかけたのを平氣で、山の尾根を越して行つたのであつた。途中――右左兩方から二つの澤が落ち合つてゐるところの溪川の畔で、火を燃して岩魚を漁つた。人間を知らない岩魚は、いくらでも捕れた。それを燒いて夜食にすると、それからもう、歩くのが嫌になつて、岩の窪みへ這ひ込むと、そのまゝ、ぐつすりと眠むつた。

夜が明けると、また山の芋を掘つて、生で食つて、溪水を飲んだ。それで、その一日は歩きつゞける肚で、險しい尾根を越しかけたところで、だしぬけに、仔を伴れた大きな熊と、眞正面に顔を突き合はしてしまつた。

――この年月山男のやうな生活に浸つてゐる靜馬は、熊といふ動物の習性をよく心得てゐた。熊といふ奴は、必らずしも、故なくして人間に反抗するものではない。こちらで去りげなく道を讓るか、交はすかして、極めて平和な態度でゐればそれでいゝのだ。しかし仔を伴れたのと、飢ゑてゐるのと、それから人間に虐げられた經驗をもつてゐるのとは、きつと、猛然たる勢ひで襲ひかゝつてくるものである――

靜馬の前に現はれた熊は、不幸にしてその最惡の條件を具備してゐたと見えて、崖ッぷちの狹い獸徑で、出會ひ頭を、いきなり仁王立ちになると、靜馬の頭へ、微塵になれ！　とばかり打ちかゝつて來た。

本能的に刀を拔いた靜馬は、瞬間！　兩突きの軀ごと、敵の

月の輪めがけて、彈丸のやうぶつかつて行つた。

道の熊も、ひよろりと後退りしたが、そこは斷崖の端だつた。熊は靜馬の軀を犇！　と抱き締めたまゝ、十丈も下の奔流へと轉落して行つた。

物凄い水音と、地唸りのする叫號とが、この大溪谷一帶を搖り動かす中で、人と熊とは、藍を溶いたやうな深淵を、浮きつ沈みつ、いまや死鬪の眞ッ最中だつた。

『早く――早くなんとかせんと、溺れてしまふが――。』

『いや、人間はもう死んどる。熊が放さねえんだぞ。』

『早く、毒矢を射かけろッ。』

『槍で突いたはうが間違ひがねえぜ。』

なぞと、がやがや騒ぎたてるばかりで、あまりの悽慘な光景は誰れも自分で手を出さうとする者はゐなかつた。

熊も人間も、へとへとに疲れたらしく、その一團りは、やうやく水に押されて、二三間下流へ流れて行つた。

と――、そこの岩陰から思ひも寄らぬ娘が、水音高くあげて川へ飛んだ。

それは、姉妹メノコの、姉のシャマンペだつた。狂亂の如く、腰までの急流を、ざ、ざつと突つ切つて、人獸の一塊に近寄つて行くさまを、崖の上に見てゐる者たちは、どうすることも出來なかつた。たゞ慄然として聲を出すものもない。

キラリ！　シャマンペの兩手に振りあげてゐた毒槍が、電光のやうに空を切つた。

火を吐くやうな口を開けて、吼えてゐた熊の、咽喉から腹へ槍は突き刺さつたまゝ娘の手を放れた。

それで、萬事は終つたのであつた。

靜馬は水を吐かされて、土人たちの介抱をうけながら、部落の方へ案内されて行つた。

アイヌの客

靜馬は、肩に熊の爪をたてられて、可なりな重傷を負つてゐた。

アイヌたちは、この傷は、三月ぐらゐ絶對に安靜な療養をしなくては癒らぬと云つた。

彼等は、この、若く美くしい内地人の侍を神の化身のやうに尊敬した。方々から、いろんな藥草を持つて來て、何彼と氣を揉んで注意

斷然第一等の評判『蛸の八ちゃん』田河水泡先生漫畫本
漫畫、漫畫、漫畫、本屋さんの店頭は子供漫畫本の洪水です。その中で斷然第一等が『蛸の八ちゃん』です。キレイな三色刷で、面白い中に爲になる、お子様方のご本です。定價一圓送料十錢本社發行・

してくれた。なかにも、二人の姉妹は、神に仕へるべく選ばれたもの丶やうに、献身的な介抱をつくした。

姉妹たちの家庭は、兩親と、この姉妹との四人家族だつたが、別に、主家の横手にかつて長男

夫婦の住んでゐた、小舍がけの離れがあつた。その長男夫婦は、もう三年も前に白老へ出稼ぎに行つて不在だつたので、靜馬はそこに寝起させられることになつた。

シャマンペは、靜馬が斃した熊の仔を生け捕つて來て、丸太圍ひの檻に飼つた。

仔熊は可愛かつた。茶目な犬つころみたいに、人懐こくて、いつも、檻を出してくれといふやうに、鼻を鳴らしては娘たちの、アッシの裾をくはへて引つ張つた。また、夜が更けると、山が戀しいのか、母熊の夢を見るのか——よく、きゆん、きゆうんと物悲しさうな聲で啼きつゞけた。仔熊が啼き出すと、姉妹が代り番こに起きて、何か食ふ物なぞを持つて來てやつた。

仔熊の檻は靜馬の寝てゐる小舍の、すぐ前にあつた。

靜馬は更けまさる夜を、木枯の音に妨げられて、眠むられなかつた。

——この世の中はどうなつて行くのだ？　どうにもならないで、このまゝ人類が亡びてゆくか。根太の腐つた封建の城に、いつまで、武士といふ特別な階級の、安逸な籠城がゆるされる？

なぜ一天萬乘の君の御治世に復へすことがいけないのだ。忠義のために、武士にだけ都合のいゝ現狀を打ち破ることが、なぜ謀叛なのだ！　大義親を滅することがなぜいけないのだ——馬鹿々々しい——。

世を呪ふ勤王の怒りが、焔のやうに靜馬の血を沸きりたゝせた。

——だが、どうにもならない。自分獨覺めて、何が出來る。たつた一人の同志、北海道へ來てゐる五百人の仙臺陪屋の武士の中で、たつた一人の

志を同じうするものだつた石川春太郎は、陣屋代官の坂田三十郎のために殺されてしまつたではないか。勤王と一と聲出しても、殺されてしまふ世の中に、何をどうすることが出來ようぞ！　あゝ――

眠むらうとすると、枕に響く、熊の仔の悲しい啼き聲だ。

主屋の方から、ゴトゴトと雨戸を開けて誰れか、こちらへ出て來る氣配がする。

足音は、熊の檻へ行つた。

『どうしたの、お乳が戀しいのかい。』

姉娘のシャマンペだ。

『おうさうか、よし、よし。』

シャマンペは檻の扉を押し開けて、中へ入つたらしい物音だ。

――どうするつもりだらう――

靜馬は床を這ひ出して、板戸の節穴から覗いて見た。外は銀色の月夜だつた。

シャマンペは、仔熊を抱きあげて頬擦をしてゐた。仔熊はまたすつかり泣き熄んで、黒い鼻づらを、シャマンペの胸へ押しつけるやうにして、眠りかけてゐた。それを、そつと下に卸ろして出ようとすると、すぐに、うるさく啼き頻る――。

『しやうがないな。』

シャマンペは、つひにあきらめて、檻の中へ坐り込むと、パツと自分の胸をはだけた。月の光に仄白い、夕顔の花が咲いたやうな乳房を露き出すと、仔熊を抱き寄せて、若い母親が、子に添へ乳をするやうな姿勢で、檻の中へ横に臥た。

しばらく――仔熊は、いつか、すやすやと眠入りかけた。

また、主屋の方から人が出て來た。

それは娘たちの母親だつた。

『まア、なんといふ阿呆な娘ぢやろか。子を產まん娘の乳が出ると思ふとるのか。』

母親は檻の前へ來て、呆れた聲をたてた。

『だつて、このとほり、ちゆく、ちゆく吸つて寢てしまうたがな。』

『馬鹿いふなよ。』

母親は、主屋の方から、何かの汁らしいものを持つて來て、

『さアこれを食はせといて、寢な。』

と娘を叱つた。

つい寢過ごして、靜馬が眼を覺ました頃は娘たちは、山か川かへ出かけて二人ともゐなかつた。

空には重い雲があつて、淋しく寒い冬の近づいた色を見せてゐた。

靜馬が外へ出ると、仔熊が見かけて、檻の丸太格子から顔を覗けた。

檻の中には娘たちが入れてやつた木偶人形だの、土でつくつ

た鳩笛みたいなものだのが轉がつてゐた。仔熊は、そんなものを、いかにも尤もらしく、口にくはへたり、手に握つたりして遊んでゐた。

熊祭り

へ三千世界の神樣さへも、戀に窶れて雨降らす。ホイヤ、ホイヤ……。

粉雪が音もなく降りしきる宵の爐端で、姉妹が刺繍を縫ひながら、やるせない、淋しさと、澄み切つた美くしさの、もつれ合つたやうないゝ聲で、アィヌの追分が、靜馬の旅愁を唆る。

それは、泣いて、むせび泣いてゐるのではないかと思はれるほど哀切限りなく、また抑揚の微妙な唄である。

この唄を淡い感傷のうちに聞きつゞける夜が重なつて、やがて、極北の山峽にも、遲い春のきざしが動く季節になつた。

──思はずも永い月日を、浮世の外に暮らしてしまつたものだ。白老の陣屋では、何と云つて騷いでゐるだらう！ 失走？ 死？ おそらくは、山深く分け入つた變人が、熊に食はれてしまつたと、とかく思想の合はぬ上役や同僚から、仙臺の本藩へ、失走の屆けが出されたことだらう。

幸にして兩親はこの世に亡い。我欲一點張りの、冷たい兄夫婦は、むしろ、家名を汚すかも知れなかつた危險思想の弟が死んだと思へば、安堵の眉を伸ばしてゐよう。

妻──これはまた、何たる呪はしい存在だらう。藩の重役を父にもつことを誇りとして、我儘三昧に振舞ひ、容色をその高い鼻にかけて、男を男臭いとも思はぬ女。

權門に媚びて一家の出世をこれ祈る兄が、政略的な意味で、無理强ひに自分と結ばせた縁。今頃は破れた草履を捨てるやうな氣持ちで、實家へ歸つて、次の嫁入りでもしてゐるであらう。さうした輕薄さの女だ。それにしても自分の人生はどこへ行くべき運命なのだ？

こゝにいつまでも、かうしてゐることは出來

流行歌
浜の朝虹
鹿山映二郎詩
竹岡信幸曲
東海林太郎唄
濱の朝虹岬の空に、島とかけましよ棧橋を……やるせないギターの音に乘つて、なつかしい竹岡メロデーが再び貴方の耳に訪れました。ゼヒ御試聽を…
B ベコニヤの唄 井口小夜子唄
(K522)
キングレコード

ないとすれば、任地へ、仙臺陣屋へは、歸らなくてはならない身分だ。內地に生きることは、仙臺に、勤王の大道を無視して虫のやうに活きることは、絶對にすまいと決心して、鄕里も、肉親も、妻も、一さいの系累と斷ち切るつもりで、無理に、白老の陣屋詰めを志願して來た自分ではあるが、その仙臺陣屋へは、も一度どうあつても歸らねばなるまい。そこにも五百人の藩士が、無自覺な、醜に生活に憎しみ合つてゐることでは、まるで仙臺城下の縮圖に過ぎない——としても歸つて萬事を處理し、一介の浪人となつて改めて、人世の方針を樹てるべきだ——。

靜馬は、近くこの山峽を——溫い人情のこのアイヌ部落を去ることに腹を極めた。

そのうちに、土人たちの、生命を打ち込むまでに昂奮する、一年一度の大行事、熊祭りの日が近づいて來た。

むろん、シャマンペ姉妹たちも、兩親も、部落全體の人々も、靜馬を主客とすることによつて、この年の大祭は、とりわけて大きな意義があると、欣び合つてゐることは、靜馬にもよく判つてゐた。

だから、靜馬は、その日が來たら、いさぎよく彼等の主賓となつて、嬉しい心づくしを充分に享けた上で、出發するつもりになつてゐた。そのうちに、いよいよその日が來た。

それは、悲哀と嚴肅と、壯觀と怪奇とを極めた儀式だつた。

娘たちは、朝から新調の上着を被て、新らしい帽子を頂いて、上氣した顏を輝かせながら、料理の準備に忙がしさうだつた。

部落の女房や娘たちも、皆寄つて來て、それを手傳つた。

部落の男たちは、みな、アッシの上に先祖傳來の陣羽織を一着に及んで、一種壯嚴な表情をして繰り込んで來た。

席定まるや、姉妹たちの老父が、北の窓に飾つた神棚に向つて、長い詞の祝詞を奏し始めた。この祝詞は一時間半もつゞいたが、その間に何度も、神の前に酒が注ぎかけられるのであつた。

酒は一ヶ月も前から用意して釀り込んだ濁酒である。

やがて、午後になると、戶外の儀式に移つて、村の若い者が二人、檻の中で遊んでゐた熊の頸に繩をかけて、外へ引き出した。

熊はもう動物の豫感で、その場の空氣に怖れ戰いて、悲しく吼えつゞけた。

熊はけふ、神の犧牲に殺されるのである。

娘たちは、しきりに泪を拭いてゐた。

シャマンペは、よほど引きずり廻されて、疲れて來た熊の前に跪んで、その頭を撫でてやつた。熊は救けを求めるやうに、シャマンペの顏に悲しい眼を向ける。

——おうおまへは、けふまでうちの家族だつたが、けふから

神樣になるんだよ。人間を怨まないで、どうかおとなしく踊らされて、それから親熊のところへ行きなさい。また緣があつて私の家へ生れ更つて來てくれるのを私は待つてゐるわ――。

シヤマンペは熊の頸を抱きしめて、はふり落つる泪のなかで、そんな挨拶をした。

つひに、熊は祭壇の前で、若者のために首を打ち落されてしまつた。

それから、夜にかけて、飲み、食ひ、歌ひ且つ踊る――大宴會が夜央までもつゞいた。

主客の席に坐らされた靜馬は、大きな器で無理强ひされる濁酒に、ほと／＼まゐつたので、機をみて座を外すと、自分の小舍へ逃げ歸つた。

そこへ、あとを追ふやうにして、シヤマンペが、夜食の膳を運んで來た。

その持つて來た膳をすゝめるでもなく、シヤマンペは想ひ迫つた顏を、心もち紅潮させて、靜馬の前へ、崩れるやうに坐つた。

『旦那樣は、どうあつても、明日お發ちになるかね。』

『うむ、ながらくお世話になつた。おまへたちの親切は身にしみて嬉しかつた。』

シヤマンペは、うつむいて默つてゐた。

『また、來年の春は、こつちへくるよ。』

『もうこんなところへ旦那がくるものか。』

シヤマンペは、素直な氣持ちで云つたのだつたが、憤つたやうに聞こえた。

『旦那樣、わたしはお別れしたくない。』

さう云つてシヤマンペは、わッと床の上へ泣き伏した。

その耳が火のやうに紅くなつて、丸い肩や腰が、身悶えするやうに脈打つてゐる。

靜馬に、娘の心が判らないでもなかつた。けれども、これを引き寄せて、掻き抱いたとて、明日發つて、おそらくは二度と逢ふこともないこの娘を、どうする。

シヤマンペは、いつまでも泣いてゐた。

翌る日靜馬は朝早く、この深い峽谷の部落を出發した。

『シヤマンペも、ピヤパも、早くいゝ戀人を見付けて、幸福に暮らすんだよ。』

姉妹の手を握りしめて。

部落ぢうの女が『ホイヤ、ホイヤ。』と聲を放つて泣いた。

シヤマンペは谷底の小徑を二里近くも見送つて來た。その小徑が極まつて、高い懸崖の下へ出たとき、靜馬は最後の別れにシヤマンペの肩を抱いた。

シヤマンペは靜馬の胸へ喰ひ入るやうに獅嚙み付いて來た。

靜馬が、それからしばらく行つて、山の頂を、向ふへ越さうとしたときも、まだシヤマンペの、やるせない泣き聲が、谿に

響いてゐた。

呪ひの眼

　靜馬が白老の陣屋へ歸つたことは、亡靈がこの世に迷ひ出たやうな驚きに、人々の心を打つた。だが、あまりに自分の死が、無造作に決定されてしまつてゐたことに、靜馬もまた驚かされた。それに――妻が來てゐた――あの、始めから愛のない、家と家との政略的な結婚によつて、君臨するやうな氣持ちで、嫁して來た驕慢な妻が、冷たい花のやうな美貌を、この極北の屯所に輝かせてゐた。

　靜馬は、もとの自分の家に入つた。

　氷の彫塑みたいな妻が、無言でその前に立つた。

『おまへは、こゝへ何をしに來た。』

『あなたが失走されましたから、妻として跡を始末しにまゐりました。』

『わしは失走しやせん。』

『でも、失走されて、お亡くなりになつたことになつて居ります。』

『おまへも、頭からさうと信じてゐたか。』

『はい。』

『それが人の妻としての心か。』

『…………。』

　不幸な夫婦の、永い間の別々な生活が、久しぶりで一つになつたときの挨拶がこれだつた。烈しい憎惡をこめた睨み合ひ――。

　靜馬はそのまゝ引き籠つて寢てしまつた。

　霧の深い日が何日もつゞいた。

　陣屋代官は、生きて歸つた變り者の處置に困つた。

　とりあへず藩へ報告して何とか、靜馬の身のふり方を講ずることゝして、その準備をしてゐるところへ、靜馬からの、浪人屆けが來た。――死んだ者を生かす手だてはござるまい。拙者は死んだものになつて、この娑婆から姿を消すことは本望でござる。たゞ武士として、何の失策も、後ろ暗さも持たぬ身が、失走してしまつたと云はれることを潔しとしなかつたので、歸つてまゐつたのである。どうか離藩の手つゞきをお願ひ申したい――といふ意味の手紙を添へて。

　靜馬としては、その手續きが、どう處理されようが、そんなことは問題ではなかつた。

　――これでいゝ、するだけの屆けをして置けば、それで、自分の氣持ちは濟む――

　ほつとして、陣屋裏の彼は霧の降りた林の中を歩いてゐた。

　――早く、一日も早く、明日の日にもあの山の奥の、シャマンペ姉妹のゐるアイヌ部落へ行つて、あの土人の中の一員として餘生を平穩に、一個の良民として終らう――

静馬の胸は今はもうその想ひだけで一ぱいだつた。

『誓つてくださいまし、ねえ、あなた。大次郎様、わたくしがこんな蝦夷地まで何のために出て來たと――。』

『そなたは、静馬のあとを弔ひに――。』

『なにを、あんな狂人を――わたくしは始めから嫌ひでございました。筒井づつのあなたに捨てられて――。』

『それは云はさぬ。どちらが捨てゝ緣づかれたのぢや。みどもはいまだに獨身でござるぞ。』

『その獨身が、おそろしい、女を釣らうための毒針――ほゝ憎くらしい。』

『痛いッ。』

静馬は、霧のたちこめた林の中で、姿こそ見なかつたが、明らかに自分の妻と、陣屋代官の次男大次郎との、不義の語らひを聞いてしまつた。しかし、灼けるやうな腹立たしさは、静馬の胸には燃えなかつた。

――あゝ、昔の噂は、ほんたうだつたのか、あれは、さうした女だ――

さう思つて、静かに足をかへした。

脱走

暗い北の國に、淡い紗のやうな春が降りて來て、いろんな木が一度に花をもつた。

オリムピック カメラ

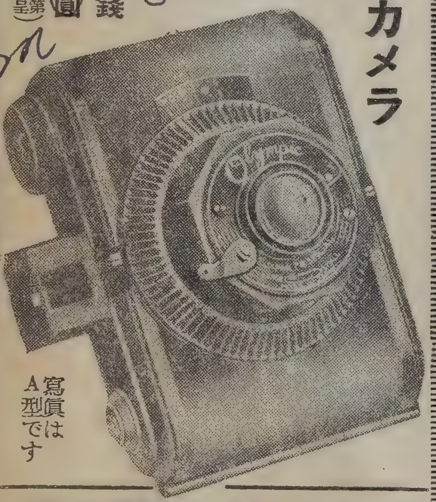
誰にでも良く寫る最新優秀カメラ

このカメラはベスト十六枚どりの最新式小型カメラで携帯至便、レンズは高級複写、取扱ひ方は簡單で初心者でも直ぐに立派な寫眞が撮れます。而も形は下圖に見る様なフォーカシング式のとてもスマートで、全ベークライト製の堅牢な構造です。携帯用カメラとしてゼヒお奨め致します。

A型 シャッター五十分ノ一 レンズF8 九圓七十五錢

B型 シャッター五十分の一 レンズF6.3 十五圓

送料内地二十錢其他五十錢（御申込み次第カタログ進呈）



寫眞はA型です

御注文は…大日本雄辯會講談社代理部

東京市小石川區音羽町三丁目（振替東京六六二九番）

すぐにもこゝを去つて行かうと思つてゐた靜馬は、輕い風邪に罹つて、十日餘りを淋しい床に就いてゐた。

それもすつかり癒えて、床を拂つた日の夕方だつた。

靜馬は、陣屋の裏木戸を出て、土人部落の方へ、そゞろ歩きの足を向けた。

と、そのとき、陣屋の横の、通用門の中から、一人のアイヌ女が、米を脊負つて來た歸りらしい姿で靜馬の方へ、何か叫びながら、馬のやうに走り寄つて來た。

『旦那さまッ。』

『おう!』

それは、シャマンペだつた。あの、山の谷の、野茨の花みたいな顏をしたシャマンペではないか——。

二人は強く、強く抱き合つた。

『どうしておまへはこゝへ?』

『兄のところへ、白老に來てゐる兄をたよつて來ました。』

『さうか、よく來てくれたな。それで、陣屋へ米運びに雇はれたのか。』

『はい、それもよつぽど賴み込んで、やつと、

三日前から人夫に雇れました。』

『なぜわしを訪ねて來なかつた。』

『毎日……。』

シャマンペは嵐のやうな情感に溺れて、烈しく泣き出した。

『毎日探してゐてくれたか。』

『……どこにゐらつしやるかと……けふは逢へるか……けふは逢へるかと。』

……………………

二人はいつか、深い林の中へ入つて行つた。夕日が、白樺の林

を斜に照らして、まるで、銀色の柱のやうに見せてゐた。鳥の聲と花の甘い匂ひとが、密と乳を流したやうに林間の空氣を柔らげてゐた。

二人は、草の上に腰をおろした。

『どうしてゐたのぢや、あれから。』

『旦那樣。』

『?』

『……もう逢ひたうて、逢ひたうて……。』

シャマンペは靜馬の膝に縋りついて來た。

その、雌熊のやうな匂ひのする、すこやかな四肢を、靜馬は犇！と抱きしめて離さなかつた。

『シャマンペ、わしはお前の村へ行くぞ。おまへと一緒に、明日でもこゝを發つて、あの山の谷へ行つて、おまへと夫婦になることに決めたぞ。』

『ほんとかッ旦那さま。』

シャマンペは彈かれたやうに顏をあげたがすぐにまた、靜馬の頸に抱きつくと、聲をあげて泣き出した。

そのとき、不意に、頭の上から斬りつけるやうな聲をかけるものがあつた。

『あなたッ。そのざまは何でございます。』

『村田ッ、それが武士のすることか、野獸のやうな女と――。』

二人は飛び放れた。

靜馬の妻の高野と、代官の次男の大次郎がそこに立つてゐた。

『村田、貴殿は狂氣したか。』

靜馬は默つて、二人を睨んでゐた。

『大次郎さま、まづその女を、いや、獸を斬り捨てゝくださいませ、穢らはしい。』

『こら女ッ。』

大次郎が、腕を伸ばしてシャマンペを突き飛ばさうとした。

その腕が、靜馬の掌で、ぴしりッと拂ひ除けられた。

『何をするッ。』

大次郎は靜馬を一喝すると刀を拔いて、シャマンペへ斬りかかつて行つた。

『えいッ。』

横から、拔く手も見せぬ靜馬の白刄が、大次郎の肩を斬り裂いた。

『うわッ。』

『姦夫、思ひ知れッ。』

二の太刀で、大次郎の首は草に轉がつた。

シャマンペはその間に、小鹿のやうに刎ねて逃げだした。

心から蒼ざめたやうな顏をして立つてゐる妻へ、靜馬の最後の言葉。『高野ッ、姦夫の首を抱いて消えろッ。』

そのまゝ、シャマンペのあとを追つて、靜馬は林の奥深く走り込んでしまつた。

散る花

日が暮れた。

陣屋裏の山は、無數の篝火が螢のやうに點綴して、陣屋總出動での、狂人靜馬狩りの網が張られた。

勤王の過激思想を憎いと思つてゐた上に、可愛い伜を、故なく殺された代官の坂田三十郎は、烈火のやうに怒つて自ら靜馬狩りの陣頭に立つて、聲を嗄らしながらの指揮だ。

ところどころで、闇を衝ン裂く鐵砲の音。

靜馬はつひに、シャマンペの姿を見出すことが出來なかつた。

——もしや追手に捕まつたのではないか——

それが氣がかりで、自分が逃げのびることを忘れてゐた。

突然、ぴりぴりッと呼び子の笛が鳴つた。

——しまつた——と思ふ身のまはりに、もう、網の綱を絞り寄せるやうに、十人ばかりの人數。その圍みの一歩內側に、代官の三十郎が、右手に短筒を突き出して立つてゐた。

靜馬は、血刀を正眼につけて、三十郎を斬るやうな眼光に睨みつけてゐた。

『はゝゝ狂犬め！　これが見えぬか。それこれをかう引けば一發で消えるきさまの命だぞ——それッ。』

あはや！　引き金を——と思はれた瞬間——發矢！　と飛んで來た小石が、三十郎の横頰を打つた——途端に火を吹く短筒——思はぬ礫に手元が狂つた三十郎、狼狽して二發目を——と身構へたその一髮の間に、踊り込んで來た靜馬が必殺の一と撲りに、三十郎の胴は、血の柱を吹き上げて仆れた。

『やつ！　こゝに石を投げる女がゐたッ。』

十間ばかり先きの熊笹の繁みから、さういふ聲に狩り出されて、シャマンペが飛び出した。

『まてシャマンペ。』

靜馬はほんとに狂つたやうになつて、この方に駈けつけた。

シャマンペを捕まへようとしてゐた二人の武士は、靜馬のために右と左へ斬り落された。

靜馬はシャマンペを引きずるやうにして逃げた。

と、斷崖だ。深さは暗くて判らなかつた。そこへもう、どやどやと、二十人ばかりの追手が迫つた。シャマンペを背後にして向つてくる敵に立ち直つた靜馬が、先頭の一人を斬り仆して、

『さアくるかッ。』と叫んだとき、シャマンペは身を飜して崖の下へ飛んでしまつた。

遙かの崖下で、どうん！　と一つ太鼓を打つたやうな水音が聞えた。

崖の下は、火山口に湛へた底なしの沼だつた。

よしッ！　と腹をきめた靜馬は、持つてゐた刀を敵陣へ投げつけるとくるりと軀をかへして、これも崖のふちから飛んでしまつた。また大きな水音が一つ——。

（終）

秋になつても食慾の

◎食慾進まず胸先つかへ・むかつき・よくゲツプが出る

◎常に下痢や軟便で・便には粘液・血液・膿汁が混じる

◎お腹が膨りゴロゴロ鳴つて放屁多く・胃や下腹が痛む

◎滋養物を食べても身につかず・身體が次第に衰弱する

◎元氣衰へ顏色惡く・神經過敏で短氣となり睡眠不足勝

この症狀に思ひ當る人は

慢性胃腸病

ない人は胃腸が惡い

すぐアイフを服用なさい!

藥價	胃と腸の兩病にはアイフ(粉末)		胃病專門に健胃アイフ(錠劑)	
	三服入 二十錢	十七日分 三圓	七十五錠入 五十錢	三百四十錠入 二圓
	四日分 七十五錢	四十五日分 七圓	百六十錠入 一圓	千錠入 五圓
	八日分 一圓五十錢	特製十一日分 五圓		

●各地有名藥店にあり●

大阪市東區清水谷西之町

發賣本舖 順和商會

振替貯金口座大阪三四五番

電話東五〇〇〇・五〇〇二・五〇〇三

支店 東京・大連

にはアイフ

妻の本能

『英吉さん。——お粥が出來たわ。冷めないうちに、召し上れ。』

外には、寒い冬の風が、音を立てゝ吹いてゐた。

とし子は、お盆の上に土鍋と、梅干の皿と、茶碗や、箸など揃へて、英吉の枕元に運んで來た。

『食べたくないんです。』

英吉は、蒼ざめて、憔悴しきつたやうな顔をしてゐたが、弱弱しく微笑を含んだ眼で、とし子の顔を見上げた。

假初の風邪だと思つてゐたのが氣管支加答兒から肺炎を起して、一時は、醫者も頭を傾げるくらゐな重態だつた。それが最近、やうやく熱も分離して、いくらか、回復期に向つたところだつた。

三週間ばかりの病床生活の間に頭髮はぼうぼうと延びるし、頰の肉は削けるし、見違へるやうに、窶れてしまつた。

英吉の衰弱もさることながら、その間のとし子の手厚い看病は、大へんなことだつた。——醫者は、毎日來診してくれたけれども、日に三四回づつも取替へなければならない濕布から、吸入から、何から何まで、とし子の手一つで、間に合せなければならなかつた。もちろん、看護婦など、雇ふどころではなかつた。英吉が、高熱に浮かされたやうになつて、はつきりした意識を失つてゐた三日間ばかりといふもの、とし子は、英吉の枕頭に、附きつきりだつた。夜なども、ほとんど一睡もしなかつた。

それは、孤獨な英吉に對する、たゞの同情や、深切だけでは、とても出來ないことだつた。——妹が兄に對するやうな、妻が良人に對するやうな愛情がなければ、そんなに一生懸命には、盡せるものではなかつた。

それでも、やうやく一時の危機は脫して、回復期には向つたけれども、あまりに衰弱が激しいので、まだ、すつかり安心するわけにはいかなかつた。醫者が言ふのには、これから嚴しい寒さが、かなりつゞくことだし、それに肺炎の豫後は、殊に氣を附けて養生しなければならないのだから、どこか、暖かな海岸にでも轉地したらいゝだらうと、命令ではないまでも、頻りにすゝめてゐた。

でも、回復は遲々として、捗取らなかつた。一時のやうな高熱こそ取れたけれども、夕方になると、決つて二三分ぐらゐの

微熱が出て、容易に除れなかつた。──氣力が、ちつとも出てこない上に、さつぱり食慾がないので、英吉は、肺結核にでも冒されたのではないかと、自分で心配してゐた。

醫者にも、執拗く念を押してみたけれども、でも醫者は、そんな懸念は、絶對にないからと、保證してくれた。

それでも、病後の衰弱のため、ひどく神經質になつてゐる英吉は、醫者の保證など、いつの間にか忘れてしまつたやうに、自分の健康狀態を、氣にするのであつた。

『どうして、召し上らないの？　お鷄卵を入れて、とてもおいしく出來たわよ。』

とし子は、英吉の食慾のないことも、心配だつたが、それよりも氣力が、すつかり打ち拉がれてしまつてゐることが、不安だつた。──それは病氣のせゐだつたかもしれなかつたけれども、いつもの英吉なら、こんなに弱々しく、意氣地のないはずはないのにと思ふと、氣がかりだつた。

『ちつとも、欲しくないんです……また、後で食べますから。』

英吉は、折角とし子が拵へてくれたお粥を、食べないのは惡いと思つた。──自分としても食べないでゐると、元氣はいつまでも、回復しないのだから、無理をしても食べなければならないと思つたけれども、どう努めてみても、食べる氣になれないのを、どうすることも出來なかつた。

『後でなんて言つてゐないで、少しでもいゝから、召し上れよ。』

とし子は、まるで赤ん坊にでも、すゝめるやうに言ひながら、茶碗に少しばかり、お粥をよそつてやつた。

さうまでしてくれるものを、英吉としては、その上、拒むわけにはいかなかつた。

『ぢや、わたしがお匙で、食べさせて上

篇中の主要人物

ナミエ……伊豆の漁村に育つた或高貴な女性の捨兒。不良貴族秋山の誘惑で東京に出奔し、數奇な危難の後、奇しくも秋山の友人加賀見をパトロンとして、今は榮華に飽く身となつたが、一夜その加賀見と横濱の大舞踏會に出向いた彼女が、其處で尋ねる秋山に出會して語つたのが端緒、加賀見、秋山の兩親友は、忽ち凄じい戀敵意識を燃して、互に相對立することになる。

英吉……ナミエの許婚者。彼女の身性を語る銀の小筥を手に上京、搜索に奔走中不幸自動車の危禍に遭ひ、其際取落した小筥は、秋山の狎妓小若に拾はれ、自分は運轉手政吉の好意で養生をする。

とし子……右の運轉手政吉の妹。英吉を看護する中、次第に仄かな戀心を覺え、彼が癒えて後は、兄の助手に推薦して一緒に暮す。

るい子……加賀見の妹。英吉を命の恩人として熱烈な戀を寄せる跛の令孃。

げませうか。』

『いや、そんなにまでしていたゞかなくたつて、いゝんです。』

英吉は、あわてゝ言つた。

『いゝのよ。何でもないことですから、わたし、お匙を取つて來るわ。』

『僕は、起きられるんです。』

『でも、大事にした方がいゝのよ。今日は寒いんですもの。』

と言ひながらとし子は、さつさと立つて、隣りのお勝手まで行くと、直ぐに、小さなスプンを持つて來た。

『さあ、あーンと、お口を大きく、お開けになるのよ。』

匙で、お粥の少量を抄つて、自分でもあーンと、口を開けながら、英吉をやしなつてやるのであつた。

どんな女性でも、母たる本能を持つてゐると同時に、また妻たる素質も持つてゐる。――とし子は、英吉に對して、母であると同時に、いつの間にか愛人としての役割を、果してゐた。單に、愛人としての役割を、果すばかりではない。いつの間にか、本當に愛人としての情熱が彼女の小さな胸に芽生えてゐた。

『こんなに、とし子さんにお世話になつて、濟まないと思ひます。』

英吉は、やうやく一碗のお粥を食べ終つた後で、涙ぐんだやうな眼をして、ぢつと、とし子の顔に見入りながら、しみぐ＼と言つた。

『あら、いやだわ。濟むとか濟まないとかつて……そんなことを言つて、英吉さんは、水臭いぢやないの。』

とし子は、ぱつちりした美しい黒い眼に、いくらかの怨みを籠めて言つた。

『ほんとうです。――それを思ふと、僕は、かうしていつまでも、寝てなんかゐられないのです。』

『まあ、英吉さんは、どうして、いつまでも他人行儀に、そんなことばかり、氣にしてゐらつしやるのでせう？』

と、とし子は不服さうに言つた。

『ですが、何んの縁もゆかりもない者が、こんなに、親身の親きやうだいも及ばぬくらゐの厄介になつて……濟まないとも思へば、感謝もするのは、あたりまへのことぢやありませんか。』

『英吉さんの方では、わたしたちのことを、いゝ、あかの他人だと思つてゐらつしやるかもしれないけれども、兄さんだつて、わたしだつて、英吉さんのことを、決して他人だなどとは、思つちやゐませんわ。だから、英吉さんの方でも、遠慮なくして下すつた方が、どんなに氣持がいゝか、知れないのだわ。』

『あなた方の深切は、僕は、どんなことがあつても、忘れません。』

『まあ、まだ、そんな、他人行儀なことを言つてゐるのね。』

『こんなに、いろ／＼厄介になつて、このご恩が、いつになつたら返せるのかと思ふと、僕は悲しいのです。』

と、英吉の涙にうるんでゐた眼からは、ほろりと一雫、大粒の涙が、あふれると、見る／＼眼尻をつたつて、ころがり落ちたが、音もなく枕の布に沁みてしまつた。

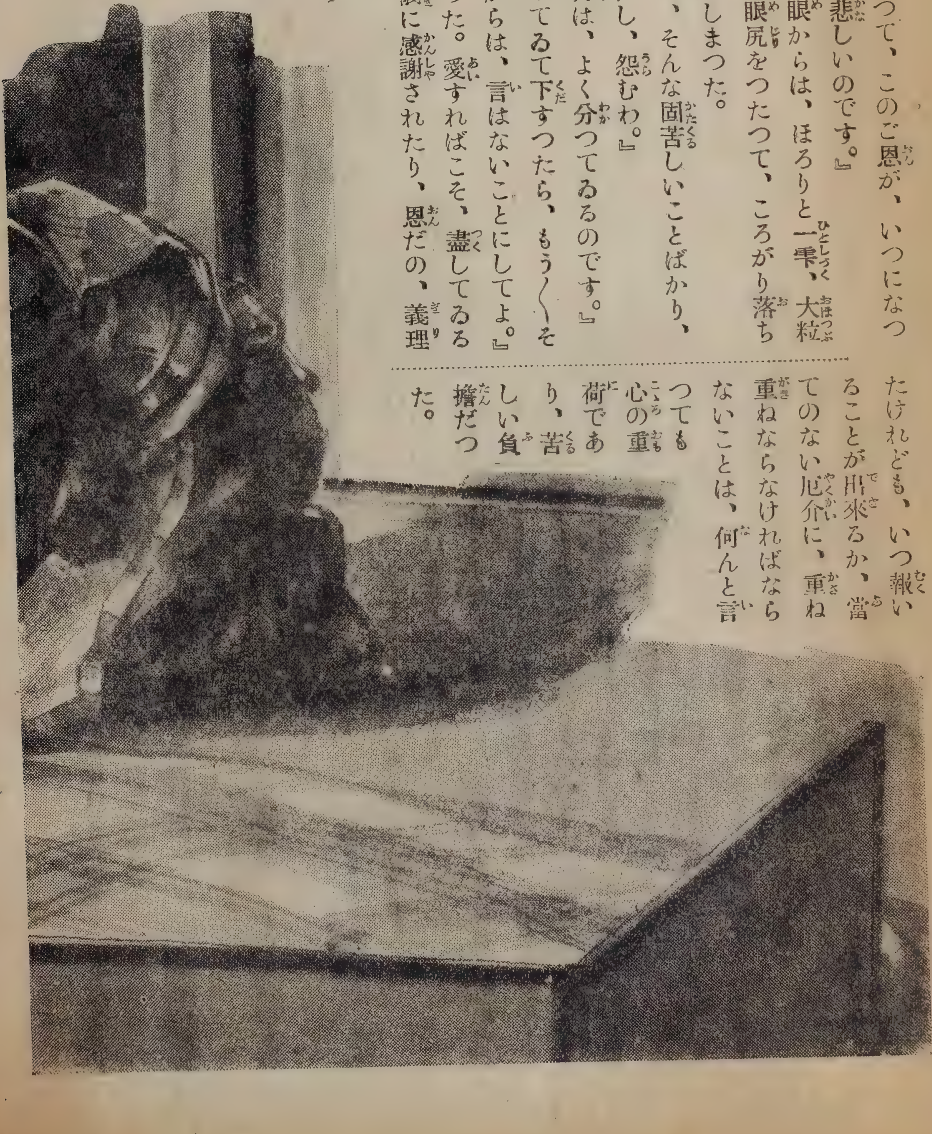
『英吉さん。あなたはどうして、そんな固苦しいことばかり、思つてゐらつしやるの？ わたし、怨むわ。』

『とし子さんや、政吉君の氣持は、よく分つてゐるのです。』

『わたし達の氣持が、よく分つてゐて下すつたら、もう／＼そんな他人行儀なことは、これからは、言はないことにしてよ。』

とし子は、嗜めるやうに言つた。愛すればこそ、盡してゐる自分達の深切を、一々他人行儀に感謝されたり、恩だの、義理だのと言はれるのは、心苦しかつた。それよりも、親身の兄や、妻にでも甘えたり、無理を言つたりするやうに、出來るだけ我儘にしてくれる方が、どんなに嬉しいか知れなかつた。

英吉の方でも、とし子や、政吉の氣持は、よく分つてゐたけれども、いつ報いることが出來るか、當てのない厄介に、重ね重ねならなければならないことは、何んと言つても心の重荷であり、苦しい負擔だつた。



殊に、とし子の深切が、英吉に取つては、何んとなく、重荷に感じられるのであつた。口に出して、はつきりそれとは言はないけれども、ひそかに自分を愛してゐるらしいことは、自分に示す態度や、言葉の端々でも、明らかに、それと感じられるのであつた。

——英吉としても、彼女の心根は嬉しく、小さな胸に秘めてゐる純眞な處女の戀心を、どんなに可憐らしいと思つても、しかし英吉は、自分にはナミエといふ許婚者があるのを、どうすることも出來なかつた。

……ナミエは、今、どこに、どうしてゐるのか、行方不明のまゝ、その消息が、杳として分らない。どんな境遇になつてゐるのか？ 生きてゐるのか、それとも死んでしまつたのか、それすらも分らない。でも、ナミエが生きてゐる限りは、どんなことをしてでも、探し出さなければならないし、たとへどんな境遇、どんな身の上になつてゐようとも、必ず二人は、結婚しなければなら

ない！

さうでないと、死んでしまつた寛之進との間に交してある、あれほど固い／＼約束を、裏切ることになつてしまふのだ。

英吉は、死者に對する約束を重んじ、信義を尊めばこそ、るい子のあれほど哀れな求愛をも、斷乎として退けてしまつた。――しかも、あゝして加賀見家を、飛び出して來たのではなかつたか！

もし、とし子の自分に對する愛が深く、ます／＼切なくなつてくればくるほど、英吉としては、だん／＼、斯うしてとし子きやうだいの、厄介になつてゐるわけには、いかなくなつて行くのであつた。

何んにしても、英吉が焦るのは、自分が早く獨立しなければならないといふことだつた。――運轉手の免許狀を、一日も早く取らなければならないことだつた。そして、どこかのガレーヂに、雇はれるなり、いゝ具合に、お屋敷のお抱へ運轉手の口でもあつたら、そこに住み込むなり、バスの運轉手にでも志願するなりして、働かなければならない。――ゆく／＼は自分でタクシーの一臺でも持つて、稼ぐことにすれば、人の世話にならなくても、どうにか、食ふには困らないだらう。

英吉は、病氣で寢てゐながらも、前途の希望と、光明とを、捨てなかつた。身體さへ丈夫なら、どんなことをしても働くし、何年かゝつても、ナミエの行方を探しあてゝ、きつと、寛之進との約束を、果さずには措かない！

（何よりも早く、丈夫になることだ）

とは思つても、微熱と、衰弱とは、なかなか取れないし、三日や、五日で、全快するやうな狀態ではなかつた。

英吉が、時々不安を感じるやうな、肺結核などではないとしても、しかし、こんなに衰弱した身體では、病床を離れることが出來たからといつて、直ぐには、稼ぎに出かけられないことは、分つてゐた。

やつぱり、醫者の言ふとほりに、三十日か、五十日は、轉地して、ゆつくり養生をしないと、元の健康な身體には、返れさうもなかつた。

それを考へると、英吉は、前途が、なかなか遼遠な氣がして、つい焦り／＼せずにはゐられなかつた。

（それにしても僕は、どうして、こんなに不運なのだらう！）

英吉は、つい愚痴も出れば、悲觀もして、溜息をついた。

以前は、病氣などして、一度だつて、寢たこともなければ、もちろん、醫者にかゝつたこともなかつた。藥を一服のんだこともなし、まつたく、健康そのものゝやうな身體だつたのに。

――それだのに、この頃は、どうしたといふのだらう。……いつか大暴風雨の時に、難船してゐる加賀見一家を助けた時、一

週間ばかり病床に就いて以來、時々病氣をするのは、一體、どうしたわけなのだらう。別莊が火事で、煙に咽せて、將に危いところだつたるい子を救つた時にも、四五日入院をしなければならなかつた。それから東京に出て來てから、政吉の自動車に撥ね飛ばされた。その時にも、醫者の手を煩はしたし、また今度は、こんなふとした風邪から、肺炎などといふ危險な病氣になつてしまつた。――回復しても、醫者からは、轉地の必要があると言はれてゐるのである。

英吉は、重ね〲の病難と、災厄と、不運とに、すつかり打ち拉がれてしまつた。

(こんなことでは、運轉手の免許狀を取るのだつて、いつのことになるか、分りやしない)

英吉は、どうかして、少しでも自分の氣持を、引立てよう。――心を明るい方に向けようと、自分でも努力しながら、でも、いつの間にか、絶望と、悲觀とに傾いて、心が弱々しくなつて行くのを、どうすることも出來なかつた……

美しき人々

英吉が、病床に臥せつてゐる間に、正月は、いつの間にか過ぎてしまつた。――節分を迎へて、季節の上では大寒が明けて、自然の春は、しのびやかに、近づいて來つゝあつた。

風のない、靜かな夜。

雨戸の外までも、春の氣配が、ひた〲と迫つて來てゐるのが、感じられるやうな、そんな夜だつた。

英吉の健康は、それでも、だん〲回復して來た。永らくの間、執拗につゞいてゐた夕方の微熱も、いつの間にか、さつぱり除れた。――まだ、すつかり床を離れるといふわけにはいかなかつたけれども、それでも、寢たり、起きたりして、氣力もかなり回復して來てゐた。

政吉は、相變らず、夜の圓タク稼ぎに出かけて行つて、留守だつたし、とし子は、夜食の後片附を終ると、英吉の枕元で、政吉のシャツの破れを、繕つてゐた。

疊が敷いてある、部屋らしい部屋といふのは、たつた一間しかなかつた。寢るのも、食事をするのも、何をするのも、その一部屋で、間に合せなければならなかつた。

英吉は、いつの間にか、眠るともなく、うつ〲と眠つてゐた。

と、ぼそ〲と、何か話し聲が耳に入つたので、ふと眼が醒めた。政吉が歸つて來て、ちやうど、夜食を食べてゐるところだつた。

とし子は、長火鉢の傍に坐つて、お給仕をしてゐた。

『兄さん。それぢや今夜は、ちつとも、お金を持つて歸らなかつたの？』
屈託さうに言つて、ほつと力なく溜息をついたのは、とし子である。
『今夜くらゐ稼ぎのなかつたことは、珍らしいんだよ。』
政吉は、ひどくお腹が空いてゐるのだらう。お茶づけを、ざくざくとかき込むと、澤庵を、音を立てゝ食べてゐた。
顏も圓ければ、身體も圓く、心も、氣立も、何もかも、圓く出來てゐるやうな政吉だつた。彼は、とし子の屈託らしい風情には、似もやらず、至つて暢氣らしく、平氣な顏をしてゐた。
『お米がないのよ。』
と言つてとし子は、かすかに溜息をついた。兄に向つて、そんなことまで言はなければならないのは、辛かつたけれども、仕方がなかつた。
『明日の分くらゐは、あるだらう。――明日の分があれば、心配しなくたつていゝよ。明日稼いで、歸りに米を買つて來るから……自動車に載せて、買つて來るよ。』
『明日の分があれば、あたし、こんなに心配しないわ。』
『なんだ？　ちつともないのか。』
『えゝ。』
『ぢや、もう一ぜん食べたいところだが、これで止して　おかうか。』
と言ひながら政吉は、空つぽの茶碗を、チン、チンと、箸でたゝいてゐた。
『あら、今夜召し上がる分くらゐは、十分あつてよ。』
『ぢや、もつと食べてもいゝかえ。』
『どうぞ。』
『濟まないなあ。』
『まあ、遠慮することは、ないぢやありませんか。』
『遠慮するやうな、柄でもないからな。』
と言ひながら政吉は、大きな茶碗を、突き出した。
『どつさり、召し上がれ。』
とし子は、茶碗を受け取ると、ご飯をよそつてゐたが、お櫃の底は空つぽで、一膳よそつてしまふと、後には、そこやこゝに飯粒が、こびり附いてゐるだけだつた。
『情けない次第だね。』
と、口では言つたが、政吉の圓い顏は、ほがらかな表情を、浮べてゐた。
『だが、心配するな。明日になつたら、明日の風が吹くさ。今夜は稼ぎがないところへ、この間のスピード違反の科料を、三圓も拂つて來たものだから……』
見る〳〵うちに政吉は、最後の一膳も、きれいに平げてしま

つた。

『わたし達は、半日や、一日くらゐ食べないでゐたつて、そんなことは、かまはないけれども、でも英吉さんには、ずゐぶんお氣の毒だわ。』

『さうだな、英吉君には、氣の毒だな。』

『それに、ご病氣だつて回復期でせう。――何か滋養になるやうなものを、どつさり、差上げたいのだけれども。』

『それはさうだな。――英吉君には、魚でも、牛肉でも、どつさり食べさせてやりたいものだな。明日は、買つて來るよ。』

『でも、兄さんが買つていらつしやるまで、どうしたらいゝの？』

『お前の着物か、帶でも、質に置いて、間に合せておけよ。』

『あら、わたしの物が、まだ、何かあると思つてゐらつしやるの。』

『銘仙の着物や、羽織を、こしらへてやつたことがあるぢやないか。』

政吉は、ご飯を食べてしまつても、まだ、お腹が十分滿足しないのだらう。既に薄くなつてしまつた番茶の出がらしを、大きな茶碗についでは、がぶり〳〵と飲んでゐた。

英吉は、眼を醒ましたやうなものゝ、兄妹の悲痛な貧乏話を聞いてゐると、つい言葉をかける機會を、失してしまつた。

自分が眼を醒まして、兄妹の話しを聞いてゐることが分つたら、二人とも、どんなにきまりの悪い思ひを、しなければならないだらう。

さう思ふと英吉は、あくまで、眠つたふりを裝つてゐるより外、仕方がなかつた。――寢返りを打つことも出來なければ、唾を呑み込むことも出來なかつた。全身を固くして、息を殺してゐた。

いくら聞くまいと思つてゐても、同じ狹い一間にゐる以上、はつきり聞えるものを、どうすることも出來なかつた。今更、蒲團を被るわけにもいかなかつた。

もちろん、政吉も、とし子も、英吉は眠つてゐるものとばかり思つてゐた。眼を醒ましてゐるくせに、うす眼を閉ぢてゐるのだなどとは、氣が附くはずはなかつた。

『まあ。兄さんは、あんなものが、いつまであると、思つてゐらつしやるの？』

とし子は、兄の暢氣さに呆れたやうに、微笑を浮べてゐた。

『ぢや、どうしてしまつたのだ？』

『疾つくに、質屋のお藏に、預けてしまつてあるのよ。』

『あれがないとしても、何かほかのものが、あるだらう？』

『では、どんなものがあると、思つてゐらつしやるの？』

『何があるか、そんなことを、僕が一々知つてゐるものか。』

『それごらんなさい。』
『だが、米代になるくらゐなものなら、何かありさうなものぢやないか。』
『何にもないわ。』
『屑屋にでも、賣り飛ばすやうなものは、何かないのか？』
『家の中は、このとほりに、がら／＼だわ。』
『困つたな。』
さすがに、暢氣な政吉も、腕組みをして、考へ込んだ。
『ねえ、兄さん。』
改まつて、妹から呼びかけられると、政吉は、顏を上げて、
『何んだ？』
と聞いた。
『米代ばかりぢやないわ。』
『と、言ふと？』
『お藥の代も……』
『分つてる、分つてる。』
と政吉は、皆まで言はせずに、頷いたが、腕組みを解いて、
その圓つこい膝を、ぽんとたゝいた。
『あら、一人で呑み込んだりして……どうするの？』
『僕に、任せておけ。』
『でも心配だわ。』

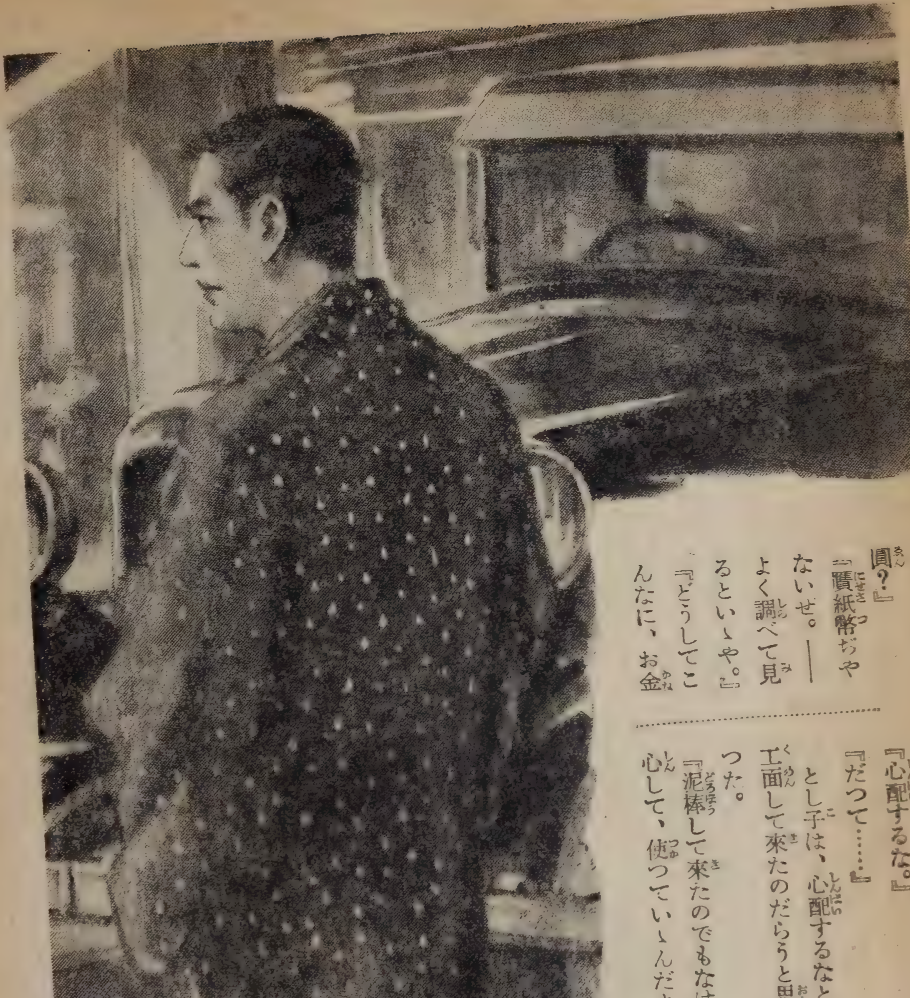
『大丈夫だよ。』
と言つて政吉は、急に朗かになつて、はゝゝゝと、笑つた。
『そんな安請合ひをして、兄さん、大丈夫ですの？』
とし子は、兄の政吉の一人呑み込みが、合點が行かなかつた。
『心配するな。明日になつたら、僕は大金持になるぞ。』
『まあ。』
『早速、お前は英吉君のお伴をして、四五十日間、轉地療養に行つて來るのだな。』
『ほんとう？』
それを聞いたばかりでも、とし子は、胸を躍らせ、眼を輝かせた。
『僕を疑ぐるのか。』
『あら、疑ぐるわけぢやないけれども……でも、信じられないわ。』
『やつぱり、疑つてるんぢやないか。』
『では、どうしてそんなお金を、こしらへて來るの。』
とし子は、それがどうしても、腑に落ちないのであつた。
『細工は流々だよ。』
『まあ、こんな場合に、兄さんは與太ばかり言つて。』
とし子は、一度は喜んだけれども、また、悲しさうに言つた。

『お前は、僕の言つてることを、與太だと思つてゐるのか。』
『だつて、あてにしてい丶か、どうか、分らないのですもの。』
『安心して、もう眠つたらい丶よ。明日になれば、大金を持つて歸つて來るからな……あ丶、眠い／＼、僕は眠るから、お前も早く、安心して眠つたらい丶よ。』
とし子は、それでも、兄の言葉を信ずることは出來なかつた。でも、素直に寢床の支度をした。そして英吉、政吉、とし子と、三人は枕を並べて眠りに就いた。
政吉は、直ぐに、朗らかな鼾を立てはじめたが、とし子は、いつまでも寢苦しさうに、寢返りを打つては、かすかな溜息をつくのが、聞えてゐた。

謎の五百圓

その翌日の夜だつた——
もう一時に近くなつてから、政吉は、ほろ醉ひ機嫌で、歸つて來た。
『お歸りなさい。』
とし子は、格子戸の開く音を聞きつけると、直ぐ上り口に出て行つたが、兄が酒を飲んで來ることなど、今までに、ほとんどないことだつたので、
『まあ、兄さんは、お酒を飲んでゐらつしやるのね？』
と眉をひそめた。
『少しばかり……おでん屋に寄つて、飲んだのだよ。』
『どうなすつたの？』
とし子は兄が自棄酒でも飲んだのではないかと、心配だつた。
『お祝ひにね……ちよつと、やつたのさ……』
『まあ、何んのお祝ひなの。』
『とし子、お前は昨夜、僕の言ふことなど、信じなかつたけれども、ほら、この通り、お金を、ちやんと拵へて來たぢやないか。——どんなもんだ。』
政吉は、胸を反らすやうにして言ひながら、上着の内ポケットを探ると、十圓紙幣の一束を掴出して、いきなりどさりと、とし子の前に投げ出した。
『あら、まあ、こんな大金を、どうなすつたの。』
と、とし子はびつくりして、さつと顏色を變へた。
『どうしたも、かうしたもないさ。僕が、工面して來た金ぢやないか。』
『だつて、こんなに澤山。』
とし子は見張つた眼で、政吉の顏をぢつと見詰めながら、息を呑んだ。
『五百圓あるんだよ。』

かぜ引きはスグ治せ！
秋口に多いかぜや頭痛には、よく效くので評判の感冒藥『トラシン』をお服み下さい。（全國著名藥店にあり）



『えつ、五百圓？』
『贋紙幣ぢやないせ。――よく調べて見るといゝや。』
『どうしてこんなに、お金が出來たの？　わたしには、分らないわ。』
『心配するな。』
『だつて……』
とし子は、心配するなと言はれても、こんな大金を、兄がどうして工面して來たのだらうと思ふと、やつぱり、心配せずにはゐられなかつた。
『泥棒して來たのでもなければ、強盜をして來たのでもないから、安心して、使つていゝんだよ。』
『兄さん。』
『何んだ？』
『ほんとうに、このお金は、不正な金ぢやないの。』
『憚りながら、金のために、不正を働くやうな人間とは、人間が違ふんだからな。心配するなよ。』
と言つて政吉は、手の甲で、鼻の頭を引つ擦つた。
『でも、兄さん、泥棒するか、強盜でもしないのに、こんな大金が、兄さんの手に入るはずがないぢやありませんか。』
『馬鹿にするない。から見えたつて、そんなに見くびつたものぢやない

ぞ。俺だつて、いざとなれば、三百や、五百の金は、立所に都合がつくんだ。』『まあ。』

とし子は、どんなに困つても、まさか不正を働くやうな兄でないことは、誰よりも一番信じてゐたけれども、しかし、こんな大金を眼の前に突きつけられて見ると、どうして、これだけの金を手に入れて來たものか、合點が行かなかつた。

『これだけあつたら、お前が、英吉君を連れて、どこか暖かな海岸にでも、一ケ月や二ケ月くらゐは、轉地して、ゆつくり養生して來るのに、十分だらう。』

『ぢや、兄さんは、英吉さんの轉地療養の費用のために、これだけのお金を、工面して來て下さつたの。』

とし子は、兄の優しい心を察して、涙ぐんでゐた。

『そんなことを、俺が知るものか。だが、英吉君が、身體をすつかり丈夫にするためには、轉地しなければならないと、醫者から言はれてゐるのだらう。轉地するためには、お金が入るぢやないか。』

『ぢや、やつぱりその費用に、お金を都合して來て下さつたのね。』

とし子は、心から感謝の涙に暮れて、聲をうるませた。

『うるさいや。出來た金だから、お前の好きに、使つたらいゝぢやないか。』

『兄さん、ありがたう。』

とし子は、疊の上に兩手を突いて、改めて頭を下げると、ぽろりと一雫、涙が膝の前に落ちた。

『お禮なんか言はれるのは、嫌ひだよ。だまつて、使へば、それでい

いんだ。質屋に預けてある着物なんか、すつかり受け出して來るとい〻。』

『…………』

とし子は、涙にうるんで、胸が一ぱいになつて、何んにも言へなかつた。

『それだけあれば、お米も買へるだらう。なるべく早く、明日でも、英吉君と一緒に、出發するんだな。』

政吉が、どうして、五百圓といふ大金を工面して來たのか、それは分らなかつたけれども、眼の前に金が出來た以上、一日も早く、英吉を轉地させるのが、本當だと思つた。

轉地先は、どこがい〻、こ〻がい〻といふよりも、英吉の故郷のRー村が、よからうといふことに決つた。Rー村なら、旅館を取らなくても、知り合ひの漁師の家の座敷を、借りればい〻し、とし子が、一緒に附き添つて來てくれるといふのだから、自炊することが出來るし、自炊すれば、旅館につくのとは違つて、費用は、いくらもか〻らない。殊にRー村は、湘南などとは違つて、田舍のことだから、間代は安いし、物價も安いし、百圓か、百五十圓もあつたら、二ケ月くらゐの間は、十分に轉地することが出來るはずだつた。

『だが、僕の轉地の費用まで、心配をかけて、濟まないですな。』

英吉は、政吉兄妹の深切に對して、今まで何度、涙ぐましい氣持になつたことがあつたか、知れなかつた。

それが、今、また自分の身體を健康にしてくれるために、貧乏の中から、五百圓といふ大金を、工面してくれたのだと思ふと、どう言つて感謝してい〻か、その言葉を知らなかつた。――折角、深切にす〻めてくれるものを、斷わるのも、あまり依怙地のやうな氣がしたし、さうかといつて、どこまでも、その深切に甘えるのも、何んだか、心苦しいやうな氣がした。

『そんなこと、ちつとも氣になることはないのよ。お互ひですからね。』

とし子は、兄がどうして金を工面して來たのか、分らないのが氣がかりだつたけれども、でも、英吉に附き添つて、景色のい〻、暖かな海邊に行かれることは、嬉しかつた。そこでの一ケ月か、二ケ月間の英吉とたつた二人きりの、靜かな、樂しい生活のことを考へると、彼女の小さな胸は、わく〳〵した。

『支度は出來たのか？』

正午のサイレンが鳴つて間もなく、表の通りに、自動車のサイレンが聞えた。でも、それは今まで、政吉が持つてゐた、聞きなれた自動車のサイレンとは違つてゐた。それで、まさか政吉が、歸つて來たのではないと思つてゐたのに、がらりと、元氣よく格子戸が開くと、行きなり政吉の聲が聞えた。

（汽車の時間に、間に合ふやうに歸つて來て、俺の自動車で、ステーションまで送つて行つてやるからな。それまでに、ちやんと、支度をしておくとい〻）

出がけに、さう言ひ置いて行つた政吉だつたが、約束通り、ちやんと、迎へに歸つて來てくれたのである。

『え〻。――すつかり、支度は出來てゐるのよ。』

とし子は、長い間――今朝までも質やの藏に入つてゐた、派手なチユウリップの模樣のついた、銘仙の綿入を着て、揃ひの袷羽織をはおつてゐた。外出のために、髮を梳かし、化粧もして、美しい顏は、一層鮮かに匂つて、いつもの彼女よりも、一段も二段も、立ち勝つて、あでやかに見えた。

『やあ、綺麗になつたな。』

政吉は、圓い顏に、にこ／＼と、優しい微笑を浮べた。

『いやよ、兄さん。からかつたりしちやあ……』

とし子は笑ひながら、輕く、兄の肩を打つ眞似をした。

『からかふものか。本當だよ。』

『そんなことは、どうでもいゝから……直ぐ、自動車に乘つても、いいの。』

『いゝとも。直ぐ乘つてくれ。』

とし子にうながされて、英吉も土間に降りたが、轉地に出發するといつても、二人の支度は、何んにもなかつた。

とし子は、中形の古ぼけた、木通細工の籠が一つ、英吉のは、例の風呂敷包みが一つ、たつたそれだけだつた。

緣側は、さつき戸締りをしておいたので、三人が外に出ると、格子戸を締めて、錠を降ろし、鍵を、政吉に渡して置けば、それでいゝのであつた。

『とし子さんが、僕と一緒に行つてしまへば、君には、大へん迷惑を掛けることになつて、濟まないですな。』

英吉は、今まで食事の支度から、家の掃除など、とし子が一人でしてゐたことを、これから暫らくの間は、政吉が、不自由な男手で、やらなければならないのかと思ふと、氣の毒で仕方がなかつた。しかも、圓タクの運轉手くらゐ、精神も、身體も、くた／＼に疲れ果てる苛酷な仕事はないのに、歸る度び、出掛ける度びに、煩らはしい家のことまで、政吉が、たつた一人でしなければならないのかと思ふと、同情せずにはゐられなかつた。

金の工面をしてもらつた上に、日常生活のそんな不自由まで、我慢してもらはなければならないことは、英吉としては、とても辛かつた。

『何あに、僕は一人の方が、却つて暢氣でいゝよ。』

政吉は、いとも無げに言つて、英吉が、二つ提げてゐる荷物を見ると、

『僕が、一つ持たう。』

と言つて、手を延べた。

『いゝですよ、これくらゐなものは、直ぐ、そこまでなんですから。』

『いくら、そこまでゝも、君は、病後の身體ぢやないか。』

『輕いんです。』

『輕くたつて……君は、無理をしない方がいゝんだ。』

と言ひながら政吉は、無理に、木通細工の籠を取つた。

『風呂敷包は、あたしが持つわ。』

と言つてとし子が、風呂敷包を持つと、英吉の手は、空つぽだつた。

兄と妹が、こも／＼深切にしてくれるのだ、英吉は、身に沁みて嬉

しかつた。

『さあ、乘りたまへ。』

と言はれて、はじめて氣が附いたことだが、自動車が、昨日まで政吉が持つてゐたものとは、違つてゐることだつた。

半年ばかり前に、政吉は、借金をしたり、それまで少しづつためてきた貯金を、全部出したりして、三十五年型の新しいシボレーを、一臺買つた。その後も、毎月々々月賦で、殘金を自動車屋に消却して來たが。まだ、三四ケ月分は殘つてゐるはずだつた。

路次の出口に留まつてゐるのは、それまで、見馴れて來た政吉の新らしいシボレーではなかつた。全然、別の自動車だつた。塗り色も違つてゐた、その上、型も古いし、フオードで、既に三萬マイル以上も走つた車であることは、一眼見たばかりで、車體のがたぴししてゐることでも、直ぐに分つた。

『兄さん。今までの車は、どうしてしまつたのですか?』

とし子は、兄がドアーを開いてくれたのに、ステップに足をかけようともせず、びつくりしたやうに、立ち竦んで聞いた。

『この自動車は、兄さんの車ぢやないぢやありませんか。』

『その……ちよつと、故障を起したものだから……修繕にやつてあるのが、まだ直らないんだよ。』

政吉は、どぎまぎした表情をして、吃り吃り言つた。

その態度、その辯解が、とし子の腑に落ちなかつた。

『ぢや、兄さんの自動車は、いつ故障を起したの。』

『昨夜さ。』

『昨夜?』

『歸りぎはに、エンジンに故障を起して、どうしても直らなかつたものだから……』

『それで、修繕にやつたの?』

『仕方がなかつたんだ。』

『をかしいわ。』

『どうして?』

『エンジンが、故障を起したなんて、をかしいぢやないの。』

『自動車だつて、故障を起すことはあるさ。機械だもの。』

『さうね。機械だから、故障を起すことだつてあるわね。』

とし子は、ハッとして、急に氣がついたやうに、訝しさも、疑ひも、氷解したやうに頷づいた。でも、力なく頂垂れて、その瞳には、かすかに涙をにじませてゐた。

『いゝんだよ。自動車のことなんか。お前が心配しなくたつて。』

『えゝ。』

『萬事は、俺が心得てゐるからな。それよりか、早く乘らないと、汽車の時間に、遲れてしまふぢやないか。』

『えゝ。』

とし子は、兄に促がされて、自動車に乘ると、英吉と並んで、クッションに腰を降ろしたが、でも、涙が止めどなく、瞼にあふれてくるのを、どうすることも出來なかつた。

昨夜の謎の五百圓と、自動車の故障と。――兄は何んにも詳しいことは說明せず、聞いてみても、とぼけたやうなことばかり言つて、ご

今月の健康相談

夏の暑熱に虐まれて胃腸の衰弱して居る此の際胃腸の病根を一掃して、消化吸收の機能を旺盛にしなければ健康增進は望み得ません。誰方も田口博士の胃腸藥『イノール』の御服用が目下の急務です。

い、まかしてゐるけれども、どうして兄に、五百圓といふ大金の工面が出來たか、その間の消息が、今はじめて、とし子に分つた。

（兄さんは、きつと、自動車を賣つてしまつたのよ）

それに違ひないのである。そんなことでもしなければ、あの大金が一日のうちに、工面出來るはずがないのである。

（兄さん、濟みません）

とし子は、心の中で手を合せつゝ、兄の深切な思ひやりに、感謝した。

（兄さんは、やつぱり、わたしの氣持を、察してゐて下さるのだわ）

とし子は、東京驛に着くまで、涙にひたつてゐた。

『おい、降りるんだよ。』

政吉に注意されて、はつとして氣が附くと、自動車は、いつの間にか止まつて、眼の前には、廣大な東京驛の建物が、聳えてゐた。

『ぢや、英吉君。ゆつくり養生して、丈夫な身體になつて、歸つて來たまへ。――君が歸つて來たら、二人で、うんと働かうね。とし子のことは、賴んだよ。とし子も英吉君の身のまはりのことを、よく氣を附けて上げるんだぜ。』

政吉は、いつもの暢氣な調子に似合はず、しみ〴〵した調子で注意をしたが、直きに、ぶうと、自動車の警笛を鳴らして、そのまゝ走つて行つてしまつた。

嫉妬の火花

『ご免下さい。』

磯臭い漁師の藁小屋の門口に、この邊では見られない、素晴らしいキヤデラックが、一臺留まつたと思つたら、身分ありげな、美しい令孃が降りて、漁師の家の戸口から、しとやかに聲をかけた。

令孃は、足が跛だつた。立つてゐるときは、さほどに目立たなかつたけれども、自動車から降りる時や、三四段の石段を上る時など、かなり不自由さうで、小間使らしいお伴の召使が、杖の代りに、手を取つたり、肩をかしたりした。

『はい、何んですか。』

土間の奥の方で、がみ〳〵と子供を叱りつけてゐる女の聲が聞えてゐた。それがぴたりと止んだと思つたら、急いで、つか〳〵と戸口まで出て來たのは、色の眞つ黒な、漁師の女房だつた。

『おや、まあ。あなたさまは、別莊のお孃さまぢやありませんか。』

漁師の女房は、戸口に立つてゐる令孃の姿を一眼見ると、びつくりしたやうに、眼を見張つた。

跛の令孃は、なるほど、加賀見別莊の、るい子に違ひなかつた。別莊が建つてからこつち、毎年、一年に五六囘づつは、Ｒ―村に出かけて來てゐたるい子だつた。が、去年の春、別莊が怪火のために、灰燼に歸してからは、まだ、一度も、このＲ―村に姿を見せたことがなかつたのに、それが突然、我が家の戸口に立つたので、漁師の女房が、びつくりしたのも、無理はなかつた。

『お邪魔します。』

るい子は、しよんぼりと戸口に佇んだまゝ、力なく言つた。思ひ

がけぬ不具の身になつてから、何んとなく憂欝に、元氣のないるい子だつたけれども、一年ばかり見ぬ間に、すつかり窶れてしまつた。うるんだやうな黒い瞳ばかりは、相變らず美しかつたが、その眼は、何んだか大きくなつたやうに見えた。化粧を避けて、肌理の細かな肌に、クリームをつけただけの顔が、蒼み渡つたやうに澄んだのが、凄艶だつた。

『いゝえ、どういたしまして……さあ、どうぞこんな穢いところですけれども、お入り下さいませ。』

漁師の女房は、るい子と分ると、急に愛想よく迎へた。

『ちよつと、伺ひたいことがあるのですけれども……』と言ひかけてるい子は、羞含むやうに、ほのかに顔を赧らめた。

『はあ。——どんなことでございませうか？』

『こちらに、英吉さんが來てゐらつしやるといふことを、伺つたものですから、それでわざわざ東京から、出かけてまゐつたのですけれども……』

『あら、さうでございますか。』

『あなたのところに、ゐらつしやるつて、ほんとうでせうか？』

『はい、今月のはじめから、わたしのところの離室を、お貸ししてあるんですよ。こちらに、いらつしやつてから、ちやうど、十日ばかりになりますかしら。』

『まあ、やつぱり、あなたのところの離室を借

りて、ゐらつしやるんですね。』

と言つてるい子は、眼も顔も、急にぱつと輝かせると、息をはずませた。

『病氣で、ひどく惡かつたさうで、その後の轉地療養とやらに來てゐるんです。』

『わたし、英吉さんに、會ひに來たんですけれど。』

『ぢや、ちよつと、呼んで來ませうか。』

と漁師の女房が、あわたゞしく驅け出さうとするのを、

『待つて下さい。』と、るい子は呼び留めて、

『わたし、離室の方に、伺ひますから。』と、言つた。

『ぢや、ご案内いたしませうか。』

と、漁師の女房が先に立つのを、るい子は、また抑へて、

『いゝえ、わたし、自分で、勝手にまゐりますから……』

『さやうですか。では、そこの木戸をお入りになりますと、ちやうど、この母屋の横のところになつてをりますから。』

『では、ちよつと、お邪魔しますわ。』

るい子は、會釋をすると、そこの名ばかりの庭木戸を入つて、母屋の建物の横の方に、廻つて行つた。

もちろん、何の風情もない田舍家だつたけれども、眺望だけは、とても素晴らしかつた。——後の方は、小高い山がかりになつて、椿や松や、欅などの雜木が、鬱葱として茂つてゐるし、左の方は深い竹藪になつて、あるとしも覺えぬ微風に、かさ／＼と、微かに葉を鳴らしてゐるし、前は蒼々とした駿河灣に向つて、開けてゐた。

一張りの、とてつもない大きな傘を擴げたやうに、澄み渡つた大空の向ふには、頂きに眞白な雪を被つた富士山の秀麗な姿が、くつきりと見えてゐた。

離室は、八疊に、四疊半の二間つゞきだつた。緣側の前には、梅の古木が、枝や梢を擴げて、もう終りに近い眞つ白な花が、馥郁とした匂ひを、邊りに漂はせてゐた。

るい子は、お伴の召使に手を取られて、庭から廻ると、緣側の前に立つたが、そこの日當りのいゝ座敷で、男物らしい銘仙の袷羽織を、せつせと縫つてゐる可愛らしい娘の姿を見ると、さつと顏色を變へた。

娘の方では、誰かゞ訪ねて來たことにも、氣が附かないのだらう。──白い美しい項を見せて、華奢な指先を動かして、器用に針を運んでゐるのであつたが、何を思ひ出したのか、いつの間にか、その脹かな頰には、につこりと微笑の影が上つた。

るい子は、英吉が一人で、離室を借りてゐることゝばかり思ひ込んで、わざ〳〵東京から訪ねて來たのに、今、思ひがけなく、そこに見なれない美しい娘の姿を見て、びつくりして立ち竦んだ。

一度は我が眼を疑ひ、一度は、もしや部屋を間違へたのではないかと思つたけれども、この漁師の家に、こゝよりほかには、別に離室があるとも覺えられない。

（一體、この娘さんは、何者だらう？）

と思ふとるい子は、我れにもなく嫉妬の炎が、むら〳〵と燃え立つて、乳の下あたりに、緊めつけられるやうな、鋭い痛みを感じた。

──氣が附いて見ると、胸はまるで、早鐘でも撞くやう！

でも、咄嗟にるい子は、自分で自分の端なさを、反省した。

この娘が、何者だか、英吉と、どんな關係があるのか、まだ分りもしないうちから、嫉妬など感じるなんて、

（まあ。わたしは、どうしたといふのでせう……）

と、自分を窘めて、やうやく冷靜を取りかへすと、つか〳〵と、緣側に近づいて行つた。

『あら。』

娘は、もちろんとし子だつたが、彼女は縫物に、あまり身を入れてゐたせゐか、るい子の近附いて來たことなどには、氣が附かなかつた。何んだか人の氣配がするので、ふと顏を上げて見ると、一人の召使を伴に連れた立派な令孃が、緣先まで近附いて、眼の前に立つてゐるので、はつとした。

誰が、何んのために、訪ねて來たのか、さつぱり見當も附かなかつた。こんな立派な令孃が、自分や、英吉を訪ねて來るはずがないし、どこか、ほかの家とでも間違へたのではないだらうかと、怪訝な表情をして、るい子の美しい顏を、ぢつと見詰めてゐた。

『ちよつと、伺ひますが……東京から、英吉さんが、こちらに、いらつしやつてゐるはずですが……』

るい子の胸は、異樣にときめくし、とし子があまり熱心に、しかも、訝かしさうに、自分の顏を見詰めてゐるので、少し極りが惡かつたけれども、つとめて冷靜に聞いた。

『あの、英吉さんを訪ねて、いらつしたのですか？』

とし子は、この美しい令嬢が、英吉を訪ねて來た客だと分ると、まだ、何んにも事情は分らないうちから、不思議な胸のときめきを、感ぜずにはゐられなかつた。

しかも、とし子は、曾つて覺えたことのない胸苦しさと、女としての本能的な憎しみとを、この美しい、しかも不具な令嬢に對して、感ぜずにはゐられなかつた。

『英吉さんに、ちよつとお眼にかゝりたいのですけれども。』

るい子は、いろ／＼な義理と、事情のために、自分を見捨て、こつそり屋敷から出てしまつた英吉の後を追つかけて、かうして、わざわざやつて來た我が身を顧みると、何んとなく面伏せだつた。

口の内で、かすかに呟やくやうに言つて、眞つ赤になると、まともに、とし子の顏を見てゐることが出來なかつた。

『あの、どんなご用でございませう？』

とし子の嫉妬心は、更に油を注がれたやうに、燃え立つた。

『いろ／＼な用事が、あるものですから……』

るい子は、どんな用事かと、開き直つて聞かれても、はつきりとは答へることが出來ないで、口籠つた。

『どんな用事でございませう。』と、不斷のとし子とは、別人になつたやうに、意地悪く、重ねて追求した。

『直接、お眼にかゝらなければ、お話し出來ないことですわ。』

『まあ。』

『英吉さん、どこかへ、行つてゐらつしやるのでせうか。』

たつた二間きりの離室である。どこを見廻しても、英吉の姿が見えないので、るい子は、思ひ切つて聞いた。

『えゝ。』

『どこへ行らしたのでせう？』

るい子は、必死だつた。こゝまで訪ねて來た以上、どんなことをしても、會はずには歸らない決心だつた。

『散歩にまゐりましたの。』

とし子は、ほんとうのことを敎へるのは、口惜しかつたけれども、でも、さすがに嘘や、出鱈目は言へなかつた。

『どちらへ？』『さあ、わたしには、よく分りませんけれども……』

『海岸の方でせうか。』

『いつでも、よく海岸の方へ、行らつしやいますけれども。』

『では、わたしこれから、海岸の方へ行つて見ますわ。』

るい子が、不自由な足で、引き返さうとすると、とし子は後から、

『それから、加賀見さんとかおつしやる別莊の燒跡にも、時々行つては、立ちつくしてゐらつしやることがありますわ。』と、言つた。

『まあ、加賀見別莊の燒跡に！』

と言つて、振り返つたるい子の顏には、さつと血の色が上つた。

『えゝ、どういふわけか、それは存じませんけれども……』

『まあ、さう！』

るい子は、心から晴れ／＼したやうな明るい表情をして、丁寧に會釋をすると、召使に手を取られて、不自由な跛の足で、庭木戸から出て行つた。その後姿を見送るとし子の眼には、激しい嫉妬の火花が、きらめいてゐた。

（つづく）

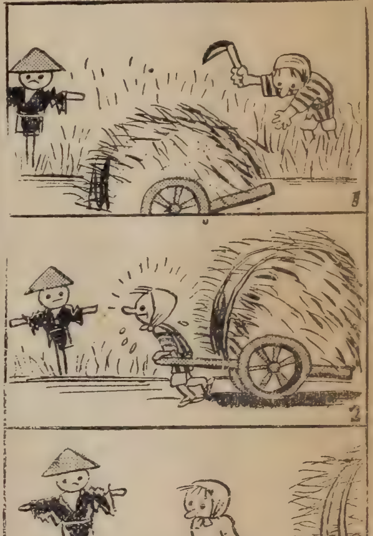
適體適所

太つた男

『どうです、物は相談だが、お互ひに窮屈さうではありませんか、陽陰を交換しませんか。』

石川 義夫

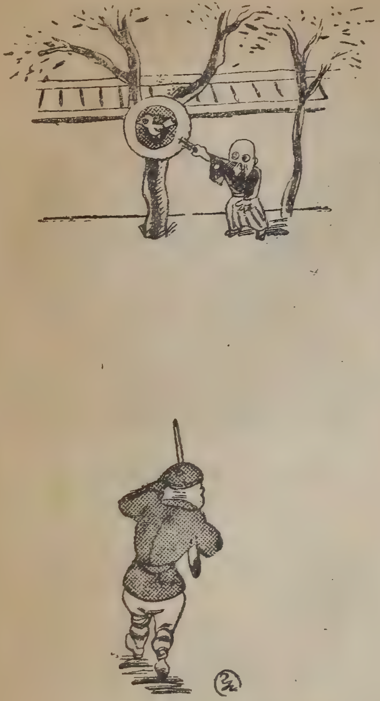
豊作の御禮—百合三郎



義侠　百合三郎

御前様氣質

百合三郎



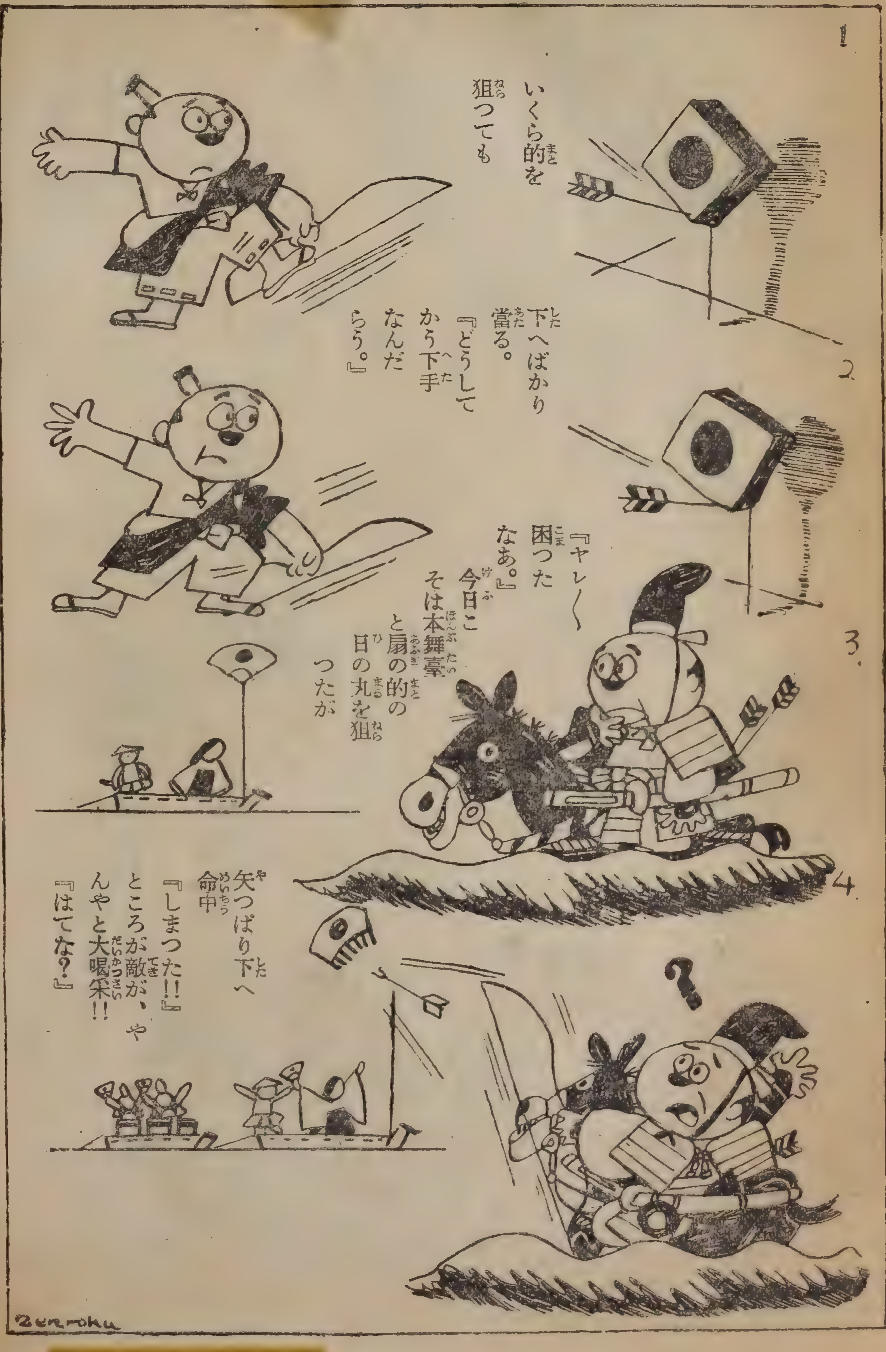
狩獵開禁を前にして御前様の猛練習であります

近世雀氣質

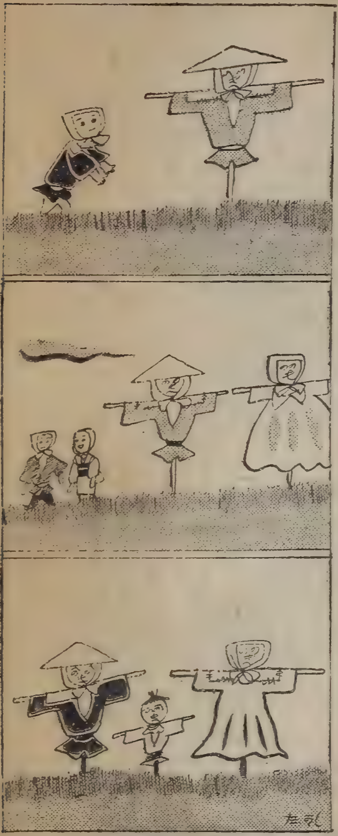
長知於菟三

雀『オーイ、皆んなおいでよ、食後の運動に繩飛をやらうよ。』

那須餘一餘聞 (下手の功名)　益子善六



かかし三世相―佐次たかし



獨身時代

新婚時代

子供が一人生れて……

坊やの斥候

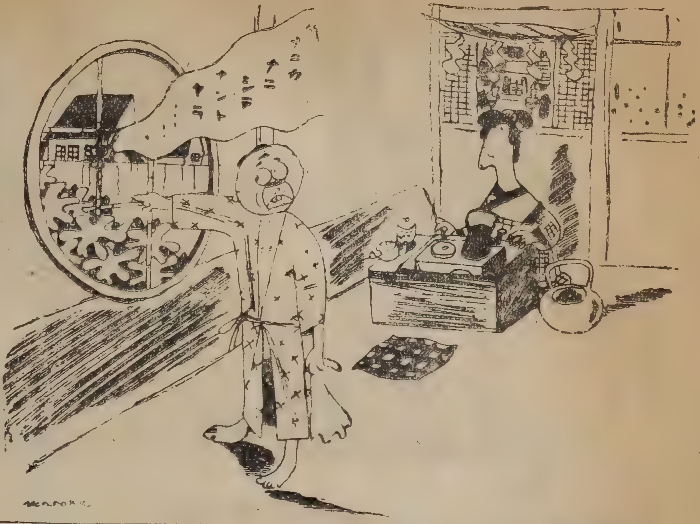
金子　久子

『あ、お母チャン父チャンが今汗をふいてゐますから、押すのを、一寸待つて下さい。』

秋！　秋！　秋の

現金なハイキング・コース

大野　鯛三



浪曲家の悲劇

金子善六

『朝つぱらから下手な浪花節なんか掛けやがつて五月蠅くて寝られねえや。』『だつてお前さん、あれはあんたの吹込んだレコードよ。』

毒見役

西塔子郎

想ひ出

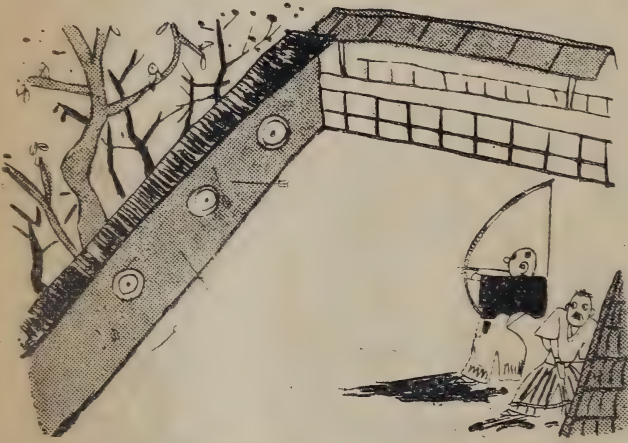
金子久子

後家さん『ああ、うちの人は此の柄が一番よく似合つたつけ。』

天高く馬肥ゆる秋
ルンペン村異變

『旦那こいつが太つちやつて出られなくなつたんでがす。』

志村つね平



銃獵期の弓場

『いや、わしは、的をねらつたのではなく雀をねらつたんぢやよ。』

夏知於菟三

珍案商賣戰術

どうです、こんなのは。一躍成金になりますぜ。

佐次たかし

新連載講談

仇討俠客 鶉權兵衞

西尾麟慶 演
井川洗厓 畫

鶉が一羽百兩

この度雜誌『富士』の御求めに依りまして、從來他の雜誌に掲載されなかつた珍らしいものをといふ御注文。從來の敵討といふものは大抵は敵が惡人でございますが、當講談の敵は武士道の意氣地を以て人は斬つたが惡事は働かず、而も誤解に依つて賊の惡名を被り、その恥辱を雪がんと苦心をする、討つ方は勿論腕は出來たに違ひございませぬが、敵と狙はれる者は、それにも增して武藝の達人であつたといふ、稀に見る變つた珍らしい仇討講談、武勇義侠兼ね備へた鶉權兵衞のお話しを連續を以て申上げることにいたします。

元祿の頃、江戶の駕籠屋新道といふ所に住んでゐて、腰元彫では名人の名を取つた橫谷宗珉といふ彫刻師がございました。その門人の宗三郎、腕の出來るところから、慢心をしてお定りの放蕩から師匠の勘當をうけるに至りましたが、一念發起して、終に名人と謳はるゝに至り、紀州家のお抱へになつて、師匠の姓を許されて橫谷一龍齋と相成りました。その一龍齋の伜の權之助、蛙の子は蛙、彫物師の伜であるから彫物師になるかと思ふとこの權之助職人になることを嫌つて、武士として身を立てようと、和歌山城內に於て北條流の軍學と、起倒流の柔術の指南をいたして居ります三原忠左衞門正勝といふ人の所へ內門弟に入つて武藝の修行、男ッ振は好し、氣立もサッパリしてゐて、義侠心に富んで居りますので、誠に評判がよろしうございます。

この忠左衞門に一人の娘がある、おたまといつて、名はその人の體を現はすと申しますが、全く玉のやう、年は十八、和歌山小町などといはれて居るくらゐの美人。騷動の裏には必らず女ありといふことを申しますが、その譬に洩れず、この三原の門人の浦野平八、三橋仙藏、稻葉藤助といふ三人、このおたまに懸想をして、軍學や柔術の修行はそつちのけ、三人代り〳〵におたまに對して猥らしい素振、それをおたまは柳に風と受け流して、却つて同門の權之助に、おたまの方から想ひを寄せて、終に父の許しを受けて權之助と夫婦に相成りました。それを聞いて三人、戀の叶はぬ意趣晴しと、和歌浦へ權之助を引出して斬つてしまはうとしたが、却つて權之助のために稻葉藤助は斬つて捨てられ、平八と仙藏の二人は、何れへか逃走をしてしまひました。そこで權之助、和歌山にゐても面倒、いつそのこと江戶へ出て、武士として身を立てようと、おたまを連れて和歌山を出立、江戶へ出てまゐりました。所が江戶へ出て來てびつくりした。流石八百萬石將軍家の御膝下、武の源とさへいふくらゐ、迚も自分の腕前では、武士になつて身を立てることは思ひも寄らない、そこで思ひ直して芝口一丁目の小鳥屋源助の店を讓り受けまして、大小を捨てゝ小鳥屋になりました。

異名を鶉權兵衛、大層店も繁昌をいたして居ります。スルと或る日、

『エーホー、寄れーいッ。』と先を拂つた國守大名の行列。

權『おたまや。』たま『ハイ。』

權『ちよいとお出で。』たま『何です。』

權『あれを見なさい、紀州の和歌山がいかに御三家の御城下とはいひながら、斯ういふ樣子は見られないね、あのお大名の行列と菰を着た乞食と摺れ違つて行くんだ、之れが大江戸の繁昌といふものだ。』たま『全くですね。』

夫婦は話しをして居りますと、行列は行過ぎた。と、一人の若い武士がツカ／＼と店へ來て、

侍『コレ／＼當家の主人は居るか。』

權『入らつしやいまし、私でございます。』

侍『其方か、何と申す。』權『鶉權兵衛と申します。』

侍『あゝ左樣か、只今當家の前を御通行に相成つたのは、雲州松江の御城主十八萬六千石松平出羽守樣だ。』

權『左樣でございますか。』

侍『そこにあるその籠の鶉が御目に留り、御意に叶つて御買上げに相成る御沙汰、有難く心得ろ。』

權『結構でございます、是非御買上げを願ひます。』

侍『何羽居るのだ。』權『この籠の中には五羽居ります。』

侍『殘らずお買上げになる、價は何程だ。』

權『一羽百兩づつで五百兩でございます。』

侍『ナニ、ちよつと待て、世の中に一羽百兩などといふ高價な鶉があるか。』

權『あるかと仰しやいますが、此所にございます。』

侍『もう少し負けろ。』

權『冗談仰しやつてはいけませぬ、生き物には昔から相場はございませぬ、買手に依つて値が出來るものでございます、友達が來て、濟まないが權兵衛、一羽呉れないかといへば、サア持つて行きなといつてやつてしまひます、十八萬六千石のお大名が買ふといふから、一羽百兩といふので、大名が高い物を買つて呉れるから、下々の町人が潤ふんだ、高いの安いの、負けるなどといふのは、お大名方のいふ口上ぢやアございませぬ、その理窟が解らないとは、隨分お前さんも血の循りの悪い御方だね。』

吉田良左衛門といふ武士びつくりして鶉權兵衛の店を飛出しました。松平出羽守樣の御屋敷は、赤坂御門内にございます。小鳥がお好きで、お輿物の內で御意に叶つた鶉、吉田良左衛門に買上げよといふ御沙汰、お屋敷へお戻りになつてお待受け、やがて良左衛門御前へ出ました。

良『恐れながら申上げます。』

出「鶉を買上げて參つたか。」

良「恐れながら餘りと申せば意外なる高價でございますゆゑ、一應伺つてのことゝ存じて立戻りました。」

出「左樣か、何程ぢやと申した。」

良「五羽居りました、それが意外なる高價にございます。」

出「ハ、ア、其方がそのやうに驚ろくところを見ると、五羽で五萬兩とでも申したか。」

良「エ、ッ……イエそれほどではございませぬ、五百兩と申しました。」出「ナニ五百金……なぜ買上げて參らぬ。」

良「餘りの高價……」

出「イヤ決して高價でない、大名が高價の物を求めて遣はさなれけば下々の町人が潤ほはぬ、その道理が解らぬとは、其方血の循りの惡い奴だ。」

良左衛門びつくりした。早速芝口一丁目の權兵衛方へやつてまゐりました。

良「權兵衛居るか。」權「お出でなさいまし、どうしました。」

良「屋敷へ戻つて申上げたところ、然らば五百兩で買上げ遣はせと仰しやつた、有難く心得ろ。」

權「一足遲かつたね、もうあの鶉はないんだ。」

良「ナニ無い……さては賣れたか。」

權「冗談いつちやアいけませぬ、一羽百兩なんて馬鹿々々しい高い鶉、誰が買手があるものですか。」

良「どういたした。」權「高いのすべつたのとケチを附けられて、腹が立つたから絞めちまつた。」良「ナニッ……」

權「寢酒の肴に蠟燭燒にする積りです。」

良「マア少し待て、隨分短氣な奴だな、では他に鶉はないか。」

權「御覽の通り他にいくらもございます。」

良「それでは他の鶉を持つて參り、之れが御目に留つた鶉でございますと申上げれば、五百兩になるのだが、どうだ。」

權「それは止しませう。」良「なぜだ。」

權「あの鶉が氣に入つたから五百兩でお買上げにならうといふのでせう。」良「ウム。」

權「それを見もしない鶉を、氣に入つた鶉だといつて持つて行くのは、人を欺すといふものだ。人を欺して儲けた金が何になるんだ、第一私がさうして殿樣を欺さうとしたら、お前さんが眼の色を變へて、腹を立つてそれを

本會獨特の通信教授により三ケ月で上手になれます
尺八
秘傳公開 ●內容說明書 ●無代送呈
京都市大宮三條北入 大日本尺八音樂會
新刊尺八音譜 尺八小曲集
君ケ代 日の丸の旗 鴨緑江節
竹調べ 國晃警備の唄 鳴呼玉杯
新磯節 東京行進曲 等 ケ 技
數へ唄 (其他) 曲は六百八十星 邊疆三景士
(初心者用手引附 以上十二曲を收む)
定價 一冊 三十錢 送料 四錢
御註文切手代用不苦

咎めるのが主從の情だらう、家來の身として主人を欺すとは何事だ、吹けば飛ぶやうな町人だが、鶉權兵衞そんなことは大嫌ひだ、サッサと歸れ、ぐづぐづしてゐると腦天から沸湯をぶッ掛けるぞ。』

吉田良左衞門びつくりして、赤坂御門内のお屋敷へ飛んで歸つて來た、御前へ出て、

良『恐れながら申上げます。』

出『いかゞいたした。』

良『早速駈着けましたところ、小鳥屋の主人鶉權兵衞の申しますには、高いといはれたので腹が立ち、あの鶉を料理いたして寢酒の肴にすると申して居ります。』

出『ウム、面白い奴ぢやな。』

良『餘り面白くもございませぬ他の鶉を御意に叶つた鶉だと申して持つて參つたら宜しからう左すれば御買上げになると敎へ遣はしました所、眼の色變へて立腹いたし、それは人を僞はると申すものである、左樣なことは出來ぬなどと、イヤ實に呆れ果てたる狂人にございます。』

出『默れッ。』良『ハッ。』

出『それは其方の申す所が違つてをる、其の町人が予を僞はらうと申したらば、其方が眼の色變へて

立腹いたし、それを咎めるのが主從の情であらう、然るに家來の身といたして主人を僞はれと申すのは不心得千萬、其の樹に棲んでその木を枯らす、獅子身中の虫とは其方のことである、次へ下がつて切腹に及べ。』

良『ハツ。』出『と、申すべき所なれども……。』

良左衞門驚いた。もう少しで腹を切るところ。ホツと太い息を吐きました。

出『町人ながら適れの者である、目通り申附ける、呼べ。』といふ仰せ。

鴉に雀金絲雀

吉田良左衞門、又鶉權兵衞の店へやつて來て、

良『權兵衞。』

權『ヤアよく來るねこの人は……。』

良『この方とても來たくはないけれども、主命とあつて見れば據ころないから參つた。』

權『何しに來たのです。』

良『其方忝じけなくも御目通り仰せ附けられる、サア一緒に行け。』

權『それぢやア何ですか、殿樣が私に逢ひてえといふのですか――それは折角だが止さう。』

良『なぜだ。』

權『私は禮儀作法だの學問なんてえものを知らない、あれは無禮だ、これは失禮だと咎め立をされた日には口が利けねえ、折角だが嫌でございます。』

良『さういはないで一緒に行け、其方が御目通りへ出てくれないと、又この方が失敗らなければならない、頼むから助けると思つて行つてくれ。』

權『困つたね、頼まれりやア越後の國から米を搗きに來る人さへあるのだ、ぢやア行きませう……オイおたまや、この男とちよいと雲州様へ行つて來るから、店を頼むぜ。』

立上がつて三尺帶を〆め直して、

權『サア行きませう。』

良『ちよいと待て、その姿では困るな。』

權『どうしてです。』

良『縕袍に三尺帶では困る、せめて紋の付いた羽織に袴ぐらゐをはいて呉れ。』

權『處が私はそんなものはない、鶉權兵衛といふ人間が見てえなら、裸體で行つても宜い譯だ、ねえ、良い着物が見たかつたら、呉服屋か柳原の古着屋へ行つたらどうです、着る物で人間の了簡が分るものぢやアねえ。』

良『イヤさういへばさうだが、では兎に角それでよろしいから一緒に行つてくれ。』

吉田良左衛門據ころなく、その不作法な姿の鶉權兵衛を連れて、赤坂御門内のお上屋敷へまゐりました。お中の口から奥御殿へ來て出羽守殿に御目通り。

良『恐れながら鶉權兵衛、御目通りへ罷り出でましてございます。』

遙かに御覧になつた出羽守殿、びつくりなすつたのは、縕袍に三尺帶、御殿には珍らしい姿。

出『權兵衛と申すは其方か、許すに依つて頭を上げい。』

權『へエ今日は……。』と前へ出ようとするから良左衛門驚いて

良『コレ〳〵、さう前へ出るな。』

出『良左衛門、身分のなき者は禮儀作法を存ぜぬのが常である、決して咎めるには及ばぬ捨置け、――權兵衛とやら、良左衛門の疎忽、予が成代つて詫るに依つて許せ。』

權『どうも殿様の前ですが、そのお言葉では恐入ります、何もこの男だからといつて、惡かれと思つて値切つた譯ではございますまい、結局をいへば、御家の爲めを思つて値切つたので、考へて見れば可愛い野郎でございます。』

良左衛門驚いて後ろから袂を引くと、

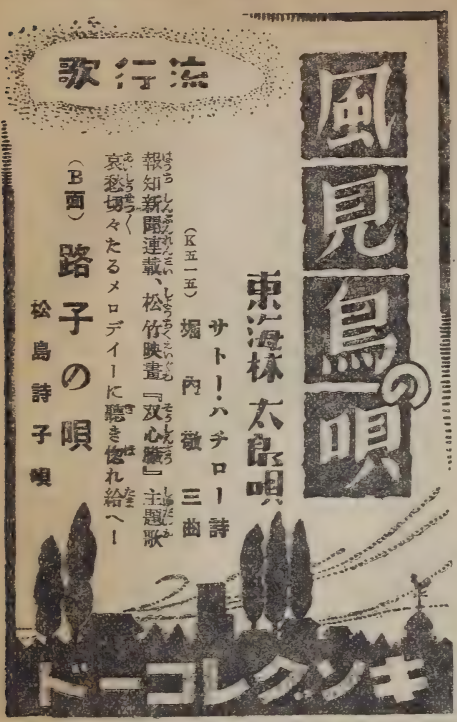
權『何をするんだ、無禮は許すから捨置け。』

良『殿様の眞似をするな。』

出『面白き奴ぢや、珍らしき鳥あらば持參いたせ、末長く出入申付けるぞ。』

上々の首尾で、御盃御料理を賜はり、御目録を頂いて御屋

敷を退がりました。その翌日のこと良左衞門が、
良『申上げます。』出『何ぢや。』
良『鴉權兵衞、御目通りを願ひに罷り出でました。』出『お丶面白き奴である、呼べ。』
お庭前へ誘はれて來た權兵衞、
權『エ、殿樣。』
出『權兵衞か。』權『昨日はいろ／＼御馳走樣で、頂き物をいたしまして有難うございます、就きましてその節、珍らしい鳥があつたら買つてやると仰しやつたので、御言葉に從つて早速ながら持つてまゐりました。』
出『買上げ取らする、何と申す鳥ぢや。』



權『色は黑うございますけれども、啼聲が宜いのです、孝と啼きます。』出『それは珍しき鳥である、何鳥ぢや。』權『鴉と申します。』
出『ハアからす……。』
權『殿樣御存じない鳥で、一羽百兩でお買上げを願ひます。』
出『左樣か――良左衞門、買上げ取らせい。』
吉田良左衞門驚いて、鴉が一羽百兩とはひどいことをすると思つた。その翌日、
良『恐れながら鴉權兵衞、御目通りを願ひたく罷り出でました。』
出『呼べ。』お庭前へ來て、
權『昨日は殿樣有難う存じました、今日は又珍らしい鳥を持つてまゐりました、啼聲が宜うございます、忠と啼きます、名前は雀と申します、一羽百兩でお買上げを願ひます。』
吉田良左衞門益々驚いた。翌朝になると又御目通り。
權『今日は殿樣、本當に珍らしい鳥を持つて參りました。』
出『何ぢや。』
權『鳥は金絲雀で別段珍らしくございませぬが、眼が一つで足が一本ですがどうです。』出『ウム、珍らしき金絲雀ぢやな。』
權『三百兩でお買上げを願ひます、この籠の中に入つて居ります。』
籠を出したのを出羽樣が御覽なさると、左の眼が潰れてゐて、

右の足が折れてゐて飛ぶことが出來ないでヒク〳〵して居る。

出『左樣か、良左衞門、買上げ取らせい。餘り珍らしい金絲雀であるから、其方に遣はすぞ。』

良『こんなものを頂いても仕方がございませぬ。』

それッきり權兵衞參りませぬ。

義俠の救ひ

丁度十日目、御用があつて出羽守樣、芝口一丁目の往來を御通行を遊ばすと、昔は一町内に一ケ所づつ自身番といふものがあります、只今の巡査派出所と町會の事務所を兼ねたやうな所、その前に黑山のやうな人立で、ワーワッと鬨の聲を上げてゐる。出羽守樣お輿物の中から御覽になると、米が山のやうに積んである。それと並んで錢が山のやうに積んであります。南町奉行所、北町奉行所から役人が出張つて、その大勢の人達の整理をしてゐる。一段高い上に上がつて、襷鉢卷で鶉權兵衞何か大きな聲でどなつて居ります。その樣子を御覽遊ばして不思議に

思召してお屋敷へお戻りになる。翌日吉田良左衛門がお取次ぎ、

良『鶉權兵衛御目通りへ罷り出でました。』

出『呼べ。』御前へ出たのを見ると、褞袍の上へ行儀霰の麻裃、妹脊山の鱶七みたやうな姿をして居ります。

出『權兵衛か。』權『恐れながら、今日は殿樣へ御禮を申上げに罷り出でました。』

出『何ぢや。』權『私は遠い在所の生れ、只今より二年前に江戸へ出て參りました。江戸といふ所は有餘る人が榮耀榮華の暮しをして居りますが、中には稼いでも暮して往けない哀れな人達もございます、湯水のやうに無駄に使ふ金があつたら、哀れな人に惠んでやつたら宜さうなものだと思ひますが、無駄に使ふ金はあつても、哀れな人に惠んでやる金はないものと見えます、四海皆兄弟、それが氣の毒で、何とかして哀れな人を助けてやる事は出來まいかと、心懸けて居りますと、御當家樣で小鳥をお買上げを願ひまして、鴉と雀と金絲雀で五百兩の金を頂きました、早速ながら御上に願つて、半を錢に替へ、半を米に替へて、昨日芝一圓の哀れな人達に惠んでやりました、その時これは鶉權兵衛がやるんぢやアねえぞ、雲州松江の御城主、松平出羽守樣が下すつたんだと呉々もいつて聞かしてやりました所、大變喜んで居りました、御當家の御武運長久、御喜びを申上げます。』

出『あゝ左樣か、昨日芝口一丁目を通行致した際、その樣子を見屆けたぞ。』

權『ハヽア、それぢやアあの時通つた行列は、殿樣でございましたか。』

出『權兵衛、その方の出生は何處ぢや。』

權『遠い在所でございます。』

出『其方の本姓身分を物語れ、次第に依つては取立て遣すぞ。』

權『ヘエ、御言葉ではございますが、親が附けて呉れた權兵衞、先祖代々の町人で、別に本姓も身分もございませぬ。』
出『左樣か、宜い、然らば末長う出入りを致せ。』
斯う仰しやつて相變らず出羽樣のお出入り、哀れな人は何處までも助けよう、惡い奴は懲らしめて善心に立返らせようといふ心掛け、世間の人も、芝口一丁目の鶉權兵衞は俠客だ、情のある人だと追々人にいはれて參りました。

故鄕の變事

その年も暮れて、一陽來復新玉の春を迎へました、正月も紋日が濟んだ二十五日、昨夜の雪はカラリと晴れて、良いお天氣起上つた權兵衞、
權『おたま。』たま『ハイ。』
權『雪の翌日は日本晴、譬の通りだな。』
たま『ハイ、よく晴れましたね。』
權『一つ風呂入つて來てから、飯を食つてしまつたら、表の雪を片附けよう、手拭を出してくんな。』
江戸ッ子の朝湯は名物、權兵衞は風呂へ行く、後へ廻つておたまは、そこから此處と掃除をする、世にある時は誰あらう、紀州和歌山の藩、北條流の軍學並に起倒流の柔術の教授をして三百石、三原忠左衞門の秘藏娘、今では鶉權兵衞の世話女房、途端に表の方で、
○『賴みます、御免下さい。』
たま『ハイ。』
おたまが出て見ると、脚絆甲掛年輩の旅の武士、被つた手拭を取り、襷をはづして、
たま『お出でなさいまし。』
○『鶉權兵衞樣は御當家でございますか。』
たま『ハイ手前でございます、何方から……』
○『おゝッ、これはお孃樣ではございませぬか。』
いはれてびつくり、その武士の顏をよく〳〵見れば、三原の家に長年奉公をしてゐた、若黨の文太夫、
たま『まあ、さういふお前は文太夫。』
文『ハイ、お久振りでございました。』
たま『よく〳〵まあお出でだね、さあお湯を汲むから足を洗つて此方へお上がり。』
銅壺の湯を汲んでやる、草鞋を解き、足を洗つて上へ上りました。
たま『文太夫や、早速尋ねるがお國に居らつしやるお父さまやお母さまは、何のお變りもないかい。』
文『お孃さま、お變りがないどころではございませぬ、決してびつくり遊ばしますな。』
といひながら荷物の中から取出したのは、新しい紙の位牌が

素晴らしい小型撮影機がタツタ十八圓で買へる！
法外な高價のかゝつた外國品の時代はすぎました。數百圓もする舶來小型撮影機と少しも變らない精巧優秀な國產機がタツタ十八圓で買へます。詳細は本社代理部宛『ボニイ撮影機カタログ』御請求下さい。無代進呈す。

三枚、文『これが旦那様、これが御新造様、貴下の爲には御兩親の御位牌、此方は御子息忠太郎様、貴下の爲にはお兄様の御位牌でございます。』

たま『ヒエーッ、これはまあ文太夫、どうした譯だえ。』

と早やおたまはおろ／＼聲、

文『さあその譯と申しますのは、昨年暮の二十五日、例年の通りお年忘れの御酒下され、御殿に於て無禮講の御酒宴がございました時に、大島流の槍術の御指南をする三木郷左衞門武則、性來の酒癖の惡い奴、醉つた上とは申しながら、旦那様に對して聽くに堪へない無禮な暴言、初めの内は酒のいはせることゝ柳に風と受け流していらつしやいましたが、餘りのことに我慢が成り兼ね、二、三の問答を遊しました、槍を取らせれば南海道の麒麟、鬼神かは存じませぬが、學問の道では何で三木郷左衞門が旦那様に叶ひませう、滿座の中で言ひ込められ、赤面をして御殿を下つてしまひました、所が憎い奴は元旦那様の門弟であつた浦野平八、三橋仙藏の二人、かねて三木郷左衞門の所へ行つて世話になつて居りました、それは旦那様も御存じでしたが、別段何にもお咎めなさらず、知つて知らぬ振をして居りましたのを、その浦野と三橋の二人が、或る夜、夜更けに手引きをして、不淨口から忍び込み、三木郷左衞門めと三人で、旦那様を殺し、御新造様も殺し、御病氣で身體の自由の利かない若旦那の忠太郎様まで、なぶり殺しにして、有合せの三百兩を持つて逐電を致しました。その物音に私共、目を覺しました時には、もう何處へ行つたやら曲者のありかも分らず、殘念ながら三原の御家は潰れました、所が月番御家老三浦長門守様は、私をお呼び出しになつて、娘のたまが横谷權之助と江戸表へ參つた、夫婦になつて暮して居るとのこと、其方これから江戸へまゐつて、此の事を知らせ、三木郷左衞門の首を討つて戻つて參るや

讀めば誰でも感激する美談佳話の寶庫はこれ！

千古に輝く偉傑、聖賢、文豪の最高潮場面、或は一流一派の奥義を極めた達人巨匠の秘話、或は一世を動かす大英雄の苦心、膽略、或は花も羞らふ麗人の美談佳話、或は市井に競ふ男一匹の仁俠義膽等滿載！ 讀者はこれによつて大部の書物を讀むにも勝る興味を覺え、大册の經典を繙く以上の感激を受けます。日常の話材に、講演の資料に、徒然の伴侶に處世修養に絶好の讀物です。

美談逸話集（本社編纂）

まだ御覧にならない方は今直ぐ御覧下さい

四六判カバー付美本

定價一圓三十錢（送料十二錢）

本社發行

うに申せ、左すれば三原の家は再興になるやうにして遣はすとの御言葉、早速御國表を立つて、七重の腰を引伸ばし、遙々江戸へまゐりました、もしお孃さま、どうぞ横谷樣にお頼み下さいまして、敵討をなすつて頂きたう存じます。』と涙ながらの物語。

餘りのことにおたまは、只茫然として居たが、果ては三枚の位牌を頰に當て、身を震はせ、暫らくは嘆きに沈んで居りましたが、さすがに、武士の娘、居ずまひを正し、

たま『長い道中、よくさうして知らして下すつた、さうして何かえ、私達が此所にゐるといふことを誰からお聞きだえ。』

文『風の便り、人の噂に、異名鶉權兵衛となつていらつしやるといふことを國にゐた時聞いて居りました。』

たま『さうかえ、もう直きお風呂からお戻りになるだらう、さうしたらよく頼んで見ませう。』

話し半ばに門口で、

權『今歸つたよ。』

たま『お歸りなさい――貴方飛んでもないことが出來ました。』

文『もし横谷樣、お久し振でございました。』

權『おゝ文公か、イヤ分つてゐる、今の話しの樣子は戸外で殘らず立聞をした。』

たま『それではお聞きになりましたか、モシ、貴方、私は殘念でございます。』

と、こみ上げる悲しみに耐へかねたる涙の瀧津瀨。

權『ウム、尤もだ。』

文『横谷樣、どうぞ三原の御家が御再興になりますやうにお願ひ申します。』

權『よし、心得た、安心しな、乃公が引受けたからにやア屹度敵は討つてやる。けれども相手は名に負ふ槍一筋で八百石のお祿を頂き、南海道の麒麟、鬼神といはれた三木鄕左衞門、中々油斷はならぬが、ナーニ麒麟だらうが鬼神だらうが、誠の道を以てぶつかつて行きやア、敵討の出來ないことはねえ。それにしても直ぐにこれから支度をして、一日も早く紀州へ引返さなければならないが、待ちなよ、長い間御恩を受けた雲州樣の殿樣に無斷で江戸を立つといふ譯には往かない――おたま、乃公は直ぐにこれからお屋敷へ行つて、殿樣に御暇乞をして來る。兎に角酒でもつけてやんな、文太夫さん、酒でも飲んで、心を陽氣に持ちなせえ、世の中は何事も覺悟が肝腎だ、成るやうにしきやなりやアしねえや。』

文『ハイ、どうぞよろしくお願ひ申します。』

おたまを慰さめ、文太夫を勞はり、心も輕く請合つて表へ立出でました。

軒端を離れて往來中、歩みを止めて鶉權兵衛、ホツと一息、

權『あゝ困つたことが出來た、相手は麒麟鬼神といはれた三木鄕左衞門武則、酒さへ飲まねば立派な武士、どうして、こんな間違ひになつたのか不思議のことだ。で俺が出て行つたところ

で、十中八九は返り討、その覺悟でやらなければならない、けれども年寄と女、さういへば嘸力を落すだらうと思つたから、あゝいつて安請合に請合つてやつたやうなもの、容易ならん事ではある。假令返り討になるまでも舅の敵、義兄の仇と、斬付けなければ一分が立たない。』

と胸に問ひ、腹に答へた權兵衞、赤坂御門内の御殿へまゐりました。吉田良左衞門のお取次で御目通りを願ふ。

出『權兵衞か。』

權『ヘエ、えらい雪でございました。』

出『よう降つたの。』

權『雪は豐年の貢と申します、農家では嘸祝つてをることであらうと存じます。御目出度う存じます。』

出『ウム、本年は必らず豐作ぢやぞ。』

權『それに就て今日は殿樣へお暇乞に上がりました。』

出『何ぢや。』

權『急に思ひ立ちましたことがございまして、旅立ちをしなければなりませぬ、海より深く、山よりも高い御恩を受けまして、何の御恩返しもいたしませぬで相濟みませぬ、幾久しく御武運長久を祈りますでございます。』

出『おゝ左樣か、して何用あつて何れへ參る。』

權『いろ／＼仔細がございまして、罷り間違へば命を捨てなければならない旅でございます、西へ行くやら、東へ行くやら、私にもまだ見當の付かない旅立ちをしなければならないことになりました。』

暫らくの間權兵衞の樣子を御覽になつてゐた出羽守殿、

出『左樣か、然らば其の餞別を取らする、暫らく待て。』

と仰しやつて、つーッとお立ちになる。御家來も後に續いて立つてしまひましたから、殘されたのは權兵衞一人、そこへ吉田良左衞門が出て來て

良『權兵衞。』權『ヘエ。』

良『こちらへ參れ。』

權『ヘエ、良左衞門さん、長い間御厄介になりましたが、當分のお別れです、當分どころぢやアない、ひよつとすると一生涯のお別れになるかも知れませぬ、どうぞ何日までも御機嫌宜くお暮しなすつて下さい。』

良『ウム、いやに濕つぽいな、サアこちらへお出で。』案内をされたのは風呂場です。

權『何をするんでございます。』

良『殿樣よりの御沙汰だ、お風呂を頂きなさい。』

權『いま家を出る時に入つて來たので、燗德利ぢやアねえんだから、湯へ入つたり出たりするのは嫌だ。』

良『さういはないで殿樣からの御沙汰であるから頂け。』

權『左樣ですか。』

一風呂入つて上がつて來ると、お髮係りの者が出て來て、入

れ毛をして髪を大髻に取上げはじめたから、

權『オイ良左衞門さん、どうするんだ。』

良『殿樣の御沙汰である、默つてこつちのする通りになつてゐなさい。』

權『ヘエ。』良『サア之を着なさい。』

と紋の付いた着物に上下、大小。暫らくの間考へてゐた權兵衞。『然らば忝じけなく頂戴仕つる。』

良『アハヽヽ、中々言葉使ひが上手だな、サアこちらへお出で。』良左衞門に連れられて御前へ出ると、

出『權兵衞、只今改めて目通り許す。』權『ハッ……』

權兵衞、疊へ額を摺り付けて、

權『思召しの段、有難く御禮申上げ奉ります、今改めて手前の身の素性を申上げまするゆゑ、御聽取りを願ひまする。』

出『ウム。』

權『眞手前は紀州名草郡和歌山紀伊大納言殿家來横谷宗三郎一龍齋の伜權之助と申する者、同藩軍學柔術の指南をいたします三原忠左衞門正勝の內門弟と相成、仕合せにも恩師の眼識に叶ひ、その愛娘たまと夫婦に相成りました、然るに同門浦野平八、三橋仙藏、稻葉藤助の三人の爲めに嫉まれ、和歌浦にて斬付けられ、身に降りかゝる火の粉は拂はねばならず、據ころなく稻葉藤助を斬つて捨て、妻たまを連れて江戸表へ出でて鶉權兵衞と變名、町人となつて暮して居りました。然る處此度國表にて、槍術指南番三木鄕左衞門武則を初め浦野平八、三橋仙藏三名の爲めに、舅三原忠左衞門正勝夫婦、義兄忠太郎の三名は、無殘にも殺害され、家名斷絶とのこと、下郎の注進に依つて知りました、相手は名に負ふ南海道の麒麟、鬼神といはるゝ剛の者、命を捨てる覺悟ならでは立向ふことは出來ませぬ、舅姑の敵、義兄の仇、討取る決心で江戸表を出立仕つりまする。返り討に相成れば、最早此の世にて御目通りも叶はず、幾久しく御武運長久を祈り奉つりまする。』

出『ウム、我が眼力に違はず、さては其方は武士であつたか、見事仇討本懷を遂げ、首途の祝ひ、之を取らする。』

と大村彈正左衞門加卜の刀一口を下し置かれました。

出『酒肴を持て。』

御盃を下し置かれ、御手許金の中より金百兩賜はりました。

權兵衞有難く御禮を申上げて御殿を下り、我家へ立戻りますると、直ぐその晩の內に支度をして、長年の町人鶉權兵衞も、元の横谷權之助といふ武士姿になつて江戸表を出立いたしました。

下僕の重病

主從三人、東海道筋を紀州和歌山へ一旦戻らうといふ積り、道中も無事に、宮の熱田から海上七里の渡しを渡つて、桑名四日市と來て、四日市の濱田屋德右衞門といふ宿屋へ泊りました。

所が翌朝立つことが出來ませぬ——といふのは若黨文太夫、水中りのためにひどい苦しみ、枕も上がりませぬ、驚いて醫者を招んで手當をいたしましたが、どうも宜くない。

權『おたま、文太夫には聞かされないが、最前醫者に尋ねたところ、どうもこの病人は愚老には請合ひ兼ると申した、可哀想だが十中の八九は癒るまい、それに就て一日も早く紀州和歌山へ立歸り、三木鄕左衞門を討取つて三原の家名再興を心掛けなければならぬ、身共はこれから紀州へ出立をする、お前は後へ殘つて、文太夫の看病をしてやりなさい、萬一の事があつたら當家へ賴んで置くから、當家の菩提所へ死骸は葬つて貰ふやう、幸ひにして癒つたら、紀州和歌山、身共の親許横谷宗三郎一龍齋の許へ訪ねて來なさい、これは當分の手當——』

と五十兩の金を渡しました。

たま『貴方、どうぞお身體をお大切に、本望をお遂げ下さるやう。』

權『あゝ其方は文太夫をよく世話をしてやりなさい。』

たま『後のことは御心配ございませぬ。』

宿の主人濱田屋德右衞門に呉れ〴〵も賴んで、鶉權兵衞の横谷權之助、四日市を立ちました。

今朝立つたその日の暮れ方、濱田屋の店の前へ下りた一挺の

川柳漫畫
どぢの浅堤

漫畫漫文
人生漫畫帖

川柳漫畫家谷脇素文先生編並畫　定價一圓八十錢（送料十二錢）

斷然面白い！　トテモ〳〵痛快！　朗らかな、ご家庭の常備藥！

一千數百點の古今の名川柳と名漫畫。どれも、これも、涙の出るほど面白く可笑しい逸品揃ひ、躊躇なさるは大損です、直ぐお求め下さい。一日早ければ、それだけ澤山人生の幸福が味はれます。

——東京・小石川　大日本雄辯會講談社　〔振替東京三九三〇〕——

漫畫家總動員の傑作　定價一圓五十錢（送料十二錢）

朗らかな笑ひを通じて描かれた現代世相の實錄！

漫畫家二十九畫伯が腕比べの漫文漫畫、實に千數百、どれも深刻、明朗、自分一人で享樂するだけでは惜しい、必ず人にも勸めたくなる大傑作です。

駕籠、駕籠から出ました若侍二人、酒代をやつたから、駕籠屋はペコ／＼頭を下げて禮をいつて行つてしまふ。

侍『許せよ。』女『入らつしやいまし、お早いお着きさまで、どうぞお御足をお洗ひなすつて――』

足を洗つて二階の座敷へ通された。

侍『女中、風呂はどうだ。』

女『丁度空いて居ります。』

侍『それでは早速一風呂浴びよう。』

お湯から上がつて、いひつけて置いたから酒と肴を女中が運んで來た。

侍『あゝ女中、つかんことを尋ねるやうだが、庭の向ふの離れ座敷は當家のか。』

女『左樣でございます、けれども お氣の毒さま塞がつて居ります。』

侍『イヤ別段離れ座敷へ入りたい譯ではないが、患つてをるのは、あれは當家の人か。』

女『イエお客樣でございます。』

侍『老人だな――枕許で看病をして居る若い女があつたな、あれは同行か。』

女『左樣でございます。』

侍『一人ぎりか。』女『イヽエ、もうお一人お連れがあつたのですけれども、今朝ほど紀州の方へ急ぎの用があつてお立ちになりました。』

侍『あゝさうか、その立つたのは橫谷權之助といふ名前ではなかつたか。』

女『アラマアよく御存じで……』

侍『病人は文太夫といふだらうな。』

女『仰しやる通りでございます。』

侍『枕許に坐つて看病をしてゐるのは、おたまといひはしないか。』

女『マアよく御存じで、お知己の方なのでございますか。』

侍『イヤ別段に知己といふ譯ではないが……』

といひながら二人は顏を見合せて、

侍『なア女中。』女『ハイ……』

侍『吾々がこんなことを訊いたといふことは默つてゐてくれよ。』
女『向ふへ話しをしては惡いのですか。』
侍『話しをされては困る、話しをしてくれるな。』
女『えゝよろしうございますとも、大概は話しをしないやうにいたしますけれども……』
侍『何だ、變な挨拶だな。』女『やつぱりそれは魚心あれば水心でオホヽヽヽ。』
侍『嫌な奴だな。』幾らか紙に包んで、
侍『サア之れをやる。』
女中を遠ざけて二人は酒を飲みながら、何かひそ／＼打合せて居ります。これ何者でございませうか、一寸一息入れまして……。

おたまの危難

段々夜も更けて行く、濱田屋の家内の者は晝の疲れで寢入りばな、客も疲れて鼾の聲。

離れでは、病氣の爲めに骨と皮ばかりになつて痩せ衰へてゐる文太夫の顔を、行燈の明りでヂッと見てゐたおたま、

（あゝ可哀想に、この老人が旅先きでこんな苦勞をするのも、三木鄕左衞門や浦野平八、三橋仙藏の爲め――良人は紀州へ歸つたが、一日も早く敵を討つて下さればよいが――）それや是れやを思ふと女心の、つい涙に誘はれました、その涙が文太夫の顔に落ちたか文太夫は、

文『ウ、ウーム……』

たま『お目覺めかえ。』文『ハイ。』

たま『お藥が冷めてゐるからお上がり。』

文『有難う存じます、イエお藥には及びませぬ、その儘にして置いて下さいまし。』

たま『何をおいひだえ、お藥を呑まなければいけませぬ。』

土瓶の中へ藥を入れて、口の所へ持つて行つてやると、ゴクリ〳〵と呑んで、

文『あゝ勿體ない、有難う存じます……旦那様がお見えになりませぬが、どちらへか入らつしやいましたか。』

たま『心配おしでない、これから八里ばかり行くと、大變御利益のある觀音様があるので、そこへお前が一日も早く病氣の癒るやうに御參詣にいらしつたのだから……』

文『あゝ有難う存じます、私さへ居らなければ、今頃は紀州へ歸つて、敵討をして居りましたものを、儘になるならば、舌を噛切つて死にたうございます。』

とボロ〳〵涙をこぼしてゐる。おたまもホロリとしたが、

たま『マア何だね、弱いことをおいひでない、病は氣からといふから、氣を丈夫に持たなければいけませぬ、お前が全快をした上で、三人揃つて立派に敵討をして、三原の家を再興をしませう。』と泣く文太夫を慰さめて居ります。

スルと、ミシリ、ミシリと廊下を忍んで來る跫音。おたまが振返る途端に、ガラリツと障子を開けると、覆面の怪しの武士二人、ヅカ〳〵ツと入つて來た。

たま『あゝもし、お座敷が違ひはいたしませぬか。』といふのを耳にも掛けず、無言のまゝいきなりおたまの手を取つたから、

たま『アレーツ、何をなさいます。』と聲を立てようとする所を口を押へて手早く猿轡。この様子を見て、

文『ヤアお前方は何をする。』と骨と皮ばかりに瘦せほゝけた文太夫、起上がつて來ようとする奴を、足を揚げてドンと蹴たから、アッと叫んで文太夫が倒れる間に、手取り足取りおたまを擔いで、縁先の雨戸を蹴外して表へ飛出し、切戸の錠をねぢ切つて、眞直に行けば東海道、左へ切れた伊勢街道、松並木のところまで只走り、そこまで來ると、松の根方のところへおたまをドーンと下ろして、

平『三橋。』仙『浦野。』平『巧く行つたな――孃さん、びつくりなさるな、吾々でござる。』といひながら猿轡を取つた。月の明りで見てびつくり、

たま『ヤ、ツ、お前方は浦野平八に三橋仙藏……』

平『アハヽヽヽ、嘸お驚ろきなすつたらう、思ひ掛けない所で逢ひましたなア。』

たま『一體お前方はこんなことをして、どういふ積り……』

平『へツへヽヽヽ、どうする積りと、お訊きなさるまでもございませぬ、お孃さん、國表で氣むづかしい先生の所で、軍學や

柔術を修行してゐたのも、そんな堅い修行より、美くしい貴方から、可愛い言葉を掛けて頂きたいばつかり、それも到頭水の泡、貴女は横谷權之助と夫婦になつた、戀の叶はぬ意趣晴し、權之助を和歌浦で叩ッ切つてしまはうと思つたも手違ひとなり、稻葉藤助は權之助のために殺され、吾々二人はそれからは當のない旅から旅を廻つてゐたが、人の噂に聞けば、貴女は江戸で横谷と仲好く夫婦になつて暮してお在とのこと、飽まで望みを遂げようと、貴女を慕つて江戸へ行く途中、今夜泊つた濱田屋で、チラリと拜んだ貴女のお姿、二人してさらつて來たのでございます。サアもう斯うなれば是が非でも、吾々二人は本望を遂げずには置かぬつもり、覺悟をして自由になりなさい。』

三木郷左衞門を手引をして、兩親や兄を殺した現在の敵二人ですから、おたまは血も頭へ上る心地、

たま『えゝい、聞くも汚らはしいその言葉、お父樣の敵、兄さまの仇、覺悟をしや。』

平『アハヽヽヽ、何をじたばた騷ぐんだ、ソレ三橋。』

仙『合點だ。』前と後から二人が抱付いて來る。

たま『エヽ、何をする。』と突きのけ、はねのけましたが、飢ゑたる鷹に見込まれた小雀のやう。

たま『アレー助けて――』と思はず上げる悲鳴。既におたまはこの二人の爲に手籠めに逢はうとする、美女一代の危難、如何相成りませうや、次號に詳しく申上げます。(つゞく)

悩み歎けるあなたの秋の魂が切實に求めてゐるところのもの、それを與へてくれるのが此の名著。思索の秋!今こそ此の名著必讀の時!!

武者小路實篤先生著

釋迦

定價一圓五十錢　送料十四錢　本社發行

一度讀まれた方にも、この秋の日に繰り返しお讀みの程を切にすゝめたい。本書を繙いて淨几にむかふ時、清泉の妙音、清香のたゞよひ、天地に遍滿する慈悲心に抱かれ、心平かにして豐かなる寂光淨土の世界をしみ〴〵味ふことが出來ます。釋尊の偉大なる御生涯を、飽くまでも我等と同じ人間として眞實ありのまゝに描きその大人格その大教訓を何人にも分り易く說いた興味津々たる感激ふかき古今の名著、秋來りいよ〳〵好評、ぜひ何人も今こそ擧つてお讀み下さい。全國の書店にあります。

『どりこの』愛飲家の健康座談會

――七月十九日　本社會議室に於て――

出席者

石井新太郎氏
赤羽軍藏氏
田中芳子氏
竹下至氏
山中秋三氏
日向道子氏
本誌記者

記者――お暑いところをお集り下さいまして有難うございます。これからお願いいたします。皆様は、『どりこの』の發賣當初からの御愛用者でいらつしやるので、今更くど／＼と申上げるまでもありません。一つ石井さんからどうぞ――

石井氏

石井――皮切りで恐れ入りますが、一言申上げます。私は慢性の胃腸カタルで、いつも困らされてゐます。大抵夏がいけなかつたのですが、昨年は冬やられて閉口いたしました。それで一ケ月ばかりパンとどりこのばかりでやつてをりましたが、大變腸の調子がよくて助かりました。食パンにはバタやジャムよりどりこのを原液のまゝつけるのが私の經驗ではよい樣です。どりこのを用ひてゐますと身體の具合が非常によいので喜んで居ります。

赤羽――やあ僕もこの頃寝冷えをやりましてなア、食慾はなくなる、身體はむやみにだるい、頭はぼんやりする、勤めに行くのもついおつくうで休むといふ樣な譯で、石井さんの食養の樣にサンドキツチとどりこので暫く過しましたがなア、身體の調子が大分よくなつて、お蔭で氣持よく働ける樣になりましてなア。

赤羽氏

記者――赤羽さんどりこのをお飲みになりはじめてからどの位におなりですか。

赤羽――サアー三四年も前からでせうかなア、子供が腸をいためた時にお見舞に頂戴したのがはじめてゞす。

石井――實際胃腸をいためた時の榮養には、どりこのが一番ですねえ。

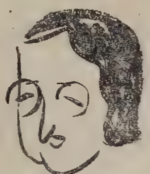
竹下――私の友人にもそんなのがありましたが私がどりこのを教へてやりましたのですが今ぢや非常に丈夫で、此の間も會ひました

竹下氏

がピン／＼してゐました。

石井――私ばかりがおしやべりをして恐れ入りますが、田舎の友人が盲腸の手術をしにこちらの病院へ入院してゐるのを見舞に行きましたが、どりこのを飲んでゐて意を强うしました。醫者もどりこのをすゝめてゐる樣ですね。

記者――近頃では病院や醫院でも患者にすゝめて下さいます。これなどどりこのが如何に信用出來るものであるかといふ事を如實に物語つてゐる樣なもので、本舗として喜んでゐる次第です。

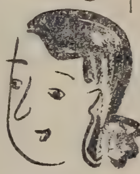


田中氏

田中――私がどりこの愛用者になりました動機は、姙娠いたしました時ツハリがとてもひどくて、食事も攝れず、最初の子供なので、何とかして滿足に產みたいと思つて、隨分我慢も致しましたがどうしてもだめでお醫者樣も母體にはかへられない、これでは母體の榮養がとれないと大騷ぎになりましたが、どりこのを飲み始めましたら、御飯がたべられる樣になり、ツハリも起らずにお產も思ひの外輕くすみました。その時の子供が今三つになりますが、どりこのが大好きで肥つて丈夫でございます。主人などは、お腹に居た時からどりこのとおなじみだからその譯だ――と云つて大笑ひですの。

赤羽――そりや結構ですね――どりこのを飲んで母子の肥立よさ――ですね。（一同哄笑）

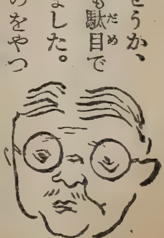
記者――日向さん何か一つどうぞ。



日向氏

日向――はあ……（もぢ／＼して恥しさう）どりこのは私の姉が非常に好きでございまして、私もそれが傳染して、もうとてもやめられない位の大好物ですの。

山中――わしは日頃どりこのをお茶がはりにしてゐますが、そのお蔭でこれ迄にどれだけ得をしてゐるか知れません。この間も三つになる孫が風を引いて熱が三十九度ばかりもあつたでせうか、藥も、食べ物も駄目でえらく心配しました。それでどりこのをやつたですが、お蔭樣で元氣がついて大分よくなりました。熱のある時などどりこのはいいですねえ。



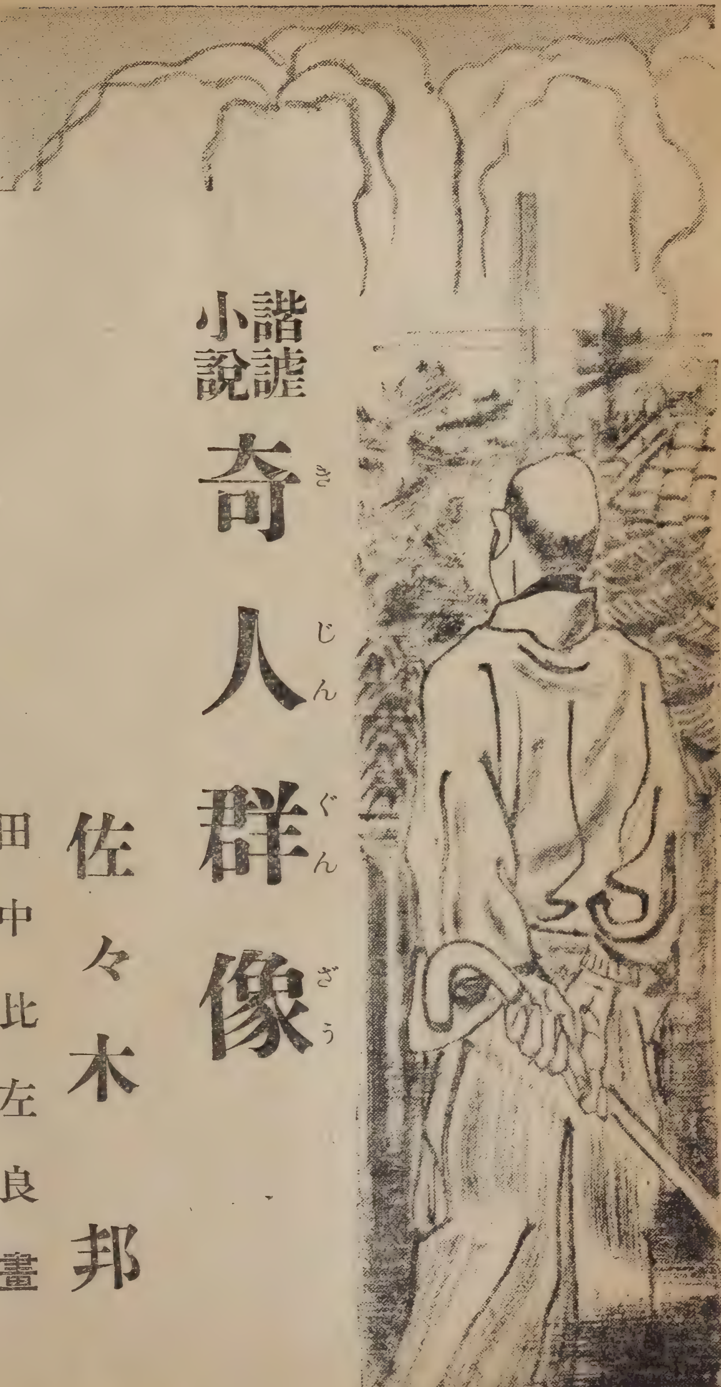
山中氏

田中――本當に子供にはどりこのが一番でございますねえ。

赤羽――僕は最初どりこのといふのは唯あまいだけでさつぱり醉ふ樣な氣持もせんもんだから張り合ひがなくてあまり信用もしてをらんだつたが、段々研究して見ると葡萄糖、果糖、アミノ酸ちふ樣な立派な養分を含んでゐるので一概に信用を高めたです。世間ではどりこのは高いなぞといふが、あれは七八倍に薄めるのだし、榮養價が高いので一圓二十錢は全く安いと思つとります。

石井――高いどころか私の經驗では子供の醫者にかゝる度數がへつたのから考へると拜みたい位なものです。

記者――ではこの位で。有難うございました。

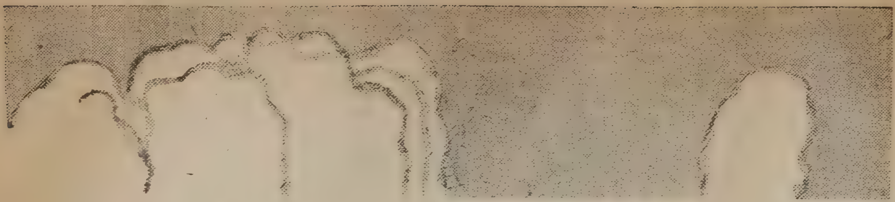


諧謔小説 奇人群像

佐々木邦

田中比左良畫

社會改良の大念願を抱く長谷川豫備少將を中心に様々な奇人連の活躍するのが物語の荒筋ですが、其奇人長谷川閣下は、才物の令弟義次君の辯口に掛り先輩宮内中將の忠言も聞かず、四軒の家作を買込みましたが、其一軒へは、不遇の天才畫家たる妹婿正德君を無償で住はせ、今一軒へは策士義次君自ら、



同じく無償で滑込んだから、殘るは二軒でありますが、其二軒を貸すに就ての條件八ケ條、これが長谷川閣下苦心案出の、世にも奇拔な社會改良的な代物なので、借手は忽ち尻込みし、今だに誰も賴みに來ない。（前號までの梗概）

人格書き

『あなた、宮內閣下がお見えになりましたよ。』

と芳枝夫人が稍慌てたやうに取次いだ。朝の日課として書の稽古をしてゐた長谷川さんは、直ぐに筆を置いて、客間へ急いだ。

『やあ。これは〳〵。』

『病中は種々と有難う。今日はお禮廻りだ。君のところへは責任を感じて、いの一番に駈けつけた。』

『一向お役にも立ちませんでしたが、お早く御全快で結構でした。もうお出步きになつても差支ないんですか？』

『平常と些つとも變らん。』

と宮內閣下は頰を撫ぜて見せた。芳枝夫人が改めて祝意を述べて退いた後、長谷川さんは凝つと先輩の顏を見守りながら、

『未だ多少窶れてゐられますな。』

『いや、これは長く日に當らなかつたからだ。元氣は悉皆舊に戻つてゐる。』

『差當り御用心なさらんといけません。』

『無論氣をつけてゐる。懲りた。滿一月監禁されたのだから。』

『一昨日御退院で今日直ぐとは驚きました。何んな御樣子か、お見舞ひに上らうと思つてゐたところです。』

『實は昨日來る積りだつたが、雨が降つたものだから差控へた。』

『有難いです、お心掛け下すつて。』

『お禮を言はれる値打があるかも知れん。一日も早く禁を解いてやりたいと思つたんだ。』

『閣下、實は申譯ありません。』

『何だ？　もう早手廻しをやつたのか？』

『はあ。』

と長谷川さんは頭を掻いた。

『我輩が退院したと聞いたからか？』

『いや、その前からです。』

『これは驚いた。』

『責任は閣下にあります。閣下が一方禁煙の約束をお破りになつた日から、一寸の虫にも五分の魂と思つて、もう一方も責任を感じないことに定めました。』

『言ひがかりをする男だな。何うでも構はない問題だけれど、煙草の方は元來食後一本宛許されてゐたんだから、そんな約束をする筈はないんだ。』

『いや、私は確かにその積りでゐました。』

『變だな。いつのことだね？』

『いつの幾日なんて子供の喧嘩のやうなことを仰有られると説明に窮しますから、お互に既往はもう咎めないことにしませう。』

『妥協か？　宜しい。しかし我輩が約束を守つて、いの一番に駈けつけた誠意丈けは認めてくれ給へ。』

『實はそれで少し恐縮してゐるところです。』

『自分が禁を解いた以上は一刻も早く君の禁も解いてやりたいと思ふのが友情だ。』

『何ですか？　すると閣下はもう始めてゐられるんですか？』

『退院以來やつてゐる。』

『これは驚きました。閣下こそ約束を破つてゐられます。御全快を待つて、二人で大盃を擧げる申合せでした。』

『その申合せを君は疾うの昔に破つて、知らん顔をしてゐたぢやないか？』

『私は無論破りましたそれですから申譯ないと讓歩してゐます。』

『當り前さ。自分で破つて置いて、人を咎める法はあるまい。まあ

まあ宜しい。』
『閣下、何うですか？　改めて。』
『何を改める？』
『五分五分ですから、改めて正式に約束を果しませう。』
『敢へて辭さん。實はその積りで君の便宜を計りに來たのだ。家でやりたいのだが、病後だから大切だと言つて、家内が般若のやうな顔をしてゐる。』
と宮内閣下は未だ窮命が完全に拔け切らないのらしかつた。
話半ばから再び姿を現した芳枝夫人はお茶を薦めながら、薄笑ひをしてゐた。
『何うぞお一つ。これならば害もございますまいから。』
『有難う。』
『大盃の方は未だお法度ださうでございます。』
『はゝあ。』
『唯今奥さまからお電話がございました。』
『參つたな、これは。長谷川君、駄目だ。ハッハ、、。』
『ハッハ、、。』

と長谷川さんも笑ひ出した。
芳枝夫人が引き退いた後、兩閣下は懇談を續けた。宮内閣下は口巧者の上に多少毒舌の傾向がある。長谷川閣下は正直一方だから、氣に入らないことを言はれると、直ぐに憤慨する。この日は偶然の切つかけから、雙方が特長を充分に發揮した。即ち宮内閣下が大いに喋つて、長谷川閣下が大いに當てられたのである。
『長谷川君、君は頤に墨がついてゐる。手にもついてゐる。小學生のやうだ。』
と最初宮内閣下が氣のついたまゝを言つた。
『然うですか？　成程。』
『まさか今更手習ひでもあるまい。』
『實はこの間から發心して書をやつてゐるんです。』

『ふうむ。かし家札が巧く書けないのか？』

『見括つちやいけません。豪いことがあるんです。書を頼まれました。』

『墓銘かな？　親友の。』

『閣下のをお引受け致しませうか？』

　と長谷川さんも時折やり返す。

『石塔が泣く。』

『そんな縁起の惡いものぢやありません。軸物ですよ。』

『本式だね。』

『號も考へたんですが、好いのが思ひ當りませんから、矢張り長谷川喜代造で行きます。』

『何で行つても大したことはあるまいが、誰に頼まれたんだね？』

　と宮内閣下は何處までも馬鹿にした口吻だつた。

『同期生です。少佐でやめて、醫療機械商として成功してゐる男です。御存じありませんか？』

『評判は聞いてゐる。然う〳〵、軍人の書を蒐める變りものだらう？』

『はあ。片脇といふ男で、成城學校以來の親友です。』

『いつか江藤君が大きなものを書いてゐたから、そんなに鰻をのたらして何にするのかと訊いて見たら、日本橋の藥屋に頼まれたと言つてゐた。』

『その男です。今日これから見える筈です。御紹介申上げます。』

『それには及ばん。』

『閣下も一つ惡筆をお揮ひになつては如何ですか？　忘れてゐましたが、方々へお願ひしてくれと頼まれてゐるんです。丁度これから來るんですから、喜ばせてやつて下さい。』

『我輩は書は一切書かないことにしてゐる。』

『巧い拙いに關係なく、將官なら、陸軍でも海軍でも宜いんです。』

『駄目だよ。』

『一つ度胸をお据ゑ下さい。一人や二人や引き立て役がないと心細いです。』

　とこれは長谷川さん、報復でも何でもなく、眞實閣下を惡筆と信じ切つてゐるのだつた。しかし事を好む宮内閣下としては聞き流しに出來なかつた。

『驚いたな。君は我輩よりも巧い積りかね？』

『いや、似たり寄つたりのところと思つてゐますが、私はこの間から練習してゐます。』

『矢つ張り君は正直者だ。長生が出來る。』

『常套手段ですな。』

『何が？』

『まあ／＼宜いです。何方が巧いにしても大したことはないんですから。』

『我輩も項羽流には相違ないが、君には負けない積りだ。』

『コゥ流つでのをお習ひになつたんですか？』

『見給へ。その通りだ。書は姓名を記するに足る。』

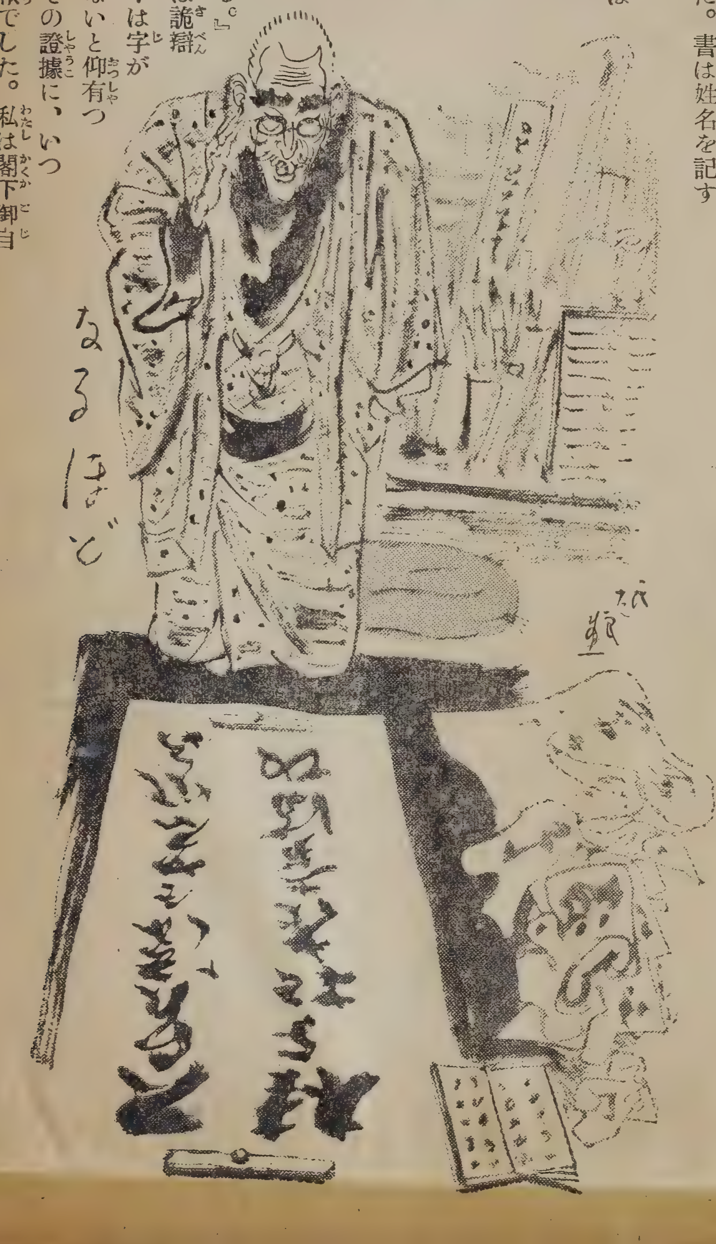
『それぐらゐのことは知つてゐます。私もその主義ですから、巧いとは決して主張しません。しかし下には下があると言ふのです。』

『軍人はお互つこだけれど、天性の器用不器用つてことがある。』

『閣下、この問題では詭辯を許しませんぞ。閣下は字が拙いから手紙を書かないと仰有つたことがあります。その證據に、いつも奥さんの代筆か電報でした。私は閣下御自分の書を拜見したことがありません。』

『見もしないで拙いと定めてゐるのか？』

『詰まり見せられないほどお拙いんでせう。少くとも私は年來然う考へてゐました。』



『正直者は結論が單純だな。何方が巧いの拙いのと子供のやうな議論はしたくないが、君が世間へ出て笑はれると氣の毒だから、徹底させて置く必要がある。凡そ字といふものは女房と同じことで、人のが好く見えて自分のが惡く見えるものだ。』

『そんなことはありません。』

『ハッハヽヽ。』

『人の女房が好く見えれば、自分の女房に連れ添つてゐられません。』

『君としては然うだらう。正直者、正直者。』

『詭辯にはもうかゝりませんぞ。』

『我輩としては自分が拙いと思つてゐるから、何うも人の字が巧く見えて仕方がない。子供の時は兎に角、大人になると、誰でも然うらしい。君はいつまでも童心を失はないから一種の聖賢かも知れない。』

『閣下の戰術は見え透いてゐます。私を憤慨させて置いて、虛を突く積りです。』

『ハッハヽヽ。』

『笑つて誤魔化しても駄目です。』

『斯ういふ獨り合點の男にかゝつちや敵はんな。しかし何でも自分のものが一番好いと思へるのは幸福だ。長生が出來る。』

『正直者で結構です。』

『我輩は特別かな？ 何うも自分のものが惡く見える。殊に字に至つては人のが皆巧く見えるから、今君が言つた通り、年來自筆の手紙を書かないことにしてゐる。』

『それほど自認してゐられるなら、人の批評はなさらんが宜いです。』

『しかしその我輩が君の手紙を見る度に、この男は一體何うしたものだらうと思ふんだ。指が五本とも親指だといふ不器用者の譬へがあるが、丁度そんな感じがする。人の字は必ず巧いと定めてゐる我輩が見て、これはツク〴〵拙いと思ふんだから、君は本當にヨク〳〵拙いんだらう。』

と宮内閣下はこの結論へ漕ぎつける爲めの謙遜だつた。

『何うも私は閣下の字を拜見してゐませんから、殘念ですけれど、仕方ありません。』

『好いところへ氣がついた。幾ら自信家でも見ないで批評をするのは無理だよ。それが分れば宜しい。』

『詭辯ですよ、矢つ張り。しかし閣下ぐらゐになると敬服に値します。見す〳〵掏摸と知れてゐながら取つ捉まらないんですから。』

『ハッハヽヽ。』

『忌々しいです。』

『兎に角、折角だから、君の書なるものを拜見して行かう。』

『それには及びません。』

『老婆心だ。世間へ出すとすれば、我輩も君の名譽の爲めに闘

心を持つ。悪いところがあつたら注意してやる。』

『斯ういふ押しの強い人にかゝつちや敵ひませんな。』

と長谷川さんは零しながらも、宮内閣下を書齋へ案内した。

毎朝の日課として半月餘り續けてゐるから、反古が山積してゐた。

『ふうむ。君はやり出すと凝るんだな。』

『凝るんぢやありません。持て餘してゐるんです。』

『何だ？ 石泉淙々若風雨。桂子松花常滿地。成程。』

『よくスラ〳〵とお讀めになりましたな。』

『馬鹿にするな。』

『書は兎に角、文句は何うですか？』

『面白い。』

『實は門脇君のところで諸先輩のを拜見しましたが、軍人は斯ういふ方面の修養が乏しいと見えて、大抵「至誠如神」とか「敬神博愛」とかと有り來りの修身訓で間に合せてゐます。餘り藝のない話ですから、私は軍人の名譽の爲めにと思つて、一つ文學的のところを心掛けました。』

『これを自分でやつたんだとすると、我輩、疊に手をついて、あやまらなければならん。』

『自作なら威張れるんですが、義弟に相談して探して貰ひました。』

『恐らく唐人だらう。書も悪くない。』

『本當ですか？』

『無論巧くはないが、誤魔化したところが些つともない。君の人格が如實に現れてゐる。書には大抵値打以上に見て貰ひたいといふ淺ましい根性が現れるものだが、それが些つともない。』

『兎に角、お褒めにあづかりました。』

『その邊の書き潰しを見ると、無責任な批評は出來ない。努力

鶴見祐輔先生の三大理想小說！

大好評

母 五百版突破
子 忽九十六版
死よりも強し

著者が滿身に燃ゆる熱血を傾けて描寫せる人生の大理想。之を讀んで泣かぬものが世にあらうか。 東京・小石川 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

著者が心魂を打ち込んで、清く尊き母性愛を心ゆくまで描寫した血涙にじむ人生記錄。 定價二圓（送料十二錢）

『母』の續篇。慈母の尊き犧牲に對ふる子の心情を描ける感激の名小說。愛の聖書である。 定價一圓八十錢（送料十四錢）

名篇『母』『子』と共に著者の三部作をなすもの。師弟の眞情を描ける大理想小說。 定價一圓八十錢（送料十四錢）

そのものに敬意を表する。』
『實際一生懸命に練習してゐるんです。』
『しかしもうこの邊で打ち切るが宜い。』
『及第ですか？』
『先づ結構だ。君としては最善の努力をしてゐるんだから、依賴者も滿足するだらう。細井廣澤が淺草寺の額を賴まれて、長持一杯の書き潰しをしたといふ話が殘つてゐるが、それにも劣らない。』
『有難いです。』
『努力の點からいふと、君の方が勝つてゐる。廣澤先生と違つて、元來親指だけの人間が發心したのだから、蟹が木に登るやうなものだ。』
と宮内閣下は土俵際で背負ひ投げを食はせた。
そこへ丁度好く門脇氏が訪ねて來た。朝からの約束だつた。長谷川さんは尊敬する先輩に親しい友人を紹介することが出來た。門脇氏は長谷川さんの書について、宮内閣下と同じやうなことを言つた。
『成程。根氣好くやつたね。君の人格が躍如としてゐるよ。』

『自分としては未だ滿足しないんだけれど。』
『いや、結構だ。これを貰つて行く。この書き潰しを見ると、この上註文はつけられない。細井廣澤先生が淺草寺の額を賴まれて、書き潰しを長持に三杯拵へたといふが、それにも劣らない努力だ。』
『驚いたね、これは。』
『何が？』
『長持の數が違つ

てゐる丈けで、宮内閣下と全く同じ鑑定だよ。』

『しかし後が少し氣に入らないかも知れない。廣澤先生と違つて、君は天性の惡筆だから、同じ數の書き潰しをしても、餘計骨を折つてゐる割合に、一向效果が擧がらない。』

『閣下も丁度今そんな冗談を言はれたところだ。もう懲りた。書なんてものは書くものぢやない。』

『先づこの邊だらう。僕は成城學校時代に君の淸書をしてやつた間柄だから、よく知つてゐる。』

『それなら何故賴む？』

『書よりも人格さ。有難く思ひ給へ。代つて淸書をしてやつた僕のところへは賴みに來るものがないんだから。』

『皆初めから拙いものと見てかゝつてゐるんだから、努力をしても張合がない。』

と長谷川さんは少し不機嫌だつた。

『いや、結構だよ。』

『結構なことがあるものか？』

『君の人格書きとして後世に傳へる。』

『勝手にし給へ。』

『ついては判を一つ捺してくれ給へ。單に長谷川喜代造では小學生のお淸書のやうで具合が惡い。』

『判つくことならんといふ人が頑張つてゐられる。』

『ハツハヽヽ。我輩に當つて來たぞ。』

と宮内閣下が笑ひ出した。

『何のことですか？閣下。』

と門脇氏には無論通じない。

『長谷川君は誤解の名人です。』

『閣下こそ御自分がやつてゐられることを人に禁じる名人です。』

と長谷川さんが遣り返す。

『何ういふ經緯か知らないが、この書ぢや判の持ち合せもあるまいから、書判で結構だよ、君。』

『御覽の通り僕は不器用だから、そんな器用な眞似は出來ない。』

『それぢや僕が一つ寄進につく。長谷川喜代造之章で宜から

う？』

『何でも構はん。』

『おや〳〵。』

と門脇氏は聊か持て餘した。宮内閣下は流石に如才なく、長谷川閣下の書には物欲しさうなところがないと言つて、今更褒め立てた。巧拙に超越してゐる。俗氣が些つともない。書は要するに人格が迸り出れば宜いといふのだつた。

閣下連中の書を蒐めるのが道樂の門脇氏は目の前にゐる閣下を逃す筈がなかつた。

『時に宮内閣下、恐れ入りますが、丁度好い機會ですから、閣下にも一つ御染筆をお願ひ申上げます。』

『我輩は駄目です。』

『いや、何う致しまして。お話の模樣から御名筆とお察し申上げてゐます。』

『惡口丈けは巧者ですが、實は長谷川君と何方かつてところです。』

『御謙遜ですな。』と申上げると長谷川君の方から又槍が出るかも知れませんが。』

『實際お話にならないんです。自分ながら呆れ果てゝ、手紙さへ書かないやうにしてゐるんですから。』

『假りに一歩讓つて、仰有る通りにしても、唯今の御意見の通り、巧拙は素より問ふところでありません。巧い書が欲しいなら、書家に賴みますが、書よりも人格です。東郷元帥の書にしても、書家から見れば、法に適はないところがありませう。しかし書そのものよりも元帥の人格が貴いんです。』

『しかし我輩あたりは東郷閣下と一緒になりません。』

『いや、閣下級は兎に角人格者です。人格書きが利きます。』

『その人格書きなるものが甚だ面白くないと思ふんです。軍人は何うせ字が下手ですから、柄にないことはしないに限ります。』

『御謙遜ですな。』

『場合によつては國辱を招きますよ。』

『餘技ですから、然う眞劍にお考へになるにも及びますまい。』

『いや、餘技にも何にもなつてゐない連中が書くから恐ろしいです。先頃滿洲國皇帝陛下がお出になられた折、仄かに承るところによると、日本には法帖の好いのがないやうだから今度集めて送らせると仰せられたさうです。これは人格書きに對する頂門の一針だらうと思はれます。』

『成程。』

『彼方は文字の國です。學者にしろ政治家にしろ、地位の高い人は皆相應に書の修業を積んでゐます。皇帝陛下は日本へお出になつて、恐らく幾多の人格書きにお目を留められた後、この分では日本には未だ昔の法帖が入つてゐないとお考へになつたものと拜察されます。』

『成程。その邊もございませうな。』

『日本にだつて書家はあるんですけれど、昨今は所謂人格書きが日本の書道を代表する形になつてゐますから、兎角誤解を招きます。』

『しかし私に言はせれば、人格書きは餘り巧くないところに人間味があつて貴いんです。型に嵌まつた字は一向感激を與へません。』

『いや、苟くも隣邦の皇帝陛下の御宸襟を惱まし奉るやうでは恐れ多い次第です。』

『君、君、長谷川君。』

と呼んで、門脇氏が慌てゝ制したけれど、もう晩かつた。長谷川さんは折角の書に墨を塗つてしまつた。

『國辱々々。』

『正直者にはうつかり世間話も出來ない。ハツハヽヽ。』

ワスカ一滴
數日かをる
月の友五百番香水
定價 ¥0.50 ¥1.00 ¥1.60
東京淺草鳥越一ノ七
月の友化粧園
振替東京三五〇八五番

と宮内閣下は單に自分が免れる爲めの詭辯だつたけれど、藥が少し利き過ぎたのに驚いた。

精神家と精神家

門脇氏は差當り長谷川さんの人格書きを諦めなければならなかつた。忌々しかつたと見えて、宮内閣下が辭し去つた後、

『あの閣下は餘つ程變つてゐるね。』

と言つた。

『いや、立派な人格者だよ。』

『しかし言ふことが極端だ。』

『人を見て法を說くのさ。自分のことは分らないけれど、妙に人のことのよく分る人だ。國辱の一言で目が覺めた。』

『君は頭が單純だからな。』

『何？　もう一遍言つて見ろ。』

『その通りだ。』

『もう書かんぞ。』

『まあ〳〵、喧嘩はやめよう。』

『僕は閣下を顧問にしてゐる。今度の家作にしても、閣下に算盤を取つて貰つてから買つたんだ。軍人に似合はず、世間のことの分る人だから。』

と長谷川さんはこゝが好いところだ。譁はれて憤慨しても、

それは別の問題として、大局は少しも變らない。續く話の中に、
『然う〳〵。忘れてゐたが、君から借家人の世話を頼まれてゐたね。』
と門脇氏が思ひ出した。
『ないかね？ 然るべき奴は。』
『この間、店のものに話したら、家賃の安いのは氣に入つたが、毎朝、朝禮をやる上に、一週間に一遍君のお説法を聽くんぢや溜まらないと言つて、皆尻込みをしてゐる。』
『朝禮つてのは何だい？』
『毎朝、僕が皆を集めて修身講話をやる。その上一週間に一遍君のお説法を食ふんぢや敵はないと言ふんだ。』
『月に一遍だよ。一週間に一遍ぢや無理だと思つて改正した。』
『それなら又考へやうがあるだらう。もう一遍募集して見る。』
『頼むよ。近所で僕のことを百鳴りだなんて言ふものだから、昨今問ひ合せに來るものがない。』
『評判が悪いんだね。』
『徹頭徹尾善意でやつてゐるんだけれど。』
『あの貸家札にはその善意の押し賣りが現れてゐる。如何にも高壓的だ。』
『然う見えるかね？』
『安くても、あれぢや食ひついて來ない。先方はお客さまだ。』
『食ひついて來るやうに書き直しても宜いが、然う〳〵讓歩してゐると體面に關する。』
『商賣だぜ、君。客の來好いやうにしなければ駄目だ。』
『いや、商賣ぢやないんだ。安く貸してやるんだから。』
『その態度が好くないんだよ。』
『文句を言はずに、一軒世話しろ。』
『命令的に來たね。』
『實際困つてゐるんだ。妻の言ふことを聽かずに、悉皆自分でやつたんだから、何とかして店子を打ち込まないと顏が立たない。』
『亂暴な家主だな。兎に角、心掛けて置く。』
『條件にさへ適つてゐれば、君が持て餘してゐる店員でも宜い。僕が立派に感化して見せる。』
と長谷川さんは軍隊で部下を扱ふ氣でゐるから自信がある。
『君は單純に考へてゐるが、人の世話をするつてことはナカナカむづかしいものだよ。』
『何あに。』
『弟さん達は何んな具合だい？』
『相變らずだ。』
『身内丈けにして、餘他は普通の店子にして置いたら何うだらう？』
『それを妻も言ふんだけれど、何も國家へ御奉公だ。道樂仕事にやつて見る。』

『今に分るよ。』
『何が？』
『僕も可なり心掛けてゐるけれど、自分の力の足りない所爲か、何うも思ふやうに行かない。』
『君は商賣人だから無理だらう。』
『馬鹿にしちやいけない。これでも同業者中の精神家で通つてゐるんだよ。』
『兎に角、手に餘る奴があつたら、僕の方へ廻し給へ。』
『よし。引受けるか？』
『條件にさへ適つてゐれば。』
『適つてゐる。しかし迚も君の力で感化出來ない代物だよ。』
『心當りがあるのかい？』
『あるさ。』
『然ういふのが面白いんだ。早速差向けてくれ給へ。』
『それぢや二三日中に伺はせる。』

『職業は何だい？』
『もう恐れを爲したね。』
『そんなことはないけれど、參考の爲めだ。』
『一切君が吟味して、こなせるやうだつたら、採用し給へ。』
『こなせるとも。待つてゐる。』

『後から文句を言つちや困るぜ。』
『君こそ恐れを爲してゐるんだ。此方は然ういふ人間でないと張合がない。』
『それぢや宜しく頼むよ。』
『君の知人かい？』
『妙に念を押すね。その邊も曖昧にして置かう。』
と門脇君は努めて興味を唆るやうだつた。
『芳枝や、有望な店子が來さうだよ。』
と長谷川さんは晝食の用意をして來た芳枝夫人に傳へた。
『まあ〳〵、門脇さんのお世話でございますか？』
『はあ。實は後から恨まれると困ると思つて、差控へてゐたんですけれど。』
『何んなお方でいらつしやいますか？』
『兎に角、御主人は手に餘るやうなのが御希望ですから。』
『餘りひどいのは困りますわ。』
と芳枝夫人は首を傾げながら、お給仕に取りかゝつた。門脇氏は話を外らす爲めか、書を貰ひ損ねたことに觸れて、頻りに殘念がつた。
『時に門脇君、君は書が好きなくらゐだから、繪も好きだらうね。』
と長谷川さんが訊いた。
『繪は教訓にならないから興味がない。僕は矢つ張り閣下級の書で一貫して、一日も早く閣下閣を建てる。』
『それぢや仕方がない。』
『誰か繪を描く閣下があるのかい？』
『いや、義弟だ。その中に畫會をやつてやらなければならない。家作へ打ち込んだものゝ、奴さん、法螺ばかり吹いてゐて、些つとも描かないんだ。妹に訊いて見たら註文がないのらしい。』
『他ならぬ君の義弟のことだから、一幅頼んでも宜い。巧いのかい？』
『僕の書のやうなことはない。』
『當り前だ。商賣だもの。』
『オホヽヽ。』
と芳枝夫人が笑つて、床の間を見返つた。
『あれですか？』
『はあ。』
『成程。ナカ〳〵達者なものですな。』
『僕には分らないが、本人は素晴らしく巧い積りだ。』
『巧いよ。畫會を待たずに、早速一幅頼まう。』
『有難う。好い奬勵になる。』
『しかし條件がつくぜ。』

日本温泉案内 東部篇 西部篇
温泉はどこがいゝか、交通は、宿泊料は、附近の名所は、名物は、何から何まで一切分り、讀んだゞけでも温泉氣分に浸る事が出來ると大好評です。温泉國日本の御家庭にぜひ無くてならない名著です。（本社編纂發行・定價各二圓五十錢、送料十六錢）

『何ういふ條件だい？』
『君も書くさ。』
『讃をするのかい？』
『繪が泣くよ。義弟だつて承知しまい。』
『又馬鹿にしやがる。』
『君は矢つ張り君で別に書く方が宜い。』
『そんなに拙いと思ふ字を何の因果でそんなに欲しがるんだ。』
『僕は宮內閣下とは考へ方が違ふ。人格書きは巧くない方が效果的だ。見る人間が自分よりも拙いと感じれば、こんな男でも閣下になるんだからと思つて奮發する。』
『當てつけたことを言ふ男だな。』
『いや、君に關係はない。單に後進鞭撻の爲めだ。しかしこの目的からいふと、君あたりの書は懦夫を立たしめるに足るものがある。』
『その意味なら宮內閣下の方が適任だらう。』
と長谷川さんは何處までも信念を抂げない人だ。
『閣下も大したことはないらしいな。』
『元來形を爲さないんだから。』
『君の下があれば尙ほ調法だ。君も書く、閣下も書くといふことに一つ改めて計らつてくれ給へ。』
と門脇氏はいつの間にか最初の用件に戻つてゐた。

店子第三號第四號

翌日、長谷川さんは一日家にゐて、店子志望者を待ち暮したが、一人も來なかつた。昨日の今日だから、然う右から左へも行くまいと思つて諦めた。その翌日も一日待ち侘びて、
『門脇の奴、擔いだのかな？』
と疑ひ始めた。成程、考へて見れば、手に餘るのがあると急に言ひ出してゐる。前後の關係が何となく怪しい。一つ電話で問ひ合せて見ようか？　いや、瞞されたことを確める努力をして、君は單純だなぞと折紙をつけられるのも馬鹿々々しい。然う思ひ直して、三日目の朝はもう期待しないことに定めた。それでも正直な人だから、全然解放された氣持になれない。宮內閣下を訪れ返すのが禮だと思つたが、もう一日延して、又書に取りかゝつた。結局、書くことに言ひくるめられてしまつたのだつた。
『あなた、參りましたよ。』
と芳枝夫人が取次いだ。語調で直ぐに相手の內容が分つた。玄關へ出て見たら、普通としてはお斷りする程度の洋服姿が立つてゐた。草履を穿いてゐる。軍人上りの長谷川さんは服裝の不統一を好まない。
『そこの家を貸して戴きたいんですが？』

『御覽になりましたか？』
『へえ。』
『今朝は未だ鍵をかけてある筈です。』
『一昨日の夕方拜見しました。お隣りの奧さんを乘つけて來た序に。』
『乘つけて來た？』
『へい、私は乘つけるのが商賣です。タクシーの運轉手です。決して怪しいものぢやありません。』
『成程。』
『昨日女房を見に寄越しました。女房も氣に入つてゐます。』
『すると門脇君の紹介ですか？』
『紹介がないといけないんですか？』
『いや、然ういふ次第ぢやありませんが、門脇君の紹介なら、特別に便宜を計らひたいと思つたんです。』
『家賃さへ拂へば宜いぢやありませんか？　簡單にやつて下さい。手を一寸擧げればオーケーと言つて駈け出す商賣です。紹介なんて手數を履んでゐた日には女房子が餓ゑてしまひます。』

『それぢや門脇君と關係はないんですね？』
『そんな人は知りません。しかし賣物買物でせう？　かし家札が貼つてありますから。』
『場合によつてはお貸し致します。』
と長谷川さんは相手の顏を凝つと見据ゑた。此奴、門脇氏に言ひ含められて嘘をついてゐると思つたのだつた。
『運轉手つて商賣が氣に入らないんですか？』

『いや、結構です。』
『貸して戴けますか？』
『普通の家作と違つて條件があるんですが、御承知ですか？』
『貼札に書いてある通りでせう？』
『え〻。』
『月に一晩潰れることも覺悟の前です。旦那が何かお說法をなさるんだと聞いてゐます。』
『宜しい。』
『それぢや明日から御厄介になります。』
『まあ〳〵、お掛け下さい。ゆつくり話しませう。』
『私は稼ぎの途中で、車を表に止めてあるんですから。』
『しかし五十錢や一圓の問題ぢやないでせう。君は今將來出世してガレージの持主になれるか、それとも一生涯流して歩くか、重大な岐路に立つてゐます。』
『それぢや掛けさせて戴きます。』
と運轉手は腰を落ちつけて、バットの箱を出した。長谷川さんは火鉢を呼んで、自分も葉卷に火をつけた。
『お子さんは幾人ですか？』
『三人あります。』
『お年は？』

『七つを頭に……』
『いや、君の年です。』
『三十三です。』
『原籍は？』
と長谷川さんは履歴書を取る代りに、悉皆口頭で果して、
『賞罰は？』
『運轉手のことですから、時々スピードでやられます。』

『それ以上のことはありませんでしたか？』
『ございません。』
『繕ろはないで有りのまゝを答へて下さいよ。軒を並べて暮すやうになれば、私が種々と面倒を見て上げるんですから。』
『へい。』
『何ですか？』
『あなたは何うですか？　これをやる口ぢやありませんか？』
『これ。』
『博奕ですか？』
『その邊です。』
『冗談仰有つちや困ります。』
『初めからやると言ふ人もありますまいが、然ういふ方面は堅く愼んで戴きます。』
『後にも初めにも覺えのないことです。』
『これは構ひません。』
『酒ですか？』
『えゝ。』
『酒は生れつき嫌ひです。』
『飲む打つ買ふといふのが若い人の誘惑です。何うですか？もう一つの方は。』
『失敬ぢやありませんか？　あなたは。人が下から出て聞いてゐると思つて。』
と運轉手は憤つてしまつた。
『ハッハヽヽ。』
『…………』
『初對面ですから、念の爲めです。』
『それほど念を入れる必要があるなら、もう御免蒙りませう。』
『いや／＼。まあ／＼、お待ち下さい。お茶を一つ。』
と長谷川さんは丁度女中が持つて來たのを薦めた。
『…………』
『本郷から此方へお移りになる動機は何ういふ次第ですか？』
『…………』
『君の考へですか？　それとも誰かに勸められたんですか？』
『僕はもうお答へしません。失敬します。』
『土井さん、家を御用立て致します。』
『…………』
『實は君を推薦してゐる人があるんです。』
『へゝえ。』
『氣に入りました。今日からでも越して來て下さい。』
『それぢや貸して戴きます。實は……』
『もう宜しい。分つてゐます。』
『今日中に移らせて戴きます。しかし御主人。』
『何ですか？』
『家賃の安いのには何か次第があるんぢやございませんか？』

『それも今に分ります。』

『何か出るんぢやないですか？』

『馬鹿なことを言つちやいかん。』

『女房がそれ丈けを案じてゐます。』

『大丈夫だ。新しい家だから性が知れてゐる。』

『それでは後刻又お目にかゝります。』

と運轉手の土井君は悉皆機嫌を直して出て行つた。

長谷川さんのところでは、その日の中にもう一軒の方も定つた。夕刻、立派な紳士が訪ねて來て、家作を借りたいと所望した。芳枝夫人が應對してゐるところへ、長谷川さんが散歩から歸つて來て入れ代つた。

『御職業は？』

『基督教の牧師です。』

『はゝあ。』

『大分風變りの貸家札を拜見して、興味を催しました。失禮ながら、あなたは何ういふ御職業でいらつしやいますか？』

『軍人の古手です。』

『成程。これは御恰幅でも想像がつきます。』

『家作には種々と條件があるんですが、御承知ですかな？』

『はあ。牧師は大抵子澤山ですから、その點は申分ないと思ひます。私のところは五人あります。私の年は三十八、妻は三十五。主人會主婦會に至りましては自分達の方から發起したいくらゐに考へてゐます。申し落しましたが、主婦は職業婦人でありません。』

『はゝあ。』

と長谷川さんは忽ち受身の形になつてしまつた。

『お家賃の點ですが、無論この上御勉强の餘地はございませんでせうな？』

『さあ。』

『實は私の教會には牧師館がありませんから、家賃として月三十五圓宛戴いてゐます。唯今丁度三十五圓の家に入つてゐますが、若しお宅の家作へ御厄介が願へれば、十五圓丈け教會へ戻します。しかしお家賃を十五圓に負けて戴きますと、二十圓の獻金が出來る勘定で、教會が大いに助かります。閣下、人間は淺ましいものですな。』

『何故ですか？』

『隴を得て復蜀を望みます。お家賃が特別にお安いと思つたら、慾が出ました。二十圓で結構です。私達に貸して戴けませうか？』

『御用立て致しませう。』

『有難いです。』

『家はお氣に召しましたか？』

『はあ。私達には贅澤過ぎるくらゐです。何分宜しく。』

と牧師は可なり長く話し込んで、大喜びをして歸つて行つた。

『あなた。』
『何だい？』
『牧師さんにかゝつては一溜りもございませんわね。』
と芳枝夫人が後から冷かした。長谷川さんは全然唯々諾々だつたのである。
『感心した。實に要領を得た人だ。此方の訊きたいところを一一先に言つてしまふから仕方がない。』
『一日に二軒定るなんて珍らしいことがあるものですわ。』
『尤も運轉手の方は門脇君が差向けたんだ。案外善人のやうで張り合ひが拔けた。』
『惡人なんか困りますよ。』
『トラックがお手のものだから仕事が早い。仲間が手傳ひに來てゐたやうだね。』
『はあ。もう片付きました。お蕎麥を戴きましたよ。』
『成程。此方は家主か？　どれ／＼一つ門脇君に報告しよう。』
と言つて、長谷川さんは電話にかゝつた。
『君、來たよ。』
『定めてくれたか？』
『うむ。もう入つてしまつた。』
『早いね。』
『そこは商賣柄だ。スピードを出す。』
『何を？』
『スピード。』
『分らん。兎に角、君がお說法をしようとしても、手に負へないのを選んだんだよ。』
『しかしそんなに惡人らしくもないぜ。』
『善人さ。牧師だもの。』
『え？』
『あれは家内の教會の牧師だよ。』
『運轉手ぢやないのか？』
『違ふ。變だな。吉岡といふ牧師が行かなかつたかい？』
『來た／＼。それも定めた。』
『それだよ。』
『ふうむ。』
『牧師にお說法が出來るものならして見給へといふ謎さ。今頃まで擔がれてるのは鈍いぜ。』
『成程ね。』
『君が妙に精神家ぶつて、變なものを入れたがつてるから危いと思つたんだ。家内と相談して、安全第一人者を差向けたんだよ。』
『ハツハヽヽ。』
『この野郎、覺えてゐろ。』

（つゞく）

いよ／＼面白い『奇人群像』！　まだお讀みにならぬ方がありましたら、どうぞ御吹聽下さい。

最新療法

膿を持つ病は一切この療法で……

おでき、耳だれ、蓄膿症、疔、疽、癰その他の腫物が

無害無痛、極めて安全で手軽に治せる内服新治療法

實驗者が涙を流して感謝

命取りと怖がられる面疔や疽、癰などが内服薬で簡單に治ると聞いたら、吸ひ出し藥位しか知らない人は本當にしないかもしれません。又治療に困る蓄膿症や耳だれその他の腫物が切らず、痛まず治せるとしたら、どんなに喜び驚かれる方が多いかしれません。斯様な内服藥に就ては東西醫學界でも永い間色々研究されて居りましたが、未だ充分完全の域には達しませんでした。所が近年佛國のフロイン及クレゴアール博士によつて『錫』が化膿性病菌の毒力減退に威力ある事が發表され、これに我が帝國藥學研究所の多年眞摯な研究が加はつて、遂に治療醫界をアッと云はせる様な、全く理想通りの新治療藥の創製に成功したのであります。

それは目下外科治療の革命とまで騒がれて居る『フカンケル』で、本誌に發表以來素晴らしい好評で迎へられ、面疔が治つた—蓄膿症が輕くなつた—耳だれが止つた—愛兒のおできが治つて命拾ひをした等々、實驗された方々から涙の出る様な報告が殺到する有様で豫想以上目覺ましい効果であります。

これだから効くのです

なぜ、フカンケルはかく効果があるか、之を簡單に申しますと、本藥は膿を持つ病症の原因となる葡萄狀球菌に對して强力な殺菌力ある酸化錫と、葡萄狀球菌同様に恐ろしい毒を持つ連鎖狀球菌を掃滅する特殊酵母とを結合したもので、服用すると同時に血行中に入つて、藥効が全身に行きわたり、如何なる個所にある化膿症も、病原菌から驅逐されるからであります。

從つて面疔、その他膿を持つ腫物、蓄膿症、耳だれ、ニキビ、乳ばれ等は痛みもなく、極めて樂々と膿栓を排出させ、腫を除き、痛みを消散させ、排膿を止めて速かに患部を常態に還らしめるのが特長です。

殊に本藥は、錫のみによるものと違つて胃腸を害する惧がなく、酵母により特殊の緩下便通作用を營まれますから、服用數次で緩下排膿作用が始まり、炎症が快く輕減し、疼痛や腫れが減退して、速かに治癒致します。

苟も膿を持つ病氣にお惱みの方は早速本藥でお治し下さい。

〔フカンケル、定價十五日分一圓五十錢（送料内地十錢其他四十二錢）東京小石川大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六一九）へ御注文下さい〕

新家庭エピソード
強盗予防演習の巻
怖しく物騒な世の中になつたもんだ。
今夜は先づ強盗豫防、豫行演習をやらうかナ。
先づ聲をかへる必要がある。
アレツ？をかしな物音？猫か知ら。
ゴトンガタン
キヤーツ
強盗だツー、金出せツー、

六
アリヤリヤ／＼
氣絶！　ウワツ
大變だ。
七
こりや豪い事になつた、お醫者さんを呼んで來なくちやいけない！
八
お若い內は、と角ありがちの事ですナ、アハヽヽヽヽもう大丈夫です。
九
隨分非道いワ、だけど堪忍してあげるワ、その代り懲罰よ、ネーいゝでせう。
十
とんだ懲罰になつたものだナア。
十一
ネエ！　貴郎！
こんな事ならちよい／＼演習してもいゝワ。

淋病を家庭で治した人々

怖しい淋病の責苦から逃れて 心身共に爽快になつた喜び

東京市　中村榮之助

私は本年二十七歳になる者ですが、昭和七年の六月、一寸したことから淋病に罹り、約半ケ年間と云ふものは、頑固な病魔のために苦しめられ、今思ひ出しても當時の有樣は、到底筆舌によく盡すことが出來ません。

最初の中は、尿道の奥がムズ／＼して、放尿の時等は身を削られるやうな激痛に惱まされて來ました。勿論專門醫の手當も受け、注射や服藥と種々治療しましたが、餘程の悪性らしく、膿は益々多くなつて痛みは止らず、全く神經衰弱のやうになつて、氣分は沈んで行くばかりです。從つて社の仕事も苦しくなり、外交で彼方此方と一日中電車や自動車を乘り廻はした時等は、全く局部の苦痛が激しくなつて、夜も安眠出來ず、悶え苦しむことは度々ありました。

それから到頭思ひ切つて休暇をとり、淋病によいと云ふ○○溫泉へ出掛けました。今度こそは酒も煙草も止め、食物等にも充分注意して來ました。そのためか三週間許りで痛みの方は大分薄らぎ、稍々安心を得る樣になつたので、もう一と月も湯治してと思ひましたが、當時の私には經濟がどうしても許しません。殘念と不安の中に歸りました。それでも社に出勤するまでになり、主任の情で暫く內勤することになりました。

處が、北風のそろ／＼身に沁む十一月の末頃、一時忘れかけてゐた痛みが、又々襲ひ來て尿道へ燒火箸でも突込まれた樣な激痛に氣も失はんばかりでした。堪らなくなつて親友のK君に打明けた處『淋病には吉原のアラキ淋藥がよい』と自信を以て奬めてくれるので、その日會社の歸りにアラキ藥局を訪ね色々話を伺ひ試してみました。服用を續ける中に、苦しみ拔いて來たあの恐ろしい痛みがすつかり止み、膿も知らぬ間に消えて、一番心

配してゐた淋糸も完全になくなつたのです。それで陽氣の變り目にも少しも再發の心配もなく、毎日元氣で勤務して居ります。

淋病に惱む方々の御參考迄に、アラヰ淋藥御希望の方は、東京淺草吉原遊廓内　京町アラヰ藥局（振替東京四五七七四番）又は東京小石川音羽町講談社代理部（振替東京六六二九番）へ御注文になれば密送してくれます。藥價は、小二圓、中三圓、大五圓、家庭用十圓、送料内地十五錢、海外四十二錢です。

淋毒に惱み拔いた私達は斯うした治療で救はれた

德島縣　西岡○○代

私は一昨年の三月、二十六歳で人妻になりました。家庭生活に入つて間もなくでした。急に思ひもかけぬ嫌な下り物があり、それが毎日續きました。初めの中はこしけ位ゐに思つて居りましたが、その中に下腹から内股にかけて引吊るやうな痛みと惡臭の下り物に日夜惱まされるやうになりました。

心配の餘り醫師の診察を受けました處、はじめて良人の淋毒に感染したことが分り、その時の驚きに氣も顚倒せんばかりでした。實は良人も内密で苦しみ、種々の賣藥療法を行つてゐる事を打明けてくれました。

それからは一日も早く治さうと決心し乏しい生活の中からいろ／＼の藥を買ひ求め手當を致しましたが病狀はだん／＼惡化するばかりでした。そこで良人と相談の上、私は實家に歸り別々に治癒する事になりました。母もこの事を知り、非常に驚き涙ぐましい迄の御心配も何の効果もありませんでした。

處が歸郷十六日目の夜でした。突然良人が訪ねて參りまして『これは有名な吉原遊廓のアラヰ淋藥だが私も迚も効いたので、早速知らせに來た』とのこと、喜び勇んで服用はじめました處、段々と効果が現はれ、痛みと膿の止まつたのには自分乍ら不思議な位ゐでした。これに力を得て二人共なにもかも忘れ服み續けました。お蔭で、今では苦惱も一場の夢物語りとなり、再び明るい家庭となることが出來ました。

【選者附記】

吉原のアラヰ淋藥と云へば、今日では知らぬ人がない位、一般に普及されて居ります。然も數多い患者を實際に治癒して來た永年の經驗上から評判を高めて居る藥です。未だ御存知ない方でいろ／＼の手當に失敗した方は最後に是非一度お試しになる樣お奬めします淺草の吉原遊廓内で開設以來信用益〻高く、今では遠隔の地からわざ／＼訪ねて來る人が日に多きを加へて居ります。

因に藥價は、小二圓、中三圓、大五圓、家庭用十圓、送料は内地十五錢、海外四十二錢です。御注文は、東京淺草吉原遊廓内　京町アラヰ藥局（振替東京四五七七四番）又は、東京小石川區音羽町三丁目講談社代理部（振替東京六六二九番）へお申込下さい。

犬娘

林不忘

志村立美画

四

この寒空に、裾の破れた袷を端折つて、尻切れ草履を突つかけたところは、とんと、傘を忘れた五段目の定九郎――色の蒼白い、切れ長の眼じりのぴんと撥ね上つた、二十歳ばかりの若侍です。笑ふと、片靨があく。それも、この侍の場合は、すこしも嫌味でないどころか、ぞつとするやう

な、何ともいへない凄味をさへ伴つて、
『ひでえ眼に合はしやあがる。いやもう、話にも何にもならねえのさ。』
　無頼漢のやうな言葉だ。さういつて、常憲院お瀧、鉢割れ三吉をはじめ、三四人の一座をじろりと見まはしながら、
『暫時、匿つて貰ひたい。』
　急に、さむらひの口調だ。何とも會體の知れない若侍――。
　休んだら、そろそろ出かけようか――と言ひあつてゐるところへ、矢庭に背ろへ人が降つて來たんだから、みんなぴつくりした。
　お瀧姐御は、流石にきつと立ち直つて、

『山の裏道づたひに旅をしてゐるところを見ると、はゝあ、さてはお前さん何だね、世間の狹い身體だね。』

菅笠に片手をかけて、ぢつと侍を見詰める。白いふつくらした頬に、淺黄木綿の緒が深く食ひ込んでゐる。

こなたは、びつくりするかと思ひのほか、例の靨を浮かべて、にやりと笑ひ、

『お手の筋だ。はゝはゝゝ、顏にでも書いてあるかな。』

とつるりと顏を撫でる。憎いほど落ちつき拂つてゐます。

『へん、馬鹿におしでないよ。蛇の道あ蛇つていふぢやないか。』

『いや、恐れ入つた。實は、京都のはうですこし暴れ過ぎてな、お前達の言葉でいへば、やばい身體になつたので、ちと足を拔いて餘熱を冷まさうと、江戸へ下る途中なのだよ。』

言ふことを聞くと、まるで斬り取り强盜でも働いて、岡つ引きに追ひ廻されてゐる安手の浪人崩れのやうですが、どうして何うして、この侍は名を服部左馬之介といつて、京おもてで鳴らした水戸脫藩の勤王の志士――しかも、年齡の若いに似ず一刀流の劍術が達者で、當時、暗殺の名人と言はれた人斬り左馬之介。

幕府を倒すには、江戸へ出て、要路の大どころを片つ端から、この、腰なる來國治の血煙りに引つ包むに限る――といふんで、單身、物情騷然たる京都をあとに、ぶらりと旅を進めて、今この薩埵峠へさし掛かつたところ。

服部左馬之介は、にやにやしながら、お瀧らへ向つて言葉をつなぎ、

『夜拔け道を步き、晝は山中に寢て、こゝまで來たのだが、今この上の藪原に高鼾をきめ込んでをるとな、いや、さすがのおれもびつくり敗亡よ。出しぬけに、何匹とも知れぬ犬のむれが、吠えかゝつて來た――。』

『あら、犬が――？』

とお瀧と三吉達は、顏を見合はせる。

『うむ、おれの身體には、生血のにほひが滲み込んでをるとみえて、京都でも、よく犬には吠えつかれたものだが、いま驚いたのは、それだけぢやあないのだ。その犬どもが襲ひ掛かると同時に、すぐ近くに、突然多勢の侍があらはれて、わあつわあつとおれを驅り立てる仕末よ。こゝまで手が廻つてをるわけはなし、何にしても大仰な騷ぎだ。さつぱり譯がわからん。』

『三吉！　お犬さん達が何かはじめたとみえるよ。さあ、みんな、かうしちやあゐられない。早くおいで！』

とお瀧は、もう左馬之介には眼も呉れず、いきなり乾兒たちを促がして、駈け出さうとするから、左馬之介はちよつとあわてゝ、

『おいおい！　不人情なやつらだな。おれを一人ぼつちで殘して行く氣か。』

『だつて、お前さんは初めつから一人ぢやあないか。見ず知らずの人に、不人情呼ばはりされる覺えはないよ。』

『いや、待て！　おい待て！　今こゝでお前たちに見捨てられちやあ、おれは野垂れ死にせねばならぬ。決して迷惑は掛けぬから、よこしの間、仲間へ入れてくれ。』

呼び止められて、お瀧は不思議さうに振り返つた。

『おや！　仲間入りをし度いなんて、お侍さん、あたし達が何をする人間だか、お前さんにはお判りかえ。』

『いや、確とはわからぬが、かうして人相風體を見渡したところ、どうせ碌な業體の者ではあるまい。』

『ま！　御挨拶だねこれは、ほつほつほ。』

『お手の筋だらう、はゝはゝゝ。』

『次ぎは、蛇の道は蛇と來るんぢやないの。さつきの仇敵を取られたやうなものだね、ほゝほゝゝ。』

とお瀧姐御は、菅笠を傾けて、艶やかな眼を美男左馬之介の顏に凝らしてゐたが、

『いゝだらうよ。江戸名物の犬使ひ、常憲院お瀧の一座に入れて上げようよ。』

い、につと白い齒を見せて、笑ひました。

左馬之介は、ぴよこりと一つ頭を低げて、

『さつそくの承引、かたじけない。』

と、赤茶けた紋つきのふところ手のまゝ、のそのそ尾いて來ようとする。

ところで、この姐御のお瀧に、日頃から秘かなる戀心を寄せてゐるのが、あの一の乾兒、鉢割れの三吉兄哥です。今の先、この水際立つた若侍が現れて、姐御と口を利きはじめた時から、三吉の野郎、内心穩やかでなかつたのですが、たうとうこの侍を一行へ加へることになつたのですから、忽ちぷうつとふくれ出して、

『姐御のお言葉だが、そいつあ考へものでげす。この、何處の馬の骨かわからねえ馱さんぴんを、常憲院姐御のお身内にするなんてこたあ、第一にこの三吉が不承――。』

そこまで言つた時です。

『えゝいつ！』

と鋭い叫びが、左馬之介の口を走つた。同時に、むらさき色の細い光りが、繩を投げるやうに、さつと眼の前に躍つたかと思ふと、

『ひやあつ！』

鉢割れ三吉、物の見事に頭を斷ち割られて、それこそ、ほんたうの鉢割れになつたに相違ない。あたまの素てつぺんから恐

しい聲を噴いて、その場へのけ反つてしまつた。

と見る、冷えびえとした山の空氣を一撫で刷いた來國治は、何ごとも無かつたかのやう――もう、ぴたりと左馬之介の腰へ歸つて、

『三吉兄哥といふか。おれも、服部左馬之介では固苦しくていかん。これから、馬さんと呼んで、せいぜい心易く願はう。』

と左馬之介、ぐつたり地面に俯伏してゐる三吉の襟がみ取つて、

『さあ、三吉、起て。いゝ若えもんのくせに、何だ。腰が抜けたか、立てねえのか、はゝはゝゝ。』

笑ひながら、死人のやうな三吉を引つ立てようとする。

左馬之介が一刀を抜いた拍子に、お瀧を除く一同の者は、わつ！と驚きをめいて逃げ散つたが、この時、怖なびつくり引つ返して來て、怖ごは三吉を覗くと、なに、斬られたんぢやあない。髷の元結がぷつつり切れて、さんばら髪になつたゞけのこと――水戸脱藩の劍客服部左馬之介、ちよいと凄いところを披露に及んだんです。

亂髪になつた三吉は、すつかり斬られた氣で、斷末魔の跪きよろしくのたうちまはるなどとは、時にとつて、飛んだ座興で御座いました。

左馬之介の馬さんは、にこにこして、三吉をひき起して土を拂つてやる。

『なあ、四海同胞と申す。三吉とやら、これからこの馬さんを粗畧に扱ふでないぞ。』

と言つたが、冗談ぢやない、美少年の若侍に、こんな怖ない隱し藝を見せられたんぢやあ、今後、金輪際粗畧には扱へません。

お瀧は、惚れぼれと左馬之介を見なほして、

『ちよいとさ、顔に似合はない好い腕だね、お前さん。』

『いや、少々大人氣なかつた。だが、おれがゐる以上、事があれば何時でもこの來國治に物を言はすから、安心してをるがよい。』

『ほんとにねえ、大船に乘つた氣で、これからの旅が出來ようといふもの――だが、その服装ぢやあ眼について困るねえ。』

『うむ、侍姿では、不可んと申すか。』

『もし、馬さんと言ひなすつたね、あつしのこの胡麻柄唐棧を進上しやせう。』

といふ心ぼそい聲がするから、振りかへつて見ると、やつとこさごそこそ助け起された鉢割れ三吉が、えへらえへらお世辭顔に、早や三尺に手をかけてゐる。

『なに、三吉、その袷をおれに呉れようといふのか。』

『へえ。お氣味が惡う御座んせうが、お受け下さりやあ、三吉

こんな嬉しいこたあござんせん、へえ。』
『それは奇特なことである。だが、其方は寒くはないかの？』
『きとくだか斬り得だか知らねえが、いやなに、こつちのことで——へゝへゝゝ、命の恩人でごぜえすもの。なあに、あつしやあ寒いこたあ御座んせん。だが、若しお許し下さるなら、その、旦那の御紋つきを拜領してえもので、へつへつへ。』
『旦那は止せ。この着物か。お安い御用だが、其方こんな物を着て道中が出來るか。』
『裏つ返しにして着やす、へえ。』
『はゝはゝゝ、それは思ひつきだな。』
お瀧は、ほかの乾兒子方へ、ぢろりと眼をやつて、
『手甲や脚絆も、どこかその邊から出さうだね。
嫌な催促です。言ふにや及ぶ。この氣はひを看て取つて、もぞもぞ自分の物を外しかけてゐた子分達は、ぎゆつと互ひに肘を突つき合つて、われ勝ちに博多の帶を解く、その上へ結ぶ上締めを差し出す、何にもない奴あ、面目なさゝうに、おでんの鍋から引き上げたやうな手拭ひを獻上する——。
その間に、左馬之介の馬さんと三吉は、着ものを交換して、馬さんは唐棧の尻つぱしより、その上へ、色いろと奉納の品々を身につけたところは、まるで燒け出されの罹災民が義捐の古着にありついたやうですが、馬さん濟ましたもので、
『いや、人の情けはあたゝかい。』
なんかと、勝手なことを言つてゐる。
かうして見ると左馬之介の馬さん、さむらひのいでたちよりも、この、世話に碎けたやくざの拵へのはうが、よつぽど板についてゐる。脇差しは三吉へ貸し與へて、一本刀の落し差し、浪人髷を器用に隱す吉原被り、もともと江戸つ子肌の、傳法な人柄ですから、一段と立ちまさつて見える。
『おう、そくそく出かけようか。』
と好い氣持ちさう。言葉まで鐵火に、さつさと先に立ちます。
こちらは三吉、野暮武士のことを一口に言ふ淺黄うら、その裏を出して紋つきを引つかけたところは、何のことはない、案山子に夕立ちが吹つかけたやうで、そのしほつ垂れた樣子といつては、義理にも賞められません。博奕に負けて、すつかり脫がせられたやうな恰好ですから、本人すくなからず悄氣てしまつて、自暴の大聲、
『姐御つ！　何を見惚れてゐなさるんで。ちつ！　面白くもねえ。』
『あいよ、嫌な三吉、何も見とれてなんかゐやしないよ。』
と、ぼんやり左馬之介の姿に氣を取られてゐたお瀧は、ぱつと三吉に肩を叩かれた途端、さつと顏に、時節外れの紅葉を散

らしたから、さあ、乾兒の野郎ども、眼ひき袖引き、
『えへん！』
『えつへん、はあくしよつい！』
いや、そのうるさいこと、五月蝿いこと。
お瀧は振り返つて、
『どうしたのさ、みんなばかに騒々しいぢやないか。』
『へえ、ちよいとその、風邪を引きやしてね。』
『戀風をね、――。』
『何だつて？』
『いえ、なに、薩摩颪は寒うがす、へつへつへ。』
などといふわけで、こゝに、この下司なすがたに身をやつした水戸浪人、服部左馬之介を新入りに加へて、この常憲院お瀧

の連中が、わいわい言つて薩埵峠の奥ふかく分け入りますと、あの、松平齊親一行の猪狩りは、今が盛りと見えて、樹々の葉をふるひ落す勢子の聲々、遠く近く、消魂しい犬の唸り。——

二

狩りの面白さについ引き込まれて、お供の侍達は、何時しか三つのお駕籠を置きざりに、大きな輪をゑがいて、山ふところ深く踏み込んで行つた。

、、、、

とうとうと猪を狩り出す人々の聲が、樹々のあひだに反響し

て、峰々を吹き渡る木枯らしの音、大浪のやうな木の葉のざわめき、遙かの笹原、さては、曲りくねつた山道づたひに、黑塗りの陣笠が、ちらほら見えたり、隱れたり――遠くに、また一しきり犬の聲が起つたのは、きつと又、猪が追ひ詰められたのであらう。

薩陲峠そのものが、今にものそりと動き出しさうな騷ぎ。

決して殿樣、奧方、お姬さまの三人を、忘れたといふのではない。が、そこが、一同、山狩りの興味に引きずり込まれたのと、また一つには、後から思へば、この明石藩の侍一統、眼に見えない何者かに、取り憑かれてゐたのだと言ふほかはない。

松平齊親は、お銀の方と立ち並んで、芝居のやうに小手をかざして、

『やりをるのう。』

『ほんにまあ、家中の者どもの賴母しいこと。まるで軍のやうで御座ります。』

眼を細めて、齊親が遠くを見やりますと、遙か向うの山肌に、白い幕を掛けたやう。そこだけ一個處、さあつと明るい雨が降つてゐる。そして、その隣りの雜木林には、陽がかんかん照つて――日照り雨。

山の魔術。山の天候は變りやすい。一口にいふお天氣者、いま笑つたかと思ふと、もう泣いて、折りから、かたはらの大樹の梢を叩いて、ぽつり、ぽつり――おや、雨だ。

『もう好い加減に引き揚げればよいに。うむ、降つて來た。喜尾子が濡れはせぬかな。』

姬の駕籠を振り返つた齊親、

『喜尾子、これ、喜尾子！――おゝ、喜尾子が居らぬ。喜尾子がをらんぞ。』

『えつ！　ま！　喜尾子が！』とお銀の方も、よろめくやうに駕籠へ走り寄つて『あつ、ほんとに、駕籠は藻拔けの空。どこぞ其處らに立つて、狩りに見とれてゐるのではありますまいか。喜尾子や、喜尾子や！』

四五人殘つてゐた侍たちも、はじめて氣がついて、

『おゝ、姬が、姬君がをらぬ。お姬樣のお姿がない！』

『やゝつ！　確かに今まで、こゝにお立ちなされて、狩りのありさまにお手を打つて、甚く御滿足の御樣子でしたが。』

『女どもは何をしてをるかつ！』

齊親は烈火のやうに、喜尾子姬附きの老女や女中どもを、睨めまはして、

『何といふ手落ちぢや！　早々手分けをして搜せ！　早うせぬかつ。』

命じられるまでもない。近くの侍と女中たちは、一度に、ばらばらつと草を踏み分け、立木を縫つて、四方八方へ――。

『お姫樣あ！　何處にゐらせられます、お姫さまあ！』
『姫君い！　姫君！　山へお這入りなされては、お危なうござります。姫君！』
『ほんたうにまあ、何うしたらよろしうござりませう。お姫さまあ！』
呼ばはる聲々が、そこにも、こゝにも、長く尾を引いて散つて行く。
『あゝ、喜尾子は何處へ――もうもうわたくしは、居ても立つてもゐられませぬ。』
とお銀の方は、顏色を變へて、おろおろと立ち迷つてゐる。子煩惱の齊親です。もう狩りどころではない。口を結び、眼を血走らせて、狂氣のやうに邊りを睨みまはす其の横顏に、銀の針金のやうな線をゑがいて、雨、雨、雨、雨――。
『殿、お駕籠へ。』
心利いた一人が、傘の袋を拂つて、さしかける。
『余よりも喜尾子が濡れるわ、馬鹿め！』
谷に、澤に、嵯道に、聲を嗄らして喜尾子姫を呼び立てる聲聲が、雨にこもつて、もの凄くひゞいてくるのみ――しとしとと草を打ち、土をたゝく大粒な雨の音。いつしか、本降りです。
と、今、齊親に傘をさしかけた侍が、ふと聞耳を立てゝ、
『狩りの者どもが、歸つてまゐるやうで御座りまする。』

成程、かすかに遠くから、だんだん近づいてくる犬の聲。忽ち、それは、潮の押し寄せるやうに、山をゆるがせて迫つて來て、同時に、多勢の人聲、跫音、何やら叫び交す興奮した話し聲がする。と見る間に、前の笹藪をがさがさと押し分けて、一同の引き揚げてくるのが見えて來た。一二頭も猪を仕留めたか、人々は意氣昂然たるありさまで、おびたゞしい犬のむれが、侍たちの間を縱横に吠え狂ひながら、一しよにこつちへやつて來る。
狩りの結果などは、何うでもいゝ。喜尾子は無事に發見されたであらうかと、齊親とお銀の方が、眼を凝らして待ち設けると、先頭に立つてくるお氣に入り、笹野惣三郎の腕に、何やら、大きな花のやうな、派出な色をした物が抱かれてゐるのが、齊親夫妻の眼に這入つた。犬の群れは、その、先頭に立つ笹野惣三郎を取りかこんで、その手の中をしきりに振り仰ぎながら、憂はしげに吠えて來るのだ。一行が近づくにつれて、二三人の者が駈け拔けて來て、焦立ち切つた齊親の前に小膝を突き、蒼白い額の汗をふき拭き、
『申し上げます。お供の者一同、面目次第も御座りませぬ。いつの間にやら姫君が、犬の後を追つて、ちよろちよろと狩場へお出ましに相成り、手負ひ猪にお觸れ遊ばして、ちよつとお怪我を――。』

齊親の顏から、さつと血の氣が引いた。
『な、なに？　喜尾子が、喜尾子が怪我をしたとな――？』
そのあひだに、犬に圍まれた笹野惣三郎は、まだ怯えてしいいいあくり上げてゐる喜尾子姫を抱いて、とつとと小走りに殿の前へ進み寄つた。顏色を變へた侍達と、あの、後から搜しに行つた女中どもが、草の葉のやうに靑くふるへて、附きしたがつてゐる。
齊親夫妻のおどろきと、やがて兗れない殿樣の怒りに對する、お供の者たちの恐怖とで、瞬間、しいんとなりました。
齊親は走りよつて、
『おゝ、喜尾子！　怪我をしたさうぢやな。肩とやら言うたが、何うぢや、痛いか。うむ、血が滲んでをるわい。早く手當を。』
惣三郎が、そつと地に下ろした喜尾子姫へ、お銀の方はまろび寄つて、
『まあ！　ほんとに血が！　おゝおゝ、痛かつたらうねえ。憎い猪だこと。何うしてまたそんなところへ行つたのです。お守りする者が眼を放すから、こんなことになるのですよ。』
ぢろりと流す奧方の眼を受けて、老女や女中どもは、一せいに面を伏せた。きつとこの首は無い。今にも殿樣のお手討ち、と、安き心もありません。
お行列に加はつてゐる醫者が飛んで來て、さつそく傷の手當。見ると、大したことはない。猪の牙が、運よく橫にかすつたのだらう。白い柔い肩の肉が破れて、牡丹の花のやうに血が流れてゐる。
『跡が殘らねばよいが。』
覗いて見て、痛々しさうに齊親が、
『これ、喜尾子、何故駕籠を離れて、獨りでさう遠走りしたのぢや。うむ？』
泣いたあとの白い顏で、喜尾子姫は割りに平氣です。それどころか、嬉しさうに、
『だつて、おいで、おいでといつて、呼びに來たんですもの。』
齊親は不思議さうに、
『呼びに來た？　誰が。』
『源內が。』
父齊宣の死に絡まる、あの獵師源內を思ひ出して、齊親は、はつと、みる見る蒼白な顏になつた。
『げ、源內が？　あの、源內――な、何を言ふ。どこにその源內とやらが居る。』
『ちやんとこゝにゐるぢやありませんか、源內が。』
『えつ！　こゝに？　何處に。お！　これか。こ、これ、喜尾子、しつかりせい。これは犬ではないか。』
『えゝ。斑犬ですわ。この大きな犬は、源內つていふの』

『これつ！　喜尾子！　誰が左樣な名をつけた。』

『だつて、この犬がわたしの傍へ來て、名をつけて下さいつていひますから、わたし、源內とつけてやつたの。』

『何奴が源內といふ名を、其方の耳に入れたか。』

『誰からも聞かないの。わたし、考へたら、ひとりでに源內といふ名が、あたまに浮かんだんですもの。源內、よい名でございませう？　この犬によく似合つた名前ねえ。お父樣、お母さま、さうお思ひになりませんの？』

『うゝむ！　つう――！』

額を押さへて呻いた齊親、たゝた、と二三步あと退りして、

『ぶるゝ！　寒氣がする。行列をやれい！　出立ぢや、出立ぢや！』

喚くがごとく下知を下した瞬間、

『おう、お殿さんえ、お姫さんを助けたのあ、おいらだぜ。禮のひとつも言つて貰はうぢやあねえか。』

　といふ、齒切れのいゝ聲が、突如近くに湧いて、人々の制める間もなく、その喜尾子姬のお駕籠のそばへ、のつそりと寄つて來た影がある。ごま柄唐棧の尻端折りに、あたまを包む吉原かぶり――。

三

水戶脫藩の勤王の志士、服部左馬之介、今は、計らずも常憲院お瀧の一味に紛れ込んで、假りの名を馬さん、手慣れの來國治を、一本ぶつ差した腰を搖すつて、

『かう、お殿さん、三つ葉葵の御紋から察すると、御一門の大身らしいが、何ぼお公方さまの御親類でも、子は可愛いだらう。えゝ？　子供が可愛かつたら、その子を助けたこの兄哥に、何とか挨拶して行きねえな。』

　と、手拭ひを鷲摑みにして、ぬつとその場へ現れたところは、なかなか何うして無賴漢ぶりが板についてゐます。

笹野惣三郎はきつとなつて、

『しつ！　これ、しつ！　直きぢきに口を利くさへあるに、何といふことを申し上げるのだ。無禮者つ！』

刀の柄に手をかけた。一同も、驚破とあらばわれ勝ちに斬り捨てん勢ひ、ばらばらつと馬さんを取りかこんだ。

この時馬さんすこしも騷がず、

『はゝはゝ、あつはつはつは、それが、お姬さんの命の恩人に對する禮か。いやさ、さむれえてえ者あ、恩を知らねえのかよ。』

憎い葵御紋の御連枝だと思ふから、勤王倒幕以外何ものもない、年若の馬さん、次第によつては一暴れあばれるつもりで、一層ぽんぽんやり出す。

ほかに名もあらうに、喜尾子が、犬に源内といふ名をつけた。何も知らない、幼い彼女の頭から、何うして源内といふ名が出たのであらう——と、齊親は、恐怖に似た感情に捉はれて、先刻からまだ呆然と立ちすくんだまゝで、折りから飛び出してきたこの異樣な下郎が、恐れげもなく、憎々しげに切るたんかも、よく耳に入らずに、不思議だ、無氣味だと、しきりに首を傾げて考へこんでゐると、このとき初めて、喜尾子姫が嬉しさうに口をひらいて、馬さんへ、

『おゝ、ほんたうにお前は、さつきの人！　ねえ、お父さま、わたしが犬の源内に伴れられて、狩場のはうへ參りますと、あの、向うに見える森のかげで、傷を負つた一匹の大きな猪が駈けてきて、わたしへ飛びかゝつて來たの。その時、この人が横あひから走つてきて、その猪と組打ちして、わたしを助けて呉れたの。お父樣、御褒美をやつて下さいませ。』

子供の口ながらも、如何に危機一髪であつたかは、充分想像されるのだ。そこを救つてくれたのだから、齊親は、氣がついたやうに馬さんへ向つて、

『其處な下郎、禮を言ふぞ。』

惣三郎が、馬さんのお尻を突ついて、

『お直きおぢきのお言葉ぢや。土下座をして、かたじけなくお受けせい。これ、立つてをるやつがあるか！　此奴——！』

『あゝ宜い。咎めるな。一粒種の姫を、よう助けてくれたな。何なりと望みの品を取らせる。言へ。』

『へゝへゝゝ、禮を言つて貰やあ、それでいゝんだ。ほうびなんざあ何にも要らねえ。へゝへ、播州明石、八萬石のお大名に、見事に頭を低げさせたぞ、ふはゝは。』

『なに？』

『いや、たつた一つ望みがありやす、へえ。いま聞いてゐりやあ、このお姫さんを浮かうか一人で出した罪で、そこらのお女中の首が、二つ三つ飛びさうでげすが、頼みといふのあ他でもねえ、その女中方の首を繋いでもらひてえんで。』

『うむ、心地よい男だ。いかにも女どもは許して遣さう。下郎つ、其方には酒を取らせる。惣三郎、酒を持て。』

と聞いて、馬さんはぱつと片手を上げ、

『うんにや、待つておくんなせえ。おらあ、徳川の酒あ飲まねえ。』

『な、何だと？』

『お殿さんは耳が遠いのかね？　徳川の酒あ呑まねえつていふんだよ。』

言ひも言つたり！　ぴたりと、邊りに靜寂が落ちた。嵐の前のしづけさ。その中に聞えるのは、山をこめる雨の音と、柄を叩いて氣負ひ立つ藩士達の、荒い息づかひと——やがて、青白

く冴え渡つた齊親の含み笑ひ。

『うふ、ふゝふ、うむ！　小氣味よい一言。其方は、只の下郎ではないと見た。さうか、德川の酒は嫌ひか。』

『へえ、どうもね、性に合はねえんでね。』

『宜し！　然らば、德川の刀を取らせる。前へ出ろ！』

『おつとつとつと！　へゝへ、その手にや乘りやせんよ。人が惡いね、殿さんも。』

『默れつ！　姫を助けた禮は禮。只今の雜言、聞き捨てにはならぬ。惣三！　斬れつ。』

『上意！』

待ち構へてゐた笹野惣三郎、据ゑ物斬りでもするつもりで、さつと拔き討ちに――雨を拂ふ三尺の稻妻。

馬さん、眞つ二つに――と思ひのほか、刀の起す風三寸の下を、だつと後ろへ潛り拔けたから、惣三郎の刀は、白い雨脚を横に斬つたゞけ。力あまつて、游ぐやうな恰好でよろめいてゐるところを、

『えゝいつ！』

と馬さん、ぱつと片足上げて蹴つたから、彈みを食つた惣三郎は、ぺたんと土に兩手をついて、つい道場の癖が出て、

『參つた！』

とは、あまりだらしが無いやうだが、これは惣三郎を責めるはうが無理。何しろ相手は、一日に三人人の血を浴びないと、御飯がまづいといふ人斬り左馬之介だ。

と、見る！　何時の間にかその左馬之介――いや、馬さんの手に、雨を受けて紫に光る來國治の一刀が、鏡の棒のやうに、すうつと引き拔かれてゐる。馬さん、いよいよやる氣と見える。

『江戸で閣老を斬るのも、この薩陲峠の山中で田舍ざむれえを斬るのも、同じこつた。面白え。來いつ！』

あまりの早業に、度胆を拔かれた齊親は、かつとこみ上げる怒りに、

『慮外者つ！　者ども、掛かれつ！』

押つ取り圍んで斬り伏せようと、一同わつとをめいて、馬さん目がけて劍の雨を降らせた。

『えい！』

『おゝつ！』

『うぬつ！』

刀と刀の觸れあふ響き。踏み鳴らす多勢の跫音。

『こゝは足場が惡い。道のはうへ誘き出して――。』

その途端、馬さんと斬り結んでゐた侍の一人が、突然大聲を張り上げて、

『やゝつ、この犬！　おゝ此奴、この下郎に味方するとみえ

る！』

その聲で氣がつくと、あの源内といふ斑犬が、牙を剝き、唸り聲を發して、その侍へ飛びかゝつてゐる。すると、それが合圖のやうに、無數の犬の群れが、この斬り合ひの場へ馸けこんで來て、縱橫無盡に走り廻りながら、明石藩の侍たちへ向つて必死のいきほひで躍りかゝるのだ。

『しつ、畜生！　厄介な犬めら！』

『しつ、痛い！　こいつは耐らぬ。』

馬さん一人を持て餘してゐたところへこの犬の援軍。そればかりではない。何時の間にか、あの常憲院お瀧、鉢割れ三吉の一行が、この亂鬪の中へ割りこんで來て、

『そら、白、白つ！　その侍の向う脛へ、嚙みつくんだよ。』

『おしおし！　そいつの咽喉へ食ひつけ！　さうだ、さうだ。へつへ、達者なもんだね。』

コーチャアが現れたのだから、いや、侍達は驚いた。足と咽喉と、一しよに用心しなくてはならない。

藩士達はすつかり崩れ立つて、明石侯のお行列は、滅茶々々になつてしまつた。と、すこし離れたところから、怖ごはこの騒ぎを見てゐた、奥方お銀の方が、突如、金切聲を振り絞つて、

『あゝあれあれ！　喜尾子が攫はれて行きます！　悪者が喜尾子を抱い

て――！』

その指さす方を見ると、正にその通り！馬さんの紋つきを裏返しに着た、あの鉢割れの三吉兄哥が、喜尾子姫を横抱きに引つか〻へて、森の奥を山のはうへと逃げこんで行く。その後には、お瀧姐御、手下の者ども、左馬之介の馬さん、それから、多勢の犬のむれが前後左右を固めて、一行早くも引き上げて行く樣子だ。

犬どもに氣を取られてゐるうちに、喜尾子姫を奪はれてしまつたのです。

齊親は地團駄踏んで、

『それつ！　追へ、追へ！　姫を取り返せ！』

が、追ひかけようにも、山の中の一本道。逃げてゆく奴らは、山窩同然で、人間もまるで犬のやうに足が早い。鐵砲だ、弓だと騒いで、飛び道具を使はうとすると、三吉はひよいと喜尾子姫を前に突き出して、

『うわあつ！　鐵砲打つと、このお姫さんに當たるぞうつ！』

遠くで叫んでゐる。姫を小楯に取られては、こつちは、弓も鐵砲も狙ひがつけられない。それと見て、馬さんやお瀧達が、遙かの岩角に立つて、勝ち誇つたやうに手を振つてゐるのが、豆のやうに小さく見えます。あれよあれよと言ふばかりで、施す術もないうちに、喜尾子姫の身體で矢彈を封じながら、常憲院の一座は、山を踏み越えて見えなくなりました。凱歌のやうな犬の吠え聲が、だんだん遠ざかり、やがて山奥の彼方に消え去るのを、齊親とお銀の方は、どんな心で聞いたことであらう！

雨は、まだ、咽ぶがごとく降つてゐます。ひとり娘を奪はれた、松平齊親の涙雨。――だが、この山の雨風にも彌增して、世は正に明治維新といふ、近代日本を生まうとする陣痛の大雨、大風。

行列をまとめて、泣く泣く故郷明石へ歸つた齊親は、手の中の玉を奪はれて、鬱々として樂しまなかつた。

犬のむれに呑まれ去つた喜尾子姫は、時しも、維新といふ歷史的な大嵐に紛れて、探し出さう手だてとてもなかつたのである。

× × ×

この父親齊親の嘆きの淚のうちに、早くも十一年はたちまし

新滿洲國寫眞大觀

東洋平和の基礎を固めた滿洲・上海兩事變及滿洲國の國狀、風物を如實に語る粒選りの貴重寫眞數百葉を收め之に正確、懇切な解說を附した好個の大記念帖、尙卷末に兩事變の經過顚末と滿洲國の全手とを興味深く記述した附錄あり。四六倍判クロース裝の大豪華版、每戶一册必備の大寫眞帖！一圓五十錢（送料二十錢）

發行所　大日本雄辯會講談社

た。夢のやうな維新の嵐が通りすぎて、走馬燈のやうに世は移りかはつて、力強く踏み出した新日本、世はまさに明治の御世です。

あの薩陲峠の猪狩りのとき、犬遣ひの常憲院お瀧たちにさらはれた喜尾子姫は、一たい何處に何うしてゐたであらう。

こゝは、淺草——奥山。

覗きからくり、砂文字、パノラマ、チャリネの競馬、どつこいどつこい、乞食芝居などが立ち並んで、さあ、入らはい、入らはい、代は見てのお戻り——。

見世物小屋の前は、織るやうな人通りです。中でも一番人氣をよんで、東京中の評判になつてゐるのは、この犬芝居の一座。

莚がけの小屋の前に、赤いちやんちやんこを着た犬の役者たちが、ずらりと顔見せして、出し物は忠臣藏五段目、山崎街道。

幟が立つてゐる。犬芝居常憲院一座とある。その中に一本、大きな幟に、白く抜いた文字は、喜尾太夫江——ひいきより。

（つづく）

女役者の喜尾太夫とは果して何者の變身ぞ！　明石六萬石松平家におほひかぶさる妖氣、身の毛もよだつ怪異因縁物語は、次號に於ていよ〳〵最高潮、萬人の涙をしぼる愁嘆場に移る、御期待を乞ふ。

リウマチ 神經痛自宅療法

原因の體内に停滞する老廢物を淨化して治療する漢方療法

一口にリウマチ、神經痛、せんきと申しましても、肉を抉り錐でさす樣な激痛に、夜も寢られない重症から、動かせば關節が痛み、歩くと筋肉が打身の後の樣に疼痛する難症もあり、肋間や脊腰坐骨に壓痛する慢性症、尚一層の難重症になりますと、五年も十年も足腰立たぬものさへ往々にあります。

この病氣の原因は體毒、淋毒、梅毒、瘡毒その他血の檢査をしても分らない老廢物や、種々の惡熱毒素が淋巴腺や骨關節に結滯する爲に筋肉組織の抵抗力が減退し、それが原因で冷えたり打つたり使ひ過ぎたりして動機をつくつた所から腫れたり痛み出すものでありますから、この淋巴腺や骨關節に結滯する原因の血液中に含まれた構病素を淨化し、血液中に抗毒力を旺盛にさせなければ中々治り難いのであります。この血行增進、血液淨化によつて治療する漢方療法は合理的に自宅で治療する事が出來るのであります。當院では一昨年本誌に此漢方治療法の公開を發表して全國の患者にお傳へして居ります。（全國から寄せられたる禮狀や感謝狀の事實と醫學博士や陸軍海軍々醫の種々の實驗書等は、直接御越し下さればお目にかけます。）　この病氣でお困りの本誌愛讀者には無料で詳しくお知らせ致しますから今スグはがきで申込んで下さい。

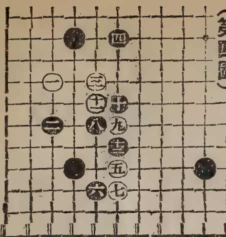
大阪府中河内郡布施町荒田　招福院

圍碁上達の急所

七段 瀨越憲作

前號に續き第四圖の白一乃至九、に對する黑の正しく嚴しい應手の研究。

（第四圖） 白一乃至黑八、は六子以上置く碁に數々現れる形であり、黑六、八、が從來定石とされてゐた。又白九と直ちにツケて封鎖を期するのは無理であり、黑は勿論一〇、とハネ出して挑戰すべく、白の無理を咎めるべきである。然るに黑一一、これが『筋違ひ』の惡手である爲に白の急所を衝く事が出來ない――前號はさういふ所迄でありました。本號では第四



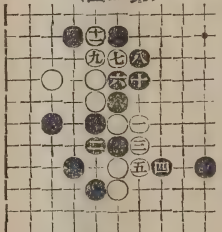
（第四圖）

圖黑一二、に次いで第五圖白一乃至一一となり黑の破綻に終る事、從つて第四圖に於ける黑一一、の筋違ひたる所以を先づ示し、更に第五圖黑四、六等の重ねて當を得ない次第を說いて、黑の正しい應手、白の急所を衝く筋を明らかにしたいと考へます。なほ途中『筋』又『形』といふ事に再三言及しますからその點に注意せられたく、且つ例圖はすべて八子の置碁を想定しましたが、九子は勿論六子、七子の碁でも下邊に黑の配置があれば適用されるものである事を附加へて置きます。

（第五圖） 第四圖に於ける黑一二、に續き白一、とノビ出す。この時黑は二の手で三、にオシ出す事が出來れば旨いけれどその不可能なるは第六圖に於て疑ひありません。黑四はこの手で直ちに一の一路上、をオスべく、然らば二、の筋違ひもその罪が大分輕くなる所であつた――第八圖參照。

黑六に至つてもなほ一の一路上、をオスべき形ではありますが同じくは四の手で單にオシたかつた。何れにせよ圖の如く六、と逆の方（一の一路上、をオスのと反對）をオシ白七、九及び一一、と好調に此處をツキ出され突破されるに至り、黑はこの白の鋒を留める由なく、初めの左邊の勢子の如きは

（第五圖）



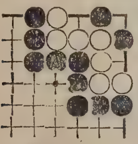
圍碁のことなら何でも來い

（問） 隅の曲り四目は死か生か？

この問題に關し東京市の豐岡政市氏滿洲の大作元訂氏高知縣の高橋氏その他多數の熱心家から解決を求めて來られました。仍つて本號は特にこの欄を擧げてその說明を頂くやう瀨越先生にお願ひ致した次第であります。

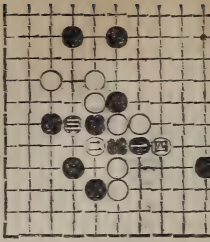
〔解答〕 七段 瀨越憲作

隅の曲り四目とは第一圖に於ける白の形がそれである。別に『劫づくし』とも稱へます。形に多少の相違がありまた外部の黑が斯く密接してゐず、即ち白にダメが明いてゐる場合、更に包圍してゐる黑自身が完全に活きてゐるかゐないか、等等の事情に依り實際の處理に際して



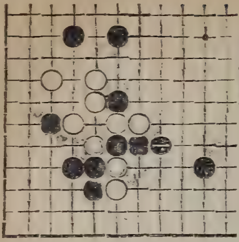
（第一圖）

完全に働きを失ひ術語に所謂腐つてしまつた姿であります。隅にさへ不安が無いとは言切れぬ狀態なので本圖白一以下を攻めるとしてもその充分なる效果は先づ期待されない。要するにこれは黑の破綻に外なりません。



(第六圖)

(第六圖) 前圖黑二の手で斯く一とオシ出す。白二及び四、のシチョウでは問題にならない。

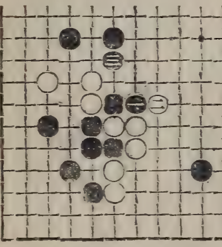

(第七圖)

それを避けて三にて二の一路下、をキリ白が三、とトッた時四、にノビキレば第七圖です。

(第七圖) 黑一子をウチヌイた白の勢力が如何にも大きく、孤立した白二子に活動の餘地さへ殘つてゐる。第四圖白九を矢張り成功せしめた姿であります。

(第八圖) 第五圖黑四の手で斯く一とオシ白二、ならば黑三、とナラブのです。二の一路下、に斷點を生じてゐるのが白にとつて以何に痛切であるかを思ふ。黑三と封鎖した方の白三子に生還の途なきは申す迄もありません。

本圖に加へるに第五圖の黑四白五、の交換を以てする時、その交換が全く有害無益のものであり、前述の二の一路下、の斷點の嚴しさを著るしく減殺してゐる事を深く思つて頂きたい。

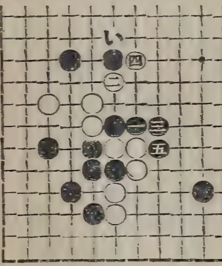


(第八圖)

本圖白二、の手で三、にコスミツケる筋はありますが、黑はそれに對し第九圖三、とノビキツて宜しい。

(第九圖) 白二黑三、が恰も前圖の黑三白二、の著點に相當する事を知ります。卽ち黑はこの二點の兩方を白に譲つてはならないので何れか一點を逃がしさへしなければよい關係である。

白四は勢ひ斯くハネざるを得ませんが、その時黑五、と密接してマガリ込み白五子を攻める。よし白五子が辛うじて眼形を得て活きた所で、それは勿論白の後手でなければならぬし、同時に隅の黑も治まるに違ひなく、從つて黑は完全に白を封鎖し一以下の厚壯を極めた勢力を以て中央の戰線に轉ずる事が出來るでありませう。さうなれば黑の萬歲である。黑いが何時でも利いてゐる點をも忘れてはなりません。



(第九圖)

要するに本圖若しくは前圖となれば既出第四圖黑一二、の筋違ひもその不當が大いに緩和される譯であつた——

卽ち黑は第五圖四、の手で直ちに本圖一、とこの方をオスべく第五圖に於ける黑四白五の交換の利は別としても

る幾分の差なきを得ませんが、道理からすれば結局第一圖の形に要約され、歸著するので、結論を先にすると『隅の曲り四目は死』であります。

先づ第一圖の形に於いて、白からは手の下し樣が無い、卽ち打ち樣の無い事に注意する。

黑からは然るに打ち樣があるどころか、この白を攻めて居る事が出來るのである。それには勿論極隅を、ある時機に第二圖の一、とツナギます。

(第二圖)

(第二圖) この黑一に對しても白が打ち樣の無い事は依然である。そこで再びある時機を見て黑は一の二路左、若しくは二路下、に打つて四目としその四目を白にトレよと命ずる事が出來る。白はトラざるを得ません。

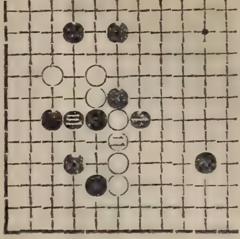
トッたらば黑は今度は直に、續いて第三圖の一、と打ちます。この時白は手を拔く譯に行かないので一の一路上へに打ち、それを次に黑がトツて第四圖の如き形となる筈であります。

(第三圖)

同圖六、は逆の方をオシたので筋違ひの不利を免れませんでした。

第四圖に戻り同圖黑一二、は第十圖一、でなければならぬといふ本論に入る。

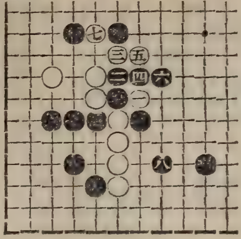
（第十圖）斯く一、とこの方からアテてこそ、第四圖の黑一〇、が嚴しく働いて來るのである。白二黑三、共に絶對として、次に白がどう打つても苦境を脱し得ない事を續く一一圖に依り確かめて頂きたい。



（第十圖）

換言すれば第四圖に於ける白九、の無理を咎めるのであります。

（第十一圖）前圖黑三、に續いて白一、とキッて見ました。



（第十一圖）

白七まで必然の運びですが、その時黑は構はず八、と打つて白四子に迫るがよい。一方、七の一路上を、オサへる手段は一旦保留して置きます。

斯く黑八、と打たれてはこの白四子に活路は先づ無い姿ですが、萬一後手で纔に二眼を保つといふやうな事ならば黑としては必ずしもこれを無理に屠らうとするに及ばず、後手で活かして差支へありません。活かしたが爲に得られる黑の外勢の强力、その厚みは絶大でありませうから、そこに滿足して先手を持つて七の一路上、をオサへ、今度はこの方の白を攻めて今言つた厚みを働かせる——

若し又白が黑八、の時下邊を放置して七の一路上にノビキリでもすれば黑は下邊にもう一手補つて完全に取切つていゝし、或はなほ下邊に構はず他の好點を求めその方に轉ずるも亦可です

（第十二圖）前圖白一、の別法——斯く單にワリコム（單に、と言ふのは、この一、が前圖七、と同點であり、前圖では一、三、五、の手順を經てから七とハネコンだが本圖ではその手順を省略して直ちに、の意味）のが筋としては合理的であります。

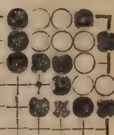
黑二にて三、より遮る不當は第十四圖に示される。

黑四とツイで慌てず、次にはい、をツイでこの白五子を攻立てるか、或は黑ろ、と打つてこの方の白四子を虐めるか、兩方を見、合ひ、とします。い、ろの兩方を同時に白は防ぐ事が出來ないから、何れか一方は黑に打たれるので見合ひといふ術語の意味もそこに自ら明らかでありませう——白一の手筋も成功しなかつた譯である。

（第十二圖）

（第十三圖）最後に白一、とこの方からアテて見ます。

黑二白三、とオシて來た時、黑四とトンで自然に下方の白四子を包圍する事が出來る。その四子をシノがうとすれば一、三、の方の五子に響くし黑四に續いて先づ五子の方を動き出せば今度は四子の方が恐らく保つまい、といふので術語に所謂絡みの狀態であり、



（第四圖）

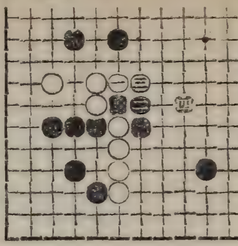
さて前に第二圖に於いてある時機、を見て、といふ事を申して置いた。

その時機がこゝで問題となつて來る。第一圖は固より第二圖黑一、が加はつても白からは手の下し樣の全然無い形でありましたから、黑は終局（最も普通の意味に於いて、即ち所謂ダメ迄も互にツメ合つたその時の狀態）まで第一圖のまゝにして置いて、終局の後、第二圖一、を初めて打ちます。斷つて置かねばならぬのは、黑からはこの白を取り樣がある、といふ事を示す爲に特に打方を想定してゐる譯ですから、茲に說く所は相當奇異に感ぜられるかも知れないが、その點、議論の爲の議論といふやうな考へ方は避けて頂きたい事であります。

所で、碁は交互に着手するものである限り、一目の處も無くなりダメ迄もツメて終つた後でも、第二圖黑一、に續いて白は何處かに打たねばなりません。それが自己の地の中であると黑の地の中であるとを問はない。實際には然し自分の地の中に打つ方がとくで＊

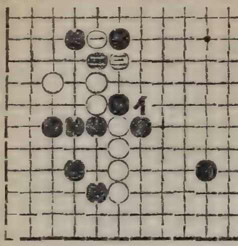
白は固より兩方の石を同時に助ける譯には行きません。

斯くして第十圖の黑一が筋であり形であると言つた、其効果は遺憾なく示されたのである



（第十三圖）

（第十四圖）第十二圖の白一、に對するこの黑二、は失敗であり白の意中を行く事になる——白三とキラれ、黑二をトラれるか白イ、とキラれるか、何れかは黑の避け難い所であり、その孰れとなつても收拾出來ない黑の姿に導かれる事は明白です。



（第十四圖）

次號からは別に新しい問題を捉へて更に『上達の急所』を續講する事と致しませう。

*すし、それには第四圖の劫爭を豫想して黑から劫ダテに打たれるやうな處を無くするものとする——

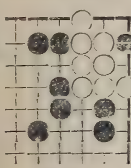
さて第二圖の黑一、に次いで白が一著打つた所で黑も亦自分の地の中に、そして白に劫ダテに打たれるやうな處を防いで、一著下す。爾後双方ともに第四圖の劫爭を意識し互に自己の地内に打ち合ひ、黑は、白から打たれる劫ダテが悉く無くなる迄この事を繼續し反覆します。その途中、白は、黑から打たれる劫ダテはもはや無くなつても黑が一著づつ黑地の中に打つてゐる限り、自分も著手を放棄する譯には行かぬので矢張り自己の白地の中に一著づつ打つて行く。斯くして白から打たれる劫ダテが全く無くなつた時、黑は初めて第二圖から前述の如く第四圖の劫爭を導き、白は劫ダテが無い爲に止むなく自己の地内に一著打つた時、第四圖の白八子をウチヌクなり或は劫をツグなりして白を屠る——

そんな打方があるものかと言はれるかも知れず、又白が自己の地の中に打つ事を承知しなかつたらば如何するかとも考へられるか知れないが、こゝでは白からは手の下し樣の無い石に對して黑からは働きかけてそれを取つて終ふ事が出來る關係を極めて單純に實際問題として明らかにしたのみである事は前にも斷つて置いた通りであります『劫づくし』といふ名稱の起つた所以も以上に自てら明らかである。なほ初心者の誤解を惧れ第五圖以下を揭げて注意を求める事と致します。

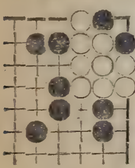
（第五圖）

（第五圖）形こそ違へ隅の曲り四目である。本圖は殊に白の外部のダメが明いてゐる點が大切であります。

若し本圖に於いて黑から慌てゝい、に打ち白が黑四子をトツた時、第六圖一、と打つたりすると、これは無條件の白活きとなつてしまふ——



（第六圖）



（第七圖）

（第六圖）黑一に次いで一の一路上に白が打ちそれ、を黑がトツた時、白は一の一路下、に打つて第七圖のオシツブシの形に導かれるからであります。黑が第五圖い、と打つて取りに行つたのが惡い。そのいを保留し何も打たずに置きさへすれば白からは手の下し樣が無いので、白に打方の無い事はダメの有無に關しません。黑からは然しいざと言へば先づ外部のダメをツメて第一、第二圖の形に導き得る限り、第五圖のい、を打たざる形に於いて無條件の白死、とすべきである。

今、黑から取りに行つたのが惡いと申しましたが、例外が一つある。それは、白を圍んでゐる黑に眼が無く、劫づくしの主體たる白と、攻合の關係にある場合であります。その場合にも先づ外部の白のダメをツメてから曲り四目の形にして攻取りに行けばオシツブシとなる筈は無い。その他劫づくしと同時に兩劫のセキが出來た場合は、とか種々劫づくし以外の別の條件を加へて考へる事は徒らに問題を複雜ならしめるばかりで際限がありませんから相對的議論は一切除き『隅の曲り四目は絕對の死』としてあるのは實際問題から來た不磨の憲法であり、自分はこの憲法の創定者に常に敬意を表しつゝある者であります。

望鄕目黒御殿

——雅叙園主の成功秘話——

竹田敏彦

伊藤幾久造畫

腕白正義

『何故俺が惡いんだらう？　俺アこれつぱちも間違つてはゐねえ筈だ。だのにお母アは、あんなに俺ばかり叱る……』

今日も母のより子から、さん〴〵叱られた力藏少年は、遣り場のない鬱憤を抱いて、裏山の木陰に立つてゐた。花に間のない三月で、木々の新芽が夕陽に燃えて、塒に急ぐ鳥の聲を背に、遙か見晴らす日本海の果てには、爛々と沈みゆく落日の壯觀が、繪よりも美しく眺められた。が、今の力藏少年には、そんな自然の美觀などは、眼にも入らなかつた。眼下に暮れゆく村の夕景の中に、誇りかに峙つ川上家の米倉——その白壁に注がれた彼の瞳は涙が滲んでゐた。

『相手がお金持の子だから、無理でも負けてゐなければならん、そんな理窟が何

處にあるか。』

子供ながらも、力藏は信じてゐた。公平に見て、今日の喧嘩だつて、力藏に非分は少しもなかつた。何時も家の財産を鼻にかけて、弱い者酷めばかりしてゐる川上家の伜の重吉が、學校からの歸り途、力藏と仲よしの仙太に、馬糞を喰はせようとしてゐるのを見兼ねて、つい義憤の餘り飛び出した力藏だつた。けれども、重吉は、力藏の言葉など聞かばこそ、逆に、

『何だ、貧乏寺の小僧の癖に、生意氣だぞ！』

言ふなり、手に持つた馬の糞を、顔へ投げつけた。途端に力藏の負けじ魂が爆發して、矢庭に重吉に組付くと、目にも止まらぬ早業でいやといふほど重吉を毆りつけたのだ。が、その勝利は束の間だつた。家へ歸つてみると、川上家の番頭が來てゐて、母のより子は慘めなほど恐縮して、平謝りに謝らされてゐた。そして、間もなく、力藏を呼びつけると、泣かんばかりに彼の亂暴を嘆いたのだ。

『そらあ、お母アの言ふ通り、俺ア腕白者には違ひない。けど、一度だつて、理窟に缺けた亂暴はしねえ筈だ……』

さう思ふと、譯もなく川上の番頭などに叱られてゐる母の意氣地なさが齒痒ゆかつた、何うしてかうも、村の人達は、お金持にぺこ／＼するんだらう――純眞無垢な童心には、それが癪でならなかつた。と、後から、

『力ちやんぢやないの。』

優しい女の聲に振り返つてみると、隣同志に住んでゐて、いつも姉のやうに可

愛がつてくれるお里さんといふ娘だつた。お里は今年十九歳、貧乏百姓の娘で、いつも野良仕事で眞黒になつて働いてゐるが、田舍には珍しい顏容の美しさは、子供の眼にも、ぱつと花でも咲いたやうに見えた。

『何をぼんやり考へてゐるの……また誰かと喧嘩して叱られたんだね。』

力藏の腕白を知り拔いてゐるお里は、につこりと、涼しい眼で覗き込んだ。力藏が、態裁惡げに肯くと、

『そうれごらん。いけないわよ……誰と喧嘩をしたの？』

『川上の重吉野郎だよ。』

『あら……相手が惡いぢやないの。あんたはいつも、相手を見ずに喧嘩をするからいけないのよ。あんなお金持の子と喧嘩をすれば、あんたが分が惡いに決まつてゐるわ。』

『だつて、お金持の子は、皆な勝手な眞似をするんだもの。』

力藏には、お里までこんなことを言ふのが解らなかつた。何處の土地でもさうであるが、殊にその頃のこの村ほど、貧富の懸隔の嚴しい處はなかつた。僅か地租税が十錢違つても、上下の區別が瞭然別けられて、上の人間には頭が上がらない。その氣風は、學校通ひの子供にまで染み込んで、田地持や金持の子供は、どんな弱虫であらうが、我儘勝手次第で、いかに腕自慢の惡童達も、親の制裁が恐しさに、いつかその用心棒を勤めて御機嫌をとるといふ、思切つた拜金村であつた。が、力藏だけは、その習慣に服しなかつた。片手間に百姓をして、やつと喰ひ繫いでゐる貧乏寺の悴だが、理由のある處、いかなる富者の子供にも負けてゐなかつた――

『そら理窟はさうだけど、ねえ、力ちやん……長い物には卷かれろつて言ふぢやないの。あなたはそれでいゝけれど、お母さんが可哀想ぢやない？　この村ではねえ力ちやん、お金持には、どんな理窟も通らないんだから、あんたみたいなことをすると、村中が皆んな向ふへついて、お母さん一人が酷められるのよ。今も行つて見るとお母さんは一人で泣いてゐてよ。』

優しく窘めるお里の眼には涙さへ光つてゐた。力藏もそれを聞くと堪らなかつた。父の宇左衞門とは五つの時に死別れ、男女七人の兄弟はあるが、五人の兄は皆な村を出て、他郷へ稼ぎに出で、二人の姉も遠い村へ嫁付いてゐる彼の家では、母のより子がたつた一人、まだ子供の力藏相手に、細い煙を立てゝゐるのだ。いくら腕白者の負け嫌ひでも、根が利口者の彼、母の健氣な働きと深い情は解り過ぎるほど知り拔いてゐた。彼はお里の忠告を聞くにつけても、さうした罪もない母の上まで襲ひかけてくる富者の暴威と、迎合者の卑怯さが、憎らしくてならなかつた。その時である。ふと、後の雜木林の中の徑から、不意に葉摺れの音がして、のつそり現れた若者、これも村の大地主の悴坂田勝一だつた。

『お里、搜してゐたぞ。』

勝一はにやりと、薄氣味惡い笑顔で近づいてきた。お里は見るなり、

『あら……』

困惑の色で、涼しい瞳を曇らすと、何か恐しいものでも見たやうに二三歩、本能的に身を退いた。が、勝一は、

『逃げなくてもいゝぢやないか。』

相變らずにや〳〵しながら、お里の身近く寄り進むと、

『話があるんだ。ちよつと來てもらひたい。』

むずとその手首を握つた。

『あれ、いや……』

振り解かうとするのを、

『何も怖がるに當るまいぢやないか。』

無理矢理に、雜木林の方へ連れ込まうとした。お里は猛獸に捕はれた女羊のやうに、顏を赤くして懸命に抵抗したが、勝一は用捨なく、その肩に手をかけて、

『おい、力藏……お前なんか見てゐるからいけないんだ。あつちへ失せろ。』

力藏を怒鳴りつけて、尚もお里を拉し去らうとした。と、見てゐた力藏のまん圓い頬ぺたが、見る〳〵火のやうにほてつた。途端に、

『馬鹿!』

大喝一聲! 鞠のやうに二人の仲に飛込んだ力藏、五尺五六寸もある大男勝一の顏を、伸び上るやうに小突き廻した。

『あつ痛え! 畜生!』

思はず、手を放す隙に、

『お姉え、逃げろ!』

必死の力で勝一を突き飛ばした。が、相手は血氣盛りの大男、こちらはまだ十五の少年、おまけに年齡より小柄の力藏は、見る間にその場に組伏せられていやといふほど毆られたが、小粒ながらも素早い力藏、咄嗟に片手で路傍の石を掴むなり、力任せに勝一の頭を毆つた。

『あつ痛つ……』

さすがに勝一も痛さに堪へかね、兩腕に頭を抱へてしまつた。その間に刎ね起きた力藏少年、

『態見ろ!』

言ひ殘したまゝ、お里の手を曳いて、裏山を驅け下りた。

郷關の櫻

『のうおよりさん。若旦那の傷は可成り深いぜ。全く子供と思へない亂暴をしやがる。これといふのもお前さんが甘いからだ。村中は、もうお前とことは、一切交際はしないと言つとるぞ。』

その晩である。力藏の家、存龍寺といふ、軒も傾いた眞宗の末寺の庫裡の、燻けた六疊に坐りこんで、後家のより子の油を

絞つてゐるのは、村の顔利きの太吉といふ中百姓だつた。

『何とも、はや、申譯のないことで……』

頼る良人もないより子は、もう泣きさうになつて詫びるのを、意地悪く見下した太吉は、

『申譯ないのは當り前だよ……おい、力藏、今度こんな亂暴をしやがると村中で承知しねえぞ。』

母の體軀を守るやうに、傍で坐つてゐる力藏を睨めつけた。力藏は口惜しげに、

『だつて、若旦那が悪いんだ。』

『何?!』

『力ちやん……』

横から制したのは、これも成行を氣遣つて傍を離れないお里だ。

『みんな私が悪いんです……力ちやんはちつとも悪くはないんです。』

擁ふやうに辯解したが、

『何だつて。力藏が悪くない……おいお里、手前も身分を考へろ。相手は坂田の若だぞ。ちつとばかり澁皮が剝げてゐると思うて、増長すると爲にならんぞ。』

太吉は散々に當り散らして、

『ぢや、およりさん、お前明日でも、この子を連れて、若旦那にお詫びにおいで。でないと村中が承知しねえぞ。いゝな。』

押付往生に承知させて、太吉はやつと腰を上げた。口惜し涙で見送つた三人――聲もなく、小暗い洋燈の光りに顔を見合はした。と、突然、力藏少年が、

『お母ア……俺あ村を出て行くよ！』

意外な言葉に、

『まあ、お前は、出し抜けに、何を言ふんだね。』

母は驚いたが、力藏は眞劍に、

『俺あこんな村ア嫌になつた。何處かへ行つてうんと働いて、村の金持の百倍も二百倍もの大金持になつて、敵討をしてやるんだ。』

子供心にも、沁み〴〵胸に沁みた金持の横暴！　十五歳の力藏は奮然心を決したのだ。母のより子も道理の言葉に、呆然涙の眼で、悴の顏を見守つたが、

『なあお母ア……俺が出てゆくと寂しいだらうが、そのかはり皆からお叱言も來なくなるよ……きつと豪い人になつて村の金持を見返してやるから。』

口惜し涙にしやくりあげながら、心からいふ可憐らしさに、母のより子も、

『ゆるしておくれ、親に甲斐性がない爲に、落度もないお前を長いこと叱つてきた。……どうぞ立派な人間に出世して今日までの敵を討つておくれ。』

涙の頬を摺り寄せて、より子は力藏を劬るのだつた。

それから間もなく力藏は、村の高等小學校を卒業すると、第三番の兄の正也が、苦學をして日本大學へ通つてゐるので、それを頼つて上京することにした。しつかり者でもまだ十五の春、村より外に知らぬ子供を、遠い都へ送る、より子の胸の心もとなさ。隣家の娘お里も村の峠まで送つた。

『では、體軀を達者にのう。』

可憐らしい旅姿を見返つて、先立つものは母の涙だ。

『大丈夫だよ。きつと大金持になつて歸るから……お里姉さ、お母アを頼むよ。』

『え、、母さんのことは心配ないから、出世をしてね。』

北國の春はいま闌である。こゝ能登半島羽咋郡下甘田村、幼な時代の思出を籠めた鏡のやうな米濱潟は、遙か春霞の下に薄れて、峠の櫻が二ひら三ひら、別れゆく母子の袖に散つた。

太閤小僧

『今度來た小僧は變つてゐるね。』

『體軀はちんちくりんだし、馬鹿に不愛想な子供だ。』

『しかし、恐しく働く子供だな。人の仕事でも、何でも引受けて働いてゐやがる。』

『それが俺達には鬼門なんだ、だいいち俺達の怠けてゐるのが目立つていけないよ。』

『さうだとも。一つ、我々で、もつと怠けるやうに仕込んでやらうぢやないか。』

こゝは東京淺草の石炭商松井商店の店先である。朋輩の店員達がこんな噂をしあつてゐる時、店先の荷車の前で、汗と石炭塵埃に眞黒くなつて働いてゐるのは、新入りの小僧の力藏だつた。

『おい、力藏！』

店員の一人に呼ばれて、

『御用ですか。』

力藏は答へたが、荷造りの手は止めようともしない。

『こゝへおいで！話があるんだ。』

『今手が放せません。』

『ちよつと休んでくれればいゝぢやないか。何もさう働き詰めに働いてゐなくても、別に急ぐ荷物でもないぢやないか。』

手代級の年長が言つたが、力藏は平氣で、

『いやです、私はあなた方に雇はれてゐるんぢやありません。御主人の用を缺いてまで、あなた方の命令を受けることはありません。』

何事も筋道一本で動く力藏少年、二三日働いてゐるうちに、主人の目ばかり盗んでゐる朋輩達の『奉公人根性』が、齒痒ゆくて見てゐられなくなつてゐたのだ。言下に報いた刺すやうな一言に、

『ちッ……生意氣な奴が！』

一同憎々しげに舌打ちをしたが、力藏は平氣だつた。――俺は正しいことをしてゐるんだ！

或る日も、廣助といふ番頭が、力藏を連れて、朝から顧客廻りに出たが、午過ぎになると、

『なあ力藏、俺あちよつと友達が病氣で、そこへ寄るからな、

虚弱體質を改造する！
講談社の『にんにく丸』をお服み下さい。合理的製劑にて悪臭なく服みよく、キ、メたしかで大評判です。（全國有名藥店にあり）

お前もこの金で、觀音さんで活動でも見て、夕方五時頃に、雷門の處で待つてゐてくれんか。そして、店へ一緒に歸るんだ。いゝか。』

　廣助は、その間に隱れ遊びでもする氣であらう、蟇口から二十錢銀貨を一つ取出し、

『そのかはりお店へ歸つて、誰にもこんなことを言ふのぢやないぞ。』

　かう言つて、力藏に渡さうとしたが、

『可嫌ですよ、御主人を騙して油を賣るのは月給泥棒です。あなた他所で遊ぶのなら、私、先にお店へ歸りますから。』

　言ふなりどん／＼早足で、店の方へ歸つて行くから、吃驚した廣助、後を追つかけてきて、

『おい、待て／＼！　……なあ、お前のやうにさう馬鹿正直に固まつてゐたからつて、世の中は通るもんぢやないんだよ。』

『通つても通らなくても、私は正直で通しますから、お先ご免なさい。』

『これ／＼、待たないか……困つた男だな。仕方がない、ぢや暑いけれど、お顧客廻りをしようか。』

　廣助、到頭閉口してしまつて、おとなしく一日顧客廻りをして歸つた。こんな風だから、力藏は、鄕里にゐる時も同樣、いつも孤立で誰一人味方になるものがない。そのうちに年も暮れて、力藏も十六歳になつた。武藏野の空つ風が吹き荒ぶ東京の嚴寒は北國にも負けない。が、力藏は一日たりとも人より後れて起きたことがない。暗いうちから誰よりも早く飛び起きると、身を切るやうな寒さの中を、一人で店を開ける、掃除をする、そのかはり、何時までも愚圖々々寢てゐる者でもあると、それが番頭であらうと、丁稚であらうと、誰彼の容赦はない。蒲團を引ん剝いて、塵埃と一緒に箒ではたいてしまふ。

『ちッ……人の蒲團を默つて除ける奴があるか。』

『ぢや、早く起きて働くこつた。』

　この理窟には誰も勝てない。が、萬事この調子だから、仲間うちでは何か機があれば、力藏を思ひ切り懲らしてやらうぢやないかといふ相談が纏まり、或る朝、力藏が例の通り早く起きて、店員の部屋を掃除に來たが、皆な諜し合はせて誰も起きない。力藏は平氣で、

『さあ、お掃除だ、起きて下さい／＼。』

　片つ端から蒲團をめくつていつた。一同は待つてゐましたとばかり、刎起きて、

『何をしやがる。』

　ぐるりと力藏を取卷いて物凄く詰め寄つた。彼は平氣で、

『さあ、除いた／＼、急がしいんだ。』

　周圍に集つた朋輩の脚を手當り次第箒の先で薙ぎ拂つた。

『やい、力藏！　人の足をよう毆つたな。』

　氣の早いのが二三人、拳を固めて力藏を毆りつけた、が小粒

でも力藏は喧嘩上手、素早く身を外すと、飛鳥の如く店の土間へ飛降り、表戸の閂棒を抱へて驅け戻るなり、

『さあ、文句があれば來てみろ。』

血相凄まじく周圍を見廻した。その眼光の鋭さ、全く打拉がれさうな氣勢に、一同縮み上つて誰一人手の出しやうもない處へ、

『こら、何をしてゐる。』

騒ぎを聞きつけて主人の清兵衞が顏を出した。しかし力藏は臆する色もなく、

『給金盗人を退治てゐるんでございますよ。』

小僧と思へぬ辛辣の一言。清兵衞はにつこり肯くと、

『いや、よく判つてゐる……皆の者、力藏に謝れ！ いつも寢坊ばかりして、子供の力藏ばかり働かせてゐる奴があるか。』

何も彼も見透した鶴の一聲！ 何れも年嵩の朋輩一同が、少年力藏の前に手をついて謝らされた。

それ以來、誰一人、力藏に頭の上るものがない。しかし、力藏少年はそんなことで增長はしない。相變らず朝は一番に起き晩は最後まで起きてゐて、どんな辛い仕事でも、我れ先と働く。凡そ石炭屋の小僧ほど汚れつぽい、勞力の要する仕事はないが、彼はそれを毎日平氣で影日向なく、まるで栗鼠のやうに敏捷に働き通した。自然、主人の氣受けもよく、給金は上る、地位も上る。だが、一厘の無駄費ひをしない。用事の閑散な晩など一同が退屈まぎれに、

『どうだ、あみだをやらうか。』

皆が殘らず賛成しても、力藏は、

『可嫌だ。俺あそんな買食などするお金は持たない。汗と脂で稼いだ金だ。少しでも大事に溜めて、出世の資本にしなければならん。お母アが一人故郷で待つてゐるんだ。』

言下に刎ねつける。

『ふ、子供の癖にケチ〳〵して。だから大きくなれないんだ。石炭屋の小僧が、何をして出世しようといふのだ。』

嘲る者があつても、

『さうだ。小男でも太閤樣は天下を取つた。もとは橋の下の乞食だ。石炭屋の小僧なら上等ぢやないか。今に俺に頭を下げて金を借りにくるなよ。』

鋭鋒當るべからずである。そこで誰いふとなく『太閤さん』といふ綽名がつけられた。並外れて小男で、風手の上らないのを冷かした綽名だ。

焔の試練

かうして五年間、骨身惜しまず働いて、貯へた金が五百圓に達した。今は二十歳を過ぎた力藏、惜しがる主家から無理矢理に暇を貰つて、從兄の押田三吉の家へ歸つた。

『おゝ力さんか。今日はまた休みでもないのに何か用事かな。』
三吉は不思議さうに訊ねたが、
『お店は暇を貰つてきました。』
『何、暇を貰つた？　あれほど信用されてゐて、何うしてまた急に。』
『人間いつまでも人に使はれてゐては駄目です。五六百の小金もできたから、これから何か、獨立でやらうと思ひます……ねえ三吉さん、俺は、あんたのやうな商賣をやつてみたいんですよ。』
『何、お湯屋をやらうといふのか。』
三吉は淺草で湯屋を營んでゐた。力藏が松井石炭商へ奉公したのも、三吉が始終石炭を買つてゐる關係から、その傳手で入つたのだ。
『毎日四五十圓の現金が上るんだから、その金を廻せば、可成り面白い仕事ができると思ひます。暫くあんたの處で見學をさせて貰ひたいんですが。』
筋道の立つた力藏の言葉であり、豫々その働き振りは、松井の主人から聞いて知つてゐる三吉は、早速承諾して、湯屋の方を手傳はせることにした。かうして力藏は、湯屋營業の見學を積むと間もなく、五百圓の金を資本とし、その上に毎日の上り錢を抵當にして千圓ばかり高利の金を借りて、中根岸に小さなお湯屋を開業した。が、そこは、家賃が三百圓で一年期間の契約だつたので、翌年淺草田中町に移轉、家賃五百圓、敷金二千五百圓の湯屋を借りて、櫻湯と命名した。そして妻を迎へて番臺に坐らせ、自分は釜炊きまでやつて、稼ぎ拔いた毎日の上りから、敷金に借りた二千圓の金を毎日々々崩し拂ひにして行つた。
が、因より太閤を以て任ずる力藏、湯屋主人位で滿足する男ではない。或る日も、
『待てよ……普通のことをしてゐては人並以上の大儲けはできない。』
そこで考へ出したのは燃料の經濟的使用法だ。と言ふのは湯屋で一番の消耗品は石炭だ。これをたゞ燃やしてゐては勿體ない、さうだ、風呂を湧かすと同時にコークスを造ればいゝのだ！　そこは石炭屋に奉公した經驗が物を言ふ。御承知の通りコークスの製造は石炭を燃やしてやるのだ。その燃やす間の熱が無駄に捨てられてゐる。力藏はその熱を湯沸かしに利用することに眼をつけた。そして風呂の湯を沸かしながらコークスを造る、熱の廢物利用だ。
ちやうどその時分、芝浦にあつた芝濱館といふ大きな旅館が賣物に出た。太つ腹な力藏はそれを見ると、八方奔走して四萬五千圓の大借金をして、この芝濱館を買ひ取り、鑛泉旅館と、普通の湯屋の二軒に別け、これを妻女に經營させて、自分は別に習ひ覺えた石炭商を開き、普通石炭の上に、この湯屋の燃料殼

から出來るコークスも一緒に賣出した。廢物利用の新商賣――どこまでも抜け目のない力藏だ。

例によつて朝は星を仰いで起き、自分でオートバイを運轉して石炭コークスのお得意廻り、その日その日の注文を集める上に、遠く大森、川崎、神奈川方面まで驅け廻つて、新しい會社、湯屋と、片つ端から飛び込んでは顧客の新開拓に餘念がない。その驅けづり廻つてゐる間にも、湯屋に適當な場所を見付けると、そこへ風呂屋を建てゝ貸し、石炭やコークスは自分の店のを賣り付けて家賃の上りと一緒に一石二鳥の儲けを怠らない。この八面六臂の活躍は、日に月に功を奏して、ぼつ／＼高利の借金も少しづつ減つてゆく矢先である。

或る晩、その日も夜の十時過ぎまで、東神奈川の某會社へ石炭を賣込む爲に、そこの用度係りの私宅を訪問し、疲れた體軀をオートバイに載せて大井邊まで歸つてくると、突然半鐘の音が、冬の夜空にけたゝましく響いて、

『火事だ、火事だ。』

急に往來が、騷々しくなつた。見ると、東の方の空が、眞赤な焔に染まつてきた。

『おや……』

力藏が眼を瞠つた時、角の交番で、

『火事は、芝浦の芝濱館の跡の湯屋だ。』

町の衆に敎へてゐる警官の聲に、さすがの力藏も、ハンドルの手が石のやうに硬直した。

火の車

宙を飛ぶやうに驅けて歸つてみると、芝濱館跡の礦泉と湯屋は、どちらも丸焼けだ。氣狂ひのやうになつた妻を、抱き寄せて、

『心配するな！　何とかなるよ。』

劬るやうに元氣をつけたが、保險金は僅か一萬圓、高利で借りた四萬五千圓は、まだ幾らも拂つてゐない。漸く事業も緒についた矢先、この皮肉な運命の呪咀！　力藏ほどの男も、張り詰めた氣が緩んだか、がつかりして、病氣の床についた。が、いくら病床に唸つてゐても、借金の魔手は遠慮容赦はしない。一人の高利貸は執達吏を連れて來て、彼が寢てゐる蒲團まで剝ぎ取らうとした。堪まり兼ねた力藏は、

『待つてくれ。』

痩せ衰へた身を起し、鋭く相手を睨め据ゑて、

『この蒲團が一枚幾らするんだ。俺は拂はないといふのではない。起きられるまで待つてくれといふのだ。そんな無茶をして男一匹苦しめて何になるんだ。早く癒つて拂つてやれば、その方がいゝぢやないか。細川力藏は男だぞ。』

氣魄に充ちた一喝に、流石の高利貸も暫時の猶豫をくれて歸

つた。しかし、借金の相手は一人や二人ぢやない。崕から突き落されたやうな力藏の病床は、毎日々々債鬼の總攻撃だ。彼は三十九度近い高熱の病氣を起して考へた。

『さうだ。寢てゐるから、益々責めにくるのだ。起きろ！　借金は命まで取らないのだ。もと／＼裸一貫で築いた俺ぢやないか。元氣を出して出直しだ！』

彼は奮然、起き上ると、病氣も忘れてオートバイに乘り、朝から晩まで石炭販賣に驅けづり廻り、夜も一ぷくする間もなく債權者を戸別に廻つては、取立の猶豫を賴み廻る一方、新しき借金に奔走しては、古い借金と切り替へてゆく。そして殆ど毎日のやうに迫つてくる、手形の期日と驅けつこしながら毎夜十二時一時まで金策の狂奔に追はれ續けだ。

そのうち歐洲戰爭の好景氣で、石炭商の方が、どん／＼活氣づいてくる。一方借金の遣り繰りも、相變らずの多忙である。かうなると自轉車やオートバイでは、とても鈍臭くて廻り切れない、性來太つ腹の力藏、

『金儲けはこんな時だ。兵は神速を尊ぶ。』

とばかり、まだその頃は少數の富豪しか持つてゐない自動車を、無い懷から無理算段で買つて、自ら運轉しながら、新顧客の蒐集と、借金の運轉に、寢食も忘れて東奔西走した。

かうした彼の血みどろの苦鬪振りを、ぢつと注目してゐた人に石油王中野貫一翁がゐた。燒けた芝浦の湯屋の地主で、そんな關係から出入してゐたが、或る時、力藏が玄關へ自動車をつけると、翁はそれを見て、

『細川君、君の奮鬪振には感心してゐるが、一度に大海を飛越えるやうな考へはいかんよ。物には順序がある。今のうちから贅澤な自動車など買つて乘るのは間違つてゐないかな。』

ひどく不機嫌だ。その筈、中野翁は大の自動車嫌ひで、八十三歳で世を終るまで、自分は勿論、家族の者にも乘せなかつたほどの人だ。が、力藏は笑つて、

『いや、私の乘つてゐるのは自動車ぢやありません、火の車です。中野さんのやうにお宅に坐つてゐられる御身分なら、自分で運轉までして、こんなものに誰が乘りますか。私は一日に三十ケ所四十ケ所を廻らねばその日が暮れてゆかないのです。電車や自轉車でまご／＼してゐては、商賣の息の根が止まるのでございますよ。』

僞らない說明に、

『成程……さういふ用をなす自動車もあるのか。』

感心して笑つた。

● 黃金の實る金

それから間もないこと、ひどく意氣込んで中野翁を訪ねた力藏、卓を圍んで對坐するなり、

『ねえ、中野さん、私に三百萬圓ばかり御融通を願へませんか。』

『何、三百萬圓？ ……君は借金で氣でも狂うたのぢやないか。』

中野翁も驚いたが、

『いや、正眞正銘、正氣で申し上げるのです。この三百萬圓が五年のうちには、きつと三千萬圓になりますから。』

いよ／＼奇怪な言葉に、

『一體それは何ういふことに遣ふんだね。』

『御承知でせうが、芝浦に十六萬坪の埋立地があります。あれを拂下げてもらふのですよ。』

時は大正七年、世界戰爭の餘波は、未曾有の黃金時代を現出して、都會の景氣を憧れる地方人は、日に月に夥しく、東京を目指して入り込んでくる。帝都の人口は殖える一方で、市中の住宅難は日に加はつて行く。この時この際、廣袤實に十六萬坪の芝浦の埋立地が打荒されたまゝ、顧る人もなく打棄てられてゐる。これこそ明日の殷盛を極める好適の新市街地と睨んだ力藏の烱眼には、茫々と生えた草のそよぎが、まるで招き寄せる黃金の波のやうに映るのだつた。この說明に、膝を叩いた中野翁、

『では二人で仲間になつてやらう。』

こゝに素晴らしい大金儲の相談は成つて、早速、東京市へ交涉を進め、翌八年、この埋立地十六萬五千坪を三百五十萬圓で拂下げを受けることができた。中野翁はこの借地權を全部力藏に委ね、尙ほその上に、莫大な謝禮までくれた。

彼はすぐさまその金で、この埋立地へ五六十戶の手頃な借家を建てた。恰も市中は住宅難の折柄だ。彼の覘ひは美事に中つて、借手は八方からわんさと押寄せ、忽ちのうちに滿員となつた。これが引き水となつて、今まで誰一人振返りもしなかつた埋立地はどん／＼開け、間もなく借地の權利だけでも一坪二百五十圓といふ篦棒な相場を示した。この權利は全部力藏が持つてゐるのだから、忽ちにして、數百萬の大金が、彼の懷中に轉げ込んできたのだ。當時まだ三十歲。青年富豪細川力藏は、忽ち芝區發展の大恩人として、區會議員に擧げられた。

いや、幸運はそればかりでなかつた。やがて大正十二年の大震災！ 帝都は八分通り烏有に歸したが、彼のゐる芝浦は安全だつた。冷靜にこの大天災の前途を見越した力藏君、一時暴落した地價の底値を見て、澤山な土地を出來るだけ安く買ひ込み、復興の日の利益を覘つた。が、果して、この時坪二圓五十錢か三圓に買つた土地が、間もなく七八十圓から百圓に高騰し、これでもまた四五百萬圓の富が力藏君の懷へ舞込んできた。

暴力團糞喰へ

震災後のこと、芝の區會では、何かの祝ひ事があつて、一夕芝、紅葉館に祝宴を擧げたことがある。宴まさに闌となつて、い

よ／＼これから美妓連の舞踊も始まらうといふ時に、突然、荒荒しく襖を開いて、飛び込んできた壯士風の男が五人、銘々日本刀を提げて、宴席の只中へ大胡坐をかくなり、

『さあ、この宴會、止めてくれ！』

物凄い眼で一座を見廻した、時ならぬ花園の大暴風雨！　一座は忽ち恐怖に蒼ざめて、成す處もなく戰いてゐた。が、その時、酒席の一隅から、つと立ち上つて、つか／＼壯漢の前へ進みよつた一人の小男がある。

『ほほう、威勢のいゝ眞似をするな。だが生憎こゝは俺達の席だ。とつとと歸つてくれ。』

ぐつと詰め寄せた氣魄の鋭さ！　實に三つ子の魂百までも、村の腕白小僧時代から、道理の前には何物も恐れぬ青年議員細川力藏君だ。五名の壯漢も呑まれ氣味で、もぢ／＼顏を見合せてゐたが、何樣五尺を多く出でぬ小軀の力藏君、御し易しと見たか、

『歸れ？　……貴樣こそ歸れ。俺達はこの宴會が、氣に喰はないから潰しにきたんだ。』

威猛高に嘯くのを力藏君は笑つて、

『馬鹿、お前なんぞの氣に喰つて貰はうと、こんな御馳走を並べてゐるんぢやないんだ。店の出し處が違やせんか。』

笑顏の啖呵、役者は遙かにこちらが上手らしい。が、壯漢も負けずに、

『その馳走が氣に食はんのだ。××組の賄賂の酒だらう。區民に代つて制裁に來たんだ。』

咄嗟に、力藏君は、數日前區の工事の入札に敗れた△△組のことを思出して、勵聲一番、

『無禮者！　さては貴樣達△△の犬だな。』

『何、犬だ……』

『やつてしまへ。』

五人の男は、一氣に立ち上るなり、日本刀の鞘を拂つた。氣味惡い白刄の閃き！

わつといふ一座のどよめき！　途端に力藏君の眉が、ぴりつと一つ、凄味に動いて、

『では俺も出さうか。』

言ひざま、懷中から取出した一挺の拳銃！

『擊つぞ！』

一歩退いてぐつと身構へたその鋭い意氣に、

『待て！』

銃口に向いた指揮者らしい男が叫んだが、その聲は幽かに震へてゐた。

『怖いのか。』

『は、話は、すれば、わ、わかる……』

意氣地もなく蒼ざめた。そこへ、ちやうど急を聞いて驅け付けた警官隊が、忽ち壯漢達を取包んだ。そして難なく取押へられた壯漢達が、すご〳〵部屋から曳かれてゆかうとする時、

『待て！』と力藏君は壯士達を呼び止めておいて、拳銃で覘ふなり引金を引いた。

『あつ……』と壯士が思はず身を縮めた瞬間、カチリ！ 彈丸は入つてゐなかつたのだ。

『馬鹿！ お蔭で面白い餘興が見られたよ。はつはははは。』

力藏君が吹き出すやうに笑つた。

再び平和に還つた宴席は、凱旋將軍のやうな力藏君を取卷いて、感謝と賞嘆の盃を降らせた。

常に不偏不黨、黒白信ずる處に就て讓らぬ豪膽細川議員の存在は、以後芝區會の爲に力強い防腐劑となつた。

料理と美術の御殿

昭和三年――小太閤細川力藏君も四十歳を迎へた。今や大成功者の彼、初めて都塵を避けた湘南葉山に、莊宏たる別莊を建てて引籠つた。が、さて芝浦の大きな邸宅が、餘り廣すぎて借手がない。さうなると、まだ働き盛りの力藏君、一つこの家を利用して、新趣向の料理店を開いてみたら――又しても有り餘る智惠が働いて、早速そこで支那料理を開業した。つけた屋號は『雅叙園』――雅叙とは支那で天下無敵を誇つた強い軍旗の名である。ところが、何事にも新工夫を忘れぬ力藏君、雅叙園獨特の經營方針として、家族本位と、祝儀一割主義を旗印とした。即ち、從來の料理屋といへば、妻や子供は禁物で、蔭の女御同伴の外は、男ばかりで行く處と決まつてゐた。これを奥様子供連れで來易いやうに、萬事を家族本位に設備した。それと同時に、これまでの料理店で、最も客が心をつかふチップを廢して一割の給仕料と定めてしまつたのだ。この二つは今でこそ眞似手が澤山で珍しくないが、當時には素晴らしい趣向として忽ちのうちに評判となり、さしもの廣い家屋も手狹を告げる大繁昌だ。

そこで、彼は第二の雅叙園の新築を思立つて、目黒に一萬餘坪の土地を買つて、御殿のやうな大建築に取りかゝつた。驚いたのは親戚知人だ。

『富士』臨時增刊の大盛觀!!

本誌創刊以來初めての大增刊は六百數十頁の大册、文壇總動員の執筆！ 大讀物三十餘篇全部讀切、更に未曾有の大特輯讀物あり、挿畫家總出動！

見るからに美しくて面白いこと誌界無比の大壯觀！ 普通號とはがらりと型を變へて、皆樣をアッと驚かせやうとの大計畫、絶好の機會！是非々々賣切れぬ中にお購め下さい。（**發賣は九月十九日**）

『こんな不便な處へ、こんなものを建てゝ何うするつもりだ。』と皆が反對したが、力藏君は、笑つて、
『都會の人は都會に飽いてゐる。せめて一刻でも東京離れのした青木の氣分に浸つてみたいのだ。今に圓タクも安くならうし、また五人以上のお客なら、こちらからお迎への自動車を出してもいゝ。』
この方針の下に、工程二年、今の目黒雅叙園を開拓した。建築と美術が道樂の氏は、庭の眺め、客室の構造、金を惜しまず注ぎ込んだ上へ、屋内は所狹きまで名畫と美術工藝品で飾つて、舌の外に目も心も樂しませるといふ破天荒な割烹御殿を造り上げた。果して、開店早々からの滿員續きで、日に増す盛況裡に

(最近の　雅叙園主　細川力藏氏)

今日の繁昌だ。
想へば年歯僅かに十五、貧にして郷黨に疎まれ、悲憤に燃ゆる小さき胸を抱いて、奮然故郷を去つた力藏少年、今や日本の料理王として、巨萬の財を摑む——しかし、尚ほ足らはぬは人生の常である。貧困苦闘を共にした妻女は、氏の華やかな成功も見ず既に逝いて今や亡い。尤も代つて迎へ入れた敏子夫人は、銀幕の麗人入江たか子孃の實姉、東坊城子爵家の長女で、才色兼備の類ひ少ない佳人、しかも先夫人の遺子達を愛して生さぬ仲とは思へぬママさん振り、この點力藏君も、大いに慰め得るものもあらうが、二十年前涙で別れて、彼の成功を待ち切れず死んだ慈母より子刀自の代りは何處に求めやうもない。
つい二三年前だ。力藏君は二十年目の故郷を訪ねた。當時農村の苦境を見兼ねた氏は、巨萬の富を投じて、村内の田畑を高價に買收し、窮乏の地主を救濟した。今は合掌するやうに、氏を歡待して止むところを知らない故郷の人々だつた。
『お母さん……泣いて村から逐ひ出された力藏は、奮鬪努力、つひに今日故郷に錦を飾りました。せめて草葉の陰からなりと、今日の成功を御覧くださつて、あの時の恨みをお忘れくださいませ。』
泣いて母堂の墓前に跪く時、程遠からぬ一群の墓石の中に、これもその後間もなく世を去つた隣家の娘お里の小さな墓が、冷たい夕日の光りに濡れてゐた。（をはり）

面白い面白い評判漫画

荒馬凄衛門

田河水泡

お前こゝにあつた
新聞の切り抜き
知らないか
お母さんが
掃いて捨て
つやつたよ
三千圓當籤の債
劵番號が出てゐる
新聞の切り抜きを
掃き出したかい
あら
あれが
三千圓ので
したか
だから全く
紙屑でも何でもめ
つたに捨てられな
いわ
困つたわ
ゴミ屋がすつかり
持つて行つち
やつて
お前の爲に三千圓
損しちやつたんですよ
塵捨場へ行つて
探して來なけりや
承知しないよ
ウーン
おお痛え
家のお母さん
隨分力が
あるな

あれとうも輕いと思つたらあの小僧惡戯しやがつた
お父さんゴミ屋の車を探したけどなかつたよ
無けりアいいよ
いいえよくありませんよあれがなけりア當つてるかどうか分らないで三千圓損しますよ

ぢやいいよ
お隣のをばさんの所だつて同じ新聞だから借りて來らア
ハイ 借りて來ました
エート 出てゐないね
こんなよその家の新聞なんか當になりませんほんとに惜しい事をしちまつたね
新聞は皆同じだらう
勝手なこと言ふもんぢやありませんお前の爲に三千圓損しちやつたんですよ
あつたよあつたよお父さんの机の下に切り抜きが落ちてゐた
だけどそんな番號かいてないよ
今頃出て來たつてもういりませんよ

邦坊の藝道修業

……落語家、柳家金語樓入門の卷……

和田邦坊

↑(柳家金語樓師)

『へい、藝道修業の者にござんす。大將はおいでゝござんすかい。』

といつたら、

『大將なんてのぢやねえ、こつちは一等兵だ。』

と威張つた。なるほど、兵隊さんの山下敬太郎は一等兵だ。

『ごめんなせえ。』

と這入つて、上框へ腰を降ろしたら、

『そこは端近か、先づ／＼これへ。』

二階へ上げられる。

『して、そこもと。』

とこつちを眺めた。いやに氣取つて、かう顎んとこを撫でて、しかし、やつぱり金ちやん頭の禿は光つてゐるので――。

『師匠、相變らず見事なお頭で。』

『コレ／＼、聲が高い。』と手で押へた。

『落語界の新人、師匠によつて藝道修業を致したいと存じます。』

『なるほど、近頃奇特なことぢや。されば、これよりメンタルテストてえものを。』

『へ、落語の弟子入にはメンタルテストがあるんですかい。』

『大いにその必要がごわす。抑ゝ——といつたところで、いふことは何もないのでげすが、い、い、そこもとは出世したいと思ふか思はぬか。』

例の甘つたるい舌ざはりで、思ふか思はぬかといふ。

『は、そりや師匠誰れだつて出世してえと思ふのは當り前でござんせう。』

『不可ん。』『へ？』

『さういふ了見では行末が案じられる。』

『案じられる？』

『左樣、出世がしたいなんて了見は落語界ぢや許されん。成功美談ナンてえことはありや他所の人種のすることで。』

『へ、すると、どういへばいゝのです。』

『お前さんはメンタルテストの第一問で既に落第ぢや。つまり、成功したいと思ふか思はぬかといつたら。ヘイ、したいと思はぬであります。それではどうして落語家になるのか。ヘイ、世の中が退屈だから少しお喋舌をしたいと思ふのであります。かう來なくちや滿點にはならねえ。』

『なるほど、他所のメンタルテストと少し變つてゐる。』

『いや、これが當り前なので他所のが變つてゐるのさ。』

『ヘツヘツヘツ。』

『コレ、笑つちや不可ん。落語家にでもならうてえ殊勝な人間は、決して他人さまから笑はれても、自分で笑つちや不可ねえよ。笑ふ門には福來るなんて慾を出しちや困るよ。福なんか他人にやつちまつて、——尤も大福餅なら五つや六つ……』

『僕は甘いものは嫌ひなんだ。』

『なるほど、——いや然し福の話はどうでもよろしい次に學問の程度を調べる。お前さんはナショナル・リーダーが讀めますか。』

『は、へへへへ。』

『コレ〳〵、笑つちや不可んといふに。さればフランス語、ドイツ語、英語などは讀めますかな。』

といつて立つて奧から外國雜誌を持つて來た。

『これが讀めるか。』

『見えるけど讀めません。』

『見えるのは誰れだッて見えるよ。遠いところぢや無いのだから。讀むんだ。ドイツ、フランス、英語、どうだい。』

これが讀めねえだろ。ヘン、金語樓はこいつがチヤンと讀めるんだからなア。大したもん

だろ。ペラペラッと――尤も教へて貰つて知つてゐるところを一行丈讀んで見せるんだけどね。』

『ヘーン。』

『大抵の奴ァ驚くよ。師匠は學問がある。えらいつてえことになつてね。弟子はもう頭が上らない。』

『なるほど、ウマイ手だ。』

『コレ、インチキの手に感心しちや不可ねえ。メンタルテストはこの位にして、次に敎練の檢閲をやる。』

『敎練なんかがあるんですか。』

『當り前よ。落語家といへどもコレ金語樓は國家の干城である。陸軍後備一等兵山下敬太郎閣下でげす。』

『一等兵の閣下は無いでせう。』

『いや、それがね君、僕の家では位官等級の下の者ほど尊敬することになつてゐるんだよ。弟子達は皆んな上等兵ぢやが僕は一等兵だから威張つてゐるんだ。君は兵役があるか。』

『あります。』

『よろしい。それではと――オイ／＼。』

と弟子の富士樓を呼ぶ。

『弟子入りが一人來た。軍服と銃を持つて來い。』

『銃まで用意してあるんですか。』

『銃が無くちや檢閲にならないぢやないか。』

富士樓の持つて來た軍服を僕へ渡して、

『これを着給へ。』

『師匠、こりや星が二つですな。』

『君のことだから一等兵だと思つたんだが、君もやつぱり上等兵かい。』

『恥かしながら小生今だに二等兵で。』

『えー、二等兵？　こりや豪ら者が飛び込んで來たぜ。何しろ家ぢや二等兵閣下は一人もゐねえんだからなア。へえ、君が二等兵とは大したもんだ。豪い／＼。』

と金語樓馬鹿に賞めてくれる。二等兵だといつて賞められたのこれが初めてだ。

『オーイ、富士樓とみのると皆んな來いよ。』

といつて弟子連中を呼ぶ。

『皆んなこの閣下に敬禮をしろ。新入りのこの弟子は何しろ二等兵だつてえのだ。大したものぢやないか。』

から持てると少し氣味が悪い。

『師匠、この銃を擔ぐのですかい。』

『いや、もう擔がなくたつてよろしい。何しろ二等兵閣下だからな。檢閲はもう一遍でパスしちまつたよ。』

『折角、持つたのですから捧げ銃位しませうか。』

『さうだな。ぢや、折角だから捧げ銃をして、さ、それでいゝや。』

『さゝげ――銃！』

『檢閲了り。』檢閲は了つちまつた。

『まだ、次に何かあるんですか。』

『こゝで、僕が一つ落語をやつて見せる。聞いてゐて、お前さんが面白かつたところを記へておく。後で何處が面白かつたと聞くと、こゝとこゝが面白かつたと答へるので、これが腦味噌の試驗なんで。』

『これは面白いね。』

『面白がつちや不可ねえ。何しろこの間も一人弟子入りが來てね。メッカチ、チンバといふので丹下左膳見たいなのが、是非落語家になりてえ。そこで試驗にかゝつたのさ。ところが僕が落語を一席聞かせる頭腦試驗のところで、先生スッカリお客になつちまつて、いゝ

氣持ちで、ヤーイ金詰棲うめえぞ〳〵と呶鳴る始末で、どうも手がつけられねえ。かういふのがあるからね、お前さんも氣をおつけよ。』

『心得てます。』

『それぢや、やるからね。お前さんはもつと後へ下つて、さう〳〵そこへ坐つて。』

『師匠、同じやるなら兵隊さんがいゝね。』

『注文をつけちや不可ねえ。こつちは何もお座敷を勤めてゐる譯ぢやねえんだからな。――えゝ毎度ながら變り榮えのねえお話で恐れ入ります……』

と光つた頭をこつちへ向けてお叩頭をした。

『お好みによりまして、お馴染みの兵隊さん――』

『待つてましたッ。』

『コレ〳〵――。えゝ思へば今からかれこれ十年前芝の區役所へ呼ばれましてな一體この落語家なんていふ動物は國家の干城になるたんてことは、誠にその曉天の星より少い位のもので、故いかんとなればでげすな……』

から初まつて、朝鮮羅南の守備隊での話は將にクライマックスに達した。

『下士官の側へ行きやめんいゝ、こ臭い――伍長勤務は生意氣で――イキナ上等兵にや金が無い、可愛い新兵さんにや暇が無い。ナッチヨラン〳〵。』

『オイ、コラッ。』

『ハッ、伍長殿でありますか。』

『オイ、貴樣今何か唄つてゐたな。』

『自分は何も唄はないであります。』

『噓をつけ、おれは先刻から貴樣の後に立つてゐたんだぞ。唄つて見ろ。』『は。』

『早く唄はんか、初めッ。』

『ちや、ちやん、ちやん〳〵、ちや、ちやんちやん〳〵。』

『何だ、そのちやん〳〵てえのは。』

『三味線であります。』

『三味線なんか要らん、唄丈け直ぐに唄へッ。』

『これが無いとうまく唄へないので、ハ、ちや、ちやん〳〵〳〵下士官の側へ行きやめんいゝこ臭い――自分はめんこ臭いと思はないであります。』

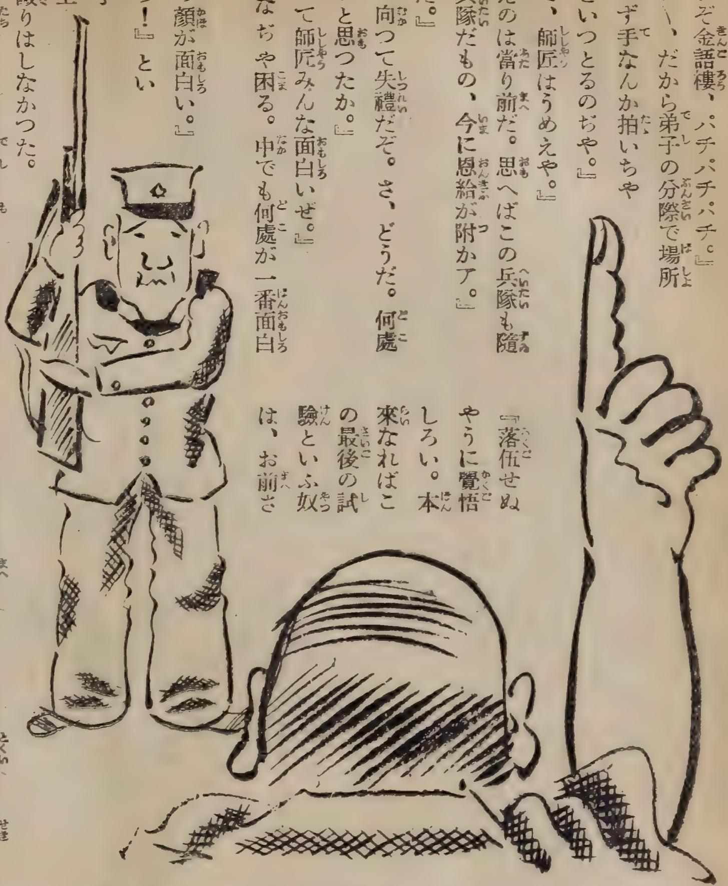
『そんな云ひ譯はいらん。』

『伍長勤務は生意氣で――自分は生意氣だとは思はんのであります。』

『次を唄へ。』

『粋な上等兵にや金が無い、可愛い新兵さんにや暇が無い、ナッチヨラン〳〵。』

『馬鹿ッ、可愛い新兵さんとは誰れのことかッ。』
『はい、自分であります。』
『うまいぞ金語樓、パチパチパチ。』
『コレ／＼、だから弟子の分際で場所柄も辨へず手なんか拍いちや不可んといつとるのぢや。』
『だつて、師匠はうめえや。』
『うめえのは當り前だ。思へばこの兵隊も隨分古い兵隊だもの、今に恩給が附かア。』
『全くだ。』
『師匠へ向つて失禮だぞ。さ、どうだ。何處が面白いと思つたか。』
『何處つて師匠みんな面白いぜ。』
『みんなぢや困る。中でも何處が一番面白い。』
『師匠の顔が面白い。』
『こいつ！』といつて、手を振り上げたが毆りはしなかつた。
『どうも質のよくねえ弟子を持つたもんだ。』
『入學試驗はもう濟んだのですか。』
『もう一つある。』
『へ、落語家なんて試驗が隨分あるんですな。』



『落伍せぬやうに覺悟しろい。本來なればこの最後の試驗といふ奴は、お前さんならお前さんの、つまり得意の一席を語らせて見るのだが、お前さんは本當の初手らしいからこいつは出來ねえだろ。それとも何か知つてゐなさるか。』
『話をですかい。』
『左樣、どんなものでもよろしい。』
『さア、爺は山へ柴刈りに婆は川へ洗濯に……』『困るね。』
『桃がボーン／＼と浮いて來る。婆さんが……』
『おい、止めとくれ。』
『不可ませんか。』
『そりやお前さん、小波先生だ。落語ぢや爺さんが柴刈りなんかにや行かねえやな。お隱居さん、今度町内で野球をやらうてンだが、隱居にも一つ出て貰ひてえ。いや柴刈りぢやねえんで、場内整理てえ奴にね。これは／＼八ちやんかい。かう年が寄るとどうもデリケートなことあ出來ねえ。場内整理位なら何ンとか出來るよ。ぢや隱居賴んだよ。O・K！てなことに。』
『へ、隱居がO・K！で。』
『恐しいもので、日進月歩の世の中に柴刈りなんかしてゐる爺さんを出しちやお飯にならねえ。』『なるほど。』

『感心してねえで、本當に何かやつてごらんよ。』『何かつてもう外に知らねえので。』
『唄ア唄へねえかい。』
『唄ですかい。唄なら。』
『知つてゐなさるかい。ぢや、やつてごらんよ。』
『ハ、チヤ、チヤン／＼／＼。下士官の側へ行きやめんこ臭い、伍長勤務は生意氣で――自分は生意氣だとは思はんのであります。』
『こいツ。』
と師匠、額を叩いた（額といつたところで、

何處から何處までが額か分らないやうな額なんだが）ペロリと舌なめづりした。
『心掛けがよろしい。』
『へ、よろしかつたら合格ですかい。』
『いかにも合格、今日より柳家金語樓弟子邦語樓と――』『へ、邦語樓？』
『ま、そこのところは何ンとでも、初めはどうせ前座だから名前なんかどうだつていゝや。』
『もう弟子入りと同時に前座ですかい。』
『今内弟子に富士樓、みのる。前座二ツ目あたりを勤める。』

『給金は呉れますか。』
『一晩一圓二十錢。』『ぼろいな。』
『落語家といふ商賣は前座、二ツ目が一番割りがいゝ。これが三ツ目といふのになるとかけ持ちをするので、大抵二軒で六十錢位。』
『半分だな。』
『仕方が無い。武士は喰はねど高楊子、出世のしかけだから我慢がいる。』
『弟子入りと同時に前座では一體何を喋舌りやいゝのです。』
『狼狽てちや不可ない。すぐ一圓二十錢にあ

病弱と胃腸病を一掃し二三貫は必ず肥る 新案特許『心身強健帶』

常に病弱の人
胃腸病の人
內臟下垂の人
神經衰弱の人
不眠と倦怠の人
不安と恐怖の人
肉體の強健と膽力の養成を望む人
其他腹部切開後の手當等
には

新案特許『心身強健帶』

心身強健帶を使用せば絶大なる氣力と偉大なる精神は臍下丹田に充實し鬱血したる腹部の血液はその壓力により間斷なく心臟に環り全身の血液循環は良好となり上記の病症は一掃され心身日に增し剛健心膽は練られ膽力は養成さるゝ倦まざれば心量次第に寬大となり氣力常に勇壯怠らざれば必ず長壽を得

優美堅牢、肥滿、痩體の男女共調節自由自在

定價參圓五十錢　送料（內地十錢 領土四十錢）　代金（內地二十錢 領土五十錢）引換

東京市麻布區一本松町五番地
東京健康法奬勵會
振替口座東京七三〇一五番

代金引換の場合はハガキにて註文あり次第急送す

りつからなんてさうはうまく行かないよ。』
『やつぱり何ンかやるんですか。』
『やる。口ならしから初めて先づ半年。』
『さうだらうと思つた。あんまり話がうま過ぎらア。』
『前座ばなしに壽限無、あの生れた自分の子供に長い名をつける話さ。壽限無々々、五劫の擦り切り、海砂利水魚の水行末、雲來末風來末、食ふ寝る所に住むところ、ヤブラコウヂのブラコウヂ、パイポパイポ、パイポのシユーリンガン、シユーリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナの長久命の長助さん學校へ行かうよ。おや虎ちやんよく誘つておくれだね。あの家の壽限無々々五劫の擦り切り、海砂利水魚の水行末、雲來末風來末、食ふ寝るところに住むところ、ヤブラコウヂのブラコウヂ、パイポパイポ、パイポのシユーリンガン、シユーリンガンのグーリンダイ、グーリンダイのポンポコピーのポンポコナの長久命の長助はまだ睡眠してゐるんだよ。今起すから待つておくれ。コレ壽限無々々五劫の擦り切り、海砂利水魚の水行末……。』
『ははは……戯談ぢやねえ。』
『おい、笑つちや不可ねえよ。この口ならしを先づやらなくちや不可ない。』
『だつて、あんまり馬鹿らしいや、そんな長い名前なんかあるものか。』
『だから、お前さんは理に落ちて不可ねえんだよ、どうせ落語なんて初めから馬鹿らしいものに定ツてらアね。下士官の側へ行きやめんこ臭いナッチョラン〱なんてやつてゐる顔を想像して見ろよ。馬鹿らしいと思つ

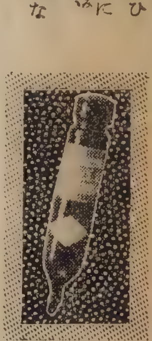
眼を美しく健やかになさらうとは思ひませんか黒水晶の様に澄んだ瞳、理智に輝く明るい瞳、愛嬌に富んだ美しい瞳、みんなみんな『パミール』が生む幸福なんです。

名流婦人
は仰有います

新興キネマ撮影所長夫人 高橋艶子様
どんなにお化粧がお上手でも、眼が濁つてゐると、顔が汚く見えます上に、近視眼の氣分もありますので、美眼薬『パミール』はかゝさず用ひて居ります。

共同火災保險會社々長令孃 廣瀬惠津子様
毎朝洗顔がすみましてから『パミール』を一二滴眼にさしますと、前夜の疲れがスッカリ恢復して、一日中とても氣持がいゝの。私すつかり『パミール』黨よ。

舞踊家 花柳珠實様
眼は心の窓と申しますが、美しい眼は全くお顔全體を魅力づけます。で私は舞臺へ出た後もお稽古のあとなど必ず美眼薬『パミール』をさして眼の疲れを癒す様にしてます。



高級眼科薬
パミール
全國有名薬店化粧品店にあり（定價 .50 1.00 1.80）

たら一ン日だつてやれる藝當ぢやねえんだ。何事もこれ前世の因緣と心得……』

『師匠、若いのに頭の禿げるのも因緣だね。』

『何をいやがる。弟子の分際で師匠の頭に對し批評を加へるとは何事だ。』

『はア。』

『次はおせつ得三郎、それから八百屋お七、萬病丹などといふのになる。これを半年ほど修業して初めて前座、え――毎度ご贔負さまに預かりまして有難い幸で、噺は一向變り榮えも致しませず、お古いところでご勘辨――とか何ンとかいッてゐりや一圓二十錢だ。』

『ホ、歸りは屋臺店で一杯飲めらア。』

『お前さんは酒を飲むのかい。』

『飲んぢや不可ませんか。』

『不可ん。但しウィスキーはよろしい。』

『へ、ぢや女もやつぱり日本髷は不可ませんので。』

『女、こりやアお色氣があつて中々いゝもので、これは弟子といへども個人の自由を尊重して總べてよろしい。』

『へ、よろしいので。』

『但し、但し師匠の愛人に手をつけちや不可んよ。』

『すると重ねて置いて四ッにでも――』

『何ン、四ッなどといふ古風なこたアせぬ。コマ切れだア。』

へい、お退屈さまと歸つて來た。（をはり）

興味と實益の結晶・大衆叢書界の寵兒！

キング文庫 三五判 二百頁

▼落語コント集　▼漫畫傑作集　▼趣味實益 寸鐵知識　▼科學的運命判斷　▼彼が一旗擧げるまで　▼特選智惠くらべ　▼常識大學　▼名家短歌集　▼名家俳句集　▼名人巨匠一夕話　▼紳士淑女 常識讀本　▼處世秘訣集　▼便利重寶 御存でせうが　▼新時代 手紙の書き方　▼新語新知識　▼流行歌謠小唄集　▼食卓漫談　▼名家隨感錄

▼珍談奇談集　▼ユーモア・コント集　▼登山とキャンプ　▼一日一訓　▼幸福の泉　▼川柳漫畫集　▼特選笑話集　▼面白漫畫帖　▼格言金言集　▼スポーツ常識　▼面白繪統計　▼知らぬと損をする 法律常識　▼偉人の風格　▼偉人の言葉　▼座右名訓集　▼家庭面白娛樂帖　▼先手後手 聯珠必勝法

各冊二十錢（送料二錢）
大日本雄辯會講談社

冒険小説
怪魔
平田晋策
村上松次郎畫
matsujiro

首領の横戀慕

マラー首相は、一眼見て田鶴子が氣に入つたらしい。
出陣祝ひの晩餐が終つてから、青い芭蕉の葉かげに、かの女をさそひ、
『ね、お嬢さん、こんな離れ小島にゐて、さみしいでせう？』
と、そろ／＼鎌をかけてくる。
『いゝえ、一寸も。』
田鶴子は、いやらしい男の臭ひに、美しい眉を一寸ひそめて顔をそむけた。
マラーは、かの女の心の中を見拔いたやうな、冷笑をうかべて、
『田鶴子さん、あの桂少佐を放免して上げようか。』
『まあ。』
田鶴子は、頰を染めて、うつむいた。
『ふふふ……可愛い殿御のことが、そんなに思はれるのかね。こゝらで一つ粋を利かして上げることにしようか。へへ……、しかし、たゞでは許しませんぞ。……田鶴子さん、わかるでせう？』
マラーの淫らな眼は、田鶴子の美しいえり脚にそゝがれ、狒々男の毛深い手は、蛇のやうに、女のなで肩に、からみつくのであつた。
田鶴子は、唇を血の出るほどかたく噛みしめ、じつと瞼を閉ぢたまゝ返事をしない。
青白いうなじが、ひく／＼とふるへてゐる。
『お嬢さん、お返事は今すぐに聞かなくつてもいゝんだ。今夜一晩、まあ、ゆつくり考へて見て下さい。……なんだ。そんなにふるへなくつたつていゝぢやありませんか。さあ、もつ

『火星戰隊』…篇中に躍る諸人物

早瀬田鶴子……奸惡なゴロス國海軍が、八洲帝國の戰艦『朝日』を暗撃にした始終を、逸早く帝國軍部に報せて、開戰の決意を固めさせた妙齢の女傑。

ゴレアス大佐……ゴロス國の陰謀團K・K・K團の頭目。右の田鶴子孃を東大洋の孤島に飛行機で拉し、八洲國の秘密を探ると共に、我が邪戀も遂げようとする不敵の奸雄。

長岡老博士……深峯岳の奥深く籠つて、空魔火星戰隊を指揮する八洲帝國空の守護神。

大槻九一……ゴロス名ボロジン。長岡博士の異母弟乍ら、彼國の爲に働く賣國奴。

マラー首領……ゴロス國總司令官。大槻と共に、田鶴子孃に横戀慕してこれに迫る。

桂源一郎少佐……『朝日』乘組の勇士で田鶴子孃の戀人。彼女と同じ孤島に幽閉され乍ら、虎視眈々脱出再起の機を窺つて居る。

と、こちらへ來て、……美しい顏を見せて下さい。』

圖々しくも、マラーは、田鶴子を胸の中へかゝへこみ、搖らぎ亂れる黑髮に、唇をおしつけようとした。

『いやです。はなして……』

田鶴子は、力なく身をもがいた。

『へへ……だれも見てるやしないし、いゝぢやないか。』

男は、獸のやうに挑みかゝつた。

その時だ。後ろの芭蕉の葉がざわ〳〵と音を立てた。

『首領。お手やはらかにねがひたいですね。こゝに一人見てる奴がゐるのですから。』

大きな葉の陰からいやらしい顏を出したのは、ボロジンの大槻九一である。

『何しに來た。』

マラーは不機嫌な聲でなじつた。

『お邪魔に上りました。首領。あなたまでが、女にうつゝを拔かすやうでは、K・K・K團も末になりましたね。』

大槻は、猫のやうな眼を光らせて、じろりと、田鶴子のしどけない姿を見下した。

『首領、あなたは一日も早く本國へお歸り下さい。この島は、及ばずながらこのボロジンがお引きうけいたしますから。』

『よけいな口を出すなッ。』

マラーは、むつとして、田鶴子の手をとり、

『田鶴子さん、向ふへ行きませう。とんだ泥棒猫に、邪魔をされましたね。』

と、女を引き立てゝ、露臺の方へ歸つて行く。

折から、月は雲間にかくれて、星影のみが、まばらに光つてゐる。

熱帶樹の林を渡る風の聲がさみしく、はるか絶壁の麓に聞える波の叫びは、地獄からでもひゞいて來るかのやうに、陰々として、もの凄い。

大槻九一は、マラーと田鶴子の後姿を見送つて、つぶや

いた。

『ユダヤ人め。今に見ろ。人の眼をつけた女を横奪りしやがつて……』

遠征隊の出動

あくる朝は、ゴレアス大佐のひきゐる八洲遠征隊の出動だ。

K・K・K島は、夜明け前から、何となく殺氣立つてゐた。

青潮海上要塞が八つ、灰色の長い姿を、入江の岸近く横たへ、鐵の箱のやうな、奇怪な形をした十隻の運送船は、ライオン戰車六十四臺と、五千名の化學兵を乘せて、海上要塞の向ふに浮び、海神潜水艦二十隻の姿は、その間にまじつて見える。

ゴレアス大佐は、海上要塞第一號の砲臺の上に立ち上つて、全軍を指揮するのだ。

彼は、田鶴子のことが氣にかゝつて、後髮を引かれる心持がするのだが、マラー首領の命令は鐵よりも固しだから仕方がない。

絶壁の上には、首領の姿が黒く小さく見えてゐる。そのそばに、白い影がゆらめいてゐるのが、田鶴子であらう。

ゴレアス大佐は、なつかしさと妬ましさに、耐へられないやうな表情をしたが、何しろ相手が悪い。

彼は『ちえツ、見せつけるなあ。』と舌打ちしながら、出動の號令を下した。

髑髏の國旗が、死の神の使ひのやうに、いやな音を立てゝひるがへり、海上要塞は、しづかに動き出した。

絶壁の砲臺からは、首途を送る禮砲が鳴らされた。

大佐は、千古の絶壁の中腹にたゞよふ、白い砲煙を眺めながら、はたして自分は、今度の遠征に、運よく、生きて歸ることが出來るだらうか——と思つた。

遠征隊は強い。機械の上では、たしかに強いけれども、自分一人の生死の事になると、だれ一人『決して討死の心配はありません。』とは豫斷してくれない。

大佐は、何となく、自分の運命が、終りに近づいてゐるやうな感じがするのだ。世界初まつて以來の、大遠征軍の首將となつてゐるのに、心の底がさみしいのだ。燃えるやうな征服慾がわいてこないのだ。

心の隅の方で、何者かゞ叫んでゐるやうな氣がする。

——『馬鹿者め！ マラーのおだてに乘つて、無名の軍を起し、人殺しの親方にならうとしてゐる大馬鹿者！ 黄金と名譽慾に釣られて、わざ〳〵東洋まで、あたら生命を捨てに行く大馬鹿者よ！』——

大佐は、出來るならば、田鶴子と二人、どこかの離れ小島へ行つて、つゝましい流人の生涯が送りたいと思つた。

しかし、鐵の鎖にしばられた今は、そんな自由な行動は許されない。海上要塞は、大佐が色々なことを考へこんでゐる中

に、はやくも入江を出て、約十五ノットの速力で、岬の絶壁に別れを告げながら、外海へ出た。

――それから五、六日後、遠征軍は八洲の近海へさしかゝつた。

青潮海上要塞は、單縱陣をつくつて進んで行く。運送船隊は、海神潜水隊に守られてその後につゞく。鷲飛行艇は、たえず警戒飛行をつゞけてゐる。

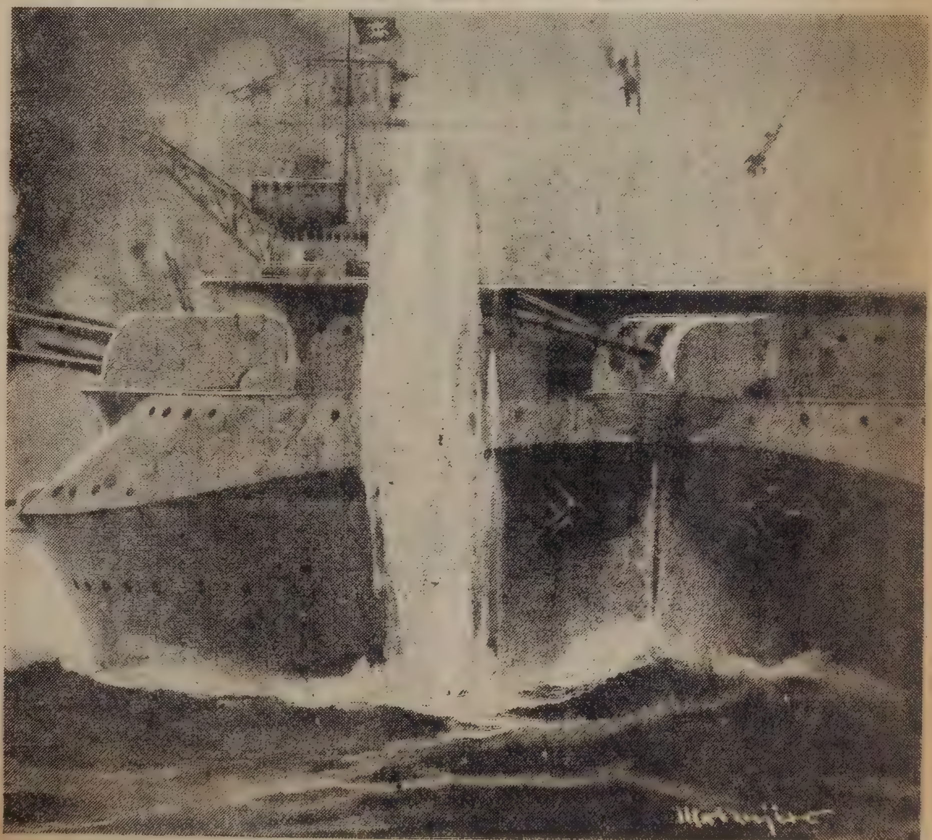
このあたりは、そろ〳〵八洲の哨戒飛行艇や偵察潜水艦が出沒しはじめたから、油斷ができない。

ゴレアス大佐は、――あれや、これやと戰場のかけ引について頭をなやましてゐる。彼は、八洲海軍を、恐れてはゐない。たゞ長岡大博士の科學的奇襲が、恐ろしいのだ。

この遠征隊を迎へる八洲海軍について、一寸申上げておきます。

上杉大將のひきゐる八洲第一艦隊は、戰艦四隻――『吉備』『紀伊』『因幡』『出羽』を持つてゐる。みな三萬五千噸、四十糎砲八門を備へた世界一流の戰艦だ。

巡洋艦も、大川艦隊は全滅したけれど、まだ七、八隻殘つてをり、驅逐艦、水雷艇は百隻前後の兵力がある。



航空母艦も『藏王』と『彌彦』が殘つてゐる。潛水隊は、八洲海軍の誇りで、これ亦百隻內外のものが、長安灣の近海を警備してゐるのだ。

この大兵力に向つて、ゴレアス大佐の遠征隊は、兵力が少なすぎるやうな感じがする。しかしながら、マラー首領が心血をそゝいで作り上げた大遠征隊には、色々な秘密の魔力がひそめられてゐるのだ。そして、八洲海軍に、かならず勝つだけの計算が、出來上つてゐるからこそ、出動命令は下つたのではないか。

海上要塞や運送船は、實に遠征用として、理想的にできてゐるのだ。

今までの海軍の缺點は、防禦力が弱いことである。攻擊力がいくら強くても、防禦力が弱くては、いつ沈沒するかわからないから、長く、しつこく戰へない。

世界大戰、ジェットランド沖の英獨大海戰では、英國の巡洋戰艦は、まるでブリキでこしらへたぼろ艦のやうに、あつけなく擊沈されてしまつた。あれでは、いくら、『大砲が大きいぞ。』と、攻擊力を自慢したつて、ざまはないわけだ。

英國やフランスでは、大巡洋艦のことを『棺桶船』、

とよんでゐる。縁起でもないが、それほど防禦力が弱いのである。

そんならなぜ、防禦力の強い奴をこしらへないか。そのわけは二つある。

今の鋼鐵が重すぎて、本當の不沈艦をこしらへたら、排水量がかさんで莫大な金がかゝること。

もう一つは、今の機關には、そんな重い艦を快速力で動かす力がないこと。

わが海軍で、ある技師が、空想をめぐらして、五十萬噸の怪戰艦を考案したことがある。これなら、恐らく沈むことはないだらう。しかし、安く見積つても、十五億圓はかゝるだらう。しかも、一隻だけでは作戰上の使用に不便だ。そんなわけで、この怪戰艦は夢に終つてしまつた。

今の外國の戰艦は大方、實に頑丈で、ほとんど不沈艦と稱してもいゝ位だが、それでも舳や艫が弱い。又、頭上から落ちて來る大爆彈に對しても弱いものがある。

こんな缺點を全部のぞいて、こしらへたのが、マラー首領の青潮海上要塞だ。

これは、輕くて強いZX鐵を使つて、甲板も舷も、底も、全部にわたつて十二分の装甲がしてある。だから、四十糎砲彈でも、六十糎の大魚雷でも、五百キロ、千キロの大爆彈でも、どこへ命中しても、防ぐことができるのだ。

『これが本當の不沈艦だよ。』

と、マラーが自慢するのも無理はない。たゞ速力がやゝおそくて、二十ノット以上出ないのが缺點だが、その位のことは仕方がないだらう。

武装は極秘にされてゐるが、四十糎砲、二十糎砲の他に、マラー光線發射機や、GZガスの放射機を備へてゐるらしい。甲板の下には、鷲飛行艇が十數臺かくされてゐる。

運送船十隻も、海上要塞と同様、箱船のやうな形をしてゐて、四方に装甲がしてあるのだ。

中に入つてゐる六十四臺のライオン戰車と五千名の化學兵は装甲の鐵壁に守られて、めざす八洲の海岸まで運ばれるわけである。

二十年間の、東大洋横斷遠征作戰を練りに練つた末に、こしらへたこの無敵遠征軍！

マラー首領が、八洲帝國たゞ一もみだと、思ひこんでゐるのも無理はない。

しかも、遠征軍司令官ゴレアス大佐の胸中、たゞならぬ不安を感ずるのは、なぜであらうか。

三原島沖の海戰

ゴレアス大佐の不安は、はたして杞憂ではなかつた。

八洲海岸を去る約三百浬の沖へさしかゝつた時、偵察の鷲飛

行艇は、はるかに八洲艦隊が、長蛇の陣をつくつて、東に向つて進んでゐるのを見つけた。

『敵艦見ゆ。』の無電は、すぐさま、旗艦『海上要塞』第一號に飛んだ。ゴレアス大佐は、不機嫌な聲で叫んだ。

『ばかッ、敵はGZガスの魔力を知つてゐるんだぞ。大川艦隊は、あの氣違ひガスのために全滅したんだ。そのすぐ後へ、又のこ〳〵と出てくるなんて、いくら八洲人でも、そんな馬鹿な眞似をするものか。』

『しかし、事實、やつて來てをるのです。』

青年参謀は、司令官の狼狽ぶりを、あはれむやうに冷笑して、

『司令官。敵はGZガスの毒を、防ぐ方法を考へついたのかも知れませんよ。』

『あの毒を、防ぐ方法なんかあるものか。こちらだつて、一たん、あいつを放射したら、おたがひに敵と一しよに狂人になつてしまふんだからな……』

『ぢや、その秘密を知つて、なあに、めつたに使ふもんぢやないと高をくゝつて、やつて來たんぢやないでせうか。』

『ふーむ、さうかも知れんね。この間の火星戰隊らしい飛行艇は、わがダントン艦隊が、狂人になつて全滅してゐるのを見たんだからね。』

『富士』の臨時增刊

あゝ、素晴らしき哉、此の一册!!

六百數十頁の大册、これが隅から隅迄皆面白い!!

勇俠、戀愛、痛快、滑稽、探偵、怪奇

面白傑作滿載號

——是こそ『富士』が創刊以來の最初の大增刊!

——是をお買ひ損ねては本誌愛讀者の大損失!

發賣九月十九日

ゴレアス大佐は、うかぬ顔をした。

しかし、さすがに青潮要塞は强かつた。

それから、三十分後、八洲の爆擊隊が、雲のやうに襲つて來たが、ほとんど何の役にも立たなかつた。

二百キロ爆彈、五百キロ爆彈は、花火のやうに爆發するだけで、海上要塞はびくともしない。

『くそッ。殘念だッ。』

八洲の飛行將校たちは、齒ぎしりして口惜しがつたが、どうする術もなく、つぎ〳〵に高射砲彈の餌食になつてしまつた。

潛水隊の猛烈な襲擊もあつたが、それもつひに海上要塞や裝甲運送船に損害をあたへることができなかつた。

ゴレアス大佐は、初めの中こそ、八洲軍に、どんな秘策があるかも知れんと、心配してゐたが、つぎ〳〵と重なる八洲軍の失敗に氣が安まり、上杉艦隊に向つて、猛然と決戰を挑んで行つた。

この海戰は、戰術上から見て、決して、上杉大將の黑星になるべきものでなかつた。

八洲艦隊は、空軍と潛水戰隊、水雷戰隊を巧みに使用し、爆擊、雷擊、あらんかぎりの死力をつくして戰つたのだ。

潛水戰隊などは、舷々相摩の肉彈戰までやつたのだ。

しかも、ZX鐵の不思議な裝甲をした敵は、わが攻擊にびくともせず、わづかな損害をうけただけで、荒ぶる獅子のやうな勢ひで襲ひかゝつて來た。

わが『吉備』『紀伊』『因幡』『出羽』の四戰艦は、三十二門の巨砲を間斷なく鳴らして、ものすごい砲火をそゝいだが、それでもだめである。

『長官。もつと近よらないと、致命傷をあたへることはできません。』

作戰參謀の森中佐が、悲壯な聲で叫んだ。さつきから、さかんに命中彈が出てゐるのに、敵は少しも動搖の色を見せないのである。

『二萬米までつゝこんで見るか。』

上杉大將は、最後の決心をされたやうだつた。

さつきから、約三萬五千米の距離で射ちあつてゐるのだ。そして、敵彈は、味方を大分傷つけたのに、わが彈は、あはれZX鐵に嘲笑されて、はねかへされてゐるのだ。

『吉備』は面舵をとつて、舳を右へ向けた。つゞく『紀伊』『因幡』も、旗艦の後を追つた。

殿りの『出羽』は、敵の砲火につゝまれて、眞つ黑な煙りを立て、舵が利かなくなつたのか、立往生の姿勢である。もう間もなく、沈沒であらう。

これを殘して、決死の三隻は、敵艦隊に肉迫して行つた。

約二萬米に近づくと、さすがに四十糎砲彈だ。海上要塞も、やゝ苦しいらしい。ZX鐵の裝甲も、所々破壞されはじめた

やうだ。

『奴さん、だいぶ困つてるぞ。』

上杉大將は、やつと白い齒を見せた。

しかし、そのよろこびも束の間であつた。こちらの彈が利いて來るのと一しよに、向ふの彈は、いよ／＼すごい破壞力をふるひ出した。

一萬八千米、一萬六千米。——そこまで、つゝこんだのが最期だつた。

三萬五千噸の大艦『吉備』『紀伊』『因幡』は、海上要塞群の亂射亂擊をうけて一時に、一大火焰を吹上げた。

火の柱は、高くのぼつて白雲を燒かうとするほどの勢ひだ。

大海原も引き裂けるやうな大轟音が、敵味方をおどろかした。

『あッ。』と叫んだつぎの瞬間には、あはれ、わが三艦は、たちまち姿を消してしまつた。

波の上に、龍卷がまき起つたかと思はれるやうな煙りを殘して、上杉大將以下三千の生靈は、愛する艦とともに、東大洋の藻屑ときえたのである。

『ふふ……、もろいものだなあ。』

ゴレアス大佐は、ほつとして汗をぬぐつた。

敵に何の秘策もなかつたことが、意外だつた。火星戰隊が出て來ないのも不思議だつた。

——もう一つ奥に、何か計略があるのぢやないかな——

大佐は、心の底から安心するのには、まだ少し早いやうな氣がした。

戰艦隊を失つた八洲艦隊はみじめである。殘つた小艦の艦長たちは、思ひ／＼、かなはぬまでも海上要塞に突擊して、最期を花とかざるもの、復讐を叫んで長安灣へ引きかへすもの、いづれもみな悄々として、その姿はあはれだつた。

八洲東海の海戰は、ゴロス遠征隊の勝利に終り、ゴレアス大佐は、戰場の近くの三原島を占領し、今宵の月に乘じて、たゞちに長安を攻擊しようと決心した。

見わたせば、夏の海は、紺碧をたゝへて、はてしもなくひろがり、三原島の椿の林に、さん／＼と陽がふりそゝいで、これが恐ろしい戰場だとは、どうしても思へない。

はるかに、八洲山脈、深峯、旭の連山が、殘雪をいたゞいた頭を、水平線の向ふに出してゐる。

ゴレアス大佐は、白雲を縫うて飛ぶ鷲飛行艇をながめながら思ふともなしにK・K・K島に殘して來た田鶴子の上に、想ひを走せてゐた。

あの二人の狒々爺——マラーと大槻の間にはさまれて、美しい眉を、どんな風にひそめてゐるかと思ふと、にはかに女戀しさに耐へられなくなつて來た。

部下の水兵たちは、勝手に島へ上つて、亂暴狼藉をはたらい

てゐるらしい。
　ゴロス海軍は、昔から風紀の亂れやすい軍隊だ。まして、今は、勝利に醉つて、強い酒をあふり、みな我れを忘れてゐるのだから大變だ。
　かれ等は、椿の林、家の裏庭、岩の蔭などで、みだらな歌をうたひ、掠奪、亂舞、爭鬪の限りをつくしてゐる。
　島民は涙をのんで、北の空、――深峯、旭の連峯をふしをがみ、神々に賊軍の退散を祈つた。
　ゴレアス大佐は、
『うんと夜襲の元氣をつけてやれ。』
と、部下の艦長たちを煽動し、司令官みづから先頭に立つて、凌辱をやりかねない勢ひである。
　彼の血は、田鶴子を思つて、狂ひ出したのだ。
『今に見ろ。今夜は長安を燒野原にして見せるぞ。』
　彼は、北の空に向つて、大聲で叫んだ。
『司令官。島へお上りになりませんか。』
　青年參謀が、さそひをかけると、
『ふふ……、久しぶりに八洲の女の子の匂ひをかぐか。』
　大佐は、いやしい眼つきをして、唇に笑ひを浮べた。

絶壁の上

　遠征軍の出て行つた後のK・K・K島では、大騒ぎが起つた。
出動後、二日目の夜だ。
　マラー首領は、田鶴子を誘つて、絶壁の上の林へ行つた。
　そこには名も知れぬ熱帶樹が、晝なほ小暗いほど茂り、岩壁と林の間に、やゝ廣い草原がひらけてゐる。
　マラーは、草原の小さい岩に腰うちかけ、田鶴子を、叢の上に坐らせた。
　月光が夢のやうに流れ、林の木の葉がさやさやと鳴つた。

田鶴子は、不思議にも、夢見るやうな瞳をして、さつきから、マラーの意のまゝに動いてゐる。靈智學の催眠術をかけられてゐるのにちがひない。

マラーは邪惡な眼を光らせて、なめまはすやうな聲を出し、

『田鶴子さん、いゝ月ですね。』

『あら、海があんなに奇麗に光つてゐますわ。』

田鶴子は、あどけなく、マラーの手をとつて、男の膝にもたれかゝつた。

マラーは、眼を細めて、黒髪の匂ひをかぎながら、

『田鶴子さん、今夜は、この森で、露にぬれながら夜をあかさ

うね。』

年に似合はぬ、齒の浮くやうな文句を、臆面もなくならべ立てるのは、淺間しいかぎりである。

田鶴子は、今や催眠術の魔力にかゝつて、生きた人形同然なのだから、彼の思ひのまゝに動く。

マラーは、草をしとねに、みにくい慾望をとげようとしたが今夜もまた邪魔が入つた。

彼が、ぐつたりとなつた田鶴子をかゝへて、叢の中へ身を伏せようとした時。

『ケケケ……』

と、奇怪な笑聲を立てゝ、近よつて來たのは、うるさい大槻九一であつた。

『又、來たな。』

マラーは、憎々しさうに、舌打ちして、

『大槻、足下の明るいうちに早く歸れ。ぐづ／＼してゐるとためにならんぞ。』と、おどかした。

『ケケケ……、いやですよ。歸りたければ、あなたがお歸りなさい。』

大槻九一は、骨ばつた手で蛇のやうにうねつてゐる髮を撫でながら、露骨な秋波を田鶴子へそゝぐ。

『命令だ。歸れッ。』

マラーは、まつ赤になつて怒つた。

『いやだ。田鶴子さんと一しよなら歸りますよ。』

『よしッ、きさま反抗する氣だなッ。』

マラーは、いきなり、兩手を組み合はして、變な恰好をした。指が、ぶるぶるッと電氣にかゝつたやうにふるへて、怪しい靈氣がほとばしり出た。靈智學の奧の手、催眠術で、相手の心をしびれさせようとするのだ。

『ケケケ……、そんな手に乘るものか。さあ、田鶴子さん、僕と一しよに要塞へ歸りませう。』

大槻は、せゝら笑ひながら、草の上にうづくまつてゐる田鶴子を起さうとした。

その時、マラーは、

『いえーッ。』

と、裂帛の奇聲を發した。

すると、大槻は『くッくッくッ。』と咽をつまらせて、そのまま動けなくなり、眼を白くすゑて、棒立ちになつてしまつた。

『ははは……、弟子は師に及ばず。わが輩の靈術にかゝつたらきさまなど操り人形も同然ぢや。しばらくそこに立つてゐて、こちらの濡れ場を拜見してをれ。』

マラーは、舌なめずりをして、田鶴子の肩を抱きかゝへようとした。田鶴子は、妖婦のやうな眼つきをして、

『あら、そんなに急いちやいやよ。』

と、岩壁のはしへ歩みよつた。

『そつちへ行つちや危ないですよ。』

マラーは、急いで女の手をとらうとした。

大槻九一は、化石のやうになつたまゝ、林の近くを、ふらふらと動くともなく、さまよつてゐる。

――とにかく、マラー首領は、その魔力によつて、田鶴子の心をうばひ、大槻を口の利けぬ生きた屍にしてしまつたのだ。

しかし、人を呪はゞ穴二つとは、マラーの運命を豫言した言葉であらうか。

彼は、斷崖のはしに立つた田鶴子の手をとつて、ひき戻さうとした時、どうした拍子か、足下の岩がぐら／＼とくづれた。

『あッ。』

腦天から飛び出すやうな叫びを上げて、マラーは、ずる／＼とすべり落ちた。

『くそッ。』

さすがに、靈智學の第一人者だ。とつさに岩壁にとりついた。そこは、上からは七、八間、下は、巨岩亂礁の荒磯が、パノラマのやうに、小さく見える。

マラーは、小さい手がかり、足がかりを憑んで、そろ／＼と絶壁をよぢ登りはじめた。

切り立てた崖、しかも苔の生えた一枚岩である。どんな偉い登山家を持つて來たつて、綱がなければ登れるところではないのだ。

マラーは、わづか七、八間ぐらゐ何かあらんやと、輕く見てゐたが、それは、とんでもない間違ひであつた。いざ、登りはじめると、足はすべる、手がかりは小さし、油汗がたら／＼と流れて、眼に入る。

十分、十五分、――その間が、彼には十時間、十五時間ものやうな氣がした。

『うゝ……、もうだめだ。八洲降伏の祝報も聞かず、あの美しい女も手に入れることが出來ず、うゝ……、殘念だッ。』

マラーは、岩壁にしがみつきながら、なほも我慾の妄想にふけるのであつた。

しかし、その妄想も長くはつゞかなかつた。

『ぎやーッ。』

狸とまがふ聲を出して、マラーは、つひに手をはなした。

六尺の體は、小爆彈のやうに、足下の深淵めがけて落ちて行つた。

やがて、小さい沫が立つた。

信天翁が、があ／＼鳴き叫び、騒ぎ立てた。

絶壁の下の深淵には、鮫がうよ／＼と棲息してゐるのだ。マラーの體は、おそらく數分間で骨ばかりにされてしまつただらう。

波は無心に絶壁の麓を洗ひ、月は、あはれな怪人の死を弔ふやうに、雲間に影をかくした。

營兵たちは、何も知らずに、銃をかついで、めい／＼の持場を巡邏してゐる。しかしだれ一人として、この變事に氣がつく者がゐない。

その間に、夜は深々とふけて行くのだ。

靈術にかゝつた男

マラーが絶壁から墜落すると、田鶴子はふら／＼と足を返して、林の方へ歩き出した。

そして、月光をふんで、妖女のやうにさまよひつゞけた。

もしも、かの女が椰子の大木の下に立つた時、熟した椰子の實が落ちなかつたならば、恐らくいつまでも絶壁の上を歩みつづけただらう。そして足をすべらして、マラーの後を追ふか、密林の中にふみ迷つて、籔に著物を破られ、膚を刺されて、あられもない姿になつただらう。

しかし、神は田鶴子を見すてなかつた。

ふと、椰子の老木の下に立ち止つた時、大きな人の頭ほどある椰子の實が、幹を離れて落ちかゝり、かの女の肩を強く打つた。

『あッ。』

悲鳴をあげてよろ／＼と草の上へ倒れ伏した田鶴子は、顔をぬらす露に刺戟されて、にはかに我れにかへつた。

マラーの靈術からときはなされたのだ。

氣がつくと、身はいつの間にか、裏山の絶壁の上に立つてゐる。

月は黄色く水氣を帶び、林の影はこんもりと緑をふくんで黒い。遠くに波の音が聞え、眼の前を、ふら／＼と夢遊病者のやうにさまよつてゐる怪しい影がある。

瞳をこらしてよく見ると、骨ばつた恰好、小さい顔、波打つ髪、――まぎれもない大槻九一だ。

『まあ、大槻さん――』

田鶴子は、彼の姿を見て、ぼんやりと、自分がマラーにさそはれて、こゝへ來たのだつたと思ひ出すことができた。そして、マラーが、絶壁から墜落したことも、夢のやうに、うす／＼ながら記憶してゐる。

かの女は、なんだか、ものさみしくなつて、重ねて大槻をよんだ。

『大槻さん、何をしていらつしやるの？』

大槻は、よろ／＼と、田鶴子の方へ、近よつて、

『田鶴子さん、あゝ田鶴子さんだ。よく來てくれましたね。』

いきなり、かの女を抱かうとした。

『あら、いけません。』

輕くはらふと、まるで、くらげのやうに、何の抵抗もなく、くた／＼と草の上にたふれてしまつた。

『どうなすつたの？』

近よつて、よく／＼見ると、その顔は、痴呆のやうに筋肉がゆるみ、瞳孔が、ぼんやりひらいてゐる。――まあ、催眠術にかゝつてゐるんだわ――

とつさに、田鶴子の頭に靈感がひらめいた。

かの女は、月をあふいで何事か默禱してから、そつと大槻をだき起した。

『ね、大槻さん、あなたは、何でも、あたしのいふ事を聞くわね。』

『聞きます。聞きますとも。』

大槻は唇をぶる／＼ふるはした。

『あなたはこの島の司令官だつたわね。』

『そ、さうです。』

『ね、それぢや、あの牢獄の囚人たちね。あの人たちも、あなたの御自由になるのでせう。』

『なりますとも。』

『それぢやあたしを連れて行つて、あなたの偉いところを見せて下さい。』

『よろしい。いらつしやい。』

怒濤と闘ふ海國日本の國民性が痛快に分る

日本の海上活躍は華々しくも亦痛快の極みだ。見よ！**平田晋策先生**の新著『**われ等の海戰史**』には勇猛日本の颯爽たる姿が痛快に描かれてゐる。之ぞ眞個日本魂の發露、日本武士道の眞骨頂だ。然も日本海軍の將來を警告し、われ等日本民族の往くべき雄大な道が明快に示してある。ゼヒ御一讀を乞ふ。**（定價一圓五十錢送料十四錢）本社發行。**

大槻のボロジンは、よろ／＼と立ち上り、田鶴子に腕をとられて、草原の小路を、要塞の方へ降りて行つた。

それから、約一時間ほど後、田鶴子の舌にあやつられた大槻は、いかめしい顔をして、地下牢獄へあらはれた。

不意の巡視に驚いた衞兵長は、あわてゝ、案内に立つた。

『へへ……、今夜は監視兵が少なうございますが、嚴重な鐵柵を破られるやうなことは、ございませんから、御安心下さい。』

衞兵長は、もみ手をして、しきりに恐縮がる。

『あらいゝのよ。それに、今夜は、あたしたち、あの囚人の桂少佐ね。あの人と一寸相談したいことがあるの……』

田鶴子は衞兵長に、艶やかな一瞥をくれてやつた。

『あの人ね、いつまでも反抗してゐると結局自分の損でせう？だから大槻さん――このボロジンさんだわね。この人のやうにK・K・K團へ降伏しなさいつて、すゝめに行くのよ。』

『へへ……、それは結構なことでございます。あの少佐には、われ／＼手を燒いてゐますから、さうねがへれば肩の荷が下りますよ。』

衞兵長は、麗人の秋波に、すつかり悦に入つて、色々な鍵をがちや／＼鳴らしながらついて來る。

『衞兵長。その鍵をわたせ。』

大槻は、道々田鶴子から暗示されたことを、

そろ〳〵實行しはじめた。

『えッ、鍵をですか。』

『さうぢや、今日の會見は秘密だから、監視兵は全部、銃を置いて、しばらく外へ出ておれ。』

『はッ。』

衛兵長は、怪しいとは思つたが、K・K・K團の首腦の行動は、いつも裏に裏があり、ずゐぶん突飛なことも多いから、深く追究せず、

『ぢや、しばらく監視兵を外へ出して置きます。』

と、ことわつて、大聲をはり上げ、

『監視兵集まれッ。』と叫んだ。

そして五六人の監視兵が駈けつけて來ると、それを引率して、牢獄の外へ出て行つた。

『ぢや、參りませう。』

田鶴子は先に立つて、黒人牢獄とおぼしきうす暗い洞窟のやうな感じのする部屋の前へ進んだ。

脫走

——こちらは、桂少佐以下戰艦『朝日』の生存者と黒人兵たち。

陰鬱な牢獄の中で、脫走の隙をねらつてゐるのだが、警戒が嚴重でなか〳〵逃げられさうもない。

さすがに元氣者の黒人ジョンさへ、いさゝか疲れを見せてゐるのだ。

その時に、思ひもかけず、田鶴子が一人の怪人物をつれて、突然あらはれたのだから、桂源一郎も驚いた。

『おや、田鶴子さん。』

少佐は思はず立ち上つた。

『しッ。』

田鶴子は、手眞似で少佐を制し、大槻の耳に口をよせて何事かさゝやくと、大槻はにやりとうなづいて、牢獄の扉に鍵をさしこんだ。

ギギ……、鐵の扉が、きしみながらひらくと、田鶴子は、小走りにかけこんで、桂少佐にすがりついた。

『あのね、あの男が大槻なの……ボロジン司令官なのよ。マラー首領の靈術にかゝつてゐるから、もう後、十時間ぐらゐはあたしの思ひのまゝになるのよ。』

田鶴子は、戀しさ、したはしさを打ち明ける前に、囚人たちの脫走を急がねばならなかつた。

桂少佐も、久しぶりに匂やかな戀人の香に醉ひたかつたが、今は、生死の境だ。そんなロマンチックな夢は、後でゆつくり樂しむことにしよう。

彼は、上野兵曹、早川機關兵曹らに、小聲で命令を下し、最後に黒人ジョンをよんで、事情を聞かせてやつた。

ジョンの大きな眼は、豹のやうにぎろりと光つた。

『よーし、やりますよ。なあに、白人なんかに負けるものですか。どんな命令でも出して下さい。私の生命は、あなたにさしあげました。』

若禿、薄毛、毛禿
等でお悩みになつて居る方が最新養毛料『ワカミツ』を御使用になつて居る中に立派な黒毛が生えて來たと云ふ御報告が續々と集つて居ります、議論は第二にして先づ誰方も御實驗下さる様にお奨め致します。
『ワカミツ』は有名藥店にあり。
一圓五十錢、二圓七十錢

『よしッ、たのむぞッ。』

桂少佐は、黒い大きな手をぎゆつとにぎりしめた。

大槻のボロジンは、阿呆のやうに、牢獄の中をぐる／＼歩きまはり、

『おい、みな、今日から、わしの命令を聞かねばならんぞ。マラー首領？ マラーが何んだ。あんな奴は、もうこの世にゐないよ。ヘッヘッヘッ、絶壁からすべり落ちて、かはいさうに、今ごろは鮫の餌食さ。田鶴子さん、ね、これからは、二人でこの島を自由にするんですよ。ヘッヘッヘッ、うれしいね。靈智學？ ふふふ……、靈智學ならわしが一番上手ぢや。あんなに厭がつてゐた田鶴子さんが、とう／＼なびいて來たぢやないか。ヘッヘッヘッ。』

とりとめもない言葉を、牛のよだれのやうに、だら／＼と吐きながら、田鶴子の姿を、前から後から、だらしなく眺めてゐる。

『さうよ。あたしは、あなたのいゝ人なのよ。だから、おとなしくついてゐらつしやいね。ね、あなた、これから、戰艦「朝日」に乘つて、どこか、もつと美しい島へ行きませんこと？』

田鶴子は、うまく誘ひをかけた。

『この島でもいゝぢやありませんか。』

『でも、もつと明るい島がいゝわ。そしたら、この人たち、みなあなたの部下になつてよ。ね、「朝日」に乘つて、どこか東洋の近くの島へ行きませんこと？』

『「朝日」か、ヘッヘッ、「朝日」はいゝ戰艦ですよ。なにしろ、わしが寢食を忘れて、こしらへなほしたんだからね。絶えず、電流を通じて鋼鐵をすつかりＺＸ鐵に變化させてしまつたから、もう、どんな爆彈だつて、魚雷だつて、あれを沈めることは出來ませんよ。ヘッヘッ、もとの約三倍以上の强さかな。いよ／＼天下無敵の大艦だ。さうだなあ、あなたと二人、あれで、東大洋を乘りまはしたら、こいつは一寸、うれしいね。』

大槻は、にや／＼と空想にふける眼さしをした。

田鶴子は、その顔つきが身ぶるひするほど厭なのだが、さあらぬ態で、

『さうよ。さうしませうよ。今から、すぐ乘りこみませう。』

――その間に、桂少佐は、部下と黒人兵を指揮して、武器倉庫から兵器、彈藥を引つぱり出し、約八十名の者が、すつかり武裝してしまつた。

『どうだ、腹がへらぬか。』

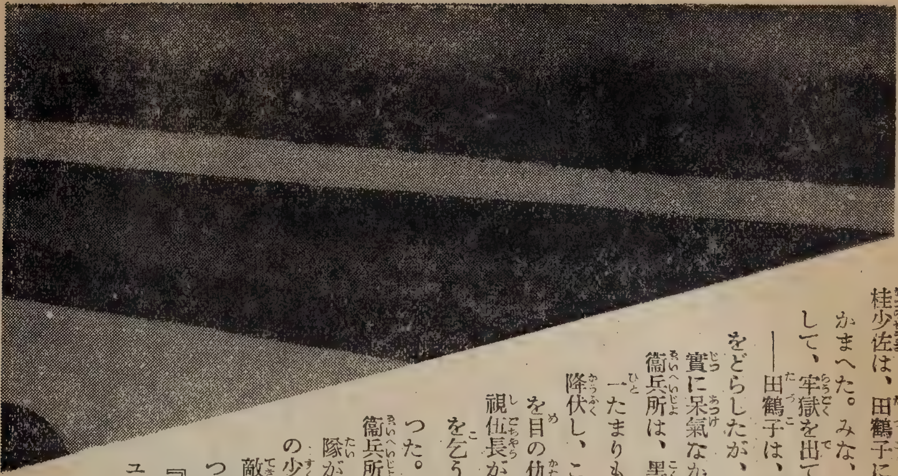
桂少佐は、みなの顏を見まはした。黒い顏、青い顏、骨ばつた面、髯面、いづれ劣らぬ島流しの俊寛か、人喰人種のやうな面がまへである。

しかし、みな氣が立つてゐるから、平生の空腹が空腹に感じない。

『なあに、ようがす。それより早く「朝日」を乘つとりたいですよ。』

上野兵曹は、自動銃の引鐵に手をかけて、今にもぐいと引きさうな恰好をした。

『よしッ、ぢや、まづ上野兵曹は、田鶴子さんと大槻を守つて「朝日」へ行け。五十人ほど連れて行つたら、いゝだらう。わしはジョンたち、黒人兵の中から、三十人ほどひき拔いて、衞兵所を襲撃する。――田鶴子さん。そろ／＼はじめませう。』



桂少佐は、田鶴子に目くばせして、銃をかまへた。みな、しのび足で、息を殺して、牢獄を出て行つた。

——田鶴子は、恐ろしい冒險に胸をどらしたが、いざやつて見ると、實に呆氣なかつた。

衞兵所は、黑人兵にかこまれると一たまりもなく白旗を振つて、降伏し、ことに、平生、桂少佐を目の仇にして苛めてゐた看視伍長が、涙を流して憐れみを乞うたのは、みじめだつた。

衞兵所が降伏すると、遠征隊が出てしまつて、人數の少なくなつた要塞には敵らしい敵がゐなかつた。

『朝日』の職工たちはユダヤ人が少なく、みな金のためにやつて來てゐるのだから、生命がけの抵抗なんかやる者はなかつた。

約三十分、嵐のやうに脫走隊が走りまはると、戰艦『朝日』は、すでに桂少佐のものだつた。

少佐は、八十名の部下と、降伏した職工四百名を指揮して、錨をまき上げさせた。

いよ〳〵入江の岸壁をはなれようとする時、大槻九一のボロジンは物怪のついたやうに、あわてゝ、岸へ飛びうつつた。

『あら、どうなさつたの？』

田鶴子が聲をかけると、彼は血走つた眼を光らせて、

『だめだッ、靈智學の秘密書類を忘れたッ。』

と叫び、猿のやうな速さで、要塞本部の方へかけ出した。

『まあ、お氣の毒な方——』

田鶴子は、いやな男ではあるが、今となつては、いぢらしさをおぼえて、悄然と肩を落し、大槻の影が見えなくなるまで、見送つた。

あはれな怪人よ。彼が秘密書類を持つてふたゝび岸壁へかけつけた時には、『朝日』は早くも入江を出て、Ｋ・Ｋ・Ｋ岬にさしかゝつてゐるのだ。

いくら、叫んでも、わめいても、せん術はない。

半狂人の大槻九一は、地團駄ふんでわめき散らしたが、答へるものは、舊部下の冷笑ばかりだ。

『歸せッ、歸せッ。』

彼は、血の出るやうな聲をしぼつて、岸壁をかけ出した。田鶴子の幻が、人魚のやうに水底から、白い手をくねらして、まねいてゐる。

大槻は、その幻影に誘はれるまゝ、海岸の絶壁の上を、どこまでも〳〵走りつゞけた。

『朝日』の雪辱戰

戰艦『朝日』の櫓の上では、久しぶりに桂源一郎と田鶴子が肩をならべて、じつと默つたまゝ心をかよはせてゐた。

夜はふけて、月は西の空にかたむき、K・K・K島の影は、いつしか後ろに消えてしまつてゐる。

岬をはづれて少し沖へ出てから、砲臺から射たれたが、何の損害もなかつた。

十萬噸の大戰艦『朝日』は、今や、新しく武裝して、ゴロス攻擊の雪辱戰に向ふのである。

金波銀波は舳に玉と散り、五十糎砲は、黑々と長蛇の膚を光らせてゐる。

田鶴子は、戀しい人の胸にだかれて、うつとりしてゐたが、小さい

聲で沈默を破つた。

『ね、あの大槻さんて、お氣の毒ね。』

『うん、しかし、あれも天人ともにゆるさぬ賣國奴だつたけれど、知らず／＼の間に、この艦を强くして、八洲へ返してくれたんだから、一種の罪のあがなひをしたわけだね。……どうせ末路はろくなことはないだらうから、あなたは祈つて上げるといゝね。』

『えゝ、祈るわ。……マラー首領の冥福を祈つて上げるわ。』

すぎ去るものは、みな美しい感じがする。田鶴子は今となつては、二人の惡人を憎む氣が起つてこない。

復讐戰の首途に似あはしからぬ振舞とは知りながら、甲板にひざまづいて、敵人の罪の許しを、神に祈らずにはゐられなかつた。

『朝日』は、かの女の祈りを乘せて、一路北へ北へ、ゴロスをめがけて急行する。

月は西の水平線に沈まうとしてゐるが、桂少佐以下、黒人ジョンらの戰鬪心は、天をついて燃え上がる。

ジョンは、五十糎砲の巨口の下に立つて、黒人獨立の歌を、聲をしぼつて唱つた。

『あゝ專制者白人よ、武器を捨てよ。
われ等もまた神の子なり。
獅子吠ゆる荒原
月照る山の密林
萬里の沙漠
あゝわが故里は奪はれたり
起て黒人獨立黨
神のたまひし母國
汚されて休むべしや
起て黒人獨立黨
起ちてひるがへせ
あゝ光榮の黒色旗！』

――胸をしめつけるやうな歌聲が、祈りをつゞける田鶴子の耳へ流れて來た。

○

『朝日』が、ゴロス國リスボン灣の沖へあらはれ、海岸砲臺に向つて五十糎砲彈をぶつ放した時、ゴロス人は一人殘らずふるへ上つた。

爆擊機が襲ひかゝつたが、ZX鐵に對しては、强烈な爆彈も、石に卵をぶつつけるやうなものだつた。

GZガスを吹きかけようとしても、そのガスは、K・K・K島にしかないのだから、手のつけやうがない。

ゴロス軍は、盲滅法に砲臺のありとあらゆる大砲を射ちまくり、爆擊機のたえ間ない連續攻擊をやつて、怪物戰艦を追ひはらはうとした。

元來、軍艦と砲臺との射ち合ひは、軍艦の方が不利だときまつてゐるものだ。

しかし、『朝日』のやうに、超々弩級の防禦力、攻擊力を持つてゐる大戰艦は別だ。

ZX鐵で、攻擊をはねつけながら、敵のひるむ隙を見ては、五十糎

金儲の鍵

『いくら努力しても金が儲からぬ、金が貯まらぬ』と憂鬱になるのは大損です。先づ實踐經濟家として令名ある谷孫六氏の名著『孫六錢話』を御覽下さいその輕妙な面白い話の中に誰でもキット『アッ！ これだ！』と云ふ秘策を會得する事が出來ます。

定價一圓五十錢（送料十二錢）

大日本雄辯會講談社發行

の巨彈をたゝきつける。春の戰鬪では、相手が海神潜水艦のやうな小さい奴だつたから、防禦力のやゝ弱いのが祟つて、思はぬ不覺をとつたのである。だが、今度はちがふぞ。

防禦力が見ちがへるやうになつたのみならず、相手が大きなリスボン要塞だ。『朝日』の攻撃力は、こゝにはじめて、思ふぞん分に、威力をふるふチャンスをつかんだのである。

五十糎砲彈の炸裂するところ、岩は飛び、壘はくだけ、兵營は、づれ、重油タンクは地獄の猛火をみなぎらせ、ゴロス兵は、靑くなつて生きた心持がしない。

つひに、リスボン市は大火災を起し、海岸の椰子の林さへ、火焔につゝまれてしまつた。

田鶴子は、裝甲された櫓の中で、反射レンズにうつる悲慘な姿に、思はず眼をそむけ、一時も早く戰鬪が終ることを祈つた。

――この時、八洲でも、同じやうな恐ろしい地獄繪卷が、くりひろげられてゐたのだ。

最後の一戰

三原島を占據したゴレアスの遠征隊は、その夜、進んで長安を攻撃した。

同時に、三百六十機の鷲飛行艇隊を三手にわけ、本隊は長安へ、第一遊撃隊は洛陽、第二遊撃隊は、八洲アルプスの佐用平に向はせた。

この總攻撃こそ、世界戰史にながく殘さるべき大戰で、その悲慘、深刻なことは、一寸名狀出來ないものだつた。

青潮海上要塞は、ほとんど海岸まで迫つて、四十糎砲を亂射亂撃する。

ライオン戰車の大群は、文字通り獅子奮迅の勢ひで、あばれまはつた。

三十名の化學兵は、サタン・毒ガスをふりまき、マラー光線を放射して、百鬼夜行の態たらくだつた。

長安の死傷者は、幾萬か數知れず、敵味方の屍骸は、累々として山を築いた。

戰ひは、夜が明けてつゞき、わが陸軍の勇戰で、青潮海上要塞を三つまで、大地雷で爆破し、ライオン戰車の半數をし止めたけれど、敵はいよ／＼たけり狂ひ、このまゝで行けば、長安は全滅のほかはない。

小村中將の飛行艇『深峯』は、分身機をあやつつて、鷲飛行艇隊を散々になやまし、夜明けまでには、百機以上を射ち墜した。

だが、この超人の奮鬪も、敵の息の根をとめることは出來ず、朝やけの空をこがす火災の焔は、死の神の亂舞かと思はれるばかりだつた。

――しかし、燃え上つた焔は、かならず消えねばならぬ。

八洲アルプスの深山、佐用平では、長岡大博士が、戰亂の火を消すべき、大兵器を、ほとんど造り上げようとしてゐるのだ。

大隱、白砂、黒百合、駒ケ嶽の高峯にかこまれた深峯岳の高原――深峯川をめぐらす佐用平は、長岡大博士の科學の聖場だ。

永遠の神秘をたゝへる湖の近く、大岩窟の中に立てこもつて、十二人の工學博士を助手に、科學界の大西郷は、今やロケット空雷の仕上

げにいそがしい。

前夜、この佐用平を襲つて來た鷲飛行隊は、深峯山脈の上空を流れる深峯毒氣流にまきこまれて、あへない最期をとげてしまつた。

しかし、この佐用平が、どんなに難攻不落であつても、それにこもつてじつとしてゐるだけなら、母國を忘れた卑怯者だ。

長岡博士は、敵火の洗禮をうけてゐる長安のことを想ふと、矢も楯もたまらない。爆破しさうなその感情を、じつとおさへて、ロケット空雷の、最後の點檢をやるのは、他人にはとてもわからない苦しみだ。一寸でも計算がちがつたら駄目なのだから、亢奮してはいけない。しかも、母國の急を目の前に見て、だれか、亢奮せずにゐられるだらうか。

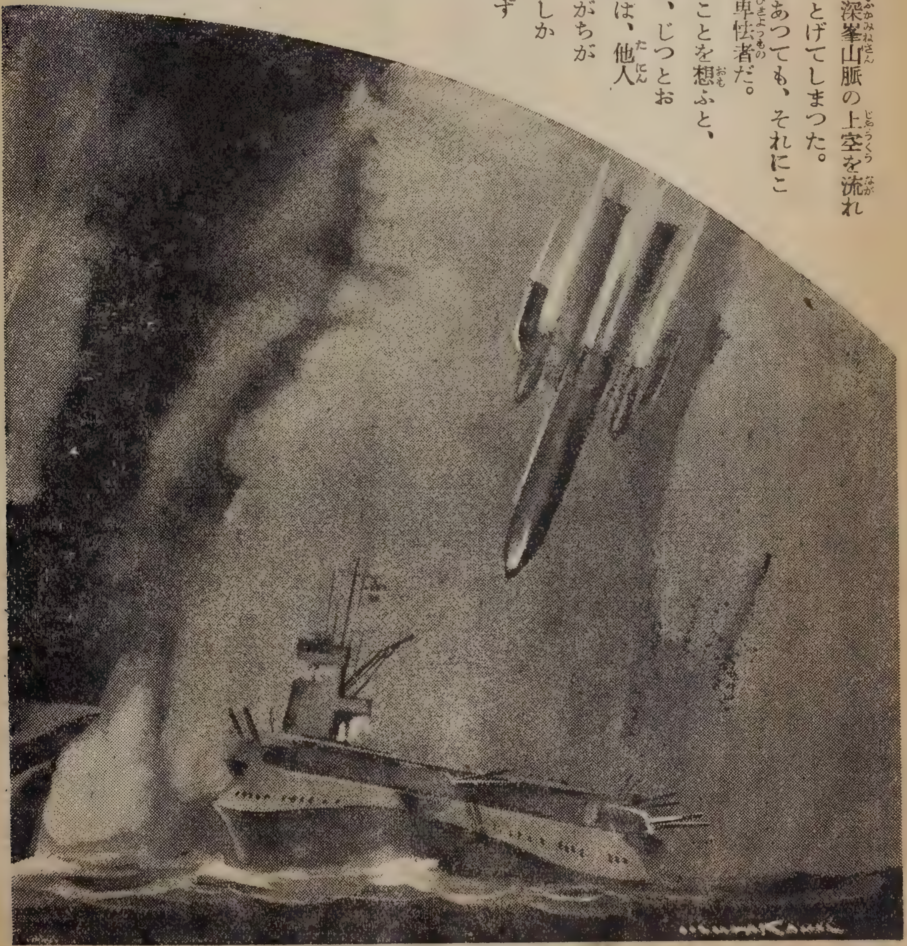
さすがの博士も、何回も檢査の手を休めて、眼をつぶつた。

しかし、つひに、檢査は終つた。時に午前七時、太陽は深峯岳の上高く、さん／＼と神神しい光りをふりそゝいでゐる。

『檢査終り。』

博士は、死刑の宣告を下す法官のやうに、嚴肅な態度で叫んだ。

十二人の助手は、萬歳を叫ばうとしたが、みな唇をわな／＼とふるはすばかりで、聲が出なかつた。



――たゞちに、長安警備司令官大田中将に向つて、密電が打たれた。

『青潮海上要塞の位置は、東經〇〇〇度〇分〇厘、北緯〇〇度〇分〇厘、右間違ひないか。返電と同時に、わが軍を敵海上要塞より、五キロ以上の距離に遠ざけられたし。』

すぐに返事があつた。

『青潮海上要塞の位置間違ひなし。わが軍はたゞちに後退す。四十分の猶豫をおねがひす。』

氣味の悪い四十分はすぎた。

その時、青潮海上要塞の頭上、白雲の間から、流星のやうなものが落下した。

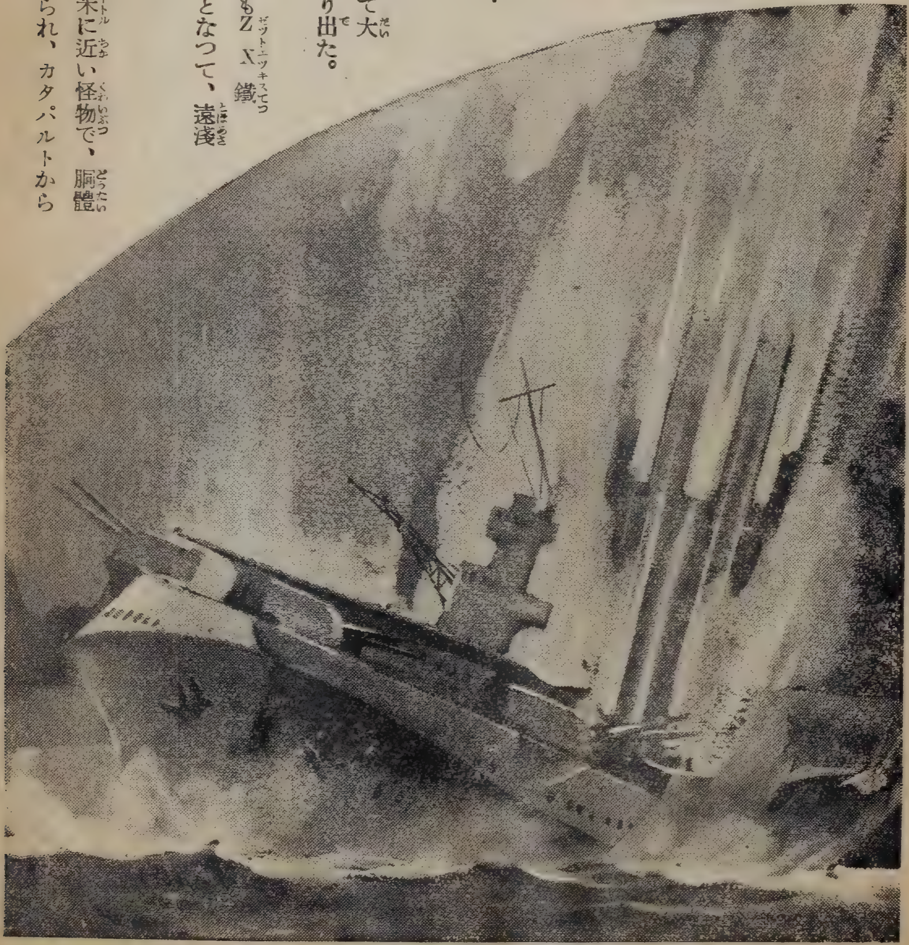
ロケット空雷だ。

あッと思ふいとまもなく、大地をゆり動かして大轟音が起つた。赤い火の塊りが、わあッとをどり出た。黒煙が天に冲した。

神の怒りかと思はれるほどの大爆破だ。さしもZX鐵をほこる青潮海上要塞も、七花八裂のありさまとなつて、遠淺の海に、殘骸をさらさねばならなかつた。

恐ろしい、ロケット空雷の威力よ。

ロケット空雷は、空を飛ぶ大魚雷だ。長さ百米に近い怪物で、胴體の中には、強烈な火薬、毒ガス、焼夷薬がつめられ、カタパルトから發射される。



發射されると、ロケットが壓力ガスを噴き出し、その勢ひで、ものすごい速力を出して、眞空圏まで飛び上る。

そのまゝ、大虚空を流星のやうに、七、八千キロの超快速力で走り、自動的にめざす地點へ落下するのだ。

長岡博士の手がカタパルトの發射ボタンにふれると、空雷は、助手たちが精密に計算した針路を通つて、全世界のどこへでも飛んで行く。

眞に、『神の劍』とでもたゝへたい大兵器だ。

長岡博士は、青潮海上の要塞の擊破が終ると、矢つぎ早に、作戰本部を通じて、ゴロス政府に向つて、降伏せよと打電した。

「我れは難攻不落の深山にありて、全世界を攻擊するに足る新兵器を作成せり。不沈不敗をほこる青潮海上要塞は、すでに新兵器によりて全滅せしめたり。一日も早く休戰せられよ。然らずんば、我れは、首府ゴロスを攻擊すべし。一時間以內に回答せよ。」

一時間はすぎた。何の返事もない。

『仕方がない、やらうか。』

長岡博士は、カタパルトの發射ボタンに指をかけた。ぐいと押すと、百米の長大な怪物は、うなりを立てゝ中天に舞ひ上つた。

雲間に、白銀色の膚を光らせて、小さく消えて行く空雷を見送つて博士は、暗然とした。

それから、約三時間後だ。ゴロス政府から、急電があつた。

『休戰したし。攻擊御中止を乞ふ。』

――『とう〳〵參つたか。』

長岡博士は、ぐつたりとなつた。

『どうだ、ユダヤ人は、とう〳〵八洲だけは犯すことが出來なかつただらう。』

博士の眼には淚が光つた。

『おい、わしは少し休んでくるよ。』

博士は、助手たちを殘して、岩窟から外へ出た。森の中の小舍へ入つて、疲れた軀を木の椅子へうづめ、煙草を一本口にくはへた。

マッチをすつて、火をつけると、『チェリー』の淡い香りが鼻の先をくすぐつた。

『久しく「スリーキャッスル」を吸はないぞ。そろ〳〵あのエヂプト煙草が戀しくなつたわい。』

博士は、少年時代から見なれた深峯岳の雪をあふいで、とりとめもない空想にふけり出した。

大團圓

さて、この暗示的な物語も、いよ〳〵終りになつた。空想のやうで空想でないロケット空雷が、敵の心臟を突いて、最後の勝敗を決した。

ユダヤ人の結社は、ゴロスの戰敗と、ユダヤ亡國以來の大偉人とあふいだ首領マラーの變死によつて、にはかに影がうすくなつた。

八洲は、ユダヤのやうな權謀術策を使はず、正義と愛をもつて、自然に、世界中心國家と、あふぎ、したはれるやうになるであらう。

カルタゴ島とK・K・K島は、八洲の領土に編入され、平和な、美しい綠の樂園と生れ變つた。

K・K・K島に殘された大槻九一は、行方知れずになつた。

桂源一郎と田鶴子は、戰艦『朝日』を祖國に捧げると、嵐のやうな群衆の熱狂をさけて、若い身空を、佐用平の奥に、隱棲してしまつた。

小村中將は、海軍の花形として、間もなく、大將になるであらう。

田鶴子の兄一郎は兄の後を繼ぐべく外交官、あやまつて賣國奴の眞似をした從兄の寛は、事が秘密にすんで、商人になつた。

黒人ジョンは、アフリカに黒人の獨立國が築かれて、大臣の一人におされた。

――最後に長岡大博士は、なぜか科學の研究を止して、佐用平で釣をしたり、百姓の眞似をしたりして、すつかり村夫子になつてしまつた。

桂源一郎夫婦は、何くれとなくこの老偉人の身のまはりを氣をつけてゐたが、半年ほど後に、老木が倒れるやうに、ぽつくりと亡くなつてしまつた。

『先生、しつかりあそばせ。』

田鶴子が、耳もとへ口をつけて、はげますと、かすかに眼をひらき、

『遺言は、机の引き出しにしまつてある。達者でお暮しなさいよ。』

それが最後だつた。

葬式は、國葬の禮で行はれたが、桂夫婦は、後で心ばかりのつゝましい野邊の送りをした。

遺言は、人生、世界の最奥の秘密について、驚くべきことが記されてあつた。

それは、マラーの思想のやうな、邪惡なものではなく、眞に人生の光明ともなるべきものだつた。

桂源一郎は、博士を神の化身だと信じてゐる。いつかは、遺言の發表によつて、その眞相が諸君にも判る時が來るであらう。

なほ、遺書の一部には、意外なことが書いてあつた。それは賣國奴大槻九一に關することだ。

『わが愛弟九一は、賣國奴の汚名を甘受して、K・K・K團に加入せり。されど、彼が靈智學を研究し、國外へ去りて、敵國に加擔したるはわが命令による。

彼は、敵をも味方をも完全にあざむき、骨の髓からのK・K・K黨員の如く、なりすましたり。しかも、機會を狙つては、我れに秘密通信を送り來り、敵の內情を知らしめたり。

九一よ。祖國の人々は汝を賣國奴と罵る。しかし、兄たる我れは汝の本心を知れり。汝は偉大なる愛國者なり。靈智學研究の結果、中途にして、半ば狂せりといへども、本心は失はず。よく八洲軍人として、秘密任務を果せることをよろこぶ。』

――『まあ、大槻さんは、そんなお方だつたのかしら。』

田鶴子は、はるかなる波のかなた、不運な愛國者が永久に眠つてゐる絕海の孤島を思つて、そゞろに、胸の痛むのを感ずるのだつた。

（をはり）

愈々出る「富士」臨時增刊!!
お待ち兼ねの九月十九日お忘れなく―

文明人はだん〳〵禿げて來る

　世の中が進歩するにつれて男も女もだん〳〵禿げて來る。地球上の人類が全部くり〳〵坊主の禿頭になつた有樣は考へただけでも吹出さずには居られない珍風景ではありませんか。然しこのまゝで進んだならこの言葉も案外笑へない事實なのです。

　なぜかと申しますとこの言葉は皆樣を笑はせる爲めに漫談家がひねり出したものでは絕對になく、その道の權威者たる有名な博士連中によつて發表された論文の結論なのですから。

　先づ機械文明が發達するにつれて人間は極度に頭腦を使はねばならなくなつて來ます。この頭腦を酷使する事は非常に毛根を衰弱させ脫毛の原因となるもので、俗に心配すれば頭が禿げると云はれて居る事實でうなづける事と存じます。又あまり頭を惱ました爲めに一夜にして白髮となつたと云ふ話も滿更嘘ではないのです。

　又近代的整容の上から好まれるきちんとした固い帽子が禿の原因である事は一般常識ですし、最近米國では御婦人の斷髮は脫毛、禿の一大原因である事が發表されて大問題になりました。

誰方も先づお試し下さい！

近代人の整髮に最新養毛料

そればかりでなく日本人特有の漆黒の美髪をきらつて、強いコテや電氣で無理にちゞらせる事が毛髪のために決して良いものではないと云ふ事は、御當人でも充分御承知のはずなのです。

それにもかゝはらずなすすべを知らずに禿げるにまかせて居つたり禿の前驅である不快なフケ、痒み、拔毛等の毛髪諸疾患に對して、單に顔だけをしかめて居るのではそれこそ本當に文明人の恥辱と云はざるを得ません。

近代人はすべからく進歩した科學の生んだ養毛料『ワカミヅ』をお使ひになつて毛髪のお手入れをおこたらぬ樣にお願ひ致します。

この最新養毛料『ワカミヅ』は實に爽かなつけ心地と奥床しい芳香とを有つて居り文明人のヘヤートニックとして最適の毛髪お化粧料であるばかりでなく、その道の權威井上猛夫博士と掛札功先生とが永年多數の臨床實驗から研究創製したものだけに、毛髪毛根を淸淨にし、フケ、拔毛、若禿等の毛髪の諸疾患を治療し、毛根に榮養を與へて毛髪の發生伸長を助長する獨特な作用を有つて居る最新製品でありますから、朝夕毛髪のお手入れをなさる時數滴ふりかけて、地肌にすりこむ事と、御洗髪の後に御使用になるだけで不快なフケ拔毛、痒み等に惱む事なく、何時もスッキリと艶やかな美髪を保つて居る事が出來ます。

又若禿、薄毛、無毛等でお惱みの方でもこの『ワカミヅ』をお使用になつて居る中にだん／＼漆黒の毛髪が生えて來たと云ふ實驗報告も續々と發賣元の講談社商事部に集つて居りますから、こんな方はゼヒとも御試しになる價値があると云ふものです。

とにかくこれで眞の文明人は禿げないと御安心が出來ませう。

『ワカミヅ』は聖路加病院の井上猛夫博士と掛札功藥局長とが多年の實驗研究の結果創製された、最も新らしい科學と學理を應用した養毛料です。

この『ワカミヅ』をつけるとフケ、拔毛、若禿等の毛髪諸疾患を治療し、毛髪毛根を淸淨にし、毛根に榮養と活力を與へて毛髪の發生伸長を促進し、進んで漆黒の美髪を養ふ獨特の作用を有つて居ります。

フケ、拔毛の方
若禿、薄毛の方
切毛、癖毛の方
美髪を望む方

は勿論、誰方も日常養毛料として御試用になる樣お奬め致します。

全國有名藥店にあります。

定價一瓶一圓五十錢、徳用二倍量二圓七十錢
もし藥店に品切れの節は送料内地十四錢其他は四十九錢を添へ東京小石川音羽三ノ一九發賣元へ直接御注文下さい。

發賣元　大日本雄辯會講談社商事部
總代理店　玉置合名會社

ワカミヅ

上達必勝 將棋の急所

八段 金子金五郎

實際の戰爭にも正攻法と奇襲法とある樣に、盤面の駈け引きにも虛實の兩道がある。普通定跡と言はれてゐるものは、正攻法卽ち實の攻擊法陣立であつて、奇襲の戰法――虛道には、所謂『嵌め手』がある。

『嵌め手』と言ふと、正々堂々の戰ひを好む諸君は或ひは顏をしかめるかも知れないが、半面の解釋に物を棄てゝはならない。『嵌め手』を知ることは、相手を嵌め、轉倒させることより、寧ろ自分が敵から嵌められ、轉倒しない用心にである。敵を知り己れを知るのが戰爭に勝つ要諦とされてゐるが、『嵌め手』は敵を識る重要な一部であつて犬死を避ける一助である。

以下實戰上諸君が經驗しさうな陷穽から順次調らべていつてみよう。輕い氣持からは、緣臺將棋なぞの座興の一戰にこれを應用して、『あッ！』と言はせてみるのも面白いかも知れない。

なほ、『嵌め手』は六枚落の稽古將棋から、平手將棋までいろ／＼研究されてある。が、最初に興味本位から平手の『嵌め手』二三紹介しよう。

平手向ひ飛車戰法（後手を嵌めること）

『手順』

七六步　三四步　六六步　八四步
七七角　八五步　八八飛　六二銀
六八銀　五四步　六七銀　四二玉

『說明』

『向ひ飛車』戰法は土臺持久戰模樣の將棋なのだが、先手方それを應用して、ジワリと敵に氣を許させて置いて、そこを嵌めようといふのである。

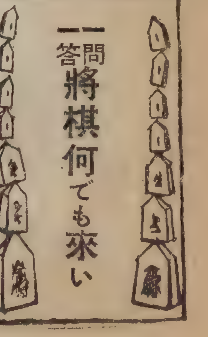
右の手順の中、敵の五四步に對し尋常に五六步と受けず、六七銀と上つたのがそろ／＼誘惑にかゝつたので、次

（圖は四二玉迄）

後手持駒

	九	八	七	六	五	四	三	二	一
一	香	桂		金		金	銀	桂	香
二		飛		銀		玉		角	
三	步		步	步		步		步	步
四					步		步		
五		步							
六			步	步					
七	步	步	角	銀	步	步	步	步	步
八		飛							
九	香	桂		金	玉	金	銀	桂	香

先手持駒



一問一答 將棋何でも來い

【問】 仲住居戰法とはどんな駒組ですか？（新潟縣 山添和吉）

（解答） 山本樟郞七段

（圖は仲住居の駒組）

上手持駒

	九	八	七	六	五	四	三	二	一
一	香	桂			玉			桂	
二			金				金		
三	步	步	銀	步	步	步	銀	步	步
四			步				步		
五								步	
六			步						
七	步	步	銀	步	步	步	步		步
八			玉	金		銀		飛	
九	香	桂				金		桂	香

下手持駒 角

よく『飛香落』將棋に用ひられる上手方の戰法で、俗に『割金』とも『御酒德利』とも言はれてゐます。圖を御覽になれば判る樣に、上手方

ぎに後手方敵の六七銀にすつかり氣を許し、いゝ氣持で四二玉と玉の圍ひに就いたのは、實はまんまと先手の罠に引ッかゝつた譯なのだ。

どう引ッかゝつたか?

『手順』

八六歩　同歩　同角　同飛　同飛
九五角　八五飛打　八六角　同飛
七一金　八二歩打

……これにて先手方斷然優勢。

『說明』

こゝで突如、先手方は八六歩と突つかけたのだ。そして後手方同歩の時同角、愈〻持久戰の假面をかなぐり棄て『嵌め手』の槍尖をピタリと向けた。喫驚かうなると後手方『おや!』と、せざるを得ない。併し、また暫らくして『にやり』と笑ふかも知れない。

『おや!』と驚いたのは、八六同角の王手に對し、假令五一玉と避けても四二角ナル、同玉、の時八二飛ナル、の順が殘る。これでは、飛、角、の交換の上に、先手に龍を自陣內に作られる。後手方仰天するのも無理がない。

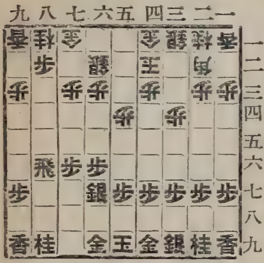
だが、暫らくすると、八六同角を强く同飛と取る順に思ひ付くかも知れない。同飛、そして同飛、の時九五角打。これでは何と、立派に敵の裏を掻いて、『王手飛車取り』だ。で、思はず『にやり』とするかも知れないが、實は裏には又その裏がある。

九五角打に對して先手方にも八五飛打、の好手があるのだ。この局形としては寧ろ八二飛と打ち度い處だが八二飛打なら七一金、八五飛ナル、八六角、同龍、八二歩打……。

で單に龍を作つたと言ふだけで、却つて八筋を固められる。それでは含みがない。そこを八五飛打なら、八六角、同飛、七一金、八二歩打、の順序となり、これは確實に桂得が出來る。

後手方としては『にやり』と笑ふどころではないのである。

先手持駒　角



後手持駒　飛　歩

(圖は八二歩打迄)

『その對策』

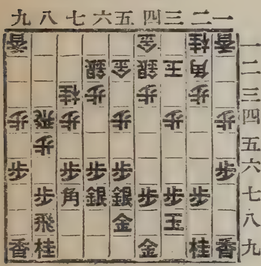
それでは讀者諸君が後手方としたら、この先手の誘惑をどう切り抜けたらよいか? 自ら作戰は諸君の胸中に浮ぶであらうが、最も定跡的なのは、

七六歩　三四歩　六六歩　八四歩
七七角　八五歩　八八飛　六二銀
六八銀　五四歩　六七銀　七四歩
五六歩　九四歩　九六歩　五二金右
四八玉　七三桂　三八玉　四二玉
五八金左　三三玉　一六歩　一四歩
四八銀　四二銀　五七銀　八四飛…

右の手順である。これなら後手方敵から乘ぜられる些かの隙もなく、全く互格の棋勢と言つてよいだらう。

要するに、先手方の六七銀の『誘ひの隙』に對して、吾れ關せずと七四歩と桂の捌きを作る處が急處である。なほ、七四歩の處五五歩と五筋に位を張る指し方もあるが、これは以下指し惡い局面となるから、諸君は矢張り七四

先手持駒　ナシ



後手持駒　ナシ

(圖は八四飛迄)

玉が中央に住つてゐるので、『中住居』、また、金將を左右に玉が割つてゐるので『割金』、更に丁度左右の金將が神前の御酒德利の形の樣に並んでゐる處から、『御酒德利』。等、等、等、の名稱が生れたものでせう。

なほ、參考までに本圖面になるまでの手順を記してみますと、

三四歩　七六歩　三二金　二六歩
四二銀　二五歩　八八角ナル　同銀
三三銀　四八銀　七二金　七七銀
六二銀　六八玉　七四歩　七八玉
七三銀　六八金、……。

【問】かど番とは?

(岡山縣　丸山　德造)

(解答)　　**菅谷北斗星**

近年將棋界から『指し込み』手合制が姿を消したので、この言葉を御存知ない方があるかも知れませんネ。

昔は(七八年前までは)同段の者でも、四番負越すと一段格下げされたものです。例へばA八段とB八段と對局し、B八段が四番負け越すと、半香(香平交の手合割)A段に引かれたものです。これを『指し込み』手合と言つたのです。

その『指し込み』手合の場合、B八段がA八段に三番負け越したとします

歩と突いた方が無事であらう。

向ひ飛車逆戰法

今度は前項とは逆に、敵が『向ひ飛車』戰法で來るのを、かゝると見せてあべこべに敵を嵌める逆腕の研究をしてみよう。嵌めたと思ふ敵が、却つて嵌められてゐるのだからなか／＼面白い。

『手順』

七六歩　三四歩　二六歩　四四歩
二五歩　三三角　七八銀　三二銀
五六歩　五四歩　七七銀　四三銀
七九角　二二飛　六八玉

（圖は六八玉迄）

後手持駒　ナシ

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
v香	v桂	v銀	v金	v王	v金		v桂	v香	一
							v飛		二
v歩	v歩	v歩	v歩		v銀	v角	v歩	v歩	三
				v歩	v歩	v歩			四
							歩		五
		歩		歩					六
歩	歩	銀	歩		歩	歩		歩	七
			玉				飛		八
香	桂	角	金		金	銀	桂	香	九

先手持駒　ナシ

『說明』前には後手方『六七銀、四二玉』と寄つて嵌められたが、今度は先手方自分から六八玉、と寄つたのが『誘ひの隙』。

かうなれば後手方二四歩、同歩、同角、と急戰を挑んでくるのは、ほゞ想像されよう。だが、そこが『嵌め手』先手方の望むところはまさしくその筋なのだ。

『手順』

二四歩　同歩　同角　同飛　同飛
一五角打　二五飛打　七八玉　二三
歩　二四角右　同歩　二二飛打　三
二銀　二四角　三三角打　同角ナル
同桂　二五飛ナル　同桂　二八飛打

（圖は二八飛打迄）

後手持駒　飛角

九	八	七	六	五	四	三	二	一	
v香	v桂	v銀	v金	v王	v金			v香	一
						v銀			二
v歩	v歩	v歩	v歩					v歩	三
				v歩	v歩	v歩			四
							v桂		五
		歩		歩					六
歩	歩	銀	歩		歩	歩		歩	七
		玉					飛		八
香	桂		金		金	銀	桂	香	九

先手持駒　角歩歩

『說明』この狙ひの先手方の急所は、一五角打、二五飛打、の時に七八玉、と寄る處で、これは一寸氣が付かないが非常に鋭い妙手だ。この場合後手方としては一五飛と角を取れば、二四角と飛車を取られた上に、又『王手飛車取り』が二重にかゝるのだから、そんな馬鹿な手は指さない。

當然二三歩打と防禦する。と二四角右、同歩、二二飛打、……こゝで後手方二九飛ナルと猛襲して來れば、先手方の二一飛ナル。かうなれば先手方には續いて、二四角の出もあれば（敵龍が素抜きになるぞ！）悠々五三桂打と桂馬の褌を掛けても、面白い。絕對優勢だ。

で、後手方としては七八玉の妙手を指された以上は、どうしても守勢に就かざるを得ない。

なほ、二八飛打に對して二五桂を讓る意味に、二一飛打なら（歩切れである）二四歩打にて、利得となる。斷るまでもなく、二四歩打、同飛なら一五角打、にて『王手飛車取り』のノック・アウトとなる。

以上の樣な譯で、同じ『向ひ飛車』形にしても、攻めて『嵌め手』あれば、守つて『嵌め手』あり、と言つた調子。讀者諸君には前記兩戰法よく／＼比較お調べあつて、實戰に應用、虛遣の妙味を發揮されるのは御自由である。

居飛車角替り戰法

ネ。その場合第四番目の手合（もし負ければ半香にされる）を指してかど番と稱したものです。つまり手合割が直るか直らないか？の瀨戸際の對局を言ふのです。

【問】八段諸先生方の趣味を教へて下さい。

（長野縣　戸田銀三）

（解答）　菅谷北斗星

お年齡の順から申し上げますと、まづ（木見八段）お酒でせう。何しろ對局に上京されるにも、酒瓶のお供が付いてくるのですから、朝もよし晝もよし晩もよし、の酒豪。だが、決して亂れませんから御安神下さい。

（大崎八段）多趣味枚擧に遑なしですが、就中刀劍書畫、盆栽の蒐集。角力も好きなら野球は指定席を持つてゐると言つた多角的です。近頃鯉釣りを始めたさうですが、將棋同樣左手で釣竿を握る樣ですから、器用なもんです。市川の鯉も定めて喫驚してるでせう。

（土居八段）さて、これは困つた。飄々として一箇所に停滯することを好まない同氏は、矢張酒、そして醉後の漫

（先手方御用心の事）

次ぎはよく出來る形の「居飛車角替り」と言ふのを一ツ。これは讀者諸君の中に辛い目に既に逢つてゐる方があるに違ひない。

「手順」

七六歩　三四歩　二六歩　三二金
二五歩　三三角　同角ナル　同金
八八銀　二二飛　三八銀　四二銀
二七銀　二四歩　二六銀　二五歩
同銀　四五角打　二六飛　六七角ナル

にて後手方有利なり。

（圖は六七角成迄）

「説明」

これは餘り華々しくないだけに、嵌められる危險率は相當多いと思ふ。後手方は敵の角替りをつけ目に、飜然「向ひ飛車」と廻り、敵が「棒銀」の強襲に出て來る鼻を叩く。

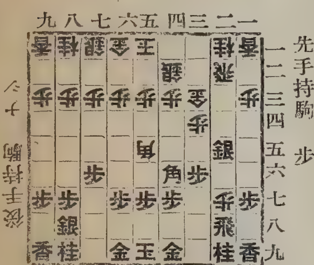
「下手の棒銀」と言ふが、これなぞはその見本の一ツ。素々三三角ナルなぞは、みす〳〵手損となるのだから、餘程の作戰が背後に存しない限りは、得策ではない。

更にこの變化として、後手方の四五角打に對して先手方二七、歩と打たれるのを嫌つて、二六飛と浮いたが、

四五角打、三六角……

の急戰法もあるが、續いて同角、同歩、五五角打、四六角打、二七歩打、と指されると、殆んど潰滅の悲運となる。

即ち二七歩打、飛車が逃げれば、四六角、同歩、二五飛、の順となつて、銀得となる。二七歩打、同飛、にても



（圖は二七歩打迄）

八八角ナル、にて銀得は同じ。

大宮大洋先生御考案

種明し付　手品材料各種

何れも斯界の第一人者大宮大洋先生の、新考案に基く面白くて奇拔な手品、奇術材料で、誰にでも直ぐ出來るやう詳細な說明書が附けられてをります。

▲銀貨の消滅、昭和の不思議、讀心術（三種組）六十錢
▲飛行サイコロ、拳の怪力、讀心術（三種組）一圓
送料各内地十錢　其他四十二錢

▲トランプ空中より出現、飛行サイコロ、銀貨の消滅、昭和の不思議、變色カード（五種組）二圓
送料内地十四錢　其他四十九錢

▲破れぬハンカチーフ、飛び上るカード、讀心術、昭和の不思議、小さくなるトランプ、銀貨の消滅（六種組）三圓五十錢
送料内地二十一錢　其他四十九錢

▲踊るマツチ、花吹雪、奇妙な紐、綿布の燒次ぎ、ステツキと指輪、成金棒（六種組）一圓
送料内地十錢　其他四十二錢

◎此外各種の材料あり。お申越次第總目錄進呈！

お注文は――東京市小石川區音羽町　大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二一九）へ！

歩ではないかと思ふ。旅行。

（金八段）斷然圍碁。

（花田八段）喰道樂と猫の玩具を蒐集し、黒猫會の錚々たるメンバーです。

（木村八段）同氏も多趣味。喰道樂會員だし映畫之居角力、の相當の通。圍碁も初段に近接した腕前です。

（金子八段）好きな拳鬪も近頃は大分遠のいた樣子。專ら讀書、旅行。

【問】手將棋、外將棋とはどんな事ですか。

（東京　大同　弘）

（解答）　菅谷　北斗星

「手將棋」とは「力將棋」の別名であり、定跡脫れの戰法を言ふのですが、「外將棋」とは、殘念作ら判らない。惟ふに、「定跡外の將棋」と言ふ意味から外將棋とでも言つたんぢやあるまいか？　棋士諸家に訊いても誰れも知らないのですから、あつたにしても恐らくは極一地方的な名稱でせう。或ひは「力將棋の力」と言ふ字の誤字又は見誤りからなのではないでせうか。古記錄にも見當りません。

長篇小說

春潮

佐藤紅綠

畫　小林秀恒

東洋映畫社の無名女優靜枝に米子は、亂淫の百貨店王島庄兵衛を父とする異腹の姉妹だが、皮肉にも一人の男性草刈三造を爭ふ事となる。と此時、同じく庄兵衛の落胤で無頼漢の幾太が、米子の爲に靜枝を脅喝に現れたのが端緒、妹に代つて我戀を諦めた靜枝は、會社をも退いて房州に去つたが、不幸重症に仆れて苦境に陷ちる。これを見た彼女の弟修一少年は、窮餘『父』なる庄兵衛の許へ借金に出向いた所、折柄此淫魔は、當の修一始め、嘗て自分が數多の女工に

産ませた子供の中の、男許りを呼集めて何事か言渡さうとする所であつた。

（前號迄の梗概）

嵐

四人の子の顔を等分に見廻して庄兵衛が今重大なる何事かを語り出さうとした時、左手の扉口に一人の男の姿がのそりと現はれた。

『おう。』と庄兵衛は立上る様にして又た腰を椅子に落し

『幾太か。』

幾太は汗に濡れた髪を片手に拂ひ上げて暫らく庄兵衛を見詰めたが一寸頭を下げて四人の方を向いた。

『どうぞ〳〵〳〵。』

ぶる〳〵顫へて居た磯田支配人は庄兵衛と一番遠く離れた椅子の處へ幾太を案内した。

『恐がらなくても可いよ、今日は溫順しくするからな。』と幾太は磯田に言つた。

『よく來てくれた、丁度可かつた。』と庄兵衛は幾太の機嫌を取る様に言つた。

『これで五人、全部御揃ひです。』と磯田は言つた。

『ぢや奥様を呼べ。』と庄兵衛は言つた。磯田が引込むと間もなく夫人の梅野が入つて來た、彼女ももう寄る年波に顔の皺が深く刻まれ

ゼヒ知つて置き度い毛髪の手入れ
フケ、拔毛、若禿等にお困りの方は科學的最新養毛料『ソカミダ』を御使用になるのが簡單で確かな治療法です。又これをお使ひになつて居ると毛髪疾患を豫防し艶やかな美髪となります。藥店販賣（一圓五十錢・二圓七十錢）

濃かつた髪も半白の霜を帶びて來た、だが其の黑いぱつちりとした眼だけは若い時の京都姿を想はせた。

『氏子共が皆んな揃つたのでな、これから神主の御託宣が始まるんだ。』と庄兵衛は笑つた。其れに媚びる樣にめりやす屋の木原がキヽと黃色な聲を出して笑つた、畫家はきまり惡さうに下を向き靴磨の辨吉は何の事だか解らない樣な顔をした、さうして幾太は窓の方へ顔を向けて遙かに聳ゆる建物の上に遊んで居る夏雲を眺めた。

『よう御越し。』と梅野は一同に輕く會釋をして『まあ皆んな大きくなつて。』

『私はどれがどれだか解らんのでな、お前に一つ當てゝ貰はうと思つてな。』

庄兵衛はいかにも愉快さうに言つた。

『首實檢だつか、おもろうおまんな。』とめりやす屋が言つた。

『どれ／＼私が當てゝ見ませう。』

梅野は先づ辨吉の顔を凝と見て『これはお峰のですよ、確かに……二十七ですね。』

辨吉は大きな眼を一ぱいに睜らいたまゝ只だぐんと首肯づいたばかりであつた。

『よく解るな。』と庄兵衛は言つた。

『お峰に似てますもの。』

梅野は次にめりやす屋を見やつた。

『わてだつか、よう見て御くなあれ。』

めりやす屋は氣輕に顔を突出して眼をぱちくりさせた。

『これはお鶴のです、眉毛が片跛なところはお鶴そつくりです。』

『えらい御方や、ほんまによう當てなはる。』

とめりやす屋は驚歎した。

『こちらは。』と梅野は畫家の方を向いた、畫家は顔を眞赤に染めた。

『さう／＼、さうです、お夏です。』

『うん、さうぢや。』

『こちらは？　此の可愛らしいのはお京のだと一目に解ります、其の次に……』

梅野は一番終りの幾太の方を見やつた。幾太は依然として窓の外を見やつて居た。

『ちよつと此方を向いてくれ。』と庄兵衛は言つた。

『俺は歸る。』幾太は眞赤になつて仁王の如く立上つた。

『ど、ど、どうして。』と庄兵衞は慌てゝ言つた。
『お前さんは俺達に耻を搔かせるために俺達を呼んだのか、俺は今錢をくれて女の身體を買つた親父と、錢を持つて身體を賣つた母親と、此の取引上で生れて來た俺の事を思ひ出したくねえんだ。』幾太の聲は憤怒に顫へ[illegible]を
『其れは違ひます、決してさういふ意味ではございません、要するに……要するに……』
支配人は一大事とばかり汗を拭き〳〵言つた。
『何が要するにだ。』と幾太はガツ〳〵齒を鳴らして『俺は今日だけは溫順しくして話を聞いて歸る積だつたのだ、此の暑いのに怒りたい事はないんだ、だがお前達は俺を怒らせる樣に仕向けるぢやねえか。』
『そんなに怒りはらんとまあ堪忍しておくれやす、何も惡い氣で御父はんが私等を呼びはつたのやおまへんさかいな、なあ兄はん、貴方も辛抱して御父はんの御話を聞いてからにしたらどうだす。』とめりやす屋は兩手を振つて言つた。
『惡い氣でないものが何故俺達の母親の名を呼び捨にするんだ、お夏だお鶴だお峰だお京だとは何んだ、俺達の母親は此の婆アに呼捨てにされなきやならない義理があるのか、母親が貧乏で此の婆アが金持だ、其れだけの差ひぢやねえか。』
『そんな事言うたかて、私等の母親は生きてた時から呼捨てにされてたんやないか。』

[illegible]俺は口惜しいんだ。』
[illegible]が胸をどんと突いて叫んだ。
『私は惡かつた、謝罪まる。』と庄兵衞は言つた。
『どうか勘辨してくれ、其れよりも私は肝心な話に取掛らなきやならない、どうか靜にして貰ひたい。』
『惡かつたと御自分で言ふなら俺は何も文句はねえ。』と幾太は腰を下した。
『私ももう六十になるんでな、いつまでも無理は出來ない、お前達の將來の事を考へると此のまゝに打捨て置くと何となく氣掛りだ、私はお前達の母には出來るだけの事をしてやつた積だが、扨てお前達に就ても私に責任がないでもない樣な氣がする、そこで今日恁うして集まつて貰つたわけだ。』
『俺達の兄弟はこれきりなんですか。』と幾太は言つた。
『いやこれが半分だ、なあ。』
庄兵衞は妻の梅野に言つた、梅野は幾太の抗議に酷く腹を立てゝ居たので横を向いたまゝ答へなかつた。
『十人かなあ梅野。』
『八人ですよ。』と梅野は無愛想に言つた。
『あゝ桃子を入れると九人だ。』
『桃子は別です、あれは私の娘ですから。』
『さうだ、死んだ春海を入れると十人になるんだ。』
『さうです坊っちやんが五人に御孃樣が四人です、御孃樣の中御

一人は越中に御いでになる、今まお一人は米子さんと仰有る方で、御一人は此處にいらつしやる修一さんの御姉さんで。』

と支配人は梅野の氣を慰める様に言つた。

『さうすると。』

庄兵衞は身體を前へせり出した。

『私は御前達の將來を考へた上で相談するんだからよつく聽いて貰ひたい。』

『財産の分配や。』めりやす屋が畫家に囁いて又た右隣の靴磨にも囁いた。庄兵衞は續ける。

『若しお前達が仕事に困つてるとか、或は仕事があつても思はしくないとかいふなら、私の店へ來て働いたらどうか、九人の兄弟が心を合せて働いたら此の店は必らず繁昌する、毛利元就が矢を折つて子供に教へた例もある、九人あれば此の店の肝心な仕事は他人を雇はんでも濟むんだ、御給金もやる、配當もやる、十年の後には其れ〴〵に株を分けてやる。』

『結構過ぎまんなあ。』とめりやす屋が一段と黄色な聲を張上げた。

『なあ辨吉はん、貴方靴や鞄の方を受持ちなはれ。』

辨吉は依然として大きな眼を瞠つたまゝ身動きもしない。

『泰山はん、あんた美術部の主任になりなはれ。』

泰山は首を低れて物思に沈んだ、美術部の主任になれば襖の畫を畫かなくとも食べて行ける、人生に疲れた彼

に取ては實にありがたい幸運だが、扨て食べて行けるだけで滿足の出來ないものが胸にこだはつてる樣な氣がする。

『なあ幾太はん、貴方も何かやりなはれ、貴方には何がよろしうおまつしやろ。』

『喧嘩部てえのがあるなら其の方の係りにして貰はうかえ。』と幾太は笑つた。

『何言ひなはる、冗談やおまへんぜ。』

『俺は此の店の全部を貰ひてえんだ、でなきや厭だ。』

『ほ、ほ、ほう。』

めりやす屋は仰天して頬を膨らした。暫らく沈默が續いた、修一は何にも聞いて居なかつた、彼は四人の兄共が何の主任にならうとも其んな事は自分と全く無關係であつた、彼は只だ房州で病んで居る姉の事ばかりを考へて居た、氷代！　藥代！　米代！　さうして歸りの汽車賃！

『貸してくれるだらうか、百圓！　百圓と言つたらびつくりするだらうか、でも百圓なければどうにも仕樣がない、併し何と言つたら可いだらう、そんな事を言うたら幾太兄さんに怒られ

やしないだらうか。』

いろ／＼な考が彼の小さな頭の中で渦を巻いた。さうして口の中で夢の如く百圓！　百圓！　と叫んだ。

修一の苦しさにはお構ひなく庄兵衛と兄弟達の間に話がずんずん進行した。

『兎も角も考へてな、今日中に決めなきやならんといふ問題でもないから。』

庄兵衛は恁う言つた、兄弟達は何やらがや／＼と言つた。其の中にボーイが洋食を運んで來た、修一は矢張り夢の如く食べた、彼は何を食べたのか自分で解らなかつた、父は鹿爪らしい顏をして染物屋から織物屋になり東京へ店を持つ樣になつた立志談を長々と述べ立てた、誰も聞いて居なかつた、めりやす屋はもう主任になつた積で喜び勇んだ、五人の中で一番瘠せて一番小柄な彼は一番大食であつた、彼は新らしい皿が來る度に隣の人々の中身と自分の方と何方が大きいかを比べて見たりした。

サラダが出てアイスクリームが出た時修一は姉さんにこれを食べさせたいと思つた。梨子と林檎とバナヽ、此の中一つでも日下君に持つて行きたいと思つた、自分が恁うして贅澤な食事をしてる時に姉さんは牛乳も飲めないのだと思つた。

食事が終ると銘々が卓子を離れた。これで解散となるのだ、愈々修一は父に百圓の無心を申込まねばならぬ。

『何と言つたら可いだらう。』

恥かしさと悲しさが一度に込み上げて來る、彼は怺へようとしても怺へきれなくなつたので壁を向いたまゝほろりと涙をこぼした。

『おい大將！』

肩に大きな手が掛つた、其れは幾太であつた。

『一寸此方へ來いよ。』

『あゝ。』

修一は室の隅へ行つた。

『姉さんはどうしてるか。』

『病氣で寢てます。』

『病氣？』

『房州に居ます、熱が高いから僕心配して居ます。』

『醫者は？』

『何でもないといふけれども、氷がないのと、牛乳がないから……』

『房州には氷も牛乳もないのか。』

『あるけれども……』

『うん。』

幾太は大きく首肯いた、さうして汗の汚點だらけな上衣の衣嚢を探つて口金の弛んだ眞黒な蟇口を出した、其れを太い指で

開けると電車の往復切符一枚と十錢銀貨三枚と銅貨五六枚が見えた、中の仕切を押すと其處には汚ない認印が一つ入つて居るだけであつた。

『はてな、待てよ。』

彼は洋袴の衣囊に手を突込んだり腹巻を搔き廻したりした。

『はてな。』

彼は暫らく考へ込んだ。修一はぽかんとして其の樣子を見て居た。

『磯田さん！』と幾太は支配人を呼んだ。

『此の子に金を少しやつてくれませんか。』

『はあ。』

磯田は幾太の顏をちらと見上げたが慌てゝ庄兵衛の傍へ寄り何やら囁やいた、さうして直ぐ此方を向いて、

『はい、只今、直ぐに。』

彼は室を出るや否や直ぐに歸つて來た、彼は御盆に載せた一封づつを五人に渡した。さうして先刻庄兵衛が言つた意味の事をもう一度語り兄弟一致して當店のために盡力する事は皆樣の利益であり當店の利益である樣な事を言つた。其間にめりやす屋は封筒の上から中身を押して見ては幾何だらうかと想像を逞しうして居た。

と、幾太は默つて封筒を破つた、中から出たのは十圓紙幣、一枚二枚三枚……都合十枚であつた。

『ありがたう。』

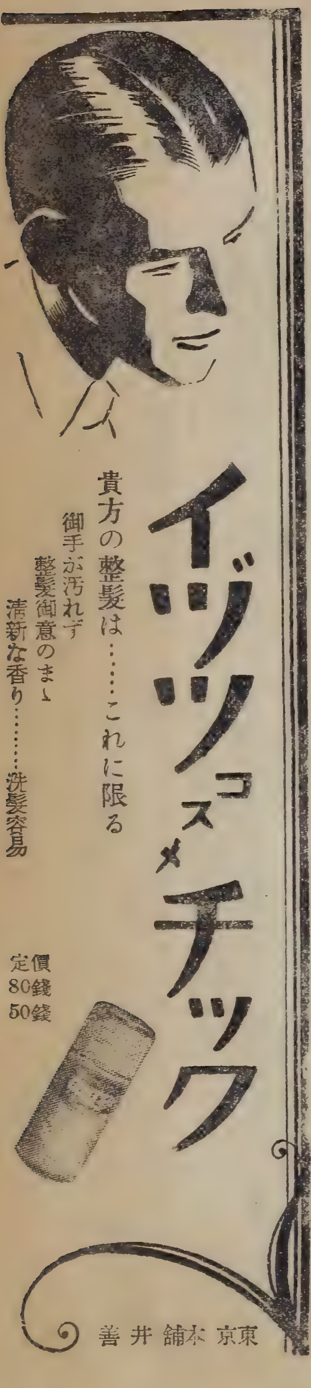
幾太は溫順しく御禮を言つた。

『失禮します。』

彼は修一の手をむずと摑んで廊下へ連れ出した。

『これを持つて行け。』

十圓紙幣十枚をしつかと修一の手に握らして又言つた。



『上等の醫者に診て貰へよ、可いか、さうして早く癒る樣に幾太兄さんが神樣に祈つてるとさう言つてくれ。』

『僕は貰ひましたからこれは要りません。』と修一は言つた。

『俺の金ぢやない、それは親父から取つた金だ、其れぢや又た逢はうね。』

幾太は大きな手を修一の頭に載せて暫らく默つて居たが、軈て何んにも言はずに出て行つてしまつた。

『二百圓ある。』

修一は嬉しさのために氣が遠くなつた。

『これだけあれば姉さんの養生は出來る、日下君に働いて貰はなくとも濟む。』

恁う思つた時どや〳〵と兄共が室から出て來た。

『吝な親父さんやなあ。たつた百圓、これが初對面の御祝儀やて、チエッ。』

めりやす屋が先頭に畫家と靴磨が通り行く、修一は遲れて廊下を出た、すると丁度其處へ入つて來る桃子に逢つた、彼女はハツと立停まつて修一を見やつた、其の美くしい星の樣な眼が眞直に修一の額を射た、修一も桃子を見やつた、二人は互ひにそつと御辭儀をしたまゝ無言のまゝ內と外へ別れた。

桃子が客室へ入ると父と支配人が未だ殘つて居た。

『今行つたのは私の兄さんでせう。』と彼女は父に言つた。

『四人か五人か。』

『いゝえ中學生よ。』

『どうして解つた。』

『私に似てるんですもの。』

修一の足は宙を飛んだ、二百圓！　これだけあれば姉の病氣も癒る、當分食べて行くに不自由がない、彼は父の店でいろいろな食料品を買つて行かうかと思つたが、父に見られると大變だと思ひ返した、彼は町へ出てから第一に食料品店に飛込んだ、罐詰やら海苔やら其れを小腋に抱へて菓子屋へ入り、藥屋で滋養劑を買ひ、果物屋で林檎とバナヽを買ひ、大急ぎで兩國へ着いたのは三時頃であつた、出來る事なら夕飯前に間に合はせたいのが彼の願であつた。

殘つた金は手巾に包んで洋袴の衣嚢に深く藏した、暑さは暑し、汽車の中では睡魔が頻りに襲うて來る、其れでも彼は眠らなかつた。那古に着くや否や彼は一直線に走つた。

『只今！』

姉は靜かに眠つて居たが彼の聲を聞いて眼を覺ました。

『どうしたの？　修ちやん。』

修一は默つて包みを解いた、罐詰が出る海苔が出る果物菓子藥までが出る。

『どうしたの？』

佐藤紅綠先生の傑作「親鳩子鳩」は、一家揃つて愉快に讀むうちに良い事を敎へるので到る處大評判です！是非御家庭に一本をお備へ下さい。
（定價一圓送料十錢　本社發行）

靜枝は驚いて言つた。修一は衣囊から金包を出して姉の枕元に置いた。

『あらッ。』

病氣に衰へた姉の顏にさつと血が動いた。

『修ちやん、惡い事をしたんぢやない？』

『そんな事があるもんか、姉さん。』

修一は一伍一什を語つた、五人の兄弟の事、父の相談の事、幾太の親切の事、聞く事毎に靜枝は驚いた、彼女は充分疲れて居たが、修一の報告は少しづつ彼女の活氣を喚起した。

『修ちやん、お前はどう思つて？』

『僕は嬉しいよ。』

『私だつて嬉しいけれども。』

暫らく口を噤んで又た續ける。

『私達兄妹が皆んな一緒になつて樂しく働く事が出來たらどんなに可いだらう。』

『姉さんもさう思ふ？　僕は汽車の中で其れと同じ事を考へて來たんです、でも其れは出來ない事ですよ。』

『どうして？』

『皆んな心が異ふから。』

『心が異つても血を分けた兄妹ですもの、仲好くなれない筈はありませんわ、私は癒つたら第一番に其れをやらうと思ふわ、皆んな一緒になる樣にね。』

『僕もやります。』

『さう？　二人で九人の兄弟を纏める樣にしませうね。』

『だから早く癒つて下さい。』

『あゝ、癒るわ。』

『其れが出來たら世界中の人を皆んな仲好くさせる事も出來ますね。』

『さうね、大きな仕事ね、立派な仕事……』

靜枝は凝と思案に耽つた。遙かに日下の吟ずる聲が聞えた。

『……斯の心奮發して神明に誓ふ、古人言ふあり斃れて後止む。』

『あの方も立派な方ね。』と靜枝は言つた。

『僕の友達は皆な立派です。』

靜枝の病氣は次第に回復して、三人が毎朝觀音樣へ御詣りをする樣になつた、暑さが烈しくなるに伴れて海岸は避暑客で一日增しに賑はひ出す、夕方になると村の若衆や避暑客や工場の女工などがぞろ／＼濱へ出掛ける、素人相撲が始まつたので見物人は八方から集まつて來る。其れを當て込みに二つの説教が始まつた。一つは基督教で一つは日蓮宗である。房州は日蓮の誕生地である。

土俵から少し離れて救世軍が高張提灯を立て、女まじりの甲

高な聲で手風琴や太鼓を拍子に讃美歌を唄ふ。

『信ずるものは皆來れ、ドンドコドン。』

さうすると直き其の隣に赤い高張を立て、日蓮宗が團扇太鼓を叩き出す、救世軍の太鼓と法華の太鼓が一緒になつて互に負けじ劣らじと轟かすのだから堪らない、相撲を見て退屈したものは此の太鼓合戰を見に來る。日蓮宗の方は拍子も何もあつたものでない、威勢に任せて自由奔放に叩き出すので救世軍聊か辟易する、其代りに救世軍には婦人なる最强武器がある、若々しい女の歌ふ讃美歌が潮の香高き夜の天に響くと人々の興味が其の方に惹かれる、そこで日蓮宗は躍起となつて益々太鼓を打ちのめす。

其中に說教が始まる、救世軍の若い士官は其の熟達した能辯で神の愛を說き人の罪を說き酒の害を說く。日蓮宗の方は盛んに攻勢を取つて基督教を罵り、日蓮の敵國降伏を說き、國粹と異端の差別を說く。

見物人はデパートの品物をひやかす樣な態度で、彼方へ行き此方へ行き、露骨な罵倒に喝采したり野卑な警句に拍手したりする、靜枝等三人は折り折り双方の說教を聞いた。

『何方が可いの？姉さん。』と修一は訊いた。

『私何方も可いと思ふわ、宗教に惡いものはないと思ふわ。』

『僕は反對です、僕は何方も詰らないと思ひます。』と日下は言つた。

『どうして？』

『佛だの神だのつてあるもんでせうか。』

靜枝は答へなかつた、此頃彼女は奇妙にさういふ問題に就て神經が鋭敏になつた、三造の事をふつつり思ひ切つた彼女の胸を襲ふものは犇々と迫る孤獨の淋しさである、戀の破滅に依つて將來は全く闇に閉された、考へれば考へる程希望もなく光もなく、只だ羸弱い身體を横たへて地上に生きてゐるに過ぎない、そんな弱い氣では不可いと知りつゝも扨て自分でどうする事も出來ないほど自分の弱さが解つた、さうして彼女は賴りない冬の薄日が窓に射し込む樣な

佗びしい憂欝に身を任せるより他はなかつた。

夜中に眼がさめると枕が濡れて居るのに氣が付く、あゝ夢に泣いたのだらう、何のための涙か、無意識の中に泣くのが癖になつたらしい。

心細い、淋しい、誰かを頼りたい、恁ういふ氣持は次第〳〵に眼に見えない或る大きな力を暗の中に摸索させる樣になつた、其れは觀音樣か、イエスキリストか、日蓮か親鸞か、どれでも可いがどれかに頼りたい、だがどれに頼つて可いか彼女には判斷が付かない。

『私から何れて言つて決めるわけに行かないから、何れかの一つが何か不思議な力を現はして私を頼らせる樣にして下さると可い。』

彼女はいつも恁う思つた。

『何かあるだらう、何かゞあるに違ひない。』

其れが何であるかゞ解らないが、其の解らないものに憧憬れて其れに全身を捧げようと身構へして居る靜枝の前に現はるゝものは果して何であるか。

だが觀音菩薩は示現しなかつた、キリストの手が彼女の項にかゝらなかつた、其れと反對に最も恐ろしい事件が突然嵐の如く起つた。

避暑の客がそれ〳〵歸京する頃になると海岸は日に〳〵淋しくなる。物干竿に西日が射して鷄頭の葉が眞紅に色づくと波の音が急に間近く聞えて秋近き氣分がそろ〳〵と身に迫つて來る、或朝修一は緣側に坐つて新聞を讀んで居たが突然大きな聲を出して叫んだ。

『大變だ、姉さん、御父樣は殺されたよ。』

『なに？』

靜枝は吃驚して緣側に走り寄つた。

『讀んで頂戴、讀んで……』

修一は讀み出した。大きな活字の三段拔きで仰々しく記した標題。

『島屋庄兵衛暗殺せらる。』

其次に二號活字の見出しは幾つも並んである。

『麻布亦樂莊の慘劇……奇々怪々の死因……島家を繞る人々………』

『昨夜といふよりも今朝一時を過ぐる五分、麻布亦樂莊の島庄兵衛氏の二階洋室書齋にて異樣の物音がしたので當家の令孃桃子さんが父の書齋へ行つて見ると扉は閉されてあるが室内の空氣が何となく怪しいので夫人梅野を起し二人にて内部の扉から入つて見ると庄兵衛は卓子に凭れたまゝ顔を帳簿の上に押し付け右の耳を下にして殆んど居眠の如き狀態であつた、近寄つて聲を掛けると答がない、と見ると眼を豁と睜いたまゝ唇からだ

らだらと血を流して死んで居るのであつた。其の頸の下には犯人が遺して行つた風呂敷型に切つた白木綿が落ちてあつた。これは指紋が殘るのを恐れて右白木綿を頸に卷き付け其の上から强力にて喉を絞め付けたのだらうと想像される、犯人の殘したものは右白木綿と金庫の前に落ちてあつたバット一本（吸口に差したまゝ一度も點火しないもの）其れだけである、犯人は何處から潜入したか不明だが此に不思議なのは二階化粧室の東に向いた窓と階段の上方南向の窓が開いて居た事である、犯人はどの窓から入つてどの窓から出て行つたものか、一つだけでも出入が出來るのに二つを開けたのはどういふわけか、これは重大な疑問點となるらしい、當夜は主人庄兵衞が調べ物があるからと家族を早く寢かし、書齋へ入つたのは十時過ぎで、書齋から二室を隔てた夫人の寢室には夫人が此頃不眠症に罹つて居るので令孃桃子さんが付添介抱し當夜も母の寢靜まるを待つて床に入らんとした時確かに時計が一つ鳴つたのを聞いた、其れから間もなく例の物音を聞いたのだから此の間五分とはかゝらなかつたらうと桃子さんが言つて居る。』

記事は至極着實な筆致で要領を逃がさじ〳〵と氣を配る記者の用意がはつきり解る。更に『何故の犯罪ぞ』といふ項目の下に係う記してある。

淋病患者の福音

●一寸の不注意から淋病になり、あわてゝ賣藥醫者注入洗滌さては無療器等、次ぎから次ぎ手をかへ品をかへて、あせれど病は、はか〴〵しく治らず多額の金を、ついやして良藥も得られず遂にヤケを起して手當をせず慢性になつて時折再發に苦しむ患者ほど此世に氣の毒なものは有ません。貞節な妻に感染せしめた夫、或は晴れの結婚式を目前に、ひかへた青年、殊に國家の干城たらんとあこがれし若人が檢査を前に病みし時、親にも云へず兄弟にも語られず日夜煩悶懊惱して苦しむ前途希望に滿つ有爲の青年の胸中を思ふ時、實に同情に堪へぬ次第で有升。

●しかし淋病患者よ悲しむな……一時の氣休め藥と違ひ心持よく治癒に導く、當院獨特の療法があります。

●當院がお頒けしてゐる御藥は新しく云へば合理的療法とでも申べきで、先づ當院に傳つた內用藥を服し內部から淋菌死滅と排毒せしめ同時に外用藥を用ひて局部の奧に巢喰ふ淋菌を殺し更に藥尿作用により尿道を自然洗滌せしむる事は丁度車の兩輪の如く、淋毒退治に內からと外から協力して攻める爲一方のみの手當と異り、思つたより早く快治に導き隨つて永續使用の要なきわけで藥代も特に安くおわけしてゐるため二重の經濟にもなります、しかも當院の內服藥は少しも胃腸を害せず外用藥も少しも危險なく副作用も起さず、至極手輕く祕密に使用が出來ますから患者にとりて誠に好適な自宅早期治療法であります。

●今迄いろ〳〵手當をしても治らず淋病不治だと諦らめて歎く方時々再發してお惱みの方は自暴自棄にならず是非一度當院の良藥を試用あれ、色々の藥で治らぬ方も當院の療法に救はれて澤山喜びの禮狀を頂きをります、中には全快した嬉れしさから取次所となつて盛んに活躍されてゐる御方も有ります。

特に最近の禮狀の一部を御目にかけます

第一信、註文狀（文中○印は遠慮す）　山梨縣　間江場文雄

前略　私は四十六才の男ですが足掛四年目になる惡性の淋病に懸り未だ全快致しません近所の醫者は全部、昨年の夏は甲府市の○○病院で見てもらひましたが全快せず賣藥は何でも呑みましたが思ふやうに全快せず非常に心配しましたが先日「日の出」で拜しましたが貴院の良藥を服用致し度く思ひますが代金も判らず誠に申兼ますが代金引換で至急御送り下さいませんか御願申上升。第二信（禮狀）拜啓御手紙頂きまして誠に有難う御座いました早速服用致しました足掛四年越の病氣で有ましたが使用一日にして非常に心持も良くなり、其後連用致ました、お蔭で今日ではすつかり全快致ました此良藥のキヽメには誠に感心致し貴院が近くなれば御禮に參上致可ですが何分遠方で殘念で有升私の職業は山の杣夫で有升故隨分他縣の人もおいでで只今〇〇出材所で一所に働いてゐ升が此お藥には四五十人の方が皆感服致し御貴院の住所を皆が手帳へ書止メるやら實に大好評で有升私は實に丸二年春夏秋は仕事は出來ずでありましたが此病氣が全快とは誠に夢の樣な氣が致升是も御貴院樣の御蔭と一重に感謝致升「當院は此樣な嬉れしい禮狀を次ぎ〳〵と頂き居り升」

●淋病消渴は家庭の幸福を奪ひ人生を暗くせしめます人知れず御困りの方はカレコレ迷はず今スグ手紙でお尋ね下さいくはしくお知らせ致します。どうぞ早く淋病を治して光明に喜ぶ身となり國家のため愉快に活動して樂しい日を、お暮し下さい。

●當院獨特の療法藥至急お望みの方は容態年齡等成可く委細記入して申越次第有効良藥を實費で代引で急送致します▲事情により信用して直接送藥もします。

「廣告は富士十月號で見たと記入を乞ふ」

大阪市西成區天下茶屋松原通り一丁目十一　妙法院

『犯人の目的が何にあつたのか、金庫の前にバットを落して行つた處を見ると金錢の強奪にあつたらしく見えるが、其れなら何故金庫の前へ行く前に既に庄兵衞を絞殺してしまつたか、これも疑點である、前後の模樣から察すると庄兵衞が調べものに餘念なき背後から突然詰め寄つて喉に風呂敷を卷き其の上から絞めたに違ひない、さうすると目的は金庫でなく殺人にあつたのだとも言へるが、殺すためばかりなら庭に忍んだり窓から攀ぢ登つたりいろ〳〵な危險を冒さなくとも他に方法が幾らもありさうなものだ、其處に解きがたき謎があるのではなからうか、島庄兵衞は京都の微々たる悉皆屋から叩き上げて一代の中に千萬長者となつた人だけに多少の無理もあらうし家庭的に複雜な因緣が島家を繞つて居るので此の事件は何處まで波瀾を及ぼすか測り知られないと見られて居る。』

『まあ……』

靜枝は胸の痛みを抑へる樣に片手で乳の邊を押して片手を緣板に突張り膝を崩したまゝぐつたりと首垂れた。

『もう少し。』と修一は言つた、さうして最後の『犯人の姿を見た』と書いた見出しを讀んだ。

『桃子さんが夫人と共に父の書齋へ內部の扉から入つて行つた時、廊下に向いた窓の硝子を透して確かに一人の人影を見た、其れは自分と同じく物音を聞いて上つて來た夜番の一人だらうと思つた、だが後で考へると夜番は騷ぎが大きくなるまで何にも知らないのだ、どんな顏かはつきり解らないが背後姿だけでは勞働者らしい服裝で帽子も何も被つて居なかつた、廣い背中で少し前屈みになつて居ただけの記憶しか桃子さんの頭に殘らないのだ。』

『あら……』

『姉さん！』

二人は同時に顏を擧げて眼を見合はした、さうして同時に肩を搖つて溜息を吐いた。

『そんな事はない、兄さんに限つて決してそんな事はない。』

天龍三十五里
(K505)
清々しい川の香りを思はせる三門さんの美聲。今や各方面で大流行です。お早くお聽き下さい。
三門順子さんの二大傑作盤

(K508)
郡上節
A面は都會風に編曲したものを三門さんが吹込み、B面は木場連中による正調郡上節。
キングレコード

靜枝は神經的に早口に言つた。
『私は信じます、兄さんはそんな悪い事をなさる人ではない。』
『でも姉さん、これでは兄さんに疑がかゝりますよ。』
『どうして？』
『此の店を全部俺に渡してくれと大きな聲で怒鳴るんですもの。』
『御父さんを殺したからつて幾太兄さんの財産になるといふ理由があるの？』
『ありません、ないけれども兄さんはいつも御父さんを嚇かしましたから。』
靜枝は默つた、兩眼から果てなき涙がはら／＼とこぼれた。

『泣いても仕様がないぢやありませんか。』と修一も涙を拭いて、
『其れよりも姉さん、東京へ歸りませう、御父さんの御葬式に行かなきやならないし、兄さんの事も心配だから。』
『あゝ行きませう。』
『何時？』
『今日！　これから！』

（つゞく）

突如として起つた殺人事件！　眞犯人は果して何者？　あの生一本の磯太が今や殺人犯人の嫌疑を受けてゐるのだ！　急遽上京して修一姉弟は、又思ひもかけぬ重大事件に直面する。次號はいよ／＼最高潮!!

今が治療の絶好期！

喘息（ぜんそく）

『喘息エキス』でお手當を!!

激しい發作も鎭靜し、夜は樂々安眠が出來る——

秋は氣候の激變と共に一年中でも喘息發作の一番多い時です。今の手當の良し悪しは今年中の苦樂の岐れ路ですから、少しでも徴候のあるお方は、喘息藥中最も評判のよい『喘息エキス』をぜひお用ひ下さい。本藥は數種の植物性分のエキス劑で、喘息の原因となる氣管支筋のけいれんを鎭消し、發作を中絶或は抑壓し、特に發作直前に用ひて極めて效果があります。然も『喘息エキス』は劇藥類と異り、習慣性や副作用が絶對にありませんから、續けて用ひれば、慢性で手のつけられない難症でも次第に快方に導く事が出來ます。
尚本藥は百日咳・痰咳其他せき止藥としても效果があります。

全國の有名藥店にあり

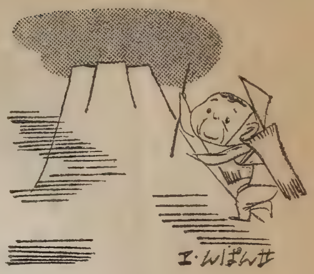
▲藥價（一五回分）一・三〇（三〇回分）二・五〇（六〇回分）四・八〇（一〇〇回分）七・〇〇

販賣元　東京市小石川區音羽町　大日本雄辯會講談社商事部

滑稽落語

有馬のふじ

春風亭柳枝
前川千帆畫



悋氣は女の愼しむところ、疝氣は男の苦しむところ、なんてえことを申しますが、よくお嫉妬ではお笑ひの種になることがいくらもございます。

『奥さん、あの鹽鮭は燒くのでございませう。』

奥『馬鹿だねこの人は、私は燒くのは嫌ひだよ、後生だから燒かないで茹でておくれ。』

下女『旦那樣が鰻の蒲燒を召上りたいと仰しやいます。』

奥『蒲燒といふと燒くのだらう、旦那樣のは燒いてもいゝから、私のは蒲茹にしておくれ。』

などと一切おやきにならないといふ方もございますが、多少はおやきになる方がお宜しいやうでございます。

妻『此の頃家の旦那の御樣子が變だよ、といふのは去年たしか湯治へいらしつてお歸りになつてから、何となく私にお隱しなすつてゐることがあるに違ひない、湯治へ行つた時お供に連れて行つたのは誰だつけね……あゝさう〳〵番頭の藤兵衛と、幇間の一八、それから飯炊の權助と、斯うお連れになつたから、他の者はいはないでも、權助ならいはないとも限らない、――權助や、權助、ちよいと來ておくれ。』權『ハイ――お内儀さん、いま風呂へ水を汲んでゐるでがす。』妻『御苦勞樣だね、何もいま汲まなくつてもいいよ。』權『さうかね、ぢやアこぼすべえ。』

妻『折角汲込んだ水をこぼすには當らないよ――こつちへお入り――ねえ權助、お前ぐらゐ水臭い人はないよ。』權『何だ、乃公が水臭いかね、爭はれねえもんだ、いま風呂の水を汲んでゐたから、それが傳染つたのだんべえ。』妻『さうぢやアないよ、人に物を隱すといふのだよ。』

權『乃公がかね。』

妻『さうさ。』權『冗談いふものでねえお内儀さん、乃公は正直權助と異名を取つてゐるくらゐのものだ、何一つ御主人樣に物を隱した覺えなどはねえでがす。』

妻『さうかい、お前がさういふなら話をするが、たしか去年の秋だつたね、旦那樣が湯治にいらしつたね。』權『あゝ有馬の溫泉へまゐりました、私もハアお供をしたが、結構な所でございました。』

妻『その時にお供をして行つたのは、番頭さんにお前に、幇間の一八……。』

權『さうでございます。』

妻『その時に斯ういふをかしいことがお內儀さんございました、女の話で斯ういふ面白い話がございましたと、一八でも番頭さんでも、みんな私に話をして聞かせたのに、今日まで話しをしないのは、お前ばかりだよ。』

權『アレッ、さうかね、ぢやア番頭でも一八でもお內儀さんに喋舌つたかね、呆れ返つた野郎共だ、あの時に、この中で口の輕いのは權助だから、一番權助が危ないなんていやアがつて、自分達が先に喋舌つてるやアがる——けれどもお內儀さん、二人から話しを聞いたら宜かつぺえ。』

妻『それがね、二人に聞いたから宜いんだけれども、私はお前の話しを聞きたいんだから、聞かしておくれ。』權『弱つたなア……。』

妻『何も弱ることはないぢやアないか——ぢやア何か旦那様がお前に喋舌つてはいけないと、口止めでもされて、私を女だと思つていはないのかい。』權『さういふ譯ではねえけれども……アッ、アイテ、、、ア、痛え／＼。』妻『どうしたえ權助や。』

權『ヤアえらいことになつた、持病の癪が起つて來たゝ。』

妻『それはいけないね。』

權『ア、痛え／＼癪が起つて來ると、舌が釣つて喋舌れねえ、身體が惡いだから、濟まねえけれども寢かして貰ひてえ。』

妻『そんなに痛けりやア、良い御符があるからお呑み。』

權『私は御符は嫌ひだ。』妻『呑まないところを見ると僞病だね。』權『イヤさうではねえ。』妻『それぢやアお呑み。』權『あのつぴきなんねえ。』妻『のつぴきならないといふことがあるものかね、サアお呑み。』

權『ハア變な紙だね——ヤアお內儀さんえらいものだ、呑んだら癒つた。』妻『よかつたね、そんなら話しをしておくれ。』

權『又此方が痛い。』

妻『何をいふんだよ胡魔化して——今お前が呑んだのは何だとお思ひだい、お前は知るまいけれども、熊野の牛王といつて、有難い御符なんだよ、それを呑んで、物を隱したり、腹にあることをいはないと、神樣の罰で黑血を吐いて、死んでしまふんだよ、可哀想に、そのせゐかお前の影がだん／＼薄くなつて來るやうだよ、氣の毒だね。』

權『ヤア待つて下せえ、それはおいねえ

ことになつてしまつた、そんならあの藥を呑んで、何にもいはねえと黒血を吐いて……弱つたな、仕方がねえから、何もかも話しをしべえ——去年の秋、旦那樣のお供をして、有馬へ湯治に行つたでがす。』

妻『それは知つてゐるよ。』

權『この溫泉場に働いてゐるおふじといふ女ッ子が居りました、これが小さい時分に東京へ來てゐたものだから、言葉が東京だし、ちよいと人間も色ッぽいでがす、スルと旦那樣ハア助平だもんだから、このおふじを引ッ張つたんだとね、話しが纒つて、イヤもう旦那樣も可愛がれば、そのおふじといふ女ッ子も旦那樣におッ惚れてしまつて、毎日々々じやら付いてゐたでがす。いよ〳〵ハア東京へ歸らなければなんねえ、因果を含めて置いて行くべえといふと、おふじのいふには、どうか東京へ連れて行つてくんろといふだ、旦那樣のいふには、連れて行く譯に行かねえ、家にはやきもち燒の女房がある……怒つちやいけねえ、乃公がいつたでねえ、旦那樣がいつたのだから……やきもち燒の女房があるといふと、どうでも連れて行つてくれ、連れて行かなければおッ死ぬといふだ、旦那樣困つてしまつて、どうしたらよかんべえと、乃公と番頭と幇間を呼んで相談ぶつたら、幇間のいふには、お宅のやうな身代で、一人や二人の女ッ子を圍つて置くのに何の不思議はねえ、いつそのこと東京へ連れて行つて、圍つて置いたらよからうといふので、親許の方へは百圓の金をやつて、話しを定めて、東京へ連れて來て、いま馬道に婆やと二人で圍つてあるでがす、ちよい〳〵商賣用で泊つて來るといふだけれども、みんな旦那樣噓をいつてゐるで、おふじの所へ行くでがす、この間も乃公が行つたら、おふじが旦那樣の膝にもたれて、この儘ぢやア乃公ア詰らねえといふから、旦那樣が何が詰んねえ、東京へ行つたら家へ入れてやるといつたのに、何日御本宅へ入れるんだ、もう直きに入れる、直きに入れるッたつて、御本宅には立派な奥さんがあるでねえか、家內などは構ふことはない、叩き出してしまふ、もし出なかつたら、猫入らずを呑まして……乃公がいつた譯でねえから、怒つちやなんねえ、旦那樣がいつたゞ、本當にいつた譯でもあるめえけれども、女ッ子が又うまいことをいふだ、だから油斷が出來ねえからお氣をつけなせえまし——お內儀さん、これで話しは終えだが、死にッこはねえかね。』

妻『いろ〳〵有難う、さうかい、さういへばどうも旦那樣の御樣子が變だと思つたのだよ、御苦勞樣、向ふへお出で。』

權『乃公は死なねえかね。』

妻『死ぬも死なゝいもありやアしないよ熊野の牛王などといふものは、中々私達の手へ頂けるものぢやアないんだよ、いまのは廣告の切ッ端だよ。』

權『エ、ッ廣告だえ……オヤ〳〵たまげたなア、知らねえからみんな喋舌つてしまつた、油斷も隙もなんねえ。』

妻『何でもいゝから彼方へお出でよ……あゝ旦那樣お歸りだ……お歸り遊ばせ。』

旦那『ハィ只今、お店から電話はかゝりませぬか……かゝらない筈はないんだが——奉公人ではならない、私が行つて來よう、直ぐ行つて來るから、夜少し遲くなるだらうから、その積りでな。』

妻『行つていらつしやいまし、併し旦那、私貴下にちよいと伺ひたいことがございます。』

旦那『何だい。』妻『何か貴下私に氣兼をなすつてゐることがおありでございませう、これを千代が聞いたらば、嘸千代が怒りやアしないかといふやうなことがおありになるんでございませう。』

旦那『變なことを言ふね、女房に氣兼などはありませぬ、何だか奥齒に物がはさまつてゐるやうなことをいはないで、ハッキリいつておくれな。』

妻『さうですか、そんなら私から申しませう、有馬の溫泉へお出でになつた時に、湯女のおふじとかいふ若い女が、貴下の御目に留つて、親許の方は百圓で話しを定めて、いま馬道に圍つておありになるんださうですね。』

旦那『ウ、ウ、そ、何だよ、だ、誰がそんなことを……。』

妻『イエ誰からも聞きやアいたしませぬ、世間の噂でございます、何だかそのおふじが、本宅へ乘込みたいと申しましたところ、私といふものがある、イヤあんなものは構はない、叩き出してしまふ、もし出なかつたら、猫入らずを呑まして……。』

旦那『そ、そ、そんなことを、何だらう權助でもいひましたか。』

妻『何ですね貴下、權助の申したことを、別に本當にしやアしませぬが、そんならさうとなぜ貴下、最初から仰しやつて下さいませぬ、御大家を張つてゐる旦那樣、御交際上に、一人や二人の女をお圍ひ遊ばしても、決して構やアいたしませぬ、私はそれを聞いて、嫉妬などを燒きはいたしませぬ……。』

旦那『これはどうも、誠に何だよ、それはマアねえ、お前にいふと、何だらうけれども、溫泉へ行つた時に何なんだよ、大變に深切にしてくれるし、マア男ばかりではね、家でお前が萬事やつてくれるものだから、やつぱり女のやることでなければ氣に入らない、所がおふじといふのが、いろ〳〵何してくれるものだから、つい私も何だよ、何したものだから、それから向ふでも何さ、ぢやア何だからと、斯ういふものだから、それぢやア何しようぢやないかといふので、つい何してしまつたものだからさういふ譯になつたのだ、分つたかい。』

妻『ちつとも分りやアしませぬ、そんならなぜ私に仰しやいませぬ。』旦那『それは困るよ、お前にいへばお前だつて腹が立つだらう。』

妻『決して腹などは立ちやアしませぬ、隱していらつしやれば餘計私だつて癪にさはるぢやアありませぬか、けれども貴下、どうにかなさいませぬければいけませぬ。』

旦那『だからさ、お前に分つたら百年目だ、仕方がない、因果を含めて國へ歸さう。』

妻『そんなことをなすつちやいけませぬ、私が知らない內ならよろしうございますが、知つてからそんなことなさると、私が悋氣がましいことをしたやうでよくございませぬから、斯うなさいましな、いつそそのおふじを、宅へ引取つたらいかゞでございませう、私もきやうだいがございませぬから、妹のやうにして、私が可愛がつて、二人で旦那樣のお世話をしようぢやございませぬか、さうすれば下らない入費も省ける勘定でございますから……。』

旦那『それはね、成程お前いふことも尤もだ、それは結構だけれども、それはいけないだらう。』

妻『何でいけないのです。』旦那『何でといつて年が若いからね、拙いだらう、第一可哀想ぢやないか。』

妻『をかしなことを仰しやいますね、おふじが年が若いから可哀想だなんて、私が猫入らずでも呑ませると思つて……。』

旦那『さういふ譯ではないけれどもさ……宜うございませう、さうしませう。』

妻『ぢやア、さういふことになさいますか。』旦那『なさいますよ〳〵。』

妻『善は急げでございますから直ぐにさう遊ばせ。』旦那『お前のやうに、足許から鳥が立つやうにいつたところで仕樣がないから、では明日の朝するから……。』

妻『ではさうなさいまし。』

翌る朝になると、

妻『サア行つていらつしやいまし。』

旦那『どうもせはしないね、どうも弱つたね――ハイ、お早う。』

ふじ『オヤ旦那いらつしやいまし、大層お早く。』旦那『實はお前に話しがあつて來た――といふのは外ぢやアないが、あの權助の奴が、お前のことを何も彼もお內儀さんに喋舌つてしまつたのだ。』

ふじ『マアどうしませうね。』

旦那『ナニどうするには當らない、どうせ分るんなら早く分つてしまつた方がいい、家内のいふには、お前を斷うやつて他所へ圍つておいては、世間體が惡いから、いつそ家へ引取つたらよからうといふのだ、どうだらう、家内のところへ行つて貰ひたいと思ふが……。』

ふじ『それは貴下可哀想ぢやございませぬか、まだ御目にかゝつたことのない奥さんの側へ私が行きましては、又いろいろ何でございませう、家の中が揉めて、旦那様が却つて氣兼をなさりやアしないかと……。』

旦那『そんなことはないよ、面白い女だし、中々利口者だから……。』

ふじ『オヤマア御馳走さまでございますそれは貴下の奥さんですから利口でせうよ、そこへ行くと、私ぐらゐ馬鹿なものはございませぬわ、有馬から親兄弟を捨てゝ東京へ來て賴りにする旦那が、奥さんは利口だと……。』

旦那『オイ〳〵さう泣いては困るよ、何も惡い氣でいつたのぢやアないよ、お前も利口だ、家内も利口だ、利口同志合ふんだから、決して間違はないから、嫌だといふなら仕方がない、ない緣と諦めてな、一時國許へ歸つて貰ひたい、よかつたら一つ私の顏を立てゝ私の機嫌よりは家内の機嫌を取つてくれゝば圓滿に物が往くんだ、一つ嫌だらうが、行つておくれな。』

ふじ『困りますねえ——けれども旦那様が眞ン中にはいつて、どんなか御迷惑でございませうから、それでは私は參ります。』

旦那『さうかい、それは有難い、善は急げだ、直ぐに支度をして……荷物などは後で宜いぢやアないか、婆やに持てるものは持たしてやつて——婆や、お前話しを聞いてゐたらう、斷ういふ譯で家へおふじを引取るから、お前は家へ歸つておくれ——ナニ給金の借がある、そんなものは上げるよ、お前に似合ふものがあつたら、皆んな持つて行つておくれ——おふじや、荷物は番頭に取りによこすから、兎に角お出で。』

おふじを連れて旦那、家へ戻つて參りました。

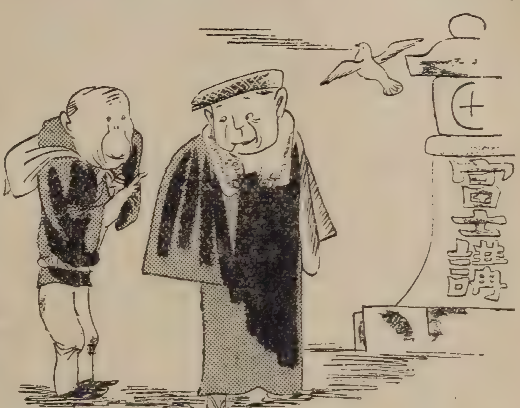
旦那『お前、これがおふじだよ。』妻『オヤいらつしやい、初めて、ハアハア、マア美い御容貌で、——本當に旦那様を大變にお世話して下さいましたさうですね、有難う存じます一遍御目にかゝつてお禮をいはうと思つてゐたのですけれども、つい忙がしいも。

のですから、それでもよくお出で下さいました、……旦那、本當に好い子ですね、貴下がお好きになるのは無理がございませぬ、私も本當に良い妹を持つたやうな氣持ちがいたしますよ。』

それからおふじはお内儀さんと一緒にゐることになりましたが、こゝがお内儀さんの利口なところ、少しも悋氣がましいところは見せませぬ、おふじを妹のやうに世話をいたします、あまりお内儀さんがよくしてくれると、おふじの方でゐたたまれませぬ。

ふじ『ねえ旦那、お内儀さんが、あんまりよくして下さいますので、私も本當に涙が出るほど嬉しうございます、何日まで斯うして御厄介になつてはゐられませぬので、如何でございませう、こちら樣が親許になつて、よろしい所へ私を縁付けて頂きたいものでございますが……。』

旦那『あゝさうかい、お前がさういふなら、どんなに嬉しいか知れない――千代や、おふじのいふには、お前の手許を離れるのは嫌だが、併し何日まで斯うしちやゐられないから、仲の好い時に姉妹となり、親許となつて、何所へでも縁付けてくれといふのだが、お前一つ骨を折つてやつておくれ。』



妻『オヤマア、おふじや、お前良いことをいつておくれだね、それでは私の氣に入つたところへどうにかして上げるから――。』

これからお内儀さんが奔走をすると良い所がありましたから、十分の支度をしておふじさん輿入れといふことになりました。後は御夫婦仲も圓滿、御商賣繁昌で、このくらゐ結構なことはございませぬ。何事もなく過ぎた或る日のこと、

妻『權助や、お前歸つて來たのかい。』

權『へエ、只今戻りました。』妻『旦那樣はどうおしだえ。』權『旦那樣は、途中でこれからおふじ樣へ行くから、お前先きへ歸れといふことでございました。』

妻『何だいおふじ……權助や、マア呆れ返つて言ひやうがない、何かい旦那樣はきれいに別れてしまつたのに、矢つ張私に内緒で、おふじを何所かへ圍つてあるのかい。』

權『ナーニお内儀さん、そんなに怒るものでねえ、おふじさんではない、富士横町のお富士樣へ御參詣に行つたゞよ。』

妻『アレマア權助や、お前がおふじさまといふから惡いんだね――けれども權助や、どうして旦那が、あんな若い女に、夢中になつたらうね。』

權『それは相手が、お富士さまだから、登りつめる譯だ。』

（終）

征病指針

まちがつてゐる肺病の養生法

★……かくして肺患を治されよ……★

肺病者に警告す

人は肺患ときくと、まるで死刑の宣告でも受けたかの樣に悲觀し薬や注射や器械のみで病氣を治さうとする。それにつけこんで、無効の薬や器械を賣りつけたり、いかゞはしい療法を强ひたり、秘密にすべき病人の名前や、寫眞を現した全快廣告を出したりして病人を吊る商人が多い。薬屋が何んな甘い文句の廣告を出しても、山師が何んな大きなホラを吹いても騙されてはならぬ。肺病菌を殺す薬や注射はまだ世界にないのです。

肺病は治せる

肺病は薬や器械や注射のみでは治らぬが、大自然の力を借りて正しい療法を行へば治る。薬は自然を助けるに過ぎない。

若草萌ゆる土、澄み切つた水、爽かな空氣、惠みあまねき陽の光自然の薬草木、この大自然の中に肺病者を救ふ慈愛の手がさしのべられてゐる。

肺病はこの自然に還れば治る。肺病が治らぬと云ふ人は、大自然の惠みを忘れた科學萬能者か西洋文明心醉者です。

まちがつた養生法

治るべき肺病が何故治らぬか……。それはあなた方の養生法がまちがつてゐるからです。貴下は日光療法を誤つてゐませんか?……水に親しんでゐますか?……晝も夜も窓をあけてゐますか?……自然を障げる薬や器械を使つてゐませんか?……土の利用法をご存じですか?……

正しい療法は　ここにあり

正しい療法を知りたい人は「富士で見た」と記し**河内國小阪町功德山德林寺**へハガキをお出しなさい。するとお釋迦樣の金言を基礎として正しい養生法を書いた松永佛骨師著「**肺病治療の原理**」と云ふ本と、お寺に傳はつてゐる漢法療法を教へた「**光明のあなたへ**」といふ本を二册無代で送られます。同寺へは毎日、全快のお禮參りをされる方がございます。(同寺では病人の名を絶對に秘密にしてゐるから御安心なさい。)

尚、松永佛骨師は、肺患に最も理解ある征服者で德林寺住職として、教職に在る一方大阪府會議員として府政に令名を馳せ、あまたの社會事業等に日夜心身を、激働に投じ、然も尚かくしやくと活動されて居る方です。

大長篇 時代小説

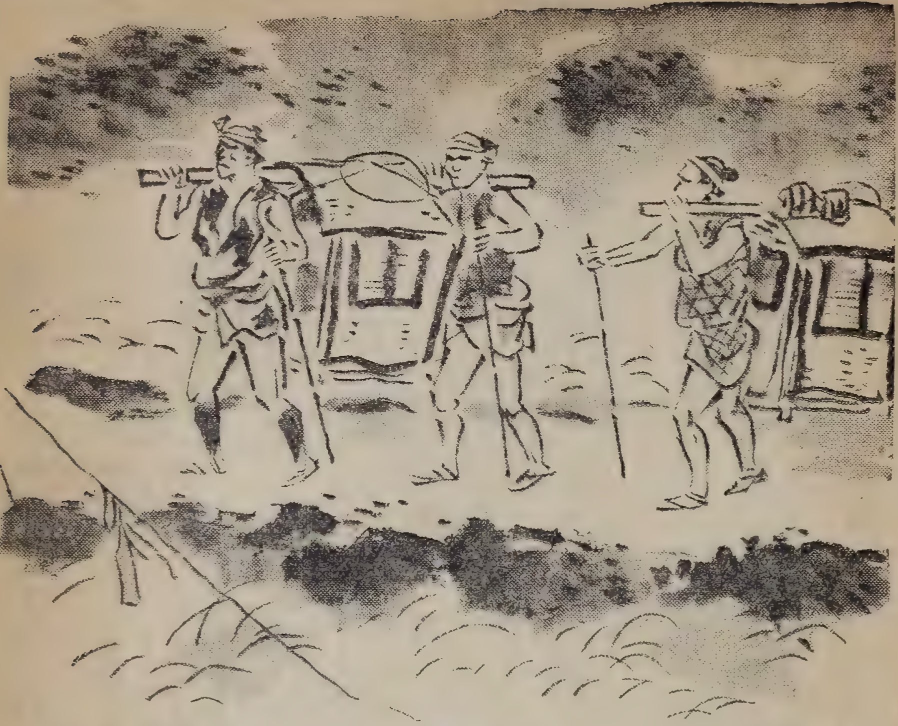
坊様羅五郎

白井喬二

齋藤五百枝畫

前號までの梗概

生れた儘の純情生一本、正眞無垢の坊様である負田羅五郎は、己が信ずる正義通りに、寃罪で下獄した父を破牢して救出し、爲に遁竄多難の月日を送る中にも、其間或は敵の姪娘春江の難を助け、或は孤立無援の舊塾主の急場を庇ふなど、止むに止まれぬ彼一流の正義行爲を重ねてゐたが、最後に、或支那船に潛む近藤と呼ぶ日本少年、これを庇護して斬鬼堂といふ惡漢を懲らしたのが打止め、忽然、抑へ難い望郷の念に打たれた彼は、手段を以て春江並に忠僕呂之吉共々、其支那船に紛れ込んで、絶えて久しい遠州濱松の港に入つたが、いざ下船といふ間際、變裝の支那服の着方に間誤ついたが因、あはれ時刻遲れて、本船に取殘され



て了つた。懷しき故郷であると共に、父を陷れた不倶戴天の惡吏の住む土地、それを目前に眺め乍ら、上陸もならず焦る中、早くも船檢査に現れたは、怨み重なる奉行次席倉光林藏の手の者。切羽詰つた坊樣羅五郎、此急場を果してどう切拔けるか？

出迎へ巧言

一

『もし、支那の藝人さん。』

羅五郎と、呂之吉春江の三人が、辛くも檢閱の目を遁れて、艫端舟で舞阪に上陸した途端、やにはに、斯ういつて呼び止められた。

『はい。』

迂濶、呂之吉が、日本語で返事をして了つた。

冷汗リツ……と三人は顏を見合せた。咄嗟であるから返事ぐらゐは仕方がないけれど、これは拙いと思ふと、後は、表情が硬張つて、他國の時のやうに濶達自在な氣持になれなかつた。

『一寸……待つてお呉れ。』

『…………』

『貴郎方は、支那の藝人さんだらう？』

さう云ひながら、半分堅氣な、半分鯔脊な男が、好意を見せ

ようとするやうに、莞爾々々笑ひながら、招猫のやうに片手を輕く擧げて、ヅカ〳〵と、近寄つて來た。

『な、さうだらう？』

『うむ。』

と呂之吉が、當惑しながら、曖昧に肯頭いた。

『はゝあ、いくらか話が分るね？』

『いや。』

羅五郎が引取つて、

『分らぬ。』

『おや、では、お前さんの方が分るのか。』

『分らぬ。』

『やつぱりか？　でも、そいつア日本語だ。それに若いから、勘も好いだらう。何アに、大した面倒な話があるわけではない、私は、勸進元の方から頼まれて、支那の藝人さんを迎へに來たんだ。』

『迎へに？』

羅五郎は、思はず目を瞠つて聞返した。

『分るかね？　ウムウム、迎へだ。いゝかね。お前さんがたを駕籠のある所まで案内するのが私の役目さ。駕籠。乘る駕籠だ。な、分るかね？』

『駕籠？』

羅五郎は眉根に皺を寄せて、

『乘物、懲々。』

『ほう、大分話せるぢやないか。』

『歩く方、よろしい。船、うごく、もう懲々。支那藝人、みな歩く。なア呂……呂智深。』

『へえ。』

と呂之吉が、また日本語で返事をしてしまつた。

『さうかね。』

相手は、多少煙に卷かれた氣味で、

『中々達者なもんだ。よく分る。駕籠より歩く方が勝手だといふのだらう。成程、船の後で駕籠は、有難くないかも知れない。それなら、何も、無理に駕籠を差上げようとは云はぬが……一座の人と、大分遲れてしまつたやうだからね。とにかく、案内しよう。』

『案内？　一座のところへか？』

『さうさ――そのために、態々迎へに來たんだから。第一、お前さん方だけ、そんなにおくれて、みんなの行つた方角だつて、よく分らないだらう。』

『それは分らぬ。』

『さうれ、だから、やつぱり案内役が要るんだ。勸進元は、馴れてゐるからね。――とにかく、私に跟いておいでなさい。』

さう云つて、呑みこみ顔に、件の男は、さつさと三人の前に立つて歩き出した。

二

斯うなれば、この、自ら出迎へ人と稱する男の後に跟いて行くより他は仕方がなかつた。

いや、寧ろ、倖せな話だ。下船が遲れたため、一座の行つた方角も、落着き場所も全く知らないので、實は當惑してゐた所だ。それも今までの土地なら兎も角く、今度はさうは行かぬ。今までなら、失策を失策として、切返しの可笑味も、何うやら餘興となつたが、この一歩は虎穴にひとしい自領自國。豫て、お尋ね者の人相書を廻され、召捕の建札まで張られた、舊怨舊恨の土地である。一座をはなれて、三人だけでは、所詮、支那藝人の看板を持續けられる筈はない……早くも陷つたその困惑を、都合よく救つてくたのがこの出迎へ男だつた。

とにかく、この男の後に跟いて行きさへすれば、一座に合體することができるだらう。

これ倖ひ。

さういつた氣持の三人である。

出迎へ男は、歩いて行きながら、

『お前さんがた、日本は始めてかね？』

『う……』

呂之吉が、何か云ひさうに口を動かしたので、羅五郎が急いで、

『何あるか？』

と呆けた顔をして見せた。

『いやさ、日本にな、やつて來たのは始めてかと訊いてゐるのだ。』

『あゝさうか、始めてある。』

『隨分、長旅だつたらうな。』

『いゝえ。三日。』

『え？ 三日？ 支那からか？』

『あ。いや……さうだ、もつと懸つた。支那からは、もつと……な、呂、呂智深。』

『へえ。』

『はゝゝゝ、こつちのお爺さんは、返事だけは馬鹿に巧いね。とにかく、支那の藝事は珍らしいから、興行は大當りだらう。さつき、澤山荷物が行つたが、あれはみんな衣裳かね？』

『衣裳……ばかりでは無い。樂器もある。』

『あゝ囃し方の道具か。何にしても、大掛りな乘込みだね。この分なら素晴しい人氣が出るだらう。』

睨視々々と春江の方を見て、

『それに、姐さんも中々美しい。』

『ふ……』

春江は横を向いて密と舌を出した。

濱名湖の面はすでに暮れて、茄子紺色の夕靄が深く垂れ罩め、

…………所々に白い光が掠れてゐた。それを左に見て、舞阪の町家を裏に抜けて、出迎へ男の足取は、どうやら、山の手の方角へ向つて進んでいく様子であつた。

一丘越せば父の舊管轄地――負田の領は直ぐそこにあつた。

『さて、少し路が惡くなるよ。』

と斷わつて、出迎へ男は、狹い路へ曲つた。

田圃といふほどではないが、家々の切れ目に、畑があつたり水田があつたりした。家は、次第に農家ばなれがして、點々と、屋敷建風になつて來た。やはり、想像どほり山の手へ向つて歩いて行くことが分る。

『さア、丸木の段々だ。暗いから、躓かないやうにしてお呉れ。』

さう注意されて見ると、成程、いつの間にか路は爪先上りになつて、橙畑のやうな間を通つて、ずんずん上に導かれてゐた。

『やア、賑やかに騷いでる。』

出迎へ男は、何か耳敏く聽付たやうに呟いて、大股に歩いて行つたが、眞つ暗

な納屋口のやうな所に立停ると、

『さ、後で大一座の方へ案内するから、一先づこゝで一憩みなさい。お前さんがたは、別部屋の方がいゝだらうといふことになつた——後からどうにでもなる。さア、お這入んなさい。』

戸口を開けて、三人の這入つたのを見澄すと、件の出迎へ男は、急いで戸を締めて、外からガチャンと錠前を卸してしまつた。

隣國の災ひ

一

『親分。』

出迎へ男は、拔足差足、大急ぎで座敷の方へやつて來て、

『占、占。巧く行きましたぜ。』

と、首を差伸べながら囁いた。

座敷には、行燈があか〳〵と點つてゐて、こゝの主人と思はれる博徒風の男と、それと並んで客人と思はれるのが、驚いたことには、三河國蒲郡で蛇坐を卷いてゐた例の斬鬼堂と、もう一人、これも同じ場所で羅五郎とお馴染の、鳳來寺山山男買出しの月形屋とが、互に、示し合せたやうな顏をして坐つてゐた。

『うむ、案外靜かだつたな。』

こゝの主人が肯頭くと、斬鬼堂の方へむかつて、

『お話の通り運びました——三河の仇を遠州で討つた譯ですね。』

『はい。』

斬鬼堂も神妙に一禮して、

『いろいろお骨折り有難う存じました——私共の言葉をお信じ下さいましたゞけでも滿足でございますに、その上、お力添へ下さいまして、こんな嬉しいことは御座いません。第一、男の面目が立ちます。なア、月形屋。』

『左樣でございますとも。』

月形屋も、一膝乘出すやうにして、

『彼奴にや、全く酷い目に逢ひました。さつきも申しました通り、斬鬼堂の親分樣への遣口なんか、聞いたばつかりでも胸が煮沸返ります。私も……八十兩くすねられた劫ッ腹が、これでやつと治まります。あの納屋の中へ閉籠られるのも、謂はゞ天罰でございまさ。』

『併し……』

斬鬼堂が、

『よく三人、溫和しく跟いて來ましたね。若いのが一件で、後は年寄と娘と……それが結團なんだから。』

『大丈夫です。』

出迎へ男は、肩を立てゝ、ぐんと引受けた樣子をして、

『お話を聞いてゐりや、三人の仲間はすぐ分ります。第一、支那藝人に扮してゐるけど、成つちや居ませんや。化の皮、丸出しでさ。あれぢや、此つ方がいくら頓間だつて、一目でそれと看破れますからね。』

『斬鬼堂さん。』

とこゝの主人が、

『その男、木崎塾の伜といふのも嘘だと云ひましたね。』

『はい。眞赤な嘘ださうです。月形屋、お前から逐一申上げたら好からう。』

『えゝ嘘でございますとも……私も、すつかりその手で騙られました。』

『ふむ。』

『尤も、木崎塾に寢泊りしてたことは眞實ちしうございますから……まア、一寸臨時に雇はれたんでせう。そいつを好いことにして、若先生顏をしやがつたんですね。』

『どうして分りましたか、贋だといふことを？』

『分りましたとも、後で、本物の若先生に會ひましたからね。どうも、最初から、可笑しい〳〵とは思つたけど……眞逆、贋とは氣がつかないので、甘々と八十兩はめられました。』

『さうすると、本來は何者でせう？』

『さア。』

と月形屋が、斬鬼堂の方を振返つた。

『親方、何でせう？』

『左樣。どうせ、この世を忍ぶ兇狀持だらう。第一、贋若先生の後が、贋支那人。どつちにしてもゾッとしない。三河は散々荒されたが、遠州だけは、その二の舞を踏ませたく無いと思つて……まア、意地と一緒に、先廻して、お知らせに上つたやうな次第で。』

『分りました。』

主人が、大略の主旨を呑みこんだ樣子で、

『何しろ相手を生虜にしたからは、思ふ存分、あなたがたの面目を立てなさるがいゝ。』と云つた。

二

『有難う存じます。』

斬鬼堂は、人が變つたやうに尋常な態度でお辭儀をして、

『思ふ存分と申しましても……罪を憎んで人を憎まぬのが私の持前でございます。ですから、相手が罪を白狀して、一言、詫を入れさへすれば、それで私は蟠りをさらりと消したいと思ひます。』

『成程。』

主人は感心したやうにうなづいて、

『貴郎は？』

と月形屋に訊いた。

『私ですか？』

『うむ。』

『私は……詫びを入れてもらふよりか、やつぱり、何ですね、八十兩を取返す方が眼目ですね。』

『成程。』と、これにも主人は肯頭いて、

『それも淡泊でいゝ。』

『へえ。』と月形屋は圖に乘つて、

『けれども、たゞ返却せといつても、奴、素直に返却すはずがないから……最初、やつぱり手管を用ふるんですね。』

『どんな手管を？』

『さア……そこですがね。』

月形屋は、パチンと膝頭を叩いて、二三遍小首を傾けてゐたが、

『先づ面白いのは……奴等、こんな所まで、三河の私等が、先廻りして來てゐるとは思はないでせう。』

『ふむ。』

『そこで、何故、看破れたか見當がつかないから……そこんとこが、奴等に取つちや一番薄氣味のわるいところです。』

『成程。』

『ね、さうとすれば、一番終ひまで、私等は匿れてゐた方がいいですね。』

『さうして？』

『へえ。さうして、つまり、私等が顏さへ出さなければ……それ、こゝは何樣のお屋敷だか、奴等、皆目、五里霧中だから、こつちは一つ、そこに乘じて大芝居を打つんでさ。』

『大芝居？　どんな？』

『好ござんすか。』

月形屋は、得意らしく舌舐りして、

『先づ、どつか、庭先を白洲に見立てるんですね。』

『白洲に？』

『さうしてね。』

顏を前に出して、

『旦那樣がお裁役。』

『ふむ？』

『御乾兒衆を、二三人、聞役に仕立てゝ左右にズラリと並ばせる。』

『はゝあ？』

『ね、捕方が向ふ鉢卷、十手構へ、幾人だつて庭先に立廻すことができませう……どうです、この趣向は？』

『ふゝうむ？』と主人が腕組をした。

『面白い。』と斬鬼堂が、傍から横手を打つた。

『月形屋、お前さんは智惠者だ。』

『へゝゝ、さうでもありませんが。』

『いや。』

斬鬼堂は、首を振つて感心して、

『戰爭だつて、藁人形や落穴を使ふといふ手がある。惡人を白状させるに、そのくらゐの謀を用ひたからとて、決して間違つては居ないだらう。尤も、こゝの旦那の御一存次第だが？』

『左樣。』
主人は、漸く微笑を浮べて、
『趣向は面白いと私も思ふが。』
『何か、御氣に召さぬ節でもございますか？』
『どうも、恰好がつくまいと思つてね……私も私だが、乾兒どもが調役といふわけには第一、雁首、骨柄が、これぢや。』
『なアに。』
斬鬼堂は、吻ッとしたやうに、
『そんなことなら何でもありません。高い所に上りや、誰でも結構、偉さうに見えるものですよ。それに……旦那樣なら、どこから見ても立派なお裁役が仕上りませう。』
『內々の事だから……そりや、遣つて見ても好いが。』
『有難う存じます。』
月形屋が、透かさずお禮をいつた。

納屋の中

一

『呂之吉。』
納屋の中に閉籠められて了つた羅五郎は、板の間にぺつたり坐つて、頻りに出口を探してゐる呂之吉を呼んだ。
『はい。』
『出口はあるまい。』
『お待ち下さい。』
呂之吉は、無いといふのが恐しいのか、先刻から、幾度も調べたところを、又しても、がさがさと甲蟲のやうに指弄つてゐた。
中は、眞つ暗であるから、どんな恰好で探して居るのか見えないが、支那服の呂之吉が、按摩のやうに手探ぐりで歩いてゐる樣子は、想像したゞけでも、餘りゾッとしなかつた。
片隅に、白牡丹が一輪咲いたやうに——春江の白い顏があつた。
『な、呂之吉。』
『はい。』
『あるまい？』
『出口と申すよりも……外の樣子を窺ひたいと存じまして。』
呂之吉は、負け惜しみを云つた。
他領では、どつちかといへば羅五郎任せの氣味があつた呂之吉も、遠州路へ這入つては、急に從僕氣質が復活したのか、こんなことを呟きながら、まだ引退らうとしなかつた。
春江が羅五郎の耳のところへ來て、
『坊樣さん……袋の中の鼠ね、妾達。』

と囁いた。

『うむ、どうもな。』

『はやまつたわね。』

『何が？』

『だつて……三人とも、こんな所へ跟いて來るなんて、隨分へマよ。誰か、氣がつきさうなもんだのに。』

『うむ。』

羅五郎は肯頭いて、

『それはさうだな。』

『坊樣さん、氣がつかなかつたの？』

『つかなかつた。』

『此處の家、何でせう？　勸進元ではないわね？』

『それは引受ける。』

『何を？』

『勸進元でないことをな。』

『あら、つまんない。そんなこと、引受けて貰つたつて、何にもならないわ。』

『でもな。』

と羅五郎が云つた。

『一つだけでもハツギリ分ればよい。』

『やつたわね、坊樣さんらしく。でも、勸進元でないばかりならいゝけど、若かすると、もつと悪い者かも知れないわ。たとへ

ば、酒天童子みたいな奴の住家だとか、山賊だとか。』

『いや。』

羅五郎は首を振つて、

『酒天童子ではあるまい。』

『あら……ホヽヽヽ、當り前だわ。誰も本氣でそんなこと云つてるんぢやないわ。例へばよ。』

『例へばか。』

羅五郎も笑つて、

『春江さんのことだから、本氣かと思つた。』

『ひどいわね。』

呂之吉が、

『もし。』

と小聲で、

『誰か來ましたから、お靜かになされまして。』

さう云つた時、成程、表に跫音が停つて、トントンと拳で戸を叩く音がした。

二

『これ、支那藝人。』

といふ聲がした。

『…………』

此つ方は、みな默つてゐた。

『これと申すに、返事をせい。』

『…………』

『おい、如何いたした。』

『好矣々々！』

羅五郎が思ひ出したやうに、突然、聞覺えの奇聲を發した。

『ふ……』

戸の外では鼻先で笑つて、

『仔細あつて、その方達を召捕つた。今夜はすでに遲き故、明早朝白洲に引出して取調べる。それまで、神妙にいたして居るがよい。』

『好矣々々。チンプクリン。』

『駄目よ、變なこと云つちや……』

と春江が、傍から氣を揉んで囁いた。

『どうだ、神妙に致して居るかッ。』

『居る。』

『ふむ。當宅は、さる御大官の御屋敷だ。こゝより逃れ出でようとしても、周圍は十重二十重、蟻の這ひ出る隙もないからさう思へ。分つたか。』

『分らん。』

羅五郎は、中からトントンと戸を叩いて、

『分らん。』

『これッ。戸を叩くといふ法があるか。不謹愼な。物を申すことがあるなら、畏つて申せ、畏つて。』

『はッ。』

羅五郎は口だけで平伏した。併しそれは決して冗談ではないと見え、顏には、眞劍の表情が浮んでゐた。

『ふン！』

外では益々氣色を害した樣子で、

『貴樣、お上を嘲弄いたすかッ。』

『はッ。』

『ま、まだか。ようし、さう云ふ事なら、此つ方にも考へがある。觀念して待つて居れ。』

『考へが變つたか？』

『何ッ？』

『これで、いくらか手心してくれるか？』
『ヘン、誰が手心なんかするものか。いや、大方、その手心は重い方にだらうぜ。兎に角く、明日になれば分る。今夜はたゞ申し渡しにだけ參つたのだ。』
『さうか。』
羅五郎は斷念た樣子で、
『言葉が通ぜぬから、どうもうまくいかん。』
『その位ゐ通ずれば結構だらうぜ。』
外で、揶揄する聲が聞えた。
『いや、支那語がな。』
『坊樣さん……』

と春江が袖を引いた。
『あ？　さうか――はゝゝ。一座はどこへ行つたか？　こゝに居らぬか？　嘘いふ役人、卑怯ある。な、呂智深。』
『へえ、好笑々々。』
『ちえッ。』
外では舌打して、
『いくらばつを合せたつて、種はみな擧つてゐるのだ。今夜一晩、さうやつて雄雌一緒に寢泊させてやるのも、謂はゞ慈悲に等しい、お上の計ひだ。たんまり、名殘の一夜を樂しむが好からう。』
『まア……厭だ。』

圍碁ファン熱狂大歡迎！

近來圍碁熱の勃興は實にすさまじい勢ひで、倶樂部に書齋に、さては街頭にまで進出してその一手位心得て居らぬと社會人として飛んだヒケ目を感じるやうな有樣です。此際ぜひ『報知相談圍碁』の御一讀をおすゝめ致します。（本社發行）

同書は、鈴木、瀬越兩七段組對木谷、呉兩六段組新舊定石大爭覇の歴史的大手合を、宛ら其場に在つて見聞するが如く各組別室に於ける秘策相談の内容から盤面火花を散らす對戰の模樣まで細大もらさず詳述した血沸き肉躍る大快著。

これを讀めば實戰の駈引、上達の秘訣、新舊定石の得失一目瞭然　定價一三〇、〒・一二

春江は、羅五郎の膝の上に顔を匿して打つ伏してしまつた。

俄か白洲

一

東の空が、やうやく薄茜色に染つたかと思はれる頃、
『おい、起きた〳〵。』
と入口で呼ぶ聲が聞えた。
昨夜、寢入りが遲かつたので、三人はまだ前後不覺に眠つてゐた。ハッと思つて、先づ眞つさきに呂之吉、その次ぎに春江、その春江に搖りおこされて羅五郎が一番終ひにやつと起きあがつた。
『好矣々々。』
『寢言いつちや駄目よ、坊樣さん。』
春江は、羅五郎の耳へ口を寄せてさゝやいた。
『へん。』
薄暗がりの納屋の中を覗きこんでゐた入口の人間は、その有樣に當てられ氣味で、
『朝調べだ、出て參れ。』
と、忌々しさうに、作り聲をした。
聲ばかりでなく、姿も捕吏風に扮裝へてゐた。

『さ、早く立て。何を愚圖〳〵してゐる。』
『……………』
『斷つておくが、神妙に致さんと繩を打つぞ。そちどもの出方一つでは、如何やうにも嚴重に致してやる。どうだ。』
『いえ……。』
呂之吉、羅五郎、春江の順序で急いで納屋を出た。蒸暑い中から出たので、朝の凉風はホッとするやうに爽やかだつた。外も、まだ全く明け切らずに、地上は、鼠色に薄暗く、屋根の上だけ暈したやうに明るかつた。
『此つ方に參れ。白洲へ引出すのだ。』
土間を通つて、裏へ拔け、木戸を押して中庭のやうな所へ導かれた。池があつて、その緣が築山になつてゐた。向ふに、緣側口。その前に、小石をならべて、狹い白洲のやうなものが出來てゐた。
『こゝだ。』
捕吏姿の男は、そこを指して、
『坐れッ。』
三人は、云はれた通り坐つた。
その時、向ふの障子が開いて、どや〳〵と四五人、村の相談會のやうに、不揃ひな足取で、混合ながら出て來た。併し、よく見ると、みんな鹿爪らしく羽織袴を着用し、中でも、眞ん中に坐つた男は、裁き頭らしく、一段と威儀を正した服裝をして

ゐた。

『うゝむ、これ。』

と裁き頭は、まづ聲をとゝのへて、

『その方たちは、支那藝人か？』

『はい。』

呂之吉が、お辭儀をした。

『みんな、さうか。』

『はい。』

『どれが一番、その内で位が上か？』

『位？』

『つまり……藝人として格式が上かと申すのぢや。給金の額でもよろしい。そつちの若いのか？』

『いゝえ。』

『では誰か？』

『いゝえ。』

『こらツ。』

裁き頭は目をむいて、

『誰かと聞いてゐるのに、いゝえと申す返事があるか。』

『ある。』

『何ッ。』

『皆んな同じだからな。』

『同じ？　三人ともか？』

『あゝ。それはな、貰つたものを、三つに分けるから、三人といつも同じだ。だから、誰が上役でもない。いゝえだ。』

『ふうむ。』

一寸詰つて、

『それなら――大分、金が溜つてゐるであらうな。』

『預けてある。』

『誰に？』

『支那藝人の座頭に。』

『ふうむ？』

裁き頭は、目を据ゑて、

『どの位ゐ預けてある？』

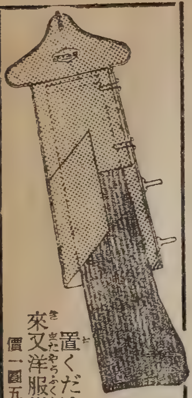
『とても數へ切れぬ位ゐだ。』

『ほう、そんなにか？』

『見當がつかん。これから貰ふ分も寄せるのだが。』

『こらツ。』

思はず怒鳴つた。


ドライプレス
アイロン寢押しの必要もなく一寸本器にかけて置くだけでトテモきれいにズボンに折目を付ける事が出來又洋服掛にもなる目下大流行のズボン皺伸し器です。
價一圓五十錢　送料内地二十五錢其他六十五錢　お注文は本社代理部へ

二

『第一。』

裁き頭は、開き直つて、

『その方たちが、支那人でないことは存じてゐるぞ。騙り者奴がッ。』

『はゝあ？』

羅五郎は見上げて、

『それで捕へたのか？』

『そればかりでは無い。』

『あゝ、金を捲き上げるつもりか。』

『こらッ。』

地團太踏むやうに前に出て、

『捲上げるとは何だ、上に向つて無禮であらうぞ。もう一度申してみい、不屈千萬な。』

『實はな。』

羅五郎は、つけつけと、

『遠州には惡い役人がゐると聞いたから、それで、金のことかと思つた。』

『誰からそんなことを聞いた？』

『三河では……評判だ。なア呂智深。』

『へえ。』

『うむ、さう〳〵。』

裁き頭は、俄に背頭いて、

『貴様は、その三河で、支那藝人ばかりでなく、日本人の僞名を使つたと申すではないか。若先生と稱へ、學塾の伜の名を騙つてよからぬことを致したと申すことは、ちやんと、當方、心得て居るぞ。』

『ほう？』

羅五郎も流石に呆れて、

『よく知つてゐるなア。』

『どうだ、畏れ入つたか？』

『入らぬ。』

『何ッ？』

『入らぬ。畏れは入らぬが、よく知つてゐると思ふだけだ。それならそれで、此つ方も考へがあるからな。』

『考へがある？　どんな考へだ？』

『先づ、自慢をしたいな。僞名と申すが、あれは父親の許しを受けてしたのだから差支へない。本當の伜は、箸にも棒にもかゝらぬ破落戸でな。だからわしが、一時手助けに代つてやつたのだ。分つたか？』

『こら。』

相手は反り返つて、

『分つたか、と申す言葉があるか。ぞんざいな口の利き方をする奴だ。聞くところによれば、その名を利用し、餘多の金圓を着服したと申すが……それでも畏れ入らぬか。』

『入らぬ。』

『剛情な奴だ。入らぬことはない。物盗、騙は重罪であるぞ。』

『こゝが自慢なのだ。あれは金を出させねばならぬ所だつた。實に美事に出させてやつた。形ばかり見て善惡を裁いては困るからな。分つたか？』

『こら、又ッ。』

佛頂面を怒らせて、

『金を償へ！』

『え？』

『三百五十兩に、八十兩とだ。二口だ。それをきり〳〵償へばよし、償はぬにおいては法に照し容赦いたさぬぞ。』

『ふうむ。』

と羅五郎は考へてゐたが、

『よろしい、償はう。償ふから、三人を支那藝人の一座のところへ連れて行つてくれぬか。わしは、金を出させることはうまいからな。』

『本當か？』

裁き頭も、思はず、乘り氣になつてダメを押した。

新代官の行列

一

三つの駕籠が路を急いだ。

この駕籠には、羅五郎たち三人が乘つてゐた。駕籠——といふと、いかにも優遇らしく聞えるけれど、これは、護送を樂にするためと、道筋を知られぬために、態と斯ういふ計ひにしたのだらう。

その駕籠から四五間離れたうしろを、裁き頭になつた彼の家の主人と、乾兒が三人。他に今一人、月形屋が町人とも岡ッ引とも紛はしい恰好で、トボ〳〵と跟いて行つた。

一同、跟いて行きながら、小聲で、

『眞ん中が女かね？』

『さうだよ。』

『一番うしろは？』

『若藏だ。』

『桑原々々。あいつア、厭に落着いた野郎だね……始めは本當の支那人かと思つた。何だかまはりクドク云ひ廻しやがるんでね。』

主人が振返つて、

『これ、彌藏言葉を使つちやいけねえ。』
『親分だつて。』
『あゝさうか。は、は、は。まア、小聲なら聞えぬからいいや。』
『旦那。』
月形屋が、目を光らせて、
『向ふぢやまだ、こつちを役人だと思つてゐませうか？』
『そこさ。實は、こつちが馴れないので、いやに金の事にこだはつてしまつたので、氣取られやしないかと思つたが……さうでも無いらしい。そこは、脛に傷持つ身だ。それに、十手預け下吟味お許しの身分だと、脅かしておいたから、多分、大丈夫だらう。』
『さうですか。』
月形屋は、猶ほも小聲で、
『でも、金はとても駄目でせうな。何しろ、蒲郡でやつと藝人仲間に入れてもらつたばかりだから……何處からも、そんな大金の出場所はありませんや。』
『だから。』
と主人は分別臭く、
『勸進元の權利をこつちに奪り上げてもいゝ。』
『成程！』
月形屋は横手を打つた。

『そいつは巧い考へですね。眼の着けどころが違ふ。』
『金はムキになつても駄目だからね、取るやうにして取らなけりや。』
『おそれ入りやした。』
月形屋は嬉しさうに煽動た。
駕籠が郊外らしいところへ出て、丘を一つ越えると、又平たい原つ端。そこを暫く行くと、突然、畦路に人のバタ〳〵走る音がして、
『御代官のお通りだ〳〵ッ。』
と叫ぶ聲が聞えた。
『え？　御代官だとよ。』
『ほう、今度の御代官か？』
駕籠舁が、思はず足をゆるめて、
『何とか云つたつけな？』
『星野藤左衞門様……素晴しい御出世だつていふ噂だ。』
『えつ？』
駕籠の中の羅五郎が、思はず垂から顔を差出して、
『星野藤左衞門が代官になつたのか？』
『オヤ、お前さん、支那人のくせに星野さんの名前を知つてるのか？』
『いや……さうだ、知らぬ。一寸間違へたのだ。』
羅五郎は急いで首を引つこめた。

二

『こら／＼。』
停つた駕籠の前に、裸足の侍がヅカ／＼と寄つて來た。
『その駕籠には、何者が乘つてをるのぢや。』
『はい。』
附添の主人は、白洲調べの時とは、似ても似つかぬ慇懃な恰好で、脛のところまで手をおろしてお辭儀をした。
『御代官樣のお通り過ぎをお待ち申して居る所でございます。』
『それは分つとる。』
裸足の侍は鷹揚に、
『それは分つとるが、中に乘つとる人間ぢや——第一、その方は誰ぢや。何と申す者ぢや？　相當身分ある町人のやうぢやが。』
『はい。南村橙塚の穀屋嘉平次と申す者にございます。』
『あゝさうか。』
顏色を柔げて、
『世話役ぢやな。』
『はい……到つて不重寶者にございますが、おせつかひの好きな質でございまして。』
『うむ。そこで……駕籠の中の者ぢやが？』
『はい。』
主人は、又丁寧にお辭儀をして、
『實は……支那藝人の一座の者でございますが。』
『ほう、三人ともか？』
『はい——お目觸りでございましたなら、何處か物蔭へお避けいたしませうか？』
『待て。』
裸足の家來は、向ふの高味に床几を据ゑて憩んでゐる新代官星野藤左衛門——これこそ、羅五郎の父負田狹衣之助を陥れた相手だ。そこへ行つて右の旨を通じたと見え、やがて恭しく一禮して、再び此つ方へ駈けもどつて來た。
『これ／＼、代官の仰せぢやがのう。』
『はい？』
『支那藝人を、代官屋敷へ同道いたせとの事ぢやが。』
『え？』
駕籠の中で羅五郎が、思はず驚いたが、それは、勿論、誰にも聞えなかつた。
『どうぢや、穀屋。』
『はい……何かお叱りを蒙るのでございませうか？』
『いや／＼。』
家來は頭を振つて、
『叱るのではない。代官屋敷で、今夕祝賀の宴があるのぢや。幸ひ、餘興が手薄で困つてゐるところぢやから……臨時に、一

枚加へたい。是非、同道せよとの仰せだ。』

『はい。』

『承諾せい。それも、いゝ人と縁が繋つたぞ。うまくやつたのう。これから、日のある内に、甲鱗館本陣(宿屋)に御滞泊中の幕府の使臣坪谷大學殿が代官屋敷へ來臨され、確實に、代官辭令が下るのだ。その後が祝賀ぢや。今後のこともある、すぐ承諾せい。』

『はい。まことに、有難き、倖せにございます。』

『さうだとも。』

『一寸お待ち下されまして。』

穀屋嘉平次も、向ふへ行つてからゴテられては困ると思ふから、腰を屈めて、密と羅五郎の乗つてゐる駕籠の中を覗いた。

『もし……只今の話を聞かれたらう?』

『あゝ聞いた。』

『それについて……約束の一座への引合せは後廻しとして、一寸、代官屋敷まで行つてくれぬか?』

『ふうむ。』

『考へることはない、是非頼む。』

『わしの方では考へることがあるのだからな。』

『それはさうだらうが、頼む。こゝで斷わると、わしの立場がなくなる。穀屋嘉平次一生の願ひだ。』

『裁き役が、急に町人になつてしまつたから、そなたも騙りだ。』

『ま、ま、そんなことは今こゝで云はなくても……それには、色々の事情がある。いづれ後でゆつくり話すから、とにかく、代官屋敷まで行つてくれ。』

『儲かるのか?』

『ま、ま、そんなことはどうでも。どうか焦心さないで。』

『こら〳〵、まだかッ。』

家來が、性急に催促した。

『へえ、承知いたしました。お同伴つかまつりますッ!』

嘉平次は、羅五郎の返事も聞かずに、たうとう、狼狽てゝ承諾してしまつた。

（つゞく）

羅五郎の駕籠は今や新代官の邸へ乗りこまうとしてゐる、新代官早野藤左衛門こそは、羅五郎にとつて怨み深き父の仇敵なのだ。果してそこに如何なる大破瀾が展開されるか、本篇最高潮の大場面はいよ〳〵次號!!

白井喬二先生が
本誌臨時増刊に執筆の大傑作篇!!

時代小説 **風流刺客**

——臨時増刊の發賣は九月十九日です——

あはや落つ夢が
覚めれば蒲團抱き
（はる緒）

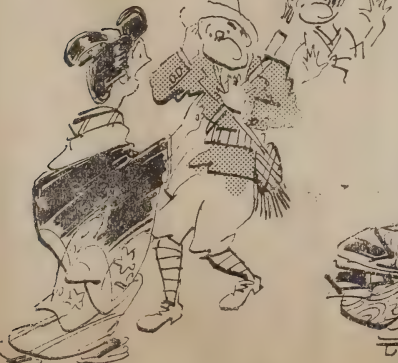
脊を一ツ
叩いた世辭は
舌を出し（青蛙）

圓タクを子が
掛け合つて
醉つて居る
（萬花洞）

仲直り
先づ赤ン坊へ
乳をやり（柳翠）

燒芋に野風呂
は矢鱈燃やさ
れる（しげる）

獵に出た
筈の夫と
カフヱ街
（欣潮）

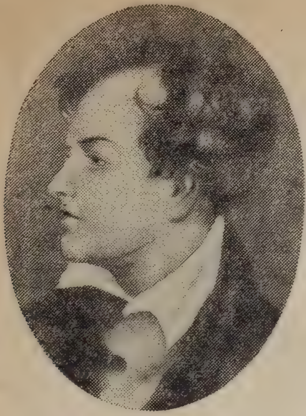


隣の碁
眺めてゐる
は勝つた奴
（默笑）
辨當が來て
踏切りは
子が代り
（悲戀史）
娘盛りは
バケツの水も
鏡なり
（周造）
番臺で睨んで
並ぶ戀敵
（葉村）
ラヴレター
風に吹かれ
て父の前
（恒倖）
臺秤 喜び殖える
母性愛
（愚々子）
浮世川柳
素文畫
投句歡迎

鶴見祐輔先生會心の名傳記

バイロン遂に出づ！

本邦随一のバイロン研究家たる著者が十數年來の蘊蓄を傾盡し、稿を改めること數回、眞に鏤身彫骨、畢生の努力を拂つて完成したる大豪華版！ 見よ！ 多彩絢爛一世を驚倒せしめたる大詩聖の全丰躍如！



バイロン卿

バイロンはナポレオンと相駢ぶ十九世紀歐洲の二大異彩であつた。ナポレオンの偉大は彼が劍をもつて征服した土地の廣さの故ではない。彼の奔放自在なる天才が人類の空想を刺戟するためである。

等しくバイロンの偉大も亦彼が筆をもつて記したる大詩篇の爲ではない。彼の縱横無礙なる人格が世界の情熱を激動せしむるからである。

バイロンの一生は、彼の賦したる瑰麗なる詩篇の如く、永久に人をして泣かしむる一大長恨歌である。しかも我々はバイロンのために泣く時に心中謂ふべからざる崇高と莊嚴とを味はう。之は彼が強くして清き魂を持つてゐたからだ。

彼の一生の興味は、人間の爲さんとして爲すを憚り、言はんとして言ふを恐るゝところを縱橫無盡に言爲したるにある。

天衣無縫、何等恐るゝなく、ひるむなく奔放不羈に生きた三十有六年の生涯、この華やかにして、短き天才の一生こそ波瀾重疊し＊

上　バイロンの母
下　バイロン夫人

＊成敗交錯し、喜怒哀樂、明暗陰晴、殆んど送迎に暇無きまで千變萬化してゐる。故にその傳記は、一卷の極彩色の繪卷物を繰りひろぐる如く美しく、天下の名優秘技を盡くす大映畫を眺むるよりも面白い。

バイロン以前に一人のバイロン無く、バイロン以後に第二のバイロン無し。彼こそ古今獨步の詩聖であり、天才であり、偉人である。百歲の後、人をして欽慕渴仰せしむる所以はこゝにある。

巨人ビスマーク傳を世に送つて未曾有の大喝采を博したる鶴見先生の熱筆は本篇に到つて益々精彩を加へ、天馬空を行くが如き大天才の生涯を描破して餘蘊無し。讀者は悉く陶醉絕讚、興味萬斛、感激無比の大傳記！

是非々々御一覽あれ！

四六版・函入・布裝美本

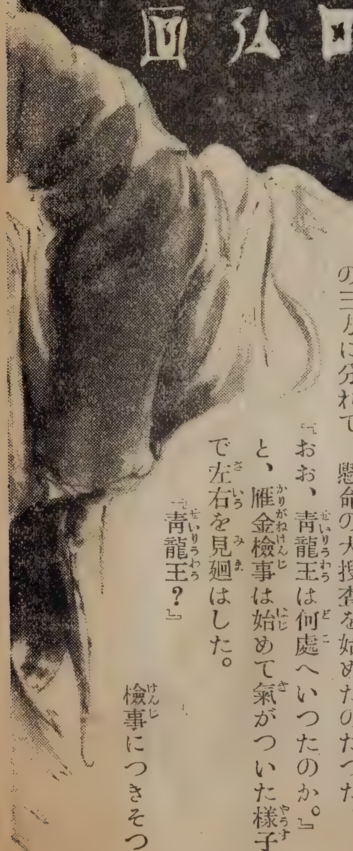
定價一圓（送料十二錢）　本社發行（振替東京三九三〇）

探偵小説

恐怖の口笛

海野十三

嶺田弘画



怪しい圖面

大膽不敵の兇賊痣蟹仙齋が隱れ柱の中に逃げこまうとするのを、素早く覆面探偵青龍王がムズと摑へたと思つたが、引張りだしてみると何のこと、痣蟹の左足の長靴と、そして洋服の裂けた一部とだけで、痣蟹の身體はそこに見當らなかつたではないか。これには痣蟹就縛に大悦びだつた雁金檢事や大江山捜査課長をはじめ檢察官一行は、網の中の大魚を逃がしたやうに落膽した。

しかし痣蟹はまだそんなに遠くには逃げてゐない筈だつた。總指揮官の雁金檢事は逡ろぐ氣色もなく、直ちに現場附近の捜査を命じたのだつた。警官隊はキャバレー、エトワールの屋外と屋内、それから痣蟹の逃げこんだ隱れ柱との三方に分れて、懸命の大捜査を始めたのだつた。

「おお、青龍王は何處へいつたのか。」

と、雁金檢事は始めて氣がついた様子で左右を見廻はした。

「青龍王？」

檢事につきそつ

てゐた主膳部の人たちも同じやうに左右を顧みた。だが彼の姿はどこにも見えなかつた。

『さつきまでその邊に居たんだが、見えませんよ。』と大江山課長は云つた。

『また何處かへとびだしていつたんだらう。』

『イヤ雁金檢事どの。』と課長は改まつた口調で呼びかけた。『貴官はあの青龍王のことをたいへん信用していらつしやるやうですが、私はどうもそれが分りかねるんです。』

と、暗に覆面探偵を疑つてゐるといふやうな口ぶりを示した。

『はツはツはツ。あの男なら大丈夫だよ。』

『さうですかしら。――さう仰有るなら申しますが、さつき暗闇の格闘中のことですが、いくら呼んでも返事をしなかつたですよ。そして唯、あの「赤い苺の實」の口笛が聞えてきました。それから暫くすると、急に青龍王の聲で（痣蟹はここにゐますぞオ）と喚

レビユウの明星赤星ジュリアが歌つて、俄然世に擴つた『赤い苺の實』の唄。其韻律の口笛が、日比谷公園の一角で聞えた途端、西一郎の弟四郎少年が、何者にか咽喉笛を食切られて慘死した。警視廳はその犯人を、兇賊痣蟹仙斎と推定し、謎の名探偵青龍王の力を借りて、大キヤバレー『エトワール』を舞臺に、凄絶な捕物戰を開始したが、一髪の間に目差す痣蟹は逃れ去つたのみか、其混亂の眞最中、又も何處よりか怪しい『赤い苺の實』の口笛が響いて、居合せた客の一人が咽喉笛を食切られて死んだ。白日に夢を追ふ樣なこの怪事件、犯人は果して何者か？（前號の梗概）

きだしたではありませんか。その間、彼は何をしてゐたのでせう。なにしろ暗闇の中です。何をしたつて分りやしません。』

人殺しだつて出來るとも云ひかねない課長の言葉つきだつた。

『あれは君、青龍王のやつが痣蟹に組み敷かれてゐたんで、それで聲が出せなかつたのだらう。それをやツと跳ねかへすことが出來て、それで始めて喚いたのだと思ふよ。』

『さうですかねえ。――第一私は青龍王のあの覆面が氣に入らないのです。向ふも取ると都合が惡いのでせうが、私たちは捜査中氣になつて仕方がありません。あの覆面をとらない間、青龍王のやることは何ごとによらず信用ができないとさへ思つてゐるのです。』

『それは君、思ひすぎだと思ふネ。』

と檢事は困つたやうな顏をして大江山捜査課長の顏を見た。

『ですから私は――』と課長は勝手に先を喋つた。『あの柱に服の裂けた一片と靴とが挾まつてゐましたが、あれは痣蟹が逃げこんだのではなくて、豫め痣蟹が用意しておいた二つを柱に挾んでその中へ逃げたものと見せかけ、自分は覆面をして誰に見られても解るその痣を隱し、青龍王だと云つてゐるかもしれないと思ふのです。』

『はツはツはツ。君は青龍王が覆面をとれば痣蟹だといふのかネ。いやそれは面白い。はツはツはツ。』

『私は何事でも、疑はしいものは證據を見ないと安心しないのです。またそれで今日捜査課長の席を汚さないでゐるんですから……』

『ぢや仕方がないよ。僕の身元引受けが役に立たぬと思つたら遠慮なく彼の覆面を外してみたまへ。僕は一向構はないから。』

『イヤさういふわけではありませんが……。しかし今夜はもう青龍王は出て來ませんよ。彼は逃げだせば、それでもう目的を達したんですから。』

流石は捜査課長だけあつて、誰も考へつかないやうな疑點を示したのだつた。だがそのときだつた。例の隱れ柱が音もなくパツクリと口を開き、その中から飛びだしてきたのが誰あらう、

覆面の探偵だつたから、氣の毒な次第だつた。

『うむ。――』

と捜査課長は驚きのあまり、思はず呻つた。

青龍王は檢事たちの姿をみつけると、ヅカ／＼と走りよつた。

『雁金さん。痣蟹の逃げ路が、たうとう分りましたよ。このキャバレーの縁の下を通つて、地階の物置の中へ拔けられるんです。そこからはすぐ表へとびだせます。貴方の號令がうまくいつてゐないのか、その物置の前には警官が一名も立つてゐないのです。うまく逃げられた形ですよ。』

『ナニこの柱から物置へ拔けて表へ逃げちまつたつて。』

檢事は肯きながら大江山課長の方を向いて『そんな逃げ路のあることを何故前もつて調べておかなかつたのかネ、君。早速キャバレーの主人を呼んできたまへ。』

『はア、――』

課長は面目ない顔をして、部下にキャバレーの主人を引張つてくることを命じた。

間もなく、奥から身體の大きなキチンとしたタキシードをつけた男が現れた。彼はどことなく日本人離れがしてゐた。それも道理だつた。彼はオトー・ポントスと名乘るギリシア人だつたから。

『わたくし、ここの主人、オトーでございます。――』

西洋人の年齡はよくわからないが、見たところ三十を二つ三つ過ぎたと思はれるオトー・ポントスはニコやかに揉み手をしながら、六尺に近い巨體をちよつと屈めて挨拶をした。

『君が主人かネ。』と檢事はすこし駭きの色を示しながら『怪しからん構造物があるぢやないか。この圓柱が二つに割れたり、それから中に階段があつたり、物置に拔けられたり、一體これは如何なる目的かネ。』

『それはわたくし、知りません。この仕掛はこの建物をわたくし買つた前から有りました。』

『ナニ前からこの仕掛があつた？　誰から買つたのかネ。』

『ブローカーから買ひました。ブローカーの名前、控へてありますから、お知らせします。』

『うむ、大江山君。そのブローカーを調べて、本當の持ち主をつきとめるんだ。――それはいいとして、何故こんな拔け路をそのままにして置いたのカネ。何故痣蟹に知らせて、利用させたのだ。』

『わたくし痣蟹と稱ぶミスター北見仙齋を信用してゐました。あの人、わたくし故國ギリシアから信用ある紹介狀もつてきました。』

『ギリシアから紹介狀をもつてきたつて。ほほう、痣蟹はギリシアに隱れてゐたんだな。イヤよろしい。君にはゆつくり話を

聞くことにしよう。しかしもし痣蟹から電話でも手紙でも來たら、すぐ本廳へ知らせるのだ。いいかネ。忘れてはいけない。』

『よく分りました。』

そこでオトー・ポントスはまた恭しげに敬禮をして下らうとしたとき、

『ああ、ちよつと待つて下さい。』

と聲を掛けた者があつた。それは先刻から痣蟹の遺留した品物をひねくりながら、この場の話に耳を傾けてゐた覆面探偵青龍王だつた。

『ポントスさん。これは貴方のものではありませんかネ。』

といつて　青龍王は何か小さい紙片を見せた。キャバレーの主人はそれを手にとつてみたが、それは何か建築圖の斷片らしく壁體だの階段だの奇妙な小室だのの符號が並んでゐたが、生憎ごく端の方だけを切取つたものらしく、何を示してある圖か、この斷片だけでは分らなかつた。

『これ、何ですか。とにかく、わたくしのでは有りません。』

ポントスは腑に落ちぬ顔をして、紙片を青龍王に返した。

『もう一つ、お尋ねしますが、赤星ジュリアは昨夜ここへ來たのが始めてですか。』

『いえ、たび／＼來て、歌はせました。もう七、八回も頼みました。』

『たいへん御贔負のやうですね。』

『さうです。ジュリア歌ふ――お客さま悦びます。わたくしも悦びます。なか／＼よい金儲けできますから、はツはツはツ。』

ポントスは露骨な笑ひを殘して出てゆくと、大江山捜査課長は青龍王の腕をムズと捉へた。

『いまの建築圖のやうなものを出し給へ。君はそれを何時の間にどこから手に入れたんだい。』

青龍王は課長の手を靜かに拂ひながら、

『これですか。これを御存知なかつたんですネ。なアに、痣蟹の裂けた洋服の裏に縫ひつけてあつたんですよ。』と事もなげに云ふと、その紙片を恭しく差

『富士』臨時増刊
愈々九月十九日發賣！
六百數十頁の大册！
面白いこと傑作なこと眞に破天荒!!
然も全部讀切です。

し出しながら『では確かに貴方様にお手渡しいたしますよ。』

不可解なる紙片！ 一體それはいかなる秘密を物語るものであらうか。

消えた屍體

何のためか十日間あまり、事務所を留守にしてゐた青龍王は、キャバレー、エトワール事件の次の日の晝ごろ、ブラリと探偵事務所に姿を現はしたのだつた。覆面探偵の歸還！

その氣配を知つて、奥から飛ぶやうに出て來たのは勇敢な少年探偵勇だつた。

『ああ、青龍王。――僕は今日はきつと青龍王が歸つて來ると思つてたんです。』

といつて、相も變らず頭部にはピッタリ合つた黒い頭巾を被り眼から下を三角帛で隱した覆面探偵を迎へたのだつた。探偵は少年の肩を兩手で優しく叩いた。

『昨夜は青龍王、素敵でしたネ。だけど、もう僕たちを呼んで下さるかと思つてゐたのに、ちつとも呼んで下さらないのでガッカリしちやつた。』

『勇君も大辻も來てゐたのは知つてゐたが、昨夜の事件は危くて、手傳はせたくなかつたのだよ。』

『その代り僕は、いろ／＼な土産話を青龍王にあげるつもりですよ。昨夜舞臺下で殺された男ネ、あれは龍宮劇場に毎日のやうに通つてゐた小室靜也といふ伊達男ですよ。いつも舞臺に一番近いところにゐて、ジュリアが出ると誰よりも先にパチ／＼と拍手を送るイヤナ奴ですよ。あの男のことは、龍宮劇場のファンなら誰でも知つてゐますよ。』

『ああ、さうだつたのか。それはいいことを聞いた。』

『あの伊達男小室の咽喉にあつた凄い切傷も、この前、日比谷公園で殺された學生の咽喉の傷も、どつちも同じことですね。つまりどつちも吸血鬼がやつたんですよ。』

『うむ。』と青龍王はちよつと眼を輝やかせたが、すぐ元の溫和しい彼に歸つた。『さうだ、その日比谷公園の話を詳しく君にして貰はうかな。』

實に驚くべき面白さ！ これを見逃したとあつては千秋の恨事です、今からどうぞ發賣の日をお忘れなく、豫め最寄の書店に御申し込み下さい。

詳細は本誌の折込豫告を御覧下さい。

そこで勇少年は、前日黄昏の日比谷公園でみた慘劇について知つてゐることをすべて語つた。青龍王は曲つたパイプで刻み煙草をうまさうに吸ひながらぢッとそれに耳を傾けてゐた。

『すると勇君の說によると、はじめ學生は躑躅の蔭で戀人の少女と樂しく語つてゐた。その話半ばに、少女は何か用事ができて、學生を殘したまま出ていつた。吸血鬼は學生が獨りになつたところを見濟まして、背後から咽喉を絞め、つづいて咽喉笛をザクリとやつて血を吸つたといふのだネ。』

『その通りですよ、青龍王。』

『それから、その戀人の少女は現場へ歸つて來たかネ。』

『いいえ。』と勇少年は頭を振つて『僕はそれを考へて、長いこと待つてゐたんだけれど、たうとう歸つて來なかつたんです。』

『それは可笑しいネ。今の話なら、必ず歸つてくる筈だと思ふがネ。外に戀人らしい女は誰も通らなかつたのかい。』

『ええ、さうですよ。』と勇は應へたが、そのとき急に氣がついた樣子で『アッ、さういへば赤星ジュリアが近よつてきたことは來たんです。でもあのひとは、自動車で通りかかつたんだといつてゐましたよ。それから自動車の中から出て來なかつたけれど、ジュリアの友達の矢走千鳥も傍まできました。でもいくらなんでもこの二人が……』

『でもこの二人の外に誰も少女は歸つて來なかつたんだらう。一應そこを考へてみなくちやいけない。それに先刻の話では、四郎——イヤその學生の日記帳の數十頁がいつの間にか破られてゐたといふし……』

『そのことは大辻さんがたいへん怒つてゐますよ。どうしても二人に尋ねるんだといつて、今日出かけていつたんです。』

『ジュリアの耳飾右の方のはチャンとしてゐたけれど、左のは石が見えなくて金環だけが耳朶についてゐたといふのは面白い發見だネ。』

『僕は耳飾から落ちた石が、もしや吸血鬼の潜んでゐた草叢に落ちてゐないかと思つて探したんだけれど、見付からなかつた。それからジュリアの步いたと思ふ場所をすつかり探してみたんだけれど、やはり見付からなかつた。それでジュリアの耳飾の青い石は、あの邊で落としたものぢやないといふことが分つたんですよ。青龍王。』

少年はさういつて、眼をパチ〳〵瞬いた。青龍王はパイプから盛んに紫煙を吸ひつづけてゐたが、やがて少年の方に向き直り、

『君は少年の屍體の邊もよく探してみたかネ。』

『もちろん懷中電燈で探したんだけれど、何遍やつてみても見つからなかつたんです。』

『ほう、さうかネ。』

少年は青龍王の顏をしげ〳〵と見てゐたが『まさか青龍王は赤星ジュリアたちを怪しんでゐるのぢやないでせうネ。』

青龍王はそれに應へようともせず、いつまでも默つてパイプを吸ひつゞけてゐた。

そのとき卓上電話のベルがリリリンと喧しく鳴り響いた。勇少年が受話器をとりあげて出てみると、向ふは赤星ジュリアを尋ねていつた筈の大辻の聲だつた。

『ナニ丸ノ内で大騒ぎが始まつたつて？　青龍王が歸つてゐられるから、いま代るから待つてゐるんだよ。』

といつて、受話器を讓つた。

青龍王はうむ／＼と聽いてゐたが、やがて電話を切つた。

『どうしたんです、青龍王。』

『なアに、痣蟹が龍宮劇場の裏口を通つてゐたのを發見して、また警官隊と銃火を交へたのださうだ。痣蟹はたうとう逃げてしまつたので、疲れ儲けだ。しかし痣蟹は龍宮劇場の外を歩いてゐたのか、それとも中から出て來たのか分らないさうだ。』

龍宮劇場といふと、誰でもすぐジュリアを思ひうかべる。やはりジュリアは事件に關係があるのだらうか。

『でも變ですね。痣蟹はあの恐ろしい横顔を知られずにどうして晝日中歩いてゐられたのでせう。』

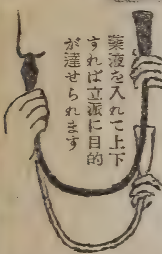
『ウン痣蟹は田舍者のやうな恰好をして、トランクを肩にかついで、たくみに痣をかくしてゐたさうだ。』

專門醫家推奬

蓄膿症・肥厚性鼻炎・鼻カタル

難治の鼻病が朝夕一回の御使用で治せる！

『フーピー』は裝置は簡單ですが、適切合理的な治病作用は斷然無類で、洗鼻と共に獨特の藥液によつて鼻腔は淸掃され、同時に消炎・殺菌の二作用が行はれ、不快な症狀は使用毎に消散して、頭も輕く氣分爽快、知らぬ間に難治頑固な鼻病を快癒に導く事ができます。



藥液を入れて上下すれば立派に目的が達せられます

こんな症狀があつたら…

黃色い鼻汁がかんでもかんでも出る…鼻腔が乾燥してムヅ痒い…鼻が詰る…鼻孔がむくみ呼吸が困難…絶えず頭痛がし、頭が重苦しい…記憶力が減退し、注意力が散漫になる…以上の樣な症狀があつたら早速フーピーをお用ひ下さい。次第にその症狀が消えて氣分がよく精神爽快になり完全に治療の目的を達する事が出來ます。

フーピー

一日の經費僅かに一錢內外です

極めて經濟的に治療できますから通院の出來ない方の御家庭治療器としてこれに申分ありません。

定價一組一圓三十錢（藥液だけは五十錢）

送料內地十錢其他四十二錢（藥液送料同じ）

東京小石川音羽 大日本雄辯會講談社代理部

（振替東京六六二九）へ御註文下さい

JUL 24

『なるほど、うまいことを考へたなア。はははは』

大辻はジュリアに會つて日記帳のことを聞いたが、あたしは知りませんといはれたさうだ。まづいネ。

青龍王は自室に入ると、それから夕方までグッスリと睡つた。

夕飯ができた頃、勇少年がベルを押すと、青龍王は起き出してきた。依然たる覆面のため、顔色は窺ふよしもないが、動作は明かに元氣づいてみえた。そして大辻も加はつて久し振りで三人が揃つて食卓についた。しかし探偵談は一切ぬきであつた。それが青龍王の日頃のお達しであつたから。――夕飯が濟むと、青龍王は行先も云はずブラリと事務所を出ていつた。

痣蟹はどこへ逃げてしまつたらう。いま何處に隱れてゐるのだらう。覆面探偵青龍王は戰慄すべき吸血鬼事件に對しいまや本格的に立ち向ふ氣色をみせてゐる。彼の行方はいづれこの事件に關係のある方面であらうといふことは改めて謂ふまでもあるまい。だがその行先は暫く秘中の秘として預ることとし、その夜更、大學の法醫學教室に起つた怪事件について述べるのが順序であらう。

宏大な大學の構内は、森林に圍まれて靜寂そのものであつた。殊にこれは深更の十二時のことであつた。梟がときどきホウホウと梢に鳴いて、まるで墓場のやうに無氣味であつた。木造の背の高い古ぼけた各教室は、納骨堂が化けてゐるやうであつた。そしてどの窓も眞暗であつた。ただ一つ、消え忘れたかのやうに、また魔物の眼玉のやうに、黄色い光が窓から洩れてゐる建物があつた。それは法醫學教室の解剖室から洩れてくる光だつた。

近づいてみても、カーテンが深く下ろしてあるので窓の中にはなにがあるのやら、樣子が分らなかつた。たゞ森閑とした夜の幕を破つてときどきガチャリといふ金屬の觸れあふ音が聞えた。その怪しい物音が、室内に今起りつつある光景をハッキリ物語つてゐるのだつた。

そこは馬蹄形の急な階段式机が何重にも高く聳えてゐる教室であつた。中央の大きな黑板に向ひあつて、眞白な解剖臺がポツンと置かれてあつた。その傍にはもう一つ小さい臺があつて、キラキラ光る大小さまざまのメスが並んでゐた。解剖臺の上には白蠟のやうな屍體が横たはつてゐるが、身長から云つてどうやら少年のものらしい。それを圍んで二人の人物が、熱心に頭と頭とをつきあはさんばかりにしてゐた。一人は白い手術着を着て、メスだの鋏だのを取りあげ、屍體の咽喉部を切開してゐた。もう一人は白面の青年で、形のよい背廣に身を包んでゐた。

この手術者は法醫學教室の蠟山教授、白面の青年は西一郎と名乗る男だつた。そこまで云へば、臺の上に載つた屍體が、吸血鬼に虐まれた第一の犧牲者である西四郎のものだといふことが分るであらう。

『どうも素人は功を急いでいかんネ。』と蠟山教授がいつた。『やはりかうして咽喉から胸部を切開して食道から氣管までを取出し、端の方から充分注意して調べてゆかなけりや間違ひが起る虞れがあるのだ。急がば廻れの諺どほりだて。』

『時間のことは覺悟をしてきました。今夜は徹夜しても拜見します。』

『うん。時刻はこれから午前二時ごろまでが一番油の乘るときだ。君の時刻の選擇はよかつたよ。しかしいくら弟の屍體かは知らぬが君は熱心だねえ。もしここから上にあるものならば、必ず君の目的のものを發見してあげるから安心するがいい。イヤどうも皮下脂肪が發達してゐるので、メスを使ふのに骨が折れる。こんなことなら電氣メスを持つてくるんだつた……』

といつてゐるとき、チヂチーンと、壁にかけてある大きなベルが鳴りひびいた。それはあまりに突然のことだつたので、教授は、

『ややツ――』

とその場に飛び上つたほどだつた。

『何でせう、いまごろ?』

『ハテナ誰か來たのかな。この夜更に變だなア。』と教授は頭を傾げた。

そのとき、またベルがチヂチーンと、喧しく鳴つた。

『ちよつと見て來よう。』

と教授はメスを下に置くと、扉をあけて廊下へ出ていつた。廊下は長かつた。漸く入口のところへ出て、パッと電燈をつけた。

『誰だな。――』

と叫んだが、何の聲もしない。

『誰だな。――』

さういつて硝子越しに、暗い外を透してみてゐた教授は、何に駭いたか、

『呀ッ、これはいかん。』といつてその場に尻餅をつくと、大聲に西一郎を呼んだ。

その聲はたしかに解剖室に聞えた筈だつたけれど、西はどうしたのか、なか／＼出て來なかつた。蠟山教授は俄かに恐怖のドン底に落ちて、急に口が出なくなつて、手足をバタ／＼するだけだつた。

『どうしたんです、先生!』

元氣な聲が奥から聞えると、やつと西一郎が駈けつけた。西にやつと聞えたらしい。

『いま怪しい奴が、その硝子のところからこつちを睨んだ。ピストルらしいものがキラリと光つた、と思つたら腰がぬけたやうだ。どうも極りがわるいけれど……』

『ナニ怪しい奴ですつて?』

一郎は勇敢にも扉のところへ出て、暗い戸外を窺つた。しか

し彼には別に何の怪しい者の姿も映らなかつた。教授はきつと何かの幻影をみたのだらうといふことにして、彼は教授を抱き起して、肩に支へた。

『あツ、冷たい。君の手は濡れてゐるぢやないかい。向ふで手を洗つたのかネ。』

『いえなに……』

『なぜ手を洗つたんだ。一體何をしてゐたんだ。法醫學教室の神聖を犯すと承知しないよ。』

一郎は口だけは達者な教授をしつかり擔いで廊下を元の解剖室の方へ歩いていつた。

『オヤ、變だぞ。』と一郎は叫んだ。

『なにが變だ。』と教授は一郎の胸倉をとつたが『うん、これは可笑しい。教室の燈が消えてゐる。君が消したのか。』

『いえ、僕ぢやありません。僕は消しません。これは變なことだらけだから、靜かに行つてみませう。聲を出さんで下さい。いいですか。』

二人は靜かに戸口に近づいた。そしてじつと眞黒な室内を覗きこんだ。二人はもうすこしで、呀ッと聲をたてるところだつた。誰か分らぬが、解剖臺の上を懷中電燈で照らしてゐる者があつた。が、それはすぐ消えて室内はまた暗澹の中に沈んだ。その代り、なにか重いものを引擦るやうにゴソリ〳〵と

いふ氣味のわるい音がした。

一郎は教授に耳うちして、室内の電燈のスヰッチの在所を訊いた。それは室を入つたすぐの壁にとりつけてあるといふことだつた。彼は教授の留めるのも聞かず、勇躍飛んで出ると、スヰッチを眞暗の中に探つてパッと灯をつけた。たちまち室内は晝を欺くやうに煌々たる光にみちた。

『呀ッ、怪しい奴がッ！』

見ると黒板の左手にあたる窓が開いて、そこに一人の男が片

足かけて逃げださうとしてゐた。

『待てッ！』

と聲をかけると、かの怪漢はクルリと室内に向き直つた。

ああ、その恐ろしい顏！左の頰の上にアリ／＼と大蟹のやうな形の痣が現れてゐた。

『ああ、彼奴だッ。』

一郎はさう叫ぶと、なほも逸つて怪漢に飛びつかうとする蠟山教授の腰を壓さへて、教壇の蔭にひきずりこんだ。

ダグーン。

轟然たる銃聲が聞えたと思ふよりも早く、ピューッと銃丸が二人の耳許を掠めて、廊下の奥の硝子窓をガチャーンと破壞した。一郎の措置がもう一秒遲かつたとしたら、教授の額には孔があいてゐたかもしれない。

それから五分間――二人は鮑のやうに固くなつて、教壇の蔭に潜んでゐた。もうよからうといふので、恐る〳〵頭をあげて窓の方をみると、窓は明け放しになつたままで、もう怪漢の姿がなかつた。ホッと息をついた蠟山教授はこのとき眼を解剖臺の上に移して愕然とした。

『やられたッ。――屍體がなくなつてゐる！』

なるほど、解剖臺の上には屍體の覆布があるばかりで、さつきまで有つた筈の屍體が影も形もなくなつてゐた。

『彼奴が盜んでいつたんですよ、ホラ御覧なさい。』と一郎は床の上を指しながら『屍體を曳擦つていつた跡が窓のところまでついてゐますよ。屍體を窓から抛りだして置いて、それから彼奴が窓を乘越えて逃げたんです。』

『うん、違ひない。早く追ひ驅けてくれたまへ。』

『もう駄目ですよ。逃げてしまつて……』

『何を云つてゐるんだ。君の弟の屍體なんぢやないか。』

『追ひついても、ピストルで撃たれるのが落ちですよ。それよりも警視廳へ電話をかけませう。』

『君のやうな弱虫の若者には始めて會つたよ。駄目な奴だ。』

教授はいつまでもブツ〳〵怒つてゐた。

晝間丸ノ内を徘徊してゐた蟇蟹が、深更になつてなぜ屍體を盜んでいつたのだらう。一郎はなぜ弟の屍體を追はなかつたのだらう。果して彼は弱虫だつたらうか。

麗はしき歌姫

その翌日のこと、西一郎はブラリと丸ノ内に姿を現はした。そして開演中の龍宮劇場の樂屋へノコ〳〵と入つていつた。赤星ジュリアの主演する『赤い苺の實』が評判とみえて、眞晝から觀客はいつぱい詰めかけてゐた。いま丁度、休憩時間であるが、散歩廊下にも喫煙室にも食堂にも、『赤い苺の實』の旋律を口笛や足調子で恍惚として追つてゐる手合が充滿してゐた。これが流行とはいへ、實に恐るべき旋律であつた。――

『まア西さん、暫くネ――』

とジュリアは一郎を快く迎へた。

『イヤ早速、僕のお願ひを聞きとどけて下すつて有難うございます。これで僕も失業者の仲間から浮び上ることができます。』

一郎はジュリアに頼んで、レビュウ團の座員見習として採用し

てもらふこととなつたのであつた。彼は長身の好男子だつたし、それに音樂にも素養があるし、タップ・ダンスはことに好きで多少の心得があつたので、この思ひ切つた就職をジュリアに頼んだわけだつた。日頃我儘な氣性の彼女だつたが、弟を殺された一郎に同情したものか、快くこの勞をとつて支配人の承諾を得させたのであつた。

『あら、改まつてお禮を仰有られると困るわ。――だけど勉強していただきたいわ、あたしが紹介したその名譽のためにもネ。』

『ええ、僕は氣紛れ者で困るんですが、藝の方はしつかりやるつもりですよ。』

『頼母しいわ。早くうまくなつて、あたしと組んで踊るやうになつていただきたいわ。』

『まさか――』

と一郎は笑つたが、ジュリアの方はどうしたのか笑ひもせず、夢見るやうな眸をヂッと一郎の面の上に灑いでゐたが、暫くしてハッと吾れに歸つたらしく、始めてニッコリと頬笑んだ。

『ホ、ホ、ホ、ホ……』

一郎はジュリアの美しさを沁々と見たやうな氣がした。ただ美しいといつたのではいけない、惱ましい美しさといふのは正にジュリアの美しさのことだ。帝都に百萬人のファンがあるといふのも無理がなかつた。一郎はいつか外國の名畫集を繙いてゐたことがあつたが、その中にレオン・ペラウルの描いた『車に乘れるヴィーナス』といふ美しい繪のあつたのを思ひ出した。それは波間に一臺の黃金づくりの車があつて、その上に裸體の美の女神ヴィーナスが髮をくしけづりながら艷然と笑つてゐるのであつた。そのペラウルの描いたヴィーナスの惱しいまでの美しさを、この赤星ジュリアが持つてゐるやうに感じた。それはどこか日本人ばなれのした異國風の美しさであつた。ジュリアといふ洋風好みの藝名がピッタリと似合ふ美しさを持つてゐた――

ジュリアは一郎のために受話器をとりあげて、支配人の許に電話をかけた。だが生憎支配人は、用事があつてまだ劇場へ來てゐないといふことだつた。

『ぢやここでお待ちにならない。』

『ええ、待たせていただきませう。その間に僕はジュリアさんにお土産をさしあげたいと思ふんですが――』

といつて一郎はジュリアの顏をみた。

『お土産ですつて。まア義理固いのネ。――

やせる薬
無代進呈
デブ／＼と肥り過ぎて見苦しい人、特に顔や肩、手や足が、馬鹿に肥つてゐて、如何にもみつともない方々へ副作用の少しも無く服み安くて良く効くので全國各地からの禮状や感謝状で成程と喜ばれてゐる當醫院獨特のヤセル薬を壱百名を限り試薬を無代でお送りします
大阪市東區道修町富　賀來醫院薬品部

一體なにを下さるの。』

『これですけれど――』

一郎はポケットから小さい紙箱をとりだして、ジユリアの前に置いた。

『あら、これは何ですの。』

ジユリアは小箱をとつて、蓋を明けた。そこには眞白な綿の蒲團を敷いて、その上に青いエメラルドの寶石が一つ載つてゐた。

『これはッ――』

ジユリアの顏からサツと血の氣がなくなつた。彼女はバネ仕掛けのやうに立ち上ると、入口のところへ飛んでいつて扉に背を向けると、クルリと一郎を睨みつけた。

『あなたはあたしを……』

『ジユリアさん、誤解しちやいけません。まあ〳〵落着いて、こつちへ來て下さい。』

一郎はジユリアを元の席に坐らせたが、美しい女王は興奮に慄へてゐた。

『これは貴女の耳飾りから落ちた石でせう。これは僕が拾つて持つてゐたのです、警官や探偵などに知れると面倒な品物です。お土産として、貴女にお返しします。』

ジユリアは一郎に惡意のないのを認めたらしく、急いで青い寶石を掌の中に握つてしまふと、激した感情を壓へ切れなかつたものか、ワツといつて化粧机の上に泣き崩れた。それにしても一郎は落ちた耳飾の寶石を何時何處で拾つて來たのだらう。

『ジユリアさん。云つて聞かせ下さい。貴女は四郎と日比谷公園の五月躑躅の蔭で會つてゐたのでせう。』

『……』ジユリアは泣くのを停めた。

『僕はそれを察してゐます。つまり耳飾りの落ちてゐた場所から分つたのですが。』

『これはどこに落ちてゐたのでせう。』とヂユリアは顏をあげて叫んだ。

『それが四郎の倒れてゐた草叢の中からです。』

『嘘ですわ。あたしは隨分探したんですけれど、見當りませんでしたわ。』

『それが土の中に入つてゐたのですよ。多勢の人の靴に踏まれて入つたものでせう。』

『まあ、さうでしたの。……よかつたわ。』

それはすべて一郎の嘘だつた。本當をいへば、彼は昨夜、四郎の屍體からそれを發見したのだつた。蠟山教授がベルの音を聞いて法醫學教室の廊下へ出ていつた隙に、一郎はかねて信じてゐたところを行つたのだつた。彼は四郎の屍體の口腔を開かせ、その中に手をグッとさし入れると咽喉の方まで探ぐつてみたのが、果然手懸りがあつて、耳飾の寶石が出てきた。實は蠟山教授を煩はして食道や氣管を切開し、その寶石の有無をしら

べるつもりだつたけれど、怪しいベルの音を聞くと、早くも切迫した事態を悟り、荒療治ながら決行したところ、幸運にも寶石が指先にかかつたのであつた。素人にしては、まことに水ぎは立つた上出來の藝當だつた。後から闖入して屍體を奪つていつた痣蟹をみすみす見逃がしたのも、彼がこの耳飾りの寶石を手に入れた後だつたから、その上危險な追跡をひかへたのであらうとも思はれる。とにかくジュリアの耳飾の寶石は四郎の口腔から發見されたのだ。なぜそんなところに入つてゐたかは問題であるが、一郎がジュリアに發見の個所をことさら僞つてゐるのは何故だらう。

『ジュリアさん。四郎は貴女に、誰からか恨みをうけてゐるやうなことを云つてゐませんでしたか。』

これでみると、一郎はやはり愛弟四郎を殺害した犯人を探しださうとしてゐるものらしい。

『ああ、一郎さん。』とジュリアは苦しさうに顏をあげ『あたし何もかも申しますわ。そして、貴方の弟さんの日記帳から破つてきた頁をおかへししますわ。』

ジュリアは衣裳函のなかから、引き裂いた日記をとりだして一郎に渡した。それは四郎が殺された日、大辻が始めに屍體の側で發見し、二度目に見たとき裂かれてゐた四郎の自筆の日記

大好評

著者が大抱負の下に燃ゆる熱情を天下に訴へた問題の小説！

都會は常に嘆きの曙に明け、悲しみの鐘に眠る。都會のまばゆい美しさと魔のやうな魅力、燦として輝やく文化の反面に、怖るべき誘惑や迫害と、醜い愛慾の渦巻くを見よ。憧れの夢を抱く北國の一寒村から突然、大東京の眞只中に連れ出された純情無垢の美少女『志保子』が辿る苦難の道こそ、華かな五色のネオンに誘はれて都會に飛び來る若き女性への忠告である。

全篇悉く深刻な生活戰線の警戒書であり。切實な戀愛の相談書であり。娘持つ親への一大警告であり。靑年、處女の人生への好個の讀である。是非ご覽下さい。

嘆きの都

中村武羅夫先生著

定價一圓六十錢（送料十四錢）

――△全國の各書店にあります▽――

東京・小石川・音羽　大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）

に相違なかつた。一郎はそれを貪るやうに讀み下した。

『それをよく讀んで下されば分るでせうが、四郎さんとあたしとは、千葉の海岸で知合つてからお友達になつたんです。それは只の仲よしといふだけで、あたしは戀をしてゐたんぢやありませんのよ。どうかお間違ひのないやうに、ね。――その日も四郎さんはあたしに會ひに來たんですわ。それで夕方になり、四郎さんと日比谷を散歩して、あの五月躑躅の蔭でお話をしてゐたんですが、待たせてあつたあたしの自動車の警笛が聞えたので、ちよつと待つててネ、すぐ歸つてくるわといつて四郎さんを殘したまま、日比谷の東門の方へ行つたんですの。そこで自動車を見つけたので、四郎さんも連れてゆくつもりで自動車で迎ひにゆき、再び五月躑躅の蔭へいつてみると、四郎さんが殺されてゐたのですのよ。あたしはハッとしたんですが、人氣商賣の悲しさにはぐづ／＼してゐると人に見つかつて大變なことになると思つたので、引返さうとしましたが、その日四郎さんに見せて貰つた日記のなかにあたしのことが澤山書いてあつたものですから、これを殘しておいてはいけないと思つて、いま差上げただけの頁を破つてきたんですわ。すると間もなく皆さんに見つかつてしまつたんです。それがすべてですわ。』

『あゝ、さうですか。』と一郎は大きく肯きながら『では耳飾の寶石も、そのときに落としたんですね。これも拾はれては蒼蠅いことになるから、後で探したといふわけですね。』

『仰有るとほりですわ。寶石のことは、樂屋へ入つてから氣がついたんですの。隨分探しましたわ。ほんとにあたし感謝しますわ。でもこのことは、誰にも云はないで下さいネ。』

『ええ、大丈夫です。その代り、何か犯人らしいものを見なかつたか、教へて下さい。』

『犯人？　犯人らしいものは、誰もみなかつたわ。――』

といつてゐるところへ、電話がかかつてきた。それは出てきた支配人が直ぐ西一郎に會はうといふ電話だつたのである。

それから一郎は、支配人の室に行つた。ジュリアの口添へがあつたから、すべて好條件で話が纏つた。今日は見習かた／＼『赤い苺の實』の三場ばかりへ顔を出して貰ひたいといふことになつた。そして大部屋の人たちに紹介してくれた。

一郎はそれを報告のために、ジュリアの部屋に行つたが、鍵がかかつてゐた。それも道理で、ジュリアはいま舞臺に出て喜歌劇を演じてゐるところだつた。舞臺の横のカーテンの蔭には批評家らしい男が二人、肩を重ねんばかりにして、ジュリアの熱演に感心してゐた。

『ジュリアはたしかに百年に一人出るか出ないかといふ大天才だ。見給へ、どうだいあの熱情とうるほひとは……。今日はことに素晴らしい出來榮えだ。』

『僕も全く同感だ。どこからあの熱情が出てくるんだらう。ちよつと眞似手がない。――』

『ジュリアには非常に調子のよい日といふのがあるのだネ。今日なんか正にその日だ。見てゐると恐い位だ。』

『さうだ。僕もそれを云ひたいと思つてゐた。僕は毎日ジュリアを見てゐるが、調子のよい日といふのをハツキリ覺えてゐるよ。この一日に三日に、それから今日の四日と……』

『よく覺えてゐるねえ。』

『いやそれには覺えてゐるわけがあるんだ。それが不思議にもあの吸血鬼が出たといふ號外や新聞が出た日なんだからネ。』

『ははア、するとあゝいふ事件が何かジュリアを刺戟するのかなア。だが待ちたまへ、今日は何も吸血鬼が犠牲者を出したといふ新聞記事を見なかつたぜ。はツはツ、たうとう君に一杯擔がれたらしい。はツはツはツ。』

『はツはツはツ。』

一郎は批評家に嫌惡を催したのか、怒つたやうな顔をして、そこを去つた。

痣蟹の空中葬

丁度その頃、捜査本部では、雁金檢事と大江山捜査課長とが六ケ敷い顔をして向ひあつてゐた。机の上には、青龍王が痣蟹の洋服の間から見付けた建築圖の破片が載つてゐた。

『雁金さんはさう仰有るですが、どうしてもあの覆面探偵は怪しいですよ。』と大江山はまたしても青龍王排撃の火の手をあげてゐるのであつた。『第一あの覆面がよろしくない。本廳の部下の間には猛烈な不平があります。このまゝあの覆面を許しておくといふことになると、統制上由々しき一大事が起るかもしれません。』

『氣にせんがいいよ。さうムキになるほどのことではない。たかが私立探偵だ。』

『いまも電話をかけましたが、青龍王は所在が不明です。その前は十日間も行方が分らなかつた。』

『まアいい。あれは惡いことの出來る人間ぢやないよ。』

『それから所在不明といへば、あの西一郎といふ男ですネ。彼奴は犠牲者の兄だといふので心を許してゐましたが、イヤ相當なものですよ。彼奴は無職で家にブラ〳〵してゐるかと思ふと、どこかへ行つてしまつて、幾晩もかへつて來ない。留守番のばあやは金を貰つてゐながら、氣味わるがつてゐます。昨夜もさうです。蠟山教授を騙して、不明の目的のために四郎の屍體を解剖させてゐるうちに、怪漢を呼んで屍體を奪はせた。そのくせ當人は、痣蟹が屍體を盗んでいつたと稱してゐます。あれは僞せの兄ですよ。本當の兄なら、屍體を取返さうと思つて死力をつくして追駈けてゆきます。』

『イヤあれは本當の兄だよ。』

『私は隨分部下や新聞記者の前を繕つてきましたが、今日かぎ

りそれを止めて、本當の考へを發表します。第一今日はキャバレー、エトワールの事件で、靑龍王のところのチンピラ小僧にうまうませしめられて、面白くないです。』

といつてゐるところへ、給仕が入つてきて、雁金檢事に電話が來てゐると傳へた。

『はアはア、私は雁金だが、――』

と電話に出てみると、向ふは噂さの主の覆面の探偵靑龍王からだつた。

『今日何か新しい吸血鬼事件があつたでせう。』

『ほい、もう嗅ぎつけたか。あれは絕對秘密にして置いたつもりだが、實は――』

と、檢事は大江山との今の話を忘れてしまつたやうに、秘密事件について話しだした。それは今日晝すこし前、例の事件について調べることがあつて迎へのために警官をキャバレー、エトワールへ振出してみると、雇人は揃つてゐるが、主人のオトー・ポントスが行方不明であるといふ。そこでポントスの寢室を調べてみると、ベッドはたしかに人の寢てゐた形跡があるが、ポントスは見えない。尙もよく調べると、床の上に人血の滾れたのを拭いた跡が二三ケ所ある。外にもう一つ可笑しいことは、室內にはポータブルの蓄音器が掛け放しになつてゐたが、そこに掛けてあつたレコードといふのがなんと赤星ジュリアの吹きこんだ『赤い苺の實』の歌だつたといふ。いまもつてポントスの行方は分らない。――

その話をして、雁金檢事は靑龍王の意見をもとめたところ、彼は電話の向ふで、チェッと舌打ちをして云つた。

『雁金さん、ポントスは昨夜から今日の晝頃までに殺されたんですよ。』

『さう思ふかネ。誰に殺された。――』

『もちろん吸血鬼に殺されたんですよ。屍體はその近所にある筈ですよ。發見されないといふのは可笑しいなア。』

『やつぱり吸血鬼か。さうなると、これで三人目だ。これはいよいよ本格的の殺人鬼の登場だツ。――ところで君はいま何處にゐるのだ。勇が探してゐたが、會つたかネ。』

『場所はちよつと云へませんがネ。さうですか、勇君は何を云つてゐましたか。――』

と其處までいつたとき、何に駭いたか、靑龍王は電話の向ふで、

『ウム、――』

と呻つた。そして、

『檢事さん、また後で、――』

といつて、電話はギヤチヤリと切れた。

『午後四時十分。――』

と、檢事は靜かに時計を見た。すると待つてゐたやうに、大江山課長が聲をかけた。

『青龍王のゐるところが分りました。いま電話局で調べさせたんです。青龍王、いま龍宮劇場の中から電話を掛けたんです。私は青龍王に一應訊問をするため、職權をもつて拘束をいたしますから……』

『午後四時十分。――』

と檢事は大江山の言葉が聞えないかのやうに、靜かに同じ言葉を繰り返した。

丁度そのすこし前、龍宮劇場の赤星ジュリアの室ではまるで何かの劇の一場面のやうな、世にも恐ろしい光景が演ぜられてゐた。

赤星ジュリアは喜歌劇に出演中だつたが、彼女の持ち役である南海の女神はその途中で演技が濟み、あとは終幕が開くので彼女を除く一座は總出の形となつて、ひとりジュリアは樂屋に歸ることができるのであつた。彼女は自室に入つて、女神の衣裳を外しにかかつた。いつもなら、矢走千鳥が手傳つてくれるのだが、彼女は臨時に終幕に持ち役ができて舞臺に出てゐるので、ジュリア自ら扮裝を脱ぐしかなかつた。

彼女は五枚折りの大きな化粧鏡の前で、まづ女王の冠を外した。それから腰を下ろすと下に跼んで長い靴と靴下とをぬぎ始めた。演技がすんで、靴下を脱ぎ、素足になるときほど、快いものはなかつた。彼女は透きとほるやうに白いしなやかな脛を靜かに指先でマッサージをした。そして衣裳を脱がうとして、再び立ち上つたその瞬間、不圖室内に人の氣配を感じたので、ハッとなつて背後を振りかへつた。

『靜かにしろ。動くと撃つぞ。――』

氣がつかなかつたけれど、いつの間に現れたか、一人の怪漢がジュリアを睨んでヌックと立つてゐた。左手には古風な大型のピストルを持ち、その形相は阿修羅のやうに物凄かつた。彼の片頰には見るも恐ろしい蟹のやうな形をした黑痣がアリ〳〵と浮きでてゐた。これこそ噂さに名の高い凶賊痣蟹仙齋であると知られた。

ジュリアはすこし蒼ざめただけで、さして驚く氣色もなく、化粧鏡をうしろにして、キッと痣蟹を見つめたが、朱唇を開き、

『早く出ていつてよ。もう用事はない筈よ。』

『うんにや、こつちはまだ大有りだ。』と憎々しげに顎をしやくり『貰ひたいものを貰つてゆかねば、日本へ歸つてきた甲斐がねえや。――』

『男らしくもない。――』

『ヘン何とでも云へ。まづ第一におれの欲しいのはこれだア。――』

痣蟹はヂリ〳〵とジュリアに近づくと、彼女が頸にかけた大きいメタルのついた頸飾りに手をかけ、やつと引きむしつた。絲が切れて、珠がバラ〳〵と床の上に散つた。痣蟹はそれには氣も止めず、メタルを掌にとつて器用にも片手でその裏を開いた。中からは何やら小さい文字を書きこんだ紙片がでてきた。痣蟹はニッコリと笑ひ、

『やつぱり俺のものになつたわ。――』

『出ておゆき。ぐづ〳〵してゐると人が來るよ。』

『どつこい。もう一つ貰ひたいものが殘つてゐるのだ。うぬッ、――』

痣蟹はピストルを捨てると、猛虎のやうに身を躍らせてジュリアに迫つた。その太い手首が、ジュリアの咽喉部をギュッと絞めつけようとする。

『アレッ、――』

と叫ぶ聲の下に、化粧鏡がうしろに墜されて窓硝子に當り、ガラガラと物凄い音をたてて壞れた。

その途端だつた。入口の扉をドンと蹴破ぶつて、飛びこんで來た一人の、青年――

『ああ、一郎さん、助けてエ――!』

『曲者、なにをするかア、――』

青年は西一郎だつた。

彼はジュリアに返事をする遑もなく、彼に似合はしからぬ勇敢さをもつて、いきなり痣蟹の背後から組みついた。

『なにを生意氣な小僧め!』

痣蟹は落ちつき拂つて一郎を組みつかせてゐた。

『ジュリア、いまに思ひ知るぞオ。』

といふ聲の下に、彼はエイッと叫んで身體を振つた。その鬼神のやうな力に、元氣な一郎だつたが、たちまち撻と振りとばされてしまつた。

『さあ皆で懸れ、警官隊も來てゐるから、大丈夫だ。』と聲を聞きつけて、應援隊が飛びこんで來た。痣蟹は警官隊と聞くと舌打ちをして、入口に殺到した劇場の若者を押したふし、廊下へ飛びだした。アレヨ〳〵といふ間に、階段から下へ降りようとしたが、下からは駈けつけた大江山課長等がワッと上つてきたのを見ると、

『やツ。』

と身を飜してそこに開いてゐた窓を破つて屋上へ逃げた。

『それ、逃がすなッ。』

一同はつゞいて、屋上に飛び出した。痣蟹は巨大な體軀に似合はず身輕に、あちこちと逃げ廻つてゐたが、たうとう一番高い塔の蔭に姿を隱してしまつた。

『さあ、三方から彼奴を圍んでしまふのだ。それ、懸れッ。』

大江山課長は鮮やかに號令を下した。が、そのとき塔の向ふにフラ〳〵動いてゐた龍宮劇場專用の廣告氣球の綱が妙にブル〳〵と震へたかと思ふと、塔の

上に痣蟹の姿が見えたと思ふ間もなく、彼の身體はスル／＼と宙に上つていつた。

「呀ッ。痣蟹が氣球の綱を切つたぞオ。」

と誰かが叫んだが、もう遲かつた。華かな氣球はみる／＼虚空にグン／＼舞ひのぼり、それにぶら下る痣蟹の黒い姿はドン／＼小さくなつていつた。

『うん、生意氣なことをやり居つた哩。』と大江山捜査課長は天の一角を睨んでゐたが『よオし、誰か羽田航空港に電話をして、すぐに飛行機であの氣球を追駈けさせろッ。』と命令した。

一同はいつまでも空を見上げてゐた。

航空港からは、直ちに速力の速い旅客機と上昇力に富んだ練習機とが飛び上つて、氣球捜査に向つたといふ報告があつた。それを聞いて一同は、廣告氣球の消え去つた方角の空と羽田の空とを等分に眺めながら、いつまでも立ちつくしてゐた。

大江山課長は側らを向いて、誰にいふともなく獨り言をいつた。

『覆面探偵がたしかに來て居ると思つたのに一向に見つからず、その代りに痣蟹を見つけたが、また取逃がしてしまつた。この上はあすこで見懸けた西一郎を引張つてゆくことにしよう。』

しかし課長が下に下りたときには、その西一郎の姿もなくなつてゐた。

パチノ墓穴の慘劇

夜の幕が、帝都をすつかり包んでしまつた頃、羽田航空港から本廳あてに報告が到着した。

『龍宮劇場の廣告氣球を探しましたが、生憎出發が遲かつたので、三千メートルの高空まで昇つてみましたが、遂に見つかりませんでした。そのうちに薄暗になつて、すつかり視界を遮られてしまつたので、やむなく下りてきました。まことに遺憾です。』

捜査本部に於ても、それはたいへん遺憾なことであつた。せつかく屋上に追ひつめた痣蟹を逃がしてしまつたことは惜しかつた。しかしいくら不死身の痣蟹でも、そんな高空に吹きとばされてしまつたのでは、とても無事に生還することは覺束なからうと思はれた。結局それが痣蟹の空中葬であつたらうといふ者も出て來たので、本部はすこし明るくなつた。

『吸血鬼事件も、これでお仕舞ひになるでせうな。どうも譯が分らないうちにお仕舞ひになつて、すこし惜しい氣もするけれど。』

それを聞いてゐた大江山捜査課長は、奮然として卓を叩いた。

『吸血鬼事件が片づいても、まだ片づかぬものが澤山ある。帝都の安寧秩序を保つために、この際やるところまで極りをつけるのだ。ここで安心してしまふ者があつたら、承知しないぞ。』

一座はその怒聲にシーンとなつた。

それから大江山課長は經驗で叩きあげたキビ〳〵さでもつて、捜査すべき當面の問題を一々數へあげたのだつた。

『第一に、生死のほども確かでないキャバレー、エトワールの主人オトー・ポントスを探しだすこと。第二に、痣蟹の乘つて逃げた龍宮劇場の氣球がどこかに墜ちてくる筈だから、全國に手配して注意させること。それと同時に痣蟹の屍體が、氣球と一緒に墜ちてゐるか、それともその近所に墜ちてゐるかもしれぬから注意をすること。但し從來の經驗によると四十八時間後には氣球は自然に降下してくるものであること。第三に、覆面探偵を見かけたらすぐ課長に報告すること。以上のことを行ふについて、次のやうな人員配置にする。――』

といつてその擔當主任や係を指名した。一同は何でも彼でも、それを突きとめて、課長の賞讚にあづかりたいものと考へた。

そんな物騒な話が我が身の上に懸けられてゐるとも知らぬ覆面探偵青龍王は、龍宮劇場屋上の捕物をよそに、部下の勇少年と電話で話をしてゐた。——

『それで勇君が、ポントスの部屋の隠し戸棚から發見した古文書といふのはどんなものだネ。』

『僕には判らない外國の文字ばかりなんで、仕方がないから大辻さんに見せると、これがギリシア語だといふのです。大辻は昔勉強したことがあるさうで、辭書をひきながらやつと讀んでくれましたが、かういふことが書いてあるさうですよ。——明治二年「ギリシア」人「パチノ」ハ十人ノ部下ト共ニ東京ニ來航シテ居ヲ構ヘシガ、翌三年或ル疫病ノタメ部下ハ相ツギテ死シ今ハ「パチノ」獨リトナリタレドモ「パチノ」マタ病ミ命數ナキヲ知リ自ラ特製ノ棺ヲ造リテ土中ニ下リテ死ス——それからもう一つの文書は比較的新しいものですが、これには——「パチノ」ノ墓穴ハ頻々タル火災ト時代ノ推移ノタメニ詳カナラザルニ至リ、唯「ギンザ」トイフ地名ヲ殘スノミトハナレリ。マタ「パチノ」ガ「オスミ」ト稱スル日本婦人ト契リシガ彼女ハ災害ニテ死シ兩人ノ間ニ生レタル一子(姓不詳)ハ生死不明トナリタリ。ソレト共ニ「パチノ」ノ墓穴ニ關スル重要書類ハ紛失シ、只本國ヘ送リタル一二ノ通信ト「パチノ」ノ墓穴廓内ノ建築圖トヲ殘スノミナリ——といふのです。聞いてゐますか青龍王。』

噂の噂

滿洲の煙突男と云はれて、長く滿鐵總裁の椅子に頑張つてゐた林博太郎伯が辭任するとその後に躍り出したのが、世界的な豪快男松岡洋右氏だ。『松岡が滿鐵に行つて何をするか?』これ程近頃期待され畏れられてゐることは稀しい。松岡氏の出た事情には重大な意味があるが、その間の詳しい消息が現代十月號の大特輯『各界近頃大評判の話題』中にあるから本誌の讀者諸君は是非ご覽下さい。

◇

右の特輯は、松岡氏の消息の外に
○親日派勝つか歐米派勝つか支那の動き
○志賀曉子の訓へた女優と監督の問題
○軍務局長の遭難と肅軍の話
○日米水上競技は何を敎へたか
等々、目下大評判の問題を各方面から澤山集めて面白く説明したもので、これだけ讀めば今日の問題は何でも分り、消息通になること請合の大讀物です。

◇

現代十月號の大特輯としては更に
◎興味と感激の『古今偉人傳』
◎文豪、新進の名作『短篇小説傑作集』
◎新選道話集……加藤咄堂先生選
◎現代各方面成功者物語
◎古今名俳句評釋……矢田揷雲先生選
◎男に好かれる女、女に好かれる男
等の力作揃ひ! 現代十月號は九月十二日發賣大增頁の特大號です。御期待下さい!

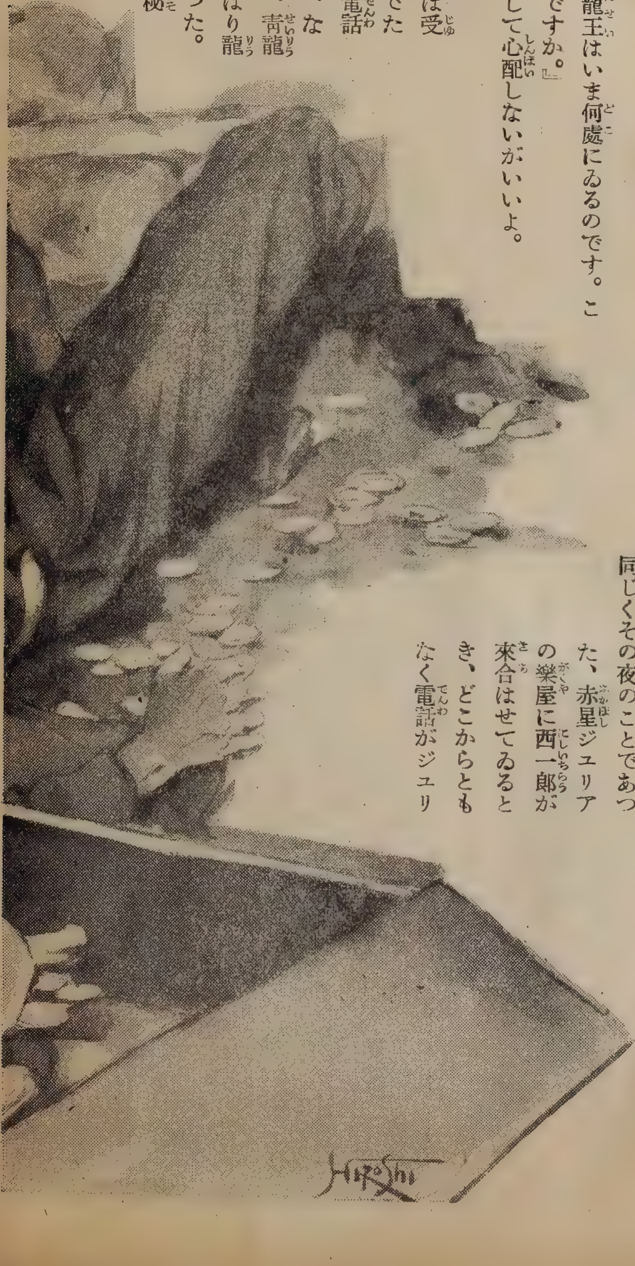
『イヤ熱心に聴いてゐるよ。それで分つた。キャバレーの主人ポントスも、本國からそのパチノの墓穴を探しに來てゐるのだ。その一方痣蟹もたまたまこの秘密を嗅ぎだして、本國で墓穴の建築圖などを手に入れ、日本へ歸つて來たのだ。すべての秘密はそのパチノの墓穴に秘められてゐるのだよ。パチノの墓穴の場所については、いささか存じよりがあるが、しかしパチノの遺族を捜し出すのはちよつと骨が折れるネ。しかし何事も墓穴の中に在ると思ふよ。では勇君、――』

『待つて下さい。青龍王はいま何處にゐるのです。これから何處へ行くのですか。』

『僕のことなら、決して心配しないがいいよ。――』

さういつて青龍王は受話器をかけた。心配でたまらない勇少年は、電話局に問ひあはせると、なんと不思議なことに、青龍王のかけた電話はやはり龍宮劇場の中のものだつた。彼は一體どこに姿を秘めてゐるのだらう。

それから空しく二日の日が過ぎた。

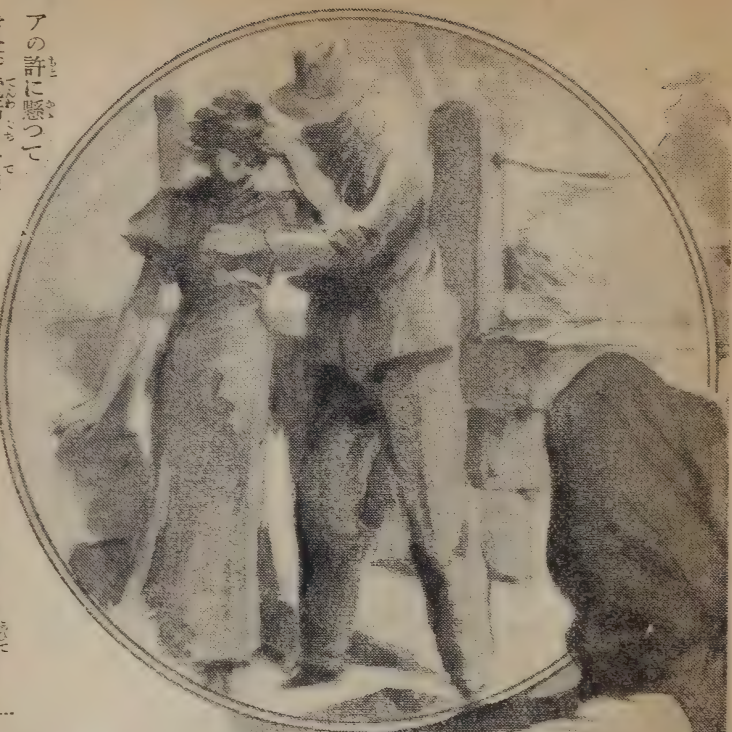


……………………

事件は一向思ふやうに解決しなかつたが、その代り新たな吸血鬼事件も起らなかつた。たうとう吸血鬼は滅んだのであらうか。

詳しく云ふと七日の午後になつて、痣蟹の乘つて逃げた氣球が、箱根の山林中に落ちてゐるのが發見された。しかし變なことに、その氣球は枯れ葉の下から發見されたのであつた。そして問題の痣蟹の死體はどこにも見當らなかつたといふ。――この報告に管下の警察は一齊に痣蟹の屍體發見に活動を開始した。

同じくその夜のことであつた、赤星ジュリアの樂屋に西一郎が來合はせてゐるとき、どこからともなく電話がジュリ



アの許に懸つてきた。電話口へ出てみると、相手は覆面探偵の青龍王だといつた。

『青龍王ですつて。まああたくしに何の御用ですの。』とジュリアは訝つた。

すると電話の聲は、痣蟹の氣球が發見されたが、屍體の見當らないこと、それから夕暮に箱根の山下である湯元附近の河原で痣蟹らしい男が水を飮んでゐるのを見かけた者のあること、そして念のために後から河原へ行つてみると、紙片が落ちてゐて、開いてみると血書でもつて『パチノ墓穴を

征服』としたためてあつたことを知らせた。

『パチノの墓穴を征服ですつて。』とジュリアはひどく愕いたらしく思はず聲を高らげて問ひかへした。

電話の聲は、さうです、なんのことか分らないが、確かにパチノと書いてありますよと返辭をして、その電話を切つた。ジュリアは倒れるやうに、安樂椅子に身を投げかけた。

西一郎は、電話の終るのを待ちかねてゐたやうに、ジュリアに云つた。

『青龍王本人が電話をかけて來たんですか。』

『ええ、さうよ。――なぜ……』

『はッはッ、なんでもありませんけれど。』

さういつた一郎の態度には、明かに動搖の色が見えたが、ジュリアは氣がつかないやうであつた。

青龍王の懸けた電話とは違つて、本廳の方へは深更に及んでも『痣蟹ノ屍體ハ依然トシテ見當ラズ、マタ管下ニ痣蟹ラシキ人物ノ徘徊セルヲ發見セズ』といふ報告が入つてくるばかりで、大江山課長の癇癪の筋を刺戟するに役立つばかりだつた。

その眞夜中、時計が丁度十二時をうつと間もなく、今は營業をやめて住む人もなく化物屋敷のやうになつてしまつたキヤバレー・エトワールの地下室の方角に、ギーイと、堅い物の軋るやうな物音が聞えた。エトワールの表と裏とには、正服の警官が張りこんでゐるのだつたけれど、この地底の小さい怪音は、彼等の耳に達するには餘りに微かであつた。一體誰がその怪しい音をたてたのだらう。

このとき若し地下室を覗いてゐた者があつたとしたら、隅に積んだ空樽の山がすこし變に捩ぢれてゐるのに氣がついたであらう。いやもつと氣をつけて見るなれば、その空樽を支へた壁體の隅が縱に裂けて、その割れ目に一つの黒影が滑りこんだのを認めることができたであらう。

そこは隱されたる秘密階段で、さらにまた深い地底へ續いてゐた。用心ぶかくソロ〳〵と降りてゆく黒影の人物の手は休みなしに懷中電燈の光芒の周圍の壁體に照らしてゐた。そのうちにどうした拍子か、その反射光でもつて顏面がパッと照らしだされたが、それを見ると、この黒影の人物は、かなりがつちりした骨組の巨人で、眼から下を黒い布でスッポリと覆ひ、頭には帽子の鍔を深く下げてゐた。覆面の怪漢――さういへば、これは例の問題男の青龍王と寸分ちがはぬ服裝をつけてゐた。おお、いよ〳〵青龍王が乘りこんで來たのであらうか。

彼は靜かに階段を下りていつた。下はかなり廣いらしい。江戸時代の隱し藏といふのはこんな構造ではなかつたか。――下では何をしてゐるのか、とき〴〵ゴトリ〳〵といふ物音が聞えるばかりで、いつまで經つても彼は出てこなかつた。恐ろしい靜寂、恐ろしい地底の一刻！

そのとき、どこかで微かに口笛の音がしたと思つた。それは氣のせゐだつたかも知れないと人は疑つたらう。しかしそれは確かに口笛に違ひなかつた。次第に明瞭になる旋律。ああそれは赤星ジュリアの得意な『赤い苺の實』の旋律――しかしこの場合、なんといふ恐ろしい口笛であつたらう。暗い壁が魔物のやうに、かの怪しい旋律を伴奏し

た。……と、突如――まつたく突如として、魂切るやうな悲鳴が地底から響いて來た。

『きやーッ、う、う、う……』

しかし、それきりだつた。悲鳴は一度きりで、再び聞えてこなかつた。

戰慄すべき慘劇が、その地底で行はれたのだつた。その現場へ行つてみよう。

これはまた何といふ無慘なことだ。――そこはもう行き止りらしい地底の小室だつた一人の男が、虛空をつかんでのけ反るやうに斃れてゐる。その傍には大きな箱が抛り出してある。蓋は明け放しだ。中から白いものがチラと覗いてゐるが、よく見れば氣味の惡い骸骨だつた。そしてそのまはりには丸い金貨がキラ／＼と輝いてゐる。金貨は地面にもバラ／＼と散亂してゐる。その側には一隅のひきちぎれた建築圖が落ちてゐる。それは痣蟹の秘藏の圖面に違ひなかつた。――それ等の凄慘な光景は、一つの懷中電燈でまざ／＼と照らし出されてゐるのであつた。

懷中電燈は靜かに動く。――そして函の蔭へ隱れてゐる斃死者の顏面を照らし出す。まづ目につくのは、鋭い刃物で抉つたやうな咽喉部の深い傷口――うん、やつぱりさつき口笛が聞えたとき殘虐きはまりなき吸血鬼が出たのだ。帽子は飛んでしまつてゐるが、グッと剝きだした白眼の下を覆ふ黒い覆面の布。おお、これは先刻この地底へ下つていつた黒影の人物だつた。そして知つてゐる人ならば誰でもこれがいま都下に名高い覆面探偵靑龍王だと云ひ當てたらう。ああ、靑龍王は殺されたのだ。なぜこんな地底でムザ／＼と殺されてしまつたのだらう。

『いいですか。この覆面を取つてみませう。』

闇の中から男の聲がした。それは懷中電燈を持つてゐる人物の聲だらう。

光芒の中に、一本の腕がヌッと出てきた。それは屍體の覆面の方に伸び、黒い布を握つた。ずる／＼と覆面は剝がれていつた。そして果然その下から生色を失つた一つの顏が出て來た。ああ、その顏、その顏、蠟のやうなその顏のその頰には醜い蟹の形をした痣が……

『おお、これは痣蟹仙齋……』

なんといふことだ。覆面探偵といふのは、痣蟹仙齋だつたのか。しかし不思議だ。そんなことが有り得るだらうか。だがここに無慘なる最期を遂げてゐるのは、正に兇賊痣蟹に違ひなかつた。

『貴女は失踪中のポントスのことを云ふが、しかし誰でも貴女の釋明を要求しますよ。』

と懷中電燈の男はいふ。どつかで聞いた聲音である。

『いゝえ、あたしは犯人ぢやありません。このジュリアは貴方の電話でうまく此處へ誘ひだされたのです。陷穽です、恐ろしい陷穽なんです。ああ、あたし……』

と、よよと泣き崩れる聲は意外にも今を時めく龍宮劇場のプリマ・ドンナ赤星ジュリアの聲に違ひなかつた。

それで解つた。ここはパチノの墓穴なのだ。この深夜、一體何ごとが起つたといふのであらう。ジュリアを責める男は誰人？ そして地底に現はれた吸血鬼は、そも何處に潛める？

（つづく）

掛合漫才　三の字問答

○御園ラッキー
△香島セヴン

△どうしたいラッキー君、馬鹿に朗かだね。

○實は僕、最近素晴しい家へ越したんだ。

△へーえ、もう越したのかい？　そんなに溜つちまつたか？

○何がさ？

△うふゝ、家賃が。

○變な事を言ふなよ。僕は何も苦しくつて越したんぢやないよ。氣分の轉換を圖る意味に於て……

△へゝゝ、表面上はね。

○アレ、嫌な事を言ひ給ふな。

△いや、お察しするよ。何時越したい？

○三月三日に越しました。

△何處です、所は？

○三崎町三丁目の三百三十三番地、もと居た家から三丁程北へ行くんです。

△ハヽアン。

○三つ目の三天露路を左に入つてね、角から三軒目の三階建の家です。

△ホウォ、家賃は？

○三十三圓。三人掛りで三日ごたついてやつと片附きました。

△一遍伺ひたいですな。

○是非來て下さい。今度の第三日曜の三時頃、家で待つてゐます。

△一寸伺ひますが、君と三といふ數とは、何か因縁關係にでもなるのですか？

○いや、僕はこの數が好きでね、三を集めるのが道樂です。

△ハヽア、金の掛らん道樂ですな。

○詰らん事を言ひ給ふな。抑ゝ世の中の事は、好い事には必ず三が附いてゐる。

△そんな出鱈目があるものか。

○いや本當だ。僕は三年間もさんぐ\研究した末に申上げるのだ。さん否は

君の勝手に任せるがまあさん考の爲に聞き給へ。

△よく列べるね。

○先づ我が日本帝國は三千年の歷史を持つ世界の三大强國。東京、京都、大阪市、併せてこれが三大都市。續いて會社で三越、三菱。

△成程。

○其他にも三の附いた言葉は澤山ある。三つ兒の魂百まで。鳩に三枝の禮儀あり、三日見ぬ間の櫻、佛の顏も三度、三べん廻つて煙草にしよ。まだある、主從は三世、三千世界。三途の川端、式三番叟。三百代言、三太夫。

△恐しく有るね。

○心配しやるなこの胸三寸。お猿の毛數は三本不足で、三杯目にはそつと出すのが、君の樣なる居候殿だよ。

△チヤカポコ〳〵チヤン〳〵ポコ〳〵

○阿呆陀羅經だな、宛で。木戶に大久保、西鄕さん、これが卽ち維新の三傑。

△ホウオ。

○智、仁、勇が天下の三德。續いて近い所では、上海事變で名を擧げた精忠無二の爆彈三勇士。

（佛の顏も三度）

△ハア〳〵成程。日本海の海戰に、雷名轟く東鄕元帥。

○ハテね、僕は今、三の字の話をしてるんだぜ。東鄕元帥に三の字がつくか？

△ウ、、、東鄕さん。

○そんな附け方はいけないよ。

△そも東鄕元帥は、司令塔上嚴然と、双眼鏡を兩の手に、三方睨んで突つ立つたり。どうだ、これでいゝだらう。三の字がついた。

○司令塔上で三方を睨むなんぞはいけないよ、四方を睨んだ。

△所が一方は、煙突が蔭になつて見えなかつた。

○そんな馬鹿な事があるか。駄目々々。

△ぢや、乘つた船が三笠艦とはどうだ。

○それならいゝ。

△ホウ、これでいゝのか。こんな事なら朝飯前だ。

○威張るない。天の橋立、松島、宮島これぞ名代の日本三景。

△家の小猫も名代の三けい。白毛に黑毛に茶毛も混つて、併せて三毛とはどうだ。

（三方睨んで）

○　それは三毛ぢやないか。

△　うふゝ、君はボケか。

○　止せやい。粋な二上り三下り、暑い眞夏が三熱地獄で、飛脚の冠るが三度笠。

△　幾らでも吐き出すね。

○　人間一生の大禮は結婚式、その時交すのが三々九度の盃。貰つたお嫁さんが好いと、世間で三國一の花嫁と褒める。

△　みんな三がつくね。所がそのお嫁さんが悪い時は、早速に三行半を書く。

○　碌な事は云はないね。それに半だけ多いぢやないか。

△　半位負けとけ　その結果花嫁が悲観して、三原山へ行つたといふのはどうだ？

○　君の三は悪い三許りだ。縁起直しにお重餅飾つたお三寶とはどうだ？

△　成程ね。泥棒に聾に啞ン坊、これも同じく三ぼうだ。

○　毆るよ。陸軍の策戰本部が參謀本部。

△　さうへ、あれはサン宅坂にある。

○　止せやい、三宅坂だよ。今の時代を三S時代といふ。

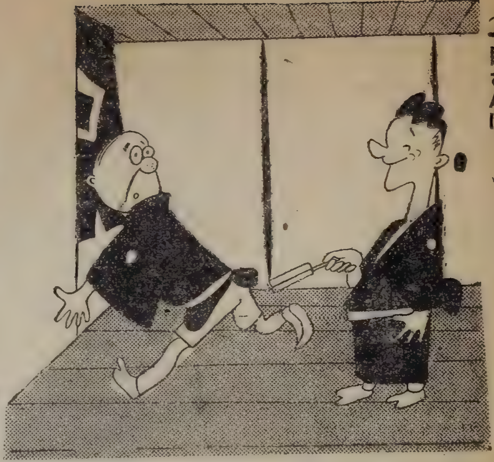
△　へーえ、それは又どうして？

○　スピード時代、スポーツ時代、映畫流行のスクリーン時代、〆めて三S時代とは如何です？

△　えへゝ、其上にスカート、ズロース、スリッパを加へて、都合六S時代とはどうですか？

○　いやに下がかつたSだな。それは別として、さんと發音する物には好い物がありますな。さん海の珍味をさん積して晩さんに招くなんてのは、素晴しいでせう。

（遣繰りさん段で……）


（一目さんに……）

△併し、其為後で、遣繰りさん段で苦しむなぞは詰らない。

○どうも君のはよくないね。クリスマスの晩、子供にお土産をくれるのが、サンタクロースのお爺さん。

△貰つた子供が、サンキユーといふ。

○それはうまい、其調子。第三日曜に、友達三人連で、参道を通つてさん王様に参詣して、三せんのお賽さんを上げたてのはどうです。

△朝飯前ですよそんな事。三十日の日に友達三百人とさん髪に馳せ参じた。

○ば、馬鹿言ひ給ふな。三百人も入れる理髪屋がありますか。

△だから目さんが狂つて表に三時間待つた。

○巫山戯てはいけない。

△えへん、君の三人目の姉さんが、三度目の子供をお産する時、難ざんで苦心さん憺、産婆が三人來て、三日三晩苦しんで、散々酷い目に遇ひ、その出費に亭主の財さんが到頭破さんしたてのはどうだ？

○よ、止せやい、縁起でもない。

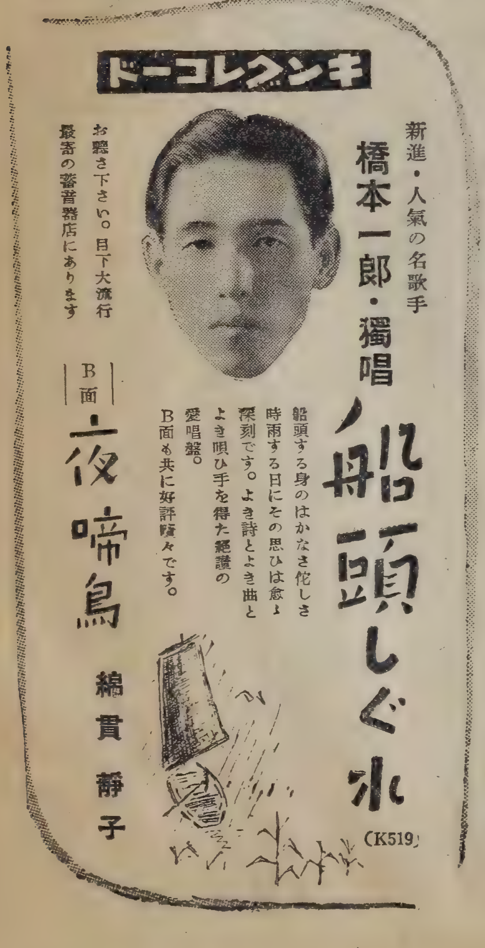
△まだあるぜ。そこでその有様たるや、悲さんといふか無ざんの話、惨澹たる光景にはさん然と涙が下るつてんだ。

○じよ、冗談ぢやない、もう澤さん。

△では潔く降さんするか？

○ウン、一目さんに退さん〳〵。

――へい、お退屈さま――



評判の名コンビ
坂東好太郎 飯塚敏子

記者 先づ最初に『富士』に掲載して大好評を博した、『船唄雀念佛』は御二人で主演されたのですが、あの中に雀を使ひましたね、あの雀を馴らす事で大變苦心された相ですが。

坂東 えゝあれには隨分苦心しました。雀ぢや仲々馴れないと云ふので、山雀にしたのですが、兎に角急の撮影で、僕は最初實物は使はないで濟むと思つて居たら、本讀みで聞くと、雀が相當活躍してゐるんです。

これは大變だ、餘程馴らさなくちやならないと云ふので、初め家の中で放してみたけれども、直ぐ飛んで行つてしまふ。結局一匹は逃げるし、一匹は死んぢやつて、殘つた一匹が一番よかつたんです。それから二三日馴らして急に撮影です。それで羽を一寸切つてステージへ入つて行つて、撮影に掛ると、最初の場面に最う雀が出て居て、僕の聲で『おい、チビ公、御飯だよ＝』と云ふ、すると山雀が僕の聲に飛んで來ると云ふ場面だけれど、仲々思ひ通りには行かない。で、黒い糸をつけてやつて居たのです。二回三回繰返して居る中に段々馴れて來て、ぢや今度は糸なしでよいと思つて放した儘『オイ、チビ公御飯だよ』と云ふと、旨く行つたのです。處が周圍の者が急に騒いだので又逃げちやつたのです。サア大變、折角これまで馴らしたのだからと云ふので、總動員、屋根裏へ入つて蜘蛛の巣や煤で眞黒になつて追駈け廻し、漸く掴まへて、この日はまあ割に旨く行つたんです

打明け話の會

よ。

其の後はすつかり馴れちやつて、テストの時はまづいけれど『本番だよ』と云ふと、僕より芝居はうまい。ちやんと手の上に乘つて來て御飯食べたりするんです。小鳥なんてものはうんこなどされても、汚がらずに平氣でゐなくちやいかんですね。

飯塚　實際よく馴れたわね。

坂東　寫眞の中に御殿に於て僕が殿樣に山雀を見せる處があつたでせう。この時などはもうぴよん〳〵飛んで來て實にうまく行きましたよ。撮影が濟んでからも餘り可愛いので家に飼つて置きましたが、『チビ公チビ公』と云ふと肩に乘つたりして來ました。可哀相にその後僕が撮影で忙しかつた爲、面倒みて居られなかつたので死んで仕舞ひました。僕の爲には相當の功勞もあつたので、墓を拵へてやりました。

記者　生き物は好きですか。

坂東　小さい時から好きでした。

記者　飯塚さんは？

坂東　敏ちやんは猫が好きなんでせう。

飯塚　違ふわ、嫌ひよ。

坂東　おつかない物は皆嫌ひなんだ。

記者　道樂は何んですか？　酒は？

坂東　徹夜などするとビールは小壜一本位やります。時々飲みたいと思ふけれども、好きぢやないんです。お附合ひだつたら、割合飲めるんですけれど。

記者　運動は？

（處女出演映畫「世直し大明神」に於ける坂東好太郎、相手役は井上久榮）

坂東　野球をやりますよ。この間も濱町公園（東京）でやつて、この通り（腕をまくつて）手の皮を剝きましたよ。小さい頃から餓鬼大將でしてね、この間なんかも、投手をやりましたよ。調子が馬鹿によくつて、一二回で引込まうと思つて居たのに、皆が調子がいい、調子がいいと云ふので四回迄投つちやつて……結局勝ちましたよ。だから俺に投らせなくちやいけないと、後でウント威張つてやつたんです。その祟りで二三日足が痛くて〳〵。（足を擦する）

記者　飯塚さん道樂は？

坂東　敏ちやんは着道樂でせう。確かに道樂だな。氣にいらなかつたら何枚でも仕舞ひ込んでおいて新しくどし〳〵拵しらへるんだから。

記者　俸給は主として何に使ふんですか。

飯塚　結局着物ですね。だけれど着物ばかりぢやないわ、何んとなく、なくなつちやふんです。

記者　お母さんから貰ひますか。

飯塚　東京へ來てお小遣ひが足りない時は貰ひますけれども、京都では貰ひはしないわ。普通の着物は自分で拵しらへて、お金の掛るいいものはみんなお母さんに……。

坂東　虫がいいなあ……。（笑聲）

記者　洋裝もしますか。

飯塚　洋裝はこそ〳〵ッと汽車の中だけ位よ。帶が苦しいから。それに私は似合はないから引け目を感ずるんです。

記者　坂東さんどうです。飯塚さんは體はいいし、似合ふ筈ですがね。

飯塚　瘦せてゴツ〳〵して居るんです。

坂東　洋服は着物の序に作つておかうといふのでせうね、尤も僕だつて去年『さくら音

頭』に出て初めて洋服を着たんです。この頃は月に一着くらゐづつ拵しらへるんです。さうでせう、スチールを撮るのに何時も同じ洋服ぢやいけないから。敏ちやんの方はお弟子さんが居ないからどん／＼多くなるけれども、僕の方は次から次に弟子が着てしまふから、幾ら作つても手許にはないんです。

飯塚　私いくら作つても、皆箪笥の肥料よ。

記者　おや今度新しく拵しらへた時は、お古はこつちへと、今から特約しておきませうかね。（笑聲）處でロケーションに行つて何か面白い思出はありませんか。

坂東　さうですね、伊吹山は凄かつた。伊吹山といふのは、秋山さん、（監督）が迚も好きな處なんです。、處が伊吹山へ行くと必ず御難です。『秋風宴』でも又その前の『鴛鴦街道』『忠次と三代太郎』でも行きましたが、兎に角一年に一遍づつ行きました。その中の『鴛鴦街道』のロケの時は危く山上から墜落する處でした。その時僕達は伊吹山の三合目に居たのです。一合目から三合目はよく見えるんで、一合目にキヤメラを据ゑて、レフを一度振つたら用意で、二度振つたら開始と云ふのです。暫くすると合圖のレフが二度振られた。『よし!!』と云ふので、僕と志賀靖郎さん、小笠原章二郎さんなど、雲助と立廻りを初めたのです。處が間もなく下を見ると、雲が一杯立籠めてあれあれと思ふ中に先の方が見えなくなつちやつた。僕は覆面の着流し、まるで定九郎の樣な恰好だし、小笠原さんは袴を穿いて居るんです。無我夢中でやつちやつたので、各々傷だらけ。不思議に僕だけは掠り傷さへない。二合目に着いてみると誰れも居ない。山小屋が一軒

『心中火取蟲』に於ける好太郎、敏子のコンビ

『船唄雀念佛』に於ける坂東好太郎、飯塚敏子のコンビ

あるばかり、で行つてみたが戸が開かない。その時小笠原さんが四人に手を貸してくれと云ふので、四人で一緒に戸を引張つたら、幸ひ鍵が掛つて居なかつた爲もろに外れちやつた。入つてみるとキヤラメルだとか駄菓子だとか色々なものがある。

『おい皆手をづけちやいけないぞ!!』

誰れか云つたけれど、皆んな腹が空つて居るから、さう云ふ口の下から瞬く間に食べちやつた。其處へ運惡く突然小屋の人が歸つて來たのです。フイの闖入者に小屋の人もポカンとして居る。サア謝るに謝れない。僕はその時丁度厠へ行つて居たんですが、出て來てみると、皆平蜘蛛の樣になつて謝つて居るのです。するとその時傍に居た志賀さんが、

『いや謝ることは謝ります。けれどもここには偉い人が居るんですよ』かう云つたものです。小屋の人もびつくりして『一體どなたですか』『小笠原子爵、歸つたら感狀を持つて來ます』（笑聲）と云ふのです。すると急に小屋の人の態度が變つて『左樣で御座いますか』と云ふ譯で、小笠原章二郎さんすつかりお得意の御前樣になつて大變な待遇に變つちやつたのです。（笑聲）

記者　愉快な話ですね。

坂東　『心中火取蟲』これはやはり『富士』に出たものですね、この撮影の時も大變だつたのです。

飯塚　八瀬の奥でせう、電燈のない處。

坂東　鞍馬口から八瀬の奥へ行つて自動車を降りて峠の上まで來たら、グラ／＼バラバラの大雷雨、皆地べたを這つて歩いた。女の人は迚もエロだつた相です。何故かと云つて、腰帶からすつかり濡れて、お乳の邊りから腰の邊りへピッタリ着物がへばり着いたから、身體の線が全部みえる、男の方

はとても喜んで居たけれど女の人達は泣く騒ぎでした。その晩泊つた宿と云ふと又凄いのです。未だ電燈などなくランプです。此麼時、何時もなら十一時十二時迄も寝ないで居るのですけれど、これでは起きても居られないのです。何よりの御馳走だと云つて、その家人が鶏を捻つて晩食の膳にのせてくれたけれど、この鶏が固くて歯が折れ相なのです。それから『煙草があつたら何んでもよいから下さい』と云ふと……。

飯塚　直ぐ買ひに行きますと云つたんでせうだから『時間はどの位かかりますか』と聞たら『三里はありますから二三時間くらゐ……』（笑聲）と云ふのです。『ぢや結構です』と云ふので囲爐裏に落ちて居る煙草の吸殻を拾つて、撮影用の煙管につめて喫んだのです。傍で見て居ても浅間しいやら、氣毒やらで、笑ふことも出來ませんでしたわ。その變り此處は地の利を得て何處へカメラを向けても撮れるいい所でしたわね。

坂東　撮影にはよかつたけれど、ひどかつた。

飯塚　それからあの村は、若い人は皆餘所へ奉公に行くから誰れも居ない。居るのはお爺さんとお婆さんだけで、若い人が奉公から歸つて來ると、村以外の人とは婚禮出來ないのだと云つて居ましたわ。だから殆ど血族結婚ですつて……。

記者　持てましたか。

飯塚　持てるも持てないも、お爺さんとお婆さん許りでは。（笑聲）

記者　話は違ひますが、飯塚さん坂東さんの素行はいい方ですか、悪い方ですか。

飯塚　さあ、別に……そんなことは……素人さんぢやないですから、そこは……（笑聲）

記者　日本でも外國でも、映畫俳優の中で、演技その他で、好感の持てる方はありませんか。

飯塚　好ちやんから先にどうぞ……。

坂東　まあ／＼。

飯塚　外國なんてあまり分らないわ。皆うまい様にみえるけれど、日本の映畫の方で田中さんなんか、女の方で尊敬してゐます。上手だと思ひますわ。

記者　どう云ふ處がですか。

飯塚　絹代さんは態ざとらしい演技をしない、あれは本當の藝ですわ。他の人には知らないけれども、私として映畫界で一番に擧げたい人は絹代さんです。

記者　坂東さんは如何ですか。

坂東　僕この間『男の世界』のウイリアム。ポーエルをうまいと思ひましたね。あれは印象に殘りますよ。クーパーと云ふ人も男

らしいですね。見て居てもいい、うまいと云ふよりは男らしさに魅きつけられるのですね。日本の映畫の方だつたら、芝居のうまい點からいつて、林長二郎さんでせうね。

記者 ファンから澤山手紙は來ますか。

飯塚 一日平均、さあどれ位でせうね、二十通位かしら……。

坂東 サインも入れたら、もう一寸あるでせう。ブロマイドの。

飯塚 さうね、まあ二三十通でせう。サインは一々してお送りします。でもあまり下らないもので『あなたを愛して居ます』とか云ふのは放つて返事は出さないけれど……

記者 中には隨分變つた馬鹿げたものがあるでせう。

飯塚 元はいやらしいのがありましたけれどこの頃はありません。批評とか、お弟子にしてくれとかで、特別面白いと云ふのはありませんわ。男の方にはひどいのあるでせうけれど……。

坂東 とても面白いのがありますよ。僕の處では皆弟子が讀んで、後で聞かせてくれるのですけれど、何時かのなんかは、一夜でもよいからあなたの側に置いてくれなどと、言語道斷のがありました。露骨に云ひますと、『飯塚敏子をどうのかうの聞いて居るけれども、仕事の用だと嘘を云つて私の居る〇〇町に來て貰ひ度い、私は藝者でもなく女給でもなく、ダンサーでもなし、と云つて堅氣でもないのです』と云ふのですから、結局出戻りか何んかでせう。それから今年玉の井の女からのがありましたけれど、これは一日置きに來るんですよ。一寸參りましたなあ。(内

（現代物『さくら音頭』に初出演の坂東好太郎相手役は田中絹代）

容はからなのです。『私は繼母にひどい目に會つて居ます。あなたの妾にして下さい。それもいけないとおつしやるのならば、女中になつて働きます。私が働いてそれでもいけないとおつしやるならば……』と云ふ様に、僕の云はんとすること迄すつかり書いて居るのですから世話はありません。約一ケ月こんなのが一日置きに續いて來ましたが、しまひには今度どんなのが來るかと、寧ろ樂しみの様になりましたよ。(笑聲) おツ放り出して置いたら、其の中に來なくなりましたけれど、これは僕の家の道筋を教へて吳れと云ふのですから、ウツカリ教へられません。

記者　飯塚さんと坂東さんが最初に撮つた映畫は、何ですか。

坂東　『世直し大明神』です。

記者　どちらが先輩ですか。

坂東　（飯塚さんを差して）それはこちらです。

飯塚　でも三月かそこらでしよ。

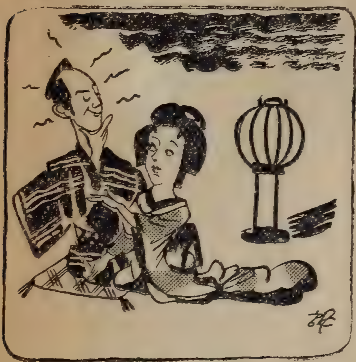
記者　坂東さん、最初に飯塚さんと會つた感想は？

坂東　これが面白いんです。最初映畫界に入る時、多數の友人が東京驛迄送つて來て、『おい、今下加茂に飯塚敏子と云ふのが、「唐人お吉」を撮つて居るから、一緒に撮れよ』と云ふのです。さうして紹介して貰つたんですけれども、そんな事はすつかり忘れて京都驛へ着くと、井上久榮さんが敏ちやんや、東榮子さんなど、ゾロツと迎へて吳れて居る。こつちはすつかり上つちやつて、誰が誰だか分らない。さうして翌日は早速本讀みです。柳咲子さんが出る筈なのが出られなくなつて、久榮さんが代つて、最う僕とのラヴ・シーンです。久榮さんもラヴ・シーンなんか、叔父さん（林長二郎）と何度かやつて

は居るけれど他人とは矢張り僕が始めてなんです。二人共もう固くなつちやつてコチ〳〵です。井上さん（監督）が『そんなに固くなつちや駄目です』と頻りに焦つて居る。久榮さんとのラヴ・シーンが終ると、直ぐ敏ちやんが抱きついて來る處があるんです。急に抱きつかれたので僕はヒヨロヒヨロとして瞬間『ははあ、こんな元氣な女優が居るのかな』と思つたのですよ。（笑聲）

記者　飯塚さんの坂東さんに對する第一印象は？

飯塚　私と誰だつたかしら、私もその時分は未だピイ〳〵でせう。浦波さん、東さんなどと一緒にロケーションを濟まして、その儘の恰好で驛へ近へに行つたんです。すると京都驛のホームを上つて來る



坂東好太郎の木劍運動

好ちやんの恰好つたら、紋附に袴なんですが、袴の前が下つて後の方がピンと上つて居るのでせう。寒い時なのに足袋との間が一寸五分もあいて居るのです。あれを最う一寸許り下げて上げたいわねえつて皆んなで話したのよ。月形さんを若くして色を白くした樣ねなどと話し合つた事も覺えて居ますね。

記者　此の頃はずつと御一緒ですが、演技の上から何か合致する處があるんですか。

坂東　この頃は高田の浩ちやんと光川さんもよく一緒ですが、これも會社の方針なんでせう。偶には變つてもいいと思ひますが、

飯塚　やつて居る方も飽きるかも知れないけれども、見る方も尚飽きるのではないかと思ひます。違ふ方のコンビを澤山みれば又それがよくなりますからね。

記者　併し二人だからと云ふファンも隨分多いのではないでせうか。

飯塚　批評にはマンネリズム――といふんですか――になるなと云はれますけれど、會社で組ませるんですからね。自分の方から好ちやんとやり度いと云ふのぢや、決してないんです。好ちやんも、私と許りぢやいけないと云ふのです。

坂東　結局これに替るいい女優さんが出ればやるけれどもね。

飯塚　替れば又寫眞の味も變りますからね。始終同じぢや……。

記者 話は違ひますが、貴方がたの結婚と云ふ事は、世間から色々噂されて居りますが、最うどちらも承諾済みなのですか。

坂東 そこ迄はその……それは……。

記者 時期の問題ぢやないのですか。

坂東 手剛いですね。氣持がどうであらうと未だ未だ遠い話ですよ。今の處結婚どころぢやないですなあ。

記者 人氣の點で矢張いけないのですか。

坂東 さあ……。その邊は何とも……。（二人顔見合して意味ありげにニッコリする）今の處ただ勉強あるのみです。世間の人が何と言はうと一々意に介して居られません

記者 とすると……。

坂東 この話はこれ位で勘辨して下さい。御相像に任せます。

記者 坂東さんは何れ舞臺に轉向されるのですか。

坂東 さう云ふ意志は有つて居ります。だから會社でも今度だつてこちら（東劇）へ出して呉れて居るんです。併し直ぐは歸つて來られません。映畫は五十になつて主役は出來ないけれども、芝居なら四十でも未だ若手ですからね。

記者 いつかお二人で獨立プロなど云ふ噂がありましたが……。

坂東 最う遲いですよ。今から獨立プロをやつたりしたら、最う舞臺にも還へれなくなるし……併し僕は外の會社へ行くならプロダクションをやる。松竹に居るなら加茂に居ると云ふ考へです。まさか松竹で宜しい、プロダクションをやれとは云つて呉れませんしね。それに獨立プロなんて、これからトーキーになりますから、金がかかつて大變です。

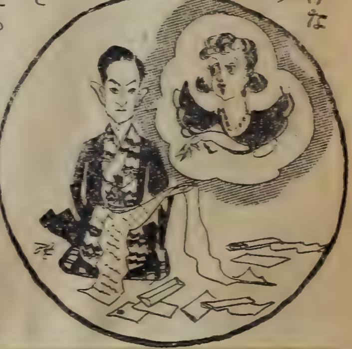
記者 坂東さんはお幾つになつたのですか。

坂東 まだ二十五です。

記者 では未だ結婚など急がなくても……。

坂東 緣が遠いんです。來年から少し先生でもとつて、一所懸命勉強しようと云つて居る處です。僕は小學校卒業した程度ですからね、少し勉強しておかなくちやいけないと思つて居るのです。偉い方にお目にかかつてお話しても少しは學問がないといけませんからね。

飯塚敏子の涼み姿



記者 飯塚さんは？

坂東 僕と三つ違ひでせう。

飯塚 さうよ。

記者 ラヴ・シーンの感想をお聞かせ下さい。

坂東 ラヴ・シーンと云ふと芝居になります

ね。芝居でなくて本當にあれをやつたら、寫眞になつて、やはり變にうつりますよ。それでラヴ・シーンはテストが反つていけないですよ。邊りがゴチヤ〳〵して居るし又側に女の人などみて居る處でテストをやると、どうしても、うまくいかない。愈ゝ撮影となつて『用意！　ハイ!!』と云ふと、女の人なんか側に居ても、すつかり商賣になり切つてしまつてなんともないですね。唯やりいい人と、やり難い人とあります。遠慮なく突込んで行ける人と、遠慮しなくちやならない人とあります。女の人から突込んで來たら、こつちも突込んで行けますが、女の人にはづされたら最う駄目です。

記者　寫眞で見ると飯塚さんは何處となく色氣が流れて居りますが、坂東さん如何ですか。

坂東　さうですね。林さんもさうでせう。どんな強い役をして居ても、何處かに色氣があります。僕なんかどんなに色ッぽくしても、色ッぽくすればする程、色氣もそつけもなくなつてしまふ。林さんのはあの體格から來る感じで、怒つても色氣がありますね。

記者　飯塚さんは第一聲が色ッぽいですね。

飯塚　あら、さうでせうかしら？

坂東　『めをと大學』は敏ちやんにも責任がありますよ『飯塚敏子と市川春代は聲に色氣があり過ぎていけない』と其の筋の注意で『めをと大學』なんかも隨分カットされちやひましたよ。ですから主演であつた僕より小笠原さんの方が寫眞に多く出て居ます。

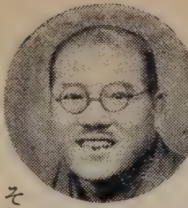
飯塚　私自身では色氣はちつともないと思ふんだけれども、そんなに云はれるんなら、一體どうしたらいいんでせう？（笑聲）

記者　お多忙中を有難う御座いました。ではこの邊で……。

（終）

『白鷺往來』に於ける坂東好太郎、飯塚敏子のコンビ

探偵小說の大家
甲賀三郎先生を驚かした探偵實話
明治大正を通じての怪奇十二大事件



『探偵小說や探偵實話は大抵怪奇なもので、又怪奇と云ふ文字を使ふのが定石となつてゐるが高橋定敬氏の怪奇探偵實話のやうに怪奇といふ文字がピタリとあて嵌つてゐるものはあるまい。「事實は小說より奇なり」といふがこの本は開卷以來あまりにも小說以上の奇怪があり過ぎる。乳房を抉るとか、首を切り落すとかいふ事は、小說でも容易にない事だが、それがこゝでは恰も茶飯事のやうだ。乳房を四つ持つ女があり、男で女のやうな乳房を持つ者があり、美女を船中に誘拐監禁する乞食王あり、男裝の麗人あり、美人を見て藝術的衝動から咄嗟に之を打殺してその死體を樂しむ人形師あり、怪奇と愛慾の相交叉し錯綜した情痴と犯罪の世界は、さながら地獄の繪卷物を展げるやうだ。更に二重の殺人が相交錯したり、思はぬ偶然が事件を紛糾せしめる點など、私は果して之が實話であらうかと疑ふほどである。全くつくり物ではないかと思はせるほど、小說以上の怪奇に充ちてゐる。然し、犯罪の起つた年月日も明かだし、事件に關係した人々の名も、多少の假名を除く他、ちやんと明記してあるのだからむろん事實に相違ないのである。

探偵小說フアン、犯罪研究家、獵奇家などと區別することなしに、世の讀書ずきの人々に是非この一本を奬めたいと思ふ。』

と甲賀三郎先生が激賞されてゐます。

因に、著者が二十年間に亙り苦心蒐集せる最も怪奇を極めた十二大事件は、

○船の天女
○戀慕地獄
○生首化粧
○女師匠の秘密
○謎の遺書
○疑問の手袋
○湯槽の人魚
○黑眼鏡の男
○美人の戸板流し
○尼僧寺の怪異
○麗人消失
○魔の血針

いづれも當時天下の耳目を聳動させた奇々怪怪の大事件の眞相を赤裸々に發き出した現代社會の照魔鏡とも云ふべき、犯罪探偵の實話が左の名著です。

高橋定敬先生著　〔全國の各書店にあり〕
『怪奇探偵實話』
定價一圓三十錢　（送料十二錢）
東京小石川　大日本雄辯會講談社　（振替東京三九三〇）

○離婚

若妻『もう我慢が出來ません。私母の所へ歸ります。』

夫『かへつたつて幸福にはなれないよ。お前のお母さんはお父さんと喧嘩して、祖母さんの所へ歸つて行つてしまつたよ。』

○なるほど

奥樣『お花や、お前馬鈴薯の皮を隨分厚く剝くのね。』

女中『ヘイ、皮を厚く剝くと消化がよいと云ふ人がありますから。』

奥樣『それは誰だね。』

女中『あのいつも兎の食物に馬鈴薯の皮を貰ひに來る男ですよ。』

○是は思ひつき

姉のはね子『さあ凸ちやん、家へ歸へらう。もう八時だから。』

弟凸君『んにや今は駄目。こんなに遊び過ぎて歸へれば、ひどく叱られるばかりだよ。だけど十時頃まで待つて歸へれば、まあよく無事だつたねと云つてお父さんもお母さんもキッスしてくれるよ。』

○意志の力

客『御主人樣は煙草をお止めになつたのださうですね。實に見上げた意志の力ですね。』

主婦『其の意志の力は私がしつかり握つてゐますのよ。』

○男心

妻『二階の若い二人の方、とても仲が良いわよ。外出と歸宅の時は屹度男の方が女の方にキッスして

くれるのよ。それなのに何故あなたはキッスしないの。』

夫『だつて僕は未だあの女の人をよく知らないもの。』

○生命保険

甲『それぢや　君はあの男と決闘しようと思ふのかね。一體君は怖いとは思はない？』

乙『ちつとも怖くはないよ。彼は俺にピストルの銃口を眞直にむけられるものか。』

甲『あの男は狙が下手なのかね。』

乙『いや僕は彼の薦で彼の會社と生命保険の契約をしたのだよ。』

○殘りがある

モダンガール『若し十誡の一つでも破つたらわたし達はどうなるんでせうか？』

牧師『大したことは無いさ。あと九つも殘つてらあね。』

○理論と實際

哲學者『幸福とは、ある事柄を追求することで、それに達するともう幸福でなくなつてしまふのである。』

商人『あんたは未だ最終乘合自動車を追駈けて、それに乘れなかつたことがありませんね。』

○二樣の解釋

女同志の一人『今日高田さんが私に「貴女には二枚の翼が欠けてゐるやうなものです。」と云つたわ。屹度あの人私を天使と思つてゐてくれるのだわ。』

他の一人、冷然と『それとも家鴨と思つてゐるのかも知れないわね。』

○御　尤

求婚者『私は晝も夜も一心に働いて屹度貴女を幸福にします。』と言ふと、女はやゝ考へて、『妾、晝だけ働いて、夜は妾の傍にゐて下さる方でなくては嫌ですわ。』

○正　直

太郎の母『凸ちやんと花ちやん、お母さんはあんた方が此處で太郎と遊んでゐるのを知つてゐるの？』

二人『えゝ知つてゐるよ、叔母さん。若し呼ばれたら夕食時まで遊んでゐてよいとお母さんは云つてゐたよ。』

○燈火の秋（電燈の知識）

◇家庭で使用する電球には眞空タングステンと瓦斯入とがあり、瓦斯入には國産品としてアルゴン封入と窒素封入とがあります。値は窒素瓦斯入の方が安いのですが、アルゴン瓦斯入よりは電氣を餘計に消費します。餘り安いものには窒素を使つたものが多く見られます。先づ信用ある店で相當値段のものを求める事が反つて經濟的です。

◇笠の色は、白、クリーム、ピンク、緑、赤、薄靑、紫の順に光線の透る割合が減少するものですから、實際向には乳白色が最も適します。形は皿の様に扁平なものよりは、座敷用には深めで裾の稍々開いたものが效果的です。

◇讀書用には机上スタンドを用ゐると、讀みよくもあり電氣消費も割合に少くて濟みます。スタンドは比較的丈の高いものを選び、笠も大きい方が實用的で光の具合もよいものです。

◇國産電球は産額も輸出額も世界一ですが、マツダとかトウランプなどは國内用高級品で輸出はされません
トウランプは、

◇玄關用（一二）◇廊下用（二〇）◇三疊用（三〇）◇四疊半用（四〇）◇六疊用（六〇）◇八疊用（八〇）◇十疊用（一〇〇）が大體の標準で、以上六疊用迄が二十錢、八疊と十疊用が三十錢。括弧内は電球ワツト。

○秋植の球根と草花

□球根の植ゑ方　秋はお彼岸から十月上旬にかけて、球根と草花の播種の時季で球根ではチユーリツプ、ヒヤシンス、アネモネ、フリージヤ、アマリリス、クロカス、水仙などが一般に歡迎される種類ですが、之を買求める時には、形のよろしい重い球を選んで、病菌などの絶對についてゐないものを求めて頂きたい。（信用のある店で求めれば決してさういふ憂はない。）

愈々植込みの時は、地面をよく耕して、地下に一つかみ位の肥料を入れて、上へは球根の倍（球根が一寸ならば二寸）の土をかぶせる、そして眞冬になつて霜柱が立つやうになつたら、霜よけをして頂きます。

二月の初めになるとクローカスや水仙が芽をふき出し、續いてチユーリツプやヒヤシンスが芽を出しますさうしたら補肥として液肥（水肥）を施して頂きます。

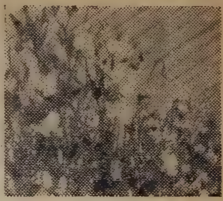
□草花の播き方　秋種を播いて春花を迎る草花は、櫻草、スヰートピー、カーネーション、アスター、ベージー、ひなげし、松虫草、ルーピナスなどでありますが、之を播くには、先づ日當りのよい暖かい南向きの

豆黒板（十月）

◆一日、東京市自治記念日◆十二日、池上本門寺お會式◆十三日、堀ノ内妙法寺同上◆十五日、狩獵解禁◆十八日、雜司ケ谷法明寺同上◆二十三日靖國神社大祭

栗明月

　十月のお月見は（舊暦九月）栗明月とも云ふ。



場處を選んで土をよく耕し篩で土をよくふるつて、その上へ種をまきます、土のかぶせ方は球根の場合と同じであります。

冬が來て霜が降るやうになつたら、南をあけて北の方から傾斜して菰をかけて霜除けをして頂きます。

愈々發芽したら、よい頃合を見て間引きをして、春先になつたら適當の花壇に移植して貰ひます。

芽を出してからは勿論、その前もジョーロで絶えず水を與へることを忘れぬやう、但し午前中でなければいけません。

○中折帽の見分け方と手入法

▼優良品の見分け方　上部を眞中から折つて、氣に入つた形にくせをつけて冠つても、型の崩れぬものは良い品です。ツマミで留めなければ型の保てないものは餘り上等とは云はれません。頭の生地の厚さは、鍔の部分よりも稍々うすく、柔かい方が上等品です。次に附屬品も、良い品には良いものが附いてゐます。良い品は皆な此の條件にかなつて居るものです。

▼手入法　毎朝帽子にブラッシをかける事は紳士の嗜みの一つです。埃を其儘に放つておけば、醜く變色を早め、雨にあへば汚點を生じます。ブラッシは毛の長い柔かいものが地質のために良く、かける方向は時計の針と反對の方向に毛並に從つてかけます。帽子は必ず帽子掛にかけ、下に置かぬことです。頭に冠るものを下に置く事は不潔でもあり、不作法でもあります。

○菌類の見分け方と食合せ

食用茸と有毒茸との見分け方は一寸困難ですが、大體名の知れぬもの、見た目に美しいもの、肉が空氣に觸れて直ちに變色するもの、折れ口から黄色や白の汁の出るもの等には毒素を含んで居ります。

また笠や莖を縦に割いて見て、中途から缺けたり碎けたり、折れたりするものは大抵は毒茸です。笠や軸を縦に割いて見て、スッと氣持よく割けるものは、大抵は毒を含んで居りません。

次に茸との食べ合せは、生米、はうれん草、雉子肉、鶉肉、蕎麥等は、嘔吐を催したり、吐血したりして中毒を起しますから注意しなければいけません。

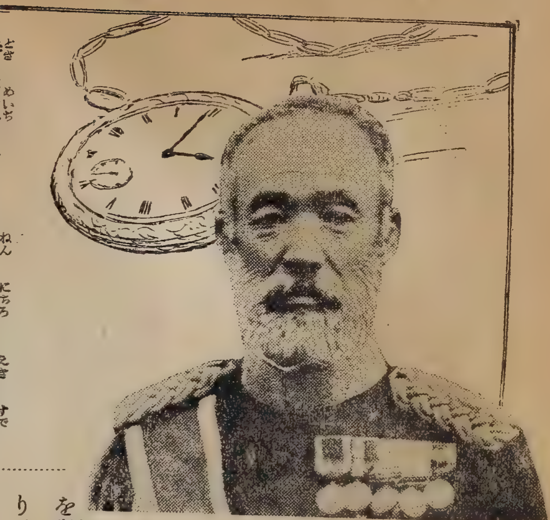
○東京土産品協會

▼東京商工會議所内の東京土産品協會は、世界で始めて出來た土産品の統一販賣機關で『どの位の金額では何んな品物が』など總て仲介斡旋は無料です。

▼團體のためには夜の東京見物を兼ね、夕食後實費で買物バスを運轉します。

○今秋流行和裝

今秋流行の和裝は、先づ色から申しますと、赤味のかゝつた黄茶で、それについで綠、黄系統の鮮明な間色が流行しませう。次に模樣ですが恐らく現代的に單純化された新鮮な型の『からくさ』が流行の先驅をなすことと思はれます。以上は御婦人方の和裝の流行ですが、一方男性の和裝も復古的な『つむぎ』風のものが好まれ色としては今迄使はれなかつた紫とか綠とかが澁い色に混ぜて使はれます。



將軍乃木 遺品の時計

桃川若燕演

加東三郎畫

時は明治三十七八年、日露の役、既に旅順、奉天の大戰も終り、三十八年の九月七日には、媾和條約が成立して、總司令部より休戰命令が發せられました。斯くして名譽赫々たる戰勝國我が日本の將士は內地へ凱旋をする日も近附いて參りました。中に拔群の功績を樹てました乃木將軍の率ゐる第三軍は、十月十日から三日間、法庫門の司令部に於て、招魂祭を擧行する事になりました。午前九時より、將軍自ら催主と祭主とを兼ね、莊嚴なる祭典を行はされまして、正午からは餘興として、相撲、芝居、その他樣々の事が催されました。私などもその時には、役者になるので、大切にしてゐた髭を剃つて終つた位です。何しろ兵隊でも相當なもので、藝人も却々をりますし、作者でも畫家でも大概揃つてゐました。第一建物も立派、衣裳、鬘、道具などの整つてゐることは想像以上で、お囃子まで揃つてゐました。尤も是は、乃木將軍から陸軍省の堀內將軍、まだその當時は中尉でしたが、堀內さんの處へ、

『モウ戰爭も濟んだことだから、謠本でも讀で見たい、序での時に送つて呉れ。』

と、賴んでおやりになつた所、堀內さんが、謠本ばかりでなく、笛や太鼓まで揃へて送つて遣しました。

『ヤア大變な物が來たぞ。』

と、將軍お笑ひになつたが、是が早速芝居をする時に役に立ちました。

さてその夜、芝居が濟んでから、將軍は宴會をお開きになり、部下の將校は固より、從軍中の神官や僧侶などまでお招きになつて、何れも胸襟を開いての物語に、夜の更るも知らぬ位。處がいつか話題が西南戰爭に移ると、今まで御機嫌の宜かつた將軍が、眉へ皺を寄せて、

將『イヤ、あの戰爭の話は私には禁物だ、ぢやが、世間に廣く交際を結んでをられる貴所方に賴んで置きたい事がある。といふのは、あの戰爭に出掛ける時に、私がある人から時計を借たのぢや、懷中時計ぢや、どうかその人に返したいと思つていろ〳〵探して見たが、どうも分らん、坊さん達は、隨分諸國を巡回されるぢやらう、何處かで私に時計を貸したといふ者に出遇つたら、どうか知らして貰ひたいものぢや。』

坊『イヤ閣下、それは面白い話で、現在閣下に時計を貸したといふ人に遇つたことがありますよ。』

と云つたのは、淺草今戶の稱名寺の住職で小野島法童と仰しやる方です。將軍は眼を輝かして、

將『貴所その人に何處で遇ひなすつた。』

法『秋田縣下を巡回しました時に、秋田市の有志が私の爲に一夕宴を開いて吳れました。その中に、始めの內眞面目だつた一人の老人が、酒の醉が廻るに從つて、何か頻りに騷いでをりましたが、イヤモウ天眞爛漫、子供のやうに無邪氣な爺で、どうだ坊さん、私の事を皆なが豪い〳〵といふが豪い證據がある、乃木將軍に懷中時計を貸したのは乃公だけぢやらう。乃公は時計を乃木將軍に貸しがあるのぢや、どうだ豪からう、あツはツは、といかにも愉快さうに笑つてをりました、今閣下の仰しやつたのは、その老人の事ではございますまいか、何でも名前は……遠山……淸とか申しました。』

將『おゝそれぢや、遠山淸、確にその人に違ひない、秋田市の何といふ處ぢや。』

法『サア、それは分らんですが、秋田へ行つて尋ねたら分らん事はないだらうと思ひます。』

將『イヤそれは宜い事を聞いた、大きに有難う。』

西南戰爭の話で、少し御機嫌を損じた將軍も、此の一件でスツカリ氣持を直して、愉快さうに御酒を召上つて在しつた。

さて翌る明治三十九年一月十四日、乃木將軍は赫々たる武勳を荷つて東京へ凱旋をいたしましたが、その後、御奉公に忙しく、私用では何處へも御出掛けになりませんでしたが、丁度四十一年の十一月、霰降る秋田市の停車場へ突如、陸軍大將の軍服を召して、供も連れず只一人、悠然と姿を現はしたのは乃木將軍、カーキ色の軍服の上に、カーキ色のマント、そのマントの襟に、將官、佐官、尉官の區別の章が附いてゐるのでございますが、その區別が普通の者には一寸分らない、停車場を出て、驛の前の甘酒茶屋、

將『一寸物を聞きたいがの、此の秋田市に、遠山清さんといふ人がをらんかね。』

甘酒茶屋の老婆は小首を捻つて考へてゐたが、

婆『サア、どうもそれは軍人さん分りませんね、町名が知れてゐますと大よそ見當が附きますが……』

將『それが分らんのぢや、車屋が一人もをらんが、此の停車場には車屋はゐないのか。』

婆『今大きい團體が二ッ三ッ着きましてな、車を皆な買切て終ひましたよ、モウ二十分も經つたら歸つて來ますだから、マア其處へお掛けなさいましよ。』

將『ヤア有難う、ぢやア少し休まして貰はう。』

一番奥の縁臺、婆さんが出して呉れた煙草盆、將軍はポケットからやまとといふ巻煙草を出してふかしながら、十五分も待たが車は歸つて來ない。

將『是アいかんな、婆さん、その釜は何ぢや。』

婆『甘酒でございますよ。』

將『甘酒か、寒い時には宜いな、一杯呉れ。』

婆さんが汲んで出した甘酒、無造作に召上つて、

將『ヤア旨い、東京の甘酒は口當りは宜いが、飽が來ていかん、地方の甘酒は、一寸口當りは惡いが、飲んで味が深い、モウ一杯呉れ

……どうぢやいま町は賑かか。』

婆『お蔭様で戰爭が終つてから、賑かになりましてな、モウ戰爭の最中は旦那樣眞正に男が少なくつて、此の分で長く續いたら、どんな事になるだらうと皆な話してをりましたが、マア戰爭に勝たので、大變に景氣が宜くなりましたよ、この間東京から壯士芝居が來まして、えらい入で、臨時列車が出たり入つたりする位ですから、大變なものでございました。』

將『さうか、評判が宜かつたか、何をやつた。』

婆『日露戰爭で、旅順の戰爭をやりました、私なども一晩行て見ましたが、身の毛が逆立ちましたよ、隨分人も死んだやうで、乃木大將といふ人が…』

將『モウ宜え。』

婆『お子樣が二人戰死をなすつたさうで……』

將『モウ宜え、私は歸る、甘酒は幾らだ。』

婆『十錢頂戴をします、車屋もモウ歸つて參りませう。遠山さんのお宅は、巡査さんにでも聞きなすつたら……』

將『イヤ、ブラ〳〵行て尋ねよう。』

將軍は旅順の話が出ましたから、逃るやうにして甘酒茶屋を出ました。婆さんは、立派な軍人さんだと後を見送つてると、警官が二人、

婆『オイ、婆さん、お前の處へ今しがた年を老つた軍人さんが寄らんかつたかね。』

婆『アヽ寄んなさいましたよ。只た今町中の方へお出でになりました。』

警『ウム、別段何にもお話はなかつたか』

婆『遠山何とかいふ人を尋ねると云つて車を待てお出になりましたが、氣の短い人で、待ちきれなくなつて、ブラ／＼行くと云つて出てお出でになりましたよ。』

處へ又巡査が駈て來て、

丙『オイ、的然大將に違ひないぞ。』

甲『今此處の家へ寄て、遠山といふ人の家を聞かれたさうだ。』

乙『兎に角署へ行て見よう、何か情報が入つてをるかも知れん。』

婆『何でございます。』

甲『イヤ、今驛長から知らせがあつたのだが、どうも乃木將軍らしいのだ。』

婆『アレ、乃木將軍樣ですか、私の處の甘酒は旨いと云つて二杯飲りましたよ。』

甲『それは仕合せだ、その茶碗を大切にして置け、寶物になるぞ、何か別にお話はなかつたか。』

婆『私が壯士芝居で見た旅順の話をしましたら、モウ宜い／＼と云つて、いやな顏をなさいましたよ。』

甲『あたりまへぢや、乃木將軍は旅順では御苦勞なすつたからぢや、兎に角早く署長に報告をしよう。』

三人の警官は急いで行て終ふ。

婆『あゝそれではあれが乃木將軍樣だつたのか、有難いことだ。』

婆さんは將軍の召上つた茶碗を押戴いて、大切さうに納つて終ひました。

此方は大將、茶店を出て、眞直ぐにお出でになる、思ふに川端邊でもございましたらう、向ふから小學校の生徒が三々伍伍歸つて來る將軍ふとお心づきになつたのは、子供などは能く何か知つてゐるのですから、

將『あゝ君方、一寸待つてお呉れ、君方は、遠山淸さんといふ面白いお爺さんを御存じないかな。』スルと一人の子供が、

○『ア、遠山のお爺さんの家なら知つてゐるよ、此の橫丁を曲つて行くと、お屋敷町になつてる、その左側に御門があつて、その中に三軒ばかりお家がある、突當りが遠山さんの家ですよ。』

將『遠山淸さんだな。』

○『あゝ、遠山淸さんですよ。』

將『オヽ賢い／＼、皆よく勉强なさいよ、確り勉强して、立派な者になるのぢや、賢い／＼。』

將軍は不動の姿勢を取て敬禮、立派な軍人さんに敬禮をされたので、小學生は皆な固くなつて叩頭をしてゐる。上の人が禮儀を正しくすれば、自然下の者も見習ふやうです、所が乃公は上官だと、そつくり返つていばる人がありますが、心得違ひのものです。

將軍は子供達に敎へられた通り來て見ると、成程門内に二三軒の家、突當りに

遠山淸といふ標札が出てゐる、

『オヽ是ぢや〳〵。』

と、將軍笑を含みながら玄關に掛つて、

將『御免――御免――、遠山さん、御免……お留守かな、遠山さん……、ハテナ、誰も出て來んところを見ると、お留守かも知れん、御近所で聞て見よう。』

踵を返して出ようとした時に、裏手の方から息せき切つて駈出して來たのは六十ばかりになる爺、ダブ〳〵の股引を穿いて、寒いのに素足に草鞋を穿いてをります。

爺『ヤアお待たせしました、今一寸野良へ仕事に行てましたので、學校歸りの子供に、小父さんの處にお客さんがある、立派な軍人さんだから早く歸れやと、賢いもんでございます、敎へて呉れましたから走つて參りました。』

將『お前さんは遠山さんかね。』

爺『ハイ、私は遠山の小作人でございます。』

將『御主人はどうなすつた。』

爺『大旦那樣は一寸お出掛けでございます。若旦那樣は縣廳へお勤めなすつて在らつしやいますが、何方に御用でございます。』

將『アヽ、私はお爺さんの方に用があつて來たのぢやが、遠方へ行かれたのか。』

爺『ナニ、近所へ行てござらつしやるだから、一寸行て呼ばつて參りますべえ、何方からお出でなさいました。』

將『私は東京ぢや。』

爺『東京……それはマア遠くから能くお出でになりました、お名前は何と仰しやいます。』

將『乃木だ。』

爺『乃木さん、へエー、陸軍大將の乃木さんと御親類ですか。』

將『ウム、親類見たやうなもんぢや。』

爺『それではなア、貴所東京へお歸んなすつたら乃木將軍に遇ひますか。』

將『逢つても宜いが、何か用があるか。』

爺『一寸傳言を願ひたいんでございますが、どうでせう。』

將『誰の傳言ぢや、お前さんの傳言かね、宜し〳〵、どんな事ぢやね。』

爺『私の御主人が西南戰爭の時に、乃木大將に時計を貸したんでございます、それを未だに返しやアがらねえ、貧乏なら仕方がねえが、陸軍大將だから時計の一ッや二ッ買へねえ事もねえでせう、誠に濟まねえが、早く時計を返せと云つてやつて下せえまし。』

將『ハヽア、それでは遠山さんが、時計を返さんと怨んでゐなさるかな。』

爺『ナニ、旦那樣は怨んでなんぞゐなさらねえが、酒え飲んで醉ばらふと、二言

果物の調理と飲物の作り方
（龜岡泰躬先生著）
手輕に出來る氣の利いた果物の調理法百八十餘種と誰にも喜ばれる夏冬の飲み物の作り方七十餘種を極く解り易く手ほどきした重寶書、これ一册あれば不意のお客や御子樣方のお八ツに直ぐ應用出來て便利この上なしです。
（本社發行・定價一圓　送料十錢）

目に乃木大將に時計を貸した〳〵と威張るだから、陸軍大將として外見ねえでごぜえます、私の御主人も、時計返して貰つたら損をしねえで濟むだし、乃木大將も惡く云はれねえで濟むです、兩方の爲だから早く時計返したら宜からうと思ひますだ。』

將『ウーム、ハ、、ハ、イヤ能く分つた、東京へ歸つたら早速乃木大將に傳言をする。』

立話をしてゐる所へ、杖を突張て歸つて來たのは遠山清老人、互ひに見交す顔と顔、

淸『ヤア、乃木さんぢやないですか。』

將『おゝッ遠山さんか、久し振ぢやのう。』

淸『是はどうも……』といふと、杖を投り出して、老人同志が、ピツタリ抱合て懷かしさうに暫らくは頰と頰とを摺合せてゐましたが、兩氏の眼には露の玉。

淸『どうして乃木さん、私が此處にゐるのが分つた。』

將『東京の淺草の今戸に稱名寺といふお寺がある、其處の住職の小野島法童といふ人から貴所の事を聞いた、それから來よう來ようと思ひながら御用繁多で、今日まで來る事が出來んぢやつた、能くマア達者でゐて吳れた。』

淸『能くこんな遠い處まで尋ねて來て吳れた。』

將『喃遠山さん貴

所にお別れしたのは、明治十年の二月十八日私は時計を毀したので、直しにやつてゐる間、貴所の時計を借り、處が突然に出發命令が降つたので、時計を買ふ間もなく、貴所の時計を借た儘戰地へ行て終うた、誠に濟まなかつた。』

清『イヤ、あの時の時計は役に立たか。』

將『ウム、役に立たが、あの戰爭は御承知の通り滅茶々々の負だ、既に鹿兒島の勇士の谷口元助の切下した太刀の爲に、此の首は打落される處ぢやつたが、幸ひ傍にゐた摺澤中尉、今は中將になつとるが、あの人の出して呉れた劍で止つて、私の首は繫がつたのぢや、それから四ン這ひに這て逃出したが、そんな時に落したか、遂々失つて終つた、それから凱旋して、貴所に時計を返さうと思つたところ貴所は何處へ行て終はれたか行方が知れんでな、隨分探したぢや。』

清『さうか、私はな、西郷さんが戰爭に負た、それで小倉にゐるのが厭になつて

商賣を閉ひ、誰にも行先を知らせずにあの土地を去て終つたのぢや、西郷さんは何故負たのぢや。』

將『何故負たというて、そりやア、遠山さん仕樣がない、西郷さんのなした事は兎に角政府に對しては賊ぢやからな。』

清『賊かの……ウーム、さうすると西郷さんは悪いか。』

將『イヤ悪くはない。』

清『悪くないか、……ウームさうか、豪

いか。』

將『ウム、實に豪い人ぢや。』

清『必と豪いか、乃木さん、貴所も豪いと思ふか。』

將『豪いと思ふよ。』

清『さうか、陸軍大將の乃木さんが、西郷は豪いと云うて呉れた、それを聞いてモウ私は死でも宜い、ヤア有難う、それで乃木さん、貴所今日何で來られた。』

將『貴所に借た時計の代りを、天賞堂で買うて、返しに持て來たのぢや。』

清『さうか、そりや困つたのう。』

將『何故だ。』

清『是から貴所に時計を貸してゐると云つて威張る事が出來んでな、アッハッハ』

將『アッハッハ。』

此の話を脇で聞いてをりました彼の作男、乃木大將と分つては先刻のことが面目ない。

爺『旦那樣、此の方が本物の乃木大將樣ですか。』

清『大將樣だ。』

爺『それはマア飛でもねえ事を申ました御親類だなどと仰しやつたもんだから、時計を返せと傳言して呉れなんて申まして、何ともハア申譯がございません。』

將『イヤ〳〵心配せんで宜え、主人の爲と、乃木の事まで惡く云はせぬやうにと思うて親切に云うて呉れたのぢや、乃木大將に遇うたら能く云うとく。』

爺『アレ、まだ然んな事を云はしやつて……』

將軍も大層御機嫌よくいつになく御冗談などをいつてゐられる。

清『何は兎もあれ、マア上んなされ。』

將『ウム、上げて貰はう。』

處へ巡査が二人やつて來て、

巡『え、、乃木大將閣下ではございませんか。』

將『お、、どうして分つたか。』

巡『驛長がお姿をお見掛けいたしまして、確に乃木閣下だと我々に知らして呉れました、早速どうか縣廳の方へ御案内をいたします。』

將『イヤ行かんよ、私はどうしても今夜此處へ泊る、三十年振で舊友に遇うたのぢや、種々積る話もあるから誰も來ちやいかん、誰が來ても遇はんから含んで置て貰ひたい、明日縣廳へは私の方から行く、知事さんに遇うて、少し此の土地に就て研究したい事があるので、その御盡力を賴むと、お前さん方から能う云うといて呉れ、決して今夜は誰も來ちやアいかんよ。』

大人氣！ 大賣行！
（講談倶樂部の臨時增刊）
目下雜誌界第一の人氣者となつてスバラシイ賣行を示してゐるのは講談倶樂部の臨時增刊『勇士俠客美男美女、俠艷痛快大讀物號』であります堂々實に六百六十頁の大册、內容は全部、讀切りの小說講談、落語、漫談、人氣者自敍傳。こんな面白い雜誌は全く他にありません。未だお讀みにならぬ方は是非早く御覽下さい。

巡『ハッ、畏りました。』

それから将軍は遠山家の客となられまして、夜二三人面會を申込んだ者もありましたが、誰にもお遇ひにならず、夜と共に語り明して、翌朝別れを告げ、約束通り縣廳へお出でになつて、知事にお遇ひになり、その他縣の重要な地位の人々にもお遇ひになられ、何かそれから軍事上の事で研究を遊ばし東京へお歸りになられました。乃木将軍といふ方は、一旦約束をしたら必ず實行する、借た物は必ず返すといふのが主義、殊に明治十年の西南戰爭の折、聯隊旗問題の責任を負うて、いつかは死してその恥辱を雪がうといふことは、一日も念頭を離れなかつた、この時計をわざ〳〵遠路のところを、返しにお出でになつたのも借りたものを返すといふだけではなく、そこに深いお考へあつてのこと、その時分から既に御切腹の御覺悟を決めておいでなされたものでありませう。乃木将軍傳の內、借りた時計といふお話し、之を以て終りといたします。

時計の御用命は！

腕、下げ、紳士用、婦人用、學用等々何れも信用確實な內外優秀時計を特に本社代理部にて嚴選して愛讀者の皆様へ限り破格の奉仕値でお頒ちいたします。『代理部特選時計カタログ』御覽の上ゼヒ御用命下さい。

丸山鶴吉氏
最近の快著

五十年ところ〴〵

愈々好評

元の警視總監丸山鶴吉氏が學窓生活の一面より社會人となつて飛込んだ官吏生活まで五十年間の思出話をザックバランにぶちまけた明朗無比の隨筆集である。學生丸山を語り、官吏生活の內幕を暴露し、社會人としての自己を語り、總監丸山を物語る、而も豪放の一面にユーモアの滋味あり、戀愛を語り、世相を諷刺し、身邊の事々物々を捉へて縱横に描寫する等々興味萬斛の明朗讀物であり、且つ社會を驚倒せしめた重大事件の眞相を物語る秘話秘錄である。

之こそ小說より面白い明朗隨筆集是非御覽下さい

定價一圓六十錢
送料十四錢

東京小石川
大日本雄辯會講談社
振替東京三九三〇

時代小説

鐵(てつ)火(くわ)の久(きう)助(すけ)

村上浪六

鴨下晁湖畫

彰義隊の勇士池田眞之丞から、戀人お百合の後事を頼まれ、柄にもなく、『ようがす』と引受けた鳶の久助は、忽ち木伊乃取が木伊乃、この美女に獨合點の戀を感じ、一つ長屋の友吉を抱込んで、以前からの情人八百屋のお花と手を切る術を、暗雲に試みたが、どつこいお花の後には、變物家主の彌兵衛老人が控へて居り、事毎に企みの鼻を挫いて了ふ。悉く悄氣た久助、今日しも亦お百合の家に出かけると、こりやどうだ、人目厭ふ樣に其家へ入つて行つたのは、大小差した立派な侍！『强敵現る！』と感ずつた彼は、肝を潰して事の眞相を探らうとする。

（前號までの梗概）

日本橋通りの二丁目横町、式部小路の裏屋を飛出して、本材木町の河岸傳ひを南へ久助と友吉の二人、駈け足に急ぎながら、

『もう大分、遲いね久さン、うか〳〵すると夜半の鐘が鳴るぜ』

『いくら遲くッても夜が明けても此まゝ寢られるかね、怪しい奴が宵闇の柳町へ這入ッて大野屋の隱居が二人も出來たンだ、正體を見屆けねエと乃公の男が廢るよ』

『先刻の話しで其、怪しい奴といふのは侍だらう、人斬庖丁を二本、ぶッ込でる奴だらう、むやみに掛ると相手が惡いぜ』

『べらぼうめ、二本でも三本でも、かうなりやア見逃して置けねエ』

『男も久さン、時と場合で好い加減にした方が無事だよ、柳町の本尊また此方の念持佛になるかならないか、はッきり分ッてないとすりやア猶更だ、その侍、もし』

『もし何だ』

『もし柳町の片時も放せない色男で毎晩、そッと今ごろに引入れて曉け方の別れを惜むといふやうな交情だッたら、どうする』

『そ、それを見屆けに行くンだが、同じ事で友さン、あッさりといふもンだよ、いやに丁寧な事を並べるね』

『はゝゝゝ怒ッても仕方ないよ、ところで表の隱居だ』
『現に今、門口から聲を掛けると、たしかに居た隱居が向ふにも居るンだから不思議でならねエ』
『おい久さン、お互ひに二人とも間違ひなく、かうして河岸ッ端を歩いてるンだね、まさか横になッてるンぢやアないね、何だか妙な工合で、夢の方が安心だ』
『心細い事いふない、しッかりしてくれ』
『だがね久さン、海の物とも山の物とも極らない女で苦勞するよりは、二年越も手に入れた八百屋の娘で堪忍が出來ないかね、おまけに種まで卸してるンだらう』
『こゝで鼻を折るなよ、ありやアあれで、こりやアこれだ、自分の名にも似合はず友達甲斐のねエ男だぜ』
『此方は因果な友達と壁一重に隣り合ッたと思ッてるンだ』
『ぐづ〳〵いふな、さア來た』
裏からは本材木町の八丁目、大通りの表からは具足町を曲りて、白魚橋と彈正橋の間、もはや世間の寢靜まりし半夜前の時刻、空は生憎の雨雲りに幽かな星の二つ三つ、音もない川風が身に沁みて、ひやりとして來る、
『うす氣味が惡いね、どうも化け物には勝手の宜かりさうな晩だ』
『よけいなこッた』
『こゝまで來て久さン、これから』

『これから二人で見張ッてるンだ、怪しい侍の奴、今に歸るか、あのまゝ泊り込むか、ついでに隱居の不思議も確かめた上で、乃公に考へがあるよ』
『ぢやア侍と隱居と出喰してるから一人の女に心配ない筈だ』
『そこだよ、あの隱居、頭ア禿げて年は取ッてるが油斷のならねェ老爺だ、やかましい婆さンの手前、身體を半分づつに分ける藝を持ッて居やアがッて、嘘の方を内へ置いたまゝ畜生、ほンとうの方を持込でるかも知れないよ、講釋で聞いたンだが忍術の秘傳には分身の業というてね、自分の身體を幾個にも使ひ分ける法があるさうだ、今夜ア侍と出喰したにしろ、捨てゝ置けねエ、や、戸が開いた』
『どッちが出るンだ』
『しッ』
『なるほど、出るよ』
『しッ』

星明りもない闇の中で七八間の此方より窺へば、のそ〱軒下から出て行く朧ろげの後影、いよ〱隱居に相違ない、友吉の耳へ口を寄せて、
『呼び止めて見ろ』
『振り返ッて目を剝かれると、氣絶するよ』

『いくぢのねエ野郎だ』
握り拳を固めて、そッと後から近づいた久助、
『隱居さン』
『誰だい』
ちと聲が違うて居るらしい、
『大野屋の隱居さンでせう』
『いや、具足町に住ンでる丹波屋の隱居だよ』
首を傾けながら、
『だッて今あの、現在あの、お百合さンといふ家から出なすッたンですね』
『ありやア乃公の借家で、その隣りから出たンだ、親類で遲くなッても近いから歸るに、わざ／＼呼び止めて何の用がある、物騷な奴だ、この邊ぢやア犬でも町内の五人組を勤めてる丹波屋の隱居は知ッてるぞ』
間口も入口も同じ軒並の家作で、その隣りの親類へ這入ッて出た家主の老爺を暗闇の狼狽へ眼に間違うた久助、うか／＼すると今度は此方が盜賊に間違へられて、加之も町内の五人組、どンな目に逢はされるか

知れない、しまツたと驚いて遁げ出せば、さうでなくても逃げ腰に用意の友吉、わツと其まゝ白魚橋の橋詰まで慌てて來て、

『だから久さン、今夜の相棒は嫌だといふンだよ、馬鹿馬鹿しい、隱居の身體が二個に割れるもンかね』

『乃公も實ア、さう思ツたがね、講釋師め、うまく欺しやアがツたンだよ』

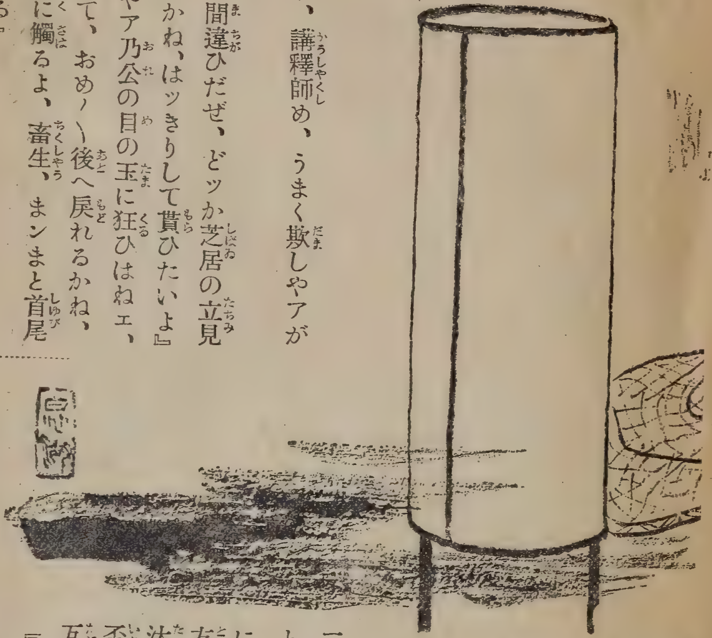
『この工合ぢやア 侍 も何かの間違ひだぜ、どツか芝居の立見で、そンな事あツたンではないかね、はツきりして貰ひたいよ』

『いや、老爺は隣りでも、ありやア乃公の目の玉に狂ひはねエ、折角こゝまで夜露に打たれて來て、おめ／＼後へ戻れるかね、侍の奴、かうなると猶更、癪に觸るよ、畜生、まンまと首尾よく一人占めになツて居やアがる』

『はゝゝ氣の揉めるこツた』

『笑ひごツちやアねエよ、あれほどの圖ぬけた女が友さン、向ふのもンか此方のもンかといふ一生懸命の境だ』

『考へて見ると、久さンも出世したよ』



『なぜ』

『わづかな仕事の意地で仲間の奴等を向ふへ廻した張り合と違ツて、あれほどの女を 侍 と遣り取りの鞘當するンだからね』

『ふゝゝ今夜ア友さンへも無駄骨にさしたくねエよ』

上野の彰義隊から丸一年も立たぬ時で三百年の天下泰平に湧いて出た中には、とぼけた江戸ッ子も多いが、とぼけた上に向ふ見ずの久助と元來お節介に出來た友吉、これが茶番狂言でもない本氣の沙汰で、そろ／＼また元の場所へ立戻るや否、戸の開いた音、表の闇へ薄明りの影、互ひに聲を潛めながら、

『さア、いよ／＼今度こそ隣家ぢやアねエぞ』

『全くだ久さン』

『さう背中へ取ツ付くなよ』

『前へ出ると脚下の邪魔だらう』

ぬツと薄明りの中から表の暗闇へ出た侍、はツきり歳も顔も

分らないが、軒下に頭の屆くやうな背の高い大男で、聊か兩刀を落し差の工合、

『おや、這入ッた時の後影、あゝでもなかッたが馬鹿に大きい野郎だ』

『また間違ッたかね』

『間違はねエ、夜目遠目に離れて居たからだ』

『ちよいと手輕に掛れない相手だな』

『なアに一疋どッかへに武士も 侍 もあるかい』

『おや〳〵久さン、また出るよ、また後から出るぜ、一匹ぢやアないね』

『はてな』

續いて同じ兩刀の一人、

『こいつア變だ、こりやア、をかしいぞ』

『おい久さン、また出るよ、これで三人だ』

一人の出る毎に五歩か六歩づつ後へ退りながら見て居たが、段々と珠數繋ぎに出た四人の侍、加之も門口で分れるかと思へば、四人とも此方へ向いて來られた友吉、もう堪らない、もう見て居れない、其まゝ我を忘れた無我夢中に駈け出し、夜中の河岸ッ端を飛ぶが如くに我家へ歸りし五體、ぶる〳〵まだ震ひの止まらぬところへ息切れに追ッかけて來て、

『友さン、驚いたね』

『驚いた、肝を潰したとは此こッた』

『然し默ッて乃公を置き去は酷いね、頼み甲斐のねエ男だぜ』

『あンな場合に頼まれちやア叶はない、生命が大事だよ、四人で二四が八本の人斬庖丁だ』

『だが今夜ほど不思議の多い事アないね』

『多過ぎるよ』

『どう考へても腑に落ちねエ』

『もう夜明けに間もない、あすの事にしてくれ』

『かうなると猶更、睡れねエ』

『びッくりした拍子に此方も睡れないが、おかげで身體ア綿のやうだ、少々熱が出たかも知れない、頭痛がして來て、ふウふウするよ』

『すまねエな』

『この一件この邊で、片棒の願ひ下げにしたいもンだ、壁一重の義理とすりやア八百屋の方が樂だよ』

彰義隊の柄を握りし池田大隅守の舍弟、同苗眞之丞が大野屋の表で斬死して以來、向島の小梅を今この柳町へ引移りしお百合の許へ、どこからともなく人知れぬ深夜、そッと寄合うたのは、この日蔭の花の根元へ二百兩の金を埋めて置くといはれた四人で、いよ〳〵再擧の用意に加へる金か但しは時勢

を見た一味離散のため受取りに來たか、兼ての約束それを渡したとは、いくら考へても久助の考へに浮ぶ筈がない、

やはり前夜のまゝ不思議で寢られぬ久助、顔も洗はず朝飯も喰はず起きもせず、思案に餘る鎌首だけを持ち上げて片手を伸しながら、こつ／＼と叩き出した壁越、

『友さン』

『やりきれない、また始まるンだね』

『續いて出た四疋の人數で、一人占めの心配はなくなッたが全體、どういふ譯だらう、あれから今まで、まンじりともせずに智惠を絞ッたが、わからねエ』

『さア、金魚の糞のやうに繋がッて前夜の四人、ありやア何をしに來たンですと本人に聞くより外アないね、どう友達の贔負目に見ても、まさか久さンを入婿にしたいといふ事で知り合を呼び寄せたンぢやアあるまい』

『ふざけるない、港口へ船を入れかけた瀬戸際だ、然し友さン、そりやア、さうだよ、いくら心の底で思ッてるにしろ、あの四人へ乃公の事、流石に話せないだらう』

『それが久さン、こンな事になる禍ひの基だぜ、人の寢靜まる夜の夜半、無理に隣りの友達を引ずり起して、さンざ驚いた果に逃げて歸るといふ後始末があるもンかね、わるい事アいはない、蟹は甲羅の穴で人間は分相應、身の程度を知れだよ、あれ

新連載の二大長篇小說發表

愈々大飛躍の講談倶樂部十月號

毎號大評判、エライ人氣の講談倶樂部は、隅から隅まで面白痛快づくめです。賣れるわ／＼本屋はいつもテンテコ舞です。そこへ左の二大作家が、愈々本號より大長篇傑作を發表しました。

▲現代小說 戀愛白道……菊池寛

極秘の題材を以て作者が一意專念、心血を傾注した大戀愛小說で眞に近來の傑作です。何人も一讀胸を躍らせずにゐられない。

▲時代小說 自雷也小僧……吉川英治

幕府の弊政と社會の腐亂に、痛恨、義憤、蹶起した市井の快俠が天地に捲起す大波瀾、大騷動、痛快颯爽眞に天下一品の大傑作。

更に特別長篇讀切小說の大發表

▲現代小說 祇園心中……長田幹彦

戀の祇園に涙の時雨、舞妓かなしき心中物語、百五十枚の大傑作

と比べるから不足も出るが、八百屋の一本槍、お花ばうで潔好だ』

『おい友公』

『急に友公と來たね』

『下手に隱居の口眞似をすると、承知しねエぞ、この道ばかりは思案の外で、昔から理窟を放れたもンだ、前夜の事を迷惑らしく恩に着せて分相應たア何だ、ごそ〳〵穴探しの横這ひに蟹のやうな男と見られちやア面白くねエ、身の程を知れたア誰に向ッて、いふンだ』

『怒ッては困るよ、怒る前に柳町へ聞き合した方が早道だ、ついでに此方も助かるよ』

『よし、今日こそ本人の本音を聞き出して來て、いよ〳〵本舞臺の本藝を見せてやるから、驚くな』

『ゆふべ驚いて仕舞ッたから、もう驚きの種切れだ』

『吐したな』

『一時、お世辭の甘茶よりも良藥は久さン、口に辛しだ』

『がらにもねエ、生意氣な事、いふない』

『それぢやア喧嘩になるよ』

『喧嘩、持ッて來い、友達の一人や二人、いつでも未練氣なしの帳消にするぞ』

そッと外に足を停めて居て、呆れ顔を入れた大野屋の隱居、

『揃ひも揃ッた奴が二人で壁越に朝ッぱらから何を喚いてるンだ、ゆふべ宵の内に隱居さン、たしかに居ますねと聲を掛けて其まゝ此奴、どこへ鐵砲玉になッたンだ、おまけに隣りの猪鼻助も藻ぬけの殼にしやアがッて、盗まれる物はなくとも無用心な奴等だ』

腹には何もないが、久

しぶりで好い氣持に啖呵を切り出した鼻頭、ぺしやりと折られて、

『實ア隱居さン、あれから、すぐ歸りましたよ』

『噓を吐け、どうも樣子が變だと思ッて、二度も見に來たぞ』

『お手數を掛けまして』

『今に始まッた事か、年が年中お手數ばかり掛けて居やアがる、どこへ出かけたンだ』

『なアに、ちよいと、つまらねエこッて』

『どうせ、理詰めに叶ッた事はないが久助、ふわ／＼と今までのやうな量見で居て、あの三月になッた身體を、どうするンだ』

『さア』

『さアとは、どこを押して此奴、そンな音が出るンだ、さアと今更、他事のやうに考へて濟むか、お花の方ぢやア親も兄も承知して、もう出來るだけの用意が出來てるぞ、てめエは厄介で

も乃公が親代りと媒酌人を兼ねてるンだ、今月中の吉日を選ンで』

『今月は後、六日ですね』

『その六日の間に祝言させるンだ』

『甚だ申譯のないやうに聞えますが、も少し、日延は願へませンかね』

『何のために日延するンだ、一日も早くといふのが人情で、借金の催促ぢやアないぜ』

『いえ、その段は萬々、わかッて居ますが』

『わかッて居て何故、妙な面をするンだ、ほンの形だけでも今日中に双方から目出たい結納の取り交せをしなければならない、お花への帯代は偖置、その素寒貧で半襟の一枚も買へるかい』

『殘念だ、いかにも殘念で堪らねエ、なさけねエ、口惜しくッてならねエ』

『だしぬけに此奴、何が殘念で口惜しい』

一つ增えたお樂しみ

愛讀者の皆様、本誌は別項豫告の様な大增刊を發行することになりました。

『毎月普通號が出ると、早速次號を待つてゐるがどうも待ち遠しい』と矢の様な御催促で、常に皆様の本誌に對する熱烈なる御同情を有難く思つてゐるのですが、今月は普通號の間に本誌最初の大計畫である臨時增刊が發賣されることになつたのです。一寸淋しくなる月半ば、それが今月だけは、きつと皆様を御退屈させずにすむと思ひます。本誌御愛讀の皆様、是非この一つ增えたお樂しみをお忘れなきやう。

發賣日は九月十九日です。

『これでも男ですよ、生涯一度の事に半襟の一枚も買へめエと遣られちやア、お心易い隱居さンの前にしろ、權現さま以來の江戸ッ子が立たねエ、男の面が潰れますよ』

『ゆッくり落着いて、いへよ久助、とンだところへ恐れ氣もなく權現さまを引出しやアがる、てめエと代々將軍家の御先祖になッた權現さまと何の掛り合があるンだ、はゝゝゝてめエが江戸ッ子を振り廻すと外の江戸ッ子は泣き出すよ、なるほど、鼻ッ柱の强いのと喧嘩早いだけは、いくらか江戸ッ子の仲間へ這入ッてるかも知れないが、その外ア久助、へどッ子だぞ』

『こりやア隱居さン、長年お世話を受けて居ても、ちと聞き捨にならねエといふ、この男に無理は御座ンすめエ』

視力恢復の近

近眼
老眼
亂視
弱視
斜視
疲れ眼

眼の悪いことほど氣をくさらすものはありません、實際に於て眼の悪い人は生活の勝利者とはなれません。眼病と言つてもマブタの病ひナミダの出る病ひ、トラホームの様な結膜諸病、白目、黑目に起る角膜の病ひ、ヒトミに起る病ひなど二百以上もの澤山の種類がある。その中でも近視、老眼亂視、弱視、斜視、疲れ眼の様な視力に關する病は手輕に治療することは困難とされて居ります。

視力恢復の近道！

メキ／＼評判となつてゐる『エモヂン』は內服によつてこの治療困難な眼の疲れを治し視力を增進させ正常な健眼に導くに最も適藥であるとして、もてはやされて居ります。

この『エモヂン』は支那奥地龍門地方の特產植物で漢法に於ける眼病內服藥として古來珍重されたもので、現代の科學藥で治せない視力の障害を內服で

『例の御座ンすを持出して來たな』
『かうなりやア意地だ、お花への帶と一揃への衣裳、拵へますよ、帶は金襴と緞子の裏表で着物は縮緬の三枚重ねだ、然し隱居さン、急の間には合ひませンぜ、それを拵へるまで待ッて貰ひてエ、あンか火鉢と澁團扇で、夏冬の道具を揃へたなンて、そンな吝な事アいはねエ』
『この馬鹿野郎、十年も二十年も待てるかい、待ッたところで出來るかい、乃公が宜いやうにして遣る、氣狂ひじみた事はいはずに默ッてろ、今日は忙がしいンだ、呼びに寄越すから今夜、あらためて出て來い、念を押して置くが久助、それまでに冷たい水で五六度も面を洗ッてから來いよ』
そろ〳〵お鉢が廻ッて來るかと首を縮めながら、びく〳〵してゐた隣りの友吉、呆れたまゝで出て行く隱居の足音を聞くや否、
『うまいね久さン、あれほどの智惠が吹き出るとは今まで、知らなかッたぜ、金襴緞子の帶に縮緬の三枚重ねは感心したよ、はゝゝあれぢやア隱居も二の句が次げまい』
『どうだい友さン、半襟一枚と來たのが此方の付け目で、すぐ敵の手許へ斬り込だ藝當、鮮かなもンだらう』
『然し今夜は遣り直されるぜ』
『なアに大丈夫、ぬらりくらりと瓢箪鯰だ、もし今こゝで極め

道！即刻試みよ

正常に恢復させるので不思議に思はれてゐます。視力障害の根本原因は身體の具や眼の疲れから起るもので、從つて『エモヂン』の内服によつて眼の機能を正しく調節して眼の働きをよくするから、正常の視力になることに不思議はないのです。
眼を激しく使ふ人、近視亂視等視力障害を起した人も『エモヂン』の連用によつて、眼に力づき物もハッキリ見える樣になり氣持のよい健全な眼の持主となる事が出來る譯であります。『エモヂン』はコーヒーの如き香味のあるものですからお茶代りに常用される家庭も澤山あります、價格も一日十錢位ですから申分ない低廉なわけです。
『エモヂン』は十七日分一圓五十錢送料内地十錢其他四十二錢、五十五日分四圓送料内地二十一錢其他四十九錢　東京市小石川區音羽町六日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）で販賣して居ります。なほ御希望の方にはお申込次第『眼病一般知識と治療體驗錄』小冊子を進呈します。

て仕舞ッた事が聞えると、そこは女だよ』

『どッちの女だ』

『知れた事い、お花ア煮ても燒いても乃公の手の內だ、どうでもなるが折角あゝまで來てる一方、あの柳町へ、すまねエ』

『折角、あゝまで來てるかね、すまないかね、そこが千番に一番の難かしいところだ』

『おい友さン、また乃公に逆らッて來て、氣を惡くするンだな、やはり喧嘩腰になりたいンだね』

『さうぢやアない、太夫の綱渡りを下から見て、はら〳〵してるンだよ、友達の親切から出るンだよ』

今夜また隱居に呼び寄せられて、また長たらしい說教を聞かされるかと、その時の遁げ道を頻りに考へた久助、考へながら前夜の勞れで、うと〳〵と晝寢の最中、吉野屋といふ中橋の廣小路に名高い料理屋から若いものが出て來て、加之も隣りへ門違ひの口上、

『こちらア久さンと仰ッしやるンでせう、只今、手前どもへ四人のお客さまが見えまして、御苦勞ながら是非、おいで下さるやうと其お使ひにまゐりました、すぐ願ひます』

あッと驚いた友吉、

『其お客、さ、侍かね』

『さうです、立派なお武家揃ひで』

ギャングと格鬪し全米を駭かせた

小山大佐の豪快物語

小山武夫大佐は、ギャングの國米國に軍事視察に出かけた。大佐は不自由な英語を物ともせず此地彼地と視察の旅をつゞけてゐたが、ニューオルリヤンスから、ジョージア州のアトランタに行く途次、その汽車中親切に話かけた紳士に心を許したのがそも〳〵の間違ひであつた。この紳士こそアトランタの名だたるギャングの頭領トムソン。はしなくも起る大格鬪、遂にギャングは逃亡したが、それからが大變だ。次々に起る大佐の痛快とも豪膽とも、眞に大膽不敵な物語。

この物語は小山大佐が特にキングの爲めに當時の有樣を語つたもの。キング十月號に掲載されてゐる。

キング十月號には、この他『新教育總監渡邊錠太郎大將出世物語』を始め、『世界の偉人を語る』南洋一郎氏の大冒險小說『密林の怪奇』『日米對抗水上競技大會實況』『木村八段の平手將棋の急所』等の評判記事を始め、日本一の豪華を誇る小說陣はいよ〳〵充實し、十數篇の大傑作を揃へてゐる。

キング十月號は定價平月號通り五十錢、大評判、早く御覽下さい。

青くなッて隣りから飛び込み、毆るやうに久助を搖り起して、

『大變だ久さン、大變な事になッたよ、わかる筈がない、きッと柳町が饒舌ッたンだ、今あの中橋の吉野屋から迎ひに來たぜ、四人で待受けてるから覺悟を極めて來いと』

寢ぼけ眼に飛び起きた久助、

『そ、そ、そンな事があるかね、此方は手も出さずに遁げて歸ッたンだ』

『あるもないも現在、手を出す出さないに限らず、うか〳〵すると四人で押寄せて來るかも知れない、だから久さン、あゝいふ面倒な素性の女に妙な氣を出すなといふンだよ』

『隱居、表の隱居だ、かうなると隱居より外に相談するものアねエ、友さン、どこへも行かずに居てくれ、たのむぜ、隱居に相談して來る間、動いちやア困るぜ』

『動かずに居れるかね、向ふの目當は久さンだ、隣りの友吉に來いとは、いはないよ』

『この場になッて、さう薄情な事いふもンぢやアねエ』

ゆふべ二百兩の秘し金を受取りし四人、お百合の口から久助の事を聞いたに相違ないが、どういふ工合に聞いて今これを料理屋へ呼び寄せようとするか、それを知らぬ二人は生きた氣もしない顏と顏、

（つゞく）

いよ〳〵次號は久助の本舞臺となります。刮目して御期待を乞ふ。

なるほど、これはよく考へた

いよ〳〵新學期、どこの御家庭でもお子樣方大元氣で御通學でありませう。

第二學期こそは正に燈火親しむ候……お子樣方が一番勉强に身の入る好季です。御家庭で、力瘤をお入れになればなるほど、お子樣の成績は目立つてふくらむ時です。さて、學科はいろ〳〵ありますが、中でも國史の勉强に大切な年代の記憶、これにはどのお子樣も大苦心でありませう。『誰が、いつ、どこで何をした』この『いつ』が年代で國史の急所。なか〳〵むづかしい所です。ところが、少年倶樂部十月號の附錄『おもしろい國史の覺え方』を見ると、この難題が見事解消……その工夫につく〴〵感心させられました。つまり覺え難い年代を、一々調子のいゝ文句に織り込んで、極めて自然にすら〳〵と覺え込ませるといふ仕組なのです。可愛いポケット型の別册、これ一册あればきつとお子樣の國史の成績は滿點でありませう。

來る九日全國一齊に發賣されます。どの御家庭でも、ぜひお與へ下さい。

☆そこ迄しずとも

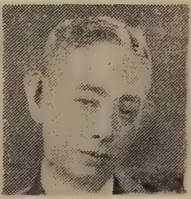
我童と一緒に滿洲の皇軍慰問に出掛けた市村羽左衛門、砂ッぼこりと暑さの中で、

『しがねえ戀の情が仇…』

などと、涼しさうに與三かなんかを見せて、到る處大入滿員の盛況、が、なんといつても、あの皇軍の奮闘振りを見た感激は、歸京すると尙更ら高まり、

『飛行機といひてえ所だがそいつアまア出來ねえ相談として、軍用自動車の一臺位は献納してえもんだ。』

と、この處しきりに力んでゐるが、惡いのが傍から、



『橘屋が献納するんぢやア車體は白塗りにしなきやアなるめえ。』（寫眞は羽左衛門）

☆ご尤もご尤も

この間迄の鎌倉の海の繁昌ときたらたいしたものだつたが、これに日歸りの客も加はつて、ワン／＼と押し掛ける始末で大騷ぎ、恰度その時間に、東京の芝居へ出かけてくるのが、鎌倉の住人、市川松蔦と澤村訥子。

役を濟まして、一ト汗、樂屋風呂で流して、二人が鎌倉へ歸る時分には、鎌倉たるや實にしんしんとして夜更けの閑散の中にあるので、松蔦が不思議さうな顏をして、

『今年はどうも、鎌倉は振ひませんですねえ。』

訥子つくづく同感して、

『いや全く寂しいもんですなア。』

（寫眞は訥子）

☆それアさうだらう

河合武雄の部屋の前を通り掛ると、

『よッ！』

『ウーム！』

などと、しきりに力んでゐる聲が聞えるので、何事ならんと河合榮二郎が飛び込んでみると、親父の武雄が藝妓姿で、これも藝妓の仕度をした市川紅梅と、うん／＼いつて腕相撲をしてゐる騷ぎ。

榮二郎早速、

『紅梅チャン、頑張れッ！そこだ、もう少しだ。』

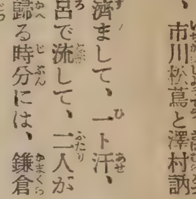
などと、聲援これ大いに努めた甲斐もなく、遂に紅梅の負け。

『もう一つ年を取れア、屹度勝つてみせるんだけどなア。』

と、しきりに殘念がる紅梅を見乍ら、グッとサイダーをあふつた武雄が、

『矢ッ張り僕の方が強いなア。』

と感心する。



榮二郎くやしがつて、藝妓姿の親父をみてゐたッけが、

『それアさうさ。なんてッたッてお父さんは男なんだからねえ。』（寫眞は武雄）

☆粗忽放送

村田嘉久子、みね子の姉妹は、身體つきもだん／＼似てくるし、おまけに聲ときちやア恰でどッちがどッちと解り兼ねる始末に、ちよい／＼二人ともひよんな事で惱まされる事があるんだが、この間も、妹のみね子が放送したのを、お客樣

の家で聞いてゐた嘉久子にその家の奥さんが、びッくりして、

『あらまア、冗談ぢやない。嘉久子さんのレコードを掛けてるんぢやないの？』

と、いはれ、あわて者の嘉久子自分でも、びッくりして、

『ほんとにまア、私が放送してるやうですわね、けど、いゝえあれはみね子ですのよ。』

『あら、みね子さん？ 違ふわよ。あんたですわ、あんたに違ひないわよ。』

と、いはれ、嘉久子しみじみ考へてゐたッけが、

『放送してゐるのが私なら聽いてゐる私は一體誰かしら？』（寫眞は嘉久子）

☆手許狂へば

東喜代駒の愛煙家は天下に冠たるもので、必ずまた不思議に二個がとこの西洋煙草を、ポケットに入れてゐるが、こゝに一寸仕掛けがあつて、右のポケットにはほんもの〻西洋煙草、左の方には箱はほんもの〻、中身バットといふ機關があり、自分用は主として、左を用ひてゐる。

『如何です？ 一つ。』

などといふ時には、右の方を捧げるといふ、苦肉の策を施してゐるのだが、この間、滿洲歸りの友達に逢ひ、例の右の方を差し出すと、どうした手許の狂ひか、これが逆になつてゐる。

友達、差し出された箱と中身を見比べて、

『へえゝ？』

テナ、顔を早くも見て取つた喜代駒、ハッとしたが、そこはそれいつもの舞臺度胸で、

『さうさう、君アまだ知らんかもしれんが、内地ぢやア君、これが、合の子辨當――いや、その、合の子煙草といつてね、バカに流行なのぢやよ、アッハッハ。』

☆蠅帳問答

落語の柳家菊語樓は、斯界名うての小男で、これはまた隨一の大男といはれる三遊亭圓生と二人が、去年の招魂社の見世物に入る時手を引かれて、菊語樓、子供の木戸錢で入つたなどといふ美談もある程だが、この間、神樂坂の緣日に、變な恰好の蠅帳をぶらさげて歩いてゐる菊語樓を見つけた三升家小勝、

『なんでえ、え、かう、また妙なもんを持つてゐるてえもんぢやアねえか。』

『へえ、實はその師匠の前ですが、うつかりこれ、ひやかしたやつが、拔き差しならねえ羽目になりやしてね、たうとう半値に負けられちまッたんで、買はされちまつたですよ。また嬶アに怒られやス。』

『蠅帳だな？』

『へえ蠅帳なんで。』

『なアにお前え、怒られねえ手があらアね、よしか、今夜からお前え、ウッフ、蚊帳の代りに、そん中へ入えッて寢ねえ。』（寫眞は小勝）

☆さう云はれゝば

『實ア、あの播磨屋さんの一條大藏卿ですがねえ。』

と、傍にゐた中村時藏を捕まへて始めたのが、相當五月蠅い中村七三郎、

『あれア、あなた「二條大藏卿」てえのが本當なんでさアね。』

ときた。

『どうしてさ？ それア。』

と、時藏が乘つてくると

『いゝえさ、まアお聞きなさい。ようがすか。大藏卿のセリフにもあります通り鼻の下の長成といつて、作り阿呆になつてゐる人でげしよ？ 鼻の下が長けれア、これ二本棒だ、二本棒ならあなた二條大藏がほんたうでげすよ。』

大長篇　時代小說

虛無僧系圖

吉川英治

齋藤五百枝畫

本篇の主要人物

旗屋小五郎……同僚三輪又之丞へ嫁ぐ戀人お壽々を、婚禮の當夜殺めた爲、八王子千人組同心を後楯とする又之丞に、笹子峠で果合ひを挑まれ、血戰の末辛くも駿州路へ逃れる。

お藤……小五郎を戀ふ可憐な乙女で、幕閣の秘書『普化宗御掟目』紛失の謎を解くべき怪手毬、これを戀人に渡さうと苦心する中、哀れ駿州路で、千人組同心隊の手に捕はれる。

音羽……元お壽々附の腰元と稱する謎の女、絶えず小五郎に好意を寄せ、爲にお藤から戀敵と目されたが、後心解けて行を共にする中お藤が捕はれたので自分のみ逃れ去る。

關根嘯々……皇學鼓吹の怪虛無僧、無援の小五郎を庇つて、笹子峠に千人組同心隊と衝突し、今は伴類を率ゐて駿州路に潜む。

越生四方太……千人組同心隊の頭目『虛無僧團剿滅』の幕令に依り、駿州裏街道で關根嘯々一味と、凄愴な血戰を交へたが勝負は決せぬ。この矢先へ逃れ〳〵た小五郎が姿を現し『素破』と許り取圍まれる。

孫太郎賣

チ、チ、と、小禽が黎明を告げはじめる。深い海でもあるやうな密林の綠と紅葉に、朝の陽が映しこんでゐた。林を出て、斷崖の一角に立つと、霧の海原を隔てた彼方に、相州丹澤山の肩が、朱でも捺摺つたやうに眞つ赤に見える。

馬子が、鈴の音と共に、高聲で、

『今朝方、月夜野の宿場に、どえらい煙が揚つてゐたでねえか、火事か。』

『喧嘩だつていふ噂だが。』

『又、博奕打のなぐりあひか。』

『なあに、虛無僧が、何十人と寄つて、八王子の同心衆と、血まみれの斬合ひだ、それで、火を失したのだらうつていふこつたが。』

もう峠には旅人が通る。――音羽は森の中の古い祠堂から姿を見せた、さすがに昨日は、彼女も疲れた、曉方に近い一刻を、この馬頭觀音の古堂の中で微睡んでゐたのであらう。

『月夜野の宿場に、虛無僧と、八王子同心との、斬合ひがあつたと云うたが……。もしや？』

何かにつけ、すぐ旗屋小五郎の安否が思ひやられる。

泉をさがして、顏を洗ふ。

姿のみは、雄々しく、不斷に敵を持つ身の油斷もないが、やはり女は女であつた、刀の笄をぬいて、泉の水を姿見に、みだれた昨日の髮を梳でつける。

——お藤は何うしたらう？ 今朝の光を何んな恐怖と悲しみで見てゐることぞ。

（少しの間の辛抱ですよ。きつと、私が救ひにゆくから！）

ゆふべ、彼女の捕はれた時に、無情く見捨てゝ別れた折、かう最後に殘した自分の言葉を、音羽は今又、胸の裡で呟いてみた。

大きな任務だ、果して、あの兇惡な四名の旗本の手から彼女を奪ひ返し得るか何うか。

小五郎の行方を求めるよりは、お藤の身を奪ひ返す事の方が焦眉の急だつた、お藤の手には、鞠が秘められてある、のみならず、彼女をこゝで死なしては、濟まないと思ふ、笹子の峯で、姉とも妹とも誓ひあつたばかりである。

密林の一すぢ道を、傾斜につれて澤へ降りると、幾すぢも煙が見え、四十戸ほどの部落がある。

斧を擔つて來る男に、

『こゝは、何處へ參る街道であらうか。』

と、道を訊ねると、

『富士の南都留。』

と答へて去る。

『富士？』

なる程、さういはれて、部落の兩側に立ち竝ぶ落葉松の並木を仰ぐと、眞つ白な芙蓉峰！ 眉に迫る雪の鮮けさ。

意外な方角へ迷つてきたものと音羽は吾ながら思ふ。然し、笹子と裾野の間はさう遠くないのだ、五日市か上野原へ出るつもりでゐたのが、反對な谷間へ降り、いつか富士の吉田街道へ向つて歩いて居たのだつた。

すると、彼方から來た一人の旅商人がある。もう髮の白い老人で、紺木綿の古びた風呂敷を背に負ひ、大きな菅笠に『孫太郎虫』と書いてあるのをすこし阿彌陀に被つて、せか〳〵と、啣へ煙管で歩いて摺れ交つたが、

『おや？……』

振顧つて、音羽の背へ、

『お孃樣ではねえか。』

と呼びかけた。

音羽は、こんな所で——しかも男姿の身へいきなりお孃樣と呼ばれたので、愕つとしたやうに、

『誰ぢや？』

さり氣なく裝つて、かう、言葉も武士らしく答へながら足を止めると、

『おゝ、やつぱり音羽樣だ、太郎兵衞でごぜえますだよ。』

『えつ……太郎兵衞ですつて。』

走り寄つて、笠の裡を覗いた、一時、彼女が身を寄せてゐた

淺草阿部川町の八百屋太郎兵衞なのだつた。其處では、音羽は、太郎兵衞の娘と呼ばれてゐたものだつたが、今の樣子では、親娘ではなく、主從のやうな間がらに見える。

『まあ、爺や、何うしてこんな所へ。』

『わしも、吃驚しましたゞ。まさかこの街道でお孃樣に會へようとは夢にも思つてゐなかッたで。』

『こゝでは往來もあるし……爺や何處ぞへ行つて。』

『あの水車小屋の蔭を借りますべ。お孃樣は、朝のお食事をもう濟ましたのか。』

『いゝえ、まだ。』

『では、ちやうどいゝ、爺もゆふべは淺間神社の軒下に野宿ぢや、まだ朝飯をしてゐねえのでがす、この村で、わしがちよつくら、握り飯なと都合して參りますで、あの水車小屋の蔭へお先に行つて、休んでゐてくらつせえ。』

爺やは、さう云つて、部落の家を覗いて行つた。やがて、朝飯を求めて、約束の場所へ戻つて來る。稗まじりの握飯に梅干をひろげ、爺やは早速食べ初めた、音羽も食べた、大きな落葉松のこずゑに、漸く高くなりかけた陽の光りと、鳥の音と、そして、水車の快い階調に、旅の貧しさも現在の苦しみも、瞬間、すべてを忘れた自然の中に。

馬の背

『爺や、そなたは、江戸を離れて以來、何處に身を隱してゐましたか。』

『旗本組の――さうだ大久保彥六といふ奴――いきなり阿部川町のわしの二階へ踏み上つて、お孃樣を血眼で捕まへようと致しましたな。』

『えゝ、いつかの折。』

『あの時、彥六を捻ぢ伏せてゐる間に、お孃樣は、すばやく逃げてしまふ、爺は、すぐ後から、路銀と手廻りの物だけを身につけて、お後を追つて行つたのでがすが、もう見つからない。』

『私も、何んなに、探したか知れない。』

『そのうちに、江戸中には、詮議がやかましくなる、爺も、足許があぶなくなつたので、一時、田舍へ足を拔かうと、紀州へ行くと、和歌山の御城下も、江戸同樣、この邊りに、怪しげな虛無僧や、旗屋小五郎の緣類の者、立ち廻り次第に、屆け出るやうにと、旅籠の壁にも、辻々にも、嫌な布令が目につきますだ。』

『では、鄕里の方まで、そんなに嚴しく？』

『上方、東海道、何處へ行つても、旗屋小五郎樣の名と、人相

書がまはつてゐない所はない。それと共に、元大奥にゐたお壽々の方の小間使、音羽といふ女の詮議も。』

『ホヽヽ。』

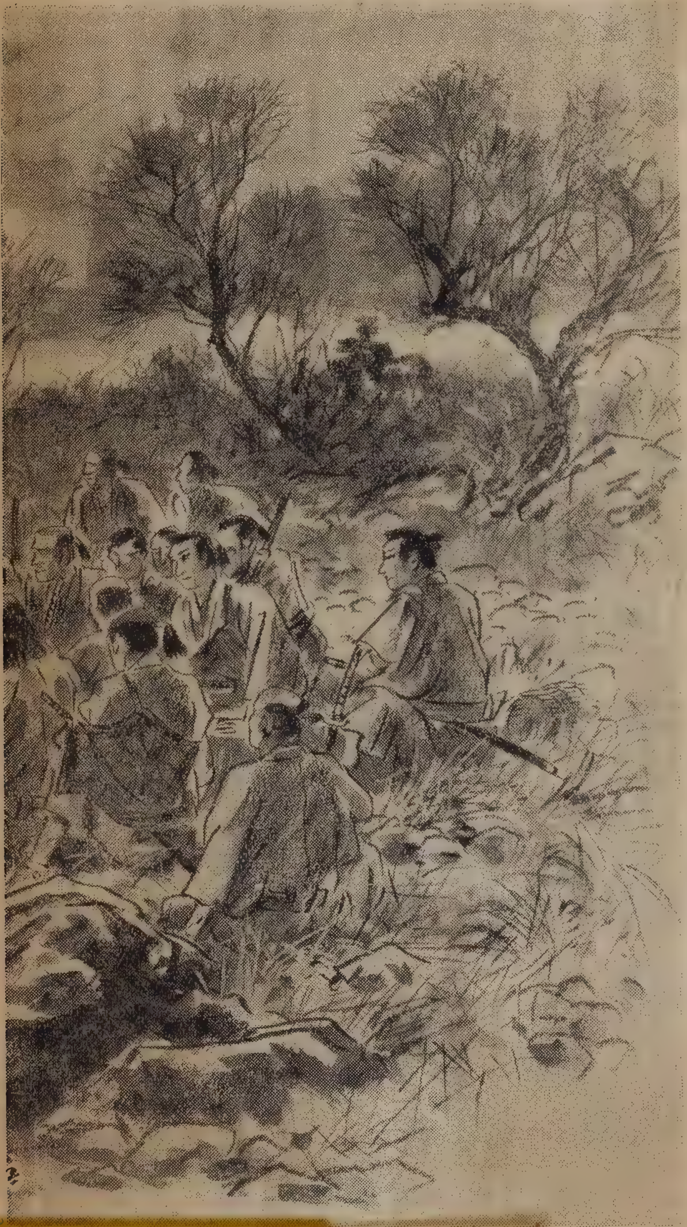
音羽は、何かをかしさに擽られたやうに、

『その女は、なか／＼捕まるまい。』

と、他人事のやうに云つた。

『でも、この爺やの身にとると案じられて、今日は、捕はれたといふ噂を聞くか、今頃は、何處で辛い目を忍んでおいでなさらうかと、尋ね歩いてゐましただ。飛騨から美濃、甲州路と、迷ひながら。』

『いゝ所で會ひました。爺や、そなたが側に居てくれたならと、今も今とて、思うてゐた所でした。』



『なんぞ、爺やに出來る御用がございますか。』

『あるのぢや……』と、音羽は立つて、水車小屋の中を覗いた、人はゐなかつた、岑閑と、長閑な山村の晝間。

爺やの側に肩を寄せて、音羽は、今日までの事を審さに話した、爺やの眼は、聞いてゐるうちに赤くなつた、しまひには嗚咽して、拳を眼に當てた。

『では……そのお藤とやらいふ人は、旗本組の者に捕まつて、江戸へ送られるといふのでがすか。』

『多分――一度八王子同心の手に渡されて、それから、江戸の

町奉行所へやられるだらうと思ふが。』

『わかりましただ。何の、雜作もねえこつた、きつと、爺やが何とかいたしますべ。……だがお孃樣、それにしちやあ、この道は方角ちがひだ。』

『ゆふべから、迷つてゐたのです。』

『八王子へ行けば、樣子が知れよう。それも、急とあつては、愚圖々々して居られるこつちやない。』

腰をあげて、

『お孃樣は、疲れてゐさつしやるか。』

『いゝえ、これ位なことで――』

『谷村の立場へゆけば、駄賃馬があるで、あれから、鳥澤峠を越えて、大群山へ出ますべ。――道が近い。』

爺やは先に立つた。歩きながらも過ぎた越し方の話は盡きない。これで、音羽が袂の長い娘風につくつてゐたら、誰も、その仲のむつまじさを、親娘と見るのは當然だらう。――然しこの二人が、さうでないとすると、一體、爺やと音羽とは、何ういふ深い關係なのだらうか。

『おウい、馬子やい。』

立場にかゝると、爺やは、手を振つた、馬子が、馬小屋の前から急いで駈けて來る。駄賃をかけあつて、折合ひがつくと、馬子はすぐ、馬の背を、音羽へ向けた。

『夕方までに、上野原へ着くかの。』

爺やが云ふ。

馬子は、狹い峠の笹原道へがさ／＼かゝりながら、

『日暮いつぺいに、鳥澤を越すのがやつとだ、上野原は、まあ明日の朝立ちで午めえだな。』

『そいつは困るな、泊りは何處でする。』

『寺か、百姓家に、事情云つて、納屋でも貸りるだな。』

『月夜野の宿場へは。』

『もう一山越えにやならねえ、夜半になるべ。』

『やれ／＼。』

まつたく山から山だつた、かうした人の往來も稀れな道で、爺やは、音羽に出會つたことが、ふしぎでならない、日頃信心してゐる神佛の加護だと思ふよりほかにない。

音羽も、それを考へて、明日のわからない人生の行路を、今も上つてゆくのだつた、爺やの事は、忘れてゐたのではないが、それを探してゐるゆとりもないこの年月だつた、會へようとは、夢にも思つてゐなかつたのだ、その爺やが、夢ではなく、正しく馬の背にゐる自分の先へ立つて行く――

鳥澤を越えて、大群山のひろい裾へ出た頃は、馬子の言葉の通り、もう黃昏れてゐた。

『旦那、すまねえが、ちよつと、馬から降りて、休んでおくん

なせえ、此處から十町ほど横道に、博勞の仲間がゐるので、そこへ、言傳てがあるんで一つ走り行つて來ますから。』

馬子が云ふので、音羽は、馬の背から降りた。爺やは、不審つて、

『おい馬子、馬は曳ッぱつて行かねえでもよからうに、馬は、置いて行つたら何うだ。』

『先が、博勞で、この馬を取り換えることになつてるから。』

馬子は、さう云ふと、すた〳〵と馬を曳いて遠く去つてしまつた、それから、一刻も待つてゐたが、馬子は歸つて來なかつた、大群山の裾が、廣茫とした夜の墨に刷かれても――

『お孃樣、こいつあ、馬子めにいつぱい食はされたか。』

『どうして。』

『往來のない山の中だし、馬子はあんな朴訥者と思つて、つい、油斷して途々お孃樣と話してゐた言葉の先で、わし等が、何者だか、彼奴め、きつと覺つたにちげねえだ。博勞の所へ言傳てにゆくと云つたのは嘘で、わるくすると、代官所か、先を越して、八王子同心の屋敷へ、告げ口に走つたゞかも知れねえだ。』

『私も、何だかそんな氣がする。もう、馬を待つ事は要らないから、道を急ぎませう。』

目標とする里の灯も見えない、二人はたゞ足にまかせて、大群山の裾を北へ急ぐ。

こゝら邊りは、篠が多かつた、いちめんな篠原である、二人の跫音に、突然、その篠叢からがさつと立つた者がある、黒い雄鹿のやうな影だ、あつと云ふ間に、彼方へ向つて駈けてゐる、その駈けて行く先に、ぼうつと、明りが見える、焚火の焔か、とにかく、人間の群が居るのだ。

雜誌週間記念 愛讀者慰安
九誌聯合
大懸賞募集
詳細は八六頁を御覽下さい

霧散

放牧してある牛や馬も、夜はどこにも影を見せない、見渡すかぎりなゆるい傾斜と草原の線が、くつきり、星の空を横に切つてゐる。

『もつと、焚く物はないか。』

關根嘯々の言葉である、彼のほかに、およそ四、五十名の虚無僧が、ずらりと大きな圓を描いて草に坐つてゐた。

『餘り焚くと、千人組の奴輩が、火の手を見

て、嗅ぎつけて來ませう。』

一巢が云ふ。

それもさうだ――といふやうに嘯々はだまつて頷く。

風が寒い。すぐ彼方に、大群山の谷間から落ちて來る溪流がざあつと走つてゐるのだ。その方を背に向けて、旗屋小五郎も、凝と、焚火の焔を見てゐた。

沈默がつゞいた、各々が、何事かを、評議にかけて考へてゐるらしかつた。

『いづれにせよ、關東の地からは、暫く、離れなければならない。再擧の機の熟すまでは。』

『四國がよい。』

と、誰か云ひ出した。

『盟主、四國へ參つて、暫時、準備をかためては何うでせう。』

『うむ……。拙者も、さうは考へてゐるが、何かにつけ、船で往來することが、後々不便になりはしまいか。』

『然し、九州も、中國も、たんとは違はない。北陸もよいが、地勢が片寄りすぎる、何かの便宜は、却つて、四國がよろしいのではござるまいか。』

『さう決めるとなると、誰ぞ、京都か大阪に在つて、絕えず、江戶と西國との聯絡をとる者がなければならぬが。』

それ迄、默然としてゐた小五郎が、

『關根殿、その役は、及ばずながらこの小五郎が勤めませう。』

『貴公が？　……』と、考へて、

『誰よりも、貴公の身が、いちばん危いのだ、上方にゐる事は難かしからう。』

『それ位な事は、勤めるのが拙者の御恩返し、又、危險は、何處にもつき纏ふことです、この身に、御不足なくば。』

『不足どころか、願つてもない事だ、上方に居て下さるなら、御室の一鈴寺か、大阪は御影の心音院、この二ヶ所の者は、われ等の黨人、それへ身を隱して、以後萬端の手筈、すゝめて戴きたい。』

『承知いたしました。屹度、勤めませう、お案じなく、四國へ御退き下さいまし。』

月夜野の宿場で、千人組同心のさしもの捕物陣を蹴ちらして、この山ふかくへ、一同して血路をやぶつて退いた虛無僧たちは、やがて、一足後から、路傍の噂を聞いて裸馬をとばして來た旗屋小五郎とも出會つて、この星の下に、將來の方針を決める評議の圓座を作つてゐたのだつた。

關根嘯々を初め、こゝにゐる虛無僧はすべて、世を呪ふ叛逆者ではないが、德川幕府そのものに對しては、滿腔の不平と怒を持つて、正義の旗――故鄕和歌山城から遠くない紀之川上流の吉野朝以來の勤王の血を汲んで――機もあらば覆惡の義軍を

興さうとしてゐる者たちだつた。
然し、世は、泰平に狎れすぎてゐる、徳川文化の華は全土の民を痲醉させてゐるのだ。遽に、さういふ呼號に應じて起つ義人は稀れである、絶無ではないが、野にかくれてゐるのだ、關根嘯々が、身を虚無僧の世界に入れて、こゝ多年の苦衷をしてゐることは、いはゆる、野の遺賢をさがすことだつた、志士國士の隱れた者を、奮ひ起たせるに、幾年を費やしたことか、そして、今では彼の秘めたる連判狀の中には、北陸、九州、四國、奥州、いたる所に、その友は出來つゝあつた。

後は、時機だ。

ふけよ暴風雨。

虚無僧群はさう祈る、徳川文化の亂世化だ、人心の動搖をだ、又、自分たちの陰謀の火の手を早める工作をだ。

――暴れろ！　跋扈しろ。

虚無僧は、全國で、幕府を無視した、領主も、代官所も無視した。そして、捕はれゝば、神君家康公から虚無僧に賜はつたといふ『虚無僧御掟目』の箇條をたてにとつて、

（われらは、治外法權の普化派）

と、却つて、捕へた役人を威嚇して來たのだつた。

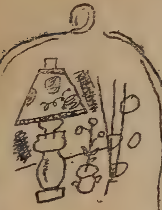
――だが、實は、その『虚無僧御掟目』の實物は、すでに、虚無僧になかつた、江戸城のふかき所――紅葉山文庫に寫しがあるだけだつた――それを奪つておく必要が當然に起つた、そして、誰が、その秘庫の秘文を盗み出したか？

忽然と、江戸城から、その文書が、消えたことは事實である、しかも、今もつて、關根嘯々や、他の虚無僧の手に、それが入つたといふ事は聞かない、下手人も、知れない儘なのである。

それが、端緒になつて、幕府の極端な彈壓は、まづ、手近な乙黒の小菊派の本山から初まつた、こゝに『虚無僧御掟目』の一通が手にあれば、大いに、幕府と鬪へるのだ、全國百六十ケ寺の虚無僧に檄を飛ばして――

もし、その虚無僧百六十ケ寺、その他、各地の風呂所の者、こぞつて起つならば、幕府とも爭へる、だが、それを起たせるには、彼等の利をもつてしなければならない

――欲しいのは、古文虚無僧御掟目だ。あゝ紅葉山から奪りだした――折角奪り出したその御掟目は、一體、誰の手にわたつて、何の用をしてゐるのか。


新版が出來ました
お買物案内
本社代理部の商品目録
お買物は何でも優秀品を特に廉價に而も親切迅速に御奉仕する本社代理部へお申付け下さい。（美しいお買物案内カタログ代理部宛お申込次第無代進呈）

……そんな話題も、今夜は出た。

『要するに、失敗だ、敗れたのだ、一時、陣を退いて、出直すほかはない。』

かういふのが、關根嘯々以下の重なる者の意見で、一時、嘯々と腹心の者は四國へ潜伏し、旗屋小五郎は近畿にあつて、再擧の聯絡をとらうと決まつた。

さう、話がついた時だつた。

『御一同つ。』

呶鳴りながら、見張に立つてゐた一人が、のめるやうに、駈けて來て、

『人が來たつ。』

告げると、すぐ、

おそろしい迅さだつた、ばた／＼つと、焚火を踏み消して、

『では。』

『では――』

忙しない中の目禮を交すと、今宵かぎりに、散々になる約束であつたのだらう、白い蛾が散るやうに、思ひ／＼の方角へ別れてしまつた。

まろぶ鞠

――一足後。

まだ、踏み消した焚火の燃えのこりが、風の中でチラチラしてゐる。

『なんぢや、山賊でも居たのか。』

太郎兵衞爺やは、そこへ來て、呟いた。

あたりを見廻してゐた音羽が、

『おや。』

一つの天蓋を拾つた。

『――虚無僧のですよ、爺や。』

『虛無僧にしては、あんなに多勢、集つてゐるのはをかしい。』

『いゝえ、ゆふべも、月夜野の宿場では、何十人といふ虛無僧と、千人組同心との烈しい斬合ひがあつたさうです。……もしや、その中に、小五郎樣がゐたのではあるまいか。』

拾つた天蓋の主が、何となく、それらしく思へてならない。

音羽は、離しともないやうに、見入つてゐた。

『捨てゝしまはつしやれ。』

爺やは、捥ぎ奪つて、

『御未練。』と云つた。

『――それよりは、今夜の旅籠ぢや、每晩、野宿もよわりますだ。』

『步きませう、灯りの見つかる迄。』

その夜――次の夜――何處で送つたかこの二人は、やがて、八王子の町に三日目に姿を見せた。

もとより、こゝは越生四方太の膝下、油斷は、毛ほどもならない土地だ。

然し、爺やの姿を誰知る者はなかつた、あるとすれば、大久保彥六だけである、その彥六を初め旗本仲間も、越生四方太も、もう例の千人組屋敷の城廓へひきあげて來てゐるらしい、これは、爺やが、孫太郎虫を賣りながら、町で探つて來た事だつた。

たゞ、お藤の樣子だけが、皆目知れない、わるくしたら、殺されたのではないか、と案じてゐると、

『お孃樣、明日ぢや。』

と、行商から歸つて來た爺やが、旅籠の一間で、息をこらして、囁いた。

寢られぬほどな昂奮に夜を明かして、次の日、まだ、朝立の旅人も少いうちに、二人は、八王子の町を出て、遠く、田無の雜木並木に、影をひそめて、軈て來るものを待つてゐた。

――軈て來るもの、それは、八王子同心の一列に圍まれた軍鶏籠と、その側につき添ふ、大久保彥六、酒井左門次、三輪又之丞などの旗本の四名。

『お孃樣は、わしが、聲をかける迄、決して手出しをしてならねえだ、よしか。』

爺やは、嚴しい眼で云つた。

『え。』

頷いたものゝ、音羽は、不安であつた。

『よしか。』

爺やは、念を押した。

諄いほど、

そのうちに、來たつと、爺やが云ふ。音羽が、雜木並木の蔭から、伸び上つてみると、成程、笠の列――そして十數名の刀の鞘――軍鶏籠はその中に圍まれてゐる。

音羽の胸を突いて、

『さ、さ、隠れて居さつしやれ、かけがへのねえお體ぢや、爺やの、合圖がないうちに、滅多に、手出しはなさらぬこつてございますぞ。』

悲壯な決心が、太郎兵衛爺やの面にあふれてゐる、老先きの短い者の覺悟は、壯年の者の覺悟と又ちがつてすさまじかつた、死花と思つてゐるのである。

音羽は、灌木の葉を被つて、身を沈めた、もう、草鞋の足なみが聞える、爺やは、道中差に、唾をくれてゐた。巨きな樹蔭に、ひつたりと、體を貼りつけて――。

『彦六。』

――左門次の聲だ。

雜談を交しながら、旗本組は不行儀にあるいてゐた。

『なんぢや。』

『江戸へ入るのは、ちと、不面目だな、七名の道づれが、四名に減つて、しかも、搦めて歸るのは、女一人だ。』

『やむを得ないさ。然し、これで吾々が、引揚げるといふわけぢやなし、お藤を、代官所へ渡したら、すぐ又、旗屋小五郎と、音羽を召捕る爲に、發足するのだ。』

『したが、お藤の强情さには、手を燒いた、どうしても、實を吐かん。』

『なあに、白洲にすゑれば、いやでも、泥を吐くものだ、拷問といふ手もあるし。』

何氣なく、行列はそこを半分まで通り越したのである、何氣なく、三輪又之丞が、横を振り向いた、木蔭にゐる爺やの白い眼と、視線がかち合つた。

『やつッ!』

叫ぶと、

『なんだ。』

彦六も、左門次も、うろたへた。――だッと、その眼先へ、爺やが、脇差をふりかぶつて、ぶつかつて來たのである、軍鷄籠の側へ向つて、

『お藤さん、救ひに來たつ。』

彦六は、仰天して、

『こいつだつ! 八百屋の太郎兵衛は。』

『なにつ。』

同時に――

『曲者だつ。』

駕の者は、駕を地へ抛りだした、八王子同心の面々は、素破つと、駈け集まつた、爺やは、死にもの狂ひに、

『お藤さん、駕を、切りやぶれつ。』

その覗き窓へ、匕首を、投げ入れようとした、お藤の奪れた

顔が、ハッとしたやうに、そこに見えたが、匕首は、屆かなかつた、側から、同心が、捥ぎ取つて、投げすてた。

『畜生つ。』

蹴仆して、爺やは、一太刀、同心の背へあびせた、この老爺の怪力は、彦六が曾つて出會つてよく知つてゐるところだつた。一太刀で、斬られた者は、うごきもしなかつた。

『油斷するなつ。』

その爲に、彦六は、同僚の者へ、大聲で注意を投げてゐた。爺やの刀は、若い者も及ばないやうに烈々としてゐた。けれど、所詮、軍鷄籠のそばへも寄りつけないのである、一人と、約二十名の差だつた。

お藤は、自分を救ひに來た者があることを知つて、軍鷄籠のうちで、眼をかゞやかせてゐたが、この數日、生命がけで、肌身に秘して持ちこたへてゐた鞠を、今ぞ――と思つたらしく、籠の切窓から、ぽーんと、外へ抛つた。

『おつ。』

爺やは、それへ、手を伸ばした。彦六が、眼ばやく見て、

『鞠だつ。』

と、爺やの腰を、大刀で撲り下ろすと、それを、交さうとして、爺やは、前へのめつた、鞠は、多勢の足に、蹴られ、踏まれて、刀の下をころがつてゆく。

――忘れたのか、爺やは、斬り立てられて、逃げ廻りながらも、容易に、音羽へ合圖の聲をかけないのである、音羽は、それを待ちきれなかつた――鞠も鞠であるが――何よりは傷ましいお藤の青白い横顔を見ては。

遂ゝく、彼女は、

『お藤さん、音羽ですよ。』

われを忘れたかのやうに、軍鷄籠へ、駈け寄つた。爺やを追ふのに氣をとられてゐて、幸にも、そこは手薄だつた、小脇差を拔くよりはやく、駕を、切り破つて、彼女の手をとつた。

『お！……』と、云ふのみで、お藤は、聲も出ないのである、音羽に、抱きしめられて、感激にふるへてゐた。

『約束です、さつ、逃げませう。』

走つた！　田無街道を、まろぶやうに――

だが、だが、何といふ運の惡さよ、その時、彼方から逞ましい黒駒に乘つて來る傲岸な侍があつた、この日、後から江戸表へ出ることになつてゐた越生四方太である。

『……あつ。』

兩女が、立ち竦むと、四方太も、

『又しても、音羽め――』

呟いて、鞍のうへから、殺伐な眼を、凝と、兩女のはうへ射向けた。

――續く――

短篇講談

馬術の妙

神田愛山

上州高崎の城主松平右京大夫の家來に赤尾大之進といふ者が居りました。江戸詰の武士で、淺草橋場の屋敷に居りましたが、馬術が中々の上手、人から巧い〳〵といはれるので、慢心したものか、常に人の中へ出ると、自分の馬術を自慢をして居りました。

五月のことで、毎日々々雨が降りつゞいて、それが歇んだと思ふと、一時に出水、諸方の山水が一度に川へ落ちて來ましたから、隅田川は濁流滔々と渦を巻き、物凄い勢ひで押し流れて居ります。同藩の武士達が、

○『どうだ赤尾、いくら貴公が馬の上手でも、此の隅田川の濁流を馬で乗切ることは出來まい』

大『ナニツ、もう一遍いつて見ろ』

○『いくら貴公が馬の上手でも、この隅田川の濁流を乗切ることは出來まいといふのだ』

大『怪しからんこ[illegible]をいふな、出來まいとは何だ。馬術者といふものは、只馬に乗るばかりが術ではない。只馬に乗るのなら、百姓の子供でも出來る、斯ういふ濁流滔々と押し流れてゐる中を乗切るのが、馬術の妙といふものだ』

○『そんならこれを乗切ることが出來るか』

大『出來るかとは何だ、望みとあらば、貴公達に拙者の馬術のほどを見せてやらうか』

○『あゝ見たいな』

大『見たいといふことがあるか、拝見を願ひたいと兩手を仕いていふなら拝見をさせてやる』

他の家來達癪にさはつたが、この濁流が乗切れるものではない。失敗する顔が見たいと思ふから、

○『それでは拝見を願ひたい』

大『よし〳〵、拜見をさせてやるから一緒に來い』

赤尾大之進、自慢の栗毛の馬に乘つて、隅田川の縁へ出て來た。濁流は滔々と渦を卷いて、ゴーゴーツと物凄い音を立てて居ります。

大『サアよいか』

トツ〳〵トツ〳〵一度地乘をかけてゐましたが、馬に水の面を二、三度見せて置いて、ザブーン飛込んだ。

『ソレ飛込んだ』といふ内に赤尾大之進は、幾度か馬の足を水の爲に取られようとするのを、巧みに手綱をさばいて、見事その濁流を乘切つて、彼方の岸へ着きました。

『ワーツ、乘つたりや、乘つたり』『見事々々』と一同の賞める聲。

『よしツ、もう一度引返して、驚かしてくれよう』と又ドブーンと飛込んだ。又々手綱さばきも鮮やかに、この濁流を乘切つて、元の岸へ引返して來た。ドツと上がる賞讚の聲。

○『どうも赤尾、恐れ入つた。流石自慢をするだけあつて、見事な馬術』

大『どうだ、恐れ入つたか』

○『全く恐れ入つた』

大『貴公達の前だがな、昔源平の戰ひの時、佐々木高綱、梶原源太が、宇治川先陣の爭ひをして、功名を現したといふが、何もあんなことは、歷史に殘すほどのことではない。この大之進ならば朝飯前のことだ。あの宇治川の戰ひの時に、拙者がゐなかつたのが殘念だ。拙者がゐたら、佐々木、梶原をして、顏色なからしめたのだが、惜しいことをした。先づ當代日本に於て、馬術の名人といふのは拙者

だらうな』

平常でも自慢をする赤尾大之進、大勢に賞めらるゝ儘に、鼻息荒く高言を拂つた。

と、この事を聞いた同藩の大川但馬といふ老人が、

但『アハヽヽヽ、自慢高慢馬鹿の中といふが、井の中の蛙大海を知らず、彼は匹夫の勇である』と口を極めて嘲つた。これを聞傳へた赤尾大之進、眞赤になつて怒つた。但馬の詰所へ押しかけて來て、

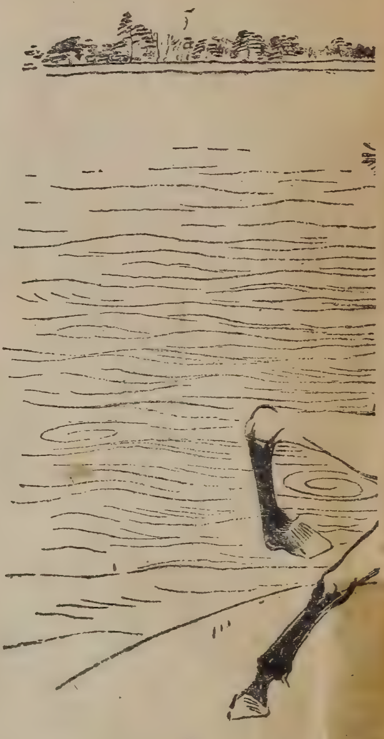
大『コレ但馬、貴公拙者のことを、井の中の蛙大海を知らず、匹夫の勇だといつたさうだが、何で匹夫の勇だ』

但『されば、貴公は隅田川といふ溝を乗切つたさうだな』

大『溝……溝とは何だ、諸方の山々の水、一度に落ちて濁水滔々たる隅田川、物凄い川だ』

但『假令物凄くとも、高の知れた隅田川を馬で乗切つて、佐々木、梶原の宇治川の功名を嘲り、大層自分の馬術の自慢をしたさうだ。それだから匹夫の勇といつたのだ』

大『いかにも、宇治川の先陣争ひの如きことは誰にでも出來る。拙者があの時ゐたら、佐々木、梶原を顔色なからしめるといつたが、それが何で匹夫の勇だ』



但『それを聞きたいといふのか、それなら話しをするより、先づ實地に就て敎へて遣はさう。明日もう一度隅田川へ行つて、馬であの川を乗切つて見なさい』

大『おゝ心得た、見せろといふなら乗切つて見せる、もし乗切つたら何とする』

但『見事拙者の見てゐる前で、隅田川を乗切つたら、拙者は主君より御暇を頂き、改めて貴公の家來になり、日本に於ける馬術の名人と仰ぐ』

大『ウーム申したな、よしツ、明日拙者の馬術のほどを見せてやるから、驚くな』

但『おゝ、見事乗切つて見せろ』

大『乗切らいで何といたす』

言葉を番へてその日は別れました。

その翌日、約束の通り大之進は、例の

自慢の栗毛に乗つて、隅田川の川縁へ出て來た。昨日にもまさる水嵩、濁流は何物をも巻込まん勢ひで、物凄い音を立てて流れて居ります。

大『よいか大川、見て居れツ』といふと、ザンブとばかり水中に飛込んだ。渦巻く水を横切つて、いま川の中ほどまで進んだ時に、川端に控へてゐた大川但馬、持つたる扇子を颯と開いて、二三度打振ると、這は幵もいかに、赤尾大之進が進んで行く川の向ふ岸、土手の邊りに一度に現はれたる武士四五十人、手に〳〵弓を握り、持つたる矢を弓に番へると、キリ〳〵キリと滿月の如くに彎きしぼり、『ヤア〳〵赤尾大之進、汝川を横切つて來るからは、この矢を以て一度に射て落すぞ、ならば吾々の矢を切り拂つて、此方の岸へ上つて見ろ、ソレ矢を放つぞ、射掛けるぞ』

と口々に罵しりながら、今にも矢を切つて放たんとする様子、之を見て驚いた大之進、

大『コレツ、馬鹿な眞似をするな。何で矢などを射る、待て〳〵』

といつたが聞かばこそ、

○『ソレ吾々の矢が飛んで行くぞ、此方の岸へ來て見ろ、ソレ射るぞ、放つぞ』とどなつてゐる。

その内に氣早の若侍達五六人、兵弗つり切つて放つたから、矢はビユーツ、ビユーツと風を切つて飛んで來る。

大『コレ何で矢を射る。待て、コレ待て』といつたが、矢は續いて飛んで來る。

赤尾大之進おそろしくなつて、馬を進めることができない。致し方なく馬の頭を返し、顔の色を變へて、元の岸へ引返して來た。之を見てカラ〳〵と笑つた大川但馬、

但『どうだ赤尾、見事川を乘切れたか』

大『イヤ馬鹿者共が矢を射るので、渡ることが出來ぬ』

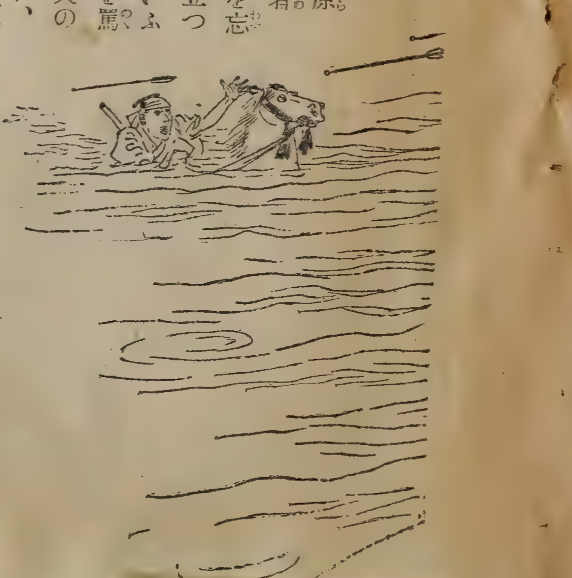
但『馬鹿者共ではない、あれは敵の兵だ』

大『敵の兵……』

但『まだ分らぬか、あれは皆當家の若侍達、拙者と打合せて、先に彼方の岸に廻つてゐて矢を放たしたのだ。赤尾、佐々木、梶原は、宇治川を渡つた時、只水をザブ〳〵渡つたのではないぞ。向ふには敵の軍勢が、弓に矢を番へて待つてゐたのだ。それを打拂ひ〳〵乘切つたから、他の者には出來ぬ先陣の功名といふのだ。貴公は何だ、僅か五六人の者が放つた矢を拂ふことも出來ず、青くなつて引返して來たではないか、そんなことで佐々木、梶原の眞似が出來るか。武士たる者は、常に向ふに敵のゐることを忘れては、いざといふ時、役に立つ働らきは出來ぬものだ。さういふことも心得なく、徒らに英雄を罵しり、乘切などをするから匹夫の勇と申したのだ、貴公のやうに、只馬に乘るだけなら、百姓の子供でも出來る、以來はあまり自慢をなさらぬがよい、アハヽヽヽ』

と笑つたので、赤尾大之進眞赤になつて、コソ〳〵と屋敷へ逃げて歸つた。大川但馬は、赤尾大之進の自慢を心憎く思つて、他の若侍達と申し合せて、謀つて大之進を懲らしめたのであります。

それ以來大之進は飜然と悟る所がありまして、自慢はいはず、一意馬術に鍛錬して、適れ一流の馬術者になつたといふことであります。（をはり）



さしゑ＝近藤紫雲

山中峯太郎先生の熱著
軍事探偵小説『大陸非常線』益々大評判
上海事變に勇名を馳せた、故林大八聯隊長が青年將校の時、軍事探偵の重大任務を帶びて、滿蒙から遠くシベリヤに入り込み大活躍をする物語と、上海事變當時の輝やく武勳の物語、國民は何人も感激の涙なくして讀めません。
定價一圓三十錢　送料十二錢　本社發行

映畫繪讀本
P・C・Lの細川ちか子は、同じ社の宇留木浩の姉だが
なに
なつたつて
年齢
り
あの子がどん偉く
わたしよが上になれつこはないと安心してゐるとか？
大震災の翌日
小石で怪我した足指をゆはいて貰つた少女と、今その青年とは一緒に居る蒲田の若水絹子と小石榮一監督です。
若水曰く「つまづく石も緣のはしとは至言ね。」
大正12年
林長二郎がはじめて映畫界へ出る時、各方面へ配つたのは、御挨拶狀五万通、素顏のプロマイド五万枚、手拭七万筋、寫眞アルバム三万冊……。ああ草臥れた。おかげ蔭で宣傳費が三万圓もかかつちまつたア。
30000
YEN
達チン顏で通つてゐる蒲田の齋藤達雄は、シンガポールのコンナム・フイルム社で「ステマドル」に出たのが、映畫界への初登場。そして日本のトーキーで、本物のマレイ語を喋つたのは彼より外にゐない。
池田義信監督が「母の愛」で鵞毛を入れた雪を降らせたらこの雪代に五百二十圓かかつた
たつた一體世界中の本物の雪はいくらかかるんだらう？
雪
蒲田の五所平之助監督を表立つて呼ぶと豫備陸軍步兵少尉五所平右衞門殿。

寫眞上より林長二郎・山路ふみ子・グレタ・ガルボ・水ノ江瀧子・草笛美子

映畫レビュー話の種

鶴見退助

（寫眞は高田稔）

スターの努力

十五周年を迎へた松竹蒲田映畫も、いよいよ今秋でそのレッテルを變更し、松竹大船映畫となるが、この十五年間に送り出したスターの數は夥しい。その中には功なり名とげて大幹部となつてファン憧憬の的となつてゐるスターもあれば、不幸にも沒落してその行衞さへ解らぬものもある。

『一體、スターになるには、何が一番必要なことであるか――』

と、云へば、蒲田の最古參監督として、創立以來の名匠と云はれる池田義信監督は、

『容貌と才能さへあれば、一躍スターになれるやうに世間の人々は考へてゐるが、僕は努力の二字が最も大切だと思ふ。努力なくしてスターの地位にのぼつたものは必ず沒落しますよ。例へば、撮影集合の時間に一秒も遲れないやうに努力する俳優は、その容貌や才能を補つて立派に成功します。』

と、しみじみ語つてゐる。

宜なる哉――現在、蒲田俳優の最高の地位を獲得してゐる栗島すみ子、田中絹代、飯田蝶子の三大スターは、共に百十數本の大小映畫に出演し、共に一千數百回の撮影集合を命ぜられたが、たゞの一度も時間に遲れたことがない。高級をとり、名聲が上ると、つい心が驕るが、田中絹代の如きは、撮影集合の時間前に、扮裝をこらし、入念に準備して、靜かに待つてゐるのが常だ。その努力たるや、まさに驚嘆に値する。

今や第二の田中絹代と稱されてゐる高杉早苗は、新進女優六十餘名中、たゞの一度も撮影集合時間に遲れたことがない。飯田蝶子は殊の外に高杉を可愛がつて、

『高杉さんは、大船に行つたら、きつと大船を代表する女優になりますよ』

と、その努力を推賞してゐる。

罰金契約

日活のケンゲキ王大河内傳次郎は、最近主治醫から、あの獨得の濁り氣味の臺詞には、煙草が有害であると聞かされ、斷然、チョコレート黨になつてしまつた。丁度日活の京都撮影所長池永和央氏も主治醫から禁煙を申渡されたので、兩人、紳士協約を結び、

『この規約を破つた場合は、直ちに罰金として池長所長は、大河内が欲しがつてゐる、獨逸製の精巧極まるライカ（寫眞機）を進呈し、大河内は一ケ月分の給料、即ち五千五百圓也を進呈する。』といふ約束になつた。大部屋連中、びつくりして、この勝負、如何にと注目してゐる。流石に天下の大スターと青年撮影所長だけあつて、その罰金もチトでかい――といふ評判である。

スターの道樂、かくし藝

現代劇のスターで、誰れが一番月給を取つてゐるか――といふと、日活のスター岡讓二である。ひと頃の鈴木傳明、中野英治、故岡田時彥は、各〻一千圓也の月給取りだつたが現在一千圓の月給をとつてゐるのは、岡讓二たゞ一人である。彼は一寸、常設館に御挨拶に出ても百五十圓位とる。だからその月收は一千五百圓を下らない。

この收入の大半は、服裝に使ふ。と、云ふのは、岡は映畫界切つてのお洒落れで、ネクタイと靴下とワイシヤツは、毎日變つたものにとりかへる。洋服と靴は三日置きに變へる。

『我々のやうな俳優――殊にその影だけを賣つてゐる映畫俳優は、不斷の服裝が大切ですよ。新らしい感覺は、この服裝の中から生れます。』と、彼は斷じてゐる。

最近、映畫からレコードに進出して氣焔をあげてゐるのは、高田プロの盟主高田稔、日活の杉狂兒、松竹下加茂の高田浩吉である。それ〴〵レコードに、その美聲を吹き込んでゐるが、高田浩吉には、今回『高田浩吉の唄ふ會』といふ後援會が出來上つた。

高杉早苗

彼は所謂流行小唄の外に、澁い江戸前の小唄も上手である。先日、早速、この『唄ふ會』の主催で、神戸聚樂館に現れ、御得意の『大江戸出世小唄』『かごや判官』『やくざの掟』を歌ひ、續いて『赤城の子守唄』をやると、

『いよう！ 東海林太郎そつくり！』

と、賞められ『出船の港』をやると、

『藤原義江そつくり！』

と、聲がかゝつた。更に喜代三得意の『小原節』をやり、勝太郎得意の『島の娘』を鮮にやつてのけたので、フアンの方でびつくりして、

『浩チヤン！ ターキーをやつてくれ！』

と、云へば、高田、ニヤニヤして、水の江瀧子そつくりの身振りで、

『サヨナラ神戸。』

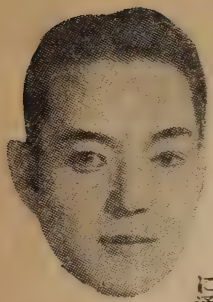
をやつてのけ、大喝采を博したとは、まさに恐るべきスターである。

幸運の女優

P・C・Lの代表的娘型女優と云はれてゐる堤眞佐子はその圓らな双眸と可愛らしいダンゴ鼻とふくよかな頬で、

大河内傳次郎

『西洋人形のやうに可愛らしい。』と、銀幕の人氣者となつてゐるが、その眞佐子孃が嚮頃堂々たるグランドピアノを買入れた。と云つてその豪華振りに驚ろいて、サテハと變なところへ當て推量を持つて行つてはいけない。これは彼女が、一日も缺かさず、聲樂の師匠である松山芳野里氏のもとに通ひつめてゐたことが解つたので、大橋撮影所長や森總務が感心し、『今時、あんな心掛けの女優はない。』『ぢや、ピアノを買つてやらう。』と、云ふことになつて、彼女は幸運にも、大枚二千五百圓也の立派なピアノを會社から買つて貰つたのである。先づ映畫界廣しと雖も彼女程立派なピアノを持つた女優はゐない。



岡讓二

返り咲きの女優

近頃往年の花形女優が銀幕に返り咲いてゐる。梅村蓉子が第一映畫に、環歌子が日活に、五月信子が松竹蒲田に——それ〴〵活躍してゐるが、松竹下加茂の柳咲子も、大いに奮起し、若返り法として毎朝、牛の血を飲んでゐる。この血の出どころは、牛の本場の神戸から、彼女のファンが、咲子の瘦せすぎてゐるのを心配しての贈物である。ファンの贈物にもいろ〳〵あるが、先づ牛の血など珍らしい方の隨一であらう。

堤眞佐子

レビュー界面白話

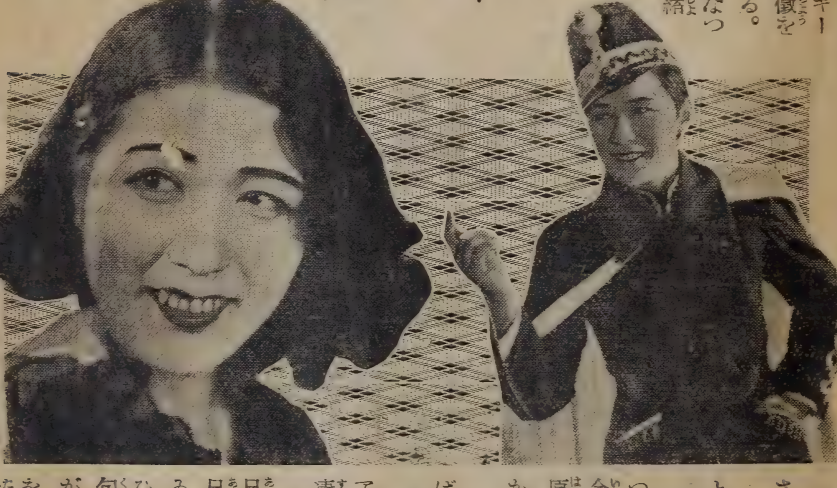
松竹と寶塚のレビューを通じて、最もファンに人氣のあるのは、男裝の少女水の江瀧子、小夜福子、[illegible]原邦子の三人であらう。いづれもそのプロマイドの賣れ高は、他の少女連を壓倒してゐる。

水の江の靴を帝劇の樂屋裏の下駄箱から捜し出した女學生達が、大騒ぎして、爭つてはいて見て、中でピッタリはまつた女學生が、
『あら、あたし、ターキーそつくりよ。』
て、絶叫した話は、餘りにも有名だが、水の江のファンは實に松竹少女歌劇團の女生徒の中に澤山ゐる。或るレビューで、水の江は皆んなからすがりつかれるところで、
『あたし、嬉しい。』
と、本當に皆んなからしがみつかれ、水の江は到頭モミクチヤになつたことがある程だ。踊り手として評判の石上都は、大の水の江ファンで、水の江の家に遊びに來ると、すつかり女房氣取りで、拭き掃除から、臺所の仕事まで一人でやつて嬉々として歸つて行く。

寶塚のプリマ・ドンナとして評判の草笛美子も亦、非常な水の江ファンで、その誕生日に、美しい黑ダイヤの指輪をつくり、
『これを貴女に贈ります。同じもうひとつは、あたし、大切に身につけて舞臺に出ますわ。』
と、手紙に添へて、水の江に贈つた位である。

寶塚の男裝の麗人小夜福子も、暇さへあれば、ターキーの舞臺を見物し、その特徴を捉へて舞臺に生かしてゐる。先日、到頭、たまらなくなつて、仲の良い岡眞砂と一緒に、泊り込んだといふ。

ところが、水の江は小夜福子と草笛美子が大好きで、かゝさずに寶塚レビューを觀に行く。先日、東寶劇場の廊下で、
『あッ！ 水の江だ。』
『ターキーだ！』
と、いふので、忽ち評判になり、ファンが彼女をとり捲いてサインをして貰つたが、それには川路龍子と書いてある。川路は近頃賣り出しの松竹レビューの男裝の少女である。すつかり水の江と間違へられたので、川路、苦笑して、
『と、とても水の江さんには敵はない。』
と、悲鳴をあげたといふ。


（寫眞向つて右水の江、左葦原）

寶塚の人氣を背負つて立つと云はれる今が人氣の絶頂の葦原邦子は、全女學生から、『兄貴！』
と、いふ愛稱で呼ばはれてゐる。この『兄貴』に對するファンの聲援はまた物凄い。
『兄貴――あたしの兄貴、あたしは今、兄貴のことで震へてゐます。』と、いふ揃ひも揃つた、同じ文句のファンレターが、一日に百二十通を下らぬといふから大變なもの。

レビュー豪華物語

平尾郁次

（寫眞は寶塚スター葦原邦子）

『絢爛』『豪華』といふ言葉は『レビュー』と同意語である。そして、何んと云つても最も絢爛を極め、豪華を誇るものはそのフイナーレ（最終場面）であるが、先づ話の順序として、一體『寶塚』にしても『松竹』にしても、一つのレビュー作品にどの位の金高を費すものか。といふと、大約十萬圓である。竟り一つのレビュー作品が十萬圓前後で出來上るなら、興行者側にとつてこれが三十日間の公演、入場料二圓で充分儲かるのである。

處が、レビューといふ奴は金をかけ初めたら、てんで止め度がないもので、松竹レビューが淺草松竹座から初めて東劇に本城を移しての第一回公演『ラヴ・パレード』の製作費が驚く勿れ四十萬圓を鐚一文も缺してゐなかつた。この『ラヴ・パレード』が實はこれ迄の松竹レビュー中での最大製作費を要したもので何にしろこの時のプロローグ（序幕）に使用したフリッテルのカーテン一枚が一萬五千圓だつた。『フリッテル』といふのはレビュー製作者の術語で、『スパンコール』と云つた方が判りが早いかも知れない。よく佛蘭西の派手好きな婦人達が夜會服に着てゐるピカピカ光つたあの裂地である。この贅澤なフリッテルの一枚カーテンなどは一寸外國のレビュー作品だつてさうザラには用ひられてゐまい。

また歌舞伎座で松竹レビューが『タンゴ・ローザ』を公演した時『五萬圓の微風』として大宣傳もし、話題にもなつた六本の羽根扇。あの羽根扇は、正に宣傳通りフランスから特に輸入したもので、この價格五萬圓は少々大

袈裟だが、掛値のないところ一本二千圓だから、扇、六本で一萬二千圓となる譯で、これでも仲々豪勢な扇だつたものだ。

衣裳にもいろいろな豪華物語は傳へられてゐるが、先づターキーだとかオリエだとか、葦原邦子、小夜福子だとかピカ一スターの衣裳で、普通一着二百圓から三百圓がところと睨んで先づ先づ間違ひつこはない。然し、寶塚の『トウランドット姫』だとか松竹の『眞夏の夜の夢』だとかいふコスチユーム・プレイになるとこれが約三倍から四倍になるもので、衣裳費が一番嵩んだレビュー作品は松竹では『眞夏の夜の夢』で五萬圓、寶塚は『トウランドット姫』で約同額と見てよからう。

大道具は寶塚の場合、一景一千圓が原則であつて、例へば十八場から構成されてゐるレビユーなら一萬八千圓が、大道具に費はれる勘定になる。大道具で面白い話は、フイナーレの例の階段である。階段を使用しないレビユーのフイナーレが殆んど絶無であるといふのも妙であるが、この階段の段數が多くの場合は十五六段といふのが普通だが、今日迄のところで階段の『豪華版』は寶塚の『トウランドット姫』のフイナーレ、階段が三十二段で寶塚レビューのレコード。松竹レビューでは『ウインナ・ワルツ』のフイナーレで三十六段。この三十六段が從つて日本レビュー作品の『階段中の階段』といふレコード・ホルダーである。尚、餘談だが、レビューの階段の段數といふ奴はきまつてこれが四で割り切れる數であるのも面白い。これは音樂と關係がある譯だが、こゝでは暫らく措くとしよう。

それから、これもフイナーレでの登場人物の頭數『豪華版』は『眞夏の夜の夢』で何んと二百六十五人。これは日本レビュー作品中でのそれこそ空前絶後の偉觀であつた。寶塚にしても松竹にしても最近の作でのフイナーレには百二三十人位の人員が竝んでゐる位のものである。

『眞夏の夜の夢』は、それからもうひとつのレコードを持つてゐる。所演時間のレコードで、何んと二時間五十分。寶塚では白井鐵造氏の近作『マリオネツト』で、これが二時間二十五分である。またこの『マリオネツト』は東京と寶塚とで夫々二ケ月間づつ都合四ケ月に亙る長期興行を打つといふから、曩きに寶塚が上演した『花詩集』とともにレビュー長期興行のこれはレコードである。

なほまた、レビューにはよく船だとか軍艦だとかが舞臺に出てくるが、これ迄のレビユー舞臺に現はれた最も費用を喰つた豪華船は帝劇で上演された松竹の『ポンポ

(六本の豪華な羽根扇)

ン・ルージュ』の船で、これはあの船一ぱいに三千五百圓かゝつてゐる。

東劇レビュー公演中の出火事件以來、近頃でこそ餘り使用されなくなつたが、例の造花も亦、レビュー舞臺には不可分のものであつたが、この造花が一番多く使はれたのは三三年度の松竹『春の踊り』の舞臺で、造花だけが一萬六千*

*圓。これは『ぞうか』と思はれる話として未だにレビュー界の語り草とされて居る。

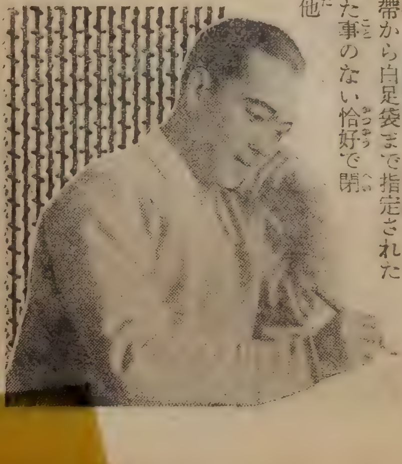
もうひとつ『ベラ・ドンナ』で水の江瀧子が約二時間ぶつ續けで喋舌つたあの科白の長さ、こいつも或る意味での『豪華』を誇つてよいだらう。

寫眞は寶塚歌劇『ウランドット姫』に於ける小夜福子

『腹藝』のこと——岡讓二（日活）

藝道苦心と開きなほるのも少々烏滸がましいが『多情佛心』の時の苦心——あれをよく思ひ出す。自分等の手で協同映畫社を創つての第一回作品だつただけに、一層苦心した譯だが、あの時僕の役は藤代信行だつた。そこで先づ作者の里見弴先生にお目にかかると、そんな洋服なんか着てゐてどうする、先づ『あそび方』から覺えろ。それにはこれ〳〵の羽織、着物と、帶から白足袋まで指定されたものだ。それが今迄にやつた事のない恰好で閉口したがすつかり衣裳その他を調へ、後日改めて先生の試験を受けに行つた。先生はその僕の恰好、着物の着こなし、口の利き方などをぢいつと觀察してゐられたが、やがて、『よし、ではこれから實地教習だ。』

といつて、あつちこつちと引つぱり廻はして下さつた。『腹藝』をしなくてはならない。それには先づ自分の扮してゐる人物に、恰好の上からいつてもはつきりなりきる必要がある。さうして研究して行けば、屹度自から感得するものがある、といふ覺悟が出來た。



（寫眞は原稿執筆中の岡讓二）

SEP

松竹少女歌劇 スターに斯んな綽名がある

細井喜代司

（寫眞上より天草、草間、吉川）

これは内證の話だが、思ひ切つて公開しよう。

先づ第一に天草美登里――その綽名はシャコ、クラゲ、トコロテン、揃つた三つが何れもあんまり嬉しくない。おとなしい美登里孃に何故こんな綽名がついたのか――筆者つく〴〵同情しながら、さてその由來を調べて見ると、彼女はシャコが大嫌ひ、此奴を見ると震へあがり、それでも未だ足りずに變な奇聲を發するさうな。嘘と思ふ者はシャコのお壽司を持つて訪ねて見給へ。次にクラゲとトコロテン――これは彼女の體が細くてグニャ〳〵して居るからだ。罪はないがエゲツない點では正に珍中の珍である。だが美登里孃よ嘆く勿れ、御身はこの柔軟性あればこそ、松竹歌劇の天晴名舞踊家の名を頂いて居るのであるぞ。

お次は藝名草間光子――綽名は何と『ハンニヤ』で御座る。草間光子は人も知る松竹少女歌劇の代表的美人である。何で『般若』に似てようぞ。綽名の依つて起る處正に奇々怪々である。だが仲間の連中曰く『だつて顔の感じがキツイでせう。』『餘り笑はないからよ。』なる程一應理窟はある。

それにしても、あんな可愛い〳〵『般若』なら、森の中で何時でも襲はれて見たいと、勝手に力み返る呑氣者もある。

第三は藝名吉川秀子、綽名は氣の毒ながら澤山ある。『お秀』『出目金』『おばあちやん』等々。お秀は言ふまでもなく秀子から來てゐるが、スターの中で最年長者？の吉川を『お秀』と呼び捨てにする處に、茶目氣分の和やかさがある。出目金は御存知の目玉をむいた金魚ではない、彼女の目がこれにそつくりださうな。（筆者が言ふのではない、仲間の女生徒が言ふのである。）

これ〳〵餘り側で覗くと食ひつかれるぞ――話は段段隆盛になつて來たが、最後の『おばあちやん』が更に申譯ない。何となく『おばあちやん』の感じがすると言ふのだ。でも秀子孃よ、決して泣くでない、人を恨むでない、それは御身の顔から來る感じでなく、その溫厚な、そして後輩をやさしく指導する『おばあちやん』らしい溫情から來る愛稱なのである。

松竹東寶レビュー合戰

田代富士男

現代女學生の一ケ月のお小遣ひは、金五圓也が相場である。

その中の半分、即ち二圓五十錢は、大衆娯樂の尖端を行くレヴューと映畫に費される。

と、見做して

『一人の女學生から、二圓五十錢を吐き出させよ！』

と、いふスローガン(?)の下に、東寶の小林一三氏は、關西から東京に進出して來た。

一年半位の間に、その中心勢力たる寶塚少女歌劇を東寶劇場に、映畫の封切場を日比谷映畫劇場と日本劇場と銀映座とし、更に東寶小劇場には講談、落語、漫談を上演し、更に進んで有樂座をつくつて、芝居と東寶ヴアラエテイと稱する大衆劇を上演して、俄然、興行王國たる松竹に挑戰してゐる。

今のところ歌舞伎座、明治座、東京劇場、第一劇場等の大劇場を手中にをさめ、歌舞伎、新派の名優連を殆んど全部抱へてゐる松竹には、芝居で喧嘩しても齒が立たない。

また、最近、小林氏は秦豐吉支配人を歐米に派遣して、外國映畫の直接買ひつけを行つて、やすく映畫を買ひ、やすく映畫を觀せようとする案を實行しようとしてゐるが、映畫の方も全國に八百の常設館を有する松竹とは競爭にはならない。しかし、その興行方法は、松竹の度ぎもを拔くやうな新案を實行するので、近き將來には芝居でも映畫でも、東寶は松竹の一大敵國であらう。

現在、松竹と東寶が火花を散らして戰つてゐるのは、レヴューである。

東寶は、レヴューでは寶塚で入浴の傍ら五錢で少女歌劇を見せた時代から二十有餘年間、ずつと續けてやつて來たゞけに、大きな地盤と熱烈なフアンを持つてゐて、松竹レヴューに一指も染めさせまいと我ン張つてゐる。しかし、松竹とても、既に東京を地盤として、十餘年間年季を入れてゐるので、

『贅六に負けては、江戸ツ子の意地がたゝぬ。』

と、意氣込んでゐるので、その對立戰は最

近に至つていよ／＼猛烈になつて來た。

寶塚少女歌劇の特徴は、少女趣味の一言につき、その主題歌と舞踊を中心とするレヴユーは、甘悲しい女學生向きのものだ。これに寶塚獨特のオトギ歌劇と歌舞伎の所作事（舞踊劇）を洋樂化したもの、三つが常にその出し物となつてゐる。外國で評判になつた映畫やレヴユーを直ぐに眞似ることも上手である。

これに反して、松竹少女歌劇團は、大人趣味が餘程利いてゐて芝居がかつた出し物が多く、寶塚よりはエロ味が多く、色彩が濃厚である。しかし、松竹では、最近、

『松竹レヴユー』

と、いふ文字を使用されることを極度に嫌つてゐる。と、云ふのは、レヴユー本來は大人くさく、少女向きでないからで、少女歌劇と改名（?）したのも、實は松竹と雖も、そのフアン層の大半は女性であり、然もうら若い人人ばかりであるからだ。

東寶も松竹も、その出し物には非常に念を入れ、常に相手方のレヴユーの初日には、兩方の重役連が、こつそり見物に行つて研究すると云ふ位。

『よし！　今度はあれを、ひとつ、眞似てやらう。』

と、云ふことになつて、松竹は寶塚式の甘悲しいレヴユーを眞似るし、東寶はまた松竹式の芝居がかつたレヴユーを眞似る。まるでいたちごつこをして

三浦時子

閉口したジンヂャー・ロヂャース

アール・ケー・オー社の人氣女優ジンヂャー・ロヂャースは『コンチネンタル』『ロバータ』等で、最近我國でも壓倒的人氣者となつてゐるが、米國での人氣はまた一段と物凄い。彼女は日に平均三百八十通のフアン・レターを貰ふが、その全部が揃ひも揃つて男性フアンからで、『どうぞ、僕と結婚してくれ！』といふ猛烈なラヴ・レターである。中で最も手廻しのいゝのは、

『僕と結婚する意志があるなら同封してある手紙に、サインだけして送つてくれ。』と、ある。

その同封の手紙には、『貴君の毎日下さつた御手紙はあたしを感激させ、遂ひに惱ましてゐます。あたしは貴君のことを思ふと夜もロク／＼寢られません。一日も早く結婚したいのです。云々。』と、印刷してあつたので、流石のロヂャースも開いた口が塞がらなかつた。

ゐるやうな存在である。

松竹少女歌劇の男裝の麗人として、芝居、映畫、レヴュー界を通じて、その人氣の點では日本一と云はれてゐる水の江瀧子が、男と少しも變らぬ斷髮をしてゐるのを見て、寶塚の男裝役者たる葦原邦子、小夜福子等は、忽ちその黑髮を斷つてしまつたのは有名な話だ。

また、三浦時子、橘薫といふ寶塚の唄のコンビに對抗して、松竹が江戸川蘭子、井草鈴子のコンビをつくり、大いに氣勢をあげてゐる。一歩も讓らじと競爭する兩少女歌劇の頑張りが自然互ひの進歩となつて、唄に踊りに、メキ／＼と磨きがかけられて行く。

寶塚少女歌劇の强味は、女學生間に驚くべきファンを持つてゐることだ。

橘薫

東寶劇場では、人氣スターの後援會をつくらせない。無理に前賣りキップを押しつけなく共每月二萬枚は完全に前賣りで賣れる。『憂愁夫人』のやうな傑作が上演されると、この固定の女學生ファンが、必ず三度位觀に來る。即ち六萬枚賣れる。こんな時は、東寶は四千人劇場なので、二十五日の興行として、十萬枚の中、四萬枚を普通の客に賣ればいゝので、その興行法は非常に樂である。

（江戸川蘭子）

これに引き換へ松竹のファンは、女學生が案外に少く、若い職業婦人が多い、最も多いのはデパートのショップ・ガールと女給やダンサーである。某デパートのショップ・ガールは、競爭で松竹レヴューのキップを賣り、店を休んで、競爭したので、遂ひに馘首問題が起きた程である。即ち松竹の方は、水の江瀧子、小倉みね子等の大スターは申すに及ばず、川路龍子、紅十六級の中堅スターまで、各〻後援會を持つてゐて、キップを責任をもつて賣りさばく。ターキーは、最も後援會が多く、ひ

と興行で少い時で六千枚、多い時で二萬枚のキップを賣るといふから大いしたものである。それに松竹レヴューの强味は、少女一點張りの寶塚に比して、中學生や大學生、中年の會社員等にファンを多く持つてゐることだ。

『ターキー、日本一ッ！』

『オリエー、大統領ッ！』

と、いふかけ聲は、喧々ごう〳〵として、松竹レヴューを賑はす。これは大抵、男性ファンのかけ聲である。しかし、松竹では最近、これを非常に厭つて、

熱海芳枝

『かけ聲は何うぞ御遠慮下さい。拍手だけお願ひします。』

と、幕合ひ毎に、マイクロフォンで懇願してゐる。

と、云ふのは、寶塚を眞似てゐるからだ。寶塚レヴューでは、葦原邦子とか、小夜福子とか、天津乙女とか、奈良美也子とか、草笛美子とか――その人氣を一身に集めてゐるやうな大スターが舞臺に出ても、決してかけ聲がかゝらない。かけ聲の替りに、萬雷の如き拍手が捲き起る。葦原が始めて舞臺に現れる時など、

小倉みね子

何が爲めに、かゝる大拍手が捲き起るか、不思議に思ふ位である。それ程、寶塚のファンは、美しく整然たるものだ。松竹が何ンとかして、この拍手だけを頂きたいものだと願つてゐるのも宜なるかなだ。

一言にして云へば、寶塚は上品であり、松竹は砕けてゐる――とも云へる。しかし、寶塚の上品さには、愛嬌が乏しく、松竹のくだけた所には、大衆に親しみを感じさせる。ここに兩レヴューの一特徴が、はつきりと現れ

てゐる。

寶塚は、最近、相當のエロ味をとり入れ、松竹のフアンたる職業婦人や中學生や中年會社員を吸收しようとして、非常な努力を續けてゐる。松竹はまた反對に女學生のフアンを迎へようとして、諸事に嚴[illegible]にしようとして一生懸命になつてゐる。その爲めには、先づ水の江、津阪、小倉、熱海、江戸川その他評判のスターには、松竹公演以外の興行に出演させることを厭ひ、如何なる情實があらうと近頃は絶對にそれを禁止しようとしてゐる。

松竹が各スターの後援會に賴つて、大宣傳を試みてゐるのに反し、寶塚は新聞廣告に全力をそゝいでゐる。寶塚が唯一の宣傳虎の巻としてゐるのは、東京全市の女學校在學生の名簿と、卒業生の名簿である。公演毎にこれ等の女性連に挨拶状を出してゐる。最近、東寶入りした某演出家は、十日間もこの宛名ばかり書かされて、

『[illegible]の表書きとは情けない。』と、嘆じた話がある位——實に丹念に調べあげてゐる。目下は青柳有美氏が總大將となつて、この挨拶状書きをやつてゐる。

（奈良美也子）

寶塚のフアンは、個人的のスター、例へば葦原とか、小夜とか——といふやうな人氣スターに固執してゐないとは云へないが、大體に於いて、レヴューそのものを樂しませる。その主題歌なども、全二十場のレヴューだと、七八回は繰り返すので、フアンはレヴューが終る頃には口ずさむやうになり、

『あの唄、とてもよかつたわ。』と、家に歸つても歌ふやうになる。こゝに寶塚のねらひどころがある。

松竹には、この主題歌を覺えさせるといふやうな事をしない。と、いふよりも松竹フアンは、特定のスターを見る爲めにレヴューに行く者が多い。ターキーは、そのフアンの憧憬の的であり、既に四十餘萬枚以上のプロマイドにサインをしてゐる位である。

かうして、松竹と東寶は、今やその出し物に宣傳に、大童になつて競爭し、互ひに相手を凌がうとかゝつてゐるが、皮肉にも雨少女歌劇の主腦スター連は、殊の外に仲がよく、幹部がいくらやかましく云つても交際を續けてゐる。

兩方で秘密にしてゐる出し物などが、直ぐばれてしまふ。と、云ふのは、少女連が互ひに無邪氣に話し合つてしまふからだ。この邊は他の藝界に比して朗らかなものである。

臨時増刊 **面白傑作滿載號**
九月十九日發賣です、お忘れなく……

せりふに就いて

日活　黒田記代

トーキーになつていちばん苦しむのは、せりふの點であります。

北海道に生れたといふことを、どの位悲しんだか知れませんでした。

でも、どうせ映畫俳優として身を立てると決心した以上、なんとかして『訛の征服』をしなくてはならないと思つて、色々と先輩の皆さま方に伺つたり、こつそりひとりで考へたりした末に、思ひつきました。

そこで、それ迄は宅には札幌から來てゐた女中がゐたのですが、事情を話して歸つて貰ひ、東京に生れて、東京に育つた女中ととりかへました。

その他、家中を先づ東京人で固めなくてはならないと考へましたから、さういふ方には遊びに來ていただくやうせつせとお招きもいたし、こちらからもお伺ひしたし、その他下町の長唄のお師匠さんのおさらひといつたやうな所へは、どんなに無理な時間でも都合をつけて出かけるやうにしました。

これがどの位役に立つたことか。

今日では沁々有がたいと考へて居ります。

これだけではどうにもなりません。まだ他にもつと大事なこと、役の性根を摑むことと、演技に上達することとか、色々とありますが、でも先づ第一に訛を征服して、トーキー女優として人さまにわらはれないやうにと心掛けて居ります。藝道について書くなどといふことは、わたくし如きほんの幼稚園の生徒級の者に出來るものではありません。

ただ、わたくし自身ではこんな風にしたお蔭でいくらかせりふを直すことが出來たやうな氣がする、それを書いて見ただけです。

飛んだお半長右衛門

蒲田映畫『吹けよ戀風』に、主役として迎へられた下加茂の小笠原章二郎は、彼の戀人役になる小櫻葉子とは十數年振りの對面である。小櫻は人も知る小笠原プロ以來の名子役で、小笠原明峰氏や章二郎に監督されたもので、特に章二郎は、當時、六歳の葉子に、オシツコの世話までしたことがある。その子役が、本年十九歳となつて、

『ねえ、あんた、あたしを抱いてよ。』

などと、いとも惱ましき臺詞を吐くので、すつかり、面喰らひ、

『葉子ちやん、冗、冗談ぢやない。』

と、苦笑してゐるのも尤もな話。章二郎、五所監督に向ひ、

『何うも子供とラヴ・シーンしてゐるやうで氣分が出ない。』と、云へば、葉子、憤慨し、

『あら、ひどいわ。あたし、もう、立派に大人だわよ。あたし、きつと貴方を惱殺してやるわ。』

と、小櫻、一生懸命にエロを發散中とある。

飛んだお半長右衛門だ——と、蒲田で大評判。

映畫人の借金戰術

寫眞は川崎弘子に動作を教へてゐる池田義信監督

どんな稼業にも附きものだが、映畫界でも〃借金〃は大いに威張つてゐる。

★

蒲田の城戸撮影所長の大机の上に、『借金お斷り』の三角札が出てゐたことがある。かなり前のこと。するとある人がそれを見て、

『城戸君、いかに借りられるのが辛いからつて、それぢア君を小さくするよ。なんとか考へ給へな。』

と忠告した。その結果、三角札は庶務進行主任の古田君のところへ、お下渡しになつた。現に、古田君の机上に厳然と載つかつてゐる。でも人の善い古田君は、同じ斷るなら見かけはやんはりとしようと、〃借金一切御斷り申候〃と、文句を少々長くした。

『いかにして借りて來るか。そしていかにして借りられまいか』術を會得せぬ限り、一日だつて撮影所長なんて勤まるもんぢやない。で、誰がどうといふ譯ではないが、監督の借りんとするや、みんな戰術は同じだといふ。つまり、所長の前でいかに自分の作品が受けてゐるか、そしてこれを作る間に、どれ程苦心をしたか、早い話が自慢と愚痴が丁寧に述べられるといふ。だから『人の善い』城戸さんは、最近ではすつかり呑みこんだもので、『あ、ちよつと失敬。本社へ行く用を思ひ出したよ。』とか、

『セットをのぞいて來るから。』

とか逃げ手を用ゐはじめた。幹部級俳優中にも時々こんな風にはぐらかされて、まごまごしてゐる者がある。

で城戸さんの機嫌のいい日を狙ふ必要があるので、先頃大山健二は十圓せしめるのに、約一週間かかつちまつた。――かうなると一

日一圓五十錢につかないのだから戰術としては餘り感心出來ない。

のつぽの齋藤達雄は、古田君を口說き上手で、時々器用にせしめる。藝が枯れて來たから、目立たぬながら奏效確實といふところだらう。同樣に愛嬌よく借りちまふのは小林十九二だとされてゐる。有がたい人德ではある！

今日活にゐる江川宇禮雄は、ピアノを買ふ金と、見合ひをする費用とを蒲田時代に借りたが、この金額は千圓で、一週間位かかつた。でもそれからまもなく脫退騷ぎから協同映畫社創設となつたので、口惜しがつた蒲田は、押へるのなんのと大騷ぎの末、やつと解決した。借りる方ばかりで景氣が惡いから、ひとつ貸してゐる方を書く。

新興京都時代劇部の鈴木澄子は、

『映畫俳優なんて、決して長持ちのするもんぢやないわ。せつせと稼げる時稼いで、足もとの明るいうちに身を退くのが、結局自分のよかつたことだけをファンにいつまでも覺えて貰へる方法だわ。』

と、頗る感心な料簡だけに、相當に殘したそして、誰彼れの手堅い連中に貸してゐる。貸す口には、日活京都時代劇部の辻吉朗監督がゐるから、心やすい人は當つて見るがよい。

でぶさんの田村邦男は、借金又借金、これではどうにもならんと、育つた日活を出たのだ。

やれ引拔きだ脫退だ、獨立だといふ時は、乾度『來い。』といふ方から『給料も多くするし、前借をこれこれ出さう。』と切り出すからさて、こそ『映畫俳優に節操なし』なんていはれる程右往左往するんだが、近頃は松竹、日活、新興、P・C・L、大都が『拔くまい。』の五社協定といふものを作りあげたお蔭で、借りる方には大へん都合惡くなつた。

『貸して下さらんと、どこそこの社へ參りますぞ。』なんていふ手が使へなくなつた譯。

日活をのぞくと、吉谷久雄は理窟をいふ、

『借りるんですよ。呉れつていふんぢやないんですよ。借りるんだから、つまり返へすんですよ。あなたの方にも損はないんですよ。』

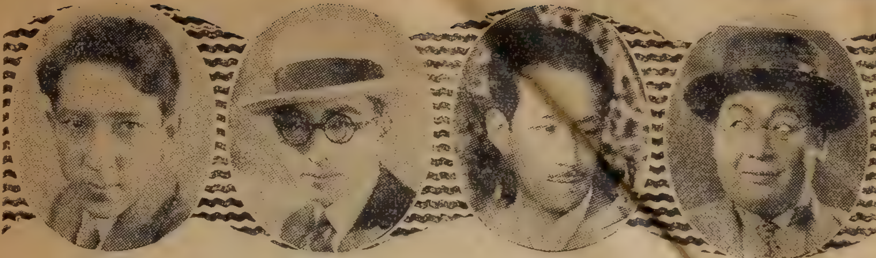
といつた戰法だ。なる程これにも一理ある。

撮影所まで馬を曳いて來て、堂々と借りる

ガルボの晩餐

ハリウッド映畫界の女王グレタ・ガルボは、世界一の月給取りを以て任じてゐるだけあつて、大げさなことが好きだが、『アンナ・カレニナ』の撮影中、晩餐の場面では、本當の料理を並べて喰べ始めたが、お口に合はんので、取なほしに次ぐ取なほしで、遂ひにこの食事代――尤も彼女一人ではなく五人分だつたが、何ンと二千五百弗、邦貨にして約七千五百圓となつた。一人前一千五百圓である。

これが忽ちハリウッド中の評判となり、近頃では、ガルボに、『お食事に參りませんか？』と、誘ふ連中が無くなつたとは尤もな話。



大山　齋藤　小林　江川

のは、さすがに杉狂兒ひとりしかない。これなぞ實際正攻法だらう。

さうかと思ふと、高木永二は『競馬で損をしたから。』の一手しか用ゐぬ。而もこれを一週間位かかつて撮影所內の評判にした後でお定りの『貸して下さい。』にまで持つて行くといふ、名の如く日の永い日でないと出來ぬ手を用ゐる。だからよくこの交渉を受ける多摩川撮影所企畫部の牧野滿男君の如きは、高木の競馬の話をしてゐる所からは、慌てて逃げ出す。

この春のこと相變らず高木のその手から逃げ出して門を出たら、向ふから杉狂兒が馬を曳いて來て借りられた。――これが決してゴシップではなく、現に見た者の話。

さすがに新進女優なんぞは、借りない。『貸して頂だい。』とも申し出ぬ。

（鈴木澄子）

つまり女性は男性に較べて、かうした金のことをいひたがらぬだけの矜りを持つてゐるからだらう。――矜りで褒め過ぎるなら、虚榮心といはう。何れにしても直接上の者にぶつかつて、貸して下さいと申込む者など殆どないといつていい。これは各社を通じての話である。

所がこれがまた、撮影所側にとつては頭痛の種でもある。といふのが、默りこくつてこつこつ仕事をしてゐるから、いい按排だなぞと思つてゐると、飛んでもなく不平不滿が內攻してゐたりして、跡で大骨を折らされる。

『拔くまい協定』が出來た爲め、その隙に乘じて他社にしてやられる苦勞だけは助かつたが、それだけに一層扱ひにくくなつたといふ。かうなると男優連のやうに、借して借してとぶつかつて來る方がいい。

即ち撮影所における借金は、映畫事業をよ

吉谷　　田村　　高木　　杉

く滑稽する爲めの滑車である！　俳優の腰を落付かせ且その演技を助長させる手段である！　と大見得を切つたら、撮影所主腦部に叱られるかナ？

何れにもせよ、映畫人の借金戰術にはユーモアがあり罪がない、でも、『むつかしいかな借金戰術』である！

（早船萬造記）

名優女を釣る

――全米のラヂオ歌手中で隨一の人氣を持つてゐるディック・ポウエルは、ワーナー社の弗箱である。このポウエル、最近自宅の裏庭に素晴らしいプールをこしらへたが、まだ一度も泳いだことがない。毎日、暇さへあると釣竿を持つてプールを見詰めてゐる。勿論、魚がゐないのだから釣れるわけがない。

『少し氣が變になつたのぢやないか――』

と、心配する友人もあるが――何ンと、心配御無用、實はポウエル、隣家の窓から時々顔を出す可憐な娘型女優メリー・ブライアン嬢の姿が水に映るので、その顔を釣つてゐるわけだ。それを知つた彼女、

『まア、今時、しほらしい。』

と、すつかり、ポウエルの氣持ちに打たれて、是非、本當に釣られたいと云つてゐるから、この戀、案外早くまとまるだらうといふ評判である。

恐ろしい久松

片岡千惠藏は『新月風流隊』では、新興の美女久松美津枝に特別出演をして貰つてゐるところが不思議なことに、この久松の身體に觸ると皆んな熱が出る、代官所の役人に扮した林誠之助が、彼女の手をとつて『えい！立ちませい！』と、腰を蹴つた、その翌晩から三十九度の大熱を出し、次ぎに彼女にいたづらする浪人者瀨川路三郎が、オコリになり、拷問役の香川良介が卒倒してしまつた。戀人役の千惠藏、彼女を抱いたところ、その翌晩、風邪を惹いて寢こんでしまつた。『まア、あたしの身體、なんて氣味が惡いんでせう。』當の久松もあきれてゐる。

寶塚 結ぶ縁づる物語

岩田英文記

（寫眞向つて右小夜 左雲野）

日本舞踊の名手、女六代目とまで絶讃されてゐる大花形、妹は、月組隨一の娘役、娘役と名のつくものなら、可憐純情な日本娘からフラッパアの手におへぬモダン娘まで、何でも來いの藝達者である。彼女たちの一番末の妹、池邊鶴子といふ、可憐の少女が、最近現れた。

今年の三月豫科卒業で、去る六月、東寶のレビュー『流線美』で、東京へも初御目見得をしてゐる。この時、池邊鶴子、雲井千草、大津明子といふ三人の新進少女は、仲よく『マネキン』といふ役を振られて、いつも三人揃つて舞臺に出てゐた。が、この三人こそは現在の寶家の持つ、最も優秀な大花形である天津乙女、小夜福子、明津麗子の夫々の妹たちなのだから、奇しき縁である。

池邊鶴子が、今言つた天津、雲野の妹、雲井千草が小夜の妹、そして大津明子が、明津の妹なのだ。この三人は偶然にも、同じ年、同じクラスで、お揃ひに豫科を卒業して、これから姉さんたちに負けず劣らず、輝かしい

天津、小夜、明津の妹たち

姉妹揃つて睦じくレビューの花かな舞臺に活躍する——社會的にも、家族的にも、まことに羨ましい生活を送つてゐるものは、巴里レビュー界のキヤリイ・シスターや、アメリカ映畫でおなじみのボスウエル姉妹など、外國にその例を求めても、中々少くない。が、日本では寶塚のやうな、家族的な少女歌劇團には、その例が豐富である。

誰しも眞先に思ひ出されるのは、天津乙女雲野かよ子の二姉妹で、姉は、寶塚切つての

舞臺への精進を續けようと言ふのだ誰が一番先に、姉さんのやうな大スターとなることか。

（天津乙女）

口稼ぎの一族

アナウンスで有名な松内則三氏の夫人の妹が大空ひろみである。松内氏と親交ある小說家久米正雄氏が『あの子が舞臺に出るならば……』とあつて、長篇小說の主題を考へる以上に一生懸命頭をひねつて考へ出した名前が『大空ひろみ』といふ、いかにも明朗快適な寶塚の新星にふさはしいゝ名前だつた。この名前に幸ひされてか、固より彼女の藝質も惠まれてゐたからであらうが、今や大空ひろみは、寶塚聲樂陣の第一線に立つ花形になつてゐる。

『夫も妹も、共に口で稼ぐ商賣になつてしまひました。』と松内夫人が呆れてゐると、可憐な大空ひろみ曰く『だつて姉さん、人間、口で稼いで口で食べれば一番合理的よ。』と。中々可愛いことを言ふ娘さんではある。

しほからい名の姉妹

今は新生星組々長としてドッシリをさまつてゐる門田芦子、その妹が、月組の門野まろやで、一寸小味のある男役として、一部のファンに認められてゐる。

明津麗子

昨年十二月東寶で『素襖落』が出された時、大名の小夜福子が急病で休演の止むなきに至り、その時代り役を勤めたのが、この門野まろやだつた。當時劇評家三宅周太郎氏が、その代り役を偶然見て大いに禮讃の辭を惜まれなかつた。

花組に於て、門野まろやと同じ役どころを行く人に水の也清美があるが、この人は言ふ迄もなく水谷八重子の姪で、幼い時は、をばさんである八重子の傍で育てられて、遂に、自分自身も舞臺で働く身とはなつたわけである。花組といへば、ここの名女役として久美京子の名前は誰しも思ひ出さずには置かないが、この人の兄さんが最近、星組の名女役であつた須磨磯子と結婚した。在りし日の仲よし同志は、今は義理の姉妹となつて、

い、い、より親密な毎日を羨しくも思してゐるといふこと。

（門田[illegible]子）

この久美京子といつも夫婦役の快活な青年(?)大路多雅子の大のファンが誰あらう女流作家の小寺菊子女史、この小寺女史の姪である姉妹が、一は聲樂、一はダンスで、これから輝かしい賣出しを約束されてゐる潮しぶき、夕凪志保子であることは一寸知る人は少いだらう。

（大空ひろみ）

『どうも二人とも何だかしい、い、ほからい名前で……』とをばさんの菊子女史は心配して居られるが、名前は鹽辛くても、舞臺姿は甘美な寶塚情緒を多分に持つた二人である。をばさんは御安心なさつていゝだらう。——かういふ風に書いて行けば、この結ぶ縁姉妹物語は、どこまで行つてもキリがなさゝうだが紙面の都合で、一寸ひと休み、あとは後日に讓るとしよう。

馴れつ子の男役

水の江瀧子

私の男装の苦心談、書いてと頼まれても、御返事に困つてしまひます。

今迄の私は、苦心ではなくして、舞臺の數を重ねて自然自然に、先生等に教へられて、覺えて參りました。

それに、生れつき私の性質は、人一倍、活潑な方でもありましたので、これといつて苦心＊

＊致しませんでした。唯始めの間は、臺詞が少少困りました。

でも私は、未だ若い女なんです。ですから血氣盛んな青年になつて、舞臺一杯に、はねまはつて、皆様を惱殺するには相當な努力と氣苦勞を必要とします。

何時も舞臺の男役を、日常生活にまで、延長するのが、玉? にきずになる場合が、多

中田弘二の負け

日活の中田弘二は、『緑の地平線』で岡見といふ色魔に扮するが、これは仲々むづかしく苦心研究したがどうも纏まらない。遂に原作者横山美智子女史を訪問し『どうも岡見の役はむづかしいので困りました』とこぼすと、横山女史即座に『いいえ、さうしてらつしやるだけで、もう立派に岡見になつてますわ』『え? 本當ですか?』『本當ですとも。ね中田さん、生地を出すやうにすればよろしいんですよ』と言はれ、喜び勇んで撮影所に歸つて來て、さて何か氣づいたと見えて『あゝしまつた! 己がやられたのか!』

多ございます。私の受持つ役は、何時も定まつて、朗らかで、陽氣で、あばれて、唄つて踊つてゐる役許りですから、もうこの役には馴れつ子になつて居ります。もつとも、この役が、一番私に當てはまつてゐる役ですが、今年の二月、新橋演舞場で上演された『椿姫』のアルマンには、一寸まごつきました。いやに又しめつぽい役だけに、私の性格には、不向きでした。悲劇であるべき『椿姫』が喜劇になつてしまつたのではないかと、今でも冷々させられます。

ところが、私の希望は、一年の中、二回位アルマンの様な役や、時には娘姿になつて見たいと思つて居りますが、仲々、轉りこんできさうもありません。

スターの貰つた珍レター

――新興　山路ふみ子嬢へ

親愛なるふみ子樣

御返事がいただけぬので、病氣ではないかと夜もおち／＼眠れません。御尊體大切にしてね。お寢みの時など寢冷せぬやう神佛に祈つて居ますよ。御蔭樣で僕元氣ですよ。ふみ子さんと斯んな文も(しやれぢやありませんよ)お書き出來るのも二人に引き合ふ不思議な不思議な力、神佛の加護のお力と信じます。同じ時代に生れ合つたればこそですよ。ふみ子さんよく／＼考へると實に／＼人の命など短いものですよ。だからふみさん、僕の氣持も少し位話してもいゝでせう。序に思ひ切つて言ふと、結婚出來たらと思ふんですよ。短い一生ですもの、こんな幸福を望むのが當然と思ふのよ。僕の寫眞見てくれたでせう。あれは寫眞屋が下手なんで、顏がまづく出來て居ますが、本當はもつと美男子なんですよ。これでも此の地方では農學校卒業のインテリですよ。一生食べられる田も少しはありますよ。百姓と言へばいやでせうが、百姓が居なければ、世の中は困るでせう。人生農に生き、自然を友とする、――おゝ何て美しい言葉でせう。ね、二人でこの自然に生きませんか。ふみさんだつて、きつとこんな氣持になる時あると信じてゐますよ。お互人間ですものね。手紙では、萬分の一も書けぬのが癪にさはつて悲しく思ひます。

それから僕俳優になろかとも思ひます。なれたらお姉樣と思ひうんと恩返しをしますよ

ふみさん、特別骨折つて下さいな。ふみさんの御威光ならキット希望を達せさせていただけると思ふのです。早くお側で働く身の上になりたくてたまりません。一つうまくやつて下さいよ。

この御願ひで一度お伺ひしたいんですが、ふみさんは犬が好きで、猛犬が飼つてあるさうですね。僕犬が嫌ひなんですよ。だから今の中からつないで置いて下さいよ。

もう夜の十二時です。ではお寢みね。眠つたら僕の夢を見て下さいね。ではよき御報知を待つてますよ。

大日本雄辯會講談社ニュース

『富士』未曾有の大壯擧　臨時增刊を發行

九月十九日全國一齊に發賣

曩に『キング』及び『講談倶樂部』の臨時增刊を發行して滿天下の大喝采を博した本社に於ては、愛讀者皆樣の熱望默し難く、こゝに『富士』の臨時大增刊の壯擧を見るに至りました。

とても愉快なとても面白い大增刊で、題して『勇俠戀愛痛快滑稽探偵怪奇面白傑作滿載號』

三大雜誌が斯く鼎立しての大增刊發行は、誌界未曾有の大壯擧といふべく、全く本社ならでは爲し得ぬ大快擧だと到る處大評判、非常に期待を持たれて居ります。

何分今回の企ては『富士』創刊以來の大計畫ともいふべく、是非共面白く素晴しいものにしたいと苦心研究の上編輯されたもの丈に表紙なら、口繪なら、讀物なら全く天下一品の出來榮えです。

六百四十頁の厖大な大册に盛られた讀物は全部讀切り、何れも老若男女誰が讀んでも面白くて堪らぬ、作者會心の大傑作揃ひ、必ず奪ひ合ひの大人氣を博すこと請合です。

而も定價は大奮發六十錢、九月十九日を期して全國一齊に賣出されます。是非發賣の日を御期待の程お願申上げます。

（詳細本誌の折込みにあり）

出版だより

潁原　退藏先生著

俳諧名作集

本社發行の『評釋江戶文學叢書』は、卷を逐うて愈々その眞價を發揮し、讀書界は勿論學界からも非常な賞讚を博しつゝあるが、本書はその第四回の配本、發句、連句俳文に亙つて、江戶時代の巨匠六十餘人の代表的作品中より多數に選擇掲載、之に一々明快な評釋を下してゐる。

挿入された二百有餘の眞蹟、肖像等と相俟つて東洋藝術の粹、俳諧の深い味を悟ることが出來る。

鶴見　祐輔先生著

バイロン

本書は文壇のナポレオンとして十九世紀の歐洲に燦として輝いた大天才、ゲエーテをして正にシェクスピア以上とまで絶讚せしめたバイロン卿の大傳記を、本邦に於けるバイロン研究の第一人者鶴見先生が、年來の蘊蓄を傾けて描破した出版界の絶品です。大いに御期待下さい。（九月上旬發賣　定價一圓五十錢）

佐藤　紅綠先生著

英雄行進曲

『少年倶樂部』に連載されて全國の少年諸君からヤンヤの大喝采を博し、文壇讀書界から近來の大傑作と激賞された正義友愛小說『英雄行進曲』が、トテモ立派な裝幀で出版され到る處非常な好評を博して居ります。（定價一圓）

島田啓三先生著
冒險ダン吉大遠征

独特の着想、奇想天外の漫畫家島田先生が、少年倶樂部に連載して大好評の『冒險ダン吉』の物語に、更に新工夫を加へ、智惠比べゲーム等を隨所に織込んだ日本で初めての漫畫本。少年少女の夢を巧みに漫畫化し、面白い中に勇氣と正義と純情と冒險心を培はしめる明朗爆笑篇、愛する御子弟方に是非お與へ下さい。(定價一圓)

雜誌週間記念
愛讀者慰安 特別大懸賞

雜誌週間に際して、愛讀者慰安のため本社に於ては九雜誌聯合で本社獨特の特別大懸賞募集をいたします。

當選者總數實に五萬一千三百五十名といふ極めて大掛りな大懸賞で、賞品の立派さ素晴しさ全く未だ曾てない大奮發の大計畫であります。

投稿規定は本號に詳細發表致しましたから、御一覽の上どなたも奮つて御應募の程おすゝめいたします。

全國巡回 教育映畫會

八月上旬より中旬まで新潟縣下(第一班)と、三重縣下(第二班)に開催、到る處素晴しい人氣大好評を博した本社の『教育映畫會』は引續いて九月上旬より九州方面を巡映することゝなりました。

何れも興味深く且つ有益な映畫揃ひです、是非御觀覽下さい。入場券は御近所の書店で差上げます。

婦人倶樂部ゆかた大盛況感謝
懸賞當選發表は婦人倶樂部十月號を御覽下さい

柄も生地も染色も、これ以上のものはないと、どちらの御家庭からも大變御好評を頂きました『婦人倶樂部ゆかた』は、年と共に愈々大發展、今年は特に今迄にない大賣行を示すことが出來ましたことは、愛讀者皆々樣の御聲援の賜と深く感謝致して居ります。

懸賞御應募も非常に莫大な數に上りましたが、八月十六日各大特約店並びに所轄警察官立會の下に嚴正公平なる抽籤の結果當選者を決定『婦人倶樂部』十月號にその御氏名を發表いたしました。御應募下さつた方は、是非御覽下さい。

全國巡回 童話講演會
山口縣下に開催

到る處大人氣、異常な大歡迎を受けつゝある本社の『童話講演會』は、九月上旬より十月上旬に亙り山口縣下各小學校に於て開催することゝなりました。是非大いに御聲援願上げます。

キングレコード九月新譜御紹介

童謠	鈴虫さん	河村順子
	旅のお猿さん	小田幸子
童謠	日本の子供	望月誠
	愛國號	永岡志津子
流行歌	船頭しぐれ	橋本一郎
	夜啼鳥	綿貫謙子
流行歌	山よ曇るな	三門順子
	夢の母	東海林太郎
流行歌	木曾川流し	金春・勝丸
	島で暮せば	佐藤壽
流行歌	濱の朝虹	東海林太郎
	ベコニアの唄	井口小夜子
新民謠	お六嬢	權藤圓立
	鐘になりたや	丸山和歌子
青年歌	英雄讃歌	キング愛國合唱團
	東洋理想の歌	
詩吟	九月十三日・城山	磯部賀堂
	櫻花詞	
筑前琵琶	村上喜劍	高野旭嵐

右は大評判のキングレコード九月新譜で、初秋に相應しい傑作盤揃ひです、是非御愛聽下さい。

『富士』の初對面

東京　佐藤　茂吉

(あまり立派な附錄が附くから) そんな漠とした氣持で求めた富士が、家中の人氣の的にならうとは……其の大衆性に富んでゐて、上品で面白く、庭の隅で馬追の涼しく鳴く立秋の宵、詩情の豐富な一つ/\を心ゆくばかり聲をたてゝ讀んでゐました。

(中々面白いな) と、『本嫌ひ』と自分の頭にこびりついて離れぬ母がとう/\かぶとをぬいで感心したりほめたり、時ならぬ微苦笑を浮ばせました。

折から来てゐた叔母さんが『此の本は五十錢位ゐするの』と附録の『小唄と主題歌映畫・レビュー大寫眞帖』を取つて言ひました……。

『富士』萬歳です。あれ、これと空想に躍る心をおさへつけ乍ら、十月號を待ちます。

天狗の又八追分

神奈川　青木　春夫

一うけた恩義にから松模樣
いろも桃色　お紺染
度胸七分が　三度の笠に
又八追分　榎ぶし

二箱根八里は馬さへ越すに
越えてならない仁義ゆゑ
胸に小波　蘆湖行けば
盆に出るのは　身延月

三、すねに持つ傷一本獨鈷
抜けば稻妻　髷三つ
報す恩義に伊達氣そへて
はいた草鞋にあれおチ葉

感謝の大附錄

大阪市　片岡　進

『富士』九月號の特大號としての貫祿を卷頭土師清二先生の『仇討雲助渡世』の快篇によつて覗く事が出來た。連載小説の素晴らしさは一度でも『富士』の頁を繰つた者は知り盡してゐる事である。

僕は特に『短夜の追憶』『湖畔の戀』『恐怖の口笛』『犬娘』等は息もつかず興味深く讀ませて貰ひました。

終に附錄『小唄と主題歌映畫・レビュー大寫眞帖』は家中の人氣の焦點になつて皆んな喜んで拜見させて頂きました。

溫かい慰安者

秋田市　松本千代子

拜啓。私事奉公の身ではありますが、御誌『富士』によりまして得る慰安は、本當にたとへやうのないよろこびの一つでございます。つらい苦しい折々あたたかい慰安者たる『富士』こそ私にとつては唯一の心の友と思つて愛讀してをります。海水浴や登山などと私たち同性の人々が、嬉々として眞夏の暑さを逃れたあとに寂しい乍らも一人『富士』のよみものに何もかも忘れることによつてせめてもの樂さを覺えます。九月號のうちで『短夜の追憶』に心をひかれました。土師

急告!!

『富士』創刊以來最初の

臨時大增刊

是こそ、文壇總出動で作りあげた面白いこと天下無敵の

大傑作小説全集!

勇俠―戀愛―痛快―滑稽―探偵―怪奇

先生の『仇討雲助渡世』の綾衣や草三の幸福を祈ります。來月號もすてきにやつて下さいませ。

素晴らしい九月號

大分縣　元木　正春

『小唄と主題歌映畫・レビユー大寫眞帖』!! 實に富士でなくては見られぬ附録である。嘗て附録としての映畫・レビユー寫眞帖は許多目を通したがかゝる附録は未だ嘗て見ざるもので、寫眞を見たり、或は唱つたり銷夏として好適なものと思ふ。更に本文を覗けば劈頭土師先生の傑作『仇討雲助渡世』あり、小説、講談、落語、實話、等々頁を繰るに從ひ興奮の渦中に入らざるを得ない。又、一の銷夏法として大懸賞讀物投票を募集されたことを感謝致したいものである。

諸記者先生方には酷暑を物ともせず目下特別大計畫に着手されて居るとのこと必ずや天下の讀書家をして驚嘆せしめるものを發表されるであらうと期待してゐる次第であります。

無我の境

岡山市　岡部　美明

冷風がそろ／＼としのびよつて一入初秋のさびしさを感ずる頃、唯一の友として慰められたのは吾等の富士だつた。

さびしい時、退屈の時にはいつも富士が私の慰安者であり心の友であつた。

九月號は先づ『映畫・レビユー大寫眞帖』に眼をひかれた。之は確に富士の獨壇上であると信じた。

小説では何を措いても子母澤寛先生の股旅物『天狗の又八』であつた第一・第二話又は第三話と息もつかせぬ有樣に唯無我の境にひき入れられてしまつた。十月號の第四話が待遠しくてたまらない!! 又近來の傑作である土師先生の『仇討雲助渡世』がある。濡鳥草三の生き生きとした男振が將吉郎先生のさしゑと共にぐん／＼と讀者をひきつけてしまつた。

講談、落語、小説、漫談、實話、美談、漫才、漫畫等々素晴らしい面白さ、大人も、子供も、男も女も、讀んだら熱狂せずに居られない

面白傑作滿載號

全部が全部讀切です。

お家庭には是非とも一冊、此一冊あれば、時を選ばず皆さんで何時迄も樂しめる。

きつと、きつと滿天下を驚かす快雜誌が出來ます。是非々々九月十九日の發賣日を御期待下さい。

投稿大歡迎、掲載の分には薄謝を呈す。

編輯後記

前號は思ひ切つた大附錄つきで定價も十錢の値上げでしたが發賣早々素晴らしい賣れ行き、數日ならずして忽ち賣切れの店續出、大評判になりました。何分部數に限りがありましたのでお買洩れの方も多々おありのことと存じます。玆にお詫び旁々厚く御禮申し上げます。

◇

本號には文豪德富蘆花の名作の戯曲化定本として、眞山青果先生の『不如歸』を新掲載しました他、飽く迄面白い讀物揃ひです。

さて別項豫告の通り、來る九月十九日を期して本誌創刊以來最初の大計畫、六百數十頁の大冊全巻面白づくめの

臨時增刊

を發賣いたします。全て讀切で、此一冊あれば時を選ばず單行本同樣充分樂しめる大傑作揃ひの豪華版。

◇

今や編輯全員、晝夜兼行の大努力、表紙に、口繪に、讀物に素晴らしいものをお眼にかけようと必死の大活動を續けてをります。

必ず皆樣をアッと驚かせるものが出來上ります何卒、九月十九日をお忘れなく絕大なる御期待をお願ひいたします。

尙ほ御知人の間にも、あまねく御吹聽の程願ひ上げます。

ともかく面白いこと素敵滅法の快雜誌です。(詳しくは別項折込みを御覽下さい)

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番完全で、且送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく教へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割增に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハツキリお書き下さい。

○御住所と御名前とはぜひ、楷書で願ひます。

○御注文は　大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は　大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は　大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

本號 定價金五十錢　內地 送料金三錢　外國 送料金十八錢

豫約購讀料金(送料共)

普通號一册	金五拾四錢
三ケ月分	金壹圓五拾錢
六ケ月分	金貳圓九拾四錢
一ケ年分	金五圓七拾六錢
外國一ケ年分	金八圓六拾四錢

◉特大號で定價を上げた場合は國內及び滿洲支那に限りその增した分はこの料金の外に頂きます。

昭和十年九月三日印刷納本
昭和十年十月一日發行　第八卷第十號

毎月一回 一日發行

編輯人 林　公平
發行人 木村喜市
印刷人 渡邊一郎

東京市小石川區西古川町二十五番地
印刷所 中外印刷株式會社

東京市小石川區音羽町三丁目十九番地
發行所 大日本雄辯會講談社

振替口座 東京 三九三〇番(本社)　東京 六六二九番(代理部)

電話 牛込(34)代表 五三〇〇(5)長距離六二〇五　六一〇〇(5)宿直用六二〇五　六二〇五(5)

元取次店―東京堂・東海堂・北隆館・大東館

禁複製―本誌に掲載せるものは、一切これを無斷にて轉載し、又は單行本に上梓し、或は脚色・上演・映畫撮影その他複製行爲を爲す事を禁ず。

病弱で悩む方々から迚も元氣付くと喜ばれます

東京市本所區
健康堂藥局主　大林祝正

十人寄れば十種で、良く効いたと云ふ方もあれば、あまり効かなかつたと云ふ様な方もあつて、賣藥や新藥類の中にはその人の體質に依つて効いたりあまり効かなかつたりする場合が少なくありません。それだけに私は商品に對して種々研究しお客様などの批評も御聞きして出來るだけ良い品を勉強してお奨めする様に苦心致して居ります

これが結局、商賣繁昌の秘訣で、お客様にも御満足頂ける何よりの方法であると信じて居りますが、この點で私がいつも感心して居るのは滋養強壮劑の養命酒で、病弱で困ると云ふ方、胃腸の弱い方、根氣弱く息切れする方、肺や肋膜の弱い方、冷え込みや貧血に惱む方、産前産後の婦人など身體の弱い方々にお奨めして薬とは違つて誰人からも喜ばれ、養命酒を飲んで居ると身體が迚も丈夫になつて元氣付くと感謝される事であります。

今迄の經驗に依りますと滋養劑類は少し位飲んでも効目が現はれないせゐか止めてしまふ方が多いのでありますが、養命酒ばかりは品質が良い爲めか誰人も續けて愛飲されます。

尚養命酒試飲御希望の方は東京市澁谷區上通り四丁目五〇番地養命酒本舗出張所へハガキで申込むと見本小瓶を誰人へも無代で送つて下さいます。

FUJI

Published monthly by the Dai Nippon Yubenkai Kodansha, Tokio, Nippon.

大正五年九月十五日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）昭和十年九月三日印刷納本 昭和十年十月一日發行

冨士 第八巻 第十號

定價金五拾錢（送料金三錢）

清純 初秋の雪印！

天高く
紺碧の空は輝く
さあ、颯爽と
ウテナ雪印クリーム

朝は朗らか
おヒゲ剃りに、お素顔に
御婦人は、お化粧下に
ウテナの一瓶に、家庭は清純、愛に輝く

陽ヤケ解消——色白くなる

ウテナバニシング雪印クリーム

純白・無脂肪
正價三十二錢、六十四錢

健康、勇躍
男子の髪にウテナポマード

東京本郷
久保政吉商店

Date Due 9-1259

JUN 1	AUG 27	NOV 30	
JUN 3	SEP -2		
JUN [illegible]	SEP -9		
JUN 19	SEP 13		
JUN 24	SEP 18		
JUN 29	SEP 20		
JUL -4	SEP 21		
JUL -5	SEP 23		
JUL -8	SEP 28		
JUL 11	OCT -4		
JUL 15	OCT -5		
JUL 18	OCT 10		
JUL 24	OCT 16		
JUL 29	OCT 19		
AUG 3	OCT 24		
AUG 5	OCT 30		
AUG 8	NOV -2		
AUG 29	NOV -9		
AUG 31	NOV 15		
	NOV 29		
	NOV 25		

9-1259K

SEP 13
SEP 18
SEP 20
SEP 21
SEP 23
SEP 28
OCT - 4
OCT - 5
OCT 10
OCT 16